伊丹市

口酒井遺跡

―第11次発掘調査報告書―

伊丹市教育委員会
財團法人 古代學協會

昭和63年

伊　丹　市

口　酒　井　遺　跡

―第11次発掘調査報告書 ―

伊丹市教育委員会
財團法人 古代學協會

昭和63年

序

文化財は，わが国の歴史・文化を正しく理解するために欠くことのできないものであり，また，将来の文化向上発展の基礎をなすものであります。

先人の残したこの貴重な文化遺産を保護活用し，後世に伝えることは私たちに課せられた責務であります。

本市には，国指定史跡有岡城・伊丹廃寺跡とならんで口酒井遺跡という貴重な遺跡があります。口酒井遺跡は，猪名川の左岸，標高７ｍの沖積平野に立地し，縄文時代晩期の遺物包含層や弥生時代から古墳時代にかけての遺構をもち，近畿地方において最も早く稲作文化に接したと思われる遺跡の一つであります。

今回ここに報告する遺跡は，口酒井遺跡保存整備事業の一環として施工される道路新設工事等に伴う事前調査として実施したものであります。

調査の実施にあたっては，財団法人古代學協會に委託し，第11次Ａ調査(昭和59年２月15日から３月31日まで)ならびに第11次Ｂ調査(同年４月１日から５月18日まで)を実施し，一連の現地発掘調査を完了することができました。

調査の結果，縄文・弥生・古墳・平安時代の遺物・遺構を多数検出しましたが，今回の調査で注目される点は，弥生時代後半の遺構が重なりあって検出されたことで，とくに住居址と墓が近接していることは，集落址の拡がりと墓域との関係を知るうえで興味を引くものであります。また，当遺跡の南方に位置する田能遺跡と立地的に近接しているとともに，時期的には互いに補完しあう関係にあることも注目されます。このことは，畿内地方における縄文時代晩期から弥生時代にかけての歴史の解明に重要なデーターを提供するものであると思われます。

末尾になりましたが，今回の調査実施にあたりご尽力いただいた古代學協會の南　博史氏・定森秀夫氏・下條信行氏をはじめ厳寒風塵の中ご苦労いただいた調査補助員，作業員の方々と調査に深いご理解とご協力をして下さった地元の皆様方ならびに尼崎市教育委員会，伊丹市土地開発公社ならびに下水道部の各位に対し，深甚なる敬意と感謝の意を表し，発刊のことばといたします。

昭和63年３月31日

伊丹市教育委員会

教育長　佐　坂　茂　男

序

（財）古代學協會・平安博物館の考古学第２研究室では，『日本文化の源流』をテーマとして数年来研究を進めてきた。本研究の主旨は，縄文農耕論の検討を通して，日本文化の源流が縄文時代に遡り得るという可能性を究明するための資料を整えることにある。つまりそれは，日本文化の源流は弥生時代に始まるという従来の考え方に対して，縄文文化に日本文化の源流を見出そうと企画したものであって，遺跡・遺物に即した実証的成果を挙げようと努力を重ねてきた。

近年，日本文化の基層部分の形成に縄文文化が深く関与しているという考え方がようやく定着して来たが，その実証的な研究はまだ緒についたばかりといえる。

このような状況下にあって，我々が兵庫県の口酒井遺跡を調査する機会に恵まれたことは，大変幸運なことであった。それはこの遺跡がかねてより縄文晩期終末期の遺跡として広く知られ，畿内においてもっとも早く弥生文化に接触したと思われる遺跡の一つであるからである。従って口酒井遺跡を調査することにより，広く縄文時代から弥生時代に至る変革期に関する多くの資料の出土が期待されたのである。果して本遺跡調査の結果，縄文時代晩期から弥生時代後期にかけての貴重な資料を多数得ることができた。

調査後３年，その整理作業についても紆余曲折があったが，ようやく報告書を刊行できるに至ったのは，誠に喜ばしいことである。この成果が当該文化の研究に幾分なりとも寄与するならば幸甚である。

昭和63年３月

（財）古代學協會

専務理事　角　田　文　衛

例　言

1．本書は，昭和59年に財団法人古代學協會平安博物館発掘調査部が，兵庫県伊丹市教育委員会の委託を受けて実施した口酒井遺跡第11次調査の発掘調査報告書である。

2．縄文土器の図については，拓影図を用いず，すべて実測図を使用した。これは本遺跡出土の縄文土器の文様・調整が拓影で表現することが困難であったためである。

3．土器類については，なるべく多くの資料について報告するため，観察表を用いた。観察表内はなるべく簡潔に記すよう努めたため一部記号化しているところがある。縄文土器とそれ以外の土器についてそれぞれの冒頭に凡例を用意している。

4．写真図版において，遺物写真の縮尺は表記のないものが約3分の1である。それ以外のものは縮尺を付記した。

5．参考文献は，本文中において著者・発行年度を示し，文献目録は巻末に示した。

6．註は巻末に一括して示した。

7．執筆者名は原則として節の最後に記したが，節内で複数の執筆者がある場合は，それぞれの文の末尾に明記した。

8．第7章に上田健夫古代學協會会員の胎土分析に関する玉稿を頂戴した。

9．英文サマリーは，各分担ごとにまとめ，全体を通した討議を踏まえた上で，大井邦明京都外国語大学助教授の御指導を得た。なお，英訳については山花京子氏(京都外国語大学英米語学科学生)，中瀬理絵氏(古代學協會事務局)にお世話になった。

執筆者一覧表　（　）は現職名・昭和63年1月現在

下條信行（愛媛大学法文学部教授）
南　博史（財団法人古代學協會研究員）
定森秀夫（財団法人古代學協會研究員）
浅岡俊夫（伊丹市教育委員会）
上田健夫（財団法人古代學協會会員）
緒方　泉（福岡県教育委員会技師）
柴田　悟（花園大学文学部卒）
大下　明（関西大学大学院学生）
森下英治（関西大学文学部卒）
松村由美（関西大学文学部卒）
高橋　潔（立命館大学文学部学生）
中村健二（関西大学文学部学生）
澤山孝之（関西大学文学部学生）
大本純子（大谷大学文学部学生）

目　次

序　章　発掘調査に至る経過 …… 1
第1節　昭和58年度発掘調査に至る経過 …… 1
第2節　昭和59年度発掘調査に至る経過 …… 1
第1章　遺跡の位置と環境 …… 4
第1節　遺跡の位置 …… 4
1）遺跡の位置 …… 4　2）遺跡の立地と周辺の地形 …… 5
第2節　周辺の遺跡 …… 6
第3節　既往の調査 …… 12
第2章　発掘調査の経過 …… 15
第1節　第11次A調査の経過 …… 15
1）調査区の設定 …… 15　2）調査経過 …… 16
第2節　第11次B調査の経過 …… 17
1）調査区の設定 …… 17　3）E区の調査 …… 22
2）発掘調査の経過 …… 17
第3章　層序と遺構の概要 …… 24
第1節　東地区・西地区の層序 …… 24
1）基本層序 …… 24　2）A区南壁・C区南壁の層序 …… 25
第2節　遺構の概要 …… 29
1）弥生以降の遺構 …… 29　3）縄文晩期の遺構 …… 30
2）弥生中・後期の遺構 …… 29
第3節　B区の概要 …… 30
第4章　縄文文化の遺構と遺物 …… 33
第1節　はじめに …… 33
第2節　西地区の自然流路と遺物出土状態 …… 34
1）自然流路 …… 34　2）まとめ …… 36
第3節　東地区の遺構と遺物出土状態 …… 36
1）東地区土壙群 …… 37　3）土器溜り …… 40
2）土壙埋土の水洗選別 …… 39　4）まとめ …… 40
第4節　土　器 …… 40
1）土器の分類 …… 40　3）東群の土器 …… 45
2）西群の土器 …… 42　4）東群上層の土器 …… 48
第5節　刻目凸帯文土器に伴出する弥生式土器 …… 48
第6節　不明土製品 …… 65

第7節　石器・石製品 …… 66
1）はじめに …… 66
2）石　器 …… 67
3）石製品 …… 70
第8節　小　結 …… 72
第5章　弥生文化の遺構と遺物 …… 95
第1節　はじめに …… 95
第2節　中期前半の遺構と遺物 …… 96
1）概　要 …… 96
2）土壙5 …… 96
3）木棺墓 …… 98
4）溝　6 …… 99
第3節　中期後半の遺構と遺物 …… 100
1）概要および出土土器の分類 …… 100
2）住居址3 …… 101
3）土壙4 …… 106
4）溝　7 …… 107
5）溝　5 …… 109
6）溝　4 …… 120
7）落込1 …… 124
第4節　後期の遺構と遺物 …… 154
1）概要および出土土器の分類 …… 154
2）住居址1 …… 155
3）住居址2 …… 162
4）壺棺墓 …… 169
5）溝　8 …… 170
6）土壙3（土壙墓） …… 171
第5節　包含層およびB区の遺物 …… 187
1）土器溜り …… 187
2）包含層の遺物 …… 191
3）B区の遺物 …… 193
第6節　石器・石製品 …… 198
1）概　要 …… 198
2）石　器 …… 199
3）石製品 …… 204
第7節　小　結 …… 204
第6章　その他の遺構と遺物 …… 208
第1節　土壙1・土壙2 …… 208
1）概　要 …… 208
2）土壙1 …… 208
3）土壙2 …… 208
4）小　結 …… 214
第2節　掘立柱建物および溝 …… 221
1）概　要 …… 221
2）掘立柱建物 …… 222
3）溝 …… 223
4）小　結 …… 224
第7章　出土土器の胎土の構成鉱物とその胎土の産地特定 …… 225
第8章　考　察 …… 235
註 …… 251
参考文献 …… 252
おわりに …… 256
英文要旨 …… 257

図　版　目　次

図版第1　調査地全景
図版第2　掘立柱建物
図版第3　溝1・2・3
図版第4　土壙2
図版第5　土壙1・A10区不明小土壙群
図版第6　壷棺墓
図版第7　土壙3
図版第8　土壙3
図版第9　住居址2
図版第10　住居址2炉址
図版第11　住居址1
図版第12　住居址1
図版第13　住居址1
図版第14　土器溜り12・19
図版第15　落込1
図版第16　住居址3
図版第17　住居址3炉址
図版第18　土壙4
図版第19　溝4・5・8
図版第20　溝5・8
図版第21　溝5遺物出土状況
図版第22　溝4・7
図版第23　土壙5
図版第24　木棺墓
図版第25　自然流路
図版第26　自然流路
図版第27　土壙群検出状況・C12区南壁
図版第28　石皿・敲石出土状況
図版第29　土器溜り出土状況
図版第30　土器溜り10・9
図版第31　土器溜り6
図版第32　A11区・A6区 南壁
図版第33　調査終了全景（1）
図版第34　調査終了全景（2）
図版第35　調査終了全景（3）
図版第36　B3区・B11区 東壁，B区終了全景
図版第37　西群胎土A・B 深鉢形土器
図版第38　西群胎土B深鉢形土器
図版第39　東群胎土B・A 深鉢形土器
図版第40　東群胎土A・B 深鉢形土器 東群小形深鉢形土器
図版第41　東群胎土B 壺形土器・深鉢形土器
図版第42　西群・東群 土器類
図版第43　底部各類断面
図版第44　底部各類断面・底部各類
図版第45　口縁部凸帯各種
図版第46　沈線各種
図版第47　石器（縄文）
図版第48　石棒・石皿（縄文）
図版第49　弥生式土器・1
図版第50　弥生式土器・2
図版第51　弥生式土器・3
図版第52　弥生式土器・4
図版第53　弥生式土器・5
図版第54　弥生式土器・6
図版第55　弥生式土器・7
図版第56　弥生式土器・8，布留式土器
図版第57　石器（弥生）
図版第58　石器・土製品・鉄製品，不明土製品・炭化米 ほか

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置図・1 …… 4
第2図　遺跡の位置図・2 …… 4
第3図　西摂平野周辺地形分類図…… 5
第4図　猪名川流域の縄文遺跡分布図…… 7
第5図　猪名川流域の弥生遺跡分布図…… 7
第6図　既往の調査位置図 …… 12
第7図　第2次調査検出堰状遺構…… 13
第8図　トレンチ配置図 …… 15
第9図　A・C・D・E区トレンチ関係図…… 23
第10図　遺構全体図・1（弥生以降）（折込）…19
第11図　遺構全体図・2（弥生）（折込）…19
第12図　遺構全体図・3（縄文）（折込）…21
第13図　基本層序図 …… 25
第14図　層序実測図・1（A区南壁）…… 26
第15図　層序実測図・2（A区南壁）…… 27
第16図　層序実測図・3…… 28
第17図　B区層序実測図 …… 31
第18図　A区層序模式図 …… 32
第19図　B区層序模式図 …… 32
第20図　自然流路層序実測図 …… 35
第21図　縄文晩期遺構全体図 …… 38
第22図　土器溜り9・10実測図 …… 39
第23図　土器溜り6実測図…… 39
第24図　土器分類模式図 …… 41
第25図　西群縄文土器実測図・1…… 49
第26図　西群縄文土器実測図・2…… 50
第27図　西群縄文土器実測図・3…… 51
第28図　西群縄文土器実測図・4…… 52
第29図　西群縄文土器実測図・5…… 53
第30図　西群縄文土器実測図・6…… 54
第31図　西群縄文土器実測図・7…… 55
第32図　東群縄文土器実測図・1…… 56
第33図　東群縄文土器実測図・2…… 57
第34図　東群縄文土器実測図・3…… 58
第35図　東群縄文土器実測図・4…… 59
第36図　東群縄文土器実測図・5…… 60
第37図　東群縄文土器実測図・6…… 61
第38図　東群縄文土器実測図・7…… 62
第39図　東群縄文土器実測図・8…… 63
第40図　縄文・弥生土器実測図 …… 64
第41図　縄文不明土製品実測図 …… 66
第42図　石器実測図・1（縄文）…… 68
第43図　石器実測図・2（縄文）…… 70
第44図　石器実測図・3（縄文）…… 71
第45図　石器実測図・4（縄文）…… 72
第46図　石棒実測図 …… 73
第47図　東群縄文土器分布図 …… 77
第48図　東群縄文石器分布図 …… 78
第49図　土壙5断面実測図…… 96
第50図　土壙5出土土器実測図 …… 97
第51図　木棺墓実測図 …… 99
第52図　住居址3実測図（折込）…… 103
第53図　住居址3炉址断面実測図 …… 102
第54図　住居址3出土土器実測図 …… 102
第55図　住居址3出土鉄製品実測図 …… 105
第56図　住居址3出土紡錘車実測図 …… 106
第57図　土壙4実測図 …… 106
第58図　土壙4出土土器実測図 …… 107
第59図　溝7出土土器実測図 …… 108
第60図　溝5断面実測図 …… 109
第61図　溝5出土土器実測図・1…… 111
第62図　溝5出土土器実測図・2…… 112
第63図　溝5出土土器実測図・3…… 114
第64図　溝5出土土器実測図・4…… 115
第65図　溝5出土土器実測図・5…… 117
第66図　溝5出土土器実測図・6（上層）…… 119
第67図　溝4断面実測図 …… 120
第68図　溝4出土土器実測図・1…… 121
第69図　溝4出土土器実測図・2…… 123

第70図　落込1・2断面実測図 …… 124
第71図　落込1出土土器
実測図・1 …… 125
第72図　落込1出土土器
実測図・2 …… 128
第73図　落込1出土土器
実測図・3 …… 129
第74図　落込1出土土器
実測図・4 …… 130
第75図　住居址1実測図（折込） …… 157
第76図　住居址1炉址断面実測図 …… 155
第77図　住居址1出土土器
実測図・1 …… 156
第78図　住居址1出土土器
実測図・2 …… 159
第79図　住居址1出土土器
実測図・3 …… 161
第80図　住居址2実測図 …… 162
第81図　住居址2炉址上面土器
出土状況実測図 …… 163
第82図　住居址2出土土器
実測図・1 …… 164
第83図　住居址2出土土器
実測図・2 …… 166
第84図　住居址2出土土器
実測図・3 …… 167
第85図　住居址2出土土器
実測図・4 …… 168
第86図　住居址2出土土器
実測図・5 …… 169
第87図　壺棺墓実測図 …… 169
第88図　壺棺墓出土土器実測図 …… 170
第89図　溝8出土土器実測図 …… 171
第90図　土壙3実測図 …… 172
第91図　土壙3出土土器実測図 …… 173
第92図　包含層出土土器
実測図・1 …… 188
第93図　包含層出土土器
実測図・2 …… 189
第94図　弥生遺物包含層
土器溜り分布図 …… 190
第95図　弥生式土器拓影図 …… 192
第96図　包含層出土土製品
実測図 …… 193
第97図　B区出土土器実測図 …… 193
第98図　B区出土磨石実測図 …… 194
第99図　石器実測図・5（弥生） …… 199
第100図　石器実測図・6（弥生） …… 199
第101図　石器実測図・7（弥生） …… 200
第102図　石器実測図・8（弥生） …… 201
第103図　石器実測図・9（弥生） …… 202
第104図　石器実測図・10（弥生） …… 203
第105図　土壙1出土土器実測図 …… 208
第106図　土壙2実測図 …… 209
第107図　土壙2出土土器
実測図・1 …… 210
第108図　土壙2出土土器
実測図・2 …… 212
第109図　掘立柱建物実測図 …… 222
第110図　掘立柱柱穴出土土器
実測図 …… 223
第111図　溝2出土土器実測図 …… 223
第112図　試料の採取地点 …… 226
第113図　C8－C1の
X線粉末回折図形 …… 227
第114図　生駒山西麓粘土の
X線粉末回折図形 …… 231
第115図　大阪湾周辺の縄文晩期
主要遺跡位置図 …… 238
第116図　壺甕数量比模式図 …… 240
第117図　第三様式期広口壺法量
分布図 …… 242
第118図　第四様式期広口壺法量
分布図 …… 243
第119図　広口壺分類説明図 …… 243

付　表　目　次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 8
第2表　口酒井遺跡既応の調査一覧表 …… 13
第3表　東地区土壙一覧表（縄文） …… 37
第4表　器種構成表（縄文）…… 42
第5表　深鉢形土器口縁部凸帯の形態と器形関係表 …… 46
第6表　浅鉢形土器・壺形土器分類別構成表 …… 47
第7表　底部分類表 …… 48
第8表　石器・石製品一覧表（縄文） …… 67
第9表　石器組成表（縄文） …… 76
第10表　石器・石製品一覧表（弥生） …… 198
第11表　遺構変遷一覧表（弥生）…… 205
第12表　中期後半土器器種構成表 …… 206
第13表　後期土器器種構成表 …… 206
第14表　土壙2出土土器器種構成表 …… 215
第15表　伊丹市口酒井遺跡出土の縄文土器胎土の構成鉱物…… 228
第16表　伊丹市口酒井遺跡出土の弥生式土器胎土の構成鉱物…… 230
第17表　生駒山西麓粘土と生駒山岩石の構成鉱物…… 231

序　章　発掘調査に至る経過

第１節　昭和58年度発掘調査に至る経過

昭和58年７月頃，兵庫県伊丹市教育委員会社会教育課より，(財)古代学協会発掘調査部に伊丹市内での発掘に関する相談のための連絡があった。当時調査部長であった下條信行は，同年８月１日に，折しも調査中であった神戸市篠原遺跡より足を伸ばし，伊丹市教育委員会を訪れた。大沢欣也社会教育課長ほかと同道の上現地(伊丹市口酒井遺跡)に赴き，現地視察の後，諸々の説明を受けた。それによれば，幅６ｍ，長さ120ｍずつ，総長240ｍの逆Ｌ字状の地に下水道(南北道路部分)と道路(東西道路部分)を昭和58年度工事として敷設したいので，それに間にあうような計画で発掘を引き受けてくれないかとのことであった。

当時発掘調査部は，神戸市篠原遺跡の調査にとりかかっており，また福井市，京都府大宮町，京都市内，神戸市内，福岡市内での調査開始ないし予定が目白押に計画されていたので，この調査の受託は難事に思われた。

現地は畑地と一部水田の平坦地で，地表下1.5ｍのあたりに遺跡が存在するとのことであった。同教委社会教育課の浅岡俊夫氏の話によると，現地の北西約150ｍの口酒井遺跡第８次発掘調査では縄文晩期中～後半期の凸帯文土器や石庖丁が出土している(浅岡1984a)とのことで，後日それは確認させてもらった。また，遺跡のすぐ北側でもすでに発掘が行われ(第９次発掘調査)，弥生の遺構と遺物が出土し(浅岡1984b)，遺跡の一部は現地に保存しているとのことであり，縄文晩期から弥生期の興味ある遺跡であることが判った。尼崎市田能遺跡の北西400ｍの地点に位置し，後日福井英治田能資料館長よりその重要性について種々教示を得た。以上の様な周辺情況から，本遺跡の重要性が認識されたので，社会教育課には十分検討することを約して，帰洛した。

その後，調査部では内外の諸条件を検討整理し熟慮の上，この調査を受託することを決定し，伊丹市教育委員会にその旨を連絡した。以後，若干の曲折があるが，調査部の南博史，金田曉らの参加のもと，伊丹市教育委員会と諸問題を煮つめ，契約書をとりかわした上，昭和59年２月15日より，口酒井遺跡第11次調査として発掘に着手することとなった。なお調査は，定森秀夫調査主任，南博史調査員が当たり，下條調査部長が補佐することになった。　　(下條)

第２節　昭和59年度発掘調査に至る経過

昭和59年２月より開始した口酒井遺跡第11次調査が終了に近づいた３月15日，伊丹市教育委員会社会教育課による調査状況の視察が橋爪康至氏ら尼崎市教育委員会の立合いのもと行われた。これは弥生期の住居址が検出されたことを機会に，調査側と教育委員会側とで今回の調査の状況

を確認しあい，発掘終了に向けての日程調整，ならびに調査の詰めの方法の検討を行うとともに，終了後の遺構・遺物の処置についての打ち合わせを目的としていた。これに尼崎市教育委員会が加わることになったのは，今回の調査地の一部が尼崎市域に含まれているからであり，さらには調査終了後，伊丹市土地開発公社によって売却される予定のA区市道用地の南側，工場用地部分が尼崎市に含まれているからであった。つまり，今回A区で検出した遺構の南側への連続状況によっては，南側に設けた拡張トレンチだけでは不十分で，再調査を行う必要があるからであり，これについては尼崎市教育委員会の確認が必要であった。

そして，住居址(住居址１)の半分が未調査で南側に位置し，南側の再調査の可能性があること，また，他の住居址(住居址２)の中心部が調査地北側へ延びていることも合わせ，後日再度打ち合わせをすることになった。

調査終了間際の３月27日，再度尼崎市教育委員会の橋爪氏らを交えて伊丹市教育委員会と話し合いを行った。これは今回の調査についての終了確認を受けるとともに，前回の打ち合わせの継続として，南側の工場用地部分の調査についての打ち合わせを行うためであった。

結果，(１)住居址(住居址１)の半分が南側に未調査で残る。(２)同様に木棺墓も半分が未調査で残る。(３)一部遺物(縄文晩期)の分布範囲が南側に延びる。これらの点から，未知の遺構の存在する可能性も高く，市道予定地南側の工場用地についても範囲は限るが調査が必要という一致をみた。また住居址中央部(住居址２)が北側に延びていると思われる部分についても追加調査が必要と判断された。ここで伊丹市教育委員会はただちに同地の発掘調査を実施する方向で決断，引き続き当協会発掘調査部に調査を依頼されるとともに，諸般の事情から現調査に継続しての調査を希望された。

これを受けた南博史調査員はただちに下條調査部長に報告し，現調査の調査状況から縄文晩期から弥生期にかけての重要な資料を得る可能性があり，学術的価値が非常に高いと判断し，これを受託する方向で内部検討を開始した。しかし，現調査の終了を２～３日先に控えているような状況のもと，急に調査を継続することは内部調整，契約などの事務手続き上至難であった。また，下條調査部長の退職(４月より西南学院大学助教授，現在愛媛大学教授)による部長の交代や昭和58年度の他の発掘調査の報告書の作成を控えており，一度引き上げざるを得ない状況であった。しかし，一旦引き上げることは煩雑な面があるだけでなく，実質上調査が中断されることになり，調査員側としては是非継続して調査ができるよう調査部に申し入れた。これを受け下條調査部長，金田暁係員らの努力により，内部調整，契約など事務上の手続きを遂行，かろうじて継続して調査をできることとなった。そして，調査期間は４月１日より５月15日までの予定で，調査は南博史調査主任，定森秀夫調査員が当たり，片岡肇調査部長(４月より)が補佐することになった。ついては，前回の調査を第11次A調査とし，今回の調査を第11次B調査とした(以下11A調査，11B調査と略す)。

なお，E区(第９図)の調査については，11B調査の開始の段階では調査範囲に入っていなかったが，11B調査の途中で自然流路に含まれる縄文晩期後半の遺物包含層の拡がりから，再び調査

が必要となった。しかし，この段階での三たびの調査の延長は困難であったので，伊丹市教育委員会と討議の結果，発掘調査は伊丹市教育委員会が行い，出土遺物等の整理については，既調査の整理に含めて我々が担当することになった。（南）

第１章　遺跡の位置と環境

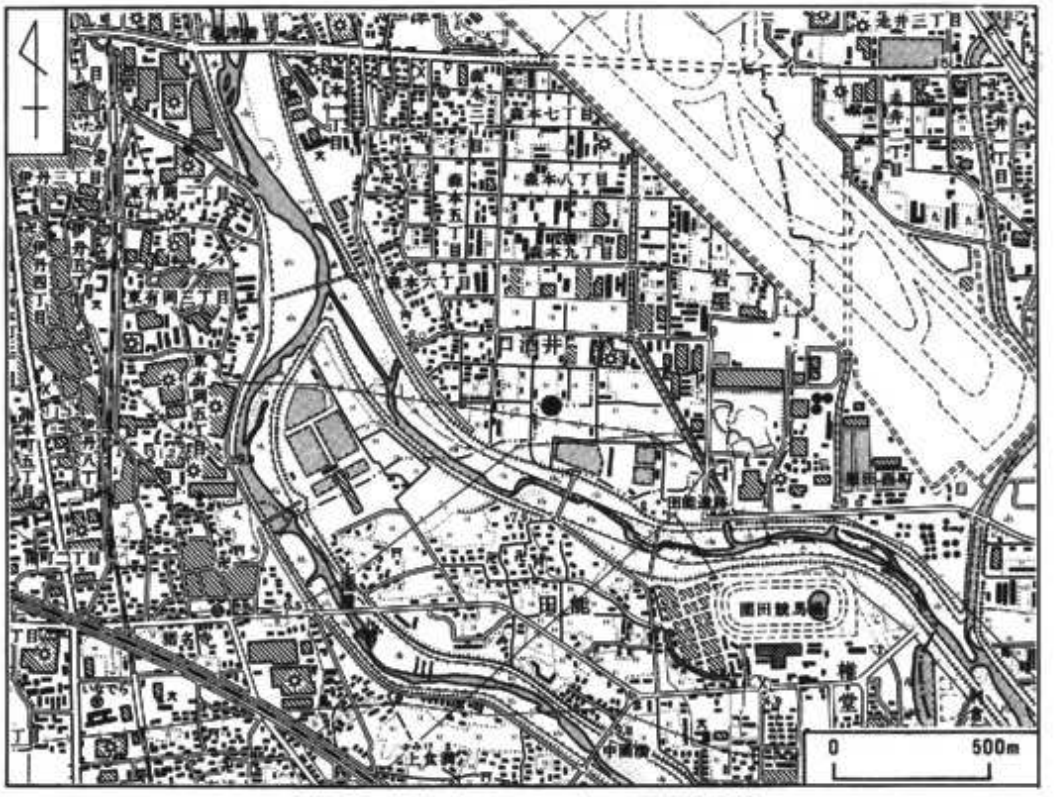
第１節　遺跡の位置（第１～３図）

１）遺跡の位置

口酒井遺跡は，ＪＲ福知山線伊丹駅の東南約1.5km，大阪空港の南約1.2km，伊丹市口酒井字穴森を中心に位置する（第２図）。この周辺は伊丹市の東南隅にあたり，遺跡も一部は尼崎市田能字北向に拡がっている。

ちなみに伊丹市は兵庫県に属しその東南部にあり（第１図），北から西・南へ川西・宝塚・西宮・尼崎の各市と市境を接し，東は大阪府池田・豊中の両市境でもって府県境を画している。

第１図　遺跡の位置図・１
（・印：伊丹市口酒井遺跡）



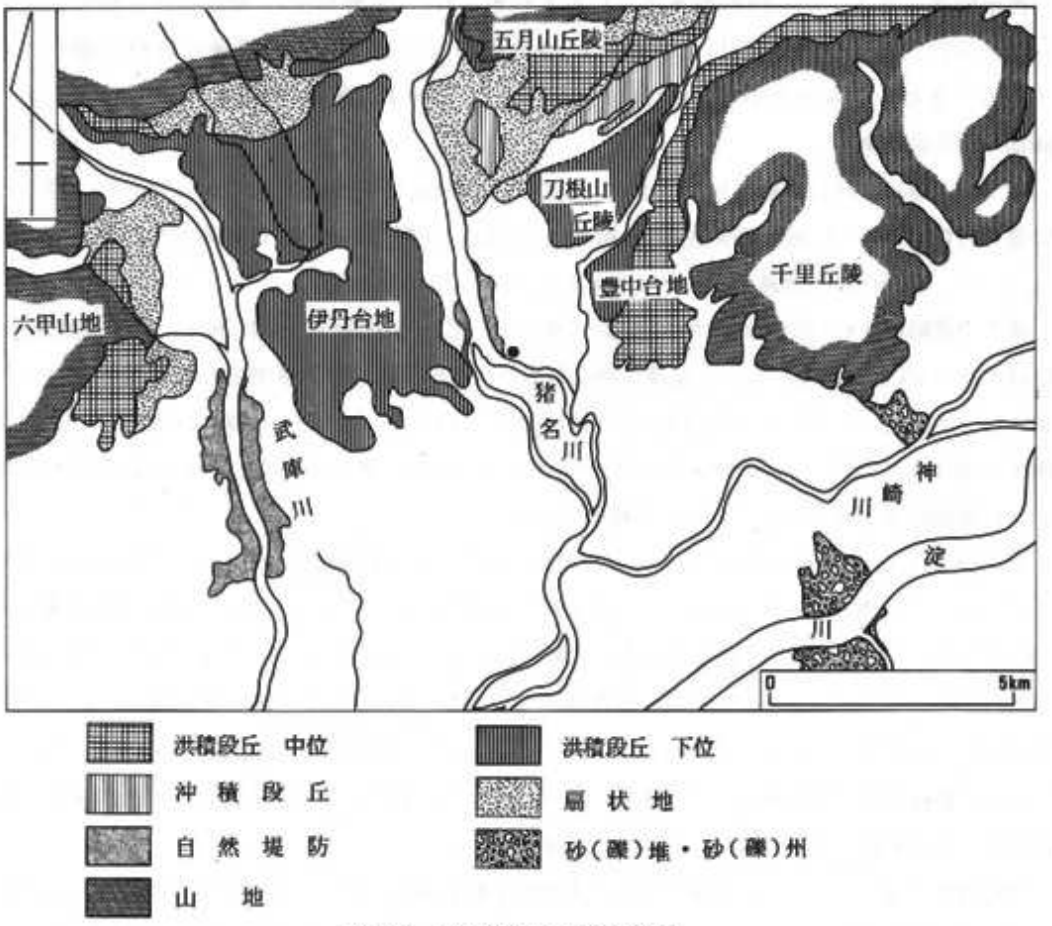
第２図　遺跡の位置図・２（１：25000『伊丹』）

広さは東西約6.5km，南北約6km，総面積約23㎢，三方を六甲山地，北摂山地，千里丘陵で囲まれた西摂平野のほぼ中央，南流する武庫川，猪名川に挟まれた伊丹台地および猪名川左岸の沖積地に位置し，人口は約19万人。伊丹台地は古くから市街地となっているが，口酒井遺跡が立地する猪名川左岸と大阪空港に挟まれた沖積地は猪名川の氾濫原でもあり，農地または工場用地となっているが，最近は宅地のための再開発も進んでいる。

2）遺跡の立地と周辺の地形

口酒井遺跡は猪名川左岸沖積地内の自然堤防上に立地，地表面の海抜は約7mを測る。

西摂平野は前記したように(第3図)，西は六甲山地，北は北摂山地，東は千里丘陵に囲まれ，比較的低平な四角形の地域で，西から武庫川，猪名川，箕面川，千里川が南流する。そして，平野内は各山地から連続する洪積台地と一部扇状地，河川の堆積活動によって形成された沖積地とに分類できる。とくに武庫川と猪名川に挟まれた部分は，北摂山地長尾山丘陵から南に張り出す洪積段丘(伊丹台地)が発達し西摂平野を特徴づけている。また，猪名川左岸の北摂山地付近は段丘と箕面川の扇状地形が目を引き，千里丘陵附近には，中・下位段丘が発達する。



第3図　西摂平野周辺地形分類図

遺跡は，猪名川と藻川の分流点の東方約750m，尼崎市田能遺跡の北西約400m，南流してきた猪名川が千里丘陵から連続する微高地部分を廻り込むように東流する部分の北岸に位置する。おそらく田能遺跡と同様の立地をするのであろう(岡田・前田1982)。

なお今回の調査地は，前章で示したように幅6m長さ120mずつの逆L字形の市道用地であり，地番は伊丹市口酒井字穴森9－1・9－3，尼崎市田能字北向492にあたる。　(南)

第2節　周辺の遺跡（第4・5図，第1表）

猪名川水系に所属する遺跡は，上流域において能勢町中筋など縄文の遺跡を認めるが，おもに中・下流域に広がる西摂平野に各期の遺跡分布をみる。以下，口酒井周辺の歴史的環境を概観する。その後，特に今回重要となる縄文・弥生の遺跡についてさらに詳しくみていきたい。

1）概　観

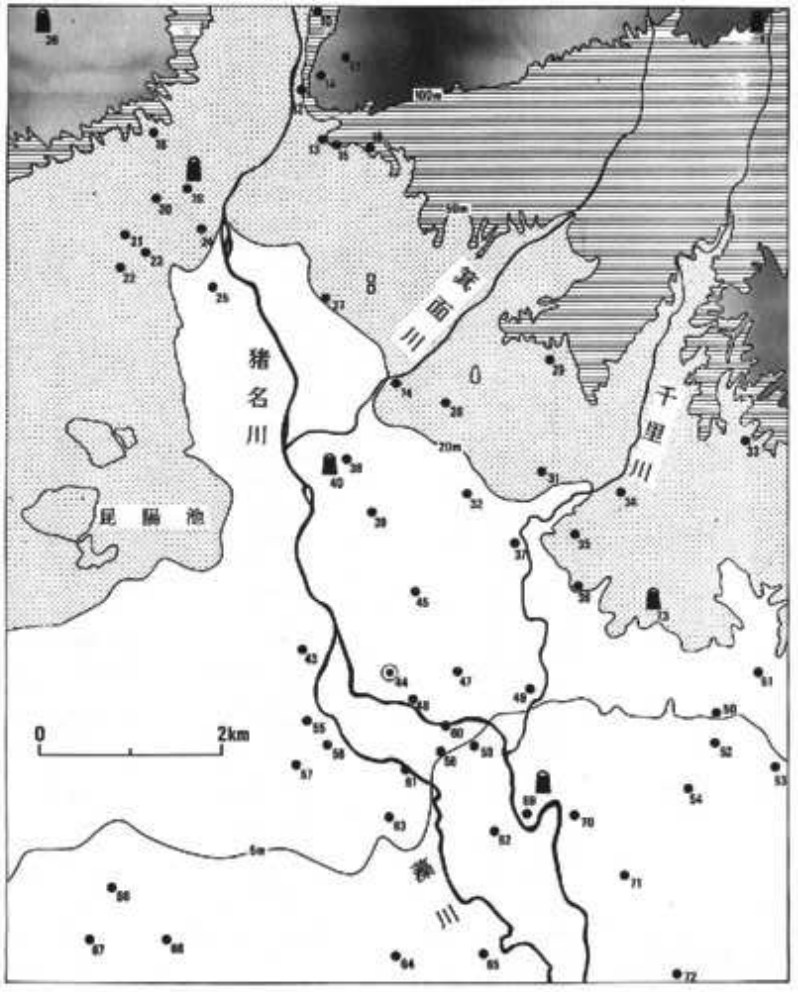
先土器の遺跡は未だ本格的調査がなされておらず，採集資料などが紹介されているに留まる。川西市加茂では古くから国府型ナイフ形石器が知られる(亥野1976)。最近では池田市宮之前(橋本1977)，同市伊居太神社(大下1987)，豊中市柴原(服部1985)で同様の資料が紹介されている。また，豊中市野畑春日町(亥野ほか1987)，川西市花屋敷(岡野ほか1982)では有舌尖頭器の報告例がある。

縄文の遺跡は，伊丹市緑ケ丘，同市大阪空港B(佐原1971)や加茂で古くから知られ，豊中市野畑や野畑春日町では最近の発掘調査(柳本ほか1981，亥野ほか1987)で集落址や墓域が明らかとなった。箕面市域の遺跡も採集品であるが紹介がある(飯島1986)。

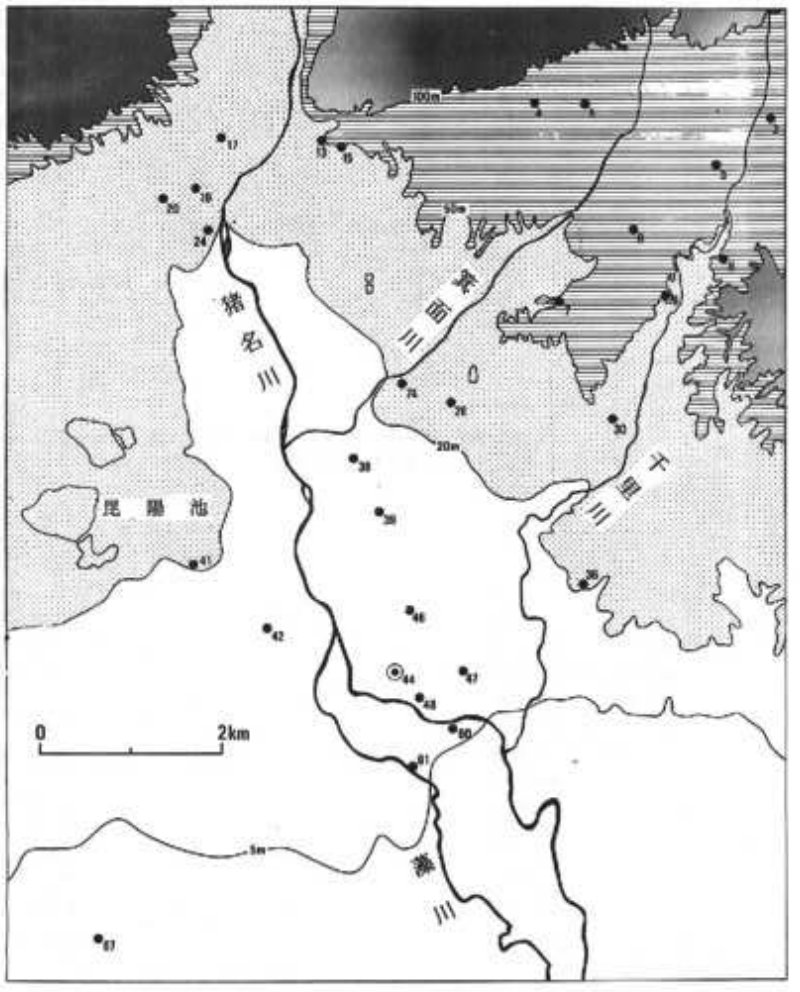
弥生の遺跡はそれ以前に比べかなり数が増える。尼崎市田能(福井編1982)，豊中市勝部(鳥越ほか1972)などの調査から，大規模な拠点集落の存在が示唆され，摂津地方の地域的特性が強調されると同時に，河内・大和地方と対局的に捉えられるようになる。銅鐸は猪名川水系では6箇所で出土しており，また池田市五月山(亀島ほか1985)，豊中市待兼山(都出ほか1984)では高地性集落が営まれるなど，動乱期の様相を示す。

古墳期の集落は川西市栄根(深井ほか1982)，尼崎市中ノ田(橋爪1971)などでみられるが断片的である。古墳の分布をみると，前期古墳は丘陵に散在的に分布し，五月山裾の池田市茶臼山(堅田1964)，刀根山丘陵の豊中市御神山(藤沢1960)などが知られる。中期では豊中市桜塚古墳群(柳本ほか1987)や，伊丹市猪名野古墳群(佐原1971)のように地域的まとまりをもつものがみられ，後期横穴式石室が導入されると豊中市野畑たこ塚古墳群(藤沢1960)などのように，いわゆる群集墳が大量にみられる。吹田市千里古窯址群(鍋島・藤原1974)では須恵器生産が開始され，6世紀代の盛期を経て奈良時代まで継続する。

歴史時代の遺跡としては，尼崎市猪名寺廃寺(尼崎市教委1952)，伊丹市伊丹廃寺(高井1966)が法隆寺式伽藍配置をもつものとされ，注目される。栄根では奈良時代の木製墨壺が出土してい



第5図　猪名川流域の弥生遺跡分布図
（番号は第1表に一致する。）



第4図　猪名川流域の縄文遺跡分布図
（番号は第1表に一致する。）

第1表 周辺の遺跡一覧表 （番号は第4・5図に一致する）

No	遺跡名	所在	標高(m)	立地	縄文 早前	縄文 中	縄文 後	弥生 晩	弥生 前	弥生 中	弥生 後	遺物・遺構	文献
1	如意谷	箕面市如意谷	約 150	丘陵上								銅鐸(突線紐3式)	村川1982
2	上野白	箕面市上野白	75	段丘								石器(縄文)	飯島1986
3	稲	箕面市稲	60	段丘	○	○						土器・石器	飯島1986
4	新稲	箕面市新稲	110	丘陵端	○							土器・石器	飯島1986
5	桜池	箕面市桜池	85	扇状地								石器(縄文)	飯島1986
6	上権田	箕面市上権田	57	段丘								石器(縄文)	飯島1986
7	瀬川	箕面市瀬川	45	段丘		○	○					土器・石器	飯島1986
8	野畑	豊中市西緑丘三丁目	45	段丘			○					土器・石器	柳本・橋本1981
9	野畑春日町	豊中市春日町四丁目	約 50	段丘		○						土器・石器(有舌尖頭器)	亥野・木下・山元1987
10	木部	池田市木部	33	扇状地				○	○	○		土器	亀島・橋高・田中1985
11	五月山山頂	池田市綾羽二丁目	205	山頂					○	○		土器・石器	亀島・橋高・田中1985
12	伊居太神社	池田市綾羽二丁目	50	丘陵端					○	○		土器・石器	亀島・橋高・田中1985
13	城山	池田市城山町	約 50	扇状地				○		○		土器，住居址	亀島・橋高・田中1985
14	五月山公園	池田市綾羽二丁目	56	扇状地					○	○		土器・石器	亀島・橋高・田中1985
15	横枕	池田市建石町	52	段丘				○		○		土器・石器，住居址	亀島・橋高・田中1985
16	夏刈池	池田市緑丘一丁目	約 40	段丘					○			土器	亀島・橋高・田中1985
17	小花	川西市小花一丁目	約 25	沖積地				○				石棒	亥野1976
18	寺畑	川西市寺畑	約 50	丘陵端						○		土器	武藤1974
19	栄根	川西市栄根二丁目	24	沖積地				○	○	○	○	土器・石器・銅鐸(突線紐5式)，住居址・方形周溝墓	深井・岡野・池田 他1982
20	加茂	川西市加茂一丁目 他	40	段丘			○	○		○	○	土器・石器・磨製石剣・銅鏃・玉類，住居址・方形周溝墓	岡野・古川・田中1982
21	東大野	川西市口谷東二丁目	34	段丘						○		土器	岡野・古川・田中1982
22	加茂西	川西市加茂三丁目	35	段丘						○		土器	岡野・古川・田中1982
23	六ッ塚	川西市加茂三丁目	32	段丘						○		土器	岡野・古川・田中1982
24	下加茂	川西市下加茂	約 25	沖積地				○	○			土器	深井1987
25	久代	川西市下加茂二丁目	約 18	沖積地						○		土器	岡野・古川・田中1982
26	満願寺	川西市満願寺	約 150	山間								銅鐸(突線紐2式)	佐原・春成1982
27	神田北	池田市神田一丁目 他	20	扇状地端						○		土器・石器	亀島・橋高・田中1985
28	宮之前	池田市石橋四丁目 他	30	扇状地				?		○		土器・石器・石棒，住居址・方形周溝墓・壺棺墓	宮之前遺跡調査会1970
29	待兼山	豊中市待兼山町	50〜55	丘陵						○		土器・石器	都出・福永・青谷1984
30	柴原	豊中市柴原一丁目	32	丘陵				○		○	○	土器・石器	服部1985
31	南刀根山	豊中市南刀根山	約 37	丘陵端						○		土器・壺棺墓	瀬川1978
32	蛍ケ池西	豊中市蛍ケ池	約 16	扇状地						○	○	土器，大溝	服部・祭本1986
33	青池	豊中市上野	約 40	段丘						○		土器	瀬川1978
34	本町	豊中市本町	約 26	段丘						○	○	土器	瀬川1978
35	新免	豊中市玉井町	22	段丘端						○	○	土器・人面付土製品，住居址・方形周溝墓	服部・祭本1986
36	山ノ上	豊中市山ノ上町	17	段丘端					○	○	○	土器・石器・小形仿製鏡	山元1986

37	箕輪	豊中市箕輪二丁目	約	15	扇状地端					○		土器・石器，住居址・掘立柱建物	服部・祭本1986
38	大阪空港A	伊丹市神津	約	15	扇状地端	○					○	土器・石器	佐原　他1971
39	大阪空港B	伊丹市神津	約	13	扇状地端		○	○				土器	佐原　他1971
40	中村	伊丹市大阪空港		20	扇状地端							銅鐸(外縁付紐1式)	梅原1941
41	緑ケ丘	伊丹市緑ケ丘一丁目		20	段丘端		○					土器・石器	佐原　他1971
42	有岡城下層	伊丹市伊丹五丁目	約	15	段丘上	○	○	○				土器・石器	浅岡1986，森本・前川・松田他1987
43	松原	伊丹市松原	約	13	沖積地					○		土器	佐原　他1971
44	口酒井	伊丹市口酒井穴森		6	沖積地		○	○	○	○		土器・石器，住居址・円形周溝墓	浅岡1984・1985・1987，南1986
45	森本三丁目	伊丹市森本三丁目		8	沖積地			○		○		土器	浅岡1985
46	森本鶴田	伊丹市森本字鶴田175-1		8	沖積地	○	○	○				土器・石器	浅岡1985・1987
47	原田西	伊丹市岩屋		4.5	沖積地	○			○	○		土器・石器・木器，方形周溝墓	柳本・島田・橋本1981，加古1984
48	田能	尼崎市田能字中ノ坪		7	沖積地		○	○	○	○		土器・石器・銅剣鋳型・銅鏃・銅釧・玉類	福井編1982
49	勝部	豊中市勝部		4	沖積地			○	○			土器・石器・銅鏃・玉類，木棺墓	烏越・藤井・荻田　他1972
50	城山	豊中市城山町	約	15	段丘端				○			土器	木下・須藤1986
51	長興寺	豊中市長興寺	約	10	段丘端					○		土器	瀬川1978
52	服部	豊中市服部本町		6	沖積地					○		土器・磨製石剣	木下・須藤1986
53	小曽根	豊中市小曽根		6	沖積地		○	○	○	○		土器・石器，方型周溝墓	木下・須藤1986
54	穂積	豊中市穂積二丁目	約	3	沖積地	○			○	○		土器	瀬川1978
55	猪名寺廃寺下層	尼崎市猪名寺字佐琉	約	10	沖積地				○	○		土器，住居址	村川1966
56	上園橋	尼崎市猪名寺	約	8	沖積地					○		土器	村川1966
57	中ノ田	尼崎市猪名寺字前畠　他		7	沖積地					○		土器・石器	橋爪・勇・藤岡1971
58	四ノ坪	尼崎市中食満	約	5	沖積地					○		土器	村川1966
59	園田競馬場	尼崎市椎堂	約	5	沖積地					○		土器	村川1966
60	猪名川川床	尼崎市椎堂	約	7	川床		○	○	○	○		土器	村川1966
61	藻川川床	尼崎市上食満	約	7	川床		○					土器	村川1966
62	東園田	尼崎市東園田町		3	沖積地				○	○		土器	岡田1980
63	南浦	尼崎市中食満	約	7	沖積地					○		土器	村川1966
64	若王寺	尼崎市若王寺字大張	約	3	沖積地					○		土器・石器，溝状遺構	村川1966
65	善法寺	尼崎市善法寺	約	6	沖積地					○		土器	村川1966
66	辰巳台	尼崎市東宮松	約	4	沖積地					○		土器	村川1966
67	上ノ島	尼崎市上ノ島野上町		4	沖積地		○	○				土器・石器・木器	橋爪・勇・藤岡1973
68	栗山・庄下川川床	尼崎市栗山字北浦		3	沖積地			○	○	○		土器・石器	橋爪・勇・藤岡1974
69	利倉	豊中市利倉南町	約	4	沖積地					○		土器・銅鐸破片（突線紐3式）	瀬川1978
70	上津島	豊中市上津島		4	沖積地			○	○	○		土器	瀬川1978
71	島田	豊中市島田		4	沖積地					○		土器	瀬川1978
72	庄内	豊中市庄内		2	沖積地			○	○	○		土器	瀬川1978
73	桜塚	豊中市桜塚		22	台地上							銅鐸（2つ，うち1つは外縁付紐1式）	佐原・春成1982
74	豊島南	池田市豊岡南一丁目		20	段丘端		○		○	○		土器	亀島・橋高・田中1985

る。中世では川西市満願寺出土の地鎮具(岡野・田中1985)が注目される。近世では有岡城跡や伊丹郷町の調査(藤本ほか1987)も進められている。

2）猪名川流域の縄文遺跡

当地域における縄文遺跡の分布を，時期区分なく，位置関係のみでグルーピングするならば以下のようになろう。(第4図)

a．千里川・箕面川の上流

b．猪名川が西摂平野に出てすぐの両岸

c．猪名川・藻川の分流地区

aの遺跡は概ね標高が50m以上で，両河川の河岸段丘に立地する。早期，前期の遺跡は先土器の遺物を伴出するものが多い。稲(3)で北白川下層Ⅱ式が出土している。中・後期では千里川流域に良好な遺跡が見られる。右岸の野畑春日町(9)では中期前葉，船元Ⅰ式を伴出する土壙墓群が検出され，対岸の野畑(8)では後期前葉，磨消縄文系の土器群を伴う居住域が確認されている。野畑では石錘が主体の石器組成をもち，河川を対象とする小規模な漁撈活動を物語る。晩期では分布図から外れるが，箕面市白島で遺物が知られる。

bの猪名川が西摂平野に出てすぐの両岸地区では，加茂(20)で後期の土器が出土するが，主体となるのは晩期末，刻目凸帯文土器であり，特に一条凸帯のものが目立つ。台地上の加茂，台地下沖積地の栄根(19)，下加茂(24)，五月山裾の横枕(15)，城山(13)がある。小花(17)では結晶片岩製の精製の石棒が出土している。

cの地域は旧海岸線に近い。ここでは中期以降の遺跡が知られている。伊丹台地上の緑ケ丘(41)，有岡城下層(42)，豊中台地端の山ノ上(36)，千里川段丘面の柴原(30)，箕面川扇状地末端の宮之前(28)，豊島南(74)と，猪名川低地部の遺跡に分けられる。有岡城下層では船元Ⅱ・Ⅲ式に新崎式などの北陸系土器が伴出し，低地部の大阪空港A(38)では勝坂式が出土するなど，中期段階で東日本的要素が目立つことは注目される。

猪名川低地部では，中～後期の土器が堆積層中より単独で出土する例が多い。原田西(47)では中期・船元Ⅰ式が，森本鶴田(46)や穂積(54)でも同じく中期の土器片がかなりローリングを受けた状態で出土している。田能(48)においては地表下4mから刻目凸帯文土器が出土している。山ノ上や今回の口酒井(44)では刻目凸帯文土器と弥生前期土器の共伴が認められ，縄文から弥生の移行を考える上で重要である。宮之前では晩期末に比定できる結晶片岩製の粗製の石棒が知られる。

3）猪名川流域の弥生遺跡

弥生の遺跡はその立地により二大別できる(第5図)。標高20m以上の台地や段丘上に立地し背後に丘陵などの高地をもつものと，概ね標高20m以下の猪名川沖積地内の微高地上に立地し，推定海岸線沿いにあるものである。仮にここで前者をA，後者をBとしておこう。

弥生前期古段階・中段階の遺跡は田能，口酒井，上ノ島(67)などがあり，これらはすべてBである。田能では幅2.5～4mの溝が掘削され，微高地の縁辺を巡る。同じ立地条件にある縄文の遺跡が，溝を掘削する技術を欠落し，遺物包含層や遺構基盤層の崩壊，流失を受けている状況とは対照的である。

新段階に至るとAにも遺跡が見られる。豊中台地縁辺では山ノ上において溝が検出され，縄文晩期末の刻目凸帯文土器が共伴している。木部(10)，栄根，下加茂は猪名川沖積地の遺跡でBに属すが，この段階より集落が始まる。

台地への開発が進行するのは中期中葉以降。Aの宮之前，加茂はこの段階に盛行する。加茂では過去60回を越える調査が行われ，集落の規模が東西700m，南北300mの範囲をもつことが明らかになった。報告が少ないため詳細は不明であるが，集落の東部に居住域をもち，西部に方形周溝墓を主体とする墓域が広がる。住居址は方形，円形が併存するとされており，当該期の方形は珍しく，貴重な資料といえる。

中期後半に至って遺跡数が大きく増加する。上記の大規模な遺跡では継続的に居住が行われる一方，周辺への分村が顕著に認められる。口酒井の今回調査区の状況もその一端を示すものである。同期にいわゆる高地性集落も出現し，短期間でその居住を終える待兼山(29)や，後期まで継続する五月山山頂(11)などがある。

中期から後期へ移行する過程において，各集落の動向に変化が見られる。Aに属すものは概ね中期末で一旦その幕を閉じる。後期に存続するものも若干見られ，住居址が方形に変化し，炉の形が変わるなど，集落の営みにおける断絶を推定させる。新免(35)はその好資料と言える。Bの遺跡はあまり調査例がないので明言できないが，今回の調査によれば後期に至っても円形住居址を継続させ，炉の形態も基本的には中期の形態を踏襲しており，そこに断絶を考える必要はないと思われる。Bに普遍的であるかの検討は，今後の課題であろう。

いずれにしても後期に属す遺跡は小規模だが数が多い。鉄製農耕具の普及によって排水，引水機能がより充実し，湿地や台地への分村が行われる。猪名川沖積地では，近代の農村に勝るとも劣らない集落分布密度を持つようになる。ただし，台地の開墾は後世の溜池による治水工事を待たなければならない。

青銅器関連遺物について補記しておく。当地域においては銅鐸が6箇所7点出土している。内，古式鐸が2点ある。中村(40)鐸は外縁付紐1式，4区袈裟襷文で高さは20.8cm，桜塚(73)鐸は外縁付紐1式，2区流水文で高さは32cmを測る。後者は香川県善通寺市我拝師山北面出土鐸と同笵で，鋳型が大阪府茨木市東奈良で出土している。桜塚にはもう1点銅鐸が知られたが，現在不明。その他4点はすべて新式鐸で，栄根では高さ107.6cmの突線紐5式鐸が破砕された状態で出土。利倉(69)でも飾耳部小破片が出土している。

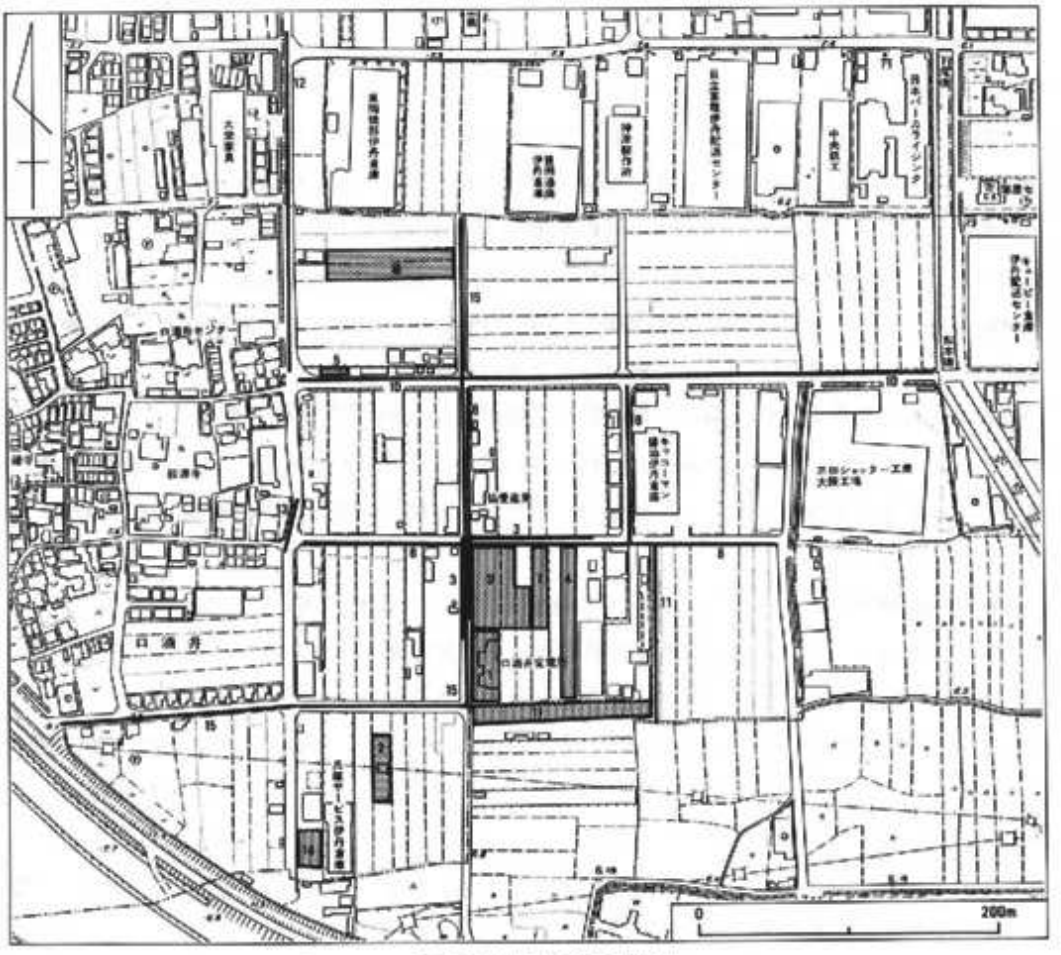
青銅武器については銅剣鋳型が田能で出土し，銅鏃が勝部(49)，田能，加茂で見られる。他に山ノ上，下坂部で小形仿製鏡がある。　（森下）

第3節　既往の調査（第6・7図，第2表）

口酒井遺跡の発見は，昭和53年の関西電力(株)口酒井変電所建設の事前調査にはじまる。口酒井遺跡の近辺には田能遺跡(尼崎市)，勝部遺跡(豊中市)など有名な弥生遺跡が点在しながらも，伊丹市域では少量の須恵器・土師器の散布がみられる程度(兵庫県教委1970)で埋蔵文化財の発掘調査は進んでいなかった。

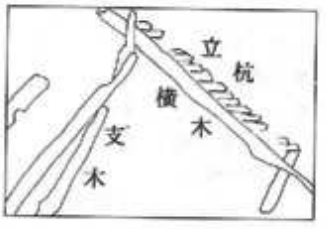
口酒井変電所予定地の発掘調査においても，当初壺掘りによる土層観察では遺跡の存在はあり得ないと思いつつ川辺郡条里遺構の一端でもみつかればとのおもいからトレンチを設定したものであった。結果は，少量の弥生式土器(凸帯文土器に伴う浅鉢など数点含む)と未製品の石庖丁1点などを検出したにとどまった。しかし，遺物の出土内容からごく近い所に弥生時代の遺跡の存在が考えられ，要注意地区として以後の開発にそなえることとなった。

これが契機となって実施した調査は第2表のとおりである。



第6図　既往の調査位置図

第2次調査では，松山市小照遺跡で話題をよんだ堰状遺構を検出した。この堰状遺構は関西電力の好意により現状保存することとなり，発掘調査を行わずに検出状況のまま埋戻されたため，その具体的な内容や時期は不明であるが，流路から出土したわずかな遺物からみて弥生時代末から古墳時代にかけてのものと思われる(第6・7図)。



第7図
第2次調査検出堰状遺構

さらに，第3次調査では凸帯文土器の単純包含層を発掘し，第4・7・9次調査では猪名川左岸に形成された狭長な黄色土系の自然堤防上に弥生時代の遺構を検出するなど，大きな成果をあげた。弥生時代の遺構には円形周溝墓，木棺墓，溝状遺構，土壙などがあり，いよいよ集落跡の近いことを窺わせた。

凸帯文土器の包含層は，弥生時代の立地とは異なり，青灰色系の粘土層にひろがりをもち，その範囲は第5・6・8・9・10・12次調査を経るなかで拡大され，数百mにわたる広い地域におよぶことが分った。それとともに得た成果には，縄文時代から弥生時代への移行期の諸問題を解く資料が多く含まれており，注目されている。特に，凸帯文土器に付着した籾痕資料や凸帯文土器に伴って検出された石庖丁などは，畿内における稲作受容期を検討するうえで貴重なものといえよう。しかしながら，いまだ同時期の水田遺構や集落跡が検出できておらず，将来の課題として残されている。　(浅岡)

第2表　口酒井遺跡既往の調査一覧表（次数は第6図に一致する）

次	調査年月	調査地	調査原因・調査内容	文献
1	昭53年4月	穴森2	関西電力(株)口酒井変電所建設に伴う確認調査。弥生式土器少量(凸帯文土器数点含む)及び石庖丁(未製品)1点検出。遺構検出なし。	
2	昭53年11月～昭54年1月	下大蔵4－1，5－1	関電送電線仮設塔建設に伴う確認調査。流路と木組み堰状遺構検出及び湿地状堆積土層の確認。凸帯文土器，弥生式土器，土師器など出土。堰状遺構は検出状況のまま，埋め戻し現状保存。	
3	昭54年6月～7月	穴森・滑田地先市道敷	関電口酒井変電所に水道管引込みに伴う確認調査およびトレンチ調査。凸帯文土器包含層を検出し，凸帯文土器・石皿・叩き石・石鏃及び磨製石斧(太型蛤刃石斧？)の柄の部分を検出。	

4	昭55年2月～3月	穴森7－1，8－1	大英(株)工場建設に伴う確認調査及び拡大調査。弥生の遺構(土壙・溝など)及び低湿地堆積土から多量の凸帯文土器・弥生式土器・土師器を検出。弥生の遺構は前期(新)から中期(新)まで。	
5	昭55年4月	九蔵田1－1	五十鈴建設による店舗付住宅建設に伴う確認調査。凸帯文土器数点検出。	
6	昭55年11月	穴森・大十地先市道敷	関電地中線埋設に伴う確認調査及びトレンチ調査。凸帯文土器包含層の発掘により，凸帯文土器・石器・土偶・籾痕をもつ土器などを検出。	浅岡1983a 浅岡1988
7	昭55年12月～昭56年1月	穴森5－1	大英(株)倉庫建設に伴う発掘調査。弥生の木棺墓(2基)，円形周溝墓(1基)。公園として保存予定。	浅岡1983b
8	昭56年10月～11月	向九ノ坪・大十・滑田・穴森・十四地先市道敷	公共下水道工事に伴う確認調査及びトレンチ調査。2ケ所に凸帯文土器包含層を確認し発掘。凸帯文土器・石庖丁(2点)，ほかに弥生式土器などを検出。凸帯文土器に伴う溝状遺構も検出。	浅岡1984a
9	昭57年2月～3月	穴森5－1，5－4，4－1，3－1，1	第7次調査で検出した円形周溝墓の全掘と範囲確認調査。円形周溝墓，木棺墓(2基)，壺棺(1基)など。ほかに凸帯文土器包含層確認。	浅岡1984b
10	昭57年11月～12月	九蔵田・二重田・草脇・梨本・六ノ坪地先主要道路敷	公共下水道工事に伴う確認調査。凸帯文土器包含層検出。下水ルート変更により，立会を行う。立会時，多量の凸帯文土器や石錐を検出。また，凸帯文土器の時期の土壙を確認。	浅岡1985
11	昭59年2月～5月	穴森9－1他，尼崎市田能字北向492	道路新設等に伴う発掘調査と確認調査。弥生の住居址(3棟)，木棺墓(1基)，土壙墓他，及び平安時代掘立柱建物，凸帯文土器包含層検出。	本報告 南1986
12	昭60年1月～2月	九蔵田・森本6丁目・森本字庄正地先主要道路敷	関電地中線埋設に伴う確認調査。弥生前期(中)の一括土器を含むV字溝及び凸帯文土器包含層検出。	浅岡1987a
13	昭60年1月～2月	向八地先主要道路敷	道路改良工事に伴う確認調査。区画整理前の水路など確認。顕著な遺構・遺物の検出なし。	浅岡1987b
14	昭60年5月	下大蔵10－1	工場建設に伴う確認調査。顕著な遺構・遺物の検出なし。	浅岡1988a
15	昭60年7月 昭60年11月	九蔵田・酒屋・杉本・向八・向九ノ坪・滑田・下大蔵・穴森地先道路敷	公共下水道工事に伴う確認調査とトレンチ調査。凸帯文土器包含層の確認と発掘調査。凸帯文土器，石皿，叩き石，石鏃など検出。籾痕土器出土。	泉1988
16	昭61年3月	九蔵田7－1，8－1	倉庫建設に伴う確認調査。弥生式土器を少量検出。	浅岡1988b

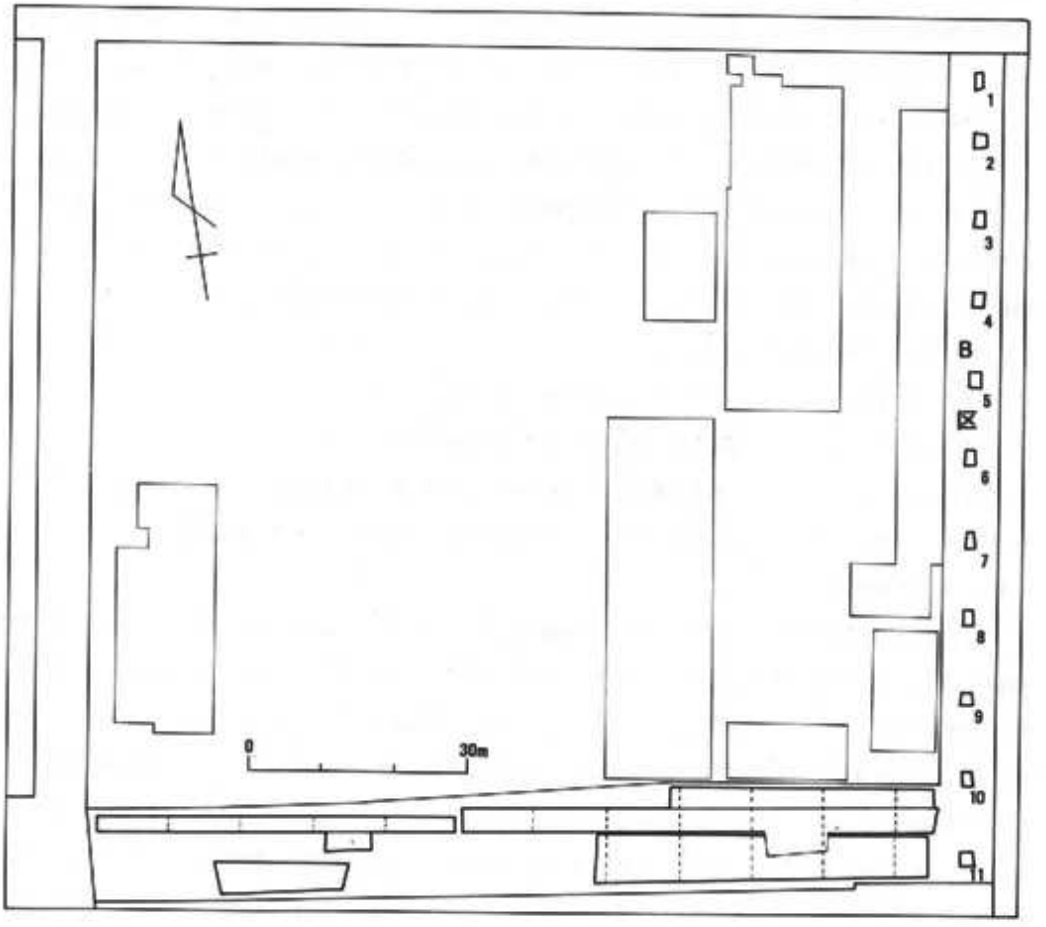
第２章　発掘調査の経過

第１節　第11次Ａ調査の経過（第８図）

１）調査区の設定

今回の調査地は前章で記したように，市道建設予定地と水道管埋設予定地の２ケ所に分かれており，前者をＡ区，後者をＢ区とした(第８図)。

Ａ区は東西に長く約120mを測る。トレンチの幅は２ｍと３ｍに設定し，それぞれ西を起点に10ｍグリッドで区画した。結果，西方の２ｍトレンチはＡ１～５(Ａ５区は９ｍ50cm)。東方の３ｍトレンチはＡ６～12(Ａ12区は5m50cm）となった。そして，検出遺構の状況など調査の経過に応じて，２ｍ幅のトレンチを南へ延ばすことにした。



第８図　トレンチ配置図

Ｂ区は南北に長く，同様に約120mである。ここは２×２mの小調査坑による調査を行うことになったため，等間隔に11の小調査坑を設けた。北よりＢ１～11とし，Ｂ１とＢ２の間隔６mの他は９m間隔になった。調査面積は約360㎡である。

２）調査経過

２月15日器材搬入，翌16日トレンチ設定を行うとともに重機によるＡ区の表土の除去作業を開始した。ただし，Ａ区はすでに伊丹市によって表土の一部が搬出されていたため，その深さは第３層上面まで，約40cm程度となった。以下手掘りに移る。

ａ．Ａ１～５区

Ａ１～５区においては，一部小土壙を検出したが，明瞭な遺構は存在せず基本的に遺物包含層の重層ということで理解できた。そして，それらは古墳～平安時代の須恵器を主体に包含する層群と縄文晩期の凸帯文土器を主体に包含する層群とに分かれ，後記するＡ６～12区に見られる弥生の遺物包含層に相当する層中には遺物・遺構を検出できなかった。

縄文晩期凸帯文土器は，最下層の青灰色粘土層をベースとする自然流路状の落込みの埋土からまとまって出土した。また，この土層は炭化物を含む植物遺体の残存が顕著であった。このため，この流路状落込みの肩の部分を含む形で南へ拡張区を設けた。この拡張区においても同様に凸帯文土器，石器の出土をみたが，とくに最下底部において流木などの集積がみられたのが注目された。なお，Ａ１～４区については，遺物包含層だけでなく，ベース面までの掘り下げを計ったが，かなり深く，作業に危険が出てきたので，地表下約２mで掘り下げを中止した。そして，以下の層については確認のため１m幅のトレンチを各グリッド１箇所に設けた。

以下，若干の作業過程を記録する。

２月22～25日	古墳～平安時代相当層の掘り下げ。
２月27～３月９日	縄文晩期凸帯文土器包含層の掘り下げ。
３月10～20日	自然流路落込み調査および南壁土層実測。
３月21～29日	落込みを除く部分の埋戻し。拡張区３×４mの調査。

ｂ．Ａ６～12区

Ａ６～12区においては，Ａ１～５区と同様古墳～平安時代の遺物の出土を見たほか，掘立柱建物跡・溝なども検出された。また，Ａ１～５区の調査では確認できなかった弥生時代の遺物包含層・遺構が認められた。とくに，平安時代の掘立柱建物跡を検出したＡ９～10区については，南側へ幅３mの拡張区を設けたが，その下層より弥生後期の住居址を検出し，この周辺が集落であったことが窺えた。この他，凸帯文土器の出土も多かったが，土器の出土状態，小土壙の存在などＡ１～５区の出土状況とは異なった状況を示していた。なお，晩期の遺物のベースとなっている青灰色粘質砂土については，下層の確認のため，各グリッド１箇所１m幅のトレンチを南北に設けた。

以下，作業過程を略記す。

２月16日～19日	重機による表土除去。
２月20～24日	古墳～平安時代包含層の掘り下げ。土壙，掘立柱建物跡の調査。
２月25～３月１日	拡張区の調査。
３月２～18日	弥生中・後期包含層掘り下げ。住居址確認および拡張区設定。
３月19～24日	凸帯文土器包含層の掘り下げ。一部ベースの掘り下げ。
３月25～27日	弥生時代一部遺構の調査。
３月28～29日	土層層序図実測。

ｃ．Ｂ　区

Ｂ区は小調査坑による調査のため，遺構の面的な検出作業が困難であった、したがって遺物包含層の有無の確認と，Ａ区の遺物包含層ならびに遺構面がどこまで拡がっているかの確認作業に重点を置いた。

以下，作業過程を簡単に記す。

２月21日	重機によって盛土・表土を２ｍ幅で排除する。
３月10日	調査坑の設定。
３月11～17日	掘り下げ，断面実測。
３月18日	実測作業。
３月31日	埋め戻し。

（南）

第２節　第11次Ｂ調査の経過（第９～12図）

１）調査区の設定

第11次Ｂ調査の調査範囲は，前回調査のＡ区道路用地南側の工場用地のうち，未調査の住居址の残存部分，木棺墓の一部を含み，かつ遺構が存在する可能性の高いＡ７～Ａ12区の南側部分と，同様の理由から設定したＡ９～Ａ12区の北側部分であり，前者をＣ区，後者をＤ区とした。

Ｃ区は東西約46ｍ，南北約6ｍ50cmの範囲で，Ａ区と同様に10ｍグリッドとし，地区番号も新旧対応させてＣ７～Ｃ12区としたが，ちなみにＣ７区は幅1ｍ60cm，Ｃ12区は幅４ｍ50cmである。

Ｄ区は東西約36ｍ50cm，南北約３ｍの範囲で，Ａ区と同様に10ｍグリッドとし，地区番号も対応させ，Ｄ８～Ｄ12区としたが，Ｄ８区は幅１ｍ30cm，Ｄ12区は幅５ｍ50cmである。

なお，調査面積は約410㎡である。

また，便宜上Ａ５・Ａ６区を境として，これより西を西地区（Ａ１～５区，および後述するＥ区），東を東地区（Ａ６～12区，Ｃ・Ｄ区）とする。

２）発掘調査の経過

ａ．Ｃ区の調査経過

第11次Ａ調査に引きつづいて昭和59年４月１日より調査に入る。まず，表土削平についてはＡ

区の平安期掘立柱建物跡の検出面直上まで機械掘りを行い，以下，手掘りに移った。包含層・遺構面の状況はＡ区とほぼ同様であり，弥生中期の遺構面では住居址２の南側残存部のほか，Ａ区では確認できなかった弥生中期の住居址を見つけることができた。

縄文晩期遺物包含層はＡ区と同様にＣ９～Ｃ12区に分布が認められていたが，注目できることは，最下面において小土壙群を検出したことである。この土壙群の周辺には土器・石器が比較的まとまって出土しており，この辺りが生活面であった可能性が高いように思われた。

以下，若干の作業過程を記録する。

４月１～３日	重機による表土削平。
４月２～５日	古墳～平安期の遺構精査。
４月６～10日	弥生期遺物包含層の掘り下げ。
４月９～21日	弥生期遺構面精査および遺構の調査。
４月21～23日	縄文晩期遺物包含層の掘り下げ。
４月23～29日	縄文晩期遺構面の精査および土壙群の調査。
４月22～５月11日	弥生～縄文晩期遺構の実測作業。
５月13～16日	終了写真撮影，層序実測。
５月16～18日	埋め戻し。

b. Ｄ地区の調査経過

Ｄ区は前記のようにＡ区の北側にあり，さらにその北側は日本発破工業(株)に接する。そして，この敷地は土盛りしてあるために地表面より１ｍほど高くなっており，Ｄ区の北側を掘り下げることは壁の崩落などの危険があった。したがって市教育委員会と協議の上，Ｄ区の北辺に矢板を打ち込み補強することになった。

以上の作業を行った後，５月１日より重機による表土削平作業を開始した。Ｃ区と同様に平安期の遺構面の直上まで機械掘りを行い，以下手掘りに移る。布留期の土壙，弥生中期の住居址などの調査の後，縄文晩期遺物包含層の調査に入った。縄文晩期についてはＣ区のような遺構は検出できなかったが，土器の集中部を数箇所確認した。

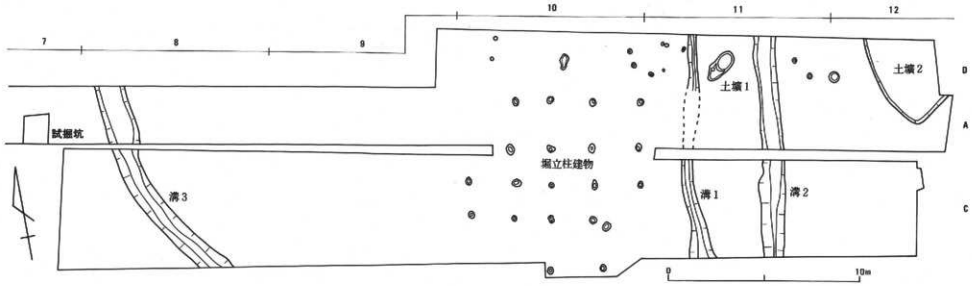
以下，調査の経過を略記しておく。

５月１～３日	表土削平およびＡ区埋め戻し。
５月４～10日	弥生包含層掘り下げおよび遺構調査。
５月10～16日	縄文晩期遺物包含層の掘り下げ。
５月16～18日	終了写真撮影，層序実測，埋め戻し。

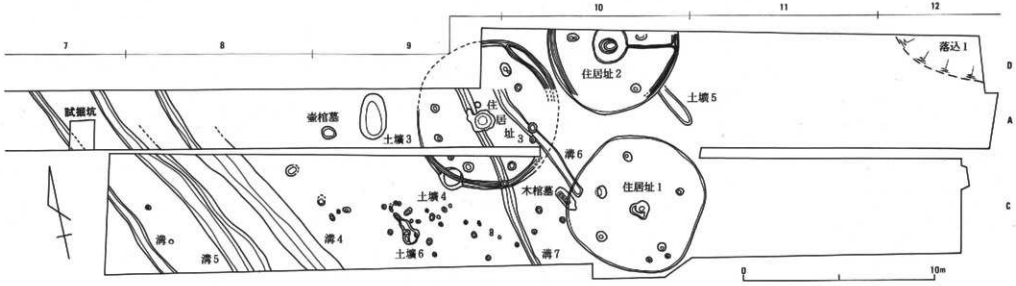
以上の経過をもって５月18日すべての調査を終了，器材を撤収，全調査を完了した。

３）Ｅ区の調査

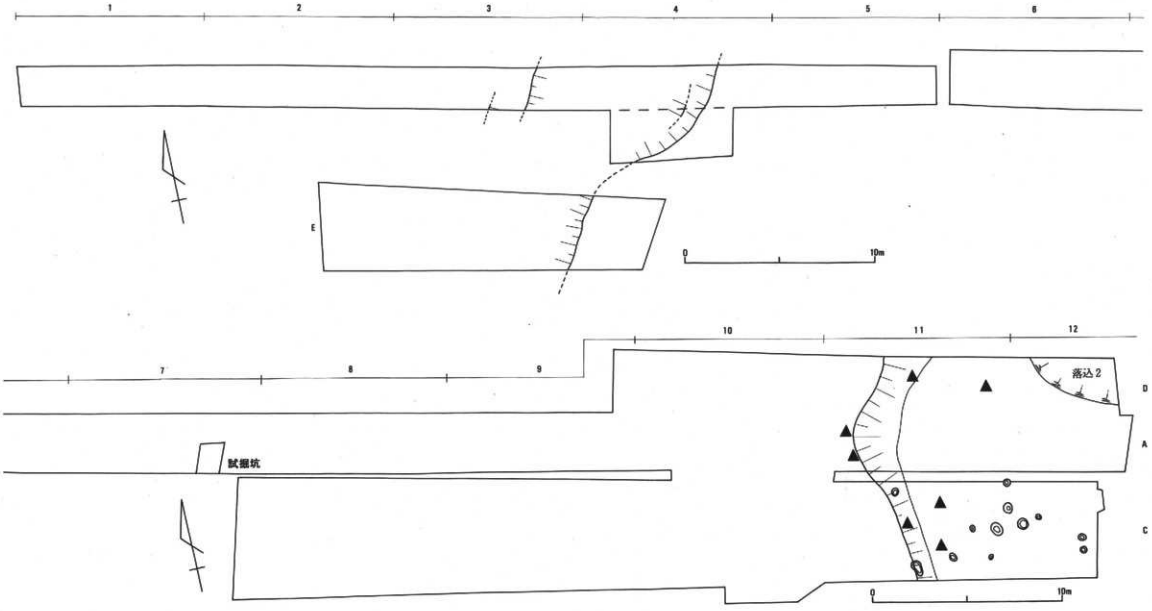
序章で記したように，Ｅ区の調査は伊丹市教育委員会が自ずから行った調査であり，本来はここで書くべきものではないが，調査の指導や遺物の整理を他と一括して行うことになっていたの



第10図　遺構全体図・1（弥生以降）



第11図　遺構全体図・2（弥生）



第12図　遺構全体図・3（縄文）（▲印：土器取り）

で，ここで別にとりあげ，その経過などを簡単に記しておく。

a．調査区の設定

E区は，A4区および拡張区で検出された自然流路状の落込み部分の南側への拡がりを確認し，そこに含まれる多量の縄文晩期後半の土器・石器などの遺物を回収することを目的として設定された。調査区はA2～4区の南側，東西約18m，南北約4m20cmを測る（第9図）。

b．調査の経過

E区は5月12日より開始。自然流路の埋土直上まで機械掘りを行い，以下手掘りに移る。そして，5月15日までに自然流路の落込みの拡がり状態を確認するとともに，遺物集中部分の掘り下げを終了した。なお，この調査には尼崎市立田能資料館の福井英治館長が参加され，御指導を得た。　（南）

第9図　A・C・D・E区トレンチ関係図

第３章　層序と遺構の概要

第１節　東地区・西地区の層序（第13～16・18図）

１）基本層序（第13図）

今回の調査の層序について，各々解説を加える前に本遺跡の基本層序（第13図）について説明しておく。なお，層の番号は第14～16図の層序図番号に一致する。

・第１・２・３層

表土層群。調査地全域にみられ，厚さ30～60cmである。

・第４層

下層の弥生中・後期の遺物包含層を一部切り，Ａ１～８区において厚さ20～40cmの堆積がある。これ以東での堆積は認められない。なお，第４層上面，第３層下面の高さはＡ１区で海抜６ｍ20cm，A12区で６ｍ30cmと東西はほぼ水平であるが，Ｃ11・12区南側では５ｍ90cm～６ｍ00cmとやや低くなっている。

・第５層

弥生中・後期の遺物包含層と該期の大方の遺構のベースとなる土層である。厚さ40～50cmの堆積があり，Ａ・Ｃ・D12区からＡ８区に分布する。Ａ８区以西はしだいに堆積が薄くなり，Ａ７区西側でほぼ消失する。そして，西地区では全く見ることができない。

なお，第５層上面では，弥生以降の遺構（布留式期の土壙，平安期の掘立柱建物跡，溝など）が検出できた。

・第６層

上層の第５層が消失するＡ７区西側より堆積が見え始め，第７層の堆積がないＡ６区西側以西では，縄文晩期遺物包含層とくに自然流路埋土およびその覆土の直上に位置する。

堆積の厚さは約10～50cmと地点によって差があるが，西へ向うほど厚く堆積している傾向がある。第６層上面ないし第５層下面の高さは，上層と同様にA12区・Ａ１区では５ｍ80cm，６ｍ00cmと東西方向はほぼ水平であるが，C11・12区南側では５ｍ50cmと低くなっている。

・第７層

一部の弥生中期の遺構のベース。部分的に色調，土質の異なった部分を含みながら，Ａ６区東部以東に分布する。厚さは20～40cm程度の堆積で，Ｃ８・９区南側では２層に分かれながら厚さ50cmに達する。そして，C11・12では再びその堆積は薄くなっている。

・第８層

縄文晩期後半の遺物包含層。Ａ６区中央付近より以東に20～50cmの厚さで堆積する。Ａ７～10区あたりがもっとも厚く堆積するが，東西両側へは次第に薄くなっていく。また，南側へも同様でＣ９・10あたりは30cm前後の堆積があるが，東西両側への堆積は薄い。

本層中からは，縄文晩期後半～終末に比定される刻目凸帯文土器，石器類などが出土した。

・第９層

縄文晩期のベースと思われるが，最上部に刻目凸帯文土器を含んでいる。後記する自然流路埋土部分を除いて，東西両地区に10～50cmの厚さで堆積するが，Ｃ８～10区付近で比較的堆積が薄い他は，地点によってかなりその厚さが違っている。一方，上面の高さをＡ区でみると，Ａ１～５区では５m60cm前後，Ａ６区付近から東へ向けてやや下がり，５m20～40cm程度となるが，全体を通して比較的凹凸は少ない。つまり，この層の堆積の厚さの違いは，下層の第10層上面の凹凸に起因するものであろう。

自然流路については次章で詳述するが，第９層とのかかわりが明確でない。一応第９層がこの自然流路のベースと考えている。したがって埋土は第８層に対応するものであるが，出土遺物の検討において東地区との関係づけに若干の問題を残している。

なお，C11・12区第９層上面において小土壙群を検出した。層位的には縄文晩期後半～終末期の遺構と思われた。

・第10層

本遺跡の縄文晩期以後の地形の基盤を形作る土層と思われる。第９層の堆積が薄い部分において一部確認した。これを東西方向の図(第18図)にしてみると，前記のように上面の凹凸が著るしいことがわかる。もっとも高い地点はC11・12区付近で海抜５m20cm前後，低い地点はＡ６～７区の４m50cm前後である。さらに西地区の自然流路の上端と思われる地点が一度高くなって，５m10cm前後を測る。

２）Ａ区南壁・Ｃ区南壁の層序(第４～６図)

Ａ区・Ｃ区の南壁の層序は下記のとおりである。なお第１～10層の層名と説明については基本層序図(第13図)と前項で記しているので省略する。また，自然流路の層序は次章で記す。

第１層
第２層 } 表土層群
第３層

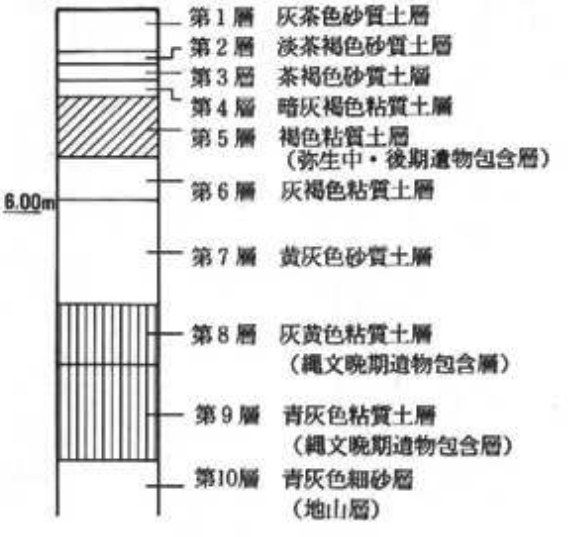
３ａ…茶褐色砂質土　鉄分を含む。

３ｂ…茶褐色砂質土　鉄分・マンガン分を含み，粘性が強い。

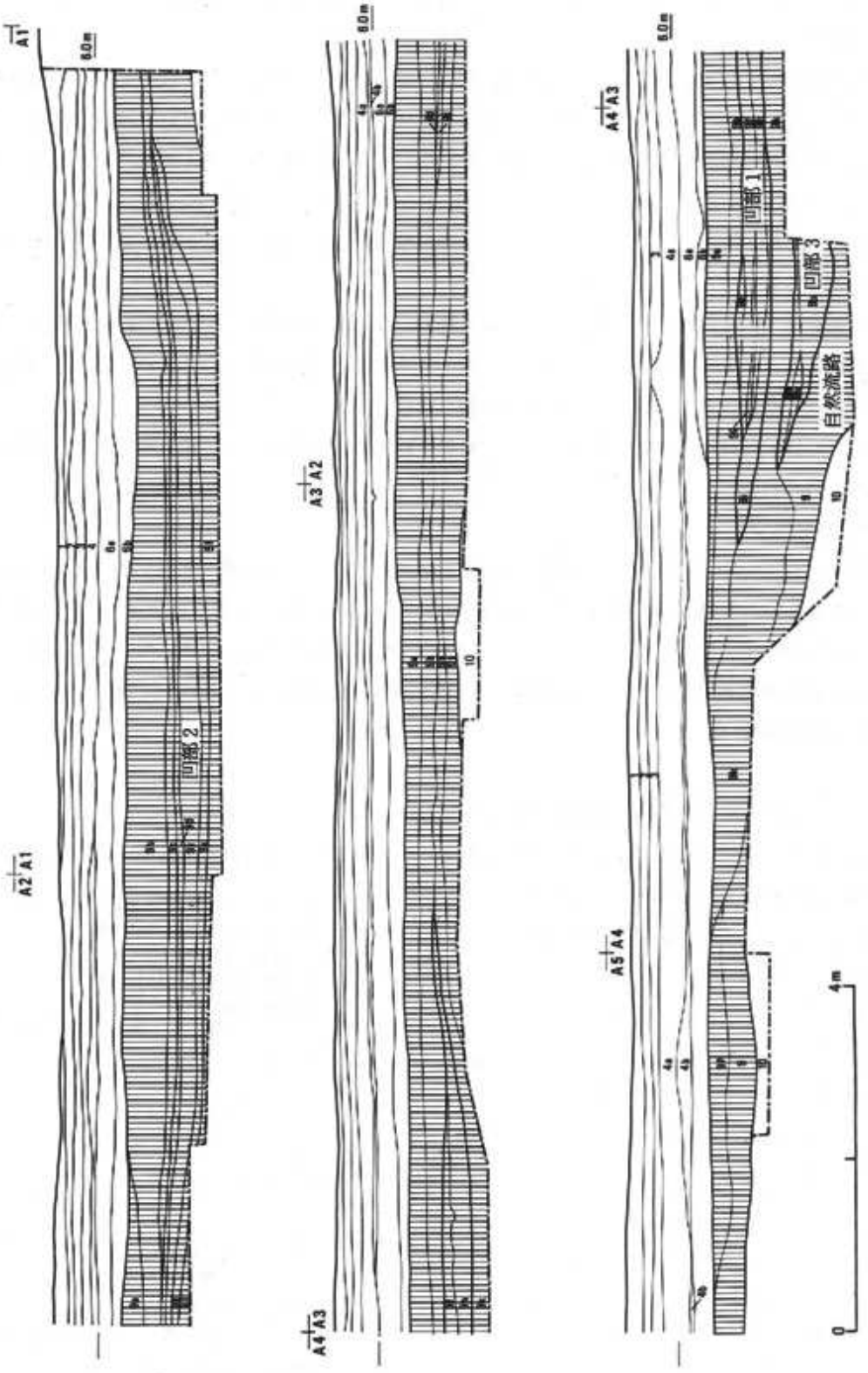
第４層

４ａ…暗灰褐色粘質土　マンガン分多い。

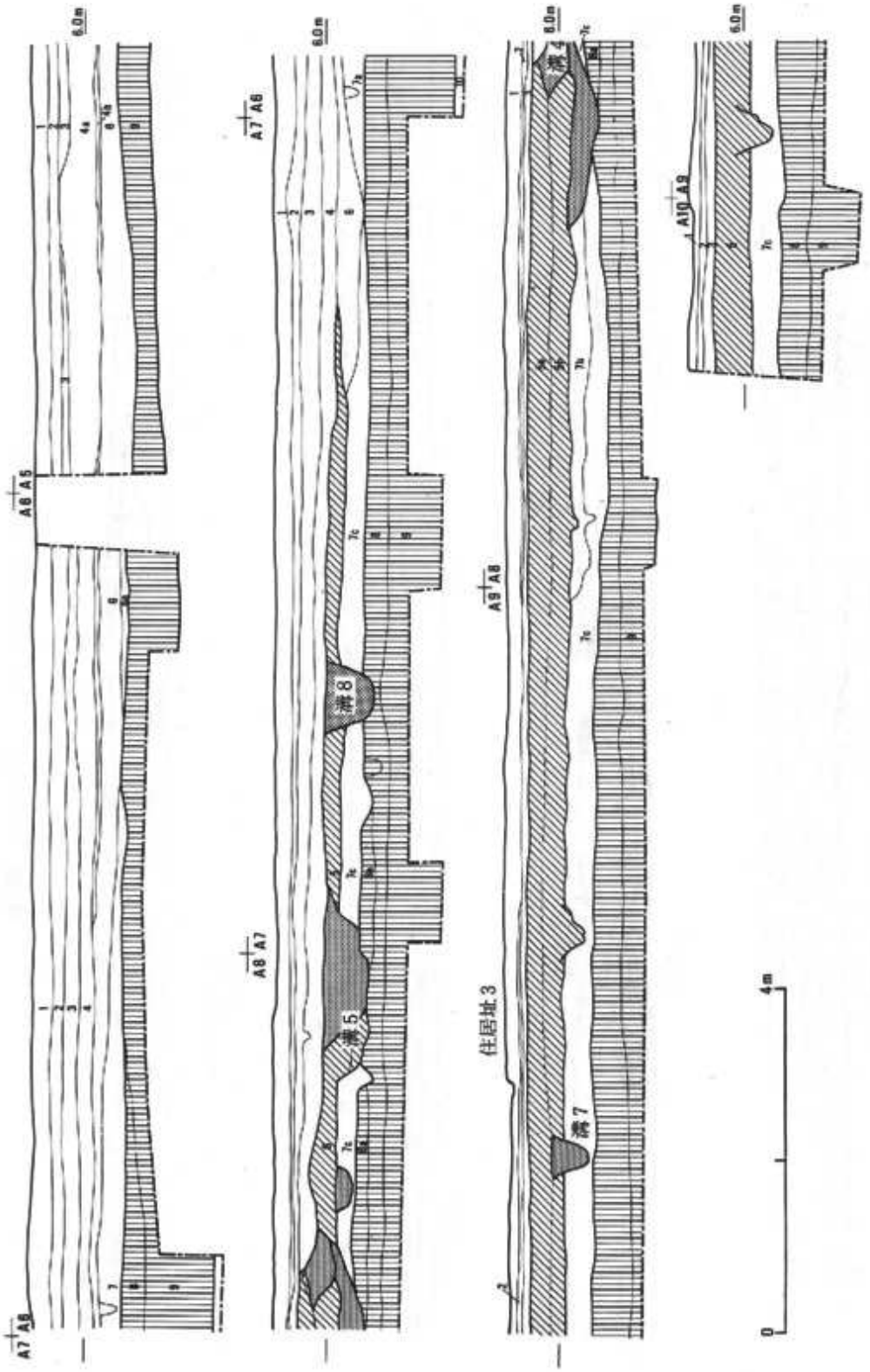
４ｂ…茶黄色砂土　鉄分が粒状に含ま



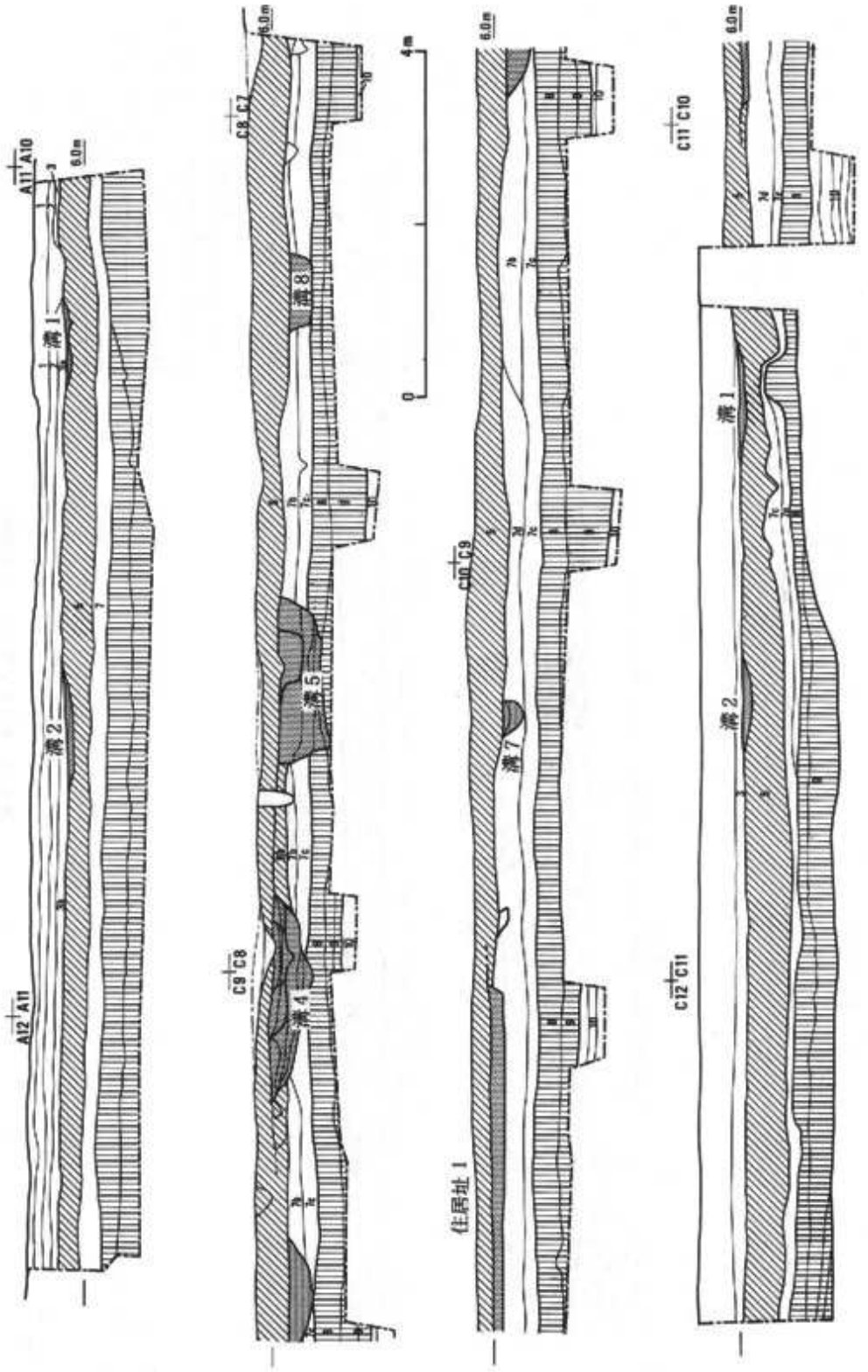
第13図　基本層序図



第14図　層序実測図・1（A区南壁）



第16図　層序実測図・2（A区南壁）



第16図　層序実測図・3（最上段はA区南壁，他はC区南壁）

れる。

第5層

5a…赤褐色砂土　弥生中・後期の遺物包含層。

5b…淡褐色粘質土　弥生中・後期の遺構の基盤層。

第6層

6a…灰褐色粘質土　鉄分が多く含まれる。

6b…暗灰褐色粘質土　6aより鉄分が少ない。

第7層

7a～7e…黄灰～灰黄色砂質土　色調や砂粒の大きさなどの違いで分離できるが，同一層と判断できる。マンガン分が目立つ。

第8層　縄文晩期後半～終末の遺物包含層。

第9層
第10層　} 縄文晩期以降の基盤層。

（南）

第2節　遺構の概要（第10～12図）

本節では第1節で説明した層序と関係づけながら，それぞれの遺構検出面での調査の概要と遺構の検出・分布状況について概説する。

1）弥生以降の遺構（第10図）

11A調査において，表土層排除の後，東西両地区において古墳～平安期にかけての土器類が若干採集されていたが，東地区A8区以東に赤褐色砂質土が拡がり，その上面に遺構群を検出，11B調査においても同様であった。

遺構は溝，土壙，柱穴状小土壙で溝3を除き，大半がA10～12に分布する。これらの遺構は布留式土器を含む2基の土壙と平安時代の掘立柱建物，これに付随する小土壙群および溝である。そして，時期不詳のものも多いが，おおまかに古墳期の遺構が西側に位置し，平安期の建物跡および溝が中央よりに位置する。なお，弥生中期以後から形成されていた東地区東北隅の落込1はこの段階ではすでに埋まっている。

2）弥生中・後期の遺構（第11図）

上記のA8以東に拡がった赤褐色砂質土は中・後期の遺物包含層であったが，その下層の褐色粘質土上面で遺構群を検出した。11A調査では住居址1，壺棺墓，土壙3，溝などを検出していたが，住居址3にいたっては中央土壙を，住居址2では竪穴の一部を検出し得たのみで，11B調査でようやく住居址であることがわかった。また，住居址3にからむ土壙4および溝7のほか，密接する住居址と併行する溝列の間に土壙6および小土壙群を検出した。なお時期的には弥生中

期後半～後期の遺構群である。なお，この段階には北東隅に落込みがあり，土器が集中して出土した。

この遺構群の基盤層の下層から弥生中期前半の遺構を検出した。木棺墓，溝6，土壙5である。木棺墓は11A調査区の南端で検出しており，南半が調査地外にあったため調査は11B調査で行った。上層に比べ遺構の分布域はA10区周辺に限られる。

弥生中・後期の遺構については上記のとおり東地区の中央～東側に分布しており，東地区でも西側および西地区では遺物包含層も確認できなかった。東西両地区の微地形の違いによるものであろうか。

3）縄文晩期の遺構（第12図）

11A調査の西地区A2～3区において，青灰色粘質土層から縄文晩期後半の刻目凸帯文土器が出土した。続いてA4・5区においても多くの土器類が出土した。この遺物包含層は炭化物を多く含んでおり，別の部分では植物遺体も確認できた。そして拡張区・E区の調査の結果この周辺は自然流路の落込みにあたり，その上端が東北から南西方向に位置し，西へ向かって下がっていく状況が確認できたが，反対側の立ち上がりは不明であった。なお，この土器群に弥生前期の壺の破片が伴出した。

一方，東地区においては，弥生期基盤層を掘り下げていく過程で，やはり凸帯文土器が出土した。特に，弥生期と同様に東地区中央から東側のみに分布する灰黄色粘質土からは，西地区と異なり，保存状態のよい凸帯文土器の集中部が数箇所みられた。そして，11B調査のC11・12区では10数基の土壙を検出した。これらには土器が含まれている土壙や炭化物が多く含まれる土壙もあったが，遺物の出土しない土壙が多く，また上部がかなり削平を受けていることもあり，土壙の性格は不明であった。

また，さらに下層の青灰色粘質土の上層からも同様に土器が出土し，西地区との層位的関連および上層との時期差の有無が問題となった。なお，D区北東隅の落込みを確認し，この落込みが弥生後期まで存続していることがわかった。（南）

第3節　B区の概要（第17・19図）

B区は前記のように東側水道工事部分の南北に細長い調査地である。この中に1m50cm四方のトレンチを6～9mおきに合計11箇所設置し，断面の観察を行った。トレンチ名は北より南へB1～B11とした。そのうちB8とB11は出水が激しく壁面が崩落し，断面実測を断念した。

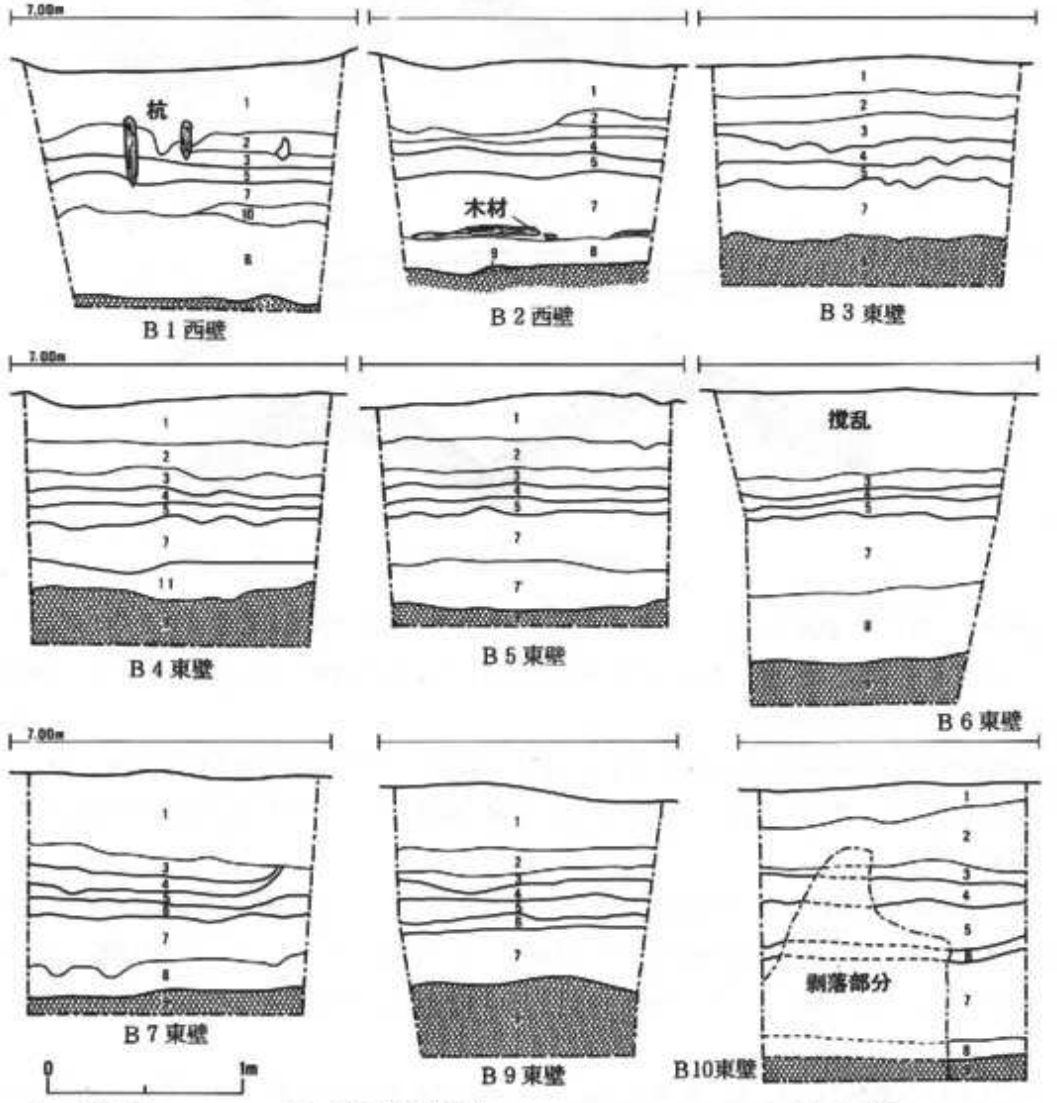
各トレンチにおいては，A・C・D地区で確認した縄文晩期の基盤層（青灰色細砂層）まで掘り下げることを目的とした。以下各層の説明を記す。

盛土は約30cmの厚さで全体を覆う。その下の2・3層は旧耕土と思われ，B1において立杭が検出された。部分的に畦畔状の高まりがみられるが明瞭でない。

4・5層は中世耕土層である。B7において畦畔が確認できる。これらの層はB区全面に分布しており，東地区の居住域に併行して，当地区では水田が広がっていたものと考えられる。

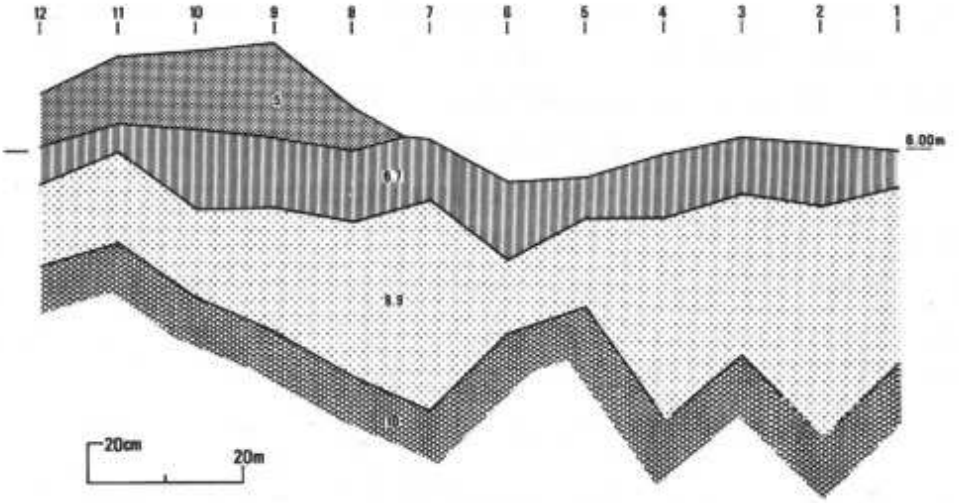
6層はB7以南にみられ，A区の第4層に対応する。A区ではこの層の直下に弥生中・後期の包含層が確認されたが，当地区では確認できず，該期の居住域は北東へは広がらないようである。

7・8層は青灰色系の粘質土で，A区の縄文晩期包含層に対応する。これらは，部分的に10層（暗青灰色粘質土），11層（淡灰色砂質土）などを挟むが，ゆるやかに南に傾斜しながら一様に堆積する。遺物は小トレンチであるためか，皆無であった。但しB11の青灰色粘質土層より弥生中期末の土器が出土している。B11は断面実測を断念しており，層位の確認ができないが，A12

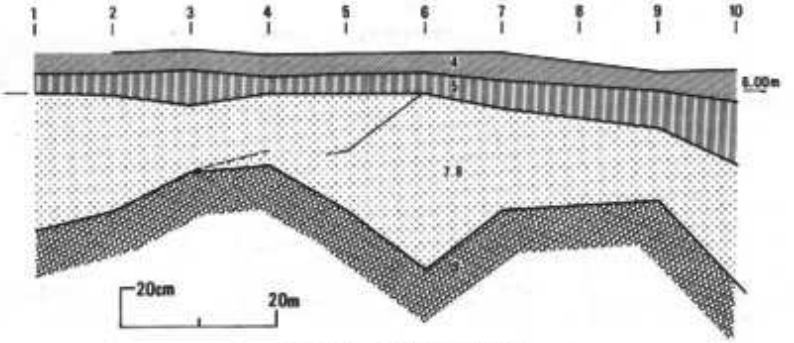


1　（耕土）
2　淡茶褐色砂質土
3　茶褐色砂質土
4　灰褐色粘質土
5　暗灰褐色粘質土
6　灰色砂質土
7　暗灰青色粘質土（粘性強を7′とする）
8　青灰色粘質土（砂分を若干含む）
9　青灰色砂土
10　暗青灰色粘質土
11　淡灰色砂質土
（B4南側で粘性が強い）

第17図　B区層序実測図



第18図　A区層序模式図



第19図　B区層序模式図

の落込1がB11まで継続するものとみるのが妥当であろう。遺物の説明は第5章第5節で触れる。

9層は縄文晩期の基盤層である。各トレンチにおいてその上面レベルに高低差があり，旧地形を反映しているものと思われる。

第19図に4～9層の高低模式図を示す。これによれば，9層はB3・B4付近で高さのピークを迎かえB6で一度大きく凹む。B7～B9では再び高さのピークがあり，B9以南再び凹部へと接続する。

今回調査区のA・B両区に挟まれた120m四方の区画内には，北西と南東を結ぶ対角線上に微高地が形成され，弥生時代の遺構がその上に存在するものと推定されている。A区の遺構もその延長線上にのるものと思われ，B7～B9の青灰色砂質土の高まりはその東端を示しているものであろう。

以上B区の調査の結果，縄文晩期包含層である青灰色粘質土が均質に分布すること，弥生時代の居住域が当地区までは広がらないこと，中世において水田域であったこと，が推定できる。いずれにしても小トレンチであるために上記事実の確認は困難である。縄文・弥生の周辺環境を確める上でも，今後面的な調査が望まれる。　（森下）

第４章　縄文文化の遺構と遺物

第１節　はじめに

本章では，縄文晩期の遺構・遺物について報告を行う。今回の調査では，本章までに記述したように，第８・９層ならびに土壙などから縄文晩期後半に比定される刻目凸帯文をもつ土器群およびそれに伴う石器類を検出した。そして，これらの遺構・遺物は，その検出・出土状態の違いから大きく２つに分けることができる。一つは西地区の自然流路とその埋土に含まれる土器・石器群であり，もう一つは東地区の第８・９層遺物包含層と土器溜り，ならびにC11・12区に検出した土壙群とその出土土器・石器群である。この両者の相違は遺構の概説のところでも記したように，立地条件の違いによるものである。つまり，調査地を西から東へと見てゆくと，自然流路が立地するような低湿地から自然堤防上の安定地へという微地形の変化を見てとることができるのであり，この変化に対応して遺構・遺物が出土しているのである。

したがって，遺構・遺物の分析については，この相違を認識して行う必要があろう。なお，遺物については，自然流路を中心とする西地区出土の遺物を西群，東地区出土の遺物を東群として扱う。（南）

縄文土器観察表　凡 例

1．この観察表は今回出土した縄文晩期刻目貼付凸帯文土器群のうち，微細片および不明品の一部を除き，口縁部と底部および胴部の一部について記述したものである。

2．出土地の関係から西群・東群に大別し，それぞれ深鉢形土器口縁部・胴部，底部，浅鉢形土器，壺形土器，その他の順にまとめた。また各々は胎土２種に分けた。

3．地区番号はA・C・D・E(地区番号なし)の各地区・地区番号を冠し，その後に土器番号を付した。なお，この番号が遺物番号と対応している。

4．層位の番号は，調査の層序番号である。ただし，E区は一括品であるので層位番号を除いた。

5．色調は，外面・内面のそれぞれで最も広範囲を占める色を記した。内外面同色の場合は一つを表記した。

6．焼成・胎土の項目のうち焼成についてはその程度を良好◎，やや軟○，軟△に分けた。また胎土については，素地土の粗密を密◎，やや粗○，粗△で表わした。

7．形態・技法の項目については器種・部位によって下記のような順序で記した。

—深鉢形土器・口縁部・胴部—

形態分類。法量。口縁部形態。凸帯形態<貼付位置分類・断面形(凸帯幅mm－高さmm)，凸帯上下面調整>。刻目形態<形分類(刻目幅mm－長さmm－個／cm)>。

器面調整。

※胴部の凸帯については下凸断面形とした。

—浅鉢形土器—

形態分類。法量。沈線形態<条数＋α条，沈線の形状，幅mm>。器面調整。

—底部—

形態分類。法量。器面調整。

なお，法量はcmである。

8．ススの付着，黒斑の有無，二次焼成など特記事項は備考にまとめた。

第2節　西地区の自然流路と遺物出土状態

(第12・14・20図，図版第25・26)

西地区の自然流路についてその形状ならびに検出状態・遺物出土状態について説明する。なお，土器・石器については第3・4節でまとめる。

1）自然流路

a．検出状況

A4区青灰色粘質土(第9層)上面において，西側への落込みの上端を検出した。そして，拡張区およびE区を設け精査したところ，これはA4区からE区東部にかけて北東から南西方向に位置する落込みの立ち上がり部分とわかった。この落込みは自然流路と認められるが，その幅・深さなど，全体の規模については不明である(第12図)。以下，層位についての説明を行い，その後，遺物出土状態を含めたこの自然流路の全体をまとめてみる。埋土中からは土器・石器が出土したほか，炭化物や植物遺体が多くみられる部分もあり，一部の最下層では，流木を含む自然遺物の堆積が認められた。

b．層　序

自然流路の埋土は下記のとおりである。層序の説明を加えながら，自然流路の形成の状況について概観してみる。なお，この層番号は第14～16図とも一致する。

・埋土最上層　自然流路をほぼ全面覆うように分布する。

9a：灰黄色粘質土…砂分やや多く，東方へ青味強い。

9b：灰青色粘質土…粘性強い。9iに比べ灰色味強い。

・凹部1埋土層　A3・4区にまたがるように幅約10m，厚さ約44cmの皿状で，埋土の中層9k

を基盤にして堆積する。

９ｅ：灰黒色粘質土…砂分やや多い。

９ｆ：暗灰青色粘質土…上下層に比べ青味強い。

９ｇ：暗灰色粘質土…粘性非常に強い。炭化物の細片を含む。

９ｈ：淡灰青色粘質土…炭化物を含むが，とくに西側下部に炭化物が集中する。

９ｉ：暗灰茶色粘質土…砂分やや多く，炭化物を多量に含む。刻目凸帯文土器片および石器類(おもに石棒片)を多く含む。

・凹部２埋土層　Ａ２からＡ１区に幅15.2m，厚さ約40cmで皿状に堆積する。凹部１と同様に埋土中層９ｋを基盤とする。

９ｃ：淡青灰色粘質土…炭化物の細片が部分的に帯状に堆積する。粘性強い。

９ｄ：暗青灰色粘質土…炭化物の微細片を全体に含む。

９ｊ：淡灰黒色粘質土

・埋土中層　凹部１・２の基盤層。全体に分布するが，東側では第９層を切るように堆積が始まり，68cm～８cmと東側で厚く，西側で薄い。とくにＡ１区西端でほぼ消滅している。

９ｋ：灰黒色粘質土…全体に炭化物の微細片を含むが，東方へ行くほどその集中度は少なくなる。

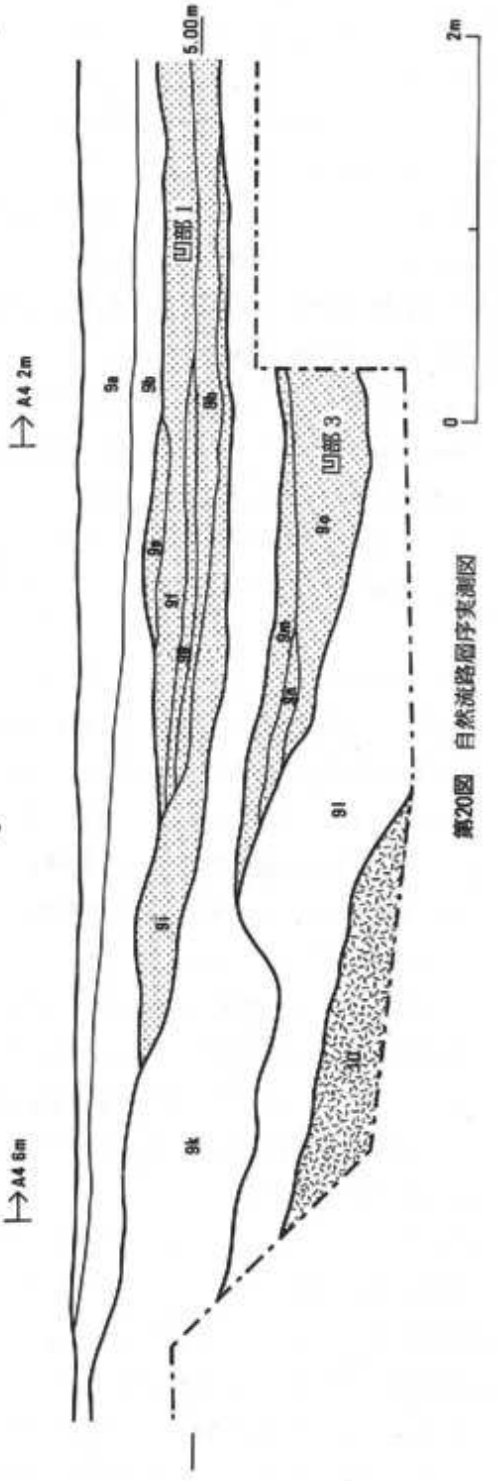
・凹部３埋土層　凹部１のほぼ真下，Ａ４区中央付近から埋土下層９１を基盤に，西に向かって皿状の堆積が始まる。しかし，西半は未調査のため全容は不明である。厚さ約44cm。

９ｍ：暗灰色砂層…微粒砂が主体。

９ｎ：黒灰色粘質土…炭化物を多く含む。

９ｏ：茶褐色粘質土…炭化物多く，粘性強い。流木などの自然遺物の集積残存が顕著である。

・埋土最下層　確認し得た範囲において，自然流路の基盤層10の直上に位置する。確認できる厚さ



第20図　自然流路層序実測図

は約14～60cm。

9 l ：青灰色粘質土

なお,これについて下記の点を明記したい。

A 4区中央付近の埋土最下層については，A 1～3区の埋土最下層との連がりを確認できなかった。とくにこの範囲の土層は自然流路以東に広く分布する第9層と非常に似ているため，調査段階では第9層として捉えていた。しかし，この土層が第9層を切って位置していた可能性も全く否定はできない。この点は自然流路の形成期との関係において非常に重要な点であるが，今回の調査においてはその判断を保留したい。

・自然流路基盤層　本遺跡の縄文晩期の基盤層でもある。

10：青灰色砂層…微粒砂を主体。

A 4区東側とA 3区西側に落込みの両肩が確認できる。この落込みの幅は約14mで両肩の高さは海抜5m前後である。さらに，東側の落ちはA 4区中央付近でさらに段をもって落込んでいる。この部分の高さは海抜4m前後を測る。

さらにA 3・2区境界付近とA 1区西端に落込みの両肩と思われる部分が認められた。前者のように明確ではないが，幅は約19m，両肩の高さは約5mと前者と同様である。

2）まとめ

以上の層序の状況をもとに，この自然流路の形成から埋没までをまとめておく。

この自然流路は第10層上面の段階で少なくとも2箇所の凹部をもっていたようである。その深さはどちらも明らかではないが，東側の落込みの状態から，さらに50～100cm深いものと思われる。この基盤層の凹部地形はその後も影響し，上層の凹部1・3もほぼ同じ位置に存在している。また，西側についても上層に凹部2が位置しており同様である。そして,最上層の9 a・bによってこの凹部は埋まっている。

この上・中・下3段階の凹部のうち，中・上の凹部(凹部1・3)の堆積をみると，両者とも炭化物を多量に含む砂層や，また，茶色味を帯びる(植物遺体を含んでいるためか)層が互層になっている。とくに凹部1の9 i 暗灰茶色粘質土からは縄文晩期後半期の遺物が出土しており，この凹部が形成される段階では，比較的水の動きがあるものの，周囲の陸地化が進み，人の開発が行われていたと考えられる。また，凹部3の最下層において，流木などが集積していることも注目できる。一方，これらの凹部を覆う土層は，同様に3段階に分かれる。基盤層を覆う9 l，中段階を覆う9 kと，そして，最上部を覆う最上層9 a・bである。とくに，9 l・9 kは，一部炭化物を含むものの，青灰～灰色を呈する粘質土で全体に均質である。これらはおそらく，停留する水の下でゆっくり堆積していったものと思われる。

以上のように，自然流路の形成，埋没について，少なくとも3段階に分けうることがわかった。しかし，上段階を除くと，中・下段階に遺物は伴なわず，その時期について明確にすることはできなかった。また，前記のように，その形成段階についての層位的な検討も困難であり，いずれ

も今後の課題としたい。　（南）

第3節　東地区の遺構と遺物出土状態

（第12・21～23図，第3表，図版第27～31）

1）東地区土壙群

a．土壙群周辺の状況

土壙群の記述の前に，土壙周辺の微地形・遺物の出土状態について触れておく。

この周辺は自然堤防上の安定地と思われ，D・A・C 9～11区を中心に比較的良好な状態で遺物が出土した。この中には同一個体の土器や残存状態の良好な土器が集中して出土する場合があった。その下部に土壙などの遺構を伴なう場合を除いて，これらの土器集中部を土器溜りとして捉えた[1)]。

そして，D・A・C11区のほぼ中央に南北方向で東へ緩やかに下がる落込みを検出した。この落込みの高低差は約10～30cm程度で，北へ行くほど大きい。この落込みの形成については，周辺が自然堤防上の安定地から西へ向かって下がっていく地点に位置しているところから，小河川や洪水の流れによって削平された結果によるものであろう。ちなみに，D区北東隅に位置する落込2は，同様な流路の凹部の一部であると思われるが，両者の関連は不明である。なお，この落込2の上層では弥生中・後期の落込3がほぼ同位置にある。

b．検出状況

C11・12区の第8・9層，東側への落込みより東側において，12基の土壙を検出した（第21図・第3表）。これらの土壙の検出状況は，第8層を掘り下げている段階で，その下部と第9層上面とでそれぞれ確認した。しかし，もともと同一面で存在していたが，調査方法の問題で検出状態が異なった可能性もある。しかし，上・下層両者の土壙群の底部の高さをみると，それぞれがよく似た値であることや，両グループの分布が規則的であることから，上・下層2段階に分けうると考える。ただし，その検出面が第8・9層に含まれることは確かであったが，それを明確に特定することはできなかった。

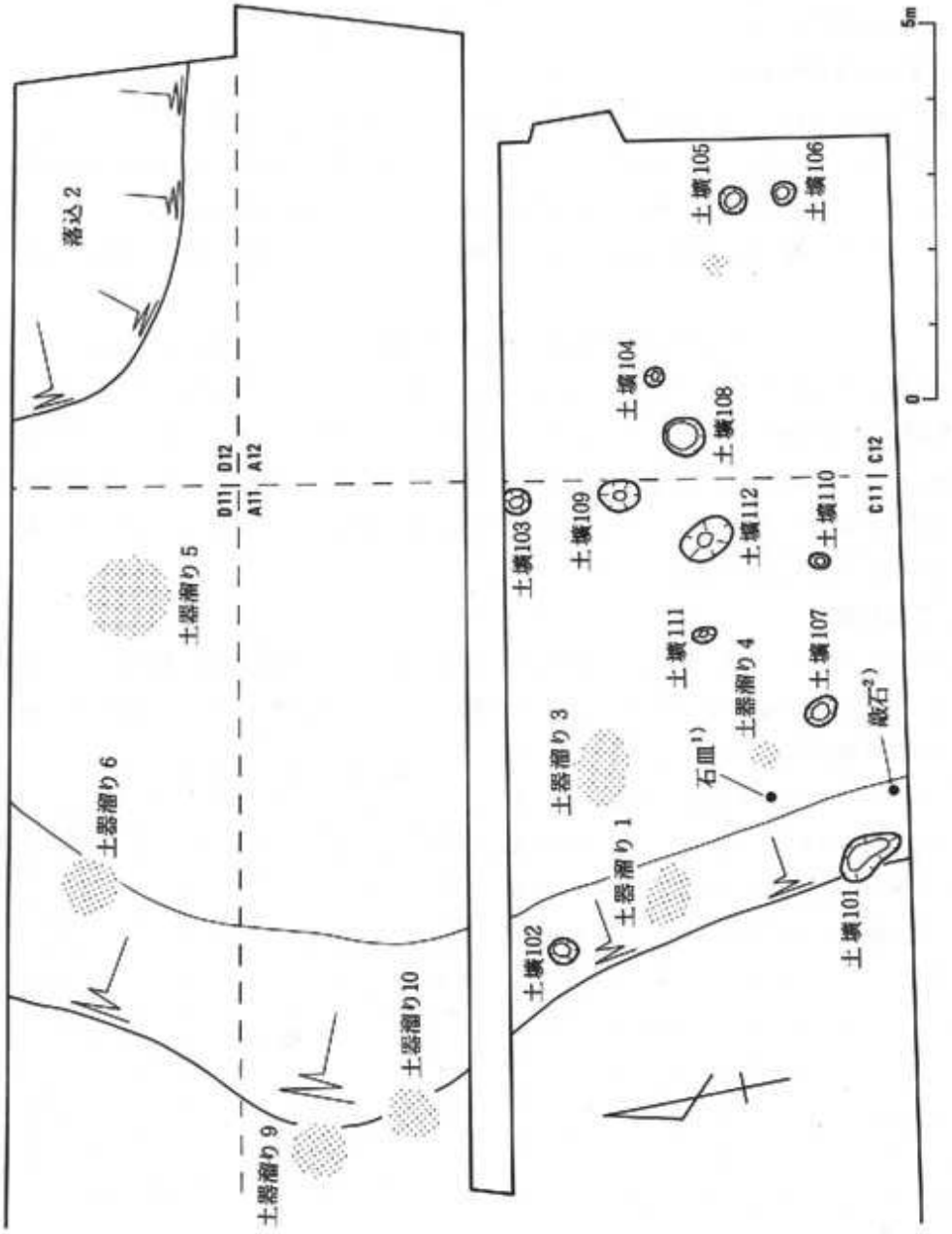
以上の点から，この土壙群を上層土壙群と下層土壙群に分け，それぞれ説明を行う。

第3表　東地区土壙一覧表（縄文）
［単位：cm，（ ）内：標高m］

土壙名	地	区	平面形	長さ	幅	深さ（標高）
101	C	11	不定形	88	50	20（5.454）
102	C	11	円　形	40	33	9（5.528）
103	C	11	円　形	35	35	7（5.575）
104	C	12	円　形	25	22	21（5.504）
105	C	12	円　形	38	35	23（5.472）
106	C	12	円　形	35	30	28（5.423）
107	C	11	楕円形	43	33	8（5.341）
108	C	12	円　形	55	54	16（5.259）
109	C	11	楕円形	54	40	9（5.282）
110	C	11	楕円形	23	19	13（5.281）
111	C	11	楕円形	30	19	8（5.335）
112	C	11	楕円形	67	46	15（5.271）

c．上層土壙群

土壙101～106。　東への落込み肩部からC11・12区の北～東部にかけて，下層土壙群をとり囲むように6基の土壙が位置する。平面不定形の土壙101を除いて他は直径20～40cmの円形の土壙である。検出面の高さは5 m60～70cmで，ほぼ第8層の上面にあたると思われる。埋土は暗青灰


落込2
D11
D12
A11
A12
土器溜り5
土器溜り6
土器溜り9
土器溜り10
土器溜り3
土器溜り1
土器溜り4
土器溜り7
土器溜り8
土器溜り11
土器溜り12
土器溜り13
土器溜り14
土器溜り15
土器溜り16
土器溜り17
土器溜り18
土器溜り19
土器溜り20
土器溜り21
土器溜り22
土器溜り23
土器溜り24
土器溜り25
土器溜り26
土器溜り27
土器溜り28
土器溜り29
土器溜り30
土器溜り31
土器溜り32
土器溜り33
土器溜り34
土器溜り35
土器溜り36
土器溜り37
土器溜り38
土器溜り39
土器溜り40
土器溜り41
土器溜り42
土器溜り43
土器溜り44
土器溜り45
土器溜り46
土器溜り47
土器溜り48
土器溜り49
土器溜り50

色で炭化物を含む例が多い。

d．下層土壙群

土壙107～112。上層土壙群に囲まれるように，C11・12区境界付近を中心に6基の土壙が位置する。平面楕円形の例が多く，大きさも長さ23～67cmと差がある。検出面の高さは5m40cm前後で，第9層上面にあたる。埋土は上層と同様に暗灰青色粘質土で炭化物を多く含む。

土壙107から土器底部2点(第38図31・32)，土壙108から土器片が出土した他，土壙112の埋土から水洗選別によって炭化米2粒が出土した 。なお，これについては下記にまとめておく。

2）土壙埋土の水洗選別

a．土壙112出土の炭化米

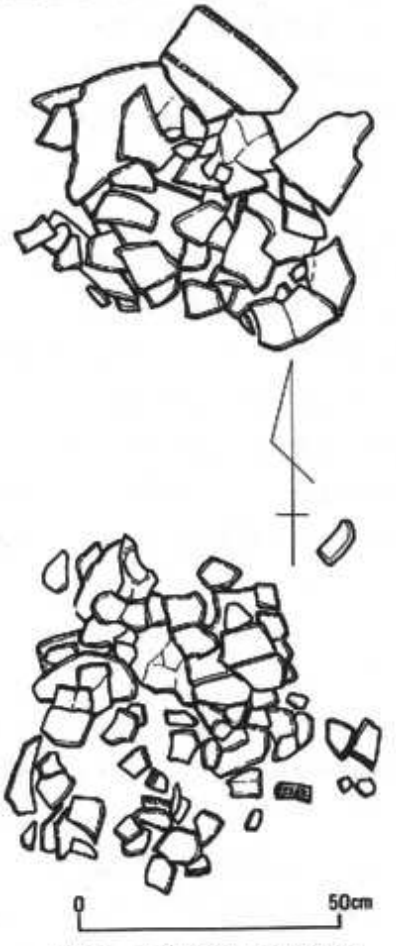
東地区土壙群のうち土壙112の埋土の水洗選別作業によって，2粒の炭化米と可能性のある資料2粒，計4粒を検出した[2](図版第58下5)。

これらの詳細については別の機会に譲らざるを得ない状態であるが，水洗選別の作業内容などについて報告しておく。

b．水洗選別の方法

縄文晩期土壙群，自然流路および弥生中～後期の一部の土壙の埋土には，炭化物・自然遺物の残存が認められた。そして，とくにその状態が良好な例に限って埋土を採取し，水洗選別を行い，内容物の調査を企図した。

しかし，調査終了後の種々の事情によってその作業を行えず，資料についてはそのままの状態で保存していた。そして今回の報告書をまとめるにあたり，もっとも炭化物等の残存状態のよい縄文晩期の一部の土壙と自然流路の埋土の一部を対称に下記の方法による水洗選別を行った。



第22図　土器溜り9・10実測図
上：9，下：10

（1）埋土に水を加え，水面に浮く資料を採取。

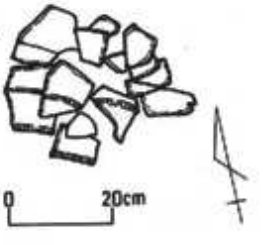
（2）小石などが含まれる場合，4mm目フルイに通しこれを除去する。

（3）埋土を2mm目フルイに通し，残留物の選別を行う。

（4）さらに埋土を1mm目フルイに通し，残留物の選別を行う。なお，この段階でフルイを通過した埋土については除外した。

以上の方法でもって選別した炭化物等は，その形状・種類によって分別したが，それらの同定作業については未了である。別の機会にその報告を行いたい。

（松村）



第23図
土器溜り6実測図

3）土器溜り

遺物包含層中より7箇所について土器溜り（第21～23図）として取り上げた。このうちもっともまとまりの良い土器溜り9・10について説明を加える。なお，土器については後に譲る。

a．土器溜り9（第22図上）

A11区の東側への落込みの肩部で検出した。ほぼ完形の胎土A深鉢形土器（第32図2）が，この傾斜に沿うようにまとまって出土した。土器の大きさからみて，土器棺であった可能性が高い。

b．土器溜り10（第22図下）

土器溜り9の南側にほぼ同じような状態で出土した。底部を欠く胎土B深鉢形土器（第35図）で，土器溜り9と同様に土器棺として用いられていたものか。

4）まとめ

以上の結果を踏まえて，土壙群の性格について若干まとめておく。前記のようにこれらの土壙群が上・下層2段階に分かれ，その分布状態をみると，下層土壙群を中心にして周囲に上層土壙群が位置している。さらに，土器溜りもこの外周部に分布する。また，後節で説明する石器についても，C11区で比較的接近して出土した石皿・敲石をはじめ，いくつかの石器の出土をみた。また，土壙内から炭化米が出土したことも注目できる。このような状況は，この周辺が立地的に比較的安定している東地区の中でも特に集落と関係の深い地域であるといえる。なお，この点については，土器類の検討を行う時に再び触れることにする。（南）

第4節　土　器（第24～40図，第4～7表，図版第37～46）

本節では，東西両地区より出土した縄文晩期の土器について説明を加える。なお，まず土器の分類に関する記述を行ってから，西群・東群の順でそれぞれ解説することにする。

1）土器の分類（第24図）

今回出土した縄文土器は，すべて縄文晩期後半に比定される刻目凸帯文土器である。当該期の土器の器種構成は，縄文土器の組成において主体をなす深鉢形土器と浅鉢形土器，それにわずかな壷形土器を加えたものである。そして，今回の調査でも同様の器種が認められている。

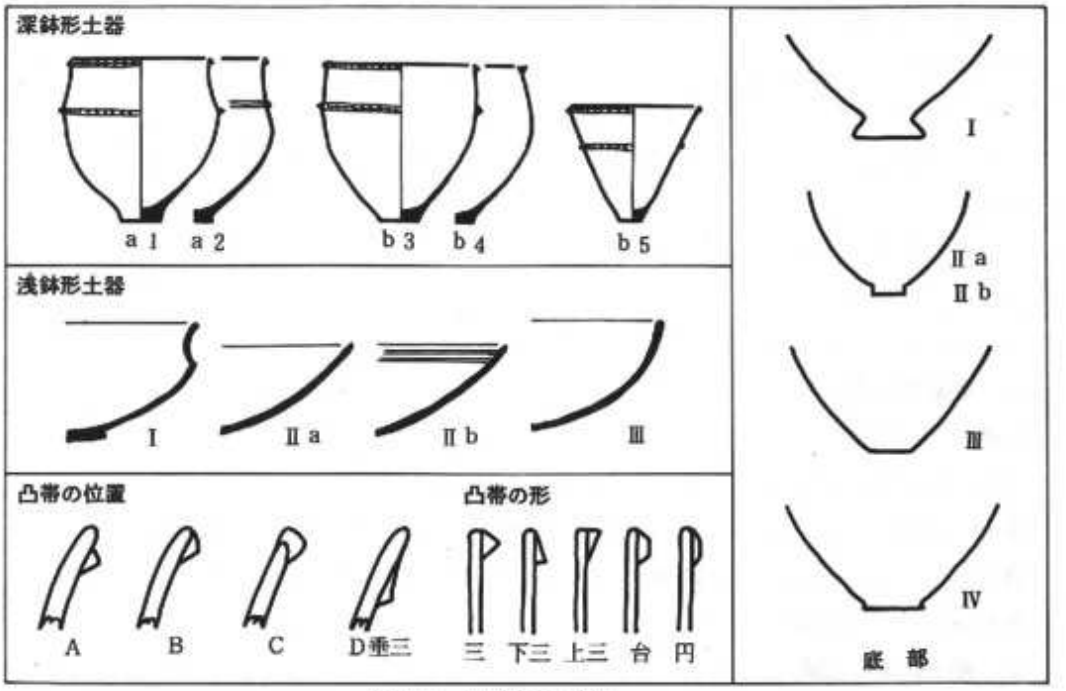
以下，それぞれの器種について器形その他によって第24図のように分類を行った。なお，底部についてもその形態によって分類している。

a．深鉢形土器の分類

・器形による分類

口縁部のみに凸帯を貼付けるⅠ類と胴部にも凸帯を貼付けるⅡ類に分け，さらにそれぞれを器形によって下記のごとく分類した。

a 1類…頸部で外反，胴部との境界付近で角度をもって屈曲するもの。



第24図　土器分類模式図

a 2 類…胴部から頸部にかけてS字状にゆるやかな屈曲部をもつ。胴部最大径付近より上に胴部凸帯をもつ例が多く，全体にずんぐりしている。

b 3 類…胴部付近に最大径があり，内湾気味にゆるやかな曲線を描きながら立ち上がるもの。

b 4 類…b 3 類の同様の立ち上がりから，口縁部にかけて強く内湾するもの。

b 5 類…口縁部に向かって底部から直線的に外向していくもの。

・口縁部凸帯の位置による分類

さらに，口縁部凸帯の位置による分類を行った。これは，この時期の土器編年が，家根祥多氏の口縁部凸帯の位置と形態による分類をもとに行った一連の分析によって，滋賀里Ⅳ→船橋→長原という順列が呈示されている(家根1983)のを踏えたからである。

以下のように分類する。

A…口縁端部より下がって凸帯を貼付けるもの。

B…口縁端部に接っして凸帯を貼付けるもの。

C…口縁端部にかぶるように凸帯を貼付けるもの。

D…口縁端に接するが，下方に長く垂れ下がるの凸帯を貼付けるもの。

・胴部の分類

基本的にⅡ類ないしⅠ類のうち，器形の判別が可能な胴・頸部の境界の明らかなものを対称とした。従って分類名は器形の分類である。

b．浅鉢形土器の分類

・形態による分類

Ⅰ類…頸部が屈曲するもの。

Ⅱ類…皿形のもの。なお，内面に沈線があるものをⅡa，ないものをⅡbとした。

Ⅲ類…椀形のもの

c．壺形土器の分類

・大きさによる分類

A…大形品　　B…小形品

d．底部の分類

・形態による分類

Ⅰ類…底部外縁が外へ張り出し，逆台形状によるもの。

Ⅱ類…外周面が垂直で高いもの。ただし，小形品をⅡa，大形品をⅡbとする。

Ⅲ類…ほとんど外周がなく，底面から直に内湾気味に立ち上がってゆくもの。

Ⅳ類…低く広い底部をもつもの。

e．胎土による分類

出土土器群を検討する中でもっとも特徴的な点は，いわゆる『生駒西麓産の胎土』をもつ土器群が占める率が非常に高いということであった。したがって，この胎土に関して，生駒系のものを胎土B，それ以外のものを胎土Aとして分類し検討を加える。なお，生駒系の胎土についての選別については肉眼観察によったが，そのいくつかについては胎土分析を行った。これについては第7章に報告している。

2）西群の土器（第25～31図，第4～7表）

西群はA1～5区およびE区より出土したもので，自然流路の凹部1ないし凹部2に含まれていた。したがって層位的検討から一括資料として取り扱う。そして出土総量は遺物用コンテナ約20箱であったが，このうち分析の対称とする土器は第4表のとおりである。

第4表　器種構成表（縄文）（ゴヂック数字：%）

器種	地区	西群									東群								
	部位	口縁部			胴部			底部			口縁部			胴部			底部		
	胎土	A	B	小計	A	B	小計	A	B	小計	A	B	小計	A	B	小計	A	B	小計
深鉢		41	61	102 **86.5**	25	66	91	9	33	42	12	27	39 **90.8**	9	19	28	5	16	21
浅鉢		13	0	13 **11.0**	3	0	3				1	1	2 **4.6**	3	0	3			
壺		0	3	3 **2.5**							1	1	2 **4.6**	0	2	2			
不明					5	0	5												
		54 **45.8**	64 **54.2**	118 **100**	33	66	99	9	33	42	14 **32.6**	29 **67.4**	43 **100**	12	21	33	5	16	21

a．器種構成と胎土構成

分析する口縁部は118点を数える。これによる器種構成(第4表)は，深鉢形土器86.5%，浅鉢形土器11.0%，壺形土器2.5%となる。

さらに胎土の分類を加えてみる。深鉢形土器では胎土A・Bの比率がほぼ4：6になる。これは胎土Bの比率が非常に高いといえる。一方，浅鉢形土器と壺形土器についてみると，浅鉢がすべて胎土Aにあるのに対して，壺ではわずか3点ではあるが，すべて胎土Bであり注目できる。

なお，胴部については，とくに深鉢形土器の口縁部の率に比べるとさらに胎土Aの率が低下している。この胴部の抽出が凸帯のある資料と胴部に調整変化がみられる資料にとどめており，その際の見落しのせいかもしれない。また，底部についても27.2%と低下している。

以下，深鉢形土器から順に具体的な説明を行う。

b．深鉢形土器（第25～30図，第5表）

口縁部凸帯貼付け位置による分類および胴部を含めた器形分類を胎土A・Bそれぞれに行い分析した。

◎胎土A深鉢形土器群

―口縁部凸帯貼付け位置による分類―

・口縁凸A類(第25図，1～19)　19点と本群中の約半数を占める。1・2は口縁端に刻目があり滋賀里Ⅳに含まれる。6も口縁端に線状の刻目が施されていた可能性がある。

　大方が外反する口縁部をもつが，一部内湾気味の例もある(3・15・19)。口縁端部の処理は丸く収めるものが多いが，面取りするもの(1～3)，尖るもの(4・7・18)もある。なお，15・16・18は小形品であろう。

・口縁凸B類(20～34)　16点，39.0%を占めるが細片・詳細不明品が多い。口縁端は尖るものがほとんどで，外反するが，内湾するものも多く小形品かもしれない(26～29)。また，30は断面観察すると貼付け凸帯ではなく，口縁より一段下の粘土紐の上端を外へ出してこれを凸帯にしたもののように思える。

・口縁凸C類(なし)

・口縁凸D類(35～40)　本群をもっとも特徴づける類である。いずれも強く外反する口縁部と口縁内面の強い横ナデ，下方に押し拡げた垂れ下り三角形の凸帯をもっている。39は，一条凸帯でゆるやかに屈曲するⅠa2類に含まれるものである。

―器形による分類―

・Ⅰa2類(第25図39)　1点。

・Ⅱa1類(第30図35・36)　3点。

・Ⅱa2類(29～34・37)　7点。32・33およびa1の35の3点のように強い横ナデによる下三角形の凸帯をもつ深鉢の口縁は凸Dになると思われる。その他のものについてはいずれもずんぐりした形になるものであろう。また，31・37には頸部に沈線による文様が施されていたようだ。

◎胎土B深鉢形土器群

—口縁部凸帯貼付け位置による分類—

・口縁凸A類(第26図1・第28図1～6) 7点。第26図1は，比較的丁寧に調整された口縁端からわずかに下がった位置に断面三角形の凸帯が巡る。屈曲部がS字状のⅡa2類である。器高に対して胴径が大きく全体にずんぐりした感がある。また，器壁も厚い。その他は細片が多いが，大方の口縁端は丸～尖。刻目のない小形品が目立つ(第28図4～6)。

・口縁凸B類(第26図2・3，第27図1・2，第28図7～26・28～31・33・34・36～38・40～51・53・54) 61点中47点，77.0%と主体を占める。このうち第28図7・8・20～22・25・48が小形品と思われる。

器形のわかるもののうち 第26図2・3は比較的大きく外反する口縁をもち屈曲部も明瞭である。他に外反する口縁をもつものが18点ある。一方，第27図1・2は尖った口縁端部をもち，頸部は内湾からゆるやかに直口し，口縁部でわずかに外反する。このように内湾気味にゆるやかに立ち上がってきた口縁部がわずかに外反ないし内傾する例は多く25点を数える。このうち2と第28図34が外面上半に縦方向のナデ調整(板状工具)を行う。

・口縁凸C類(第27図3，第28図27・32・35・39・52・55) 7点11.5%を占める。第27図3はゆるやかな屈曲部とほぼ直立する口縁をもつ。すべて内湾から直口するタイプで，刻目のないものが3点ある(39・52・55)。

・口縁凸D類(なし)

—器形による分類—

・Ⅰa2類(第29図1) 沈線が巡る。

・Ⅱa1類(第26図3，第29図6・12) 5点。

・Ⅱa2類(第26図1，第27図1～3，第29図3～5・7～9・19～21・23～26) 12点。

・ⅡⅠb3～4類(第29図22・27・28，第30図1～3) 7点。

c．浅鉢形土器(第40図，第6表)

口縁部13点，胴部3点の計16点出土した。すべて胎土Aである。形態によって以下に分類した。

・Ⅰ類(第40図11・12・14・15) 屈曲部に沈線をもつ胴部片2点を含め4点出土した。このうち11は口縁外面真下に沈線が巡る。

・Ⅱ類(1～9) 内面に沈線のあるもの5点(1～5)と無文のもの4点(6～9)，計9点出土した。

・Ⅲ類(10・13) 10は細片のため明確ではないが椀形を呈するようだ。13は浮線文系の浅鉢である。

d．壷形土器(第28図，第6表)

口縁部が3点ある(第28図9・56・57)。いずれも胎土Bである。9は口径10cm前後の小形壷である。なお，後記するような凸帯をもつ壷については，破片の場合深鉢の口縁部との分離が難かしい。したがって深鉢としているものの中に壷が含まれている可能性は高い。

9は口径10cm前後の小形壺であろうか。56・57は大形壺と思われるが，器面の荒れが著るしく詳細は不明である。また，第40図16は小形壺の肩部の可能性もある。20は凸帯文土器と伴出した弥生式土器である。これについては後節で述べる。

e．不明土器（第40図）

3点ある(第40図17～19)。いずれも沈線をもつ。17は壺形土器の頸部であろうか，三条の沈線が併行する。19は四条の沈線があるが不揃いである。18は沈線が交錯する。

f．底　部（第31図，第7表）

形態と胎土A・Bによって以下のように分類した。

・胎土AⅡb類(第31図33)　1点のみ。

・胎土AⅢ類(36)　1点。底面近くまで横方向のケズリで調整。

・胎土AⅣ類(32・34・35・37～39)　7点あり，本群中77.8%を占める。このうち38・39は内外面丁寧なミガキで調整されており浅鉢の底部と思われる。34・38を典型とする。

・胎土BⅠ類(1・2・3・13・14・16・19・21・22・24・26)　12点あり，本群中の36.3%を占め，Ⅱb類とともに主体をなす。13・26はこの類の典型である。

・胎土BⅡa類(4・5・9・20)　4点ある。いずれも小さい底部からほぼ直に立ち上がる胴部をもつ。

・胎土BⅡb類(6～8・10～12・15・18・23・25・30・31)　13点あり39.4%を占める。23・31をこの類の典型とする。このうち6～8は小形品の底部と思われ，Ⅱa類とすべきものかもしれない。

・胎土BⅣ類(17・27～29)　4点のみである。

3）東群の土器　（第32～40図，第4～7表）

東群はA6～12区，C・D区の第8・9層から出土したものである。総量は遺物用コンテナ約10箱であるが，今回分析の対称とする土器は第4表のとおりである。

a．器種構成と胎土構成

分析する資料のうち口縁部43点による器種構成は，深鉢形土器90.7%，浅鉢形土器4.7%，壺形土器4.7%となる。

また，胎土A・Bの比率については，口縁部で胎土A14点32.5%，胎土B29点67.5%となり，西群の4：6よりもさらに胎土Bの率が高くなっていることが指摘できる。ちなみに胴部での胎土A・Bは，36.4%と63.6%になりほぼ同じであるが，底部での胎土A・Bは20%と80%となり，西群と同様胎土Bの率が高くなる。

b．深鉢形土器（第32～37図，第5表）

◎胎土A深鉢形土器群

―口縁部凸帯貼付け位置による分類―

・口縁凸A類(第32図2，第33図1・2，第34図1・3～6)　8点あり，本群の66.7%と主体

第5表 深鉢形土器口縁部凸帯の形態と器形関係表 [〔 〕内数字：小形品の数量，( ) 内数字：%]

部位	分類	西群 胎土A 点数・%	西群 胎土A 器形一点数	西群 胎土B 点数・%	西群 胎土B 器形一点数	東群 胎土A 点数・%	東群 胎土A 器形一点数	東群 胎土B 点数・%	東群 胎土B 器形一点数
口縁部	A	19(46.4)		7(11.5)	IIa 2－1	8(66.7) 〔3〕	Ia 2－〔1〕 Ib 3－〔2〕 IIa 2－1	3(11.1)	
	B	16(39.0)		47(77.0)	IIa 1－1 IIa 2－2	1(8.3) 〔1〕		20(74.1) 〔1〕	Ib 3－〔1〕 IIa 2－1 IIb 3－1
	C			7(11.5)	IIa 2－1			2(7.4)	
	D	6(14.6)	Ia 2－1			3(25.0)	Ia 1－〔1〕	2(7.4)	
	計	41		61		12〔4〕		27〔1〕	
胴部	I			1(1.5)					
	IIa	10(28.6)	a 1－3 a 2－7	25(37.9)	a 1－3 a 2－8	3(33.3)	a 1－1 a 2－2	9(47.4)	a 1－5 a 2－2
	b			7(10.6)	b 3－7			2(10.5)	b 3－2
	B	25(71.4)		33(50.0)		6(66.7)		8(42.1)	
	計	35		66		9		19	

を占める。このうち3点(第33図1・2，第34図1)が一条凸帯の小形品である。とくに第33図1・2はb3類でほぼ同様の器形・大きさで，口縁端部と凸帯に細かな刻目を部分的施している。一方第32図2は土器溜り9出土の大形の深鉢である。S字状に屈曲する器形で，やや尖り気味の口縁からわずかに下がって断面台形の凸帯が巡る。

この他は，b4類的に内湾するもの(第34図4・5)，ほぼ直立する口縁のもの(3・6)がある。

・口縁凸B類(第33図3) 一条凸帯の小形品1点のみである。b3類的器形をもち，口縁端・凸帯に細かな刻目をもつ。

・口縁凸C類 (なし)

・口縁凸D類 (第34図2・7・8) 3点，25%を占める。西群の同類に比べ小形化するとともに，凸帯の垂れ下がりが弱い。しかし，口縁内面の強い横ナデ，口縁の外反度は高い。

—器形による分類—

・ Ia2類 (第34図1) 小形品1点。

・ IIa1類 (第34図8，第38図10) 2点。

・ IIa2類 (第32図2，第34図6) 2点。

・ I 3類 (第33図1・2) 小形品2点。

・ I 4類 (第33図3) 小形品1点。

◎胎土B深鉢形土器群

—口縁部凸帯貼付け位置による分類—

・口縁凸A類(第37図1～3) 3点あり，本群の11.1%を占める。いずれもほぼ直立する。1

は小形品であろう。2・3の口縁端部は比較的丁寧に調整している。

・口縁凸B類(第33図4，第35図，第36図1・2・4・5，第37図5～20)　20点あり，本群中の主体を占め74%に達する。このうち小形品は第33図4をはじめ4点ある(第37図16～18)。第33図4は一条凸帯の小形品で，器形はb3類である。第37図17・18とも刻目はない。

その他については，大半が内湾気味にゆるやかに立ち上がる口縁をもつもの，直立するもので，外反するものは1点(第37図6)のみである。7は胴部上半に横方向の条痕が残り，8の胴部上半は縦方向のナデ調整である。

・口縁凸C類(第36図3，第37図4)　2点のみである。3は内湾気味から直立する口縁部に低い凸帯をもつもので，外面に縦方向の調整痕が残る。4は刻目のない一条凸帯a2類である。

・口縁凸D類(第34図9，第37図5)　2点ある。外反する口縁，やや垂れ下がりの凸帯をもつ。

―器形による分類―

・Ⅰb3類(第33図4)　1点。小形品。

・Ⅱa1類(第37図21・22・25～27)　胴部片5点。

・Ⅱa2類(第36図5，第37図28・29)　胴部片2点含む3点。

・Ⅱb3類(第35図，第38図1・2)　第35図は土器溜り10出土の完形品である。比較的小さくやや上げ底気味の底部から内湾気味にゆるやかに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。胴部付近に最大径がある。Ⅱb3類の典型である。また，第38図1・2はb4類になるものかもしれない。

c．浅鉢形土器(第40図，第6表)

口縁部2点，胴部3点の計5点出土した。

・胎土AⅠ類(第40図21)　口～頸，頸～胴各境目に沈線をもつ大形の浅鉢である。

・胎土AⅢ類(22・23)　外面に数条の沈線をもつ椀形浅鉢である。

・胎土BⅢ類(24)　今回の調査の中で確認し得た唯一の胎土B浅鉢口縁である。

d．壷形土器(第40図，第6表)

口縁部2点，胴部2点を確認した。

第6表　浅鉢形土器・壷形土器分類別構成表
(丸付数字：胎土B)

器種	地区／分類	西群 口縁部	西群 胴部	東群 口縁部	東群 胴部
浅鉢形土器	Ⅰ	2	2	1	
	Ⅱa	2			
	Ⅱb	5			
	Ⅲ	2	1	①	2
	不明	2			1
	計	13	3	1①	3
壷形土器	小形		①	1	
	大形		②	①	①
	不明				①
	計		③	1①	②

・胎土A小形壷(第40図25)　口縁直下と肩部に沈線が巡る。26と同一個体と思われ図上復元した。浅鉢とも考えたが器高および沈線を壷の口頸，頸胴を画す沈線と捉え，壷形土器とした。

・胎土B大形壷(第32図1)　口縁部に刻目凸帯を貼付ける大形品である。上半部の調整は横ナデ調整，内面は指頭圧痕が顕著であるなど深鉢との成形・調整技法に差はなく，破片での壷の抽出は困難であろう。したがって器種構成の比率はこの点を考慮に入れておく必要が

あろう。

・胎土B小形壷(第40図26)　肩部の小片である。

・胎土B不明壷(第40図27)　肩部の破片と思われるが詳細は不明である。

e．底部(第38図，第7表)

形態と胎土A・Bによって以下のように分類した。

・胎土AⅢ類(第38図32・33)　2点。33を典型とする。32は胎土BⅡb類の31とともに土壙107から出土した。

・胎土AⅣ類(第38図30，第40図25)　2点。このうち第40図25は小形壷の底部としたものである。

第7表　底部分類表　〔( )内：%〕

分類＼地区	西群 胎土A	西群 胎土B	東群 胎土A	東群 胎土B
Ⅰ		12 (36.4)		8 (50.0)
Ⅱa		3 (9.1)		
Ⅱb	1 (11.1)	13 (39.4)		5 (31.3)
Ⅲ	1 (11.1)		2 (40.0)	
Ⅳ	7 (77.8)	4 (12.1)	2 (40.0)	3 (18.8)
不明		1 (3.0)	1 (20.0)	
計	9 (100.0)	33 (100.0)	5 (100.0)	16 (100.1)

東群のうち胎土Aの底部は不明品1点を入れて5点のみである。

・胎土BⅠ類(第38図16・17・21～23・26～28)　8点あり，本群中の50%を占める。16・17・28をその典型とする

・胎土BⅡb類(15・18・24・25・31)　5点ある。土壙107出土の31を典型とする。15は小形品の底部であろうか。

・胎土BⅣ類(19・20・29)　3点のみ。

4）東群上層の土器（第39図）

東地区では第8・9層以外の土層および弥生以降の遺構に混在して出土する土器類があった。

深鉢形土器口縁部18点のうち，胎土A・Bは6点・12点で東群の率とほぼ等しい。凸帯の分類は，やはり同様に胎土Aでは凸Aと凸Dがあるのに対して胎土Bでは，凸Bが主体を占めている。

また胴部では胎土Aは少なく，一条凸帯の胴部(17)と細片の2点のみである。胎土Bのうち32は頸部ですると く屈曲するものであるが，刻目が直接施されている。

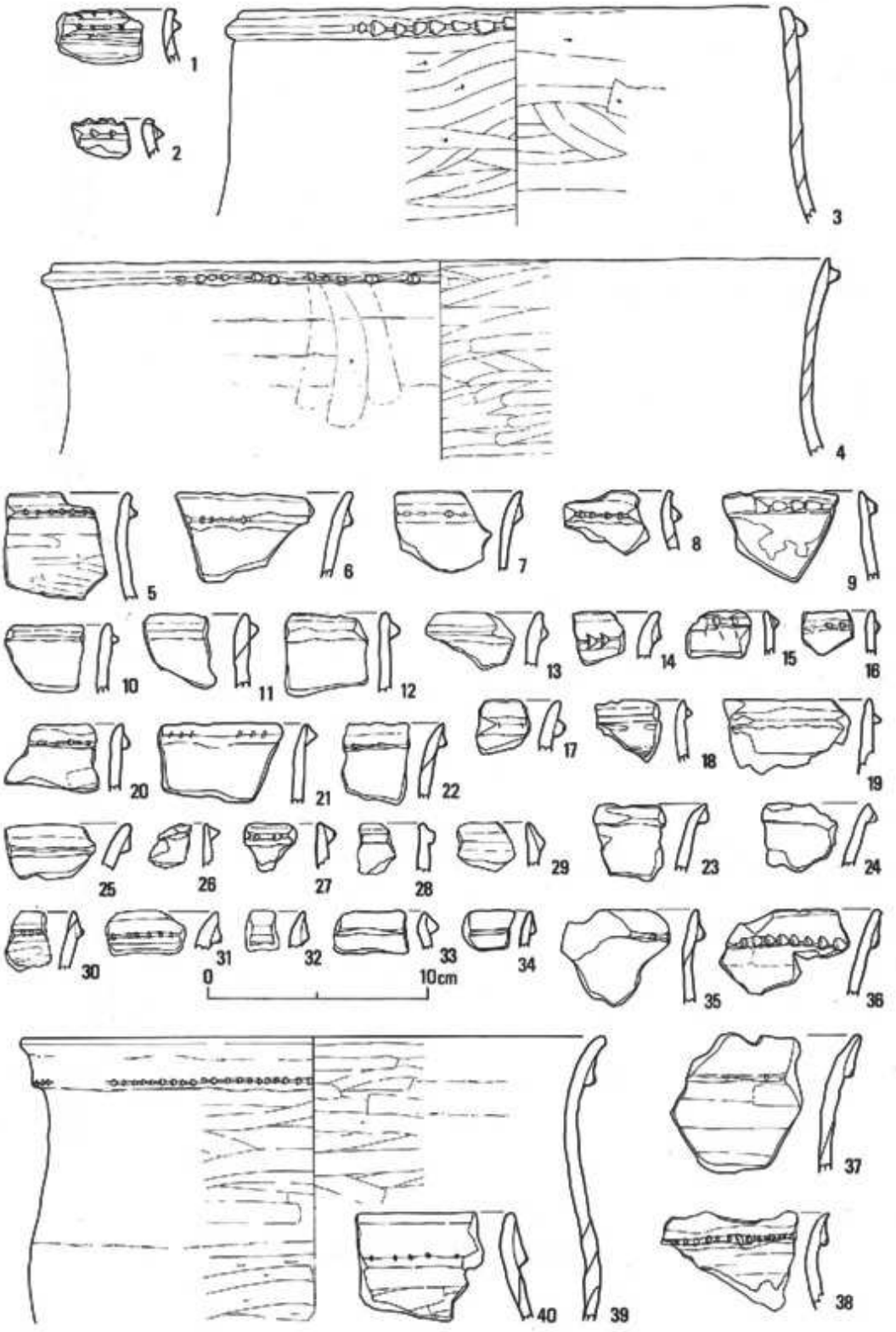
底部はすべて胎土Bであり，Ⅰ類が目立つ。38は浅鉢の底部であろうか。　（南）

第5節　刻目凸帯文土器に伴出する弥生式土器

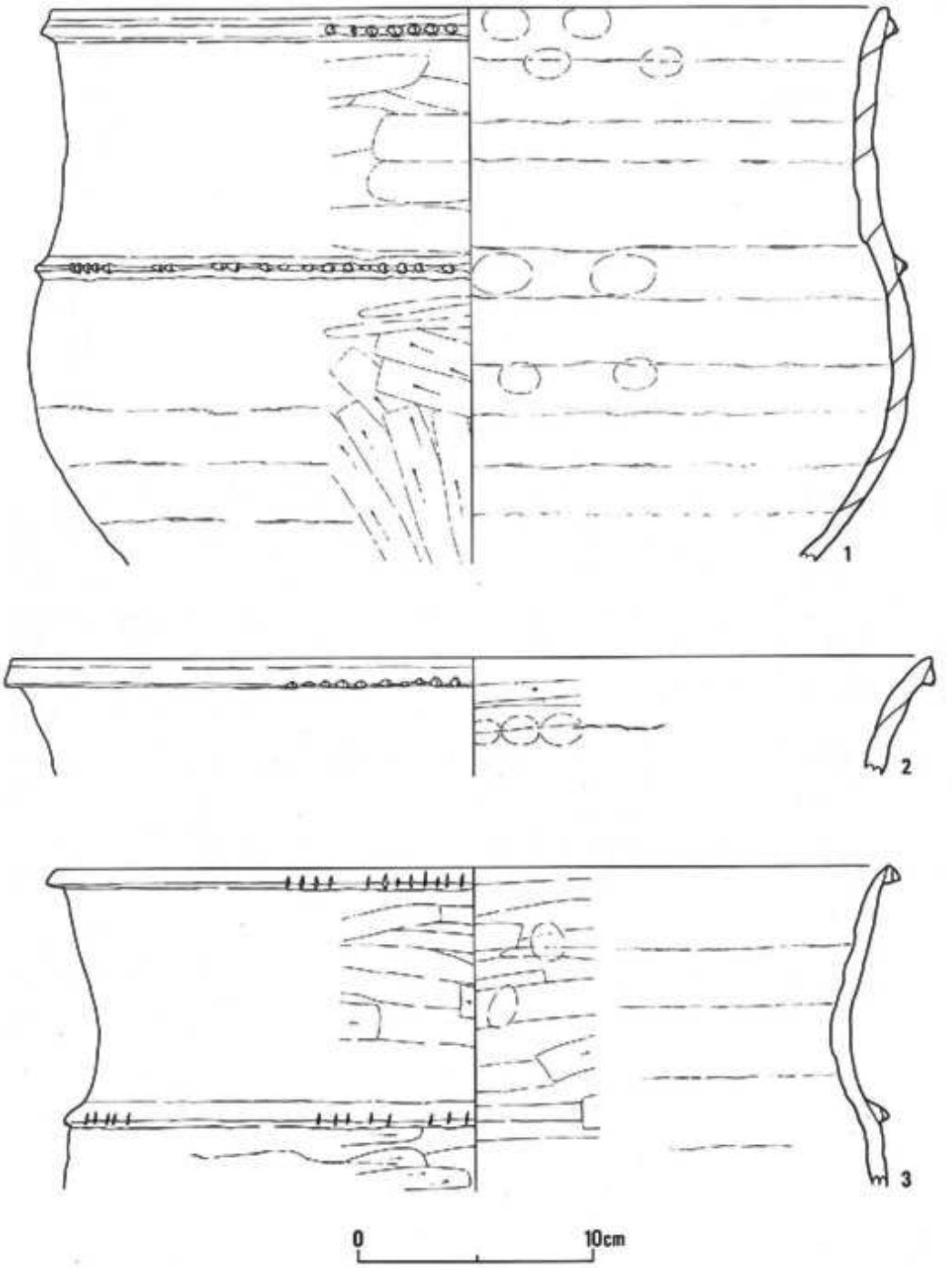
（第40図・図版第42）

該期の土器は極めて少量であり，各遺物の残存状態も良好とは言えない。出土層位は第8～9層であり，これは前述の縄文晩期後半の土器(刻目凸帯文土器)の遺物包含層と一致する。以下，出土遺物の概述を行う。

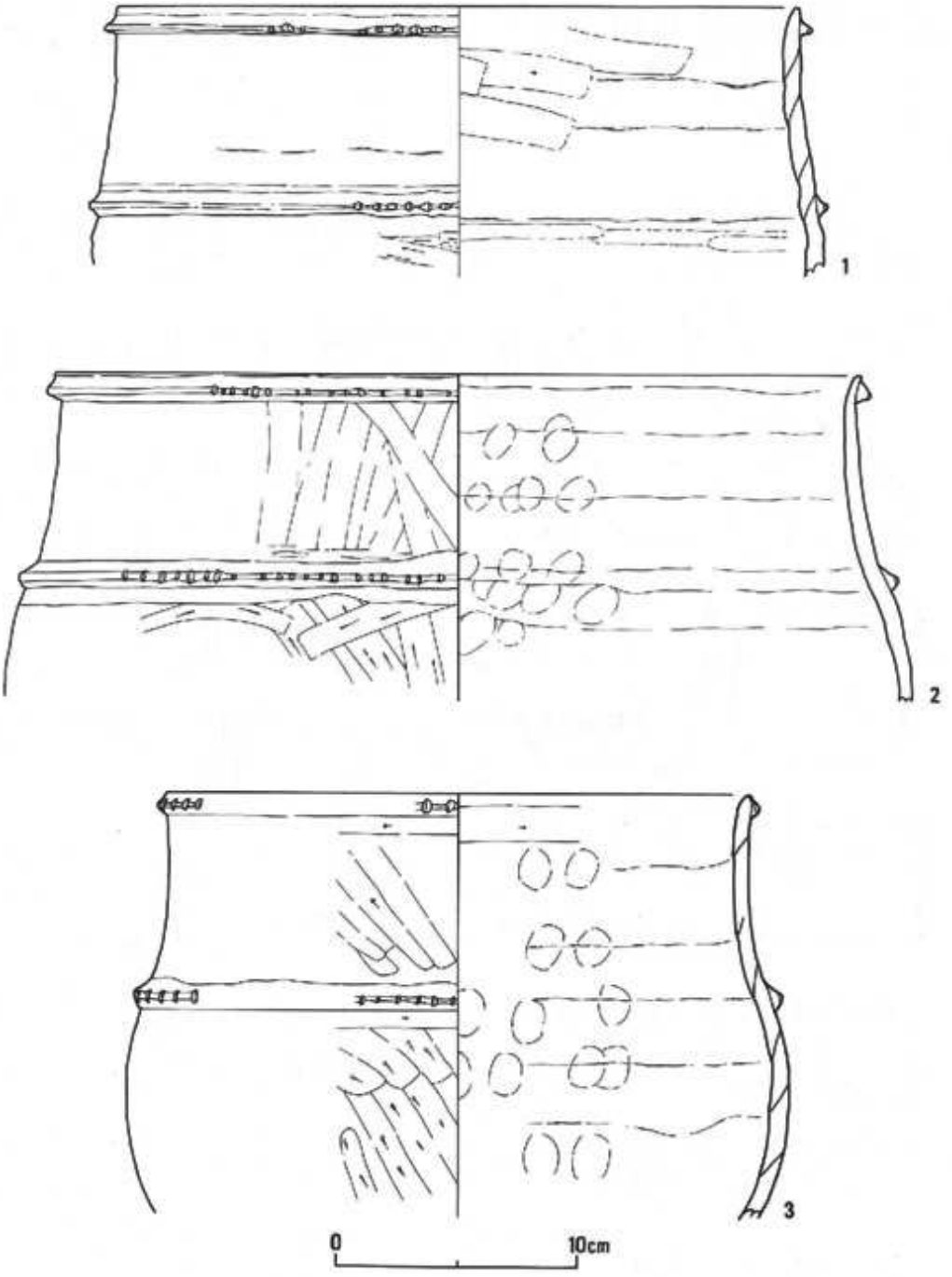
第40図20は，頸胴部に段をもつ壷形土器である。段の成形法は，内傾接合による粘土の積み上げを行い，胴部と頸部との変換点に指オサエ，ついで指ナデによる成形を行った後に，篦状工具



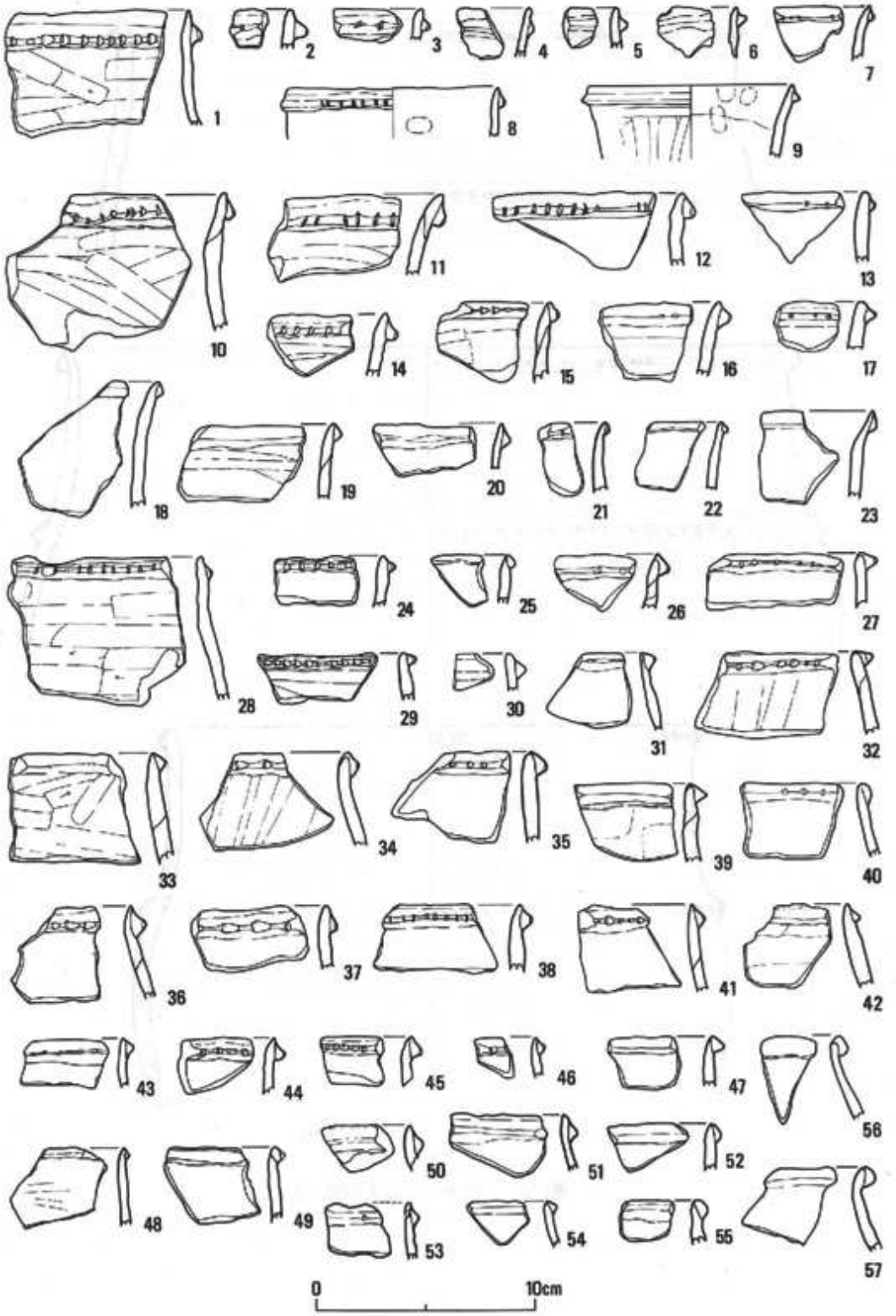
第25図　西群縄文土器実測図・1



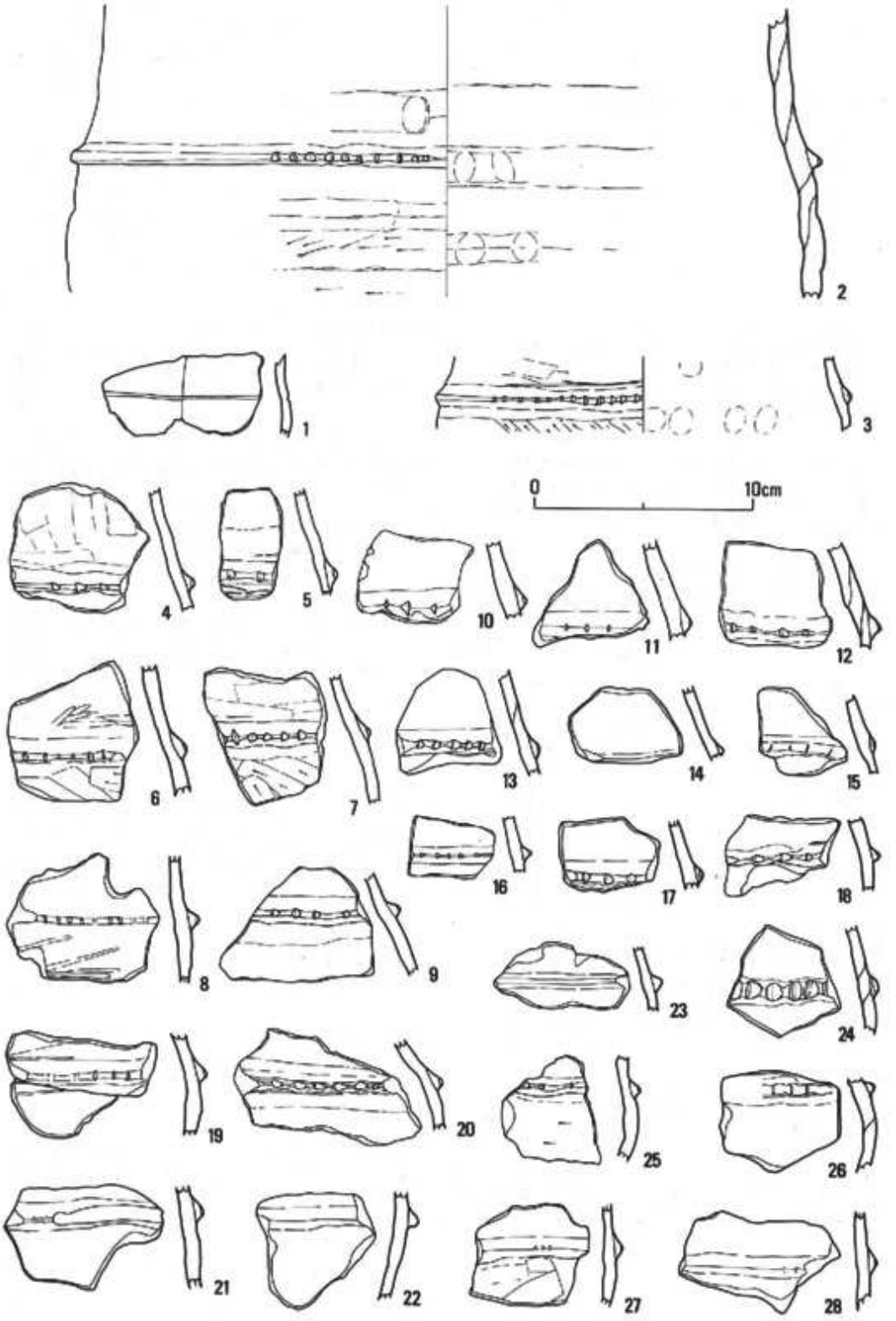
第26図　西群縄文土器実測図・2



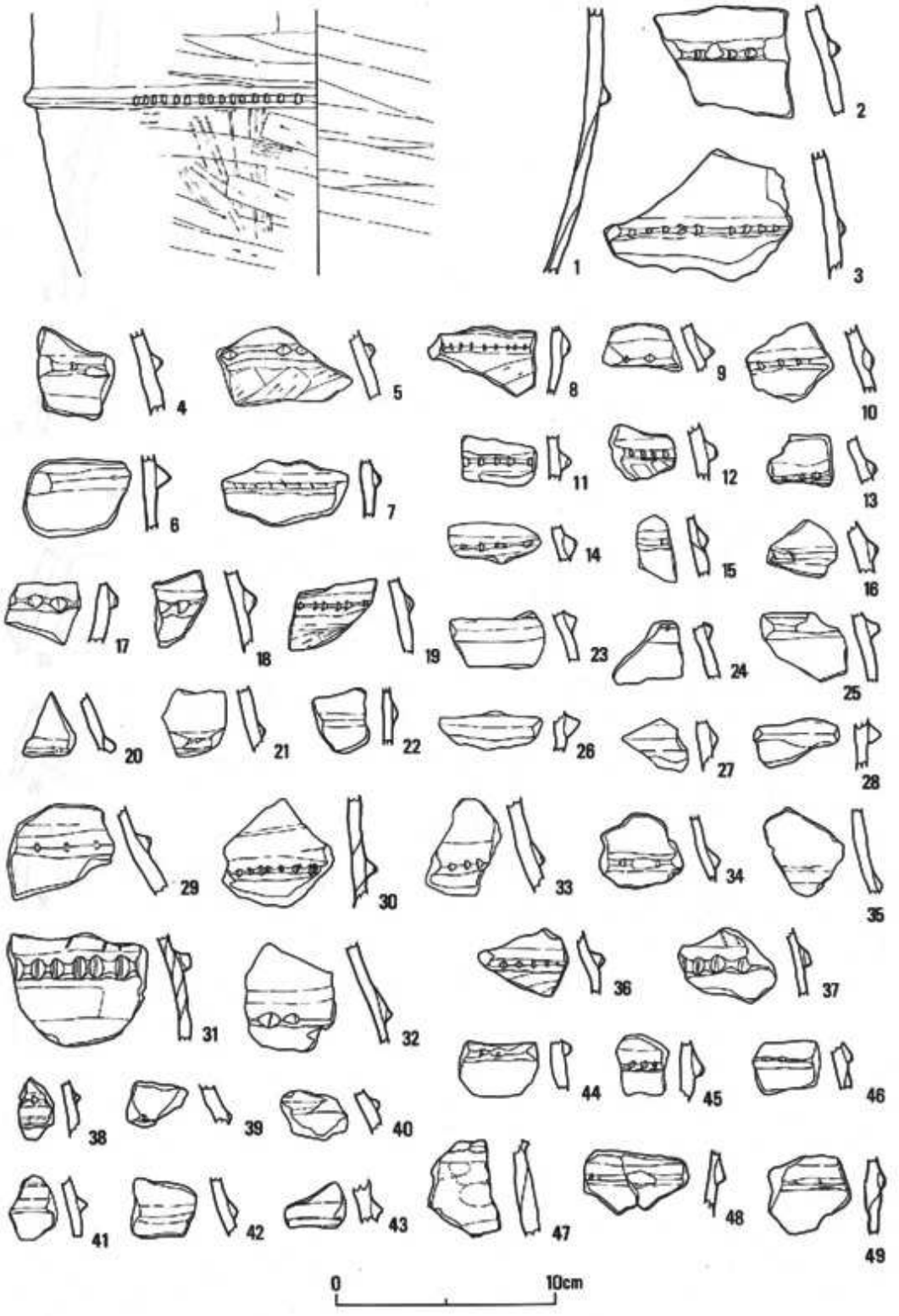
第27図　西群縄文土器実測図・3



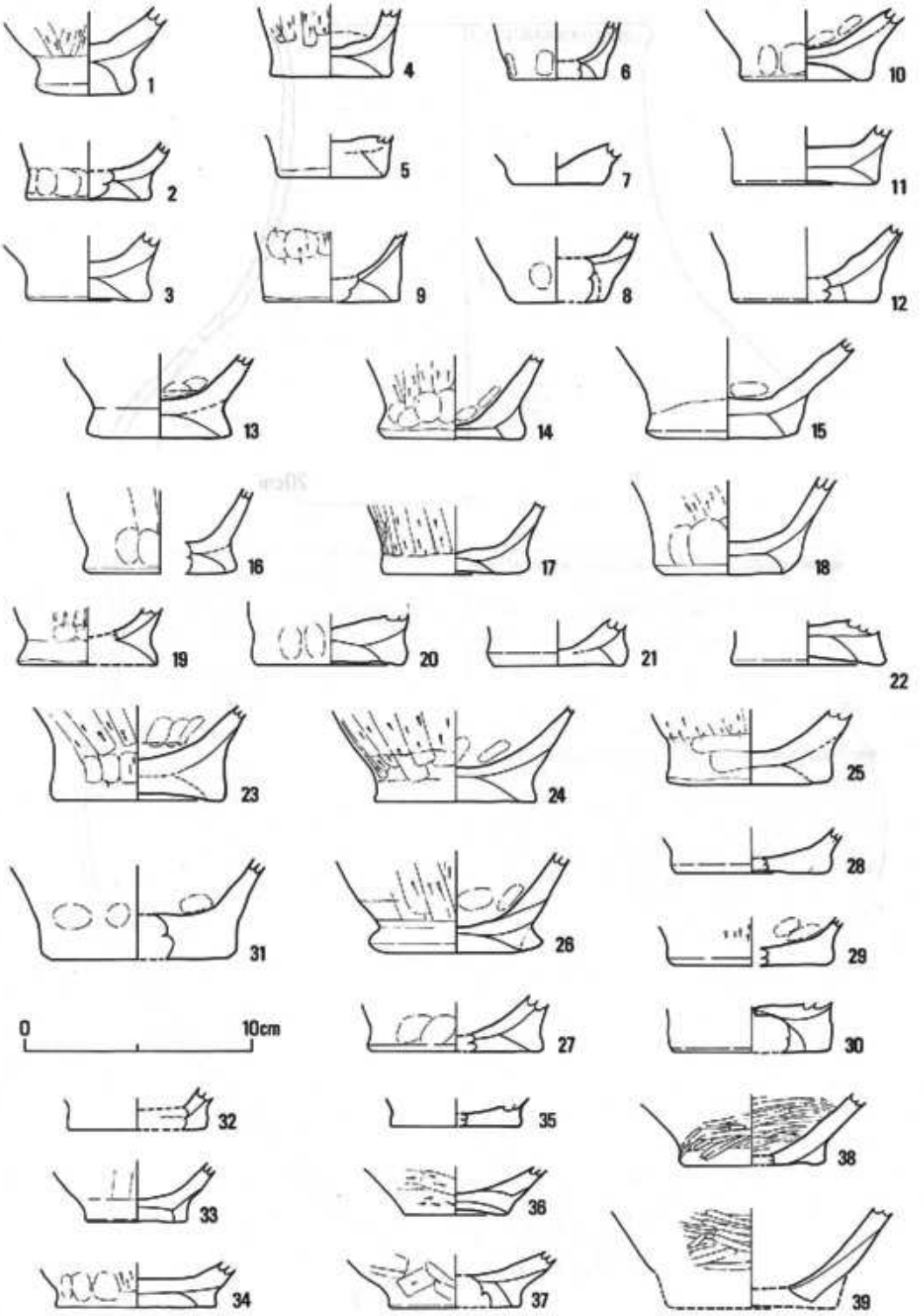
第28図　西群縄文土器実測図・4



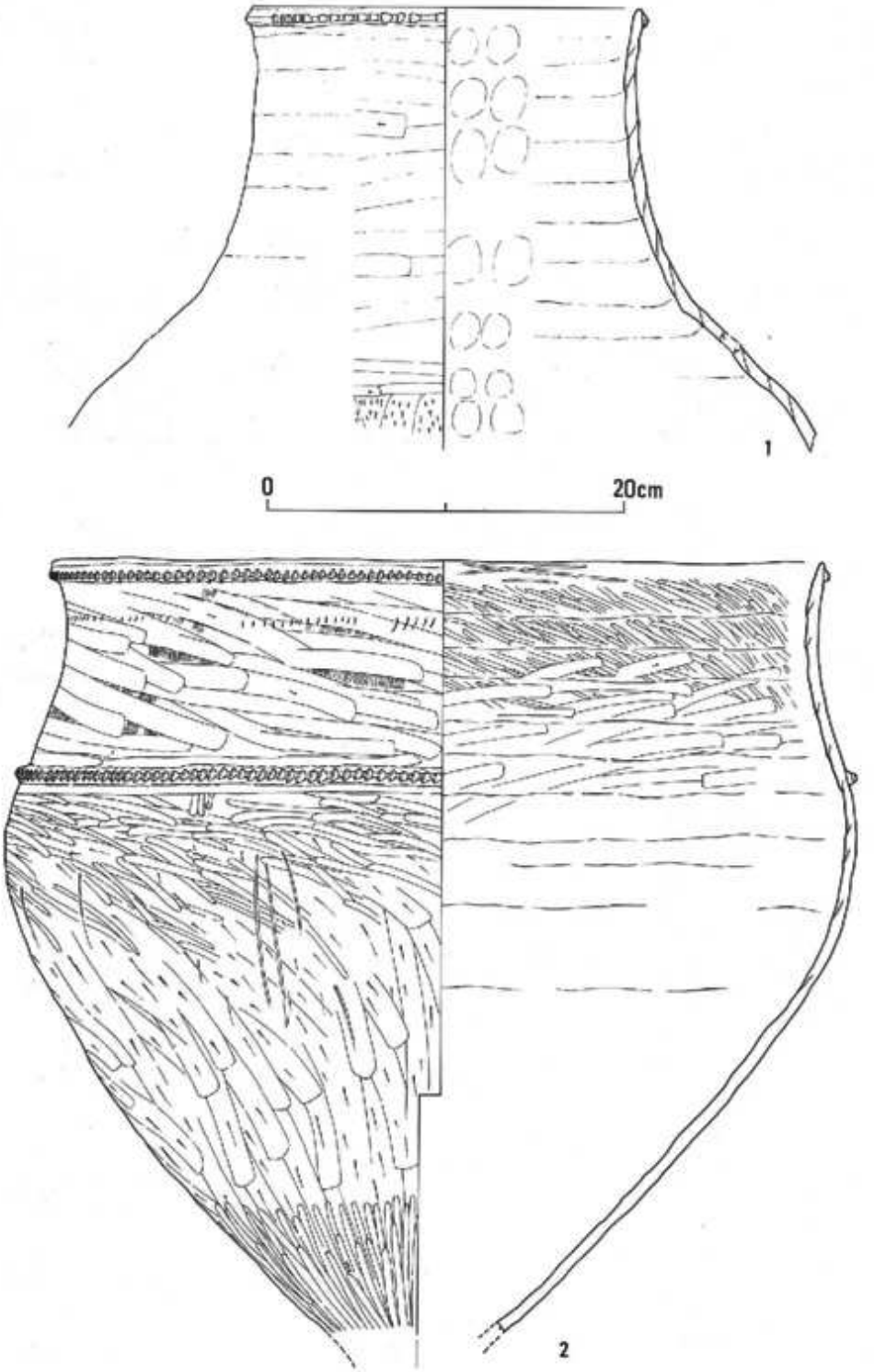
第29図　西群縄文土器実測図・5



第30図　西群縄文土器実測図・6

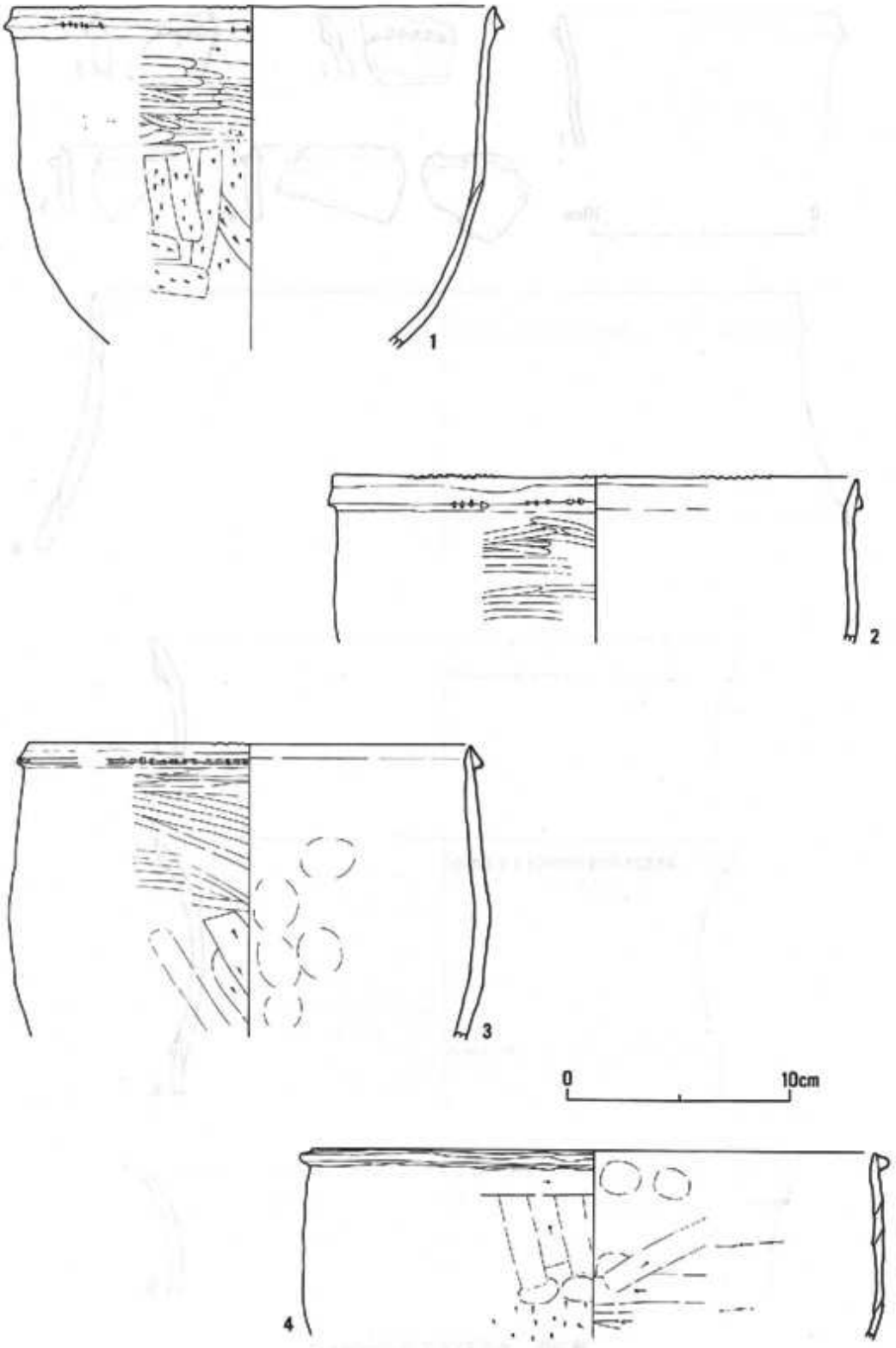


第31図　西群縄文土器実測図・7

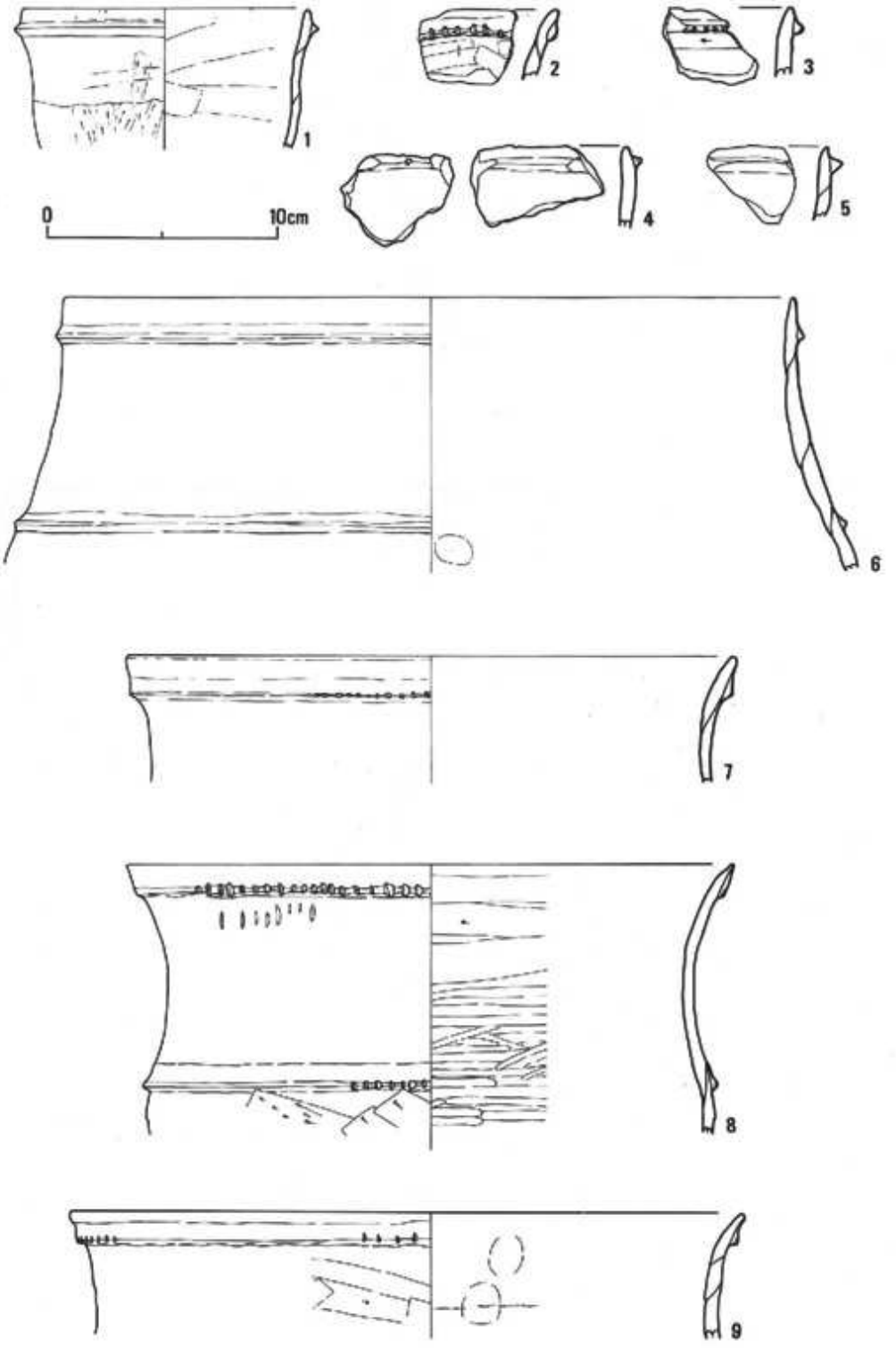


第32図　東群縄文土器実測図・1

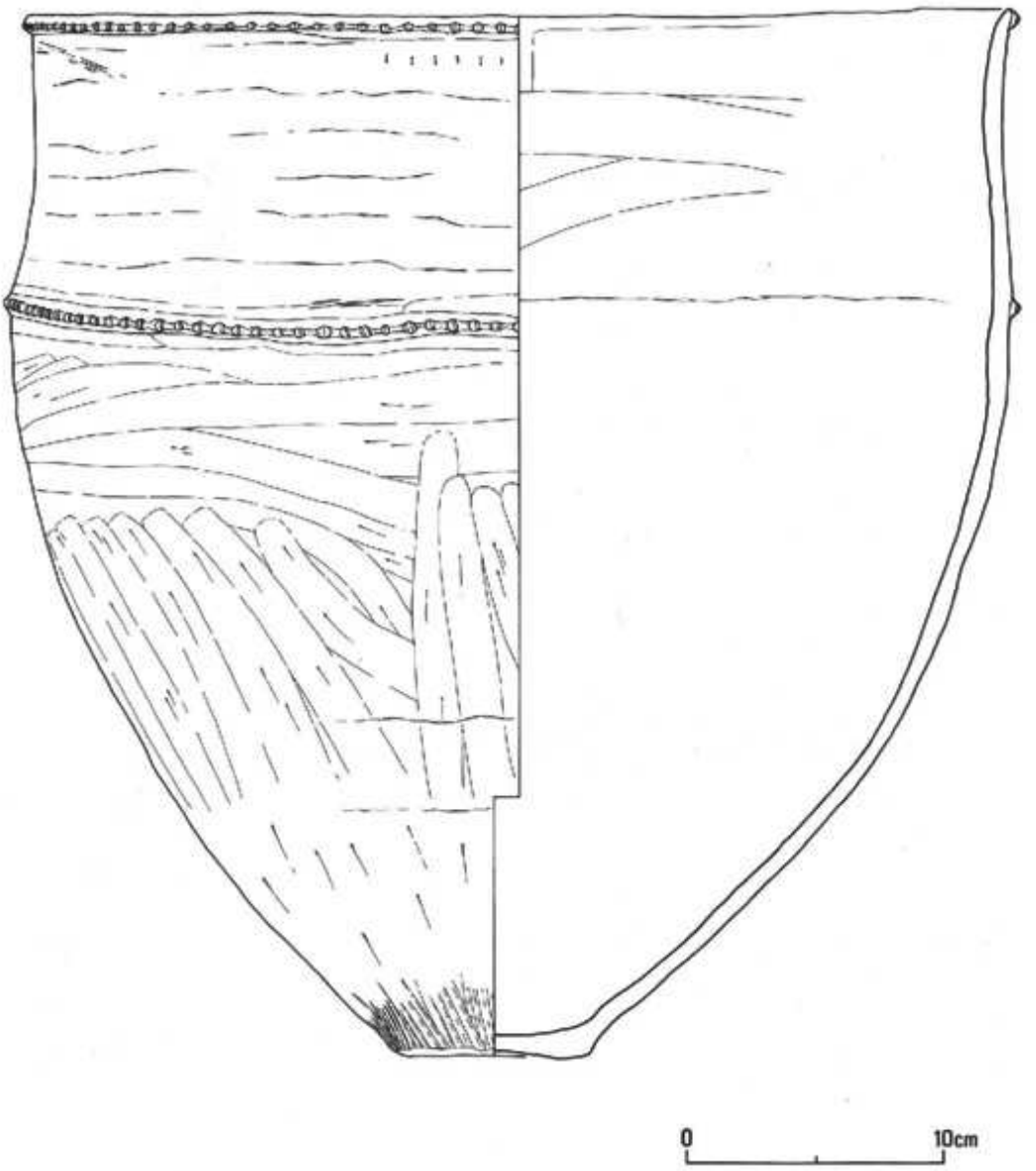
1：壺形土器　2：深鉢形土器



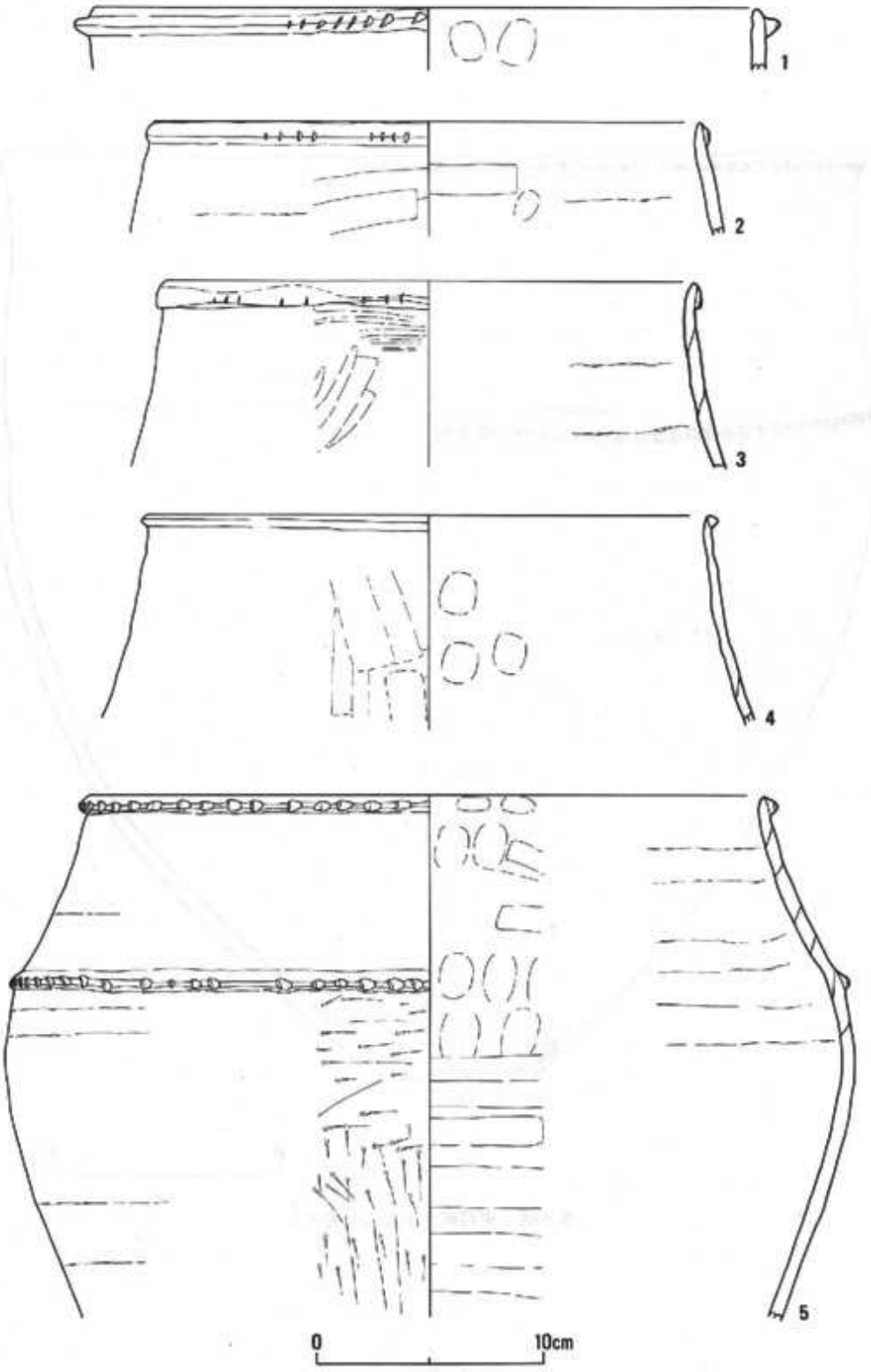
第33図　東群縄文土器実測図・2



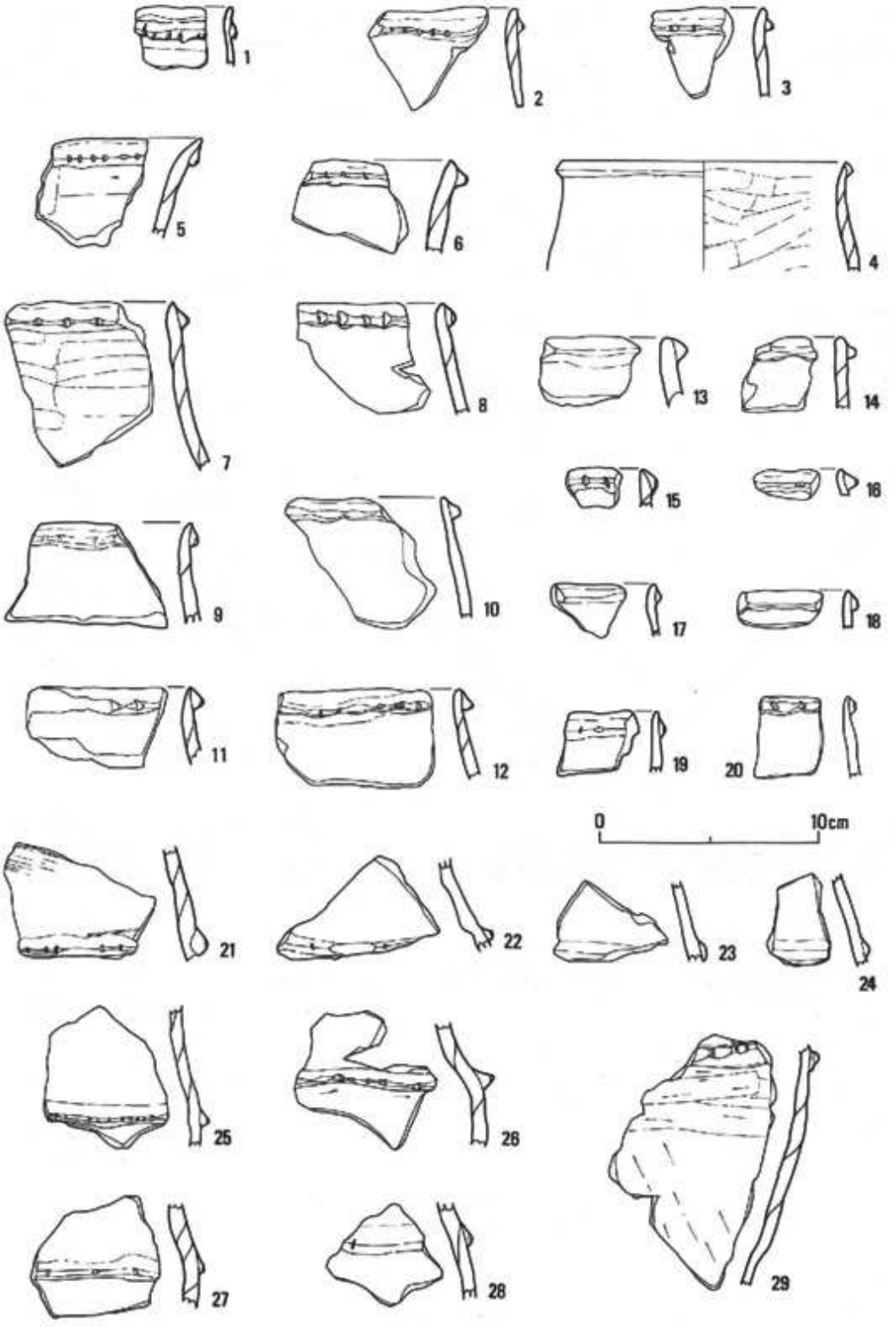
第34図　東群縄文土器実測図・3



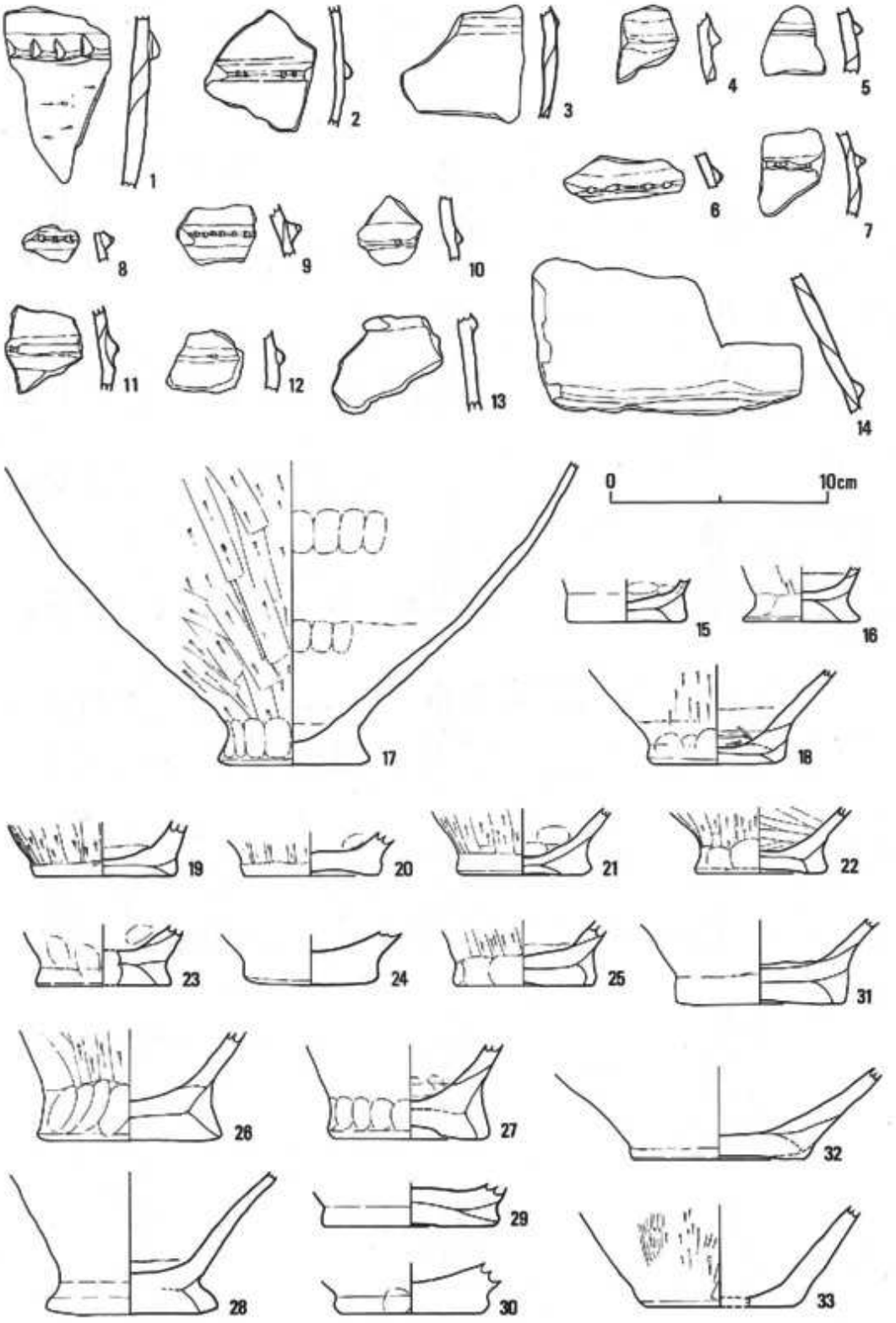
第35図　東群縄文土器実測図・4



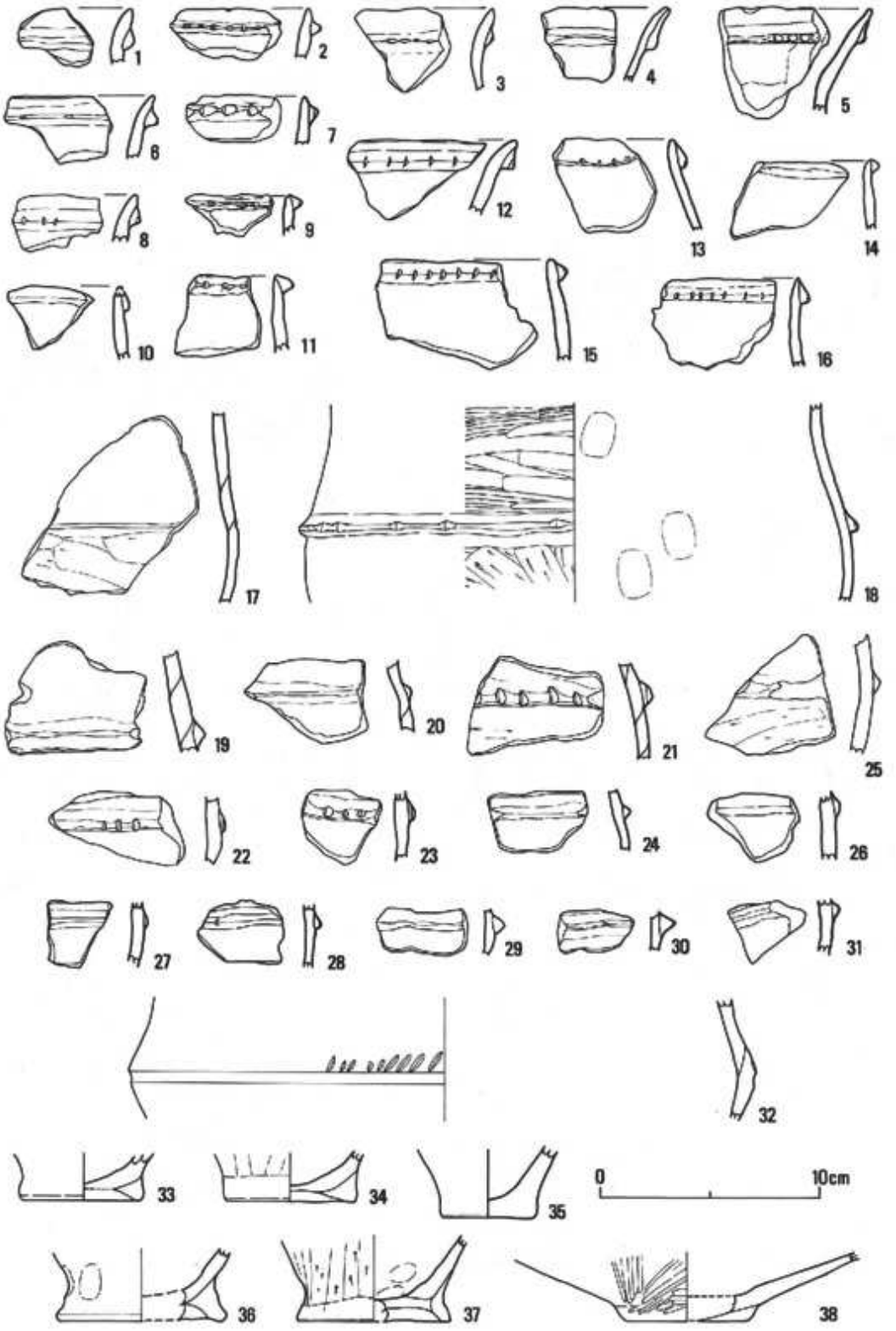
第36図　東群縄文土器実測図・5



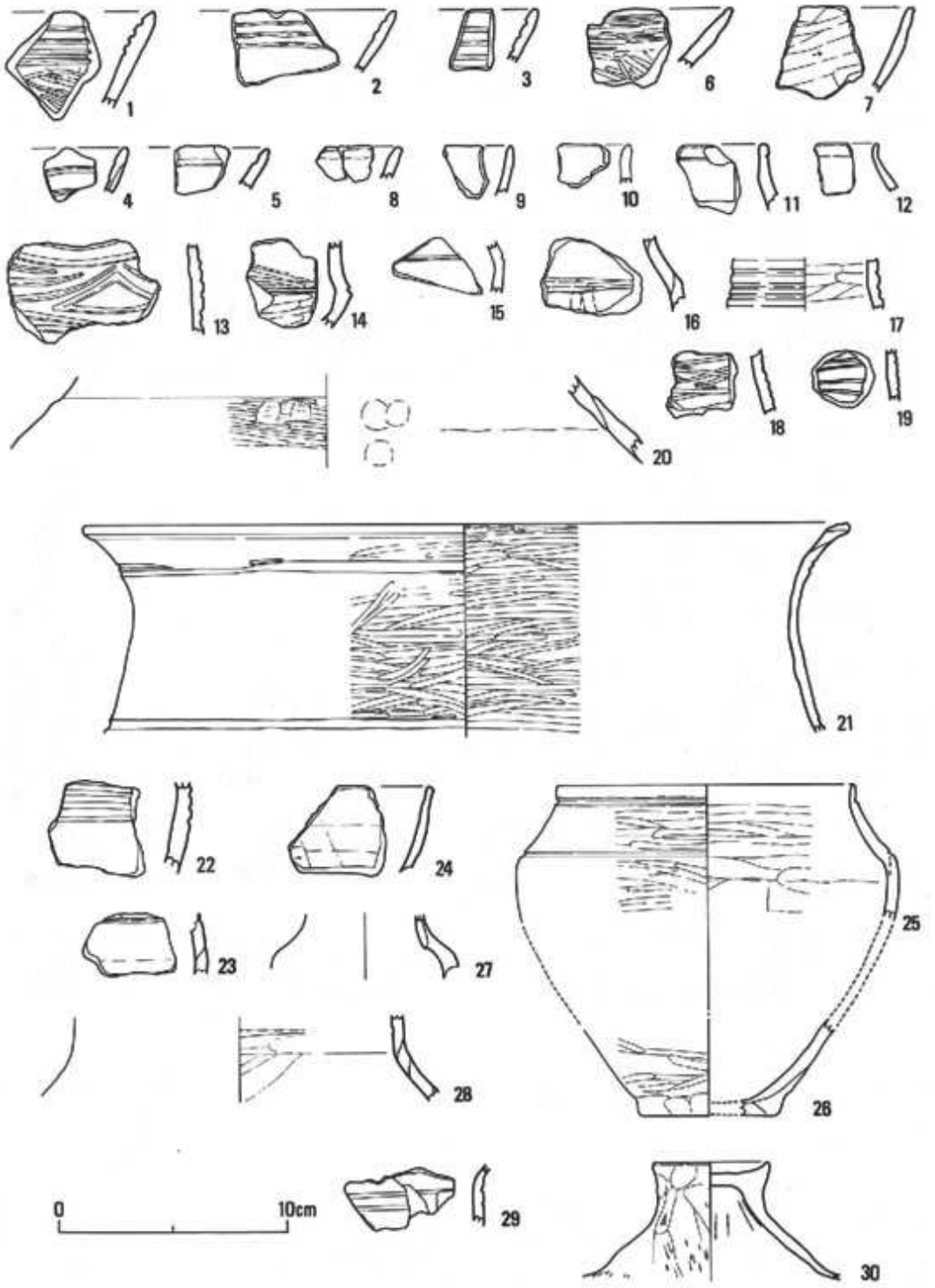
第37図　東群縄文土器実測図・6



第38図　東群縄文土器実測図・7



第39図　東群縄文土器実測図・8



第40図　縄文・弥生土器実測図

でナデ調整を行っている。また，段下方(胴部側)には，接合時の指頭圧痕が見られ，同部位の器面の凹凸が段の高底差を強調している感が強い。内面はゆるやかに湾曲し，加えて明瞭に接合痕が看取されることは，成形時の調整の手順を裏付けるものである。外面はヘラミガキ，内面は板状工具によるナデ調整を行っている。胎土は細粒砂に，数～3mm程度の小石がやや多く含まれている。焼成は良好であり，色調は淡赤褐色を呈している。

C12区第8層より出土した29は，口縁部が『く』の字形に外反し，頸部にやや浅めで幅2mmを測る篦描沈線文を巡らした甕形土器である。外傾接合であり，器面は横ナデによる調整を行っている。胎土は細粒砂であり，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈している。

D11区第9層より出土した30は，蓋形土器であり，形態的に見て甕用のものと考えられる。内外面ともに板状工具によるケズリ調整を行っている。胎土は微粒砂であり，焼成は二次焼成を受けたためか，硬質である。色調は外面は灰黄色を呈するが，大部分に黒斑が付いている。内面は黒褐色を呈しており，周縁部近くに若干ではあるがススの付着が見られる。

以上，弥生前期の土器について説明を行った。これらの遺物は，近畿地方第一様式古・中段階の時期の範疇で捉えられるものと考えられる。　(澤山)

第6節　不明土製品（第41図，図版第58下）

今回，縄文晩期の土器・石器とともに不明土製品が4点出土した(第41図)。このうち土偶の可能性があるものが3点ある。

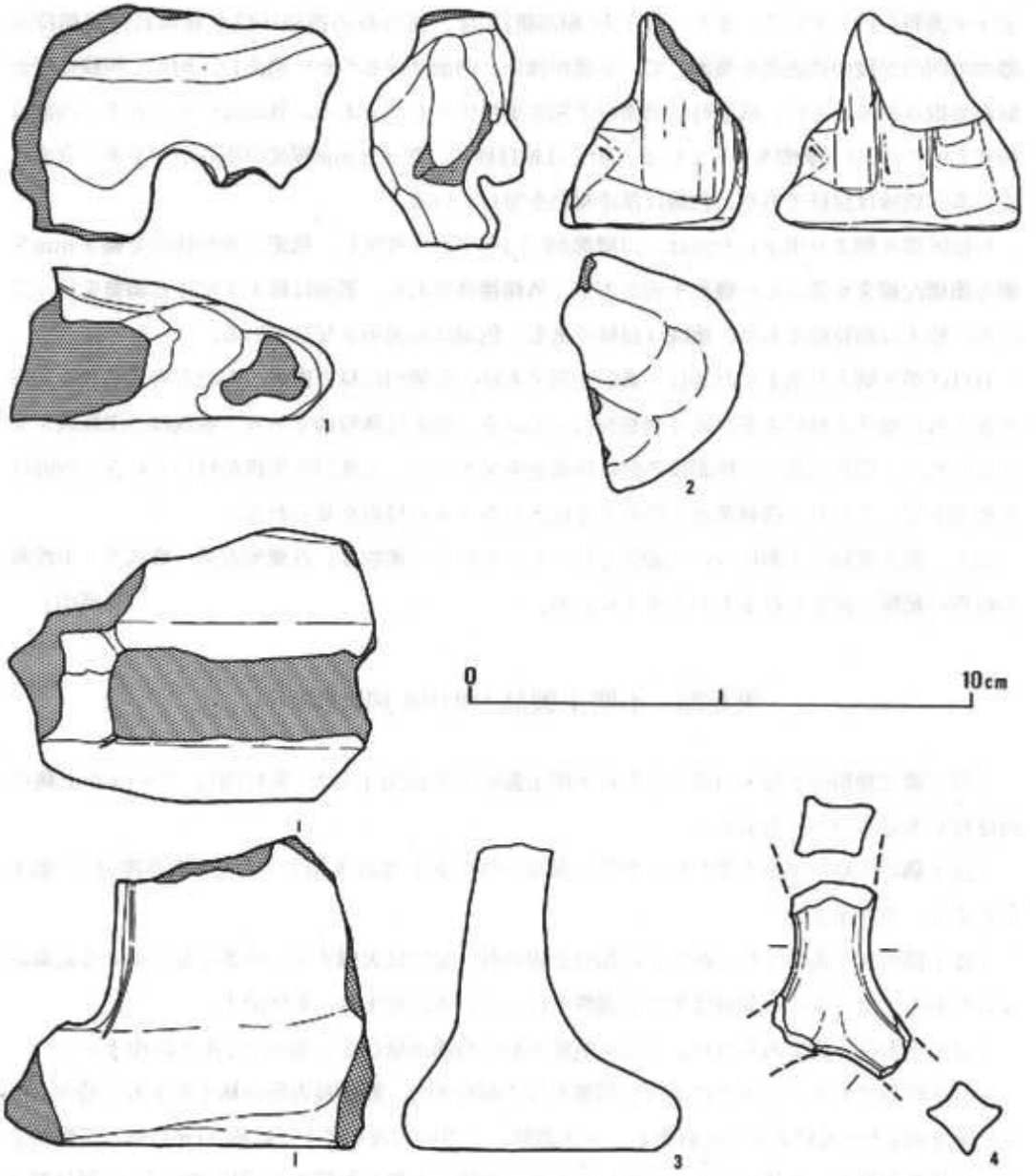
1は土偶の左肩の部分と思われ，頭部・腕ならびに下半部は欠損している(網点部分)。胎土Bによる。E区出土。

2は土偶の足であろうか。かかとの部分と思われ，足先は欠損する。凹部になっている足裏およびかかと，くるぶしの部分はケズリ調整を行っている。胎土B，E区出土。

4はY字形の土偶であろうか。三方に断面方形の凸部が延びる。胎土A，A4区出土。

3は不明品である。ケズリによって凹部をなす面を下に，断面長方形の粘土を上方へ積み上げる。接合部は下へ拡げるように成形し，ナデ調整。一方の角近くに上下に約3cmの長さで幅約2mmの沈線が残る。全体はスタンプ形になるが，前後・上部を欠損する(網点部分)。前部は粘土接合から剥落したような凹部が残る。

以上，不明土製品について説明したが，土偶と思われるものが出土したことは注目できる。当該期の土偶については大阪府長原遺跡(森ほか1983)，京都府高倉宮下層遺跡(南1988)などから出土例がある。晩期後半以来土偶の減少傾向が指摘される中，この諸例の検討は石棒の検討とともに急務であろう。　(南)



第41図 縄文不明土製品実測図

第7節 石器・石製品（第42～46図，第8表，図版第47・48）

1）はじめに

本遺跡からは，今回の調査において，縄文晩期と弥生中～後期の石器・石製品が出土した。その点数は，第8表に示したように必ずしも多くはないが，縄文晩期では，石棒片が比較的まとまって出土し，弥生では，磨製石剣や有溝石錘などが少量ながら検出されるなど，既応の調査に新し

い知見を加え，本遺跡の両文化における性格を考える上で重要な資料を含んでいる。まず，本節では縄文晩期の石器について説明を行うことにし，弥生の石器については次章で説明する。

2）石　器　（第42～45図）

石器は，総数24点出土した。その内訳は，石皿1点，敲石8点，磨石4点，磨製石斧2点，楔形石器7点，削器1点，石器未製品1点である(第8表)。これらの分布についてみると，A4・E区およびA・C11～12区など，土器の出土とほぼ同様の傾向を示している。出土層位も第8～9層から出土しているが，土器類と同様にA4・E区周辺の自然流路埋土から出土した石器については，その正確な出土層位が不明の例が多く，層位による器種の偏りについての検討は難しい。

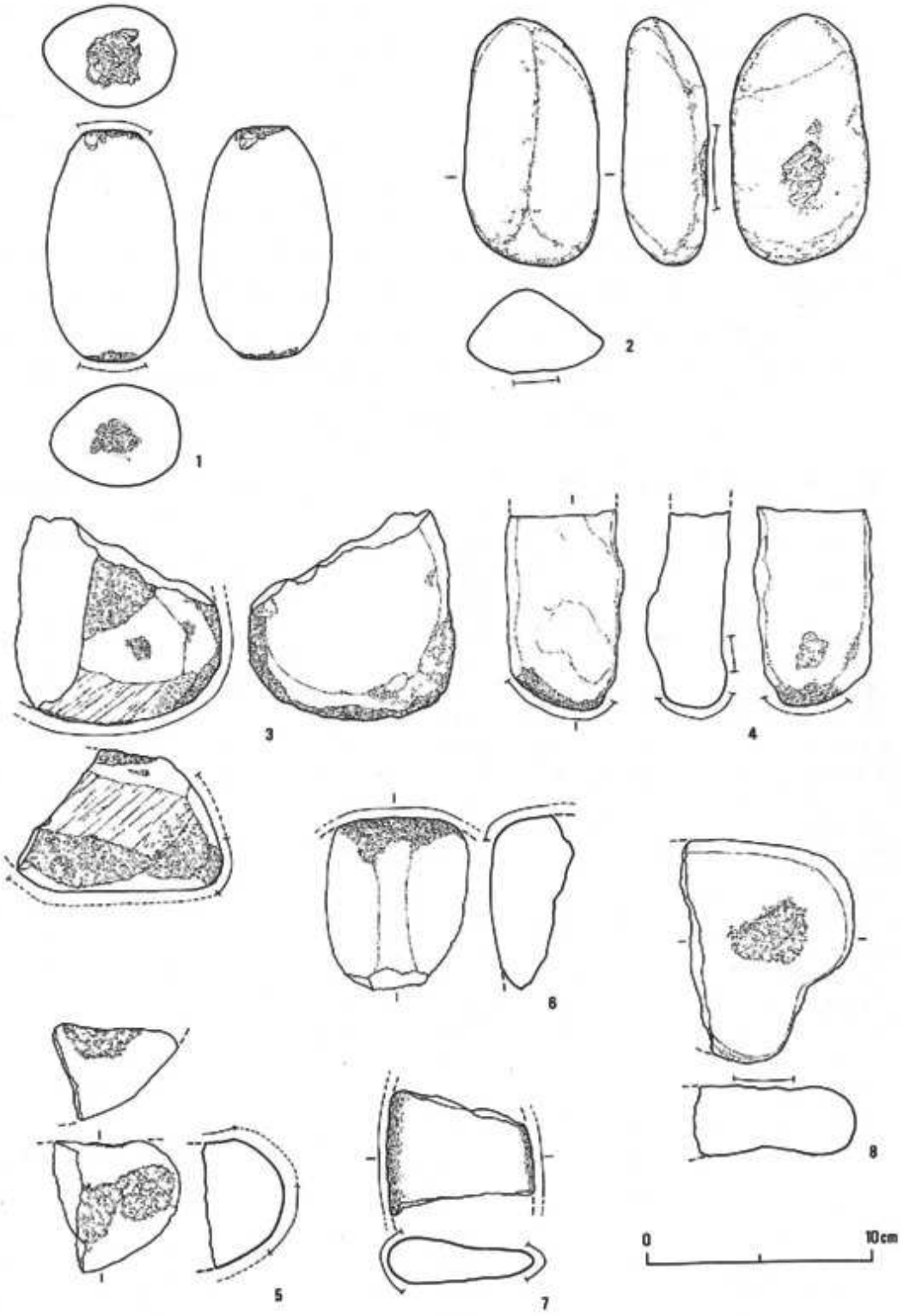
石器の素材となる石材には，多様なものがみられる。石皿には砂岩が，敲石・磨石には斑糀岩・

第8表　石器・石製品一覧表（縄文）

［単位：cm，g.（ ）：破損品　層位の数字：第14～16図の層位番号と一致］

器　種	出土地区	出土層位	遺存状態	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
石　皿	C11	8	完　形	緑色砂岩	28.55	14.9	9.85	5500	43－1
敲　石	A10	8上面	完　形	細粒質輝緑岩	10.5	5.9	4.6	470	42－1
敲　石	E	—	完　形	粗粒玄武岩	11.15	6.05	3.95	345	42－2
敲　石	C11	6	½　片	斑糀岩	(9.45)	9.35	6.45	737	42－3
敲　石	E	—	½　欠	凝灰岩質砂岩	(9.5)	5.3	4.1	255	42－4
敲　石	溝5	埋　土	一部片	斑糀岩	(5.85)	(5.7)	(4.3)	125	42－5
敲　石	C11	8	¾　欠	斑糀岩	(7.7)	(6.45)	(3.5)	220	42－6
敲　石	A4	流路埋土	⅘　欠	凝灰岩質砂岩	(5.6)	6.65	2.1	99	42－7
敲　石	E	9	一部欠	流紋岩	10.0	(7.7)	(3.3)	280	42－8
磨製石斧	A4	9	頭部片	輝緑岩	(8.2)	(3.95)	(5.5)	190	43－2
磨製石斧	A3	流路埋土	刃部片	粗粒玄武岩	(7.9)	5.8	3.6	220	43－3
楔形石器	E	—	完　形	頁　岩	2.2	3.5	0.7	5.4	44－1
楔形石器	C12	8	完　形	サヌカイト	4.0	2.2	0.7	6	44－2
楔形石器	凹部1	埋　土	完　形	サヌカイト	3.25	2.55	1.05	8	44－3
楔形石器	C12	8？	完　形	サヌカイト	4.45	3.4	1.65	23	44－4
楔形石器	C11	？	完　形	サヌカイト	3.2	1.65	1.75	10	44－5
楔形石器	C11	8	完　形	サヌカイト	5.0	2.55	2.55	30	44－6
楔形石器	A6	？	完　形	サヌカイト	4.2	5.6	1.1	29	44－7
削　器	C11	6	完　形	頁　岩	5.7	3.7	1.2	27	45－1
石器未製品	C11	9	—	粘板岩	(9.55)	(4.0)	(0.8)	42	45－2
石　棒	A11	9	破　片	結晶片岩	(8.55)	6.7	5.6	465	46－1
石　棒	A12	9	破　片	結晶片岩	(9.6)	7.2	5.8	660	46－2
石　棒	C11	8	破　片	結晶片岩	(7.9)	6.95	5.7	478	46－3
石　棒	A11	7	破　片	結晶片岩	(7.25)	6.7	(4.3)	270	46－4
石　棒	凹部1	埋　土	破　片	結晶片岩	(15.8)	6.2	(4.3)	590	46－5
石　棒	凹部1	埋　土	破　片	結晶片岩	(11.55)	(6.15)	(4.0)	307	46－6
石　棒	？	？	破　片	結晶片岩	(6.9)	(6.1)	(2.4)	112	46－7
石　棒	凹部1	9i	破　片	結晶片岩	(7.8)	(7.05)	(3.2)	200	46－8
石　棒	？	？	破　片	結晶片岩	(8.85)	(4.5)	(2.2)	130	46－9
石　棒	A3	流路埋土	破　片	結晶片岩	(7.2)	(4.55)	(2.7)	122	46－10
石　棒	B11	10	破　片	結晶片岩	(8.0)	(3.9)	(2.2)	88	46－11
石　棒	C8	5	破　片	結晶片岩	(10.0)	(4.7)	(2.0)	115	46－12
石　棒	E	—	破　片	結晶片岩	(10.0)	(5.75)	(2.6)	165	46－13

注　この他に磨石小片4点，石棒小片5点がある。



第42図　石器実測図・1（縄文）
敲 石・磨 石

砂岩が用いられる。特に，斑栃岩を素材とするものは，これまでの調査でも多く検出されており，本遺跡における敲石・磨石の石材選択の一つの特徴として捉えることができよう。磨製石斧は，2点共に火山岩系の石材が使用されている。

楔形石器には，主にきめが細かく青灰色を呈する良質のサヌカイトが用いられており，1点のみ頁岩製のものが認められる。

削器は砂岩を用いており，おそらく石皿を製作した際の剥片を利用したものと思われる。

石器未製品としたものは，暗緑灰色の粘板岩を素材とする。

次に，器種ごとに形態的特徴を記していく。

a．石皿（第43図1）

1点のみ出土している。扁平な楕円形に近い砂岩の亜角礫を素材とし，それをほぼ長方形の平面形を呈する板状に整形して利用している。細かい研磨などの整形は行わず，割り取られた面をそのまま使用面としている。表・裏面ともによく使用された磨面となっている。長辺の一方の側面には自然面が残される。第42図3の敲石とは，約160cmの距離を隔てて近接して出土しており，これらの周辺の土壙群とも関連して，この出土状態は注意される。また，この石皿と同一母岩と考えられる拳大程度の分割による剥離面を残す角礫片が10数点出土しており，これは，石皿がこの遺跡内で製作されたことを示すものといえよう。

b．敲石・磨石（第42図1～8）

12点出土した。うち，敲石のみ8点を図示した。残り4点は，全て敲打痕がみられない小片で，一応磨石の破片としておく。なお，本稿では，楕円形の自然礫を素材とし，その周縁もしくは，平坦な表・裏面に敲打痕を有するものを敲石，主に磨痕のみが残されるものを磨石と呼ぶ。

1は，握りやすい楕円礫の長軸両端を機能部として使用している。両端とも，敲打の集中によって安定した使用面が形成されている。2は，一方の平坦面に，敲打による浅い凹みが2箇所並んで残されている。3は,前述したように石皿に近接して出土したもので，やや厚手・大形の斑栃岩の亜円礫を用いている。破損しているが，残された周縁には，連続した敲打痕が認められ，その周辺には磨痕がみられる。また，上部の平坦面には敲打の集中による凹みが中央に大きく残り，他にも2箇所の小さな敲打痕がある。5～8は，いずれも，その平坦面，周縁の一部に敲打痕が認められるものである。8は小形ながら，台石と呼ぶべきものともいえる。なお，5は弥生中期の遺構である溝5より出土しているが，その形態や，斑栃岩という石材の共通性から，縄文晩期のものとしてここに含めた。

c．磨製石斧（第43図，2・3）

2点認められた。2は刃部と上半の約3分の1を欠失する。断面形が概ね正円形を呈することから，乳棒状石斧の頭部片と考えられる。3は，刃部の破片であり，全体の約2分の1が残る。刃部端には使用時の細かい刃こぼれが認められ，刃部周辺には両面に顕著な擦痕が観察される。

d．楔形石器（第44図1～7）

7点出土している。C11・12区からの出土が多い。1は，唯一頁岩製である。周縁につぶれ状

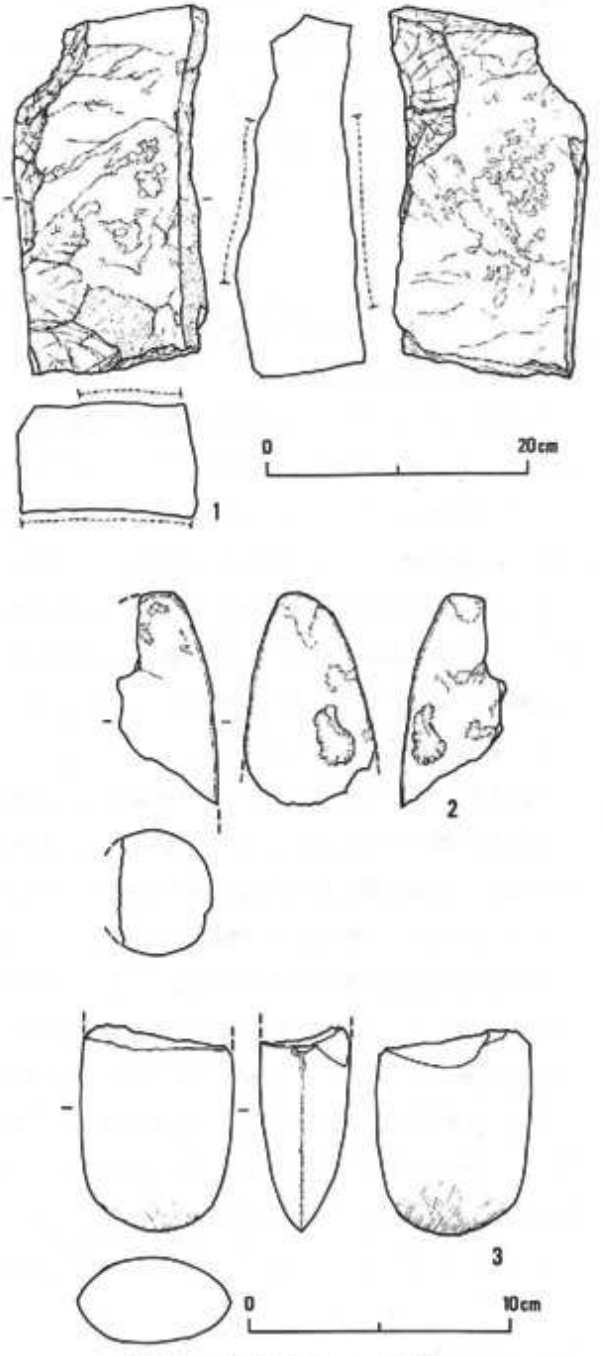
の小剥離が多く認められるものの，截断面，切断面は認められず，完形である。2・3は，共に一方の側縁に截断面の残るものである。7は，1～3と同様に扁平で長方形の平面形を呈する形態ながら，非常に大形である。4・6は，1～3・7と同様に一対の相対する側縁に，両極打法によると思われるつぶれ状の小剥離が多く存在し，截断面も有しているが，著しく厚手の一群である。やはり，厚手で全面が截断面ないしは折断面状となっている5と共に，前述の小形の一群とはやや異なる様相を呈している。これらは，ある一面から捉えるならば，石核としても考えることができるといえよう。しかし，本遺跡内においては，これらから生じたと考えられる剥片がごく数点しか出土していないため，5も含めて楔形石器として考えておきたい。

e．削器（第45図1）

1点のみ出土した。前述したように，石皿製作時に生じた剥片を素材とする。縦長の剥片を用いており，左側縁に残る小剥離は刃こぼれ状のものではなく，小さく不安定ながらも削器の刃部形成を意図した調整加工であるといえよう。

f．石器未製品（第45図2）

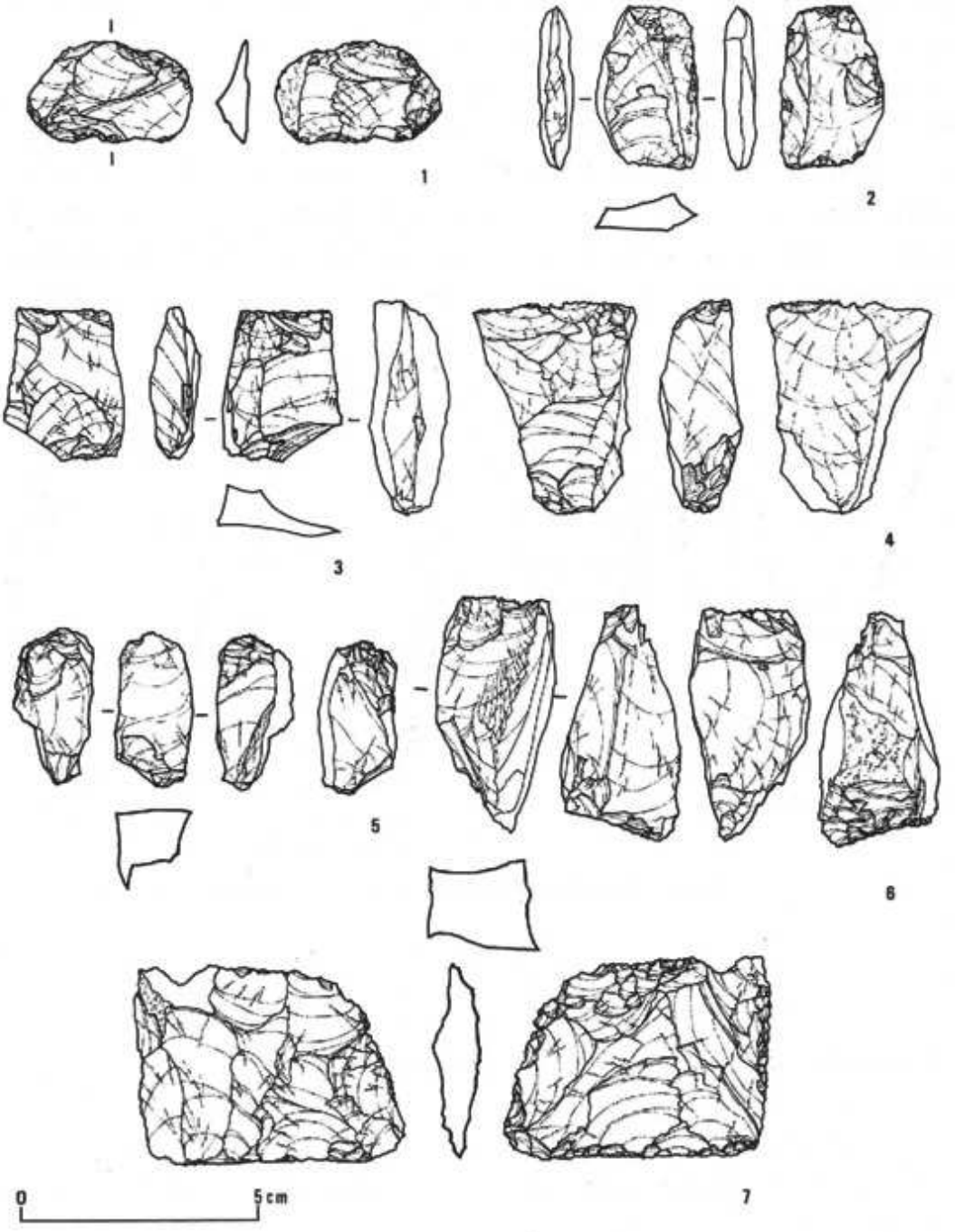
周縁からの不規則な剥離によって，整形されつつある粘板岩の剥片である。石器の器種は特定し得ない。



第43図　石器実測図・2（縄文）
石　皿・磨製石斧

3）石製品（第46図）

本遺跡出土の該期の石製品として石棒がある。総数は，小片も含めて18点あり，うち13点を図示した。石材は，全て結晶

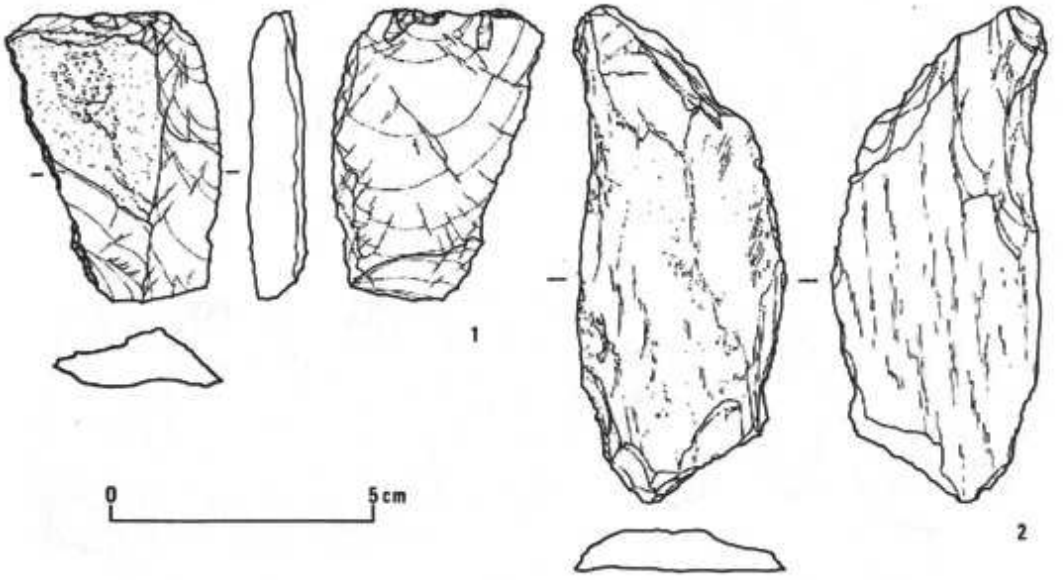


第44図　石器実測図・3（縄文）

楔形石器

片岩を用いている点が注意される。分布は，E区およびA３・４区，A11・12，C11区など，先述した該期の土器・石器の分布と同様の様相を示す。

形態は，断面形が正円に近い楕円形を呈し，長径は７～８cmを測るものが多い。１～４は，大根のぶつ切り状に折損して出土している。５～11も同様の断片であり，これらはさらに節理面によっても折損している。12・13は，末端の形状を示すものと思われ，この２点をみる限りでは，装飾的な加工はなかったと考えられる。なお，13には、敲打痕と思われる凹みがあり，敲石に転用されていたと考えられる。断面形が他に比して扁平なのはそのためか。なお，同様の転用例は，大阪市長原遺跡(森・松尾・山中1983)においても認められる。（大下）



第45図 石器実測図・４（縄文） １：削器，２：石器未製品

第８節 小 結

本章の小結として,土器・石器について簡単にまとめておく。

１）土器類について

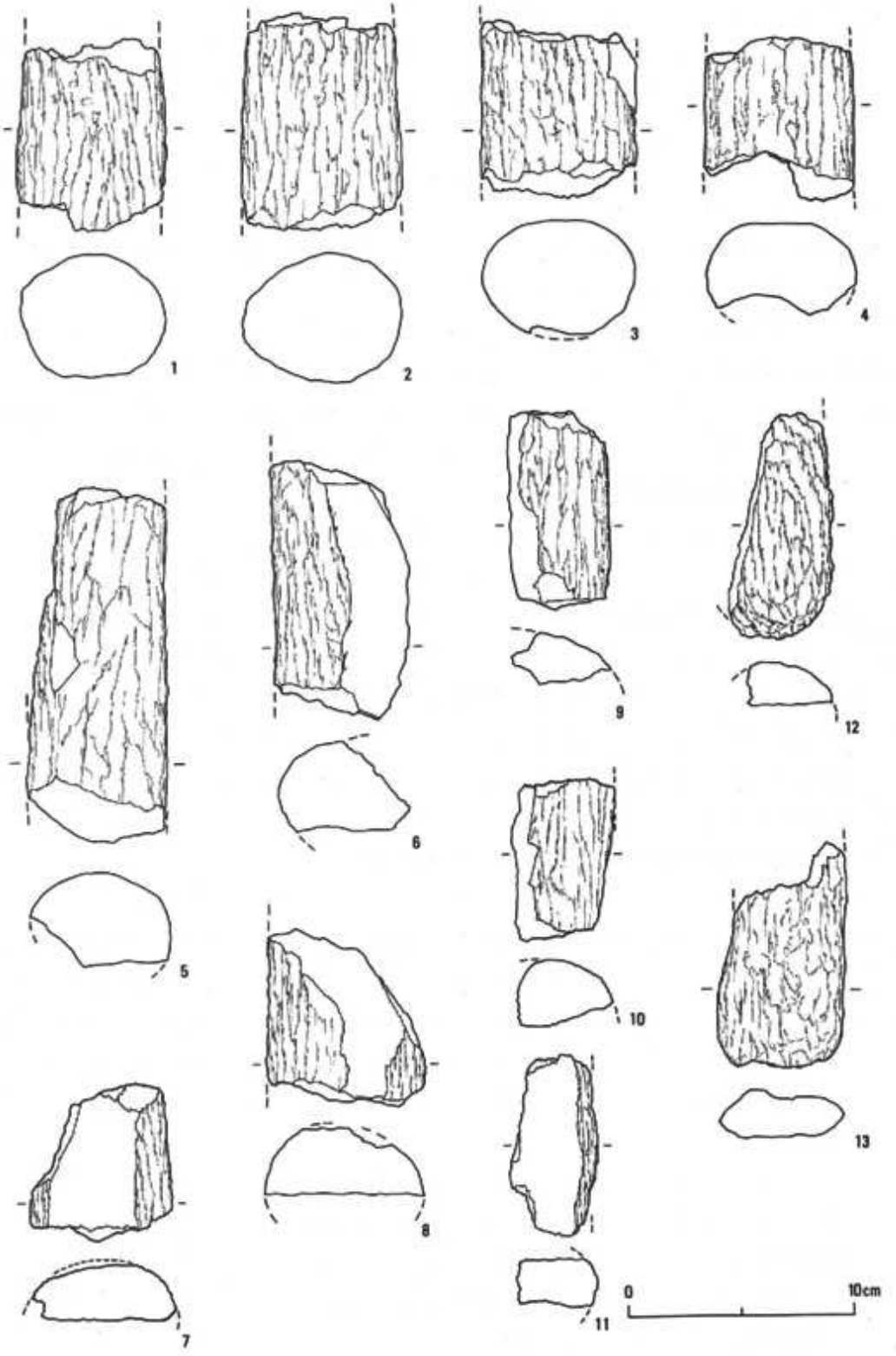
今回出土した西群・東群の刻目凸帯文土群について，両群を比較検討した結果を各々分析項目ごとに列挙しながら以下まとめてみる。

a．胎土について

胎土A・Bの比率が西群では４：６であるのに対して，東群では３：７近くになっており，胎土Bの割合の増加が窺える。

b．器種構成

深鉢・浅鉢・壺の率は，西群86.4%・11.0%・2.5%に対して東群90.7%・4.7%・4.7%と



第46図　石棒実測図

なり，東群での浅鉢形土器の減少を指摘することができる。

そして，胎土A・Bそれぞれでの構成をみると，西群胎土Aでは深鉢・浅鉢で75.9%・24.1%となるのに対して，胎土Bでは浅鉢はなく深鉢・壺で95.3%・4.7%となり，胎土による器種構成の偏りが明らかであった。一方，東群をみると，胎土Aでは深鉢・浅鉢・壺が85.7%・7.1%・7.1%となり，胎土Aの中でも浅鉢の減少が指摘できる。また，胎土Bでは深鉢・浅鉢・壺が93.1%・3.4%・3.4%となる。

東群における器種の偏りは明瞭ではないが，胎土Aの壺が浅鉢との中間形態的であることなど，やはり胎土差による器種構成の違いを窺うことができる。

さらに東群の特徴の一つとして，小形一条凸帯深鉢a 2・b 3類の資料がある。この小形深鉢は東群深鉢全体の12.8%，とくに胎土Aでは4点33.3%にも達する。そして東群全器種の中でも浅鉢・壺を凌ぎ11.7%を占める。つまり，東群での胎土A減少化傾向の中において，これら小形一条凸帯深鉢の存在が目を引く。また，この中には口縁端に刻目をもつものがあり注目される。

c. 深鉢形土器の器形変化

全体に器形の明らかなものが少なく，数量的な検討が不十分であったが，口縁部の外反傾向と胎土との関係における西・東群の差異について，いくつか傾向を見てとることができる。

口縁外反度については，頸・胴部屈曲タイプ(a類)とのかかわりがあるが，屈曲するものが必ず外反するかといえば，そうでないものもあり，とくに胴部片のみでの判断は難しい。したがって，口縁部片のみでみると西群においては，胎土Aを中心に口縁外反するものが多い。一方，東群では，外反するものは少なく，内湾から直口タイプが大半を占める。また，器形と胎土A・Bとの関係については，器形Ⅱb 3類がすべて胎土Bであることが注目できる。このタイプはいわゆる『長原式』の典型のものであろう。

d. 口縁部凸帯貼付け位置と形態について（図版第45）

今回もっとも胎土A・Bの差異を認めうる点である。

西群胎土Aにおける口縁部凸帯各類の構成は，凸A46.4%・凸B39.0%・凸D14.6%の順となり，凸Cはない。胎土Bでは，凸B77.0%・凸A11.5%・凸C11.5%となり，凸Dはない。

東群胎土Aでは，凸A66.7%・凸B8.3%・凸D25.0%となり，西群の場合と比べると，凸Bの率が低いものの凸Cがないことなど全体として同じ傾向にある。胎土Bでは，凸B74.1%・凸A11.1%・凸C7.4%・凸D7.4%となり，凸Dが1点含まれるもののほとんど西群の場合と同じである。

このように胎土A・Bの中で凸帯分類を行うと，主体は胎土Aで凸A・D，胎土Bで凸BおよびC・Aとなる。つまり，胎土Aには凸Cが，胎土Bには凸Dがないことも考え合わせると，胎土A深鉢の口縁部は凸A・D，胎土B深鉢の口縁部は凸B・Cで特徴づけられると言えよう。

そして，各類の構成においては，西群と東群との間に明確な差を見出すことはできない。

e. 浅鉢形土器について（図版第46）

西群に対して東群において浅鉢が減少することはすでに記した。さらに西群・東群それぞれで

の浅鉢の内容についてみると，下記のようにまとめることができる。

① 西群において，浅鉢はすべて胎土Aであり，その構成は，肩部が屈曲するもの(Ⅰ類)がわずかで主体は椀皿形を呈している。

② 東群では浅鉢が激減する。したがってその内容は明らかではないが，肩部で屈曲するⅠ類はなく椀皿形が主流と思われる。また，大形で口縁外反の浅鉢や壺との中間的なものもある。胎土Aが大半である。

f．壺形土器について

小形・大形2種類の壺のうち口縁部に凸帯が巡る大形壺については，前記したように深鉢口縁の中に混じっている可能性が高い。したがって東群の器種構成における壺の比率の増加については多少の違いはあるかもしれないが，浅鉢の場合と反対に，ほとんどが胎土Bであること，大形壺が存在することを指摘することができる。

g．底部について（図版第43・44）

底部についても胎土A・Bによる形態差を指摘できる。胎土AではⅣ類が主体であり西群胎土A中77.8%，東群胎土A中40.0%を占める。一方，胎土BではⅠ・Ⅱ類が主体となり，西群胎土B中36.4%・48.5%，東群胎土B中50.0%・31.3%となり，Ⅰ・Ⅱ類を合わせると8割以上になる。また，胎土Aの主体であるⅣ類が1～2割含まれていることも注目できる。

そして，胎土AにはⅠ類が，胎土BにはⅣ類が認められないことも考え合わせると，胎土A・Bと形態との相関関係が明白である。

ところで，底部は土器製作技法[3]との関連で注意される部分である。本報告ではその点について述べるまでに至らなかったが，底部の製作技法を想定しうる個体について検討を行ったので若干の説明を加えておく(図版第43・44)。

これによれば，胎土Bの底部については形態の差があれども製作技法は同一であると判断できた。その順番は下記に示すとおりである。

①ドーナツ状の粘土の輪をつくる。底部外周部となる。

②内底面，見こみ部分になる円盤状の粘土を接合。これを基に胴部を組み上げていく。

③最後に外底面の凹部(①粘土輪の凹部)に粘土を充填する。

なお，大方の底部の外周面は，胴部の縦方向のケズリ調整が行われた後に，ナデ・オサエなどによって整えられている。また，底部外周から胴部にかけて下から上への強いナデ(棒状工具によりミガキ状になる)をもつものがあるが，これらの調整は恐らく外底面の粘土充塡時に行われたものと思われる。

なお，胎土A底部については資料が少なく，今後の課題としたい。

以上，各分析項目ごとに西・東群の比較検討を行いながらまとめてみた。そしてその結果，まず，西群・東群の関係を浅鉢の減少[4]・形態変化から，時間的前後関係に置くことがもっとも妥当であると判断する。次に，胎土A・Bの関係であるが，西群から東群へと移る時間的側面で検討されるべき問題と土器の形態との関係，つまり地域性の側面から検討すべき問題とが相互に関

連していると理解できる。これらについては考察において再度触れることにする。　（南）

2）石器・石製品について

a． 石　器（第9表）

今回の調査で出土した該期の石器群についていくつかの特徴を述べてみたい。

器種構成は，前述したように石皿・敲石・磨石・磨製石斧・楔形石器・削器・石器未製品がみられる(第9表)。他の同時期の遺跡と比較して，最も著しい相異点は，石鏃が全く出土しなかったということである。本遺跡では，すでに10次に及ぶ既応の調査においても，石鏃の出土総点数は，僅かに4点を数え得るのみであり，石鏃が石器組成の主体を占める大阪市長原，茨木市耳原など，同時期の他遺跡とは際立った相異をみせる。

第9表　石器組成表（縄文）

器　種	点数	%
石　皿	1	4.2
敲　石	8	33.3
磨　石	4	16.7
磨製石斧	2	8.3
楔形石器	7	29.2
削　器	1	4.2
未製品	1	4.2
計	24	100.1

一方で，共通点も多い。その第一としては，楔形石器が安定して存在し，29%を占める。これは，前述の長原遺跡において山中一郎氏によって指摘された傾向で，岡山大学構内遺跡においても石鏃とならんで，組成の主体を占めることが報告されている(栄1986)。しかし，後者においては，楔形石器を両極打法による石核として考えており，本遺跡とは，やや様相が異なっているといえよう。また楔形石器の評価については，他の時期の同器種のあり方が不詳である現状では当該期のみの特徴とすることは早計であるといえよう。岡山大学構内例は，弥生前期の資料も混在するものであり，本遺跡と同列にはあつかい得ない。

第二に，石皿・敲石といった植物質食糧の調理加工具が依然として多く使用され，54%の高率で存在する点がある。これも，やはり，長原遺跡において同様の傾向が認められる。

今回の調査において出土した，縄文晩期の石器群は，石鏃がみられない点を除けば，縄文時代に比較的一般にみられる石器組成であるといえる。

b． 石 製 品

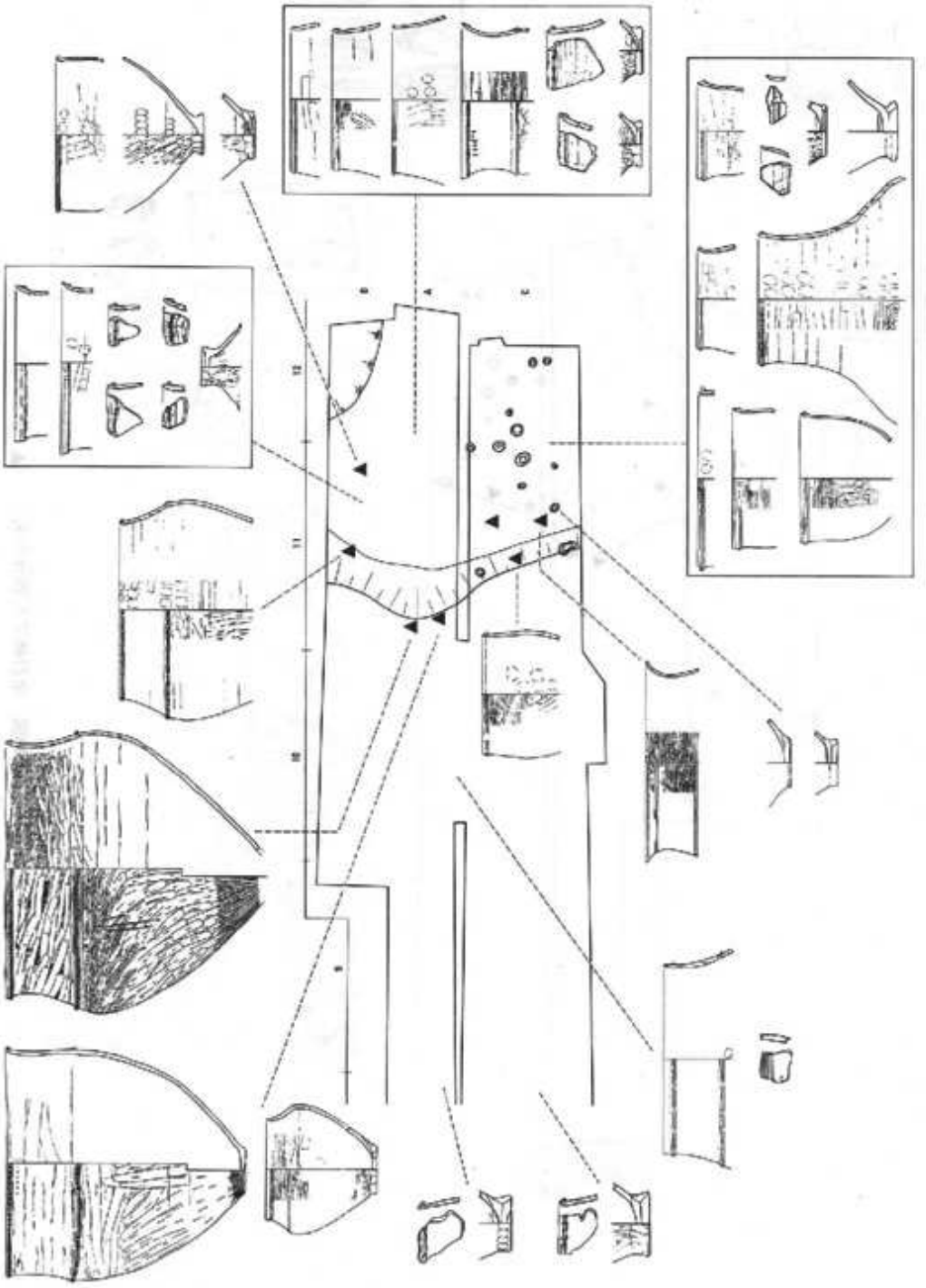
本遺跡の今回の調査では，結晶片岩製石棒の輪切り状の破片が，比較的まとまって出土した。これらは，全て凸帯文土器に伴うものであり，同様に凸帯文土器に結晶片岩製石棒が多く伴う遺跡として，すでに大阪市長原遺跡が報告されている。この他にも，大阪府池田市宮ノ前遺跡(富田1967)，茨木市東奈良遺跡(東奈良遺跡調査会1980)，堺市船尾西遺跡(堺市博1985)，兵庫県姫路市丁・柳ケ瀬遺跡(岡崎ほか1985)，堂田遺跡(松下1984)，奈良県橿原遺跡(末永1960)，滋賀県大津市滋賀里遺跡(田辺ほか1972)などで，同様に結晶片岩あるいはそれに類似する片岩系の石材を素材とし，全長30～50cm，断面形が長径10cm弱のやや扁平な形態をもった石棒が出土している。これらは，数点の表採品を除いて，凸帯文土器に伴出しており，前述したような特徴を有する石棒は，凸帯文土器期に特徴的な石製品であることに指摘しておきたい。

なお，近畿地方における石棒の系譜とその出現と消長については，別稿を準備中である。

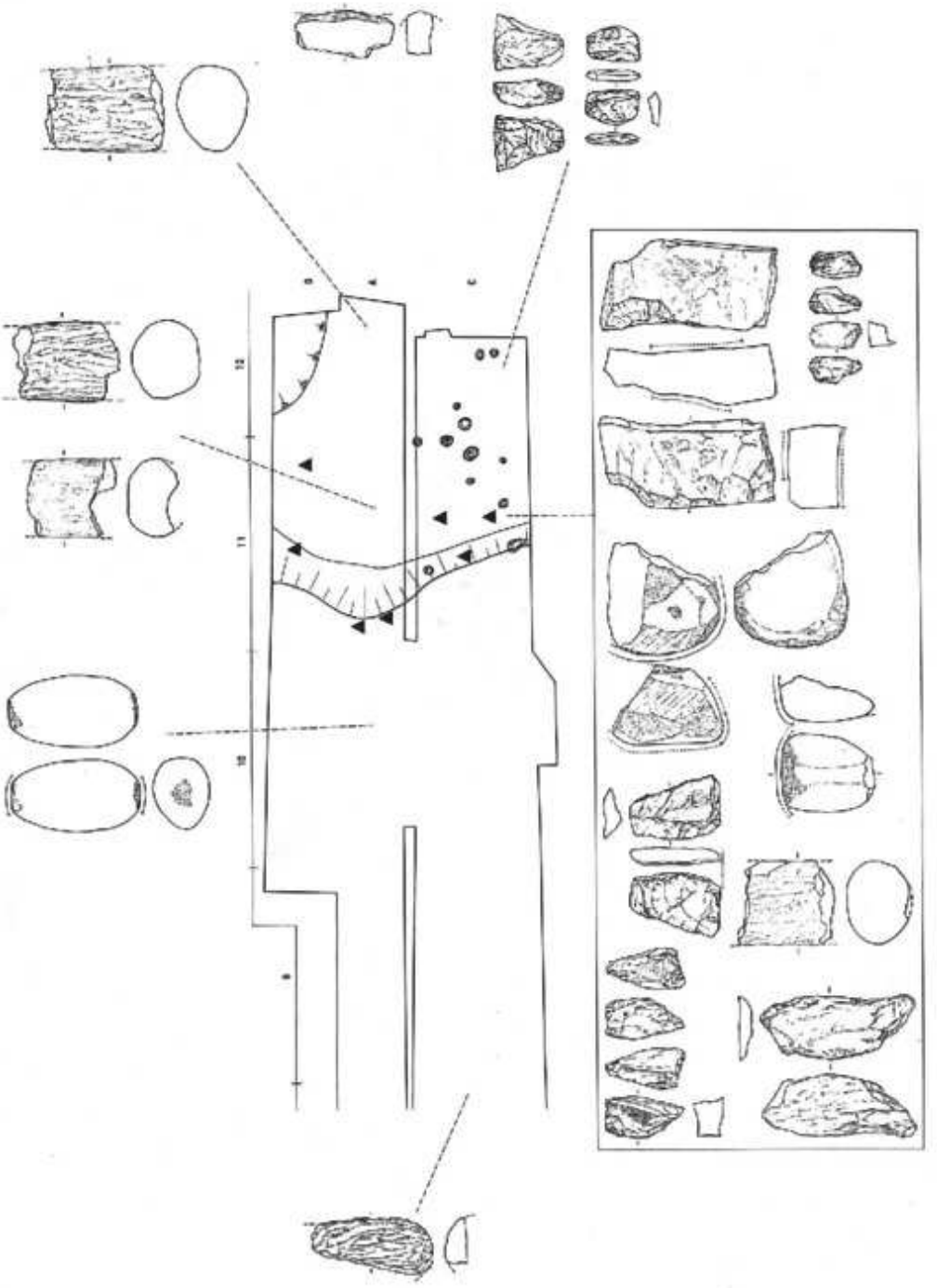
（大下）

3）東地区における土器・石器出土状態（第47・48図）

以上，土器・石器についてまとめを記したが，このうち東地区の資料については比較的原位置



第47図　東群縄文土器分布図　（▲：土器溜り）



第48図 東群縄文石器分布図 （▲：土器溜り）

を保った状態で出土した。これは遺構の部分でも記したように，土壙群・土器溜りなどの分布からも推察できよう。また，この周辺が遺跡の立地する自然堤防上でももっとも安定しているところでもあり，住居を構えるのに適していたと思われる。しかし，一方で自然堤防は河川流路の変化によってたちまち崩壊する危険性もはらんでいた。これは本遺跡においても層序の検討から窺うことができる。したがって東地区の土壙群が上・下層に分かれることは，当地周辺が洪水などによって一時無人化することがあったということになる。しかし，再び同地に人々が生活しており，この周辺が当時重要な地域であったことを窺い知ることができる。　（南）

縄文土器観察表

西群　胎土A　深鉢形土器 口縁部

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
A 2 1	9	灰黒色	◎◎	口縁端面取り，刻小V。凸A三（7－4）。刻O（2－3－$^{3}/_{1}$）。外面ヘラ状工具によるナデ，内面ナデ。		25- 1	37上 - 1
A 4 132	9	暗灰褐色 灰褐色	◎◎	口縁端面取り，刻波状。凸A三（7－5），刻D（3－4－$^{3}/_{2}$）。内外面ナデ。		- 2	- 2
E 3		淡褐色 灰白色	○○	口縁端一部面取り，刻線状？　凸A三（6－3），上下面ナデ丁寧。刻O（2－3－$^{3}/_{1}$）。外面横ナデ，口縁内面横ナデ。		- 5	- 3
A 3 1	9	暗茶褐色 灰褐色	◎◎	口径25.2。口縁端面取り，ナデ丁寧。凸A台（9－5），接合痕部分的に残る。刻D(7－8－$^{1}/_{1}$)。外面板状工具によるナデのあと部分的に指？ナデ。内面横指？ナデ。	外面スス付着	- 3	- 5
E 49		黄灰色 黒色	◎◎	口径35.6。口縁端尖。凸A三（7－5），下面接合痕残る。刻D（6－4－$^{3}/_{2}$）。外面横ナデ主体，縦指？ナデ一部。内面板状工具による横ナデ，一部ヘラ？ミガキ状を呈す。		- 4	- 6
A 3 5	9	暗灰色	◎◎	復元口径30～35。口縁端丸，ナデ丁寧。凸A～D やや歪三（12－4）。上下面ナデ丁寧。刻O(2－3－$^{2}/_{1}$)。内面口縁下比較的明瞭な横ナデ。外面横ナデ。		- 6	- 4
E 31		灰褐色	△△	口縁端やや尖。凸A三（7－3）。刻不明。		- 7	- 7
A 4 31		淡黄褐色 淡灰色	◎◎	口縁端面取り。凸A三（7－4），上面強いナデ，下面接合痕残る。刻D（4－4－$^{3}/_{1}$）。		- 8	- 8
A 3 8	9	暗黄褐色 灰黄色	△△	口縁端丸。凸A台（8－5）。刻D（7－6－$^{4}/_{3}$）。全体に磨滅。		- 9	- 9
E 34		淡灰褐色 黒灰色	◎◎	口縁端丸。凸A三（5－2），上下面を同時にナデ。刻有無不明。外面横ナデ丁寧，内面横ナデ強。	内・外面黒斑	-10	-11
E 50		灰褐色 淡灰褐色	○△	口縁端丸～尖。凸A台（8－4），上下面を同時にナデ。刻無。磨滅顕著		-11	
E 26		灰白色	◎◎	口縁端丸。凸A三（8－5），上下面をつまむように調整，上面ナデ丁寧。刻有無不明。内外面ナデ。		-12	-10
E 33		淡灰褐色	○○	口縁端丸。凸A三（6－3），上下面ナデ丁寧。刻有無不明。外面横板ナデ？		-13	

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
E 55		灰褐色 暗黒褐色	◎◎	口縁端丸。凸A下三（10－3），上下面ナデ丁寧。刻D（3－5－$^{2}/_{1}$）。内外面横ナデ。		-14	
A4 150		灰白色	◎◎	口縁端丸。凸A台（7－4）。刻D（4－5－$^{3}/_{2}$）。内外面ナデ。	刻目ヘラキズ	-15	
A4 133		灰白色	○◎	口縁端面取り，刻？ 凸A台（6－3），上下面同時にナデ？ 刻D（4－3－$^{3}/_{2}$）。内外面ナデ。		-16	
E 56		灰黄橙色 灰褐色	◎○	口縁端面取り気味，丁寧。凸A三（8－4）。上下面ナデやや雑。刻V？ 磨滅顕著。		-17	
E 48		灰褐色 灰黒色	◎◎	口縁端やや尖。凸A三（5－3），上下面ナデ。刻有無不明。内外面ナデ，一部に横方向の板状条痕。	小形品？	-18	
E 7		暗茶褐色 暗黒灰色	○△	口縁端丸。凸A三（8－5），上面ナデ，下面接合痕明瞭。刻不明。内面横ナデやや強い。外面横ナデ。		-19	-12
E 59		灰白色	◎◎	口縁端尖。凸B三（10－5），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻O（4－3－$^{3}/_{2}$）。 内面横ナデ顕著。		-20	-13
A4 32		灰茶色	○○	口縁端尖。凸B三（10－4），上面と端部同時調整，下面一部接合痕。刻V（2－5－$^{2}/_{1}$）。磨滅顕著。		-21	-14
A4 44		明褐色	○◎	口縁端尖。凸Bやや垂三（8－4），上面と端部同時調整，下面比較的丁寧。刻有無不明。磨滅顕著。	小形品？	-22	-15
A4 34		淡赤褐色 淡黄褐色	◎◎	口縁端尖。凸B下三（8－4），上面と端部同時調整，下下面接合痕明瞭。刻無。内外面横ナデ。	小形品？	-23	-16
E 38		淡灰白褐色	△△	口縁端尖。凸B？（7－?），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻有無不明。内外面ナデ。磨滅顕著。	粘土外傾	-24	
A4 107		灰褐色	○○	口縁端丸。凸B三（10－4），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻有無不明。端部内面横ナデ。		-25	-17
E 613		淡灰色	○◎	口縁端尖。凸B三（8－4），上面と端部同時調整，下面接合痕。刻有無不明。磨滅顕著。		-26	
E 21		暗灰褐色	◎○	口縁端やや丸。凸B三（10－5），上面ナデ，下面ナデ一部接合痕。刻D（4－4－$^{3}/_{2}$）。詳細不明。		-27	
E 44		灰茶褐色	○◎	口縁端内側に凸粘土かぶり丸味。凸B？台（7－3），上下面ともナデ。刻有無不明。		-28	
A4 122		淡黄橙白色 暗灰褐色	○○	口縁端丸。凸B下三（10－4），上下面ともナデ丁寧。刻不明。磨滅顕著。		-29	
E 30		灰白黄褐色	○○	口縁端尖。凸B垂三（14－4），上面と端部同時調整，下面一部接合痕。刻O(2－2－$^{3}/_{1}$)。外面ナデやや強。	貼付凸帯ではない？	-30	
E 53		灰白色 灰黒色	○○	口縁端尖。凸B亜三（13－4），上面と端部同時調整，整，下面一部接合痕。刻O（2－3－$^{3}/_{1}$）。口縁内面ナデやや強。	凸D？	-31	-18
E 35		灰褐色	◎◎	口縁端尖。凸B亜三（12－4），上面と端部同時調整，下面ナデ丁寧。刻有無不明。内面ナデ強。	貼付凸帯ではない？	-32	
A4 53		青灰色	○○	口縁端尖。凸B三（11－5），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻無。磨滅顕著。	二次焼成？	-33	
E 60		灰黄白色	○○	口縁端尖。凸B垂三（12－4），上面と端部同時調整。刻有無不明。	凸D？	-34	
E 67		淡褐色	△△	口縁端尖。凸B台（7－4），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻V（2－4－$^{3}/_{1}$）。磨滅顕著。			
E 78		淡茶白色	△○	口縁端尖。凸B垂三（12－4），上面と端部同時調整，下面ナデ丁寧。刻O（2－3－?）。磨滅顕著。	貼付凸帯ではない？		
A4 141		黄灰色	○△	口縁端丸。凸D垂三（14－4），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻O（3－5－$^{1}/_{1}$）。口縁内面ナデ。		-35	

E　27		黒茶褐色 淡茶褐色	○○	口縁端丸。凸D垂三（17－4），上面強いナデあと端部を調整，下面接合痕残る。刻D（5－5－3/2）。口縁内面ナデ。		-36	-20
A 4　39		淡灰褐色 淡褐色	◎○	口縁端丸。凸D乗三（20－4），上面ナデ，下面接合痕残る。刻O（5－4－3/2）。口縁内面ナデ強。外面横板ナデ，内面ナデ。		-37	-19
E　32		灰白色 明赤褐色	○△	口縁端尖。凸D垂三（15－4），上面ナデ，下面接合痕明瞭。刻D（2－4－5/2）。外面横板ナデ。		-38	-21
E　66		淡灰黄色 灰褐色	◎◎	一条凸帯a2。口径26.0。口縁端丸。凸D垂三（19－4），上面ナデ，下面接合痕残る。刻D（3－3－5/2）。口縁内面ナデ強，外面上半板横ナデ（巾7mm），外面下半ケズリ，内面全体横ナデ強い。		-39	-23
E　40		暗灰褐色 灰褐色	◎○	口縁端丸。凸D垂三（19－5），上面ナデ強，下面ナデ雑接合痕残る。刻D（3－3－？）。口縁内面ナデ強，外面横ナデ。		-40	-22

西群　胎土B　深鉢形土器　口縁部

E　63		暗茶褐色	◎△	二条凸帯a1。口径35.5，下部凸帯径37.0，胴部径37.5，器壁厚1.0前後。口縁端丸，部分的面取り。上凸A三（8－5），上下面ナデ，下面一部接合痕。下凸三（9－6），上下面ナデ，下面一部接合痕。上刻α（4－4－1/1），下刻α（4－4－1/1）。外面上半横板ナデ，下半ケズリ，一部棒状工具調整痕，内面横ナデ強。	胴下半にススー炭化物付着	26-1	38-5
E　45		暗茶褐色	○○	口縁端尖。凸A台（10－5），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻D（4－5－2/1），外面板ナデ。	内面ススー付着	28-1	37下-1
E　29		暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸A三（10－5），上下面ナデ調整，下面一部接合痕。刻不明。		-2	
A 4　38		淡黒褐色	◎○	口縁端尖。凸A三（7－4），上下面ナデ調整，一部接合痕。刻V（2－4－1/1）。		-3	-3
E　57		暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸A三（8－3），上下面ナデ調整。刻有無不明。磨滅顕著。		-4	
E　28		暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸A三（7－4），上下面ナデ調整。刻無。磨滅顕著。		-5	
A 3　14	9	暗褐色	◎◎	口縁端丸。凸A三（9－5），上下面を同時調整，下面接合痕残る。刻α（4－5－3/2）。			
E　602		暗茶褐色	◎○	口縁端尖。凸A三（6－4），上下面をつまむようにナデ，接合痕残る。刻有無不明。内外面ナデ。	小形品	-6	
E　2		茶褐色 淡茶褐色	◎◎	口径38.0。口縁端尖。凸B下三（10－6），上面と端部同時調整，一部凸Aあり，下面ナデ丁寧。刻α（5－4－3/2）。内外面ともナデ丁寧。	内面黒斑有	26-2	
E　43		暗茶褐色 茶褐色	◎△	二条凸帯a1。口径35.3，下部凸帯径34.4。口縁端尖。上凸B三（8－6），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。下凸下三（12－5），上面ナデ強，下面接合痕残る。上刻V（2－6－2/1），下刻V（2－5－3/2）。外面上半横板ナデ（巾2cm前後），下半ケズリ，内面板ナデ～ナデ，粘土紐の接合痕明瞭。	外面下部凸帯付近黒斑	-3	38-1
E　42		暗茶褐色	◎○	二条凸帯a2。口径28.0，下部凸帯径34.0，胴径30.2。口縁端丸。上凸B～A下三（7－5），上下面をナデ調整。下凸三（9－4），上面ナデ強，下面接合痕残る。外面上半横ナデ丁寧，下半ケズリ（巾約1cm），内面粘土紐接合痕明瞭，板ナデ～ナデ。上刻O（不規則－3/2），下刻α（3－3－3/2）。		27-1	38-2

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
E　8		暗茶褐色	◎○	二条凸帯a2。口径33.2，下部凸帯径36.2，胴径37.4。口縁端尖。上凸B三（10－5），上面ナデ，下面接合痕残る。下凸下三（12－5），上面ナデ強，下面接合痕残る。上刻2種類O（3－4－$^{2}/_{1}$），D（2－3－$^{5}/_{3}$）。下刻2種類O（4－4－$^{5}/_{4}$），D（2－3－$^{3}/_{2}$）。外面上半縦板ナデ（巾約1.2cm），下半ケズリ（巾0.7～1.3cm），内面調整雑，指頭圧痕顕著。口縁端内面横ナデ強。		- 2	38- 3
E　14		暗茶褐色	○○	口縁端尖。凸B下三（7－3），上面ナデ丁寧，下面接合痕残る。刻V（1－2－$^{3}/_{1}$）。内外面横ナデ丁寧。	小形品	28- 7	37下 - 6
E　54		茶褐色	○○	口径9.7。口縁端尖。凸B～A三（7－3），上面ナデ下面接合痕残す。刻V（2－3－$^{3}/_{1}$）。外面横ナデ。	小形品	- 8	- 7
E　4		黒褐色 淡茶褐色	◎◎	口縁端尖。凸B下三（11－5），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻D（3－5－$^{3}/_{2}$）。外面不定方向ナデ，内面横ナデ指頭圧痕顕著。	外面全体にススス付着	-10	37下 - 8
A4　42		暗褐色 灰褐色	◎○	口縁端丸。凸B下台（12－5），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻V（2－8－$^{5}/_{3}$）。内外面板ナデ。		-11	- 9
E　18		淡茶褐色 茶褐色	○○	口縁端尖。凸B下三（11－5），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻D（2－6－$^{3}/_{1}$）。磨滅顕著。		-12	- 15
E　23		暗茶褐色	◎△	口縁端尖～丸。凸B三（9－4），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻有無不明。内外面横ナデ丁寧。		-13	- 16
E　52		暗茶褐色 茶褐色	◎◎	口縁端尖～丸。凸B下台（12－4），端部と同時調整，下面接合痕明瞭。刻D(4－5－$^{3}/_{2}$)。外面横ナデ丁寧。		-14	- 17
E　13		茶褐色	○○	口縁端丸。凸BC台（9－3），上面が端部にかかり気味に調整，下面接合痕残る。刻D(2－4－$^{2}/_{1}$)。内外面横ナデ。		-15	
A4　102		黒茶褐色 淡赤褐色	○○	口縁端尖。凸B三（11－5），上面と端部同時調整，下面ナデ接合痕残る。刻不明。磨滅顕著。	外面ススス付着	-16	- 20
A4　27		茶褐色 淡赤褐色	○○	口縁端丸？凸B三（8－5），上下面ともナデ丁寧。刻不明。		-17	
E　51		明茶褐色 茶褐色	◎○	口縁端丸。凸B丸（7－3），下面接合痕残る。刻有無不明。磨滅顕著。		-18	
A4　33		暗褐色 灰褐色	○○	口縁端尖。凸B三（10－4），上面と端部同時調整，下面ナデ，接合痕一部残る。刻無。外面横板ナデ，内面ナデ。	外面ススス付着	-19	- 14
A4　41		灰茶色	△△	口縁端尖。凸B三（11－4）。刻不明。磨滅顕著。		-20	
E　24		暗茶褐色	○○	口縁端尖～丸。凸B三（6－3），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻V（1－3－$^{3}/_{1}$）。内外面横ナデ。	小形品？	-21	- 10
E　15		灰色 明赤褐色	○○	口縁端丸。凸B下三（5－2），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻有無不明。磨滅顕著。	小形品？	-22	
A4　40		黒灰茶褐色	○○	口縁端尖。凸B三（9－3），上下面ナデ丁寧。刻無。口縁内面横ナデ強。磨滅顕著。		-23	- 11
E　39		暗茶褐色	○△	口縁端丸。凸AB台（6－4），上下面をつまむように調整，一部接合痕残る。刻D(2－3－$^{3}/_{2}$)。磨滅顕著。	器形b深鉢？	-24	- 12
E　36		暗灰褐色 暗茶褐色	○△	口縁端尖。凸B三（5－3），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻不明。磨滅顕著。	小形品	-25	
A4　104		淡茶褐色	○○	口縁端尖。凸B三（10－4），上面と端部同時調整，下面ナデ接合痕残る。刻不明。磨滅顕著。		-26	
A3　2	9	黒褐色 黄茶褐色	○○	口径25～30。口縁端丸。凸B三（8－2），上下面ナデ下面接合痕一部残る。刻V（2－5－$^{5}/_{3}$）。外面横板ナデ雑，内面板ナデ強，内面上部指頭圧痕顕著。		-28	- 18
E　5		暗茶褐色	○△	口縁端丸。凸B台（6－4），上下面つまむよう調整雑，一部接合痕。刻D（4－4－$^{2}/_{1}$）。内外面ナデ雑。	器形b	-29	- 13

E　612		暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（10−4），下面接合痕。刻有無不明。磨滅顕著。		-30	
A4　49		赤茶褐色	○○	口縁端尖。凸B三（8−4）。磨滅顕著，詳細不明。		-31	
A3　4	9	黒褐色 灰褐色	◎○	口縁端尖。凸B三（10−5），上面と端部同時調整，下面ナデ接合痕残る。刻不明。内外面横板ナデ丁寧。		-33	-19
A4　56		黒褐色 淡茶褐色	○○	口縁端尖。凸B〜C三（12−4），上面と端部同時調整，内面ナデ強，下面ナデ接合痕残る。刻D（4−4−1/1）。外面縦方向板ナデ，内面磨滅顕著。		-34	-22
A4　54		黒褐色 灰黒褐色	◎○	口縁端尖。凸B下三（10−6），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻D（4−4−3/2）。外面ナデ。		-36	-26
E　6		暗茶褐色	○○	口縁端やや尖。凸B〜A台（9−4），上下面ナデ一部接合痕。刻D（8−6−2/3）。外面横ナデ。		-37	
E　11		灰茶褐色	◎○	口縁端やや丸。凸B三（9−6），上下面ナデ丁寧，刻D（2−3−3/1）。内外面横ナデ丁寧。		-38	-21
A4　13		明茶褐色	△○	口縁端丸。凸B？（10−3）。刻不明。磨滅顕著。		-40	
A4　55		黒褐色 暗茶褐色	◎◎	口縁端尖。凸B三（11−4），上面と端部同時調整，下面ナデ一部接合痕。刻D(3−3−2/1)。外面ナデ丁寧，内面ナデ，指頭圧痕顕著。		-41	-27
A3　10	9	暗茶褐色 淡褐色	○△	口縁端やや丸。凸B三（7−3），下面接合痕残る。刻不明。外面横板ナデ。		-42	
A4　901		淡赤褐色	○○	口縁端尖。凸B三（10−4），下面ナデ一部接合痕。刻不明。磨滅顕著。		-43	
E　70		暗茶褐色 茶褐色	○◎	口縁端尖。凸B下台（8−5），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻O（4−4−3/2）。内面横ナデ。		-44	
A4　142		明茶褐色 暗灰褐色	○○	口縁端尖。凸B三（9−3），上面と端部同時調整，下面ナデ。刻D（4−4−？）。		-46	
A4　43		茶褐色	○○	口縁端尖。凸B三（9−4），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻不明。磨滅顕著。		-47	
E　833		淡茶褐色	○△	口縁端尖。凸B三（6−2），上面と端部同時調整，下面接合痕残る。刻有無不明。磨滅顕著。	小形品	-48	
E　47		茶褐色 暗茶褐色	○△	口縁端尖。凸B？（8−5），下面一部接合痕。刻有無不明。内面横ナデ，外面磨滅顕著。		-49	
A4　128		灰褐色	○○	口縁端尖。凸B三（10−4）。磨滅顕著詳細不明。		-50	
E　77		淡茶褐色	○○	凸B三（？−3），上下面ナデ一部接合痕。刻不明。		-53	
A4　137		淡茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（7−4）。磨滅顕著詳細不明。		-54	
E　604		暗茶褐色	○○	凸B三（11−6），上下面ナデ調整，接合痕残る。刻無。			
A3　7	9	灰褐色	○○	口縁端尖。凸B三（10−5），磨滅顕著詳細不明。			
A2　2	9	暗黒茶褐色	○◎	口縁端丸。凸BA台（11−5），上下面ナデ丁寧。刻O（3−5−2/1）。内外面ナデ丁寧。	スス付着		-2
E　1		茶褐色	○○	二条凸帯a2。口径24.0，下部凸帯径26.7，胴径27.4。口縁端丸。上凸C三（9−4），上面粘土端部にかぶせ同時調整，下面ナデ一部接合痕。下凸三（10−6），上面ナデ，下面接合痕残る。上刻O（5−6−2/1）。下刻D（3−5−2/1）。外面上半横〜斜ナデ，下半ケズリ。内面粘土紐接合痕，指頭圧痕残る。口縁内面横ナデ強。		27-3	38-4
E　16		赤茶褐色 暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸C台(9−6)，上面端部にかぶせ同時調整，下面一部接合痕。刻V（2−4−3/2）。内外面横ナデ。		28-27	37下 -24
E　12		暗茶褐色 灰茶褐色	◎○	口縁端に凸粘土かぶせる。凸C三(9−5)，上下面ナデ，一部接合痕残る。刻D(4−4−1/1)。外面縦板ナデ（巾約1cm），内面横ナデ，粘土紐接合痕，指頭圧痕顕著。		-32	-23
E　22		茶褐色	○○	口縁端に凸粘土かぶさり尖る。凸C丸（10−5）。下面接合痕残る。刻V（1−4−5/2）。内外面横ナデ。		-35	-25

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
E 46		暗茶褐色	◎○	口縁端に凸粘土かぶさり尖る。凸C三（9−5），下面接合痕残る。刻無。外面横板ナデ縦板ナデ，内面横ナデ。		-39	
E 65		茶褐色 灰色	○△	口縁端に凸粘土かぶさり尖る。凸CB丸？（8−4）。磨滅顕著詳細不明。	二次焼成？	-52	
E 58		淡黒褐色 赤褐色	○○	口縁端に凸粘土かぶさり丸い。凸C丸（10−4），磨滅顕著詳細不明。		-55	
E 62		灰茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（10−4），上面と端部同時調整。下面ナデ。刻O(2−3−5/2)，外面横ナデ，内面横ナデ強。	胎土A？	-45	
A4 36		暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸BA三（10−5），上下面ナデ。刻有無不明。外面横ナデ。詳細不明。	胎土A？	-51	

西群　胎土A　深鉢形土器　胴部

E 617		明茶褐色 灰褐色	△○	Ⅱa2類。凸三（10−4），上下面ナデ一部接合痕。刻不明。磨滅顕著詳細不明。		30-29	
A4 101		淡赤褐色 黒灰色	○○	Ⅱa2類。凸下台（10−6），上面ナデ強，下面ナデ一部接合痕。刻D（3−4−3/2）。外面上半横ナデ，内面横ナデ。		-30	
E 75		明灰白色 灰色	○△	Ⅱb3〜4類。凸台（12−6），上下面ナデ。刻D（7−11−1/1）。外面上半縦ヘラキズ？下半ケズリ。内面ナデ丁寧。		-31	
E 830		灰白色 灰橙色	○○	Ⅱa2類。凸垂三（16−4），上面ナデ強，下面ナデ雑。刻O（9−8−1/1）。外面上半ナデ丁寧，内面ナデ丁寧。		-32	
E 509		灰褐色	◎◎	Ⅱa2類。凸垂三（10−3），上面ナデ強，下面接合痕残る。刻D（4−5−2/1）。外面上半横板ナデ，内面指頭圧痕残。		-33	
A4 35		淡赤褐色 灰褐色	○○	Ⅱa2類。凸三（10−5），上下面ナデ一部接合痕。刻D（4−4−1/1）。外面上半ナデ，磨滅顕著詳細不明。		-34	
E 90		灰白色 灰黒色	○◎	Ⅱa1類？凸垂三，上面ナデ強。刻不明。外面上半横ナデ丁寧。内面ナデ指頭圧痕残る。		-35	
E 823		暗灰茶褐色	◎○	Ⅱa1類。凸三（10−4），上面ナデ強，下面ナデ一部接合痕。刻V（2−4−2/1）。		-36	
E 503		暗灰褐色 灰色	○○	Ⅱb3〜4類。凸台（13−4），上面ナデ，下面接合痕残る。刻D（7−8−1/1）。外面上半ヘラキズ？内面ナデ丁寧。		-37	
A4 148		暗褐色 橙色	◎△	Ⅱa1類。凸・刻不明。外面上半横ナデ丁寧。内面ナデ，指頭圧痕残る。			

西群　胎土B　深鉢形土器　胴部

A4 108		暗茶褐色	○○	Ⅰa類。外面沈線，磨滅顕著。内面横ナデ強。	小形品？	29-1	
A4 29		茶褐色 茶黄褐色	◎○	Ⅱa類屈曲弱。凸径17.3。凸三（10−6），上面ナデ強，下面接合痕。刻c（5−4−4/3）。外面上半横板ナデ，内面横ナデ，指頭圧痕一部粘土紐接合痕残る。下半ケズリ，粘土紐接合痕残り調整雑。		-2	
E 89		暗茶褐色	○◎	Ⅱa2類。凸三（10−2），上下面ナデ一部接合痕，上面胴部にめぐる沈線残る。凸帯貼付の目安か？刻D（3−4−3/2）。外面上半横ナデ丁寧。内面横ナデ一部指頭圧痕残る。	小形品？ 内外面スス付着	-3	
E 814		赤茶褐色 灰茶褐色	◎◎	Ⅱa2類。凸下台（10−4），上面ナデ強，下面ナデ雑。刻D（6−5−1/1）。外面上半縦〜横板ナデ。内面ナデ雑，指頭圧痕残る。		-4	

E　824		暗茶褐色	○○	Ⅱａ2類。凸台（11−3），上下面ナデ。刻D（4−4−1/1）。内外面横ナデ。		- 5	
E　815		暗茶褐色	◎○	Ⅱａ1類？凸下三（12−4），上面ナデ強，下面ナデ雑，接合痕残。刻V（2−4−3/2）。外面上半ナデ丁寧，下半ケズリ，内面横板ナデ（巾1.2cm）。	外面一部黒斑	- 6	
E　813		暗茶褐色 茶褐色	◎○	Ⅱａ2類。凸下三（11−3），上面ナデ強，下面ナデ。刻D（3−5−3/2）。外面上半横板ナデ。下半ケズリ。内面板ナデ。		- 7	
A 4　14		灰色	○◎	Ⅱａ2類。脚径18〜20。凸三（11−6），上下面ともナデ丁寧一部接合痕。刻D（3−4−5/2）。外面上半ナデ，下半ケズリ。内面磨滅顕著。		- 8	
E　816		赤茶褐色 暗茶褐色	○○	Ⅱａ2類。凸下台（10−4），上面ナデ強，下面ナデ接合痕残る。刻D（3−3−1/1）。外面下半ケズリ。内面ナデ雑。		- 9	
E　605		茶褐色 茶灰色	○△	Ⅱａ類。凸下三（12−5），上面ナデ強，下面ナデ接合痕一部刻α（7−6−1/1）。磨滅顕著。		-10	
A 4　120		灰茶褐色 暗茶褐色	△○	Ⅱａ類。凸三（15−5），上面ナデ。刻V（3−4−1/1）。磨滅顕著詳細不明。		-11	
A 3　9	9	暗褐色 灰褐色	◎○	Ⅱａ1類。凸三（14−4），上下面同時にナデ，一部接合痕。刻D(4−6−1/1)。外面横ナデ丁寧，内面横板ナデ。		-12	
A 4　23		淡茶褐色	○○	Ⅱａ類。凸台（10−3），上下面ナデ。刻D(5−5−5/3)。		-13	
A 4　124		暗灰褐色	○○	Ⅱａ類。凸三(6−3)。刻有無不明。磨滅顕著詳細不明。		-14	
E　608		灰青色	△△	Ⅱａ類。凸丸？（10−3）。刻D？ 磨滅顕著詳細不明。		-15	
E　82		茶黒色	○○	Ⅱａｂ類。凸三(8−4)，上下面同時ナデ，一部接合痕。刻D（2−3−3/1）。外面上半・内面横ナデ丁寧。	外面スス付着内面黒斑	-16	
E　83		暗茶褐色	◎○	Ⅱａ類。凸台（10−3），上下面ナデ丁寧。刻O（5−6−1/1）。内外面ナデ。		-17	
E　827		淡褐色	○○	Ⅱａ類。凸三（10−4），上下面ナデ，一部接合痕。刻D（5−5−1/1）。外面上半・内面横ナデ。		-18	
A 4　20		淡茶褐色	○○	Ⅱａ2類。凸下三（13−5），上面ナデ強，下面ナデ。刻V（3−5−3/2）。外面上半横板ナデ，下半ケズリ。		-19	
E　821		暗灰茶褐色 茶褐色	○○	Ⅱａ2類。凸下台（12−3），上面ナデ強，下面ナデ接合痕残る。刻D（6−4−1/1）。外面上半ナデ丁寧，下半ケズリ，内面ナデ雑，指頭圧痕残る。		-20	
A 4　18		灰褐色	−◎	Ⅱａ2類。凸丸（14−5），二次焼成のため詳細不明。	二次焼成	-21	
A 4　19		赤茶褐色	○○	Ⅱａ2類。凸三（13−6），上面ナデ下面一部接合痕。磨滅顕著詳細不明。		-22	
A 4　109		灰色	○○	Ⅱａ2類。凸三(9−5)，上下面ナデ。磨滅顕著詳細不明。		-23	
A 3　3	9	暗茶褐色	◎◎	Ⅱａ2類。凸台（10−4），上下面ナデ丁寧。刻D(6−7−1/1)。外面上半横ナデ丁寧，内面ナデ一部指頭圧痕。		-24	
E　73		黒褐色 暗茶褐色	○○	Ⅱａ2類。凸三(8−5)，上下面ナデ一部接合痕。刻V(2−4−3/1)。外面下半ケズリ，内面横ナデ指頭圧痕残。		-25	
E　71		暗茶褐色 黒灰色	◎○	Ⅱａ類。凸丸（10−4），一部剥落，上面ナデ下面接合痕残る。刻V（3−6−3/2）。外面ナデ，内面横ナデ粘土紐接合痕，指頭圧痕残る。		-26	
A 4　15		淡灰褐色 灰褐色	○○	Ⅱａ類。凸三（11−5），上下面ナデ一部接合痕。磨滅顕著詳細不明。		-27	
A 4　22		淡赤褐色 淡灰褐色	○○	Ⅱａ2類。凸三（10−4），上下面ナデ一部接合痕。磨滅顕著詳細不明。		-28	
E　80		明褐色 黒灰色	○○	Ⅱａ1類。凸下三（9−3），上面ナデ強。磨滅顕著詳細不明。			
A 4　12		暗茶褐色		Ⅱｂ類。凸三（9−6），上下面ナデ一部接合痕。磨滅顕著詳細不明。			

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
E 601		暗茶褐色 茶褐色	◎○	Ⅱb3類。凸径27.0。凸台(11−5)，上下面ナデ一部接合痕。刻D(3−4−5/2)。外面上半横板ナデ，下半縦条痕，ケズリ。内面横板ナデ。		30- 1	
E 820		暗茶褐色	◎△	Ⅱb類？凸三(9−5)，上面ナデ強，下面接合痕残る。刻D(3−4−3/2)。外面上半ナデ，下半縦ナデ。内面ナデ。		- 2	
E 74		灰茶褐色 明茶褐色	○○	Ⅱb3類。凸三(11−3)，上下面ナデ一部接合痕。刻D(4−6−3/2)。外面上半横ナデ。内面横ナデ指頭圧痕残る。		- 3	

西群 胎土A 底部

E 729		灰白褐色	◎○	Ⅳ類。径6.0。外周ナデ。詳細不明。		31 - 32	
A4 4		茶褐色	◎◎	Ⅱb類。径4.5厚1.0。胴部縦ケズリの後外周ナデ一部指頭圧痕残る。		- 33	
A4 3		灰〜黄茶色	◎○	Ⅳ類。径7.0厚1.2。胴部縦ケズリの後ナデ一部指頭圧痕残る。		- 34	
E 5		淡赤褐色	◎◎	Ⅳ類。径5.8厚0.6。外周横ナデ。		- 35	
A4 9		黒褐〜黄茶	◎○	Ⅳ類。径4.6厚0.8⌐。胴部・外周横ケズリ内面ナデ。		- 36	44上- 4
A4 6		灰黄色	◎○	Ⅳ類。径5.8。胴部外周横板ナデ，一部指頭圧痕。	内外黒斑有	- 37	
E 61		暗茶色	◎○	Ⅳ類。径6.4。内外面へラミガキ，外周ナデ。		- 38	- 3
A3 13	9	赤褐〜黒色	△△	Ⅳ類？径5前後厚0.9。底部剥落詳細不明。胴部外面へラミガキ。		- 39	
A3 7	9	暗茶灰色 灰色	◎○	Ⅳ類。径6.6厚1.3。胴部に縦ケズリによる条痕が残る。			

西群 胎土B 底部

E 20		暗〜赤褐色	◎○	Ⅰ類。径4.5厚2.3⌊。外周横ナデ強，胴部縦ケズリ。	内面剥離	31- 1	
E 18		茶褐色	○○	Ⅰ類？径5.6。外周指頭圧痕残る。	内面スス	- 2	
A4 1		茶褐色	○○	Ⅰ類？径5.5厚1.7。内外面指頭圧痕残る。		- 3	43- 4
E 19		茶褐色	○○	Ⅱa類。径5.4厚1.3。外周横ナデ，胴部縦ケズリ。	内面スス	- 4	44上-2
A3 12	9	赤褐色	○△	Ⅱa類。径4.6厚1.6。磨滅顕著詳細不明。		- 5	
E 27		淡赤褐色	○○	Ⅱa類。径5.9。外周ナデ，胴部縦ケズリ，指頭圧痕残。		- 9	
E 902		淡赤褐色	◎○	Ⅱb類。径4.1。外周ナデ一部指頭圧痕。	小形品？	- 6	
E 12		暗赤褐色	◎○	Ⅱb類。径3.8厚0.8。磨滅顕著詳細不明。		- 7	
A4 3		赤〜暗茶褐	◎◎	Ⅱb類。径4.2。外周一部指頭圧痕。		- 8	
A4 7		淡灰茶褐色	△○	Ⅱb類。径6.0厚1.0。外周・内面指頭圧痕残。磨滅顕著。	充塡部脱落	- 10	- 1
A4 8		茶褐色	○○	Ⅱb類。径6.5厚1.6わずかに⌐。外周ナデ？	内面スス	- 11	
E 16		茶褐色	○○	Ⅱb類。径6.3。磨滅顕著詳細不明。	内面剥離	- 12	
A4 10		灰〜茶褐色	−○	Ⅰ類。径6.4厚1.7⌊。外周ナデ強，内外面指頭圧痕。	二次焼成	- 13	
E 17		茶褐色	○○	Ⅰ類。径6.6厚0.7。外周指頭圧痕，胴部縦ケズリ。	内面スス	- 14	
E 23		茶褐色	○○	Ⅱb類。径6.7厚1.8。外周一部指頭圧痕。磨滅顕著。		- 15	44上-1
A4 5		茶褐色	○○	Ⅰ類。径6.7。外周ナデ指頭圧痕残。胴部縦ケズリ。	内面スス	- 16	
E 15		赤〜淡茶褐	◎○	Ⅳ類？径6.5厚0.9やや⌐。外周ナデ胴部縦ケズリ。		- 17	
E 24		淡灰〜茶褐	○○	Ⅱb類。径6.5厚1.9。外周ナデ縦ケズリ磨滅顕著。		- 18	
E 34		淡〜赤茶褐	◎○	Ⅰ類。径6.2。外周ナデ胴部一部条痕（ケズリ？）	充塡部脱落	- 19	
A2 2		赤〜暗赤褐	◎△	Ⅱa類。径6.8厚1.5わずかに⌐。外周ナデ一部指頭圧痕，底内面ケズリ？底外面ケズリ。		- 20	
E 25		淡〜暗茶褐	◎○	Ⅰ類。径6.2厚0.7。外周ナデ強。		- 21	
E 21		茶褐色	○○	Ⅰ類。径6.8厚1.4⌐。底内面ケズリ。磨滅顕著。		- 22	
E 1		茶褐色	○○	Ⅱb類。径7.7厚1.5⌐。胴部斜ケズリの後外周ナデ，指頭圧痕残る。底内面指頭圧痕残，底外面ケズリ。		- 23	43- 1

E　2		茶褐色	◎○	Ⅰ類。径7.2厚1.5。胴部縦ケズリの後外周ナデ一部オサエ，底内面ナデ一部指頭圧痕残る。	内面スス	-24	
E　10		茶褐色	○○	Ⅱb類。径7.3厚1.5。胴部縦ケズリの後外周横ナデ，底内面ナデ。	内面スス	-25	-　2
A3　903	9	茶褐色	○○	Ⅰ類。径7.7厚1.1└┘。胴部縦ケズリの後外周横ナデ強，内面指頭圧痕残る。		-26	
E　14		茶褐色	○○	Ⅳ類。径7.8。外周指頭圧痕残る。	内面剥離	-27	
E　904		赤～黒褐色	◎○	Ⅳ類？径7.0やや┌┐。外周横ナデ。	内面剥離	-28	
A4　101		暗茶褐色	◎○	Ⅳ類？径7.3。胴部ケズリの後外周ナデ内面指頭圧痕。		-29	
E　33		暗茶褐色	◎○	Ⅱb類。径7.0厚1.9。磨滅顕著詳細不明。		-30	
E　11		赤褐～暗茶	◎○	Ⅱb類。径8.5厚1.9。胴部外周横ナデ一部指頭圧痕，内面一部指頭圧痕。		-31	
A4　2		茶褐色	○○	Ⅰ類。径7.9厚0.6。胴部縦ケズリ（条痕残）の後オサエ，ナデ指頭圧痕残。	内面スス		44下 -　4
E　7		赤茶褐色	○○	Ⅱb類。径6.4。胴部縦ケズリ外周ナデ。			

西群　胎土A　浅鉢形土器

A3　6	9	淡灰白色	○○	Ⅱb類。口縁端丸，丁寧。沈4条（2.5）。外面磨滅不明，内面横ヘラミガキ。		40-　1	42上 -　2
A4　144		灰白色	△△	Ⅱb類。沈3条（2）。内外面磨滅顕著詳細不明。		-　2	-　1
A3　16	9	灰白色	○○	Ⅱb類。沈3＋α条（2）。内外面磨滅顕著詳細不明。		-　3	-　3
E　622		青灰白色	○◎	Ⅱb類。沈2＋α条（2.5）。内外面磨滅顕著詳細不明。		-　4	
E　41		灰白色	○△	Ⅱb類。沈1条（4）。内外面磨滅顕著詳細不明。		-　5	-　4
A4　129		灰橙色 灰褐色	◎◎	Ⅱ類。口縁端丸，丁寧。外面上部横ナデ～ケズリの後横ミガキ。下部斜ナデ～ケズリの後斜ミガキ。内面横ミガキ。		-　6	-　9
A3　11	9	黒灰褐色	◎○	Ⅱ類。口縁端面取り。外面斜板ナデ条痕残。内面斜板ナデ条痕。		-　7	-　8
E　618		暗褐色	○○	不明。口縁端丸。小片詳細不明。小形深鉢の凸帯剥落？		-　8	
A4　125		暗黒茶褐色	◎○	Ⅲ類。口縁端やや尖，丁寧。外面口縁直下横ナデ一部指頭圧痕。内面ナデ。		-　9	
E　615		黄灰白色	○◎	Ⅲ類？口縁端丸。内外面ナデ主体。		-10	
A4　134		灰茶褐色	○◎	Ⅰ類。口縁端面取り。外面沈1条（2），鋭利な原体。外面ナデ，内面横ヘラミガキ？		-11	-　7
E　61		暗灰白色	○○	Ⅰ類。口縁端丸。外面端部付近一部ミガキ？詳細不明。		-12	
A4　147		白橙色	◎◎	不明。口縁端面取り。細片のため詳細不明。			
E　64		淡黄灰白色	○○	Ⅲ類。浮線文系土器。内面指オサエ強。	外面黒斑	-13	-　5
E　17		灰褐色 黒灰色	◎◎	Ⅰ類。外面沈1条（2）。上下半ともヘラミガキ，内面上半ナデ，下半ミガキ。		-14	-　6
E　616		暗灰褐色	○○	Ⅰ類？外面沈1条（1.5）浅い。磨滅顕著詳細不明。		-15	

西群　胎土A　器種不明多条沈線文土器

E　611		暗灰色	◎◎	直立する。沈3条＋α（3）丸い。内面ナデ丁寧ミガキ状。推定径3.2。壺形の器形か？		-17	-13
E　575		淡灰色 黒灰色	◎○	器形不明。巾2mm前後の沈線が不定方向にある。文様か調整痕か不明。内面横板ナデ(巾1cm前後）条痕残る。		-18	-11
E　19		灰褐色	○○	器形不明。17と同系？沈4条＋α（1.5）併行せず。磨滅顕著詳細不明。		-19	-12

西群　胎土A　器種不明土器

E　614		明褐色 黒灰色	◎◎	器形不明。屈曲する胴部，上半ナデ一部横ヘラミガキ，下半縦ナデ。内面横板ナデ強条痕残る。壺形の器形？		-16	

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
E 79		淡赤灰褐色	○○	器形不明。外面凸帯巡る。Ⅱb4類土器か？刻無。			

西群　胎土B　壺形土器　口縁部

E 10		暗茶褐色 灰茶褐色	◎◎	小形壺。口径9.4。口縁端尖。凸B三（5－4），上下面をつまむようナデ一部接合痕。刻無。外面縦ナデ，内面ナデ，指頭圧痕，接合痕残る。		28－9	37下 －4
A4 37		灰色	?○	口縁端に粘土かぶり丸。凸C丸（10－5），刻無。磨滅顕著詳細不明。	二次焼成？	－56	
A4 105		青灰褐色	?○	口縁端やや尖。凸B三（10－7）。刻無。磨滅顕著詳細不明。	二次焼成？	－57	42上 －10

東群　胎土A　深鉢形土器　口縁部

C11 5	8	淡黄白色	◎◎	一条凸帯a2。口径21.6，調整変化径20.5。口縁端やや尖，刻D（2－2－3/1）。凸A下三（9－4），上面と端部同時調整，下面ナデ。刻D（2－2－3/1）。外面上半横ナデ強ミガキ状。下半ケズリ，境界不明瞭。内面ナデ丁寧。	内外面黒斑 スス付着 小形品	33－1	40下 －1
C11 13	8	暗茶褐色	◎◎	一条凸帯a2。口径23.8。口縁端やや尖，刻O（4－2－3/1）。凸A三（8－4），上下面ナデ丁寧。刻D（3－2－3/1）。外面上半ナデ強ミガキ状，下半不明，境界不明瞭。内面ナデ丁寧。	外面スス付着 小形品	－2	－2
C11 68	9	暗茶黒褐色	◎○	一条凸帯a2。口径12.4，調整変化径11.6。口縁端軽く面取り。凸A三（6－3），上面横ナデ端部外面横方向条痕，下面ナデ。刻有無不明。外面上半横ナデ，下半のケズリの板状工具の痕跡残る。下半縦ケズリ軽。内面横ナデ強。	外面黒斑 小形品 土器溜4	34－1	－4
A11 912	8	灰白色 暗茶褐色	○△	二条凸帯a1。口径43.4，下部凸帯径47.0，胴部径47.6。残存高43.0。口縁端丸丁寧。凸A台（7－4），上下面ナデ一部接合痕。刻D（4－6－1/2）。下凸三（10－5），上下面ナデ一部接合痕。刻D（5－7－3/2）。外面上半縦方向条痕の上から横板ナデ。下半縦～横ケズリの上から斜方向のナデミガキ状，底部付近は縦方向のミガキ状調整。内面斜～横方向の横ナデ，ミガキ状調整。	土器溜9	32－2	39下
D11 65	9	灰色 灰白色	◎○	口縁端面取り。凸A下三（10－5），上下面ナデ丁寧。刻D（2－3－3/1）。外面横ナデ丁寧，内面ナデ。	外面スス付着	34－3	40上 －2
A11 905		灰黄白色	○△	口縁端丸？凸A三（7－4），上下面ナデ？刻有無不明。磨滅顕著詳細不明。	土器溜10	－4	－5
A11 50	8	灰黄白色	○△	口縁端尖。凸A三（7－5），上下面ナデ。刻有無不明。磨滅顕著詳細不明。		－5	－4
A10 57	8	暗茶褐色 灰褐色	△△	二条凸帯a2。口径31.8，下部凸帯径35.6。口縁端丸？上凸A三（8－3），上下面ナデ。刻有無不明。下凸三（9－3），上面ナデ強，下面一部接合痕。刻有無不明。内外面磨滅顕著詳細不明。		－6	－1
C11 77		暗茶褐色	○○	一条凸帯b3。口径20.0，調整変化径21.6。口縁端尖，端部刻D（2－2－？）。凸B下三（11－5），上面と端部を同時調整，下面ナデ。刻O（2－3－4/1）。外面上半横ナデ明瞭，下半ケズリ？境界不明瞭。内面横ナデ丁寧。	外面スス付着 土器溜6	33－3	40下 －3
D11 76	9	淡茶褐色 茶褐色	◎○	口縁端丸。凸D亜三（13－3），上面ナデ丁寧，下面ナデ。刻O（3－6－2/1）。外面横ナデ，内面横ナデ丁寧。		34－2	40上 －3

D12　20	8	暗灰黒色 灰黄褐色	◎△	口径26.4。口縁端部丸丁寧。凸D垂三（18−3），上下面ナデ丁寧。刻O（3−5−3/1）。外面ナデ丁寧，内面磨滅顕著，一部指頭圧痕。	外面スス付着	- 7	- 6
A11　73	9	灰黄白色 灰色	◎◎	二条凸帯a 1。口径26.0，下部凸帯径24.6。口縁端丸，丁寧。上凸D垂三（15−3），上下面ナデ丁寧。刻D（4−5−3/1）。下凸三（13−3），上下面ナデ丁寧。刻D（2−3−3/1）。外面上半横ナデ一部接合痕，器面にヘラ傷，刻目施文の時か？下半ケズリ。内面横ナデ丁寧ミガキ状。端部内面強い横ナデ面をなす。	外面一部黒斑	- 8	- 7

東群　胎土B　深鉢形土器　口縁部

C11　7	8	黒茶褐色	○○	口縁端丸。凸A下台（10−3），上面棒状工具ナデ強，下面接合痕残る。刻V（3−5−3/1）。内外面ナデ。		37- 1	
D11　18	8	淡茶褐色	◎△	口縁端丸。面取り気味，凸A三（9−5），上下面ナデ丁寧。刻D（4−4−1/1）。磨滅顕著，内面一部接合痕。		- 2	
D11　19	8	淡茶褐色	○○	口縁端丸。凸A三（7−4），上下面ナデ雑一部接合痕。刻V（2−4−3/1）。外面ナデ丁寧，内面磨滅顕著。		- 3	
A11　911	8	淡茶褐色	◎○	二条凸帯a 2。口径38.2，下部凸帯径39.5，高40.2，底径7.4。口縁端やや尖。凸B三（7−4），端部と上面ナデ下面ナデ一部接合痕。刻O（4−4−1/1）。下凸三（9−4），上面ナデ丁寧，下面ナデ一部接合痕。刻O（5−5−1/1）。外面上半強い縦ナデの後横ナデ一部接合痕残，一部刻目ヘラキズ。下半縦〜横ケズリ，底部付近縦方向棒状工具状ナデ強ー内面横ナデ丁寧。底部厚さ0.9，ややあげ底。	土器溜10	35	39上
D11　16	8	灰茶黒色	○○	一条凸帯b 3。口径25.0，調整変化径26.0。口縁端部丸。凸B三（7−5），上面ナデ雑，接合痕残る。刻無。外面上半横〜縦ナデ，下半ケズリ，境界不明瞭。内面横板ナデ強，指頭圧痕残る。	外面スス付着 小形品	33- 4	40下 - 5
C11　4	8	明茶褐色	◎○	口径31.0。口縁端やや丸。凸B三（10−7），上面ナデ丁寧，下面接合痕残。刻D（3−5−3/2）。内外面ナデ。	一部凸A	36- 1	40上 - 13
A11　24	8	茶褐色	○○	口径24前後。口縁端尖。凸B丸（11−3），上面と端部同時調整，下面一部接合痕。刻D（3−5−3/1）。外面横板ナデ，内面横板ナデ一部指頭圧痕。		- 2	- 9
A11　41	8	赤褐色 淡赤褐色	○○	口径25前後。凸B三（7−4），上面と端部同時調整，下面接合痕残。刻不明。外面縦板ナデ。磨滅顕著，内外面指頭圧痕残る。		- 4	- 8
C11　1	8	暗茶褐色	◎○	二条凸帯a 1。口径29.5，下部凸帯径36.7，胴径37.1。口縁端丸。凸B三（7−6），上面と端部同時調整，下面接合痕。刻D（7−6−1/1）。下凸下台（10−4），上面ナデ丁寧，下面接合痕。刻D（7−5−1/1）。外面上半ナデ，下半縦〜横ケズリ。内面横ナデ一部指頭圧痕。	土器溜6 外面スス付着	- 5	41下
A11　23	8	茶褐色 灰茶褐色	○○	口縁端やや尖。凸B三（11−5），上面と端部同時調整，下面横ナデ雑接合痕残。刻D(2−3−3/1)。外面ナデ。		37- 6	40上 - 11
A11　26	8	明茶褐色	◎○	口径25〜30。口縁端尖。凸B三（13−5），上面と端部同時調整，下面ナデ丁寧。刻D（4−6−3/3）。外面横板ナデ条痕有。内面横ナデ指頭圧痕，接合痕残る。		- 7	- 10
C 8　39	8	茶灰褐色 明灰褐色	◎○	口縁端尖。凸B下三（10−5），上面と端部同時調整，下面接合痕明瞭。刻D（5−5−1/1）。内外面ナデ。	外面黒斑	- 8	- 12
C11　2	8	茶褐色	◎○	口縁端やや尖。凸B下台（6−4），上面と端部同時調整，下面接合痕残。刻D不明瞭（5−5−1/1）。磨滅顕著詳細不明，内面接合痕残。	内面黒斑	- 9	- 15

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
A 8 21	8	暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（10−5），上面と端部同時調整，下面一部接合痕。刻不明。磨滅顕著詳細不明。	器形b？	-10	
D11 15	8	暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（11−5），上面と端部同時調整，下面ナデ雑一部接合痕。刻D(4−6−1/1)。内外面横ナデ。	土器溜6	-11	
× 913		暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸B下三（12−6），上面と端部同時調整雑，下面接合痕残。		-12	
A 9 33	8	茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（12−7），上面と端部同時調整，下面ナデ丁寧。刻有無不明。磨滅顕著詳細不明。	壺？	-13	
A10 49	8	茶褐色 暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸B下三（10−4），上面ナデ強，下面接合痕残。刻不明。内外面磨滅顕著。		-14	
D11 79		明茶褐色	○◎	口縁端やや尖。凸B三（11−5），上面ナデ丁寧，下面接合痕残。刻D（2−5−1/1）。	土器溜5	-15	
C11 52	8	暗茶褐色	○○	口縁端尖。凸B三（9−5），上面ナデ強，下面接合痕残。刻D？		-16	
D11 78		灰茶褐色	○○	口縁端やや尖。凸B下三（9−3），上下面ナデ丁寧。刻有無不明。磨滅顕著詳細不明。	小形品	-17	
A11 25	8	暗灰褐色	○○	口縁端尖。凸B下三（8−5），上面と端部同時調整，下面接合痕残。刻有無不明。詳細不明。	小形品	-18	
A10 11	8	暗茶褐色	◎○	凸B三尖。凸B下三（11−3），上面と端部同時調整，下面ナデ一部接合痕。刻D（5−4−1/1）。内外面ナデ。		-19	
D11 17	8	茶褐色	○○	口縁端尖。凸B台（8−3），上面と端部同時調整丁寧，下面接合痕残。刻d(4−5−1/1)。磨滅顕著詳細不明。		-20	
A11 22	8	暗茶褐色 暗灰茶褐色	○○	口径23.2。口縁端やや尖。凸C下丸（11−4），上面と端部同時調整丁寧，下面一部ナデ接合痕残。刻V（2−5−2/1）。外面横方向条痕一部残，縦板ナデ。内面ナデ，端部内面横ナデ。		36- 3	-14
C12 10	8	明茶褐色	◎◎	一条凸帯？口径13.0。口縁端尖。凸C三（7−4），凸粘土をかぶせて調整丁寧，下面ナデ一部接合痕。刻無。外面ナデ，内面板ナデ？丁寧。	小形品	37- 4	
D11 67	9	黒茶褐色 暗灰茶褐色	◎◎	口径27.0。口縁端面取り。凸D垂三（12−4），上面横ナデ強，下面ナデ接合痕残。刻D（3−4−3/2）。外面横板ナデ丁寧，内面横ナデ接合痕残。端部内面横ナデ強。		34- 9	40上 -17
A11 66	9	暗茶褐色	◎○	口縁端尖。凸B〜D垂三（10−5），上面と端部同時調整，下面ナデ接合痕残。刻D（3−4−2/1）。磨滅顕著詳細不明，口縁端内面横ナデ強。	外面スス付着	37- 5	-16

東群　胎土A　深鉢形土器　胴部

A10 906	8	黒褐色	◎○	Ⅱa類。凸三（9−5），上下面つまむよう調整丁寧。刻D（4−4−2/1）。内面横ナデ条痕残。接合痕残る。		38- 9	
C11 14	8	灰白褐色 灰褐色	○○	Ⅱa1類。凸下三（9−4），上面横ナデ丁寧，下面横ナデ丁寧。刻D（4−5−1/1）。内外面ナデ。		-10	
D11 74	9	淡褐色 灰色	◎○	Ⅱa2類。凸三（10−3），上下面ナデ強。刻D（2−3−？）。外面上半横ナデ，内面ナデ丁寧。		-11	

東群　胎土B　深鉢形土器　胴部

A11 29	8	暗茶褐色 茶褐色	○◎	Ⅱa1類。凸下三（10−5），上面ナデ雑一部接合痕，下面接合痕残。刻V（2−5−3/2）。外面上半一部斜板ナデ（条痕残），内面ナデ接合痕残。		37-21	
C11 72		暗茶褐色	○◎	Ⅱa1類。凸三(6−7)，上面ナデ丁寧，下面接合痕残。刻d(4−3−1/1)。外面上半斜ナデ丁寧，内面ナデ，指頭圧痕，接合痕残。		-22	

C11　51	8	灰褐色	○△	Ⅱa類。磨滅顕著詳細不明。		-23	
A11　47	8	茶褐色	○△	Ⅱa類。凸？（10−4）。磨滅顕著詳細不明。		-24	
C11　70	9	黒灰色 灰茶褐色	◎○	Ⅱa1類。凸下三（9−4），上面ナデ強丁寧，下面ナデ雑接合痕残。刻D（2−3−3/1）。外面ナデ一部斜，内面横ナデ接合痕残，指頭圧痕目立つ。		-25	
C11　55	8	暗茶褐色	◎◎	Ⅱa1類。凸三（9−5），上面横ナデ丁寧，下面ナデ雑一部接合痕。刻α（2−3−3/2）。外面上半ナデ，下半ケズリ，内面横ナデ。		-26	
C11　8	8	暗茶褐色	○○	Ⅱa1類。凸下三（9−5），上面ナデ雑一部接合痕。下面ナデ接合痕残る。外面上半ナデ，内面ナデ指頭圧痕顕著。		-27	
A9　35	8	暗茶褐色	○○	Ⅱa2類。凸下三（11−3），上面ナデ強一部接合痕，下面接合痕明瞭。刻V（2−7−3/1）。内面磨滅顕著詳細不明。		-28	
A11　28	8	暗茶褐色	○○	Ⅱa2類。凸上三（12−5），上面板ナデ丁寧，下面横ナデ接合痕残。刻O（7−6−1/1）。外面下半横〜縦ナデ。内面全体に横ナデ主体。		-29	
C11　6	8	暗茶褐色 灰黒色	○○	Ⅱb3類。凸下三（13−5），上面ナデ強接合痕残。下面接合痕残。刻D（5−9−1/1）。外面横ケズリ。		38-1	
A11　27	8	黒褐色 暗茶褐色	○○	Ⅱb3類。凸下三（8−5），上面ナデ強，下面ナデ，上下面とも接合痕残。刻D（2−3−3/1）。外面上半縦板ナデ，凸帯の直上に横方向の沈線有，凸帯貼付の位置ぎめ用か？		-2	

東群　胎土A　底部

C11　56	8	淡茶褐色 灰色	△△	Ⅳ類。径8.0，厚1.1やや⌐。二次焼成のため磨滅顕著詳細不明。浅鉢か？	土壙17	-32	
CX　914	9	淡茶白色 黒灰色	◎◎	Ⅳ類。径6.4，厚1.4。外周横ナデ，オサエ。内面ナデ。	内面スス付着	-30	
A10　907	8	黒色 灰白色	◎○	Ⅳ類。径6.6，厚0.4。胴部縦板ケズリ，外周付近板ナデミガキ状。内面磨滅顕著。	外面スス付着	-33	
A9　6	8	淡灰褐色	◎◎	Ⅳ類。径6.2。外面磨滅顕著，外周ナデオサエ？胴部ミガキ？内面ナデ丁寧ミガキ状。第40図24と同一個体か？		40-25	42下 -3

東群　胎土B　底部

D11　1		茶褐色	△○	Ⅰ類。径6.9，厚1.1。胴部縦ケズリの後，外周指オサエ，指頭圧痕顕著。内面指頭圧痕，接合痕残。	土器溜5 内外面スス	38-17	44下 -3
A9　2	8	赤〜淡茶褐	○○	Ⅱb類。径5.6，厚0.9。外周ナデ，オサエ。内面指頭圧痕残る。		-15	
C11　12	8	黒〜茶褐色	○◎	Ⅰ類。径5.4，厚1.4。胴部縦ケズリの後，外周オサエ，横ナデ。内面ナデ。外底面中央わずかにくぼむ。		-16	-1
D11　20	8	赤〜淡赤褐	○○	Ⅱb類。径5.7，厚0.8。胴部縦ケズリの後オサエ。内面縦ナデ，内外面接合痕残。	土器溜5	-18	
C11　10	8	暗茶褐色	○○	Ⅳ類。径6.5，厚0.8。胴部縦ケズリの後，外周ナデ？内面ナデ。	外面スス付着	-19	
C12　908	8	明茶褐色	◎○	Ⅳ類。径6.0，厚0.8⌐。胴部縦ケズリの後，指オサエ。内面ナデ。	内面スス付着	-20	
A11　909	8	暗赤茶褐色	◎○	Ⅰ類。径5.4，厚0.8やや⌐。胴部縦ケズリの後，外周横ナデ。内面ナデ一部指頭圧痕。		-21	
A11　31	8	茶褐色	○○	Ⅰ類。径6.1，厚0.9⌐。胴部縦ケズリの後，外周オサエ，横ナデ。内面ナデ強ミガキ状。		-22	
X　915	9	暗茶褐色	◎○	Ⅰ類。径6.2，厚1.6。内外面指頭圧痕残。詳細不明。		-23	
A9　36	8	淡赤褐色	○○	Ⅱb類。径6.2，厚1.5。外周オサエナデ。詳細不明。		-24	

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
A11 30	8	暗茶褐色	○◎	Ⅱb類。径6.5，厚1.3。胴部縦ケズリの後外周横ナデ。内面磨滅顕著。外底面中央部ややくぼむ。		-25	43- 3
C 8 40	8	暗赤～黒褐	◎◎	Ⅰ類。径8.5，厚1.8。胴部縦ケズリの後外周オサエ強，ナデ。内面縦ナデ指頭圧痕残。外底面調整丁寧。	スス付着	-26	- 6
A 8 38	8	赤茶褐色	○○	Ⅰ類。径7.3，厚1.8⌐。胴部横ナデ？外周オサエ。内面指頭圧痕。外底面中央径2.6の凹み。		-27	
C11 54	8	淡茶褐色	○○	Ⅰ類。径8.0，厚2.0。磨滅顕著詳細不明。		-28	44下- 2
C10 5	8	赤～淡赤褐	○○	Ⅳ類。径8.0，厚2.0やや⌐。外周横ナデ強。詳細不明。		-29	
C11 9	8	暗茶褐色	○○	Ⅱb類。径7.7，厚2.0やや⌐。胴部ケズリの後外周横ナデ？内面底面に粘土を貼付けナデ調整。	土 17 外面スス	-31	43- 5

東群　胎土A　浅鉢形土器

C11 80		灰赤褐色 黒灰色	◎○	Ⅰ類。口径34前後。口縁端丸丁寧。口縁・頸部境界に沈線2条（3mm）部分的雑。頸部・胴部境界に沈線1条＋α（4mm）雑。外面横ナデの後ヘラミガキ，内面板ナデ強，面をなす。後ヘラミガキ。	土器溜4	40-21	42下 - 1
A10 62	8	赤茶褐色 黒灰色	◎○	Ⅲ類。沈線4条＋α（3mm）。内外面ナデ丁寧。		-22	- 6
A11 53	8	黒褐色	◎○	Ⅲ類？沈線1条＋α(3mm)。内外面ナデ丁寧ミガキ状。			
A10 40	8	黒褐色	○○	不明。沈線2条＋α(4mm)，丸味。小片詳細不明。			

東群　胎土B　浅鉢形土器

C11 3	8	黒茶褐色 暗茶褐色	○◎	Ⅱa類。口縁端丸。外面縦ナデの後横ナデ。内面横ナデ丁寧。	外面スス付着	-23	- 5

東群　胎土A　壺形土器

A11 58	8	灰褐色	◎◎	小形壺？口径13.0，胴部径16.8。口縁端丸丁寧。口縁・頸境，頸・胴境に沈線（3mm）。外面横ヘラミガキ，内面横板ナデ強。	浅鉢Ⅰ類？25と同一個体か？	-24	- 2

東群　胎土B　壺形土器

C11 910	8	暗茶褐色	○○	大形壺。口径21.8。口縁端丸。凸B下台（8－3），上面と端部同時調整一部接合痕，下面接合痕残。刻D（6－5－1/1）。外面上半横板ナデ接合痕残。下半縦ケズリ。内面ナデ指頭圧痕，接合痕顕著。		32- 1	41上
A11 32	8	黒茶褐色	○△	小形壺。胴径5.5前後。外面ナデ丁寧。内面指頭圧痕，接合痕残る。		40-26	42下 - 4
A12 71	9	暗茶褐色	○○	壺？頸部径15前後。外面磨滅，内面横～斜のナデ強。		-27	

東群上層　胎土A　深鉢形土器　口縁部

A 6 22	5a	淡黒褐色	○○	口縁端やや尖。凸A三（10－5），磨滅顕著詳細不明。		39- 1	
溝4 31		淡黄褐色	○△	口縁端丸。凸A三（6－5），上下面をつまむよう調整。刻O（5－5－3/2）。磨滅顕著詳細不明。		- 2	
A 8 26	5a	淡橙色	○△	口縁端尖。凸A三（11－3），上下面ナデ強。刻D（5－2－5/3）。内外面ナデ？磨滅顕著詳細不明。		- 3	
A11 13	5a	白橙色	◎○	口縁端面取り。凸A？（8－?），細片のため詳細不明。			
溝5 21		暗茶褐色	○○	口縁端丸？凸D垂三（20－4），下面一部接合痕。刻有無不明。磨滅顕著詳細不明。		- 4	
溝5 20		淡赤褐色	○○	口縁端尖。凸D垂三（13－3），上面ナデ，下面接合痕残る。刻D（4－5－3/2）。内外面ナデ？磨滅顕著詳細不明。		- 5	

東群上層　胎土B　深鉢形土器 口縁部

C 9	39	7	暗赤茶褐色	○○	口縁端やや尖，丁寧。凸A三（9－5），上下面つまむようナデ丁寧。刻D？（3－3－1/1）。内外面ナデ丁寧。		- 6	
溝8	32		茶褐色	○◎	口縁端丸。凸A三（9－5），上下面ナデ丁寧。刻D（8－7－1/1）明瞭。内外面ナデ？詳細不明。		- 7	
A 8	9	5a	暗茶褐色	○○	口縁端丸。凸B三（8－4），上面と端部同時調整，下面一部接合痕。刻D（2－4－3/1）。内面ナデ丁寧。		- 8	
溝2	46		淡茶褐色	◎○	口縁端やや尖。凸B三（7－5），上面ナデ丁寧，下面接合痕残。内面ナデ。小片詳細不明。	B3タイプか？	- 9	
C 9	10	5b	暗茶褐色	○○	口縁端尖。凸B下三（9－3），上面ナデ，下面接合痕残。刻無。内外面ナデ？詳細不明。		-10	
C11	19	6	茶褐色	◎○	口縁端やや丸丁寧。凸B三（8－5），上面ナデ丁寧，下面接合痕残。刻D（5－3－3/2）。外面ナデ，内面ナデ指頭圧痕残る。	ツボ？	-11	
C 8	18	7	黒茶褐色 暗茶褐色	○○	口縁端丸丁寧。凸B三（10－5），上面ナデ，下面ナデ接合痕残。刻D(3－4－1/1)。外面ナデ，内面横ナデ強。		-12	
C 9	10	5b	灰茶褐色	○○	口縁端丸？凸B下三（12－4）。磨滅顕著詳細不明。		-13	
C11	12	5b	灰褐色	○△	口縁端丸。凸B？（7－4）。磨滅顕著詳細不明。		-14	
A 6	5	5a	茶褐色	◎○	口縁端丸。凸B三（10－5），上面ナデ一部接合痕，下面ナデ接合痕残る。刻D（3－5－3/2）丁寧。外面ナデ，内面ナデ雑接合痕残る。		-15	
D11	7	5b	黒茶色 茶褐色	○○	口径32～38。口縁端やや尖丁寧。凸B下三（12－6），上面と端部同時調整丁寧，下面接合痕残。刻V（2－4－1/2）。内外面ナデ丁寧。	外面スス付着	-16	
C11	29	5b	暗褐色	○○	口縁端尖。凸B三（12－4）。小片のため詳細不明。			

東群上層　胎土A　深鉢形土器 胴部

溝4	84		暗茶褐色	○○	Ⅰa2類。幅0.3の沈線巡る。外面上半横ナデ，下半板ナデに近いケズリ。内面ナデ比較的丁寧。		-17	

東群上層　胎土B　深鉢形土器 胴部

溝4	45		赤茶褐色 暗茶褐色	○○	Ⅱa2類。凸下三（10－6），上面ナデ強，下面一部接合痕。刻D（8－5－1/1）不明瞭。外面上半横板ナデ条痕残る。下半ケズリ。内面ナデ一部指頭圧痕。	内外面一部スス付着	-18	
溝4	6		茶褐色 黒灰色	○◎	a2類？凸三（12－5），上下面ナデ比較的丁寧。刻不明。内外面ナデ。		-19	
C12	8	5b	灰茶褐色	○○	a1類？凸三（10－4），上下面ともナデ調整。刻不明。外面上半横板ナデ？内面ナデ丁寧。		-20	
X	916		茶褐色	○○	a2類？凸下三（14－5），上面ナデ強，下面接合痕残。刻D（4－7－3/4）明瞭。内面横ナデ。		-21	
A 7	15	5b	茶褐色	○○	a2類？凸円（12－3）。刻D(4－5－3/2)。詳細不明。		-22	
A 6	11	5a	灰茶褐色	○○	凸円（11－4），上下面一部接合痕残。刻D（4－6－3/2）。詳細不明。		-23	
X	917		茶褐色	○○	凸三（14－5），上下面つまむよう貼付。詳細不明。		-24	
A 7	3		暗茶褐色 褐色	○○	凸三（13－3），上下面つまむよう貼付。上面ナデ強，下面接合痕残る。刻有無不明。外面上半横ナデ，下半ケズリ。		-25	
A 6	25	6	茶褐色 淡黒褐色	○○	a2類。凸？ 外面ナデ雑。磨滅顕著詳細不明。			
C12	2	6	暗茶褐色	◎◎	Ⅰa1類。胴径28.6。屈曲部に巾0.3の沈線，その直上に刻目有。刻V（3－8－3/2）。外面上半ナデ丁寧，内面ナデ丁寧。		-32	

地区番号	層位	色調	焼胎成土	形態・技法	備考	挿図番号	図版番号
東群上層 胎土B 底部							
溝5 35		淡赤褐色	○○	Ⅰ類。径5.6，厚0.8。外周横ナデ。		-33	
C9 38	7	淡赤褐色	○○	Ⅱb類。径6.0，厚0.7。胴部縦ケズリの後外周ナデ強。外底面指オサエ。		-34	
住2 37		赤褐色	○○	Ⅱb類。径4.4，厚0.9。磨滅顕著詳細不明。		-35	
A8 36		淡赤褐色	○○	Ⅰ類。径7.7 やや⌐。外周指頭圧痕残。磨滅顕著。		-36	
A9 43	5a	赤褐色 淡茶褐色	○○	Ⅰ類。径7.0，厚1.0 やや⌐。胴部縦ケズリの後外周ナデ。内面指頭圧痕残。		-37	
X 30		黒茶色 黒灰褐色	◎○	Ⅳ類。径5.5。外面外周のナデの後から棒状工具を利用したミガキ。	浅鉢？	-38	

第５章　弥生文化の遺構と遺物

第１節　はじめに

口酒井遺跡は，今回第11次Ａ・Ｂの両調査で約730㎡という比較的小規模な発掘調査であったにもかかわらず，弥生文化に属す様々な遺構・遺物が検出された。それらは西地区に集中して認められ，先に触れた土層断面の観察による微高地の範囲と一致している(第18図参照)。

弥生遺物包含層は第13図の第５層：褐色粘質土である。遺構はこの層の上面で検出されたものと，掘削する過程で検出されたものがある。また，層を除去した後，第７層：黄灰色砂質土上面において検出したものもある。

遺構の種類は住居址・土壙・溝等の居住関係と，他に二・三の埋葬関係がある。それに伴って中期～後期の弥生式土器をはじめ，石器・鉄製品・土製品などの遺物がコンテナ数にして約50箱分出土した。これらを時期的に大別すると，中期前半・中期後半・後期に分けられる。

以下では上述の各期で節を改め，遺構の説明をし，続けて遺構出土の遺物について記述を行うという方法を採用した。出土土器の分類は中期後半，後期のものに関してそれぞれ規定し，節頭にその説明を加えている。説明の用語は従来の用法に従うが，状況によって若干補正した箇所もある。また，土器の観察表は節ごとにその節の後ろにまとめている。

尚，石器については第６節でまとめて記述した。　　（緒方・森下）

弥生式土器観察表　凡 例

1. 遺物番号は各遺構ごとに一連の番号を用い，本文・実測図を全て統一した。
   但し，一遺構につき一個体しか出土していない場合は番号を付していない。
2. 器種の項には本文で記す分類を併記した。尚，『広口壺形土器Ａ』を『広口壺Ａ』というように略記している。
3. 法量は単位をセンチメートルに統一し，単位の記載を省略した。
4. 胎土・焼成・色調の項は，それぞれを上段・中段・下段に配列した。
   胎土については素地土の粗密を以下の記号で示した。◎密　○やや粗　△粗
   これに続けて胎土中に包含する砂粒の大きさをカッコ内に記した。単位はミリメートルに統一し，単位の記載を省略した。
   焼成についてはその程度を，良好・やや軟・軟に分け，特に良好なものには堅緻と記した。
   色調は外面の最も広範囲を占める色を記した。但し，内面の色調が著しく異なる場合は備考の項に記した。

5.　形態の項には土器の器形の特徴を記した。

6.　技法の項には成形・調整技法の特徴及び文様とその施文技法の特徴を記した。

7.　備考には遺物に付された個体登録番号を示した。遺物を実見される方はこの番号を参照されたい。

8.　ススの付着・黒斑・二次焼成痕等の特記事項は全て備考に記した。

9.　観察表の執筆は，遺物実測担当者の注記を参考に，森下・中村・大本が行った。

第2節　中期前半の遺構と遺物

1）概　要

中期前半の遺構は，中期後半～後期の遺構基盤層である褐色粘質土を除去した後，その下位に広がる黄灰色砂質土の上面において検出した。調査区東側のA10区に集中し，土壙5・木棺墓・溝6がある。このうち，木棺墓と溝6は伴出遺物がなく，明確な時期決定はできないが，層位的にみて当該期の遺構と判断してよい。

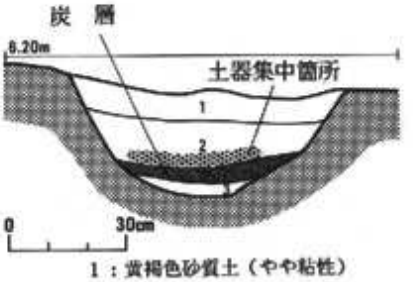
遺物は土壙5出土のもの以外に，中期後半の遺構内に混在したものもみられるが，その量は少ない。（森下）

2）土　壙5

a．遺　構（第49図，図版第23）

土壙5はA10区において検出した不整長円形を呈す土壙である。主軸の方位はN 27°Wで，後述の木棺墓と近似する。長さ270cm，幅70cm，深さ30cmを測る。断面はU字状を呈し，床面は比較的平坦である。埋土は4層に大別でき，上位より第1層が黄褐色粘質土，第2層は暗灰青色粘質土，第3層は黒灰色粘質土，第4層は青灰色粘質土である。第3層中には大量の炭化物と土器の小片が含まれ，その北側上面において残存良好な土器が集中して出土した。

尚，炭化物以外には，焼土や壁体の硬化などの焼成の痕跡を見い出すことができなかったが，これは後述する住居址内の炉においても共通しており，低湿地遺跡における焼成痕跡の残存性の問題も絡んで，本遺構での焼成行為の有無を一概に判断することはここでは保留しておく。（緒方・森下）



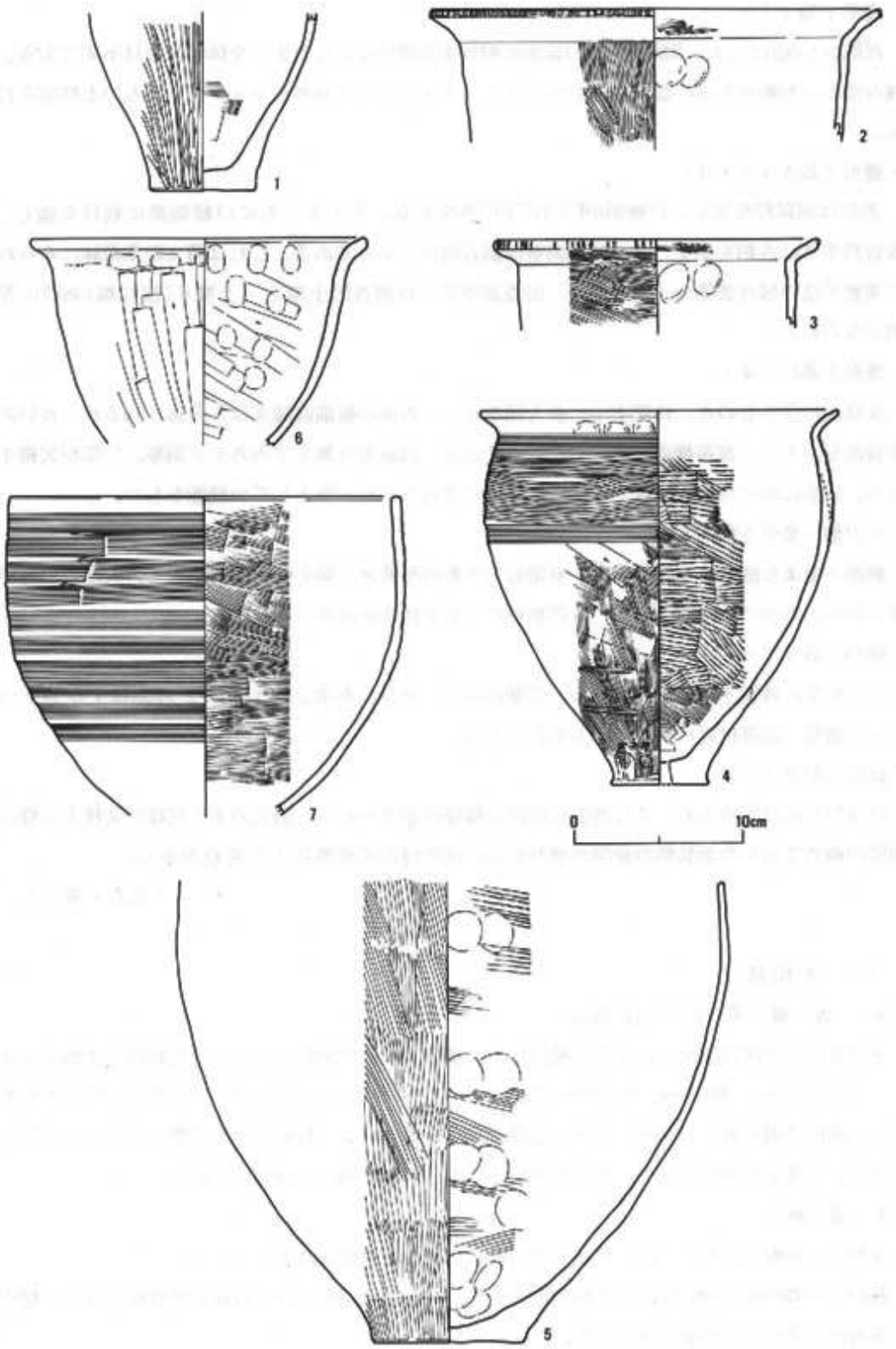
1：黄褐色砂質土（やや粘性）
2：灰青色粘質土
（部分的に黒味を帯びる。）
3：青灰色砂質土
（粘質土ブロックを含む。）

第49図　土壙5断面実測図

b．遺　物

◎土　器（第50図）

土壙5からは壺(底部)，甕A・B，鉢A・Bが出土した。土器の分類基準は文中でそのつど記述する。



第50図　土壙5出土土器実測図

・壺形土器（1）

底部が1点出土した。胴部上半や口縁部に相当する破片はみられず，全体の器形は不明である。残存部から判断すると，腹部の張りが小さく，スマートなプロポーションをもつものと推定される。

・甕形土器A（2・3）

器形は倒鐘形を呈し，口縁部が『く』の字に外反する。2・3ともに口縁端部に刻目を施し，本資料中では古相を示す。3の外面調整は斜方向のハケメである。これは縄文晩期深鉢にみられる調整手法の残存要素の一つである。田能遺跡第6D調査区土壙5・土壙6（福井編1982）に類例がみられる。

・甕形土器B（4）

腹径が口径をしのぎ，体部上半に最大径をもつ。外面の櫛描直線文は5段施されるが，互いに重複部分が多く，複帯構成を意図したものである。口縁部は無文で内外ナデ調整。一部が欠損するが，完形に近い状態で残存。底部に焼成後の穿孔があり，甑としての機能をもつ。

・その他の甕形土器（5）

胴部下半より底部まで残存する。安定した大形の平底と，強く張る胴部をもち，大形鉢の可能性もある。外面にススが付着し，一部被熱による赤色化が認められる。

・鉢形土器A（6）

『く』の字に外反する口縁部を持つ。器壁が厚く，作りは粗雑さが目立つ。外面は上から下へ板ナデ調整。底部付近に被熱による荒れがある。

・鉢形土器B（7）

口縁部が直口するもの。7は外面に10段の櫛描直線文をもつ。前記の4と同様に文様と文様の間隔が極めて短く全面装飾の意図が窺われる。底部付近に被熱による荒れがある。

（緒方・森下）

3）　木棺墓

a．遺　構（第51図，図版第24）

木棺墓はA10区住居址1の下位で検出した。墓壙は黄灰色砂質土から青灰色粘質土上面まで達する。長さ140cm，幅60cm，深さ40cmで，主軸の方向はN 12° Wを示す。平面形は不整長方形を呈し，南側で掘り方がやや乱れるが，北側は整った角をもつ。縦断面は，南側でゆるやかに立ち上がり，北側で急角度をもつ。床面は平坦で，小口穴等の掘込みは認められない。

b．遺　物

木棺は，蓋板・底板各一枚，側板・小口板各二枚から構成される。

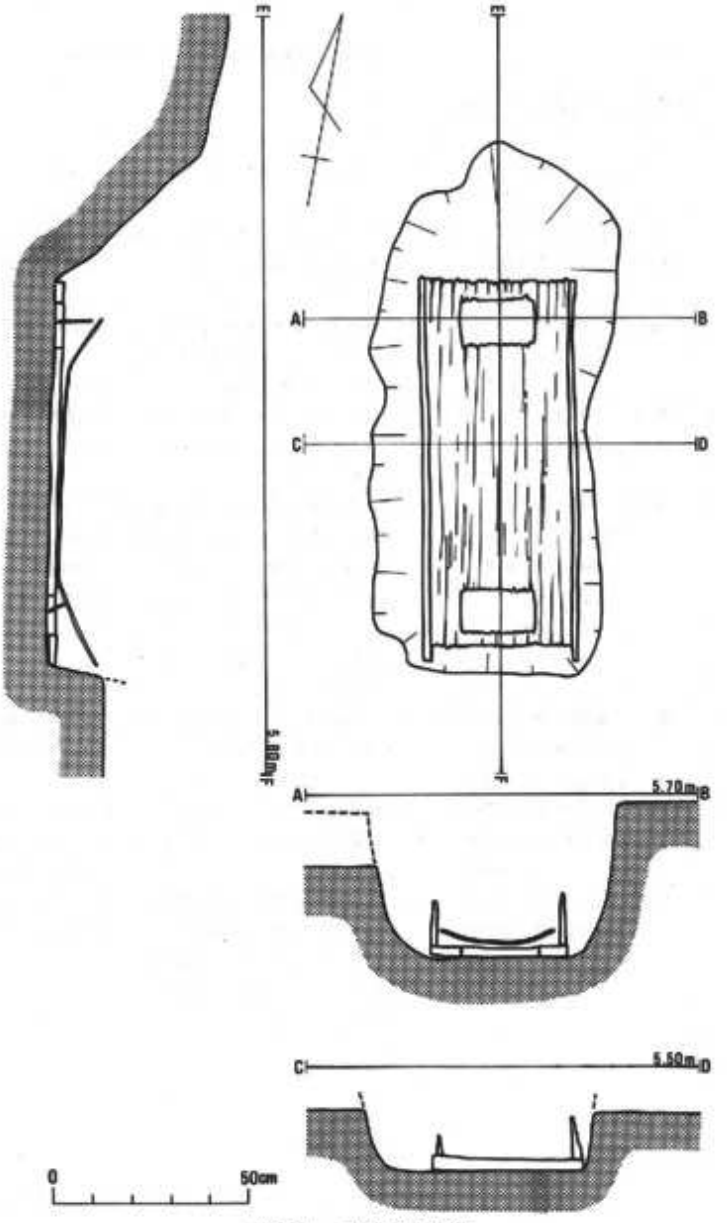
蓋板は残長94cm，残幅26cmを測るが腐蝕が甚しく，厚さが僅か1～2cmしか残存しない。棺内に落込み，湾曲した状態で検出した。

底板は長さ95cm，幅40cm，厚さ3cmで，腐蝕の進行は少なく，原形をほぼ保つ。両端より5cm

のところにそれぞれ長さ20cm，幅11cmの長方形を呈する柄穴を切るが，本来の形状は不明である。小口板は腐蝕が甚しく小片のみをみる。

側板は棺の上位で腐蝕が甚しいが，下位で厚さ３cmを保ち，底板の側縁内側にのる。その部位に溝の切込み等は認められない。

各棺材の木取りは，底板，側板が長辺と木目を一致させ，小口板は縦方向に木目が走る板目取りである。形状からみて小児用木棺と推定できる。木棺内に埋納遺物はなく，人骨は残存しない。　　（緒方）



第51図　木棺墓実測図

４）　溝　６

ａ．遺　構

A10区で検出した。北西から南東へ伸びる溝である。幅約50cmを測り，断面形はＵ字状を呈す。南東は木棺墓のすぐ横で直に立ち上がり終結する。北西はＤ９区から調査区外へさらに延びる。埋土は暗褐色粘質土の単層で，遺物は出土しない。溝の性格等は不明である。

（森下）

弥生中期前半の土器観察表

土壙5出土土器（第50図）

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
1	壺 （底部）	底径 6.3 残高10.5	◎ 0.5～3.0 良好 淡赤褐色	やや厚手の安定した平底。体部は縦長で胴張りがない。	体部外面は縦方向のヘラミガキ。内面は横ハケの後，板ナデ。	2	
2	甕A	口径26.7 残高 7.8	○ 0.5～5.0 やや軟 暗褐色	倒鐘形の体部から口縁部は屈曲して外反。端部は面取りしてヘラによる刻み。	体部外面縦ハケ，内面はナデ。口縁外面ナデ，内面は横ハケ。	7 外面にススが付着	
3	甕A	口径19.2 残高 5.3	○ 0.5～7.0 やや軟 暗褐色	倒鐘形の体部から口縁部は屈曲して外反し，端部に粗く刻目を施す。	外面調整は横ハケ。体部内面はナデ。口縁内面は横ハケ。	4	
4	甕B	口径21.7 腹径21.3 底径 5.8 器高22.9	◎ 0.5～2.0 良好 明橙色	底部は厚手の平底。焼成後下→上の穿孔。体部は上方に張りのある倒鐘形。口縁は「く」の字に屈曲して外反。端部は丸い。体部上半に5段の梯描直線文(単位7条)。一部複帯構成。	体部下半斜方向板ナデの後，縦ハケ。一部横ハケ。内面は下半部細かい斜ハケ。上半は粗い横ハケ。口縁部は横ナデ。	5 外面中腹にススが付着 同下半に黒斑	50- 3
5	甕	腹径32.9 底径 8.7 残高27.5	◎ 0.5～1.5 良好 灰橙色	大形の甕。底部は安定した平底。球形に近い胴部。	外面は粗い縦ハケ。内面は横ハケ。指頭圧痕が残る。	6 外面にススが一部赤色化	
6	鉢A	口径19.8 残高12.4	○ 0.5～3.0 やや軟 灰茶色	体部はやや内湾気味に開く。口縁部はゆるやかに外反。端部は丸い。	外面は上→下の板ナデ調整。内面は右下→左上の板ナデ。口縁部は横ナデ。	8	52- 3
7	鉢B	口径23.2 残高18.9	○ 0.5～4.0 やや軟 暗灰橙色	体部はやや内湾気味に開いたのち，ゆるやかに屈曲して，口縁部は直に立つ。端部は面取り。外面に単位8条10段の梯描直線文。	外面はナデ調整。内面は横ハケの後ナデ。	1	

第3節　中期後半の遺構と遺物

1）概要および出土土器の分類

中期後半の遺構は褐色粘質土下層上面において検出した。住居址1棟，土壙1基，溝3条，落込み1箇所と，多数の小土壙群がある。これら当該期の遺構・遺物の分布はA7区以東に限られる。

尚，後述する後期の遺構・遺物も，その多くは同一面・同一層より検出しており，中期後半から後期への継続的土地利用が窺われる。

出土土器の分類は下記に定める。但し，完形に復元できる土器は限られており，特徴部位に関しての分類とならざるを得なかった。暫定的な分類であることを記し，今後の資料の増加を待つ。

主な器種は，広口壺形土器・長頸壺形土器・短頸壺形土器・無頸壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器である。

広口壺形土器A……頸部が漏斗状に開き，口縁端部に面をもつもの。

A1 ……口縁端部の拡張が小さいもの。

A2 ……口縁端部が斜下方へ張り出し気味に拡張するもの。

A3 ……口縁端部が大きく垂下し，幅広い面をもつもの。

広口壺形土器B……太く短い頸部から口縁部が斜上方へ開くもの。

広口壺形土器C……直立する筒状の頸部から口縁部が大きく水平に開くもの。

広口壺形土器D……体部に比べて口縁部が小さく，体部から短くくびれて外反するもの。

無頸壺形土器A……口縁部が内側に突出し，上方に面をもつもの。

無頸壺形土器B……口縁部が方形に肥厚し，上方と下方に面をもつもの。

甕形土器A……口径が20cm未満のもの。

甕形土器B……口径が20cm以上のもの。

鉢形土器A……口縁部が直に立ち上がり，端部の拡張が少ないもの。

鉢形土器B……器壁が薄く，椀状に内湾しながら立ち上がるもの。

鉢形土器C……口縁部が屈曲し，端部が肥厚して上方に面をもつもの。

鉢形土器D……ゆるやかに内湾気味に立ち上がり，直口の口縁をもつもの。外面全面に凹線文をもつ。

高杯形土器A……直口する口縁をもつもの。端部が肥厚して上方に面をもつ。

高杯形土器B……口縁部が水平に張り出し，端部を垂下させるもの。

脚台A……裾が内湾気味に開き，端部を拡張せず，丸く収めるもの。

脚台B……裾が直線的に開いて端部を拡張し，幅広い面をもつもの。

器台形土器A……器高15cm未満のもの。

器台形土器B……器高15cm以上のもの。　（森下）

2） 住居址3

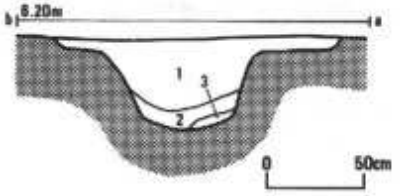
a． 遺　構（第52・53図，図版第16・17）

A9・10区，C9・10区，D10区において確認した円形プランの竪穴式住居である。調査の進行上，A・C・Dの各区に分割して作業を行ったことや，北西側が調査区外にあたること等により，全体の形状確認が困難であったが，直径8m前後と思われる。

遺構は褐色粘質土により黄灰色砂質土まで掘込まれ，残存する壁体は高さ15cmを測る。

柱穴は総数10個で，そのうちP1・3・5・6・8・9の6個が主柱穴となる。P1とP3の間，P1とP9の間にそれぞれ主柱穴を想定すれば，各主柱穴の間隔は2m～2m25cmの間で収まり，正八角形の柱穴プランを形成する。

中央部では，最大径140cm，深さ49.5cmの炉址を確認した。深さ7cm程度に不整形のテラスが



1：暗灰色粘質土（炭片混）
2：黒色粘質土（炭層）
3：暗青灰色粘質土

第53図　住居址3炉址断面実測図

周囲を巡り，その中ほどに上面径80cm，下面径43cmの二段目の円形土壙がある。埋土中には炭化物を大量に含む黒色粘質土が堆積し，上位において土器片が多く出土した。第54図8・9の高杯もそこに含まれる。尚，この土壙は，後述する溝7を切る。

壁溝は，壁体下とその内側に部分的に2本確認した。幅15～20cm，深さ5cm前後を測り，北東側で二本に枝分れする。

以上，複数の壁溝が確認できたことや，P1に2箇所の下端が認められること，などから本住居は建替えか，又は増築があったと推定される。

出土遺物は，床面・覆土・土壙・柱穴より土器・石器・鉄製品・土製品がある。

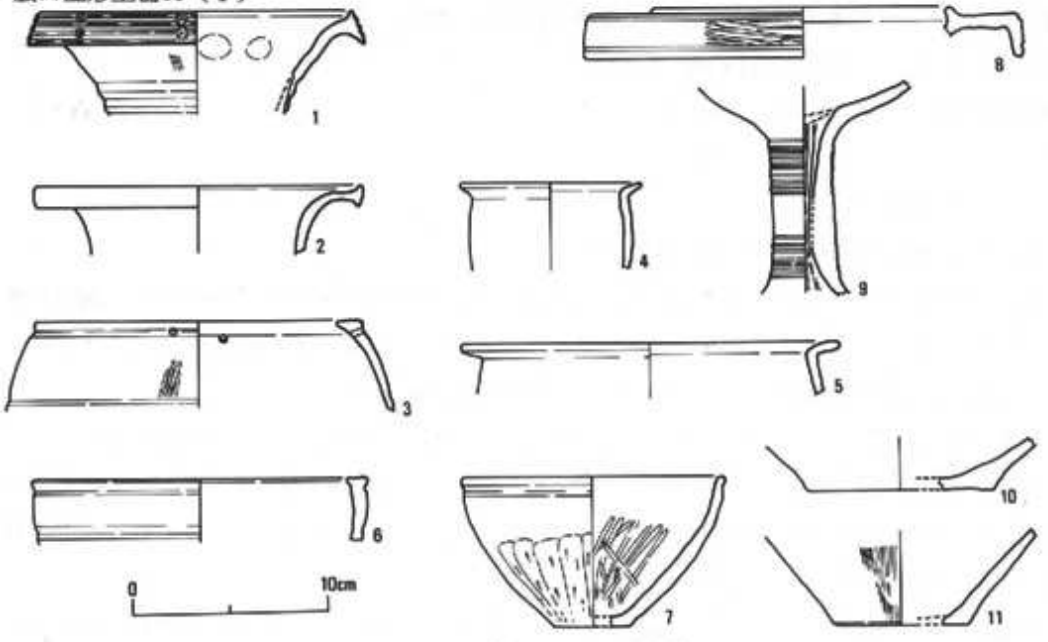
尚，P6埋土内と床面西側にサヌカイト剥片の集中箇所を確認した。その多くは1cm以下のチップで，総重量は約300gになる。また，P5の埋土中より大形の砥石が出土している。住居廃絶時の投棄と考えられる。

本遺構の南西隅において後述する土壙4を検出した。時間的先後関係については住居址3の壁溝が土壙4を切る事実により，土壙4が先行するとみられるが，住居の建替えや増築を考慮すれば，これらが同時併存したとも考えられる。（緒方）

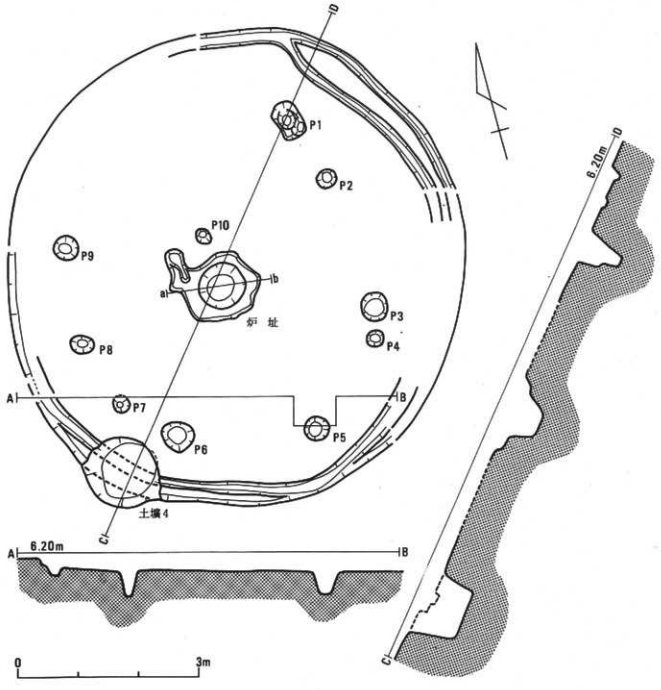
b．遺　物

◎土　器（第54図）

・広口壺形土器A（1）



第54図　住居址3出土土器実測図



第52図　住居址3実測図

漏斗状に開く頸部に，口縁端部が斜下方へ拡張する。口縁端面，頸部のどちらにも凹線文が施されるものである。中央に小さな刺突をもつ円形浮文は，施される場所によってその大きさ，個数が異なる。この円形浮文の形状は山陽地方のそれと共通する[5]。また，頸部の凹線文は太めで，断面がなめらかな波状を呈す。

・広口壺形土器Ｃ（２）

頸部は太く，直立した後に口縁部が大きく水平に開く。端部の拡張は顕著でない。器壁はやや薄手で無文である。

・無頸壺形土器Ａ（３）

内湾気味に立ち上がり，口縁端部が内側に突出する。口縁部直下と体部最大径部に凹線文をもつ。後者の凹線文は段状に片側だけを凹めるものである。

・甕形土器Ａ（４・５）

両者ともに，口縁端部を拡張しないものである。この形状の甕形土器は，近畿地方では第二様式以降継続して作られるが，口縁端部の面取りを行わず，短く外反させる小形のものは『弥生土器集成，本編２[6]』(佐原1968)によると第四様式以降出現するとされ，摂津地域では第四様式の新しい段階に散見[7]できる。

・鉢形土器Ａ（７）

口縁部が内湾気味に立ち上がる直口の鉢。口縁部直下に凹線文を１条施し，外面下半はヘラケズリ調整を行う。外面のヘラケズリは新しい要素として捉えることができる[8]。

・鉢形土器Ｃ（６）

口縁部直下と，屈曲部と思われる部位に凹線文を施す。この施文パターンは，後述の落込１の高杯形土器Ａに共通する。

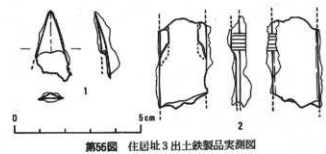
・高杯形土器Ｂ（８・９）

水平に開く口縁部をもち，端部を垂下させるものである。端面は上下端に細い凹線文を各１条施す。脚柱部(９)は，強く絞めつけて成形した後，円盤充填により杯底部を作出し，外面の上下両端に沈線文帯を巡らせる。脚柱部に沈線文をもつ高杯形土器は，西摂地域で第三様式新相より散見されるが，播磨地方と共に，主流を占めるのは，第四様式の後半である(今里1969)。

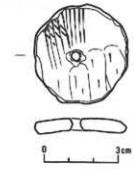
以上，住居址３出土土器は，櫛描文で飾ったものがほとんど見られず，凹線文のみで飾られる土器で占められており，資料数は少ないが，第四様式期の良好な一括資料といえる。

◎鉄製品（第55図）

鉇が１点(１)と板状鉄片が１点(２)出土した。両者とも小片で，銹化が著しく進んでいる。１は刃部長2.8cm，刃部幅1.5cmを測り平面三角形，断面三日月形を呈す。刃部はやや反りをもつ。現



第56図　住居址３出土鉄製品実測図



第56図　住居址3出土紡錘車実測図

存重量は2.0gを計る。2は厚さ0.2cm程の板状を呈し，その上端で左右に突出部を作出し，内側に折り曲げている。また，一部その上に紐を巻いた痕跡が残る。現存重量は8.2gを計る。

◎紡錘車（第56図）

紡錘車が1点出土した。円盤形の土製品の中心付近に一孔穿つものである。直径4.0cm，厚さ0.5cm，孔径は0.35cm，重量9.1gを計る。

土製紡錘車には，製作時からすでに紡錘車として作られたものと，土器片を再利用して適当な大きさにし，孔を穿つものがある。今回の住居址3出土品は後者にあたる。土器片の周縁を8回程打ち欠き，ほぼ円形に加工しているが，破面は未調整のままである。穿孔は中心よりややずれた箇所にある。元の土器の内面側から錐状のものを用いて穿孔する。外面にハケメとヘラケズリのあとを残す。　（緒方・森下）

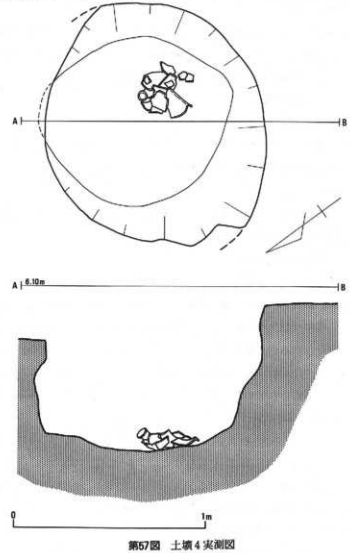
3）土　壙4

a．遺　構（第57図）

土壙4は住居址3内南西部に位置する。当初，住居址3の一部と考えていたが，住居址の床面で壁溝に切られる土壙プランを認めたため，土壙4とした。

この土壙は平面がほぼ円形を呈し，直径120～140cmを測る。深さは約80cm。下端の直径が90～100cmで，掘り方はほぼ垂直に近く，一部オーバーハングする箇所もある。埋土中には，多量の炭化物を含んでいた。

出土遺物は少量だが，甕形土器，器台形土器がある。これらは床面直上に集中して出土した。　（南）



第57図　土壙4実測図

ｂ．遺　物

◎土　器（第58図）

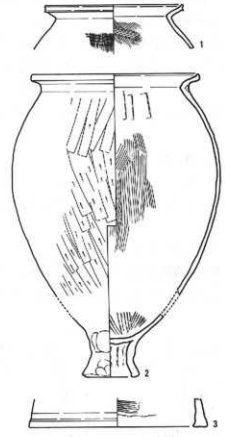
土壙４からは，甕形土器Ａ，器台形土器Ｂが出土した。

・甕形土器Ａ（１・２）

１は外面に成形時のタタキの痕跡を留め，その上からハケ調整を行う。口縁端部は上下に若干拡張し，端面を強い横ナデで凹ませる。

２は脚台付の甕形土器である。体部と脚台部は直接接合する部分をもたないが，色調・胎土が同一で，重ね合わせた状態で出土したため，同一個体と判断した。

脚台の作りは粗雑である。粘土紐を筒状に組み上げた後，手中で絞めつけており，内面に顕著なシボリメがみられる。脚台部と体部の関係が，連続成形を行った後の『円盤充填法』（佐原1968）を用いるものなのか，あるいはそれぞれ分割成形を行った後の『接合法』（寺沢ほか1980）を用いるものなのか，該当部が完存するため観察が不可能である。外見から観察できることは，脚台部と体部の接合痕が外面のくびれ部よりやや上の箇所で比較的明瞭にみられることや，底部裏面の調整がほとんどなされていないことなどである。『接合法』が後期から行われる手法であることを考慮すれば，『円盤充填法』をもって成形された可能性が強いといえよう。



第58図　土壙４出土土器実測図

体部下半はヘラケズリで器壁は薄く仕上げる。口頸部に一旦横ナデを行った後，断面三角形の粘土紐を貼付けて再度横ナデを行う手法は，第四様式ではほとんど見られなくなる指頭圧痕文突帯の名残りと見ることも出来よう。

・器台形土器Ｂ（３）

裾端部は大きく拡張して，幅広い平担面をもつ。内面にはやや粗いハケメが認められ，第四様式の器台形土器の特徴を良く示している。

以上，土壙４出土の土器は第四様式に比定できる。　（森下）

４）溝　７

ａ．遺　構（図版第22）

Ａ９・Ｃ９区において検出された溝である。上面は住居址３に切られる。断面はＵ字状を呈し，

下端は黄灰色砂質土まで掘開される。規模は幅56cm，深さ20cmを測る。埋土は上から暗褐色粘質土，粘性を帯びる暗褐色砂質土の2層である。

この溝は住居址3の炉址との切り合いを見，さらに南へ向い住居址3の外へ伸びる。従って住居址3の「排水溝」とも解釈できるかもしれない。しかし，住居址に伴う排水溝としては規模が大きく，やや深すぎることや，住居址外へ伸びる部分を住居址3のプラン検出面よりさらに下のレベルにおいてようやく確認できたことなどを考慮すれば，むしろ隣接する土壙4とセットをなし，住居址3建築以前に存在したものとみるのが妥当と思われる。

（緒方・森下）

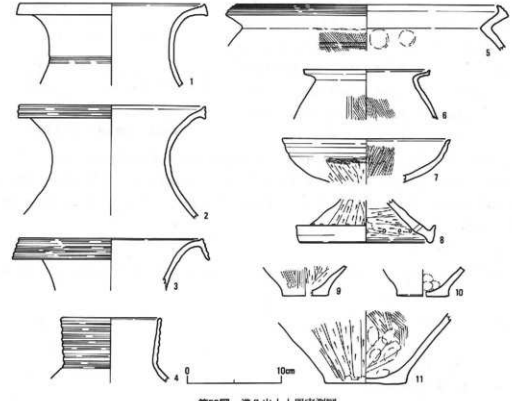
b．遺　物（第59図）

◎土　器

溝7からは広口壺形土器A1・A3，短頸壺形土器，甕形土器A・B，鉢形土器A，脚台Bが出土した。

・広口壺形土器A1　（1・2）

頸部に櫛描文をもち，口縁端部が無文のもの（1）と，体部が無文で，口縁端部に凹線文をもつもの（2）がある。前者は頸部にわずかに筒状部をもち，後者はゆるやかにくびれるものである。



第59図　溝7出土土器実測図

・広口壷形土器A3　（３）

口縁端部が大きく斜め下方へ垂下し，端面に４条の凹線文をもつものである。

・短頸壷形土器　（４）

口縁部がやや開き気味に直立するものである。口縁部外面の全面にわたって太い凹線文を施している。

・甕形土器A　（６）

体部の成形にタタキを使用し，その上から縦ハケを行うが，その痕跡が明瞭に残るものである。内面はハケ調整。

・甕形土器B　（５）

大形のものである。これも成形時に使用した平行タタキの痕跡が，ハケメの下に残る。口縁端部には４条の凹線文を施す。

・鉢形土器A　（７）

体部が皿状に大きく開き，口縁が直口するものである。体部下半の外面を顕著にケズリ上げるなど，新しい要素をもつ。

・脚台B　（８）

内面，外面ともケズリを行う。但し，外面は成形時のケズリで，後に大部分がナデ消され，内面はある程度乾燥が進んだ後の調整時のケズリである。

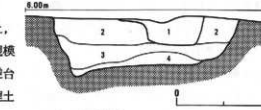
以上，溝７出土の土器は櫛描文がほとんど見られず，凹線文各種を多用するのに加えて，鉢形土器には外面下半のヘラケズリなどの新しい要素が見受けられることを特徴とする。

（森下）

５）　溝　５

ａ．　遺　構（第60図、図版第19～21）

Ａ９・Ｃ９区において検出した，北西から南東方向へ伸びる溝である。両端とも調査区外へさらに延びる。遺構は，褐色粘質土より掘開され，下端は青灰色粘質土まで達する。断面観察により最低２回の掘開が認められた。



１：灰黒色砂質土　３：暗灰緑色砂質土
２：淡灰黒色砂質土　４：暗灰青色砂質土

第60図　溝５断面実測図

下層溝の埋土は，上から明灰黒色砂質土，淡灰黒色砂質土，灰褐色砂質土である。規模は，幅172cm，深さ52cmを測り，断面は逆台形を呈す。下層溝は灰黒色砂質土の単層埋土で，規模は幅70cm，深さ28cmを測る。

調査の際，一部上層，下層の分層発掘を行ったが，ほとんどは両者一括して遺物を取り上げている。そのため，出土遺物には若干の時期幅を認めなければならない。しかし上層，下層間で接合するものも多く，溝は継続的に使用されたと見てよい。

溝５は他の溝と方向や規模などの面においてもほとんど異なる要素はなく，微高地の縁辺に掘開された，日常的性格の強い溝であったと考えられる。但し，本遺構から出土した土器の数量に関しては，他の遺構をはるかにしのぎ，また，下層溝に伴うものは極めて残存状況が良好であった。このことは居住域が非常に近接したものであったことを推定させ，本遺構の東方10mに存在する『住居址３』と併行して存続した可能性を示すものである。

尚，出土遺物中に弥生後期の遺物がみられる。これらは溝５が廃絶した後，自然堆積する過程で混入したものと思われ，埋土第１層上面の凹部等に含まれたものである。

（森下）

ｂ．遺　物（第61～66図）

◎土　器

溝５からは広口壺形土器Ａ１・Ａ２・Ｂ・Ｄ，無頸壺形土器Ａ，甕形土器Ａ・Ｂ，鉢形土器Ａ・Ｂ，高杯形土器Ａ・Ｂ，脚台Ａ・Ｂ，水差形土器，器台形土器Ａと，多種多量の弥生中期後半の土器が出土した。以下各分類器種毎に説明を加える。

・広口壺形土器A1　（１～３・５）

櫛描文のみで飾るもの（１・２），頸部に凹線文をもつもの（３）がある。前者は下層溝より出土した。５は口縁部のみ残存し，内面に単帯の列点文をもつ。１・２は文様構成の面から判断すれば，本資料中では最も古相を示す[9]。３にみられる，いわゆる凹線文Ｂ種は，突出部の断面が方形に近く，住居址３のものとは異なる。また，文様帯の上下両端にハケメを切って凹線文に接続する不規則なナデが巡る。これは凹線文の施文に際しての描き始めと描き終わりの延長線と見ることができる。

・広口壺形土器A2　（４・６）

口縁部の開きが小さく，端面が凹んで，そこに櫛描波状文を施すもの（４）と，口縁部が水平に開き，端面に凹線文Ａ種を施して，円形浮文を付加するもの（６）がある。前者（４）に酷似する例が田能遺跡で見られる[10]。

・広口壺形土器Ｂ　（８）

腹径に比して頸径が大きい，いわゆる『摂津型』（森岡1985）のプロポーションをもつ。頸部がやや内傾する点が特異である。器壁が他の土器と較べ極端に薄い。

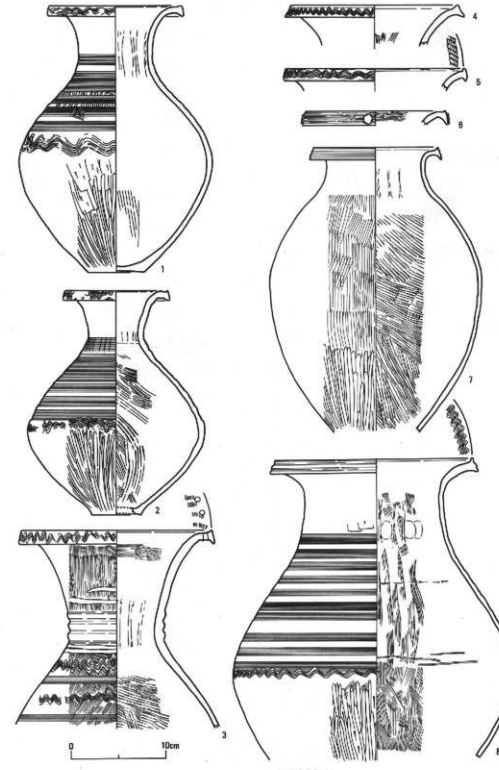
・広口壺形土器Ｄ　（７・９～11）

外面を縦方向の粗いハケで調整するもの（７・９・10）と，タタキ成形の後，ハケメを施しヘラミガキを行うもの(11)がある。後者は口縁端面に１条の凹線文を巡らせる。７は全体のプロポーションが判る良好な資料である。３点とも口径が20cmを越えない小形品であり，新しい傾向を示している（福井編1982）といえよう。

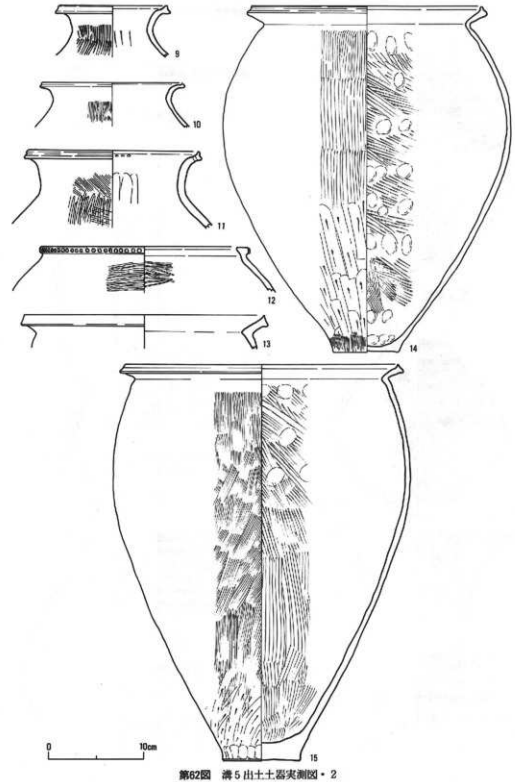
・無頸壺形土器Ａ　（21）・Ｂ　（12），複合土器　（60・21）

いずれも口縁端部を内側へ肥厚させるものである。外面口縁直下に凹線文を１条巡らせる。

12は大形のもので，口縁端部に粘土を付加し，断面方形に肥厚させる。外面に円形浮文を細か



第61図　溝５出土土器実測図・１



第62図　溝５出土土器実測図・２

く巡らせる。また12は60の複合土器と同一個体である可能性がある。60は残存部分が限られており，全体の器形は判らないが，器台形土器の上に鉢形土器か無頸壺形土器を載せた形状を呈するものと思われる。器台部の口縁には3条の凹線文をめぐらせ，その上に円形浮文を全体に付加している。この様な複合土器は一遺跡の保有数は少ないが，第四様式期に播磨から伊勢湾沿岸までの広い範囲に分布するといわれる(佐原1972)。

・甕形土器A　(16・17)

丈高の器体で体部下半にヘラケズリを行うもの(16)と，胴部中程に最大径をもち，その径に比べ器高が低いもの(17)がある。後者は体部下半をヘラケズリした後，縦方向のヘラミガキを施す。口縁端部は16がやや内側につまみ上げるのに対して，17は若干上下に拡張して横ナデによって凹んだ端面を作出する。

・甕形土器B　(13～15・18～20)

完形に復元できるもの3点を含め合計6点出土した。すべて口縁部を拡張するものである。端面に，いわゆる凹線文A種を施すもの(18・19)，強い横ナデによって凹みや稜線を巡らせるもの(14・15・20)，無文の平担な面をもつもの(13)がある。完形の3点からそれらの器形を比較すると，14が端整な無果花形を呈すのに対し，15は丈高で胴張りが小さく，底面が非常に厚い。20は胴が大きく張り出し，底径が大きい割に薄手である。器面調整はいずれも縦ハケの後，胴下半部をヘラケズリし，20はその上からヘラミガキを行う。口縁部周辺は回転台使用のためとされる強い横ナデが巡る。その横ナデが及ぶ範囲は，土器の大小に関係なく，1.2～2.0cm幅内で収まる。

・鉢形土器A　(22～25)

口縁部が斜め上方に開くもの(22・24・25)と内湾するもの(23)がある。24は端部を若干内側へ肥厚させる。文様は22・23が口縁下に4条の凹線文をもち，24は浅く退化した2条の凹線文，25は2条の凹線文をもつ。24・25は両者とも外面に縦方向の顕著なヘラミガキを行う。

・鉢形土器B　(26～28)

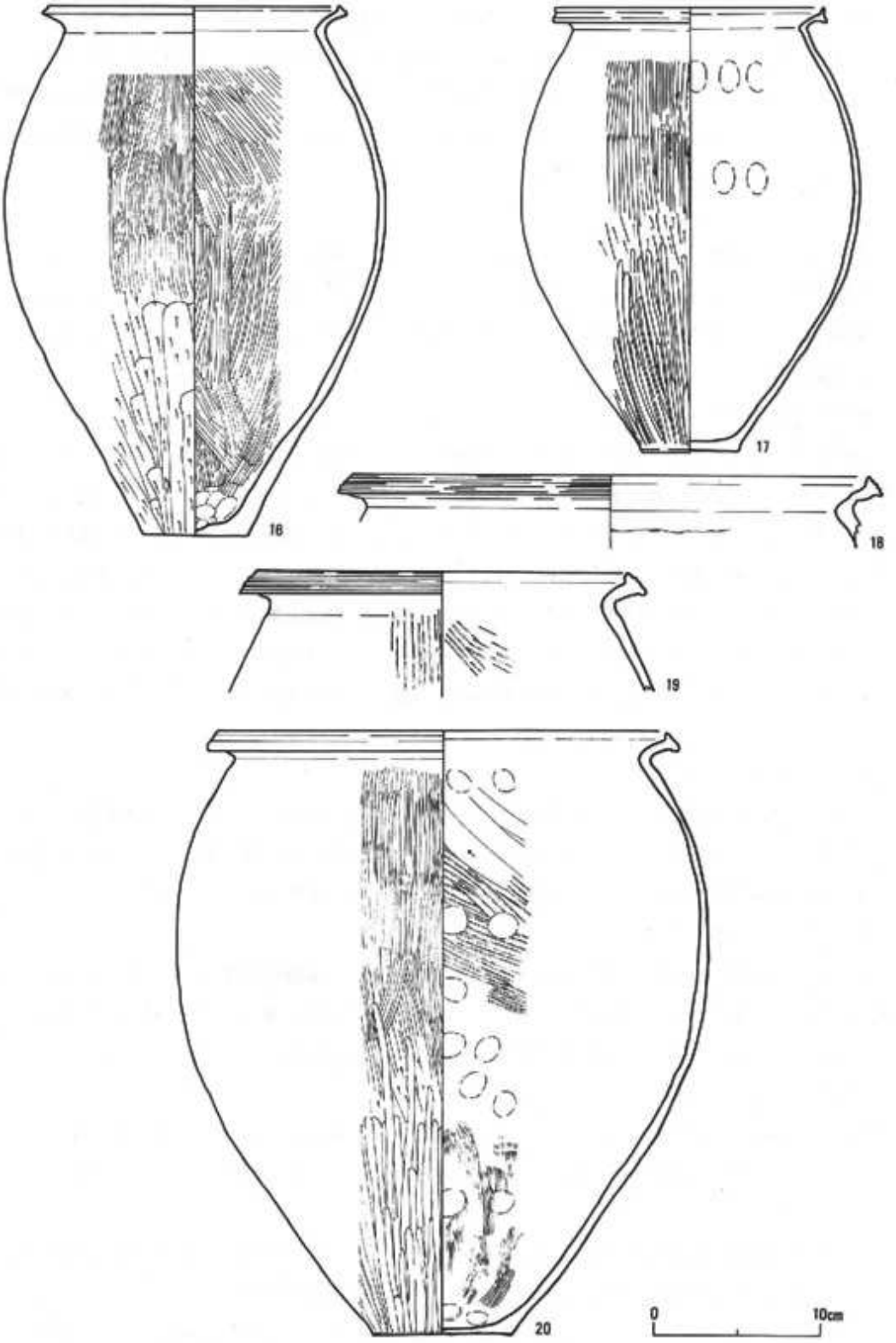
形態的には後述の高杯形土器Aと同じである。体部からの屈曲が明瞭なもの(28)と，斜め上方に直線的に立ち上がるもの(26・27)がある。口縁端部は肥厚し，26・27は内側にやや突出させる。三者とも口縁から下って体部との境付近に2条の凹線文を施す。

・高杯形土器A　(29～42)

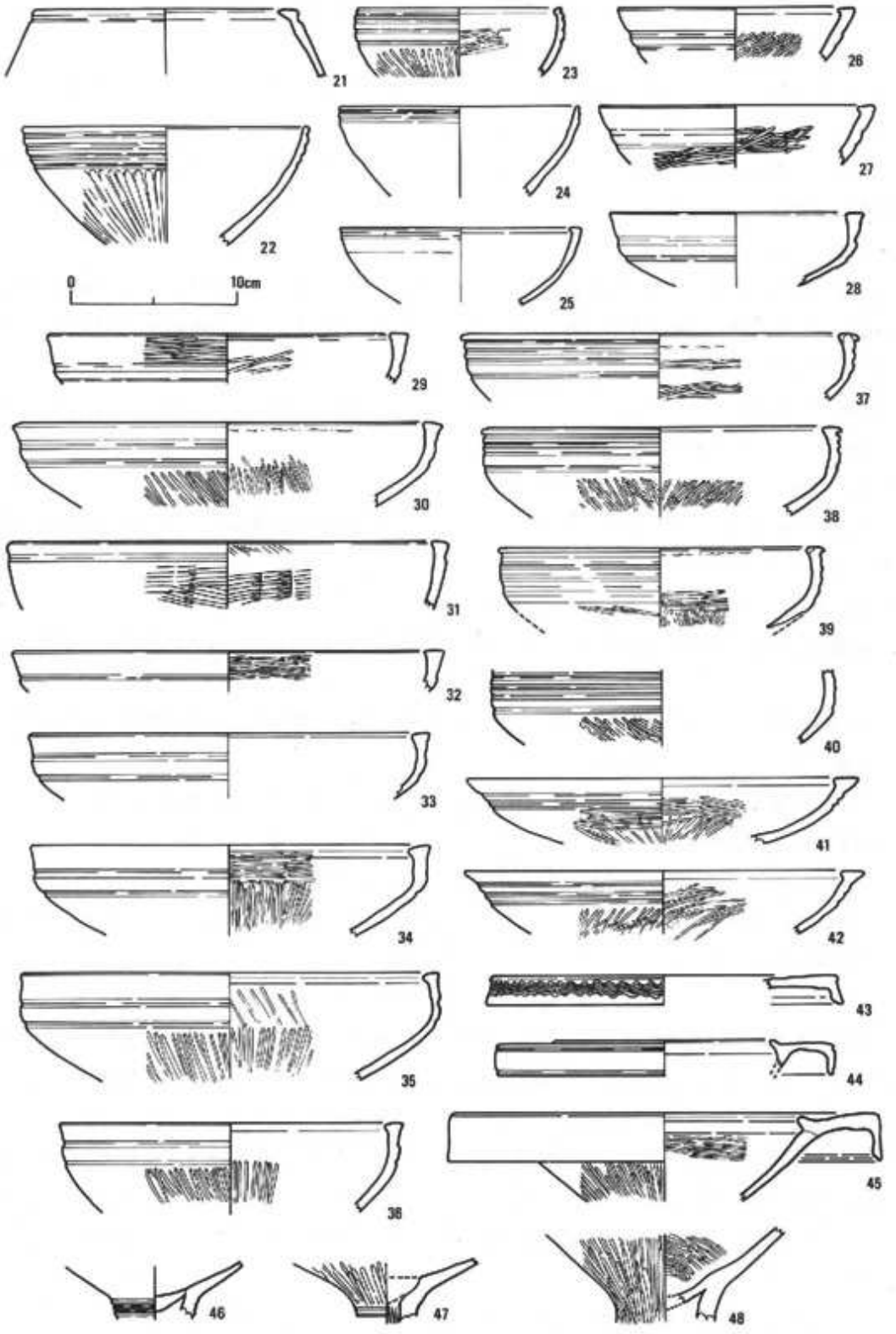
口縁部がゆるやかに屈曲して立ち上がり，上端に幅広い面をもつものである。出土量が多く，出土土器全体の中に占める比率は高い。細部の器形，凹線文の施文部位などによってほぼ三分することができる。

29～36は，体部と口縁部の間の屈曲が比較的明瞭なもので，その境に2条の凹線文を施すものが多い。中にはその凹線文を接近して施し，突帯状の部分を作出するもの(29)もある。

37～40は，口縁部がゆるやかなカーブを描いて立ち上がり，やや内湾気味に仕上げるものである。外面に4～5条の凹線文を施し，口縁端部の拡張方法に共通性がみられる。即ち，一旦擬口



第63図　溝5出土土器実測図・3



第64図　溝5出土土器実測図・4

縁を作出し，丸く収めた後に再び粘土をかぶせ，内側を三角形状に調整し，外側には低く張り出した突出部を作り出す手法である。

41・42は皿状に大きく開く形状のものである。口縁端部を内外面に拡張し，上端に幅広い面を作り出す。口縁下に3条の凹線文を施す。

以上の三者が果して時間差を示すものなのか，あるいは各製作者のクセであるのか現段階では明確に仕難い。

・高杯形土器B　(43～45)

口縁部が水平に開き，端部を垂下させるものである。内面突帯は内傾気味に巡る。端面に櫛描文をもつもの(43)，凹線文をもつもの(44)，無文のもの(43)がある。43の波状文は回転を利用せずに施したとみられ，方向や間隔が乱れている。

高杯の杯底部が3点出土した(46～48)。いずれも『円盤充塡法』による成形である。46・47は脚柱部にそれぞれ細い凹線文・沈線文をもつ。

・脚　台A　(57・58)

裾端部を拡張せずに丸く収めるもの。57は1条の，58は2条の凹線文をもつ。内面調整は57がナデ，58がヘラケズリである。

・脚　台B　(49～56)

裾端部が肥厚し幅広い端面をもつものである。裾端部の形状により，ほぼ三分することができる。

49～52は端部の拡張が顕著でないものであり，49は小形の部類に入る。端部直上の内外面に凹線文状の凹みを巡らせるものが多い。

53・56は端部上端を尖り気味に拡張するものである。53は端面に2条の沈線文を巡らせる。

54・55は端部上端を方形に拡張するものであり，下端も若干拡張している。

以上の三者は前記の高杯形土器Aの三者に対応するものとみられる。

器面調整は外面に縦方向のヘラミガキを行っているものが多く，内面にヘラケズリを行うものは8点中6点見られた。

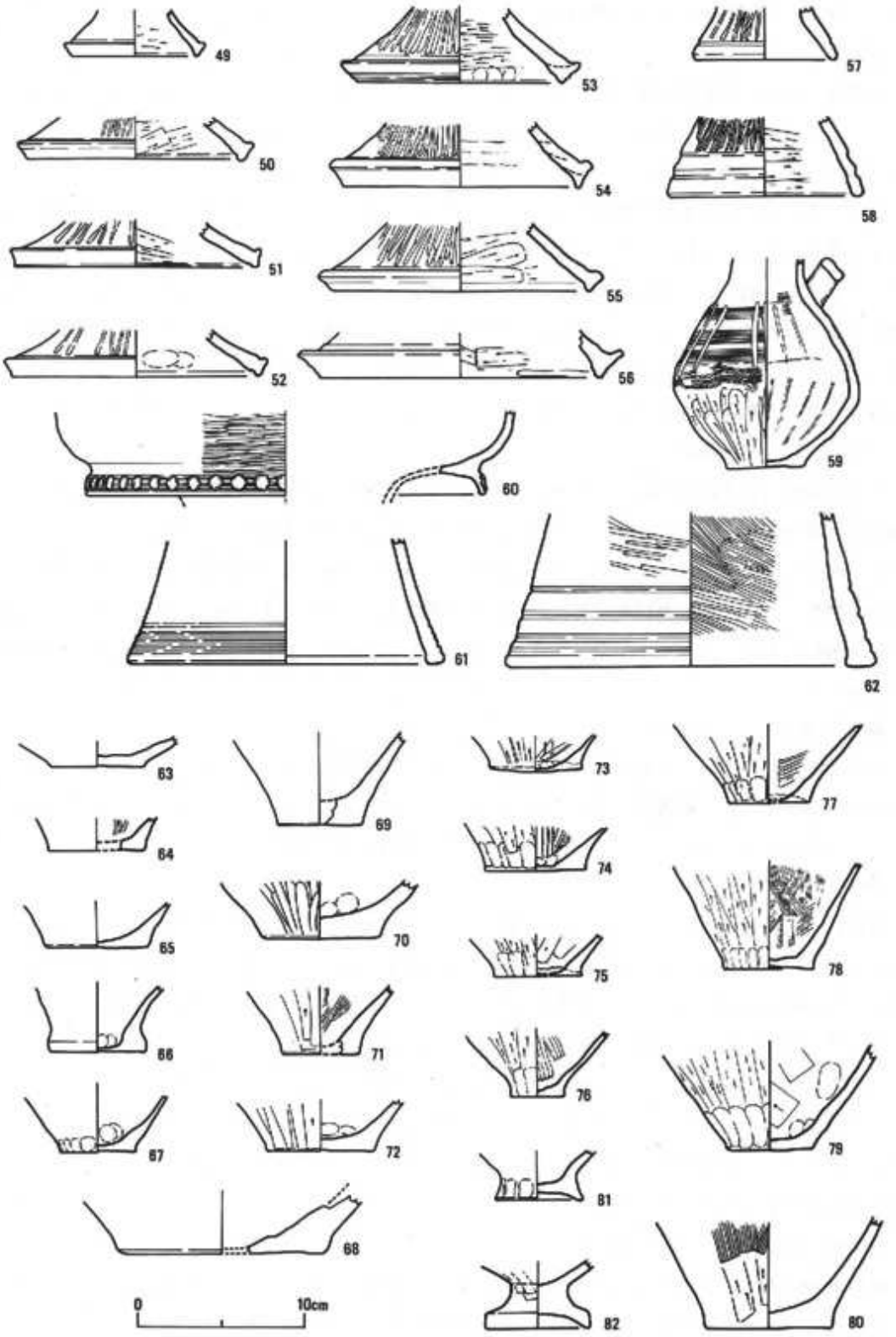
・水差形土器　(59)

体部を櫛描文で飾る小形のもの(59)が1点ある。口縁部は欠損するが，体部は完形である。体部はやや下位で強く張りをもち，半環状の把手は貼付け手法によって付加する。櫛描文施文後，2本1組の縦方向の篦磨研線を施すが，体部下半はヘラミガキを行わず，ヘラケズリを残す。

この土器は古い要素と新しい要素を兼ね備える。即ち，櫛描文を主体とする文様構成や胴下半が張る器形は第三様式(古)に盛行するものであり(福井編1982)，把手の貼付け手法(木下ほか1980)や胴下半のヘラケズリ調整(福井編1982)は第四様式に認められるものである。

・器台形土器A　(61・62)

裾部のみ2点出土した。両者ともほぼ直線的に立ち上がるものである。端部直上に4～5条の凹線文をもつ。62にみられる内面の顕著なハケメは，西摂地域の器台形土器には普遍的な調整で



第65図　溝5出土土器実測図・5

ある。透孔は残存部位においては確認できない。尚，両者とも溝4出土の破片と接合関係にある。

・底　部　(63～82)

底部片のみでは器形を判断できるものが少なく，ここで一括して取り扱う。器面調整が磨滅しているものは除いて，外面板ナデによるもの3点，ヘラケズリによるもの8点である。後者の器壁は前者に比べ，薄い傾向がある。82はあまり例をみない台状の底部である。

以上，溝5出土の土器は櫛描文を多用し，古相を示すものから，凹線文を主体とする新相のものまでを含んでいる。但し，古相を示す土器も技法や調整などの点においては新しい要素を含みもつ。ここで『溝』という遺構の性格から若干の時間幅を含んでいることを考慮しても，出土状態や土器の残存状況からみて全くの混在とみなすことは不自然であろうと思われる。従来の編年案に照応すれば，第三様式(古)から第四様式までを含むものであるが，以上を踏まえて考慮すれば第四様式の範疇で捉え得るものと思われる。　(緒方・森下)

◎上層土器　(第66図)

下記の遺物は弥生中期の溝5が埋没した後の凹部に投棄された弥生後期に属する土器である。調査時に抽出ができなかったため，これらの遺物が大量の中期の遺物の中に混在している。その中から抽出してここで説明を加える。形式分類については次節で述べる後期のものを使用する。器種は甕形土器A・C，高杯形土器脚台，甑形土器がある。他に鉢形土器が2点みられるが，後期に一般的な器形ではなく，中期に伴うものか，あるいはさらに新しい時期の混在である可能性もある。

・甕形土器A　(83・84・87)

口径が胴部径を上回ると思われる小形品(83)，口径が胴部径とほぼ等しい中形品(84)がある。87は大形品であるが，胴部径の口径に占める割合が小さいものと思われる。いずれも端部を面取りし，丁寧な作りを呈していることなどから後期前半期の所産とみることができる。

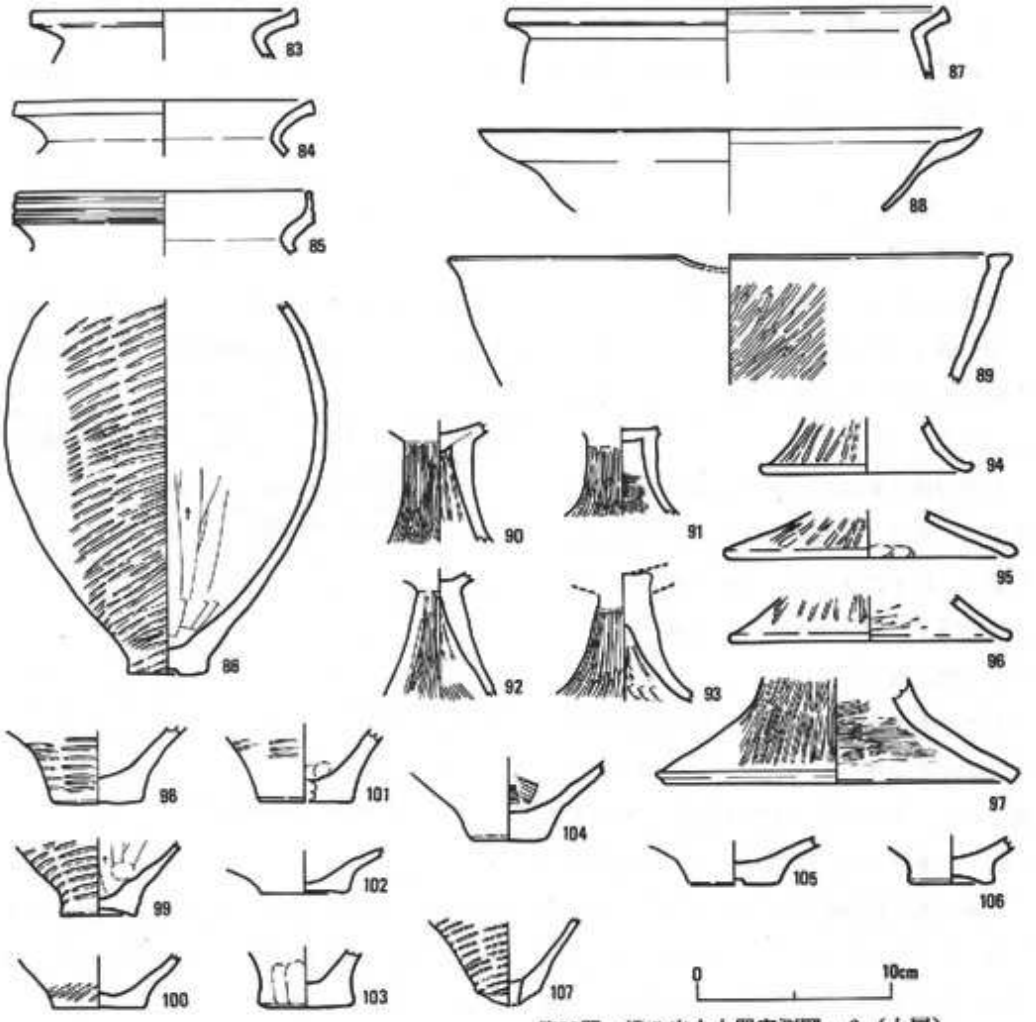
・甕形土器C　(85)

受け口状の口縁部をなすものである。但し，85は本遺跡を含めた畿内地方の後期にみられる一般的な受け口状の口縁部とは異なり，中部瀬戸内的要素の強いものである。当地方の編年によると，『口縁端部が上方に立ち上がる器形が出現する』のは後期後半以降である(高橋1980)。

酒津式の新相以降は，端面が凹線から櫛目へと変化するので，下限をそこに求めることができる。ここで85の口縁端部の細かな特徴に注目すると，端面の凹線文は退化形態を示し，端面下方の突出はほとんどないこと，また，胴部との境は内面に稜線をもつが比較的ゆるやかであることなどが見られる。胴部内面の調整は不明であるが，これらの特徴により，後期末，才ノ町Ⅰ式にその時期を求めるのが妥当であろう。

・その他の甕形土器　(86・98～101)

86は倒卵形を呈する甕形土器の胴部である。最大径部は胴上半にあり，端整なプロポーションをもつが，外面のタタキが『連続ラセン叩き手法』を採用していること，底部がドーナツ状の上げ底を呈すことなどから，後期後半のやや新相を示す資料といえよう。98～101は甕形土器の底



第66図　溝5出土土器実測図・6（上層）

部と思われ，いずれも外面にタタキが残る。

・高杯形土器脚台　(90～97)

脚柱部(90～93)と，裾部(94～97)がある。前者はいわゆる『円盤充塡法』を用いるもの(91)，脚柱を成形し若干のプレスをおいた後，杯底部から作り上げるいわゆる『接合法』を用いるもの(90)と，脚柱天井部が杯底部となるいわゆる『挿入付加法』(森田ほか1977)を用いるもの(92・93)がある。裾部はゆるやかに広がるもの(94)と，一旦ゆるやかに広がった後，屈曲して大きく開くもの(95～97)がある。

・甑形土器　(107)

突出気味の底部に焼成前の円孔を穿つものである。底部のみで全体のプロポーションは不明であるが，一般的に直口の鉢形土器と同一形態を示すものが多く，本資料も例外ではないと考える。

・底　部　(102～106)

胴部が大きく開くもの(102・104～106)と，立ち上がり気味に開くもの(103)がある。前者は壺形土器の底部と考えられる。105はドーナツ状を呈し，106は明瞭な上げ底である。

溝5混在の遺物は，以上のように後期前半期に比定できるものから，後期末のものまでが含まれる。従って住居址1・2がそれぞれ営まれた時期においても，溝5の痕跡が凹部として地表に残存していたことが窺われる。　（森下）

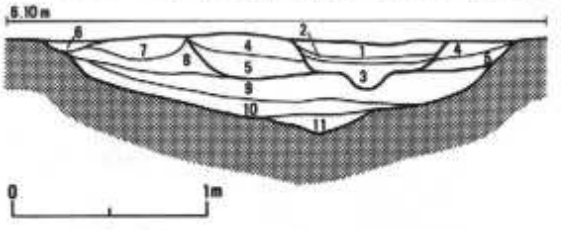
6）溝　4

a．遺　構（第67図，図版第19・22）

溝4はC8・9区において検出された。北西から南東方向へ伸びる溝である。A8区ではその一部を確認したが，全体を明らかにすることはできなかった。溝は断面観察によれば，最低3回の掘開がある。しかしそれらの分層発掘はなし得ていない。

下層の溝は断面形が大きく開いたV字状を呈す。現状での幅が216cm，深さが32cmを測る。埋土は上位より明灰色粘質土，灰白色粘質土，暗灰色砂質土の3層である。伴出遺物はない。

中層の溝は現状で幅80cm，深さ25cmを測る。断面形は浅いU字状を呈す。埋土は2層に分れ，上位より灰褐色粘質土，暗褐色粘質土が堆積する。中期後半の土器が出土した。



1：灰茶色砂
2：灰白色粘質土
3：灰黒色粘質土
上層
4：灰褐色粘質土
5：暗灰褐色粘質土
中層
6：暗灰褐色砂質土
7：灰褐色粘質土
8：暗灰色砂質土
9：明灰色粘質土
10：灰白色粘質土
11：暗灰色砂質土
下層

第67図　溝4断面実測図

上層の溝は断面形がU字状を呈し，さらに中央部分が一段掘り窪められる。この部分に土器の細片がびっしりと詰まった状態で出土した。埋土は上から灰茶色砂質土，灰白色砂質土，灰黒色砂質土である。出土遺物は中期後半が主体であるが，他時期の遺物も若干混じる。

（柴田・緒方・森下）

b．遺　物

◎土　器（第68・69図）

ここでは中期後半の土器を説明し，上層出土の混在遺物は，それに引続き記述を行う。

・広口壺形土器A1　（1・3～7・11）

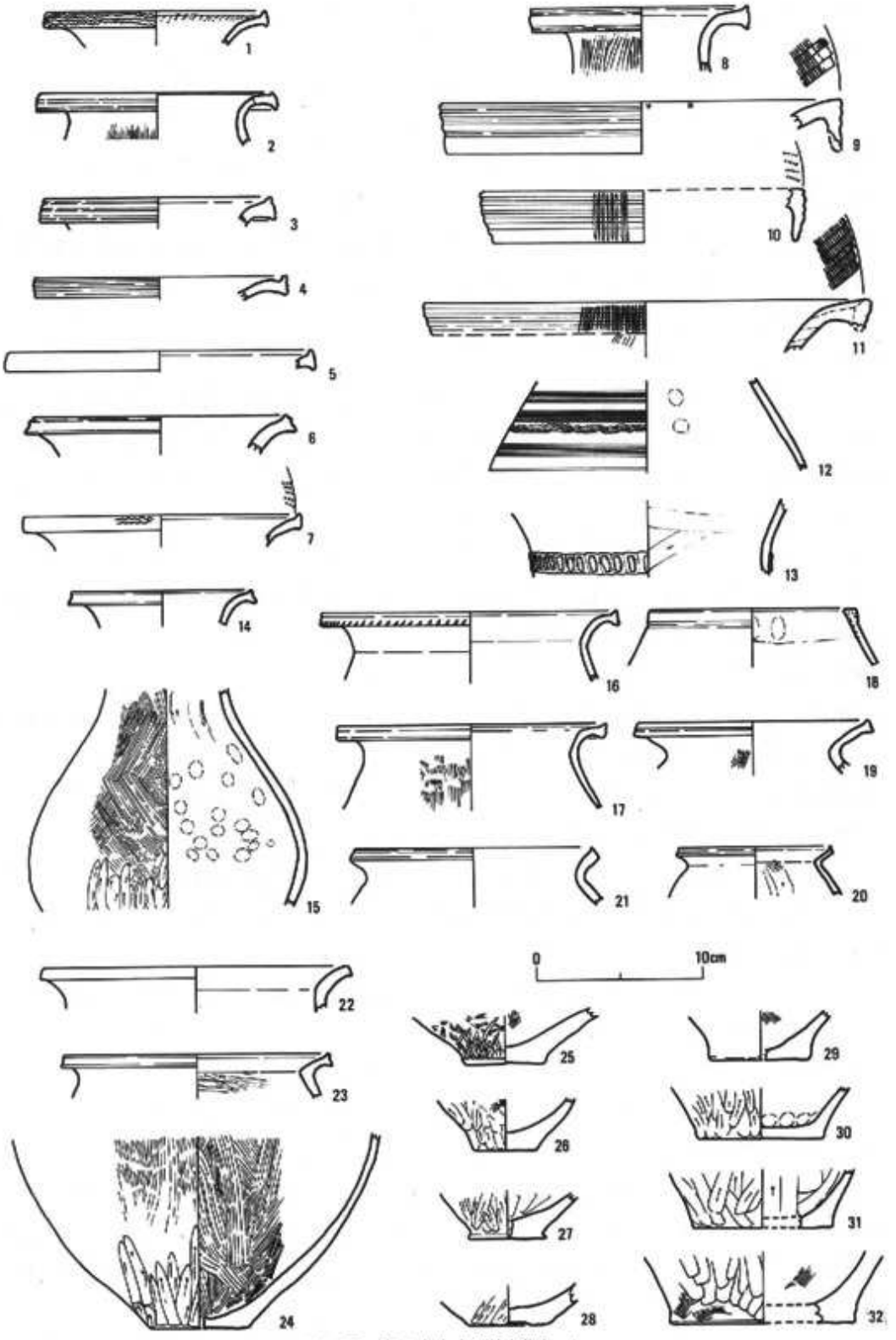
7点出土しているが，すべて口縁部破片である。1・7は端面に櫛描波状文をもち，内面に列点文をもつものである。3・4・6・11は，端面に凹線文を施すもので，11は凹線文施文の後，縦方向の沈線を描き，さらに内面に簾状文風の列点文を施す。5は端面，内面ともに無文である。

・広口壺形土器A3　（9・10）

口縁部を大きく垂下させ，端面に3～4条の凹線文を施すものである。両者とも内面加飾をもち，9は簾状文風の列点文を施す。10は凹線文の上に縦方向の沈線文を施す。

・広口壺形土器C　（8）

筒状の頸部から口縁部が水平に開くものである。頸部外面は縦方向の粗いハケ調整の後，顕著



第68図　溝4出土土器実測図・1

な横ナデを行う。落込1から出土したもの(第71図)に類似する。

・広口壺形土器D　(2・14～17)

5点出土した。頸部が太く，口縁部が短く外反するものである。2は端面に凹線文をもち，16は下端に刻目を入れ，17は無文である。外面調整はハケで，15はそれを装飾的に使用した意図が看取される。この形態のものは本来的に加飾しないものが多く，第四様式に一般的である。

・無頸壺形土器B　(18)

口縁部外面直下に1条の凹線文をもつ。体部上半は直線的に内傾し，口縁部の拡張は内外面ともに粘土をかぶせる。落込1出土のもの(第71図8)は端部外面に断面三角形の粘土を貼付けており，手法の点で本例と異なる。

・甕形土器A　(19～23)

5点出土した。いずれも口縁部のみの破片であり，全体の器形や体部調整は不明である。口縁端部に強いナデによる窪みを巡らせるものが主体を占め，19は沈線をもち，22は無文である。口頸部のくびれは，内面に稜をもち鋭く屈曲するもの(20・22・23)と，ゆるやかに屈曲して外反するもの(19・21)がある。

・鉢形土器A　(33・36・45)

直口の鉢形土器。三者とも口縁下に凹線文を1条施す。33は器壁が薄く，鉢形土器Bとの区別は困難である。45はミニチュア品で，外面にヘラケズリを残す。

・鉢形土器B　(34)

器壁が薄く，内湾しながら立ち上がるもの。内面はヘラミガキで丁寧に仕上げる。脚台が接続するものと推定でき，第四様式新相に位置づけられる。

・高杯形土器A　(35・37～40)

5点出土した。凹線文の施文形態により三分することができる。口縁部直下に凹線文をもつもの(35)，体部と口縁部の境に2条の凹線文をもつもの(37・38)，皿状の体部をもち3条の凹線文をもつもの(40)である。37は2条の凹線文が接近しており，中間に突帯状のものを作り出す。

・脚　台A　(44)

小形のもので，外面にヘラケズリを残し，裾部に凹線文を1条施す。溝5にほぼ同じ形状のものがある(第65図57)。

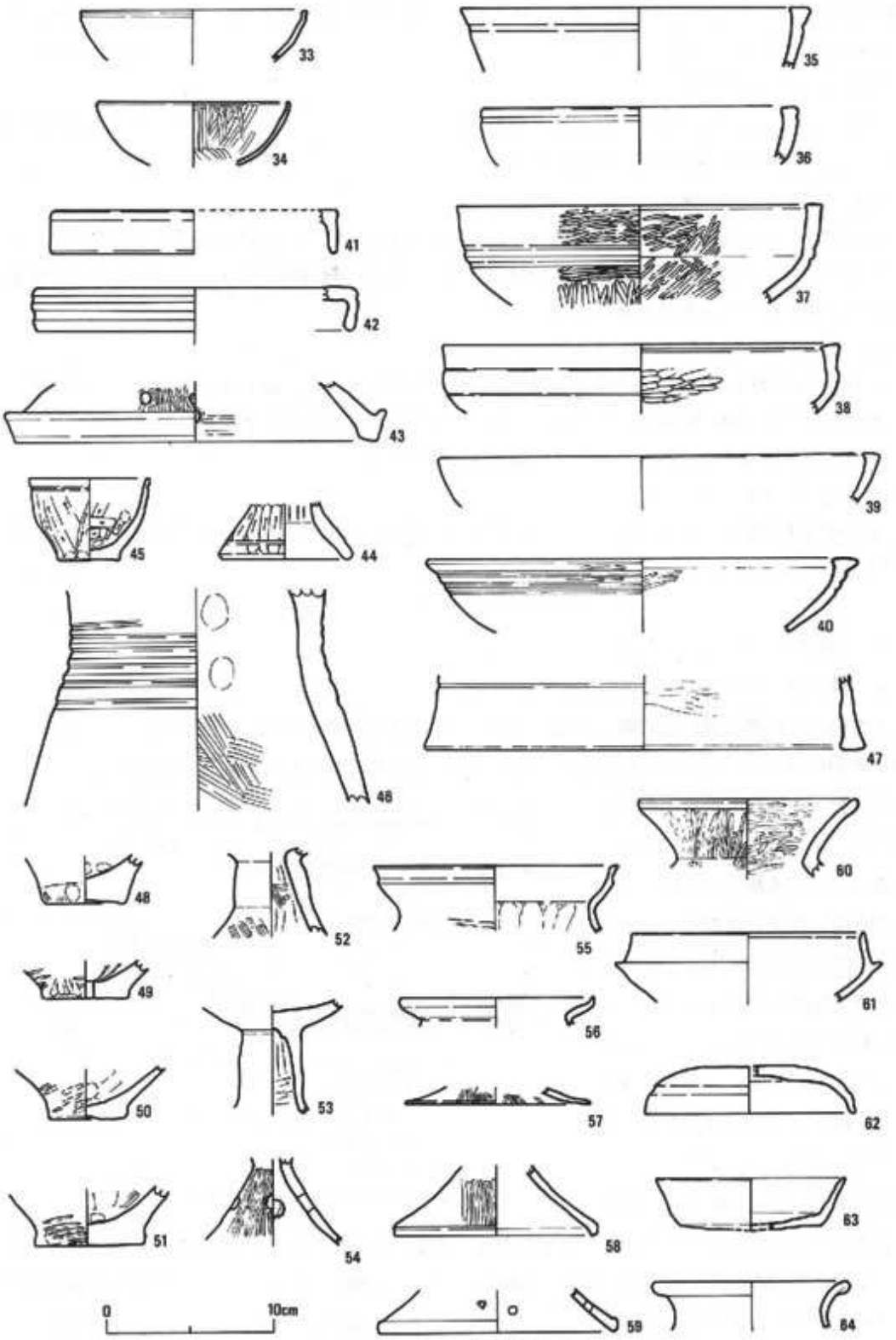
・脚　台B　(43)

大形の脚台で，裾端部を上に突出させ下方は方形に拡張する。裾部に2個単位の穿孔が残る。

・器台形土器A　(46・47)

器壁が厚く，外面に太い凹線文をもつもの(46)と，薄手で裾部がやや顕著に立ち上がるもの(47)がある。前者は西摂・播磨地方から広く瀬戸内地域に特有の，多条で太い凹線文を施す器台で，透孔をもつのが普通であるが，残存部位には確認できない。くびれ部分の器壁が極端に厚いのは，当地域の特色である。

以上，溝4出土の土器は総体として第四様式に比定でき，その中でも広口壺形土器Aの内面加



第69図　溝4出土土器実測図・2

飾が顕著であること，広口壺形土器B，鉢形土器，無頸壺形土器などに新しい形態のものを含むことなどが特徴として指摘できる。　（緒方・森下）

◎上層土器　（第69図）

中期の土器に混じって後期や他の時期の遺物が出土した。ここではそれらを抽出して説明を加える。土器の分類は後期のものを使用する。

・甕形土器C　（55・56）

受け口状の口縁部をもつもの。55は中形品，56は小形品となる。前者は胴部の張りが少ないずんどう形になると思われ，田能遺跡に類例をみる[11]。56は口縁端部をつまみ上げるもので，明確な受け口状のものとは形状を異にする。

・脚　台　（52・53・57～59）

いわゆる『円盤充塡法』によって杯底部を成形するもの(52)と，脚上部が杯底部となる『挿入付加法』がある。脚柱部の形状は，両者とも中ぶくれであるが長さが異なる。

裾部は非常に薄手の57と，ゆるやかに開く58・59がある。

・底　部　（48～51）

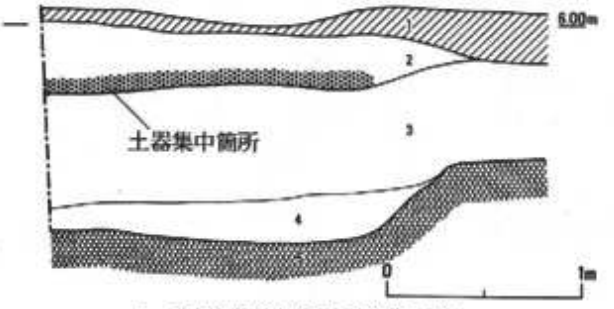
上げ底気味の厚手のもの(48)，ドーナツ状のもの(50)，平底のもの(49・51)がある。49は底部に穿孔がみられる。　（森下）

7）落込1

a．遺　構（第70図，図版第15）

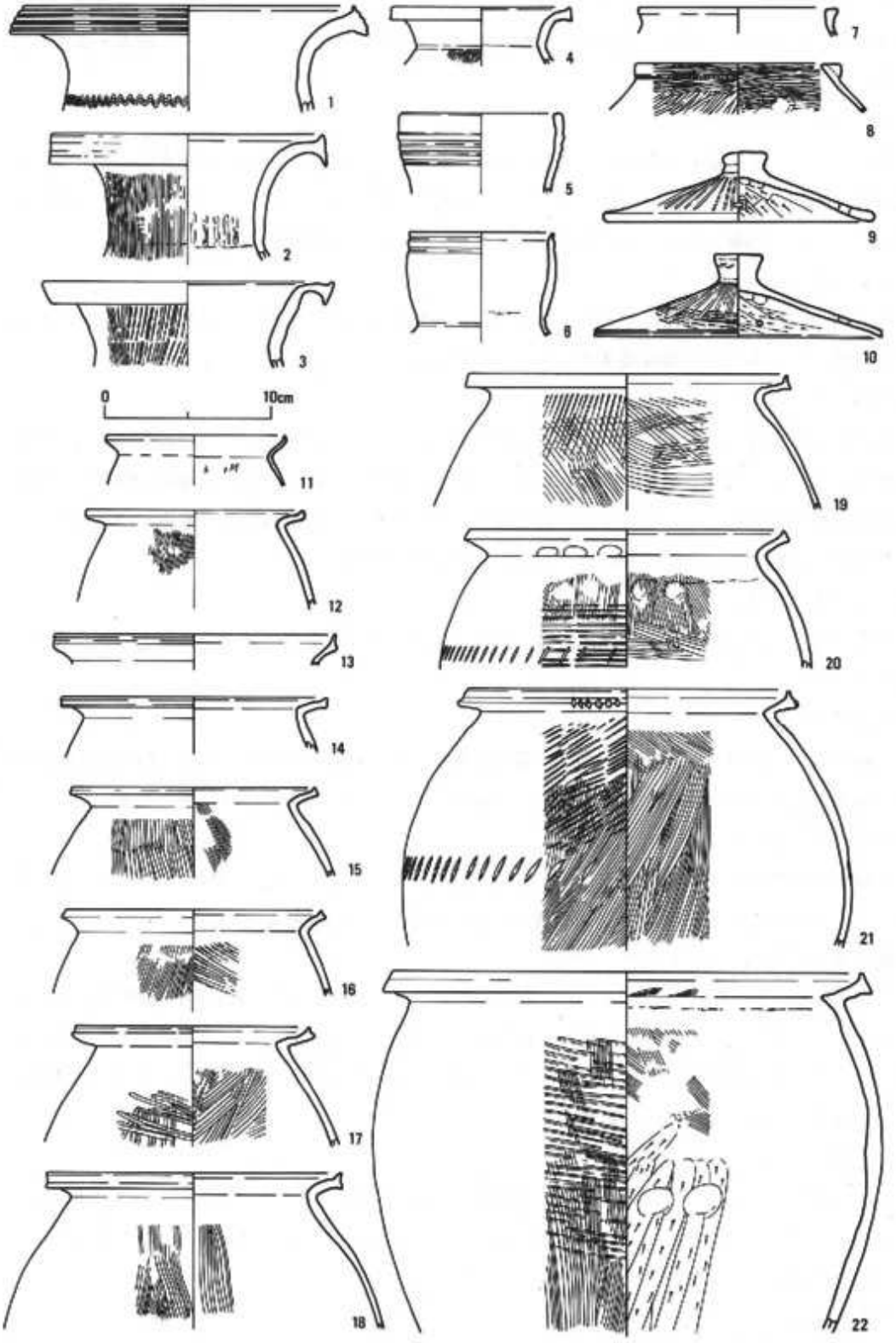
本遺構は今回調査地の北東隅，D12区において検出された落込み状の遺構である。この地点は縄文晩期のベースである青灰色砂層や，それを覆う同時期の包含層も同様に低く落込んでいる。弥生遺物包含層はその落込みの手前で薄く且つ低くなっており，今回検出された遺構へと接続する。

調査時では弥生遺物包含層削平中にその肩を見い出すことが出来ず，縄文晩期の土器を包含する灰青色粘質土上面において，出土遺物の広がりとともにプランを確認した。埋土は黒褐色粘質土で，北東方向にゆるやかに落込んでおり，調査区隅で深さ40cmを測る。遺構は調査区外へさらに伸びており，そのまま低地へ繋がるものか，あるいは再び立ち上がり浅い溝状を呈するものなのか，現段階で明確な判断はできない。但し，B10・11区において，遺構埋土と同一と思われる層を確認しており，出土土器(第97図)も類似することから，そのまま低地へと落込んで湿地帯を形成していた可能性が強い。



1：赤褐色粘質土（弥生遺物包含層）
2：黒灰色粘質土（落込1埋土）
3：灰緑色粘質土（縄文遺物包含層）
4：暗黒色粘質土（落込2埋土）
5：青灰色細砂

第70図　落込1・2断面実測図



第71図　落込1出土土器実測図・1

出土遺物は同一平面上に広がっており，いずれも磨滅がほとんどないことから，落込みがある程度埋没した後に，一括して投棄されたものと見ることができる。　（緒方・森下）

b．遺　物

◎土　器（第71～74図）

落込1からは広口壺形土器B・C・D，長頸壺形土器，短頸壺形土器，無頸壺形土器，壺用蓋形土器，甕形土器A・B，鉢形土器A・B・D，高杯形土器A・B，脚台A・B，器台形土器A・Bが出土した。器種，量ともに一通り揃っており，良好な一括資料といえよう。

・広口壺形土器B　（1）

短く緩やかにくびれる頸部をもち，外傾する口縁端面に凹線文を施す。頸部直下に回転を利用せずに施したとみられる櫛描波状文をもつ。本資料中ではやや古相を示すものである。

・広口壺形土器C　（2・3）

頸部が直立気味に立ち上がり，口縁部が短く水平に開くものである。2は口縁端面をほぼ垂直に拡張し，3はやや開き気味である。両者とも頸部に縦ハケを行った後，口縁部，頸部の内外面に顕著な横ナデを加える。特に2の口縁部及び，その内面には連続的に巡る細線が認められ，かなり高速の回転を利用して調整を行っているものと思われる。

・広口壺形土器D　（4）

短く外反する口縁部をもつ。体部と頸部の境に1条の凹線文を巡らせる。当類中では小形の部類に入る。

・長頸壺形土器　（5）

口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。端部は丸く収め，外面に凹線文を施す。川西市加茂遺跡や田能遺跡出土の第四様式に比定されている資料に比べ，より簡素化された感がある。

・短頸壺形土器　（6）

口縁部がやや中ぶくれを呈するものである。この形態は水差形土器の口縁部に多くみられ，この土器もその可能性をもつが，器壁が薄いことから壺形土器と判断した。

・無頸壺形土器B　（7・8）

口縁部の拡張が顕著なもの(8)と，そうでないもの(7)がある。後者が口縁部をブレスをおかずに一気に作出しているのに対し，前者は一旦内傾の口縁を作り，ナデ調整を行った後，断面三角形の粘土紐を付加して仕上げている。口縁直下に浅い刺突がめぐるほか，目立った装飾もなく，後者を含めて第四様式の新相を示す。

・壺用蓋形土器　（9・10）

扁平で薄手のもの，把手部の断面形が丸味をもった方形を呈するもの(9)と，鋭く稜をもつ逆台形のもの(10)がある。両者とも内面はヘラケズリを施し，10は外面にタタキメを残すことなどは新しい要素として抽出できる。

・甕形土器A　（11～21）

胴部にタタキメを残さないもの(11～14・17)と，残すもの(15・18～21)がある。前者は小

形のものが多く，胴部調整は主に縦ハケを行う。中にはヘラミガキを行うもの(17)もある。その土器は頸部のくびれがきつく，口縁部がやや内湾気味に大きく開くなど，播磨地方に分布する甕形土器に類似した形態を呈す。11は器壁が薄い小形のもので，口縁部を小さくはねあげており，やや特異である。田能第4調査区第6溝(福井編1982第82図―9)に類例をみる。

本資料中の甕形土器にみるタタキメは主として2種に分けられる。比較的太いタタキメを成形段階で用い，方向は平行か左上り。その後，縦ハケやナデで調整し，器表にはその凹凸が痕跡程度に残るもの。もう一方は細い原体を用いて一見ハケメと見間違うほど緻密に施し，その上に縦ハケを行っているが，タタキメは大変明瞭に残るものである。甕形土器Aはほとんど前者であるが，21は後者に属す。尚，21はタタキの方向が右上りで，中期末に一般的なものとは異なる。胴部や口縁下端の刺突・刻目なども，他の灰色系胎土の土器とは若干様相を異にしており，搬入品と思われる。

・甕形土器B　(22～26)

大形の甕形土器は，胴部まで残存する3点のすべてにタタキメがみられる。そのうち22と25は太目のタタキを使用してナデで丁寧に消すが，凹凸が確認できる。この2者は内面下半を強く削ることにも共通点が見られる。26は細い緻密なタタキメを施す。縦ハケを下から行うが，タタキメは明瞭である。内面は縦ハケ調整である。この土器で注目すべきことは口縁部のくびれ部直下と口縁端部に恐らくタタキと同じ原体を使用して，回転運動を駆使したナデを施していることである。一見凹線文に類似する。24は頸部に指頭圧痕文突帯の名残りとみられるハケ原体の刺突文が巡る。

・鉢形土器A　(29・30)

口縁部が直口するもの(30)と，やや屈曲して内傾するもの(29)がある。前者は外面にゆるやかな凹凸をもつ太い凹線文，後者は口縁下に浅く太い凹線文を2条施す。

・鉢形土器B　(31)

薄手に仕上げ，内外面にヘラミガキを行う。小形の脚台をもつ後期初頭に散見されるものとの共通性が窺える。

・鉢形土器D　(27・28)

体部が内湾しながら立ち上がり，外面全面にわたって太い凹線文を施すものである。端部を丸く収めるもの(27)と，内側にやや拡張し，上方に面をもつもの(28)がある。

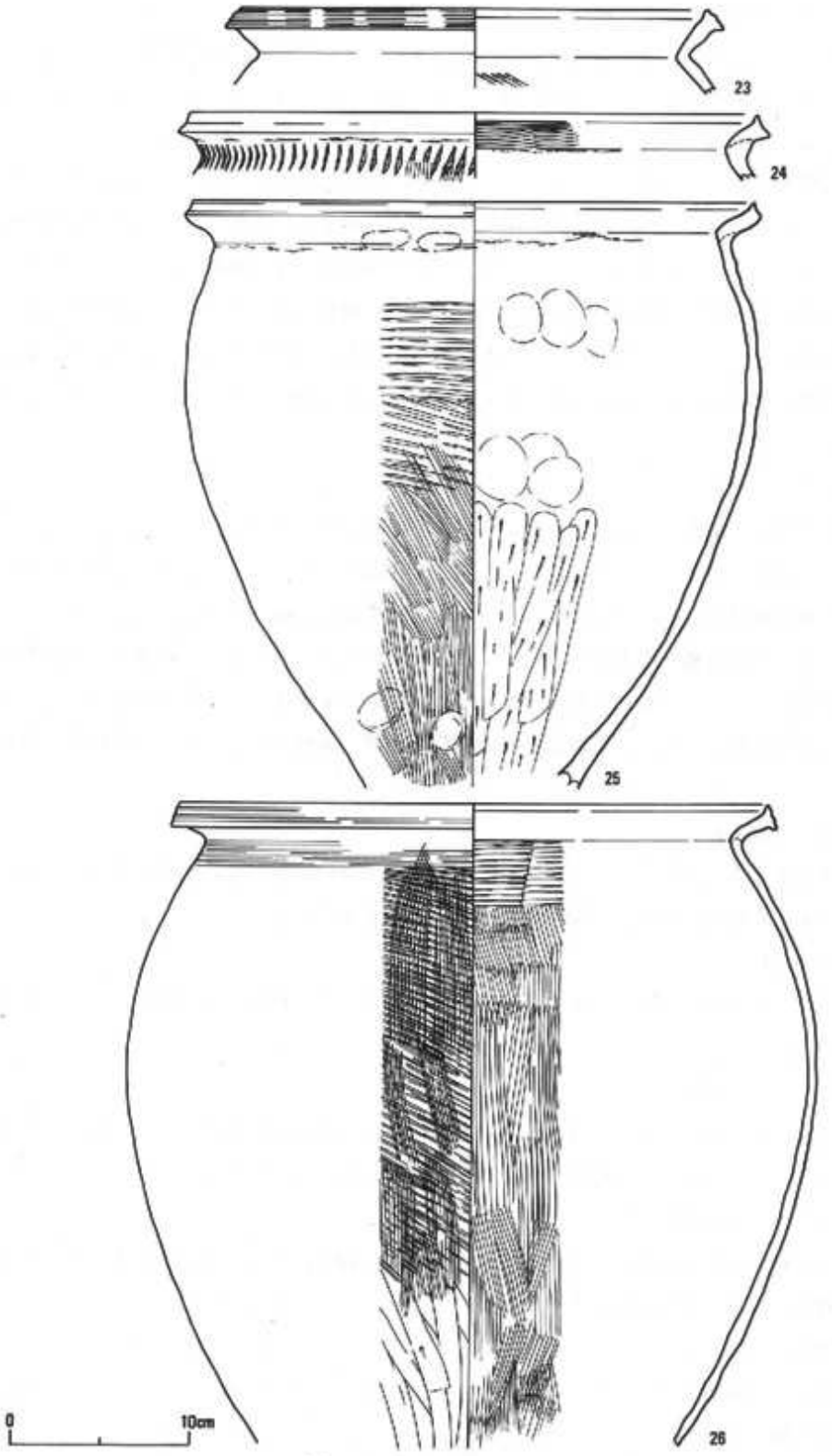
・高杯形土器A　(32～38)

本資料中の高杯形土器は体部から屈曲して立ち上がる口縁部の外面上下端に片寄って凹線文を施すことを特徴とする。また凹線文も退化し，浅く沈線化したものが多い。

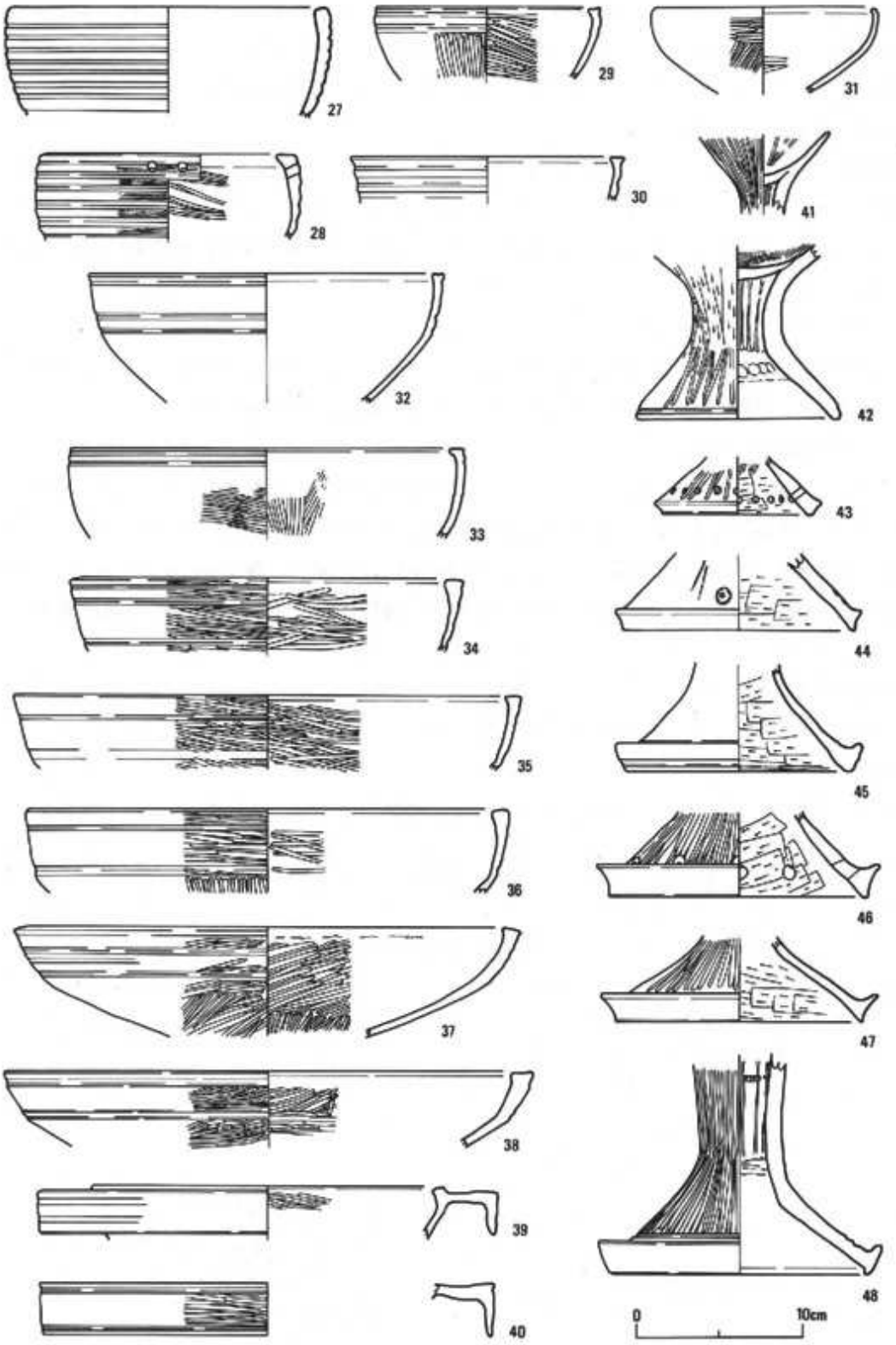
・高杯形土器B　(39・40)

水平に拡張する口縁部をもつ。39は端面に2条のナデによる浅い凹みをもつ。40は上下端に退化した凹線文を施す。

・脚　台A　(42)



第72図　落込1出土土器実測図・2



第73図　落込1出土土器実測図・3

裾端部に拡張がみられず，丸く収めるものである。体部まで一旦成形を行った後，脚柱部を強く絞めつける。外面のケズリはナデで消される部分が多く，成形段階に行ったものと思われる。内面にケズリを行わず，結果として器壁が厚手であることは脚台Bの48と共通する点である。

・脚　台B　(43～48)

裾端部を大きく拡張するものである。前記の48を除き，すべて内面にヘラケズリを行う。器壁は概して薄い。ケズリの方向はすべて右→左である。脚柱部を左手にもち，右手でケズリ上げたものであろう。円孔を巡らせるもの(43・46)，円形で中央に小突起がある圧痕をもつもの(44)などがある。

・把手（水差形土器）(49)

把手部分のみ残存し，全体の器形は察し得ない。把手部分の断面は扁平な方形を呈し，作りは丁寧である。『挿入手法』を用いて付加しており，古い要素として捉え得る。

・器台形土器A　(50)

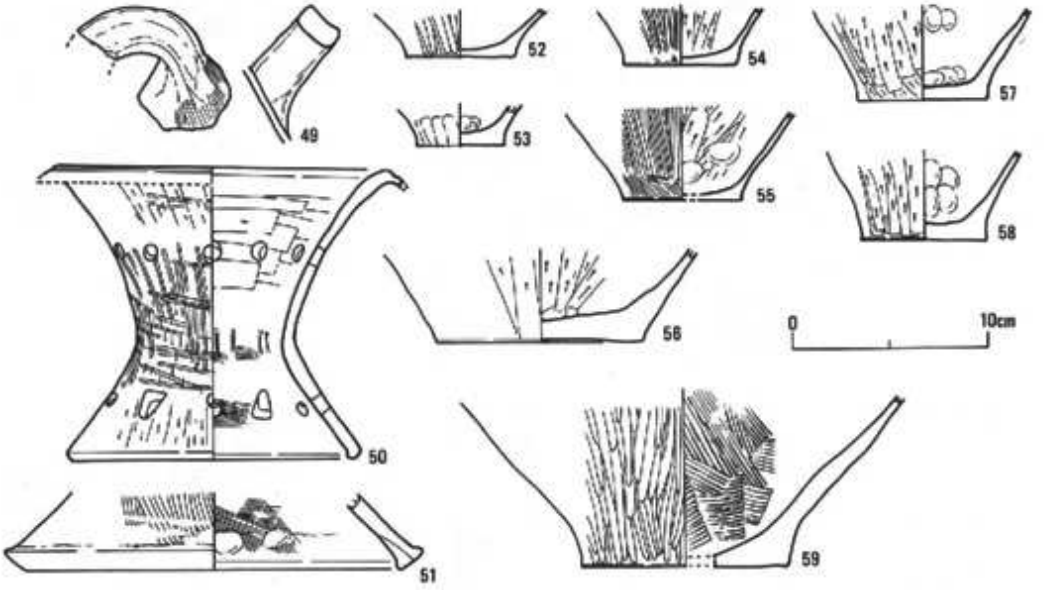
小形で中期では稀な無文化したものである。口縁部に退化した凹線文をもち，下段の透孔に台形状のものを混じえるなど，装飾的要素を若干残し，裾端部の収め方も丁寧に行っている。しかし，他の遺跡で中期に属する器台形土器が体部外面を太い凹線文で飾っているのに比べると大変簡素化されたものといえる。同様な例は，茨木市東奈良遺跡第1大形土壙(東奈良遺跡調査会1980)などでみることができる。

・器台形土器B　(51)

裾部のみ残存しており，全体の形状は不明である。

・底　部　(52～59)

すべて安定した平底である。内外面にヘラケズリを残すものが多く，内面が3点，外面が2点で



第74図　落込1出土土器実測図・4

ある。両者とも下から上へケズリ上げる。概して，内面にヘラケズリを残すものが，より器壁が薄いという傾向が窺える。

以上，落込1出土の土器は第四様式の中でも新しい要素をもつものが多い。

（緒方・森下）

弥生中期後半の土器観察表

住居址3出土土器（第54図）

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
1	広口壺 A2	口径15.8 残高 5.3	○ 0.5～3.0 良好 灰白色	口頸部は「ラッパ」状に開く。外面に3＋α条の凹線文。端部は斜下方に大きく拡張。端面に4条の凹線文の後，中央に刺突をもつ円形浮文を2ないし3個縦一列を単位として付加する。	内外面とも磨滅が顕著だが，外面に若干縦ハケが残る。粘土の外頓接合部で割れる。	2 外面に黒斑	
2	広口壺 C	口径16.8 残高 3.6	◎ 0.5～1.0 やや軟 灰白色	短い筒状の頸部から，口縁部は大きく外反して水平に開く。端部は上下に拡張。	磨滅のため不明。	1	
3	無頸壺 A	口径16.6 残高 4.6	◎ 0.5～4.0 やや軟 淡灰色	内湾して立ち上がる体部。口縁部は内側に大きく拡張し，上方に面をもつ。口縁下と体部中程に1条ずつの凹線文。	外面縦方向のヘラミガキ。	5	
4	甕 A	口径9.0 残高 4.3	◎ 0.5～1.0 やや軟 淡赤白色	小形の甕。胴張りはほとんどせず口縁部は「く」の字に屈曲し短く外反。端部は丸い。	磨滅のため不明。	9	
5	甕 A	口径19.0 残高 2.7	◎ 0.5～1.0 やや軟 赤褐色	口縁部は内外面に稜をもって鋭く屈曲し，大きく外反。端部は丸い。	磨滅のため不明。	10	
6	鉢 C	口径16.8 残高 3.3	◎ 0.5～2.0 やや軟 褐灰色	口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。外面に2条の凹線文と，端部上面に凹線状の凹みを巡らす。	磨滅のため不明。	8	
7	鉢 A	口径13.0 底径 3.7 器高 7.7	◎ 0.5～1.0 良好 灰橙色	安定した平底からやや内湾気味に立ち上がり，口縁は直口。外面に1条の凹線文。端部は若干面取り。	外面体部下半ヘラケズリ。内面は主に縦位ヘラミガキ。	7	52- 2
8	高杯 B	口径21.6 残高 2.6	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	水平に張り出す口縁部。内面突帯はやや内傾。端部は直に垂下させ，外面に上下2本の凹線文。	端部外面は横位ヘラミガキ調整。	6	
9	高杯 B （脚部）	残高10.8	○ 0.5～3.0 やや軟 暗褐色	脚柱部は非常に細くて長い。外面に横位のヘラ描き沈線を上下それぞれ10条，7条施す。杯部へはやや内湾気味に広がる。	杯底部は充塡された円盤が欠落。脚柱部内面は強いシボリメ。	4	52- 5

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
10	（底部）	底径 9.4 残高 2.7	◎ 0.5～1.0 良好 暗灰褐色	大形の安定した平底。	磨滅のため不明。	22	
11	（底部）	底径 6.7 残高 4.9	◎ 0.5～1.0 良好 灰白色	やや薄手の大形の平底。体部へは直線的に斜上方へ立ち上がる。	外面に縦ハケ。	21	

土壙4出土土器（第58図）

1	甕 A	口径14.6 残高 4.8	◎ 良好 灰黄白色	内湾する胴部から「く」の字に屈曲して，口縁部は外反。端部は上下に拡張し，端面は強いナデにより回む。	体部外面は，左上りのタタキ成形の後，縦ハケ。内面は斜ハケ。口縁部は内外面とも横ナデ。	2	
2	甕 A	口径17.4 最径21.9 底径 5.0 器高31.9	◎ 0.5～1.0 良好 暗褐色	脚台部は粗製小形で端面は軽く面取りし，内側に小さく突出。一旦くびれて体部に接続。体部は倒卵形で上方に最大径をもつ。口縁は強く屈曲して外反。外面屈曲部に粘土帯を貼付。口縁端部は若干肥厚し，上方に丸く拡張。	脚台部はおもに指押圧で成形。底部内面は縦ハケ。体部外面下半は下→上のヘラケズリ。上半は下→上の板ナデ。内面は縦ハケ。上半部に原体圧痕がみられる。底部は円盤充塡法。	1 図上復元 外面に黒斑	51－2
3	器台 B	底径18.8 残高 3.0	◎0.5～1.0 良好 灰白色	裾部は直線的にわずかに開く。端部は肥厚し，巾広い端面をもつ。裾部下端に1条の凹線文。	外面は横ナデ。内面は横ハケ。	3	

溝7出土土器（第59図）

1	広口壺 A1	口径19.4 頸径13.1 残高 8.8	○ 良好 灰白色	頸部は直立。口縁はゆるやかに屈曲して大きく開く。端部は肥厚し，面をもつ。頸部下端に単位4条の櫛描直線文。	口縁部は横ナデ。	9	
2	広口壺 A1	口径19.4 頸径12.4 残高11.8	◎ 0.5～2.0 やや軟 淡黄灰色	頸部は太く，ゆるやかにくびれて，口縁部は斜上方に開く。端部は上下に拡張し，2条の凹線文を施す。	内外面とも横ナデ調整。	6	
3	広口壺 A3	口径19.2 残高 5.4	◎ 0.5～3.0 良好 淡橙色	口縁部は外反しながら開いた後，斜下方に大きく折り曲げ，外端部に4条の凹線文を施す。	磨滅のため調整は不明。	7	
4	短頸壺	口径10.2 残高 6.7	△ 0.5～3.0 良好 淡灰褐色	口縁部はやや外傾気味に直立。外面に8条の凹線文を施す。端部は丸くおさめる。	磨滅のため調整は不明。	4	
5	甕 B	口径27.5 残高 4.7	◎ 良好 淡灰白色	口縁部は稜をもって「く」の字に屈曲し，端部は上方に大きく拡張して，外端面に4条の凹線文を施す。	体部外面横位タタキによる成形の後，斜方向のハケメ。内面及び口縁部は横ナデ。	8	
6	甕 A	口径13.2 残高 5.2	◎ 0.5～2.0 良好 暗灰褐色	体部上半はやや直線的に内傾し，口縁は強く屈曲して開く。端部は外側に若干つまみ上げる。	体部は内外面とも縦ハケ。口縁部は丁寧な横ナデ調整。	3	

7	鉢 A	口径17.5 残高 4.5	○ 0.5～5.0 良好 灰白色	体部は皿状に大きく開き，口縁部へはゆるやかに内湾して立ち上がる。端部は内傾した面をもつ。外面に2条の太い凹線文。	体部外面は下→上のヘラケズり。上半部横ヘラミガキ。内面は縦ヘラミガキ。	1 外面に黒斑	
8	高　杯 脚台B	底径13.6 残高 4.6	◎ 0.5～4.0 良好 灰橙色	裾端部は上下に拡張。裾部は「ラッパ」状に開く。小形の円孔を巡らす。	外面は下→上，内面は右→左のヘラケズりの後，外面はナデ。	2	
9	(底部)	底径 4.8 残高 3.2	◎ 0.5～2.0 良好 灰白色	平底。	外面は縦ハケ。内面下→上のヘラケズり。	12	
10	(底部)	底径 5.5 残高 3.1	◎ 0.5～7.0 良好 黒灰色	平底。底面中央に径1.0cmの穿孔(焼成前，外→内へ)。	外面はナデ。内面は指頭圧痕が残る。	5 底面にスス付着	
11	(底部)	底径 8.5 残高 6.6	◎ 良好 灰白色	薄手で大形の平底。体部へは直線的に開く。	外面は下→上のヘラケズり。内面は下半が板ナデ，上半は斜ハケ。部分的にラセン状の指ナデが巡る。	11 外面にスス付着	

溝5出土土器（第61～66図）

1	広口壺 A1	口径13.9 頸径 7.8 腹径20.3 底径 5.9 器高28.0	◎ 0.5～3.0 良好 灰褐色	やや上げ底で薄手の底部。胴部は球形で最大径はその中央にある。筒状の頸部から，口縁部は大きく外反し，端部を上下に若干拡張する。頸部以下に櫛描直線文(9条単位)6段を施し，一部複帯構成をとる。口縁端面と胴部最大径直上に同原体の波状文を各1段ずつ施す。	体部外面の下半はヘラケズりの後，縦位のヘラミガキ。上半は文様の下地に斜位のヘラミガキがある。内面下半はハケメが残るが，その他の部位も含めて丁寧なナデ調整を行う。頸部内面にはシボリメが残る。	98	49- 1
2	広口壺 A1	口径10.8 頸径 5.2 腹径18.6 底径 5.2 器高23.6	◎ 0.5～2.5 良好 淡赤褐色	薄手の底部から，算盤玉状の胴部をもつ。頸部はくびれて外傾し，口縁部で強く外反して水平に広く，端部は上下に若干拡張し，外面に櫛描波状文を施す。頸部以下には簾状文1段，直線文6段を施し，後者は一部複帯構成をとる。最下段に粗い波状文を1段施す。櫛原体は簾状文及び最上段の直線文が9条単位で，他は7条単位である。	体部外面下半はヘラケズりの後，縦位のヘラミガキ。内面は粗い原体のハケで，斜方向に調整する。頸部内面にシボリメが残り，それより上は内外面とも丁寧なナデ調整。	99	49- 2
3	広口壺 A1	口径20.0 頸径10.2 残高20.6	◎ 0.5～1.0 良好 淡黄灰色	内傾する胴部から，頸部でくの字にくびれてゆるやかに外反し，口縁部で強く開く。2個の円孔をもち，内→外へ穿つ。端部は上下に拡張し，外面に櫛描波状文を施す。内面には櫛描列点文を巡らす。頸部に4条の凹線文をもち，その上下に施文原体によるナデが巡る。頸部以下に波状文と直線文が交互に2段施される。原体は6条単位。	口縁部以下の外面調整は斜～縦位のハケメ。胴部内面は斜位のやや粗いハケメが残る。口縁部内外面及び頸部内面は丁寧なナデ調整を行うが，一部横位のハケメが1段巡る。頸部内面にシボリメが残る。	71	49- 3

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
4	広口壺 A 2	口径17.8 残高 4.5	◎　～0.5 良好 浅灰黄白色	大きく外反しながら開く口縁部。端部は斜め下方へ拡張し外面に櫛描波状文(単位5条)を施す。	内面下方に一部ハケメが残るが，他の部位は丁寧な横ナデ調整。	52	
5	広口壺 A 1	口径19.1 残高 2.4	◎ 0.5～1.0 良好	大きく外反して開く口縁部。端部は上下に拡張し，外面に櫛描波状文(単位6条)，内面に簾状文風櫛描列点文を施す。	口縁端部上方拡張の内側に1条の沈線が巡る。調整は内外面ともに丁寧なナデ。	54	
6	広口壺 A 2	口径15.0 残高 1.6	◎ 0.5～1.0 やや軟 淡橙色	大きく外反し水平に開く口縁部。端部は斜め下方に拡張し，端面に4条の凹線文を施す。円形浮文が1個認められるが単位不明。	内面は横位のヘラミガキ。外面は丁寧なナデ。	56	
7	広口壺 D	口径13.0 頸径10.4 腹径22.2 残高29.8	◎　～0.5 良好 淡黄灰色	体部は口縁部に比べて大きく，倒卵形を呈す。頸部は短く直立し，口縁は短く外反する。端部は上下方に拡張し外面に3条の凹線文を施す。	外面調整は縦位のハケの後，下半に丁寧なヘラミガキを行う(縦位)。内面は斜位の粗いハケメ。口縁部，頸部は内外面とも丁寧なナデ。頸部内面にシボリメが残る。	67	49- 7
8	広口壺 B	口径20.9 頸径14.7 腹径30.0 残高31.8	○ 0.5～1.5 良好 淡黄灰橙色	胴部は中程で大きく張り，直線的に内傾する。頸部は緩かに屈曲して内傾気味に立ち上がり，口縁部は大きく外反して開く。端部は上下に拡張し外面に凹線文2条，内面に櫛描波状文(単位8条)を巡らす。頸部以下に櫛描直線文10段を施し，その最下段に重複して波状文(単位6条)を施す。	胴部は器壁が薄く，内面には接合痕が残る。下半部外面はヘラケズリの後，縦位のヘラミガキ。部分的にハケメが残る。内面下半は縦位のハケメを密に行い，上半は粗く押圧気味に行う。最大径部内面に横方向の沈線が巡る。頸部外面は板ナデ(下→上)，内面はハケメ調整で，シボリメが残る。口縁部は内外面とも丁寧なナデ。	57	50- 2
9	広口壺 D	口径11.5 頸径 8.2 残高 5.6	◎　～0.5 良好 淡灰黄橙色	頸部は「く」の字に屈曲し，口縁部は短く開く。端部は上下に若干拡張し，端面中央に凹みが巡る。	胴部上半～頸部に斜～縦位の粗いハケメ調整を行う。その他の部位は丁寧なナデ調整。頸部内面にシボリメが残る。	51	
10	広口壺 D	口径15.5 頸径12.8 残高 4.8	○ 0.5～1.0 やや軟 淡灰白色	口縁部は頸部をほとんど介さず，短く屈曲して外反する。端部は上方に若干つまみ上げる。	胴部上半は縦ハケが残る。他の部位はナデ調整。	55	
11	広口壺 D	口径18.4 頸径15.6 残高 8.1	◎　～0.5 良好 淡灰黄白色	頸部は短く，筒状を呈して直に立ち上がる。口縁部は短く外反し開き，3孔を内→外へ穿つ。口縁端面に1条の凹線文を施す。	体部成形に斜位のタタキを使用の後，ヘラミガキを施す(縦位)。頸部外面はハケメ(斜位)が残る。口縁部及び内面はナデ調整。頸部内面に指頭圧痕が残る。	50	
12	無頸壺 B	口径22.0 残高 4.7	◎ 0.5～2.5 良好 淡黄灰白色	直線的に内傾する体部から，口縁部は短く立ち上がる。端部は内側にやや突出し上面と外面を面取りし，後者に径4	口縁端部の肥厚は断面三角形の粘土紐を貼付けて行う。体部調整は内外面とも横位ヘラミガキを丁寧に行う。	49 同一個体の破片が溝4より出土	

				mm大の円形浮文を6～7mm間隔で付加する。			
13	壺 B	口径25.4 残高 3.6	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰褐色	口縁部は鋭く「く」の字に屈曲し，内面に稜線を形成。端部は下方に若干拡張し，幅広い面をもつ。上端はやや尖り気味に仕上げる。	外面は丁寧に横ナデ調整。内面は磨滅のため不明。	65	
14	壺 B	口径24.5 腹径30.9 底径 7.0 器高36.5	○ 0.5～1.0 良好 淡灰黄橙色	底部は薄手で若干上げ底状。斜上方に直線的に立ち上がり，やや上位で最大径部を介して内湾気味に内傾する。口縁部は鋭く「く」の字に屈曲し，内外面に稜を形成。端部は肥厚し，上方に丸く拡張する。端面に1条の凹線文を巡らす。	胴部外面は縦位のハケ調整の後，下半をヘラケズリと若干の板ナデ。底部縁辺には下地のハケメが残る。内面は全体的に粗いハケ調整を行い，部分的に指頭圧痕が残る。底部内面はナデを行う。口縁部は内外面とも横ナデ。	73 胴部上半に黒斑 最大径部以下14cmの範囲で外面にススが，底部より4cmから9cmの内面に炭化物が付着	
15	壺 B	口径28.8 腹径31.6 底径 8.0 器高41.9	○ 0.5～2.0 良好 淡灰黄橙色	厚手(2cm)の底部から直線的に立ち上がる。胴部は丈高で最大径は上位にある。口縁部は鋭く「く」の字に屈曲して短く外反。端部は上下に若干拡張し，端面に強いナデによるものとみられる稜が巡る。	底部外面は成形時の指頭圧痕が残存。胴部外面調整は縦方向のハケで，底部から10cmの範囲ではその上からヘラケズリ。内面は縦～斜方向のハケメ調整。上方に指頭圧痕が残る。口縁は内外面ともナデ。	59 外面に底部から6cmまで黒斑。内面下半に炭化物付着 図上復元	
16	壺 A	口径17.4 腹径22.7 底径 6.2 器高31.6	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰橙色	底部は内面中央部が回むが，側縁～胴部下方は平均1.1cmと器壁は厚手。最大径部はほぼ胴部中央にあり，均整なプロポーションである。口縁部は内面に強い稜をもって「く」の字に屈曲し，やや外反気味に開く。端部はあまり肥厚せず，上方に若干つまみ上げる。	胴部外面調整は縦位ハケメ。下半部は後，ヘラケズリ。内面は底部に指頭圧痕が残り，10cmまでは不定方向，それ以上は縦～斜方向のハケ調整。口縁部以下3.5cmまで丁寧な横ナデ。	68	50－5
17	壺 A	口径16.0 腹径22.0 底径 5.2 器高26.5	◎ 0.5～2.0 良好 暗灰色	底部は薄手で若干上げ底状。胴部は最大径部をその中程にもつ均整のとれたプロポーション。口縁部は鋭く屈曲し，外反気味に開く。端部は上下に拡張し，端面に1条の凹線文を施す。	胴部外面は縦位のハケメの後，下半部をヘラケズリ。最後に下半をヘラミガキ調整(縦位)。内面は全体的に丁寧なナデを行う。口縁部～胴部上方は横ナデ。	70	51－1
18	壺 B	口径30.8 残高 4.3	◎ 0.5～2.5 良好 淡黄灰褐色	口縁部は内面に稜をもって鋭く屈曲して開く。端部は肥厚して上下に拡張し，端面に4条の凹線文を施す。	外面屈曲部に強い横ナデの他，丁寧なナデを行う。	62	
19	壺 B	口径22.1 残高 7.2	○ 0.5～1.0 やや軟 淡赤橙色	胴部上半は直線的に内傾。口縁部は「く」の字に屈曲し，端部は斜上下方に拡張する。端面に3条の凹線文を施す。	胴部外面は粗い縦ハケ。内面は斜位ハケ。口縁屈曲部外面に強い横ナデを行う。口縁部は内外面ともナデ。	61	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
20	甕 B	口径27.0 腹径32.0 底径 8.4 器高36.2	◎ 0.5～1.5 良好 淡赤橙色	底部は薄手だが安定する。胴部は球形に近く，最大径は中程にある。口縁部は短く「く」の字に屈曲し，端部は上下に拡張。端面は退化した凹線文を1条施す。	胴部外面調整は縦ハケ，下半部へラケズリ，縦位へラミガキの順で行う。内面調整は下半部縦ハケの後ナデ。上半部は斜位の粗いハケの後板ナデ。部分的に指頭圧痕が残る。	58 胴部外面中央部にススが内面下半に炭化物付着	51－3
21	無頸壺 A	口径15.6 残高 4.0	○ 0.5～3.0 良好 赤褐色	体部は直線的にすぼまり，口縁部は若干肥厚して内面に突出する。上端に面をもち，外面に1条の凹線文を施す。	全体的に表面が磨滅しており調整は不明。	19	
22	鉢 A	口径17.3 残高 7.1	◎　～0.5 良好 黒灰色	体部は内湾気味に斜上方に立ち上がり，口縁部の屈曲はない。端部はあまい面取り。口縁外面直下に4条の凹線文を施す。	外面調整は凹線施文の後に行われ，縦位へラミガキを単位毎に丁寧に行う。内面は表面が磨滅しており調整は不明。	16 内面は灰白色	
23	鉢 A	口径12.1 残高 4.1	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰黄色	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁はゆるやかに屈曲して内傾する。端部はやや肥厚し丸く仕上げる。口縁下外面に4条の凹線文を施す。	外面調整は凹線施文の後に行われ，縦位へラミガキを行う。内面は部分的に横位へラミガキが残るが，口縁部を中心にナデ調整。	18	
24	鉢 A	口径14.2 残高 5.5	○　～0.5 良好 淡灰黄橙色	体部下半は直線的に外傾し，わずかに屈曲して口縁部は斜上方へ立ち上がる。端部は肥厚せず丸く仕上げ，外面に凹線文を2条巡らす。	内外面とも表面が磨滅し，調整不明。	21	
25	鉢 A	口径14.6 残高 4.6	◎　～0.5 良好 淡灰黄色	体部は椀状に内湾しながら立ち上がる。口縁部は屈曲せず，端部に面取りを行って内面に突出させる。外面口縁下に退化した凹線文1条。	内外面とも丁寧な横ナデ調整。口縁部内外面に赤色顔料が若干残る。	15	
26	鉢 B	口径14.4 残高 3.4	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	体部は直線的に開き，口縁端部は若干内傾して内方に突出させる。外面に凹線文2条。	外面調整はナデ。内面は斜位のへラミガキ。口縁部は丁寧な横ナデ調整。	2	
27	鉢 B	口径16.5 残高 3.6	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	体部は内湾気味に外傾する。口縁部は屈曲せず，若干肥厚して上方にやや内傾する面をもち，内面に突出させる。外面に凹線文2条。	外面調整は文様施文の後，その下を横位へラミガキ。内面は不定方向のへラミガキ。口縁部は丁寧なナデ調整。	1	
28	鉢 B	口径15.4 残高 4.4	○ 0.5～1.0 やや軟 淡灰黒色	体部はやや内湾気味に大きく開き，口縁部はゆるやかに屈曲して直口する。端部は肥厚し上方に幅広く面をもつ。屈曲部外面に2条の凹線文。	内外面とも表面は磨滅しており，調整は不明。	14	
29	高杯 A	口径21.6 残高 3.0	○ 0.5～2.0 良好 灰白色	口縁部は体部から屈曲して，やや外傾気味に立ち上がる。端部は肥厚し，上方に幅広い面をもつ。屈曲部外面に2条のあまい凹線文。	外面調整は横方向の細かいへラミガキ。内面は丁寧に横ナデするが，一部へラミガキが残る。	13	
30	高杯 A	口径25.8 残高 5.2	◎ 0.5～1.0 良好	大きく開く体部から屈曲して外傾気味に立ち上がる口縁	口縁端部の肥厚は内側に粘土紐を貼付ける。屈曲部以下は	9	

			淡灰褐色	部。端部は肥厚し，上方に外向きの面をもつ。屈曲部より上に凹線文２条。内面に若干赤色顔色の塗布が認められる。	内外面とも斜方向のヘラミガキ。口縁部は内外面とも丁寧な横ナデ。		
31	高　杯 A	口径15.3 残高 4.1	◎　～0.5 良好 淡灰黄白色	やや内湾気味に立ち上がる口縁部。端部は内側に肥厚し，上面はやや内向き。外面口縁直下に凹線文を１条施す。	外面調整は横ハケ。内面は斜位のハケメの後，横ハケ調整で，前者の痕跡が口縁直下に残る。口縁部は主に横ナデ調整。	27	
32	高　杯 A	口径25.6 残高 2.5	◎ 0.5～1.5 良好 淡灰黄白色	屈曲し，やや外傾して立ち上がる口縁部。大きく肥厚し，端部上面は平坦，水平。口径に比べて口縁部高が短い。屈曲部直上にあまい凹線文１条。	外面調整は口縁上端とともに丁寧な横ナデ。内面は横位の細かいヘラミガキ調整。	20	
33	高　杯 A	口径24.0 残高 4.0	○ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	内湾気味に大きく開く胴部から，ゆるやかに屈曲して若干内傾する口縁部。端部は大きく肥厚し，上面はやや内向き。屈曲部外面にあまい凹線文２条。	内外面とも表面が磨滅し，調整は不明。	12	
34	高　杯 A	口径24.0 残高 5.5	○ 0.5～1.0 良好 淡灰黄白色	大きく開く体部から，屈曲して内傾気味に立ち上がる口縁部。端部は肥厚し，上面はやや内向き。屈曲部に２条の凹線文。うち上の１条は粘土紐の接合痕を消す目的も兼ねている。	外面は表面が磨滅しており，調整不明。内面は口縁部が横位，体部が縦位のヘラミガキで，先後関係は不明。	11	
35	高　杯 A	口径25.2 残高 6.6	○ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	直線的に大きく外傾して開く体部から，屈曲して内傾する口縁部。端部は肥厚し，上方にあまい面をもつが，内面への突出は丸く仕上げる。屈曲部外面に２条の凹線文。	調整は表面の磨滅のため観察が困難であるが，部分的に縦位のヘラミガキが残る。口縁部は横ナデ調整。	10	
36	高　杯 A	口径20.8 残高 5.5	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	やや深めの体部から屈曲して直立する口縁部。端部は肥厚し，上面は若干内向き。屈曲部より上に２条の凹線文。	体部外面は斜位のヘラミガキ調整。内面は細かい縦位ヘラミガキで，口縁内面の強い横ナデによって消される。	5	52 - 13
37	高　杯 A	口径24.0 残高 4.2	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰黄白色	口縁部はゆるやかに屈曲して直立する。端部は粘土を貼付けて肥厚させ，外側突出部を若干垂下さす。上面は平坦，水平。口縁部外面に４条のあまい凹線文。	外面調整は丁寧なナデ。内面はヘラミガキ（横位）が残る。端部肥厚の際の粘土接合痕が内面に観察できる。	8 外面に黒斑	
38	高　杯 A	口径21.2 残高 5.5	○ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	大きく開く体部から口縁部はゆるやかに屈曲して内湾気味に立ち上がる。端部は内面にやや肥厚し，外面は小さな突出部を作出し，わずかに垂下さす。口縁部外面に４条のあまい凹線文。	体部外面は一旦ケズリを行った後，ヘラミガキ（斜位）。内面は斜方向のハケ調整の後，丁寧にナデ消す。口縁部はナデ。	4	52 - 12

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
39	高杯 A	口径19.6 残高 4.9	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰黄白色	やや深めと推定される体部から，緩やかに屈曲して内湾気味に立ち上がる口縁部。端部は肥厚し，上面は平坦，水平。外面突出はやや垂下。口縁部外面に退化したものも含め5条の凹線文。	体部外面は斜方向のヘラミガキ。口縁部は内外面とも丁寧な横ナデ調整。体部内面は縦ハケの後ヘラミガキ（横位）を行う。口縁内面に端部肥厚の際の接合痕が残る。	3	52 - 14
40	高杯 A	残高 4.4	◎ 0.5～2.0 良好 淡赤橙色	薄手でやや深めの体部と推定。口縁部は緩やかに屈曲して，内湾気味に立ち上がる。外面に4＋α条の凹線文。	体部外面は斜位のヘラミガキ。内面は磨滅のため不明。	17 外面にススが付着	
41	高杯 A	口径23.4 残高 4.0	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰白色	皿状に大きく開く体部。口縁部はわずかに屈曲するのみ。端部は大きく肥厚し，上方に幅広い面をもつ。口縁部外面に細い凹線文3条。	体部外面は縦位ヘラミガキの後，上半部横位ヘラミガキ。内面は主に横位ヘラミガキであるが，口縁部とともに横ナデ調整によって消される。	6	52 - 10
42	高杯 A	口径24.0 残高 3.9	◎　～0.5 良好 暗茶褐色	体部は皿状に大きく開く。口縁部はわずかに屈曲して斜方向に立ち上がる。端部は大きく肥厚し，上面は平坦，水平。口縁部外面に3条の凹線文を施す。	外面調整は斜～横位の細かいヘラミガキを，内面は横位のヘラミガキを精緻に行う。口縁部は内外面とも横ナデ。	7	52 - 11
43	高杯 B	口径21.0 残高 1.8	◎　～0.5 良好 淡灰黄白色	水平に張り出す口縁部。端部は下へ折りまげ，外面に櫛描波状文(単位7条)を1段施す。	全体的に丁寧なナデを施す。	53	
44	高杯 B	口径20.1 残高 2.2	◎ 0.5～1.0 良好 淡赤褐色	水平に大きく張り出す口縁部。内面突帯は内傾し，丸く仕上げる。口縁端部を折り曲げて垂下させ，外面の上下端に凹線文を1条づつ配す。	全体的に表面が磨滅しており，調整は不明である。	23 外面に黒斑	
45	高杯 B	口径25.0 残高 5.3	○ 0.5～2.5 良好 淡灰黄白色	やや上向きに大きく張り出す口縁部。内面突帯は内傾して上面を軽く面取り。口縁端部は肥厚した後，折り曲げ垂下させる。杯部はやや深め。	杯部と口縁部の境は一部擬口縁化している。杯部外面は縦位，内面は横位のヘラミガキ。口縁部は内外面ともナデ調整。	22	
46	高杯	残高 3.5	○　～0.5 良好 淡灰褐色	やや外反気味に立ち上がる脚柱部から，杯部は大きくくびれて若干内湾気味に開く。脚柱部外面に4＋α条の凹線文をもつ。	杯底部成形は円盤充塡法。調整は磨滅のため不明。	24	
47	高杯	残高 3.8	○ 0.5～1.0 良好 淡赤灰褐色	直立する脚柱部から，杯部は緩やかにくびれて大きく開く。杯底部円盤は欠落。脚柱部外面に櫛描直線文(単位4条)を施す。	脚柱部は器壁が厚く，内面にシボリメを残す。杯部外面は縦方向の粗いヘラミガキ。内面は丁寧にナデ調整。円盤充塡法。	112	
48	高杯	残高 5.6	○ 0.5～1.5 良好 灰白色	中空，太めの脚柱部から，杯部はゆるやかにくびれ，直線的に開く。杯底部は中央部が押圧のためやや凹み，比較的薄手。	円盤充塡法。外面調整はヘラケズリの後，縦位ヘラミガキ。杯部内面は横位ヘラミガキ。	25	

49	高　杯 脚　台 B	底径 7.4 残高 2.8	○ 0.5～1.0 良好 淡灰黄白色	裾端部は肥厚し上下にわずかに拡張。端面はやや凹む。裾部は直線的にすぼまり，屈曲して立ち上がる脚柱部に接続。	外面調整は丁寧なナデ。内面は右→左のヘラケズリ。	37	
50	高　杯 脚　台 B	底径13.0 残高 2.5	○　～0.5 良好 灰白色	裾端部は上下に肥厚し，内外面とも端部直上に凹線風の凹みを巡らす。裾部は直線的にすぼまる。	外面調整は縦位ヘラミガキ。内面は左→右のヘラケズリ。	33	
51	高　杯 脚　台 B	底径14.3 残高 2.8	◎　～0.5 良好 灰黄白色	裾端部は上下に若干拡張し，端部直上外面に凹線，内面に沈線を施す。裾部は直線的に短くすぼまった後，屈曲して立ち上がる脚柱部へ接続すると推定。	外面調整は縦位ヘラミガキ。内面は右→左のヘラケズリ。端部は内外面とも横ナデ。	39 外面に黒斑	
52	高　杯 脚　台 B	底径14.8 残高 2.8	○　～0.5 やや軟 灰黄白色	裾端部は上下方形に拡張し，端面は強いナデにより凹む。内外面に凹線文を1条づつ配し，やや外反気味にすぼむ。	外面調整は縦位ヘラミガキ。内面は指頭圧痕が残り，横ナデ調整を行う。	38	
53	高　杯 脚　台 B	底径12.2 残高 4.5	◎ 0.5～1.5 良好 灰茶褐色	裾端部は肥厚し，上方に拡張する。端面には2条の細い凹線文を施す。外面拡張部直上に強いナデによる凹みが巡り，裾部はやや外反気味にすぼむ。	外面は縦位のヘラミガキを丁寧に行う。内面は横位の強いヘラケズリ。端部周辺は横ナデ調整で，内面に指頭圧痕が残る。	32	
54	高　杯 脚　台 B	底径14.0 残高 3.8	○ 0.5～1.0 良好 灰黄白色	裾端部は肥厚し，上方へ方形に，下方へ鋭く拡張する。外端直上に強いナデによる凹みが巡る。裾部はやや外反気味にすぼむ。	外面調整は縦位ヘラミガキ。端部及び内面はナデ調整であるが，断面に外積接合手法が観察でき，内面に接合痕がのこる。	34	
55	高　杯 脚　台 B	底径15.4 残高 4.1	○ 0.5～2.0 良好 灰黄白色	裾端部は肥厚し，上下にあまく拡張する。外面下端に凹線文を1条施す。内面には強いナデによる凹みが巡る。裾部は直線的にすぼみ，緩やかに立ち上がるものと推定。	外面は縦位のヘラミガキ。内面は左→右のヘラケズリを行う。端部は丁寧な横ナデ。	35	
56	高　杯 脚　台 B	底径16.8 残高 2.8	◎ 0.5～1.5 良好 淡灰褐色	裾端部は肥厚し，特に上方へは大きく方形に拡張する。外面拡張部直上は強いナデによる凹みが巡る。	外面及び端部調整は横ナデ。内面は右→左のヘラケズリで，最下端にミガキ状のナデが1条巡る。	36	
57	脚　台 A	底径 8.2 残高 3.2	◎　～0.5 良好 灰橙白色	裾端部は丸く仕上げる。外面に凹線文を1条施して内湾気味にすぼみ，くびれて立ち上がる。	外面調整は縦位のヘラミガキ。内面及び端部はナデ調整。	41	
58	脚　台 A	底径11.3 残高 4.8	○ 0.5～1.5 良好 淡灰褐色	裾端部は若干肥厚して丸く仕上げる。裾部は内湾気味に立ち上がり，外面に凹線文を2条施す。	外面調整は縦位ヘラミガキ。内面は上半が右→左の，下半がその逆方向のヘラケズリ。文様施文部と端部は横ナデ調整。	40	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
59	水差	頸径 4.3 腹径11.3 底径 4.7 残高12.7	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰黄白色	安定した底部からやや内湾気味に立ち上がる。最大径は下位にあり，腰が張るプロポーション。頸部はゆるやかにくびれて直立する。把手は比較的立ち上がり，肩部に取り付ける。断面は扁平な方形。肩部以下に櫛描直線文（単位6条）3段と，最下段に波状文（同原体）を1段配す。施文後，その上に2単位4方向の暗文を施す。	底面は一定方向の，胴下半部は下→上のヘラケズリ。胴上半部はハケメが一部残存。内面は主にナデ調整だが，底部～腹部に細い原体の縦ハケが間隔をおいて施され，胴上半～頸部にかけてシボリメが残り，横ハケが散見できる。胴部上半の中程に接合痕が残る。	72 外面に黒斑	52- 7
60	複合土器	口径24.0 （器台部） 残高 5.0	◎ 0.5～1.5 良好 淡灰黄白色	水平に開く器台部の口縁から緩やかに屈曲して内湾しながら立ち上がる胴部。器台部口縁は垂下し，外面に3条の凹線文を施す。その上に径1.0cmの円形浮文を約1.4cm間隔で付加する。下端部は若干面取りを行う。	器台と上部土器の間には製作時のブレスは認められない。上部外面は横位の丁寧なヘラミガキ。内面ハナデ調整。器台部外面は横位のヘラミガキを行う。口縁垂下部内面は横方向にヘラケズリ。	106 溝4から接合破片出土 12(無頸壺)は同一個体である可能性が高い	
61	器台 A	底径18.1 残高 7.5	○ 0.5～1.0 やや軟 赤褐色	裾端部は若干肥厚し，内側に丸く突出する。やや外反気味にすぼまり，緩やかに立ち上がるものと推定。裾部外面に5条の凹線文を施す。	内外面ともひどく磨滅しており調整は不明。	26	
62	器台 A	底径21.5 残高 9.3	○ 0.5～1.0 良好 淡橙色	裾部は大きく肥厚し，下端部は幅広い面をもつ。直線的にすぼまり，緩やかにくびれるものと推定。裾部外面に4条の凹線文を施す。	外面調整は横方向のヘラミガキ。内面は斜方向の粗いハケ調整。端部は横ナデ。	30 溝4から接合破片出土	
63	（底部）	底径 5.7 残高 1.9	◎ 0.5～2.0 良好 赤褐色	安定した平底。内面にやや凹凸がある底面から，大きくやや内湾気味に広がる。胴が張る形の体部に接続するものと推定。	表面が磨滅のため剥離し，調整は観察不能。	86	
64	（底部）	底径 5.8 残高 2.0	○ 0.5～1.0 良好 淡灰橙色	やや薄手の安定した平底。中形の甕の底部か。体部へは強く立ち上がる。	外面及び底面の調整は表面が磨滅し，不明。内面は，緩位ハケメが残る。	77	
65	（底部）	底径 5.8 残高 2.7	△ 0.5～1.5 やや軟 暗茶褐色	底面中央部が非常に薄いが安定した平底。体部へは斜上方へ直線的に広がる。	内外面とも磨滅が顕著で調整は観察不能。	97	
66	（底部）	底径 5.6 残高 3.8	○ 0.5～1.0 やや軟 灰白色	側縁が肥厚し，底面が非常に薄い底部。体部へはやや外反気味に立ち上がる。	内外面ともナデ調整。特に内面に指頭圧痕がのこる。	110 外面に黒斑	
67	（底部）	底径 4.6 残高 3.3	○ 0.5～2.0 良好 灰色	若干上げ底気味だが安定した底部。体部へは明確に稜をもってやや内湾気味に斜上方へ立ち上がる。	内外面とも磨滅が著しいが，底部側縁，内面にそれぞれ指頭圧痕がのこる。	108 外面に黒斑	
68	（底部）	底径11.8 残高 3.6	◎ 0.5～2.0 良好	大形の底部。底面中央部分が非常に薄い。体部への立ち上	磨滅が著しく，調整は観察不能。内面の剥落は粘土紐の接	87	

			暗褐色	がりは，内面が剥落しているが，直線的に大きく広く。	合部であった可能性が高い。		
69	(底部)	底径 5.1 残高 5.7	○ 1.0～5.0 やや軟 灰褐色	底が厚手で安定した平底。体部へは直線的に斜上方へ立ち上がる。	磨滅のため詳細な調整観察は不能であるが，底面部にハケメが残る。	89	
70	(底部)	底径 7.3 残高 3.5	◎ 0.5～3.0 良好 灰黄褐色	底は厚手でやや内湾気味に立ち上がり，体部に接続する。	外面は縦位ヘラケズリの後，同方向のヘラミガキ。内面は指頭圧痕がのこる。	91 外面に黒斑	
71	(底部)	底径 4.5 残高 4.2	◎ 0.5～1.0 良好 暗褐色	底面中央は欠損。体部へは直線的に斜上方に立ち上がる。	外面調整は下→上の板ナデ。内面は不定方向のハケメが残る。	90	
72	(底部)	底径 6.4 残高 2.0	◎ ～0.5 良好 淡黄橙色	安定した平底。直線的に開く。	外面は下→上の板ナデ調整。内面はナデ。一部指頭圧痕が残る。	80	
73	(底部)	底径 5.6 残高 2.3	◎ ～0.5 良好 淡灰褐色	底面は中央がやや突出する。側縁以外は器壁が大変薄い。	外面は下→上のヘラケズリ。内面は板ナデを主に行い，ヘラによる縦沈線が残る。断面に粘土の接合痕が観察できる。	81 内面は灰白色	
74	(底部)	底径 6.0 残高 2.8	○ 0.5～1.5 良好 暗灰橙色	平底。底面中央部は器壁が薄い。やや外反気味に開いて，体部へ接続する。	側縁に成形時の指頭圧痕が残り，下→上にヘラケズリを行う。内面は一部指頭圧痕が残り，縦位の粗いハケメ。底面にもハケメが残る。	74	
75	(底部)	底径 5.2 残高 2.5	◎ ～1.0 良好 灰黒色	極めて薄い平底。体部へはやや外反気味に開いて接続。	側縁に指頭圧痕がのこり，下→上のヘラケズリを行う。内面は縦位板ナデ。断面及び内面に粘土紐の接合痕が残る。	79 内面は灰黄白色	
76	(底部)	底径 3.1 残高 3.9	○ ～0.5 良好 暗茶褐色	底径が小さい，薄手の平底。一旦外反して開いたのち，やや内湾気味に斜上方へ立ち上がる。	側縁に指頭圧痕が巡り，外面は下→上へのヘラケズリ。内面は縦位の粗いハケメが残る。	95	
77	(底部)	底径 4.7 残高 4.6	◎ ～0.5 良好 暗灰黒色	極めて薄い平底。側縁は若干肥厚し，やや外反気味に短く開いた後，緩やかに内湾しながら斜上方に立ち上がる。	側縁に指頭圧痕が残り，外面は下→上へのヘラケズリ。内面は横位のハケメが残る。	78	
78	(底部)	底径 5.2 残高 6.5	◎ ～0.5 良好 茶褐色	やや上げ底状の薄手の底部。直線的に斜上方へ立ち上がり，体部へ接続。	側縁に指頭圧痕が残り，外面は下→上へのヘラケズリ。内面下方は横位小刻みのハケメ，上方は不定方向のハケメが残る。	96	
79	(底部)	底径 5.0 残高 5.5	△ 0.5～3.0 良好 暗灰褐色	平底。体部へは直線的に開き，斜上方へ立ち上がる。	外面調整は上→下へのヘラケズリ。内面は指頭圧痕が残り斜方向ヘラケズリを行う。	105	
80	(底部)	底径 7.6 残高 6.5	◎ 0.5～4.0 良好 赤褐色	厚手の安定した平底。体部へはやや内湾気味に斜上方へ立ち上がる。	外面は縦位ハケ調整の後，下方を下→上へのヘラケズリ。内面は板ナデ。	82	
81	(底部)	底径 5.2 残高 3.0	○ 0.5～1.0 やや軟 明橙白色	上げ底で，側縁が斜下方へ張り出すタイプの底部。強くくびれて体部へはやや内湾しながら接続する。	側縁外面は指頭圧痕が観察できる他は，磨滅のため不明。	76	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
82	(底部)	底径 6.1 残高 4.0	◎ 0.5～3.0 良好 灰黒色	台付土器の底部と推定。厚手で上げ底状。側縁部は斜下方に大きく張り出す。大きくくびれて，内湾気味に広がり，体部へ接続する。	外面に板ナデ（縦位）。他の部位は横ナデ。	111	
83	甕 A	口径13.8 残高 2.6	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰褐色	口縁部は「く」の字にくびれて外反し，端部を上方に若干丸く拡張する。端面は強いナデにより，凹線状の凹みが巡る。	内外面とも丁寧な横ナデ調整。	64 外面に黒斑	
84	甕 A	口径15.4 残高 3.0	◎ 0.5～1.0 良好 灰白色	「く」の字に強くくびれて外反する口縁部。端部は下方に若干拡張し，端面に浅い凹みがめぐる。	内外面とも丁寧な横ナデ。	63	
85	甕 C	口径15.0 残高 3.3	◎　～0.5 良好 淡橙色	「く」の字に強くくびれた後短く外反し，屈曲して直口する二重口縁。外面に3条の凹線文を巡らす。端部はあまい面取り。	内外面とも丁寧な横ナデ。	66	
86	壺	腹径16.4 底径 4.0 残高18.9	◎ 0.5～1.0 良好 灰褐色	所謂「ドーナツ底」。体部は張りが強く，最大径は中程にある。	外面は右上りの平行ラセンタタキ。内面は底面にくも巣状の原体圧痕が残り，下→上の板ナデを行う。	69 外面にススの付着	54・5
87	甕 A	口径23.0 残高 2.8	◎ 0.5～2.0 やや軟 淡橙色	胴張りの少ない体部。口縁部は「く」の字に鋭く屈曲し，端部は若干肥厚して，上下に小さく拡張する。	表面が磨滅しており，調整は観察不能。	87	
88	鉢	口径25.6 残高 4.2	○ 0.5～2.5 やや軟 淡黄橙色	浅く内湾気味に緩やかに立ち上がる体部から，口縁部は外側に鋭く内側に稜をもって屈曲し，内湾気味に斜上方に立ち上がる。端部はやや尖る。	内外面とも表面が磨滅しており，調整は不明。	28	
89	鉢	口径28.6 残高 6.6	◎　～0.5 やや軟 灰黄白色	斜上方へ直線的に立ち上がる体部。口縁部は屈曲せず，端部を内外面に拡張させる。	外面は表面磨滅のため不明。内面は斜位ヘラミガキ。	29	
90	高杯 (脚台)	残高 6.2	◎ 0.5～3.0 良好 赤褐色	脚部は柱状部をもち下に外反して開く裾部が接続する。	杯底部は円盤充塡法による。脚柱部外面は縦位ヘラミガキ。内面はシボリメが残る。	45	
91	高杯 (脚台)	残高 4.5	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	太い脚柱部から外反して開く裾部が接続。	杯底部は円盤充塡法による。脚柱部外面は縦位ヘラミガキ。内面は横ハケ。	46	
92	高杯 (脚台)	残高 6.4	◎　～0.5 良好 淡灰褐色	杯底部でくびれた後，緩やかに下方に開く。	脚柱部を杯底部に差し込んで作るタイプ。外面は縦位ヘラミガキ。内面は裾部に縦ハケで，上方にシボリメが残る。	48	
93	高杯 (脚台)	残高 6.7	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰褐色	脚柱部は緩やかに下方に開き，裾部はさらに屈曲して大きく広がる。	脚柱部を杯底部に差し込むタイプで，杯底部が欠損し，脚柱上部に疑口縁を形成する。外面ヘラミガキ(縦位)。内面にはシボリメが残り，板間	47	

					時調整(横位)を行う。	
94	高　杯 (脚台)	底径10.3 残高 2.8	◎ 0.5～2.0 やや軟 淡灰褐色	円錐状に外反しながら開く脚部。端部は斜上方に折り曲げて丸く仕上げる。	外面調整は若干のヘラミガキが見えるが，内面も含めて，ナデ調整が主体を占める。	42
95	高　杯 (脚台)	底径14.4 残高 2.4	◎　～0.5 良好 灰褐色	大きく直線的に広がる裾部。端部はやや肥厚し，丸く仕上げる。	外面にヘラミガキ調整を行う他，ナデ調整。	44
96	高　杯 (脚台)	底径14.1 残高 2.3	○ 0.5～1.0 良好 灰白色	大きく外反しながら広がる裾部。端部はやや屈曲して外反度を強め，丸く仕上げる。	外面はヘラミガキ。内面は左→右へのヘラケズリ。	43
97	高　杯 (脚台)	底径17.7 残高 5.4	◎　～0.5 良好 淡灰褐色	緩やかに広がる脚柱部から屈曲して大きく外へ広がる裾部。端部は面取りを行う。	外面はヘラミガキ(縦位)。内面は横ハケ。	31
98	甕 (底部)	底径 4.8 残高 3.9	○ 0.5～3.0 やや軟 灰白色	厚手の平底。やや外反気味に体部へ接続する。	外面は横位平行タタキ。内面はナデ。	83
99	甕 (底部)	底径 3.8 残高 3.8	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰褐色	上げ底状。側縁部は肥厚し，若干内湾気味に斜上方へ立ち上がる。	外面は斜方向の平行タタキ。内面は縦位板ナデ。一部指頭圧痕が残る。	94 内面に炭化物付着
100	甕 (底部)	底径 4.7 残高 2.7	◎　～0.5 良好 灰白色	安定した平底。体部へは，やや内湾気味に，接続する。底面に木葉・籾圧痕が残る。	外面に斜方向の平行タタキが残るが，上半は磨滅する。内面はナデ。	107 外面に黒斑
101	甕 (底部)	底径 4.8 残高 3.9	◎ 0.5～2.0 良好 灰白色	厚手の安定した平底。体部へは，やや外反気味に接続する。	外面は磨滅が顕著であるが，横方向の平行タタキが残る。内面は一部に指頭圧痕。	109
102	(底部)	底径 4.5 残高 2.3	○ 0.5～4.0 良好 淡灰褐色	やや上げ底状。側縁部から，外反して大きく開き，体部へ接続する。	外面に一部タタキが残る以外は磨滅のため調整の観察不能。	85
103	(底部)	底径 4.0 残高 3.0	◎ 0.5～1.0 良好 灰白色	厚手の平底。体部へはやや外反して，立ち上がる。	側縁に指頭圧痕が残る。内面は不定方向のハケメ。	93
104	(底部)	底径 4.2 残高 4.1	○ 0.5～1.0 やや軟 暗灰褐色	厚手の平底。体部へは，斜上方に直線的に開いて接続する。	内面にくも巣状ハケメが見られる他は，磨滅のため不明。	75
105	(底部)	底径 4.2 残高 2.5	○ 0.5～2.0 良好 灰赤褐色	「ドーナツ底」。体部へは，外反しながら大きく開いて接続する。	全体的に磨滅のため不明。	92
106	(底部)	底径 4.0 残高 2.4	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	上げ底状。側縁は斜下方へ若干張り出し，端面にあまい面取り。体部へは内湾気味に立ち上がる。	磨滅が顕著で，調整不明。	88
107	甕 (底部)	底径 3.3 残高 4.5	○ 0.5～5.0 やや軟 淡橙色	尖り気味の底部。焼成前に径12mmの穿孔を上→下へ行う。体部へは外反気味に立ち上がる。	外面に右上りの平行タタキ。内面はナデ調整。	84

溝4出土土器　(第68・69図)

1	広口壺 A 1	口径13.6 残高 2.2	◎　～0.5 良好 淡茶灰色	口縁部は大きく外反して開く。端部は上下に拡張し，端面に原体6条の櫛描波状文。内面は櫛描列点文。	内外面とも横ナデ調整。	15

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
2	広口壺 D	口径14.0 頸径10.6 残高 3.5	◎　～0.5 良好 暗茶灰色	頸部で緩やかにくびれ，強く外反する口縁部。端部を上下に拡張し，端面に2条の凹線文を施す。	頸部外面は縦ハケ。口縁端部～内面は横ナデ調整。	2	
3	広口壺 A1	口径13.6 残高 1.8	◎ 0.5～3.0 良好 茶灰色	端部で強く外反し，断面三角形状に拡張する口縁部。端面に3条の凹線文を施す。	内外面とも横ナデ調整。	11	
4	広口壺 A1	口径15.4 残高 1.4	◎ 3.0～4.0 良好 灰黄白色	口縁部は大きく外反して開く。端部は上方に拡張し，端面に3条の凹線文を施す。	内外面とも横ナデ調整。	5	
5	広口壺 A1	口径18.2 残高 1.3	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰白色	大きく外反して開いた口縁部。端部は上下に小さく拡張する。	外面は磨滅のため不明。内面は横ナデ調整。	14	
6	広口壺 A1	口径15.2 残高 2.4	◎ 1.0～3.0 良好 淡茶灰色	ゆるやかに外反して開く口縁部。端部は上下に拡張し端面に上下をナデ回めることによって作り出す突帯が巡る。	内外面とも横ナデ調整。	1	
7	広口壺 A1	口径16.8 残高 1.9	◎ 0.5～2.0 良好 灰黄白色	口縁部は外反して大きく開く。端部は上下に丸く拡張し，端面に櫛描波状文を施すが磨滅のため不明瞭。内面に櫛原体による列点文を施す。	内外面とも横ナデ調整。	9	
8	広口壺 A1	口径12.8 頸径 8.2 残高 4.0	◎ 0.5～2.0 良好 淡橙色	筒状の頸部から，口縁部は大きく外反して水平に開く。端部は肥厚して上下に拡張し，端面に上下2条の凹線文を施す。	頸部は粗い縦ハケ。口縁部及び頸部内面はナデ調整。	4	
9	広口壺 A3	口径24.5 残高 3.2	○ 0.5～2.0 やや軟 暗灰茶褐色	口縁部は大きく開き端部は下方へ大きく垂下する。外面に3条の凹線文を施し，内面に単位13＋α条の櫛描簾状文。焼成前，外→内へ2孔を穿つ。	内外面ともナデ調整。	16	
10	広口壺 A3	口径19.4 残高 3.2	○ 0.5～1.0 良好 灰黄白色	口縁端部は大きく垂下し，外面に5条の凹線文と8条の縦位沈線を一部施す。内面は6条単位の櫛描列点文。	内外面ともナデ調整。	7 外面に黒斑	
11	広口壺 A1	口径26.8 残高 3.2	◎ 0.5～2.0 良好 灰白色	頸部からラッパ状に大きく開いた後，口縁部はさらに外反して広がる。端部は肥厚し，下方に拡張。端面に3条の凹線文と部分的な縦位沈線。内面は16条原体の櫛描簾状文。	外面縦ハケ。屈曲部はハケ原体を利用した横ナデ。内面はナデ。断面観察により，内傾接合手法がみられる。	12 内面に黒斑	
12	壺	残高 5.7	◎　～0.5 良好 明白黄褐色	内傾して立ち上がる胴上半部。外面に櫛描直線文4段と，その間に波状文1段(単位5条)を施す。	内面調整はナデ。部分的に指頭圧痕が残る。	18	
13	壺	頸径14.8 残高 4.4	◎ 0.5～1.0 良好 灰黄白色	頸部に幅1.4cmの指頭圧痕文突帯を付す。緩やかに外反して立ち上がる。	外面は磨滅。内面は板ナデ調整(横位)。	29	
14	広口壺	口径11.2	◎　～0.5	頸部から緩やかに外反しなが	内外面とも調整は横ナデ。	71	

	D	残高 2.2	良好 灰橙白色	ら立ち上がり，口縁部でさらに大きく開く。端部は上下に拡張し，端面は凹線状の強いナデによる凹み。			
15	広口壺 D	腹径17.2 残高13.8	◎ 0.5～1.0 良好 茶褐色	下半に胴部の大きな張りがある。緩やかに内湾気味に立ち上がり，頸部は屈曲して直立。	外面下半はヘラケズリ。上半は斜ハケ。内面はナデ。頸部にシボリメが残る。	17 外面にスス付着	
16	広口壺 D	口径17.9 頸径14.0 残高 4.3	◎ 0.5～1.0 良好 淡茶褐色	頸部は「く」の字にくびれ，大きく外反して開く口縁部。端部は上下に拡張し，端面に凹線状の凹みを巡らす。下端に刻目をもつ。	外面縦ハケが痕跡程度に残る。内面はナデ。	4 内面に黒斑	
17	広口壺	口径16.2 頸径12.9 残高 5.2	◎　～0.5 良好 灰茶褐色	内傾して立ち上がる胴部から頸部は「く」の字に屈曲して外反。口縁部はさらに大きく開く。端部は肥厚し斜上方にややつまみ上げる。端面に凹線状の凹み。	胴部外面は縦ハケの後横ナデ。内面は磨滅。口径部は横ナデ調整。	8 外面にスス付着	
18	無頸壺 B	口径12.8 残高 3.6	○ 0.5～1.0 良好 黒灰色	直線的に内傾し，口縁部は直口のまま，粘土を貼付け，方形に肥厚。外面口縁下に1条の凹線文。	外面は磨滅のため不明。内面ナデ調整。粘土紐接合痕が残り指頭圧痕が残る。	72 残存は黒斑部。内面は灰白色	
19	甕 A	口径14.2 残高 3.3	○ 0.5～2.0 良好 淡灰黄褐色	口縁部は「く」の字に屈曲して外反。端部は上下に拡張し，端面に凹線文を1条。	外面に縦ハケ。内面はナデ調整。	27	
20	甕 A	口径 9.3 残高 3.1	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	内湾気味に緩やかに立ち上がる胴部から口縁部は「く」の字に屈曲して短く外反。端部は上方に小さくつまみ上げ，端面に凹線状の凹みが巡る。	外面は横ナデ調整。内面は板ナデ（縦位）とハケメが残る。口縁部は横ナデ調整。	28	
21	甕 A	口径14.4 残高 3.4	◎ 0.5～2.0 良好 灰黄白色	口縁部は「く」の字に屈曲して外反し，端部は肥厚し上方につまみ上げる。端面には1条の凹線文。	屈曲部外面は横ナデ。他部位は磨滅のため不明。	6 外面に黒斑	
22	甕 A	口径18.9 残高 2.9	◎ 0.5～1.0 良好 淡茶灰色	口縁部はゆるやかに屈曲して外反し，端部は下方に若干拡張。	内外面とも横ナデ調整。	21	
23	甕 A	口径16.4 残高 2.8	○ 0.5～1.0 良好 灰白色	口縁部は内面に稜をもって短く「く」の字に外反。端部は上下に拡張し，端面に強いナデによる凹み。	外面及び口縁部は横ナデ調整。内面は横ハケ。	69	
24	（底部）	底径 5.2 残高11.6	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰橙色	底部焼成前に下→上へ径4.0mmの穿孔。体部は内湾して立ち上がる。	外面下半は下→上のヘラケズリ。腹部は縦ハケ。内面は主に縦ハケ。	54 龍か	
25	（底部）	底径 4.2 残高 3.3	◎ 0.5～3.0 良好 灰白色	やや上げ底状。体部へは大きく開いて接続する。比較的厚手。	外面は不定方向のミガキとハケメが交錯。内面はハケメ。ヘラで押圧した痕が残る。	47 外面に黒斑	
26	（底部）	底径 3.7 残高 3.1	○ 0.5～1.0 良好 暗茶褐色	やや厚手で安定した平底。やや内湾気味に立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。一部ハケメが残る。内面は横ナデ。	62	
27	（底部）	底径 4.6 残高 2.6	◎ 0.5～1.0 良好 灰白褐色	やや厚手の平底。側縁が若干外へ張り出す。やや内湾気味に立ち上がる。	外面は下→のヘラケズリ。内面は原体圧痕が巡る。	63 外面に黒斑	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
28	(底部)	底径 4.6 残高 2.5	◎ 0.5～2.0 良好 灰橙色	底部はやや上げ底。底面に2枚重ねの木葉痕。大きく開いて立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。内面は表面磨滅のため不明。	65 外面に黒斑	
29	(底部)	底径 6.0 残高 3.1	◎ 0.5～1.5 良好 淡灰橙白色	側縁が肥厚する底部。体部へは斜上方へほぼ直線的に立ち上がる。	底面は表面剥離。外面は横ナデ。内面は斜位ハケメが残る。	68	
30	(底部)	底径 7.6 残高 3.1	◎ 0.5～1.5 良好 暗灰茶色	安定した平底。直線的に斜上方へ立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。内面は指頭圧痕が残る。	55	
31	(底部)	底径 8.3 残高 3.5	◎ 0.5～1.0 良好 灰白茶色	安定した平底。体部へはやや内湾気味に立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。内面は下→上の板ナデ調整。	57 外面に黒斑	
32	(底部)	底径11.0 残高 4.3	○ 0.5～1.0 やや軟 白茶色	大形の安定した平底。体部へは斜上方へ直線的に立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。内面はおもにナデ調整で，一部ハケメが残る。	65	
33	鉢 A	口径13.4 残高 3.0	◎ ～0.5 良好 淡黄白色	椀状に内湾しながら立ち上がる。口縁は直口し外面に1条の凹線文。	内面はナデ調整。	41 内面に黒斑	
34	鉢 B	口径11.9 残高 3.9	○ 0.5～2.0 良好 灰色	椀状に内湾しながら立ち上がる。口縁は直口し若干内側へ折り曲げる。	外面は磨滅のため不明。内面は斜ハケの後，縦位ヘラミガキ。	70	
35	高杯 A	口径21.8 残高 3.9	◎ 0.5～1.0 良好 灰白色	斜上方に直口する口縁部。端部は肥厚し，上方に幅広い面をもつ。外面に1条の凹線文。	外面は表面が磨滅し不明。内面は横ナデ調整。	34	
36	鉢 A	口径19.0 残高 3.5	◎ 0.5～1.0 良好 淡黄褐色	やや厚手で，口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。端部は上方に面をもち，外面に1条の凹線文。	内外面とも磨滅で不明。	40	
37	高杯 A	口径22.4 残高 6.2	◎ 0.5～1.0 良好 灰白茶色	体部はやや内湾気味に大きく開き，屈曲して口縁部は直立する。端部は肥厚し，上面は平坦。屈曲部外面に2条の凹線文。	体部下半は縦位の，上半～口縁は横位のヘラミガキ。内面は不定方向ヘラミガキの後，横ナデ。	31	
38	高杯 A	口径24.2 残高 4.2	○ 0.5～1.0 やや軟 灰白茶色	大きく開く体部から緩やかに屈曲して，内湾気味に立ち上がる。端面は内側に傾く。外面に2条の凹線文。	口縁外面は横ナデ。内面はヘラミガキの後横ナデ。	32	
39	高杯 A	口径29.2 残高 3.0	○ 0.5～1.0 やや軟 明茶褐色	内湾気味に大きく開く体部。口縁は直口し，端部が若干肥厚して内側に突出。上面は平坦，水平。	調整は磨滅のため不明。	35	
40	高杯 A	口径26.2 残高 4.6	◎ ～0.5 良好 灰黄白色	体部は皿状に大きく開く。口縁はゆるやかに立ち上がり，端部は肥厚して上面に幅広の面をもつ。	内外面ミガキ調整。	33	
41	高杯 B	口径17.6 残高 2.8	○ 0.5～4.0 良好 淡黄白色	口縁部は水平にのびて，端部が直に垂下。	調整は磨滅のため不明。	38	
42	高杯 B	口径19.6 残高 2.7	◎ 0.5～1.0 良好	口縁部は水平にのびて，端部がやや内側に垂下。外面に2	水平拡張部上面はヘラミガキ。端部外面は横ナデ。内面	39	

			淡灰白色	条の凹線文。	はヘラミガキの後ナデ。		
43	高　杯 脚　台 B	底径21.8 残高 3.5	◎ 0.5～1.0 良好 淡橙褐色	裾部は若干内湾しながら開く。端部は肥厚して，上方に拡張。端面は強いナデにより2条の凹みが巡る。焼成前に内→外へ穿孔を施す。残存部に2個確認。	外面は縦位のヘラミガキ。内面は横ハケの後横ナデ。端部は横ナデ。	44	
44	脚　台 A	底径 8.0 残高 3.3	◎ 0.5～2.0 良好 暗灰色	脚柱部から屈曲してやや内湾気味に開く裾部。端部は丸く仕上げる。外面に1条の凹線文。	外面は下→上のヘラケズリ。内面は下方横ナデで，上方縦方向のナデ。脚柱部内面にシボリメが残る。	45	
45	鉢 A	口径 7.2 底径 3.5 器高 5.1	◎ 0.5～3.0 良好 灰褐色	ミニチュア鉢。平底の底部からゆるやかに内湾気味に立ち上がる。口縁は直口し，端部は丸く仕上げる。外面に1条の凹線文。	外面に縦位ヘラケズリの後，ナデ。内面は不定方向の板ナデの後ナデ。口縁部は内外面とも横ナデ。	30 ミニチュア品	52－1
46	器　台 A	口径15.2 器高12.9	○ 0.5～1.5 良好 灰白色	裾広の脚部からやや内湾気味に立ち上がり，大きくくびれて外反。くびれ部に5～6条の凹線文。残存部において透孔はみられない。	外面は磨滅のため不明。内面は下半が横～斜位のハケメが残る。上半は強い指頭圧痕。	46 同一個体資料を溝5より検出	
47	器　台 A	底径26.2 残高 4.4	◎ 0.5～1.0 やや軟 灰白茶色	内傾度が少ない，立ち上がり気味の裾部。端部は肥厚し，下方に広い面をもつ。外面に凹線文1条。	内面に横位板ナデ。裾端部は横ナデ調整。	43	
48	（底部）	底径 4.6 残高 2.9	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰白色	やや厚手で，上げ底状を呈す。	外面に一部ハケメ。内面に指頭圧痕。	60	
49	甕 （底部）	底径 4.9 残高 2.3	○ 0.5～3.0 やや軟 灰白茶色	安定した平底。底面中央に焼成前の外→内への穿孔。体部へは大きく開いて接続。	外面に横位タタキ。一部ヘラケズリ。内面に「くも巣状」原体圧痕。	59	
50	甕 （底部）	底径 4.4 残高 3.2	◎ 0.5～2.5 良好 淡灰褐色	所謂「ドーナツ」状の底部。体部へは内湾気味に立ち上がる。	外面斜方向の平行タタキ。内面は板ナデ。	49	
51	甕 （底部）	底径 6.4 残高 3.5	◎ 0.5～3.0 良好 灰茶褐色	安定した平底。	外面に横位タタキ。内面「くも巣状」原体圧痕。	61	
52	高　杯 （脚台）	残高 5.2	◎ 0.5～1.0 やや軟 淡白茶褐色	杯底部は剥落。脚柱はやや広がり気味。裾部で大きく開く。	外面縦ハケの後ヘラミガキ。裾部内面に顕著なシボリメ。脚柱部内面は不定方向ハケメ。	46 外面に黒斑	
53	高　杯 （脚台）	残高 6.8	◎ 0.5～2.0 やや軟 淡赤褐色	脚柱部はやや中央が張る。裾部は強く屈曲して開く。	脚柱部を杯底部に差し込んで成形。脚柱部内面はシボリメが残り，下半部板ナデ。	56	
54	高　杯 （脚台）	残高 4.8	◎　～0.5 良好 灰白色	脚部は円錐状に大きく開く。杯底部は欠落。	杯底部との接合は差し込み法。外面は細い縦位ヘラミガキ。内面はナデ調整。穿孔は外→内へ3個施す。	53	
55	甕 C	口径15.2 残高 4.2	◎ 0.5～2.0 良好 淡灰褐色	口縁は内面に稜をもって緩やかに屈曲し外反した後，端部が受け口状にやや外反気味に立ち上がる。上方は面取りし，外面に凹線状の凹み。	体部上端に横位平行タタキ。口縁部及び内面は横ナデ。強い指頭圧痕が残る。	66	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
56	甕 C	口径12.0 残高 1.8	○ 0.5～3.0 やや軟 暗灰黒色	口縁部は「く」の字に屈曲して大きく外反。端部を上方に若干ハネ上げる。	内外面ともナデ調整。	22	
57	高杯 (脚台)	底径11.4 残高 1.1	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰白色	大きく開く裾部。端部は丸く仕上げる。	外面へラミガキの後，ナデ。 内面ナデ。	36 外面に黒斑	
58	高杯 (脚台)	底径11.4 残高 4.2	◎　～0.5 良好 暗赤茶褐色	円錐状に広がる脚部。端部は若干肥厚し下方へ拡張。外面に回線文1条。	外面縦位へラミガキ。内面はナデ調整。	42 内外面とも黒斑	
59	高杯 (脚台)	底径14.8 残高 2.7	◎ 0.5～3.0 良好 淡黄白色	ラッパ状に開く裾部。端部は肥厚し，上方にやや拡張。穿孔は内→外へ，2個確認。	端部は内外面とも横ナデ調整。	37	
60	壺	口径13.2 頸部 8.5 残高 4.8	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰褐色	頸部で内面に稜をもって「く」の字に強く屈曲し，口縁部は外反しながら開く。端部は丸く仕上げる。	外面縦位，内面横位のヘラミガキを行う。口縁端部は横ナデ。	48	
61	杯身	口径11.0 残高 4.2	◎ 0.5～1.0 堅緻 灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり，受部が外反して短く開く。立ち上がりはやや内傾し端部内面は1条沈線。	残存部は回転ナデ。	32	
62	杯蓋	口径12.8 残高 2.9	◎ 0.5～1.0 堅緻 暗灰色	杯底部から1条の回みを介して口縁部まで緩やかに内湾する。端部はやや尖り気味。扁平なプロポーション。	杯底部外面は回転ヘラケズり。口縁部及び内面は回転ナデ。ロクロ回転方向は時計回り。	51	
63	杯身	口径11.4 残高 3.2	◎ 0.5～1.0 堅緻 灰色	底部から強く屈曲して斜上方へ立ち上がる口縁部。端部は尖り気味。	底部は回転糸切り。内外面回転ナデ。	50	
64	壺	口径11.7 頸径 9.4 残高 2.9	◎ 0.5～1.0 良好 橙白色	頸部でゆるやかにくびれ外反する口縁部。端部は外側に折り曲げ，丸く仕上げる。	磨滅のため不明。	67	

落込1出土土器　(第71～74図)

1	広口壺 B	口径20.0 残高 6.3	◎ 0.3～2.0 良好 淡灰褐色	頸部は短くくびれて口縁部は外反しながら開く。端部は上下に拡張し4条の回線文を施す。頸部直下に櫛描波状文（単位3条）を巡らす。	頸部外面調整ナデ。口縁部内外面とも丁寧な横ナデ。	1	
2	広口壺 C	口径16.4 残高 7.6	◎　～0.5 良好 暗灰褐色	筒状の頸部から，口縁部は外反しながら大きく開く。端部下方により大きく拡張する。	頸部外面調整は縦ハケの後ナデ。口縁端面は強いナデによる稜線。内面にシボリメが残る。	3	50-1
3	広口壺 C	口径17.6 残高 5.0	◎　～0.5 良好 暗灰褐色	漏斗状に開く頸部から，口縁部は鋭く屈曲し，端部を上下に拡張する。無文。	頸部外面調整は粗い縦ハケ。口縁部や内面はナデ。	2 外面にススス	
4	広口壺 D	口径10.8 残高 3.4	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰褐色	頸部は短く外傾し，口縁部は鋭く屈曲する。端部は上方を少しつまみ上げて，面を持つ。無文。	体部外面調整は縦ハケ。頸部との境に回線文状の強いナデ。頸部，口縁部は横ナデ。	4 外面にススス	
5	長頸壺	口径 9.2 残高 4.8	◎ 0.5～1.0 良好	口縁部はややふくれて，内湾気味に立ち上がる。端部は丸	文様施文部分以外は丁寧なナデを行う。	5	

			淡灰褐色	く仕上げる。やや下って凹線文(4条)。最上の凹線は上側の肩がなく，段状を呈す。			
6	短頸壺	口径 8.7 残高 6.0	○ 0.2～0.4 やや軟 赤褐色	胴部から屈曲して立ち上がり，やや中ぶくれの頸部をもつ。口縁端部内面に面をもち，外面に凹線文(2条)を施す。	胴部と頸部の境に，凹線文状の強いナデを行う。他は磨滅のため不明。	51	
7	無頸壺 B	口径12.0 残高 1.5	◎ 0.5～1.0 良好 淡褐色	胴部からゆるやかに屈曲して短く立ち上がる。端部は方形に肥厚し，上方・外方に面をもつ。	内外面とも丁寧なナデを行う。	7	
8	無頸壺 B	口径12.2 残高 2.8	◎　～0.5 良好 暗褐色	内傾する胴部上端部に，断面三角形の粘土紐を貼付けて方形に肥厚させ，口縁部を作り出す。上方・外方に面をもち，胴部との境に調整具原体の刺突文を巡らす。	全面にヘラミガキを行う。内面と口縁部外面は横位，胴部外面は斜位。前者は単位が細かく，後者はやや太め。内面に指頭圧痕が残る。	6	
9	壺用蓋	口径16.2 器高 4.2	◎ 1.0～2.0 良好 淡灰褐色	つまみ部は扁平，中実で若干のくびれを介して斜下方に広がる裾部に接続する。端部はやや肥厚し丸く仕上げる。円孔は1個のみ残存するが，本来2個1組と推定。	つまみ部はナデ。裾部外面は縦位のヘラミガキ。内面は斜位のヘラケズリを行う。	49	52－ 4
10	壺用蓋	口径17.3 器高 4.9	◎　～0.5 良好 黒灰色	つまみ部は中実で逆台形状を呈す。裾部は直線的に広がり下方に2個1組の円孔をもつ。端部は肥厚せず外方に面をもち沈線(1条)を巡らす。	つまみ部は指による成形のため，爪痕が残る。裾部は下方に横～斜位の細かいタタキを行った後，縦位のヘラミガキを行う。内面は斜～横位のヘラケズリ。	48	
11	甕 A	口径10.8 残高 3.0	◎ 0.5～1.0 良好 黄褐色	器壁の薄い胴部から口縁部は内面に稜をもって屈曲し，やや内湾気味に斜上方に立ち上がる。端部は短く屈曲して直立し，はね上げ状を呈す。	内外面丁寧なナデを行う。内面にヘラキズが残る。	8 口縁外面に黒斑	
12	甕 A	口径13.2 残高 6.4	◎ 0.5～0.8 良好 淡褐色	長胴形の胴部から強く屈曲し，口縁部はほぼ水平に広がる。端部は若干上に拡張し外側に面をもつ。	胴部外面は縦ハケ。口縁部及び内面は丁寧なナデを行う。	9	
13	甕 A	口径17.0 残高 1.8	◎ 0.5～1.0 良好 暗褐色	外反しながら開く口縁部から，端部は短く屈曲し立ち上がる。外面に1条の凹線文を施す。	内外面とも丁寧な横ナデを行う。	23 内面は灰白色。外面にススが付着	
14	甕 A	口径16.0 残高 3.1	◎ 0.5～1.0 良好 淡褐色	口縁部は強く屈曲し，大きく広がる。端部は若干つまみ上げるが，丸く仕上げる。外面にナデによる凹みが巡る。	内外面とも顕著な横ナデ調整。	19	
15	甕 A	口径14.6 残高 5.4	◎ 0.5～0.8 良好 淡灰褐色	球形状の体部から，口縁部は強く屈曲し，大きく外反。端部は若干つまみ上げ，丸く仕上げる。端面に強いナデによる凹みが巡る。	体部外面は縦ハケ調整。くびれ部は強い横ナデ調整。内面は斜位のハケ調整。口縁部は横ナデ。	20	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
16	甕 A	口径15.4 残高 5.1	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰白色	胴張りの体部と推定。口縁部は内面に稜をもって強く屈曲し，端部は上方に若干つまみ上げる。	胴部外面上半は細かいハケ調整。くびれ部分を中心に強い横ナデ，内面は粗いハケ調整。	18 胴部外面にススス	
17	甕 A	口径14.1 残高 7.2	◎　～0.5 良好 灰白色	胴張りの強い体部から，内外面に稜をもって強くくびれ，口縁部は内湾しながら大きく開く。端部はつまみ上げ，端面に凹線文(1条)を巡らす。	外面調整はヘラミガキ及びナデ。内面調整は斜位のハケ(右上り)。口縁部は横ナデ調整。	10 胴部外面にススス	
18	甕 A	口径17.7 残高 9.4	○　～0.5 良好 淡灰白色	球形の体部から強く屈曲し，口縁部は外湾しながら開く。端部は上下に若干拡張し，ナデによる凹みが巡る。	外面調整は横位のタタキの後縦ハケ。内面調整は縦ハケ。くびれ部周辺は内外面とも横ナデ調整を行う。	18	
19	甕 A	口径19.1 残高 8.0	◎　～0.5 良好 灰白色	球形の胴部から強く屈曲してほぼ水平に開く口縁をもつ。端部は上方に拡張し幅広い面をもつ。	胴部成形の際タタキを使用。外面調整は肩部からくびれ部まで右上方向のハケの後，胴部中央部分から肩部まで左上方向のハケ。内面は右上方向の後横位のハケ調整。	14	
20	甕 A	口径19.0 残高 8.2	◎ 0.5～1.0 やや軟 灰白色	胴部はやや厚手で球形に張る。最大径よりやや上位にナデ原体による刺突を巡らす。口縁部は短く屈曲し，端部は上方に若干つまみ上げる。	胴部外面に横位のタタキが残る。上半部縦位のハケ調整の後，丁寧な横ナデ。内面は横ハケの後縦ハケ調整。口縁部の接合が雑で，屈曲部下位に指頭圧痕が巡り接合痕を残す	11	
21	甕 A	口径19.4 胴径27.2 残高15.5	◎ 0.5～1.0 良好 赤褐色	胴部は球形状を呈し，最大径よりやや上位にヘラによる刺突を巡らす。口縁部は内面に稜をもち強くくびれて外反する。端部は上方につまみ上げ，やや尖り気味に仕上げる。細い凹線の下端にヘラによる刻みを巡らすが，一部施文されない部分がある。	胴部外面上半タタキ調整(右上→左下，4条／cm)の後，縦位のハケ調整を上から下に行う。くびれ部周辺は内外面とも強い横ナデ。胴部内面は左上りのハケ調整の後右上りのハケ調整を行う。	12 胴部外面にススス付着 内面に黒斑	50- 4
22	甕 B	口径28.4 胴径38.5 残高21.7	△ 0.5～2.5 良好 白黄色	体部は厚手で，胴張りは弱い。口縁部は内面を突出して外反し，端部を上下に拡張する。口径が大きい割に器高が低いものと推定。	胴部成形のタタキ使用(3条／cm)。下半は主に縦ハケ調整。内面下半は斜位のケズリ，上半はハケ調整の後ナデ。口縁部は横ナデ。内面にハケによる文様的な調整がある。	16	
23	甕 B	口径25.8 残高 4.6	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	口縁部は内面に稜をもってくびれて外反する。端面は下方に拡張し3条の凹線文を施す。	胴部内面はハケ調整(斜位)，外面は，くびれ部ともに丁寧な横ナデ。口縁部は内外面ともナデ調整。	21	
24	甕 B	口径31.6 残高 3.5	◎　～0.5 良好 淡灰黄色	口縁部は厚手で短くくびれる。端部は上方に小さくつまみ上げ，端面に強いナデによ	口縁部は胴部成形，調整の後プレスをおいて貼付ける為に外面に顕著な接合痕が残る。	13	

				る稜線が巡る。くびれ部外面にハケ原体による刺突文を施す。	内面に一部横ハケ調整を行うが，主として横ナデ。		
25	甕 B	口径31.1 胴径31.8 残高32.5	○ 0.5～3.0 良好 灰褐色	胴張りが弱い大形甕。胴部最大径はやや上により，器壁はやや厚い。口縁部は内面に稜をもって屈曲し，内湾気味に外反する。端部は上方にややつまみ上げ，凹線文を施す。	胴部は胴径部以下は斜位(左上り)の，以上は横位のタタキで成形。調整は下半が下→上のハケ，上半がナデ。内面は下半が下→上のヘラケズリ。上半はナデ調整。指頭圧痕が多く残る。	17 胴下半にススが付着	
26	甕 B	口径33.0 胴径38.4 残高35.6	◎ 0.5～1.0 良好 灰黄白色	体部は若干胴が張る倒卵形。器壁がやや薄い。口縁部は屈曲して外反し，端部を上下に拡張する。端面には退化した凹線を巡らす。	胴下半部は板ナデ調整(下→左上)。斜位のタタキをくびれ部周辺まで行う(左上り)。ハケ調整は上→下方向。くびれ部分に接してタタキ原体による横ナデを凹線文風に行う。内面は上方の横ハケ調整の後縦ハケ。	15 胴部下半にススが付着 黒斑	
27	鉢 D	口径19.6 残高 5.4	◎ 0.5～1.0 良好 灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し丸く仕上げる。体部外面に8＋α条の凹線文を施す。	内外面ともナデを基調とする調整。	24	
28	鉢 D	口径15.3 残高 5.0	◎　～0.5 良好 灰白色	胴の張りが強い鉢。体部は内傾しながら立ち上がる。口縁は内側に拡張し，上端部に面をもつ。口縁からやや下がったところに，外から内へ2個穿孔する。外面に6＋α条の凹線文。	外面調整は横位のヘラミガキ。内面はナデの後斜～横位のヘラミガキ。口縁は内外面とも丁寧な横ナデ調整。	30	
29	鉢 A	口径13.5 残高 4.5	◎　～0.5 良好 灰黒色	体部はやや内湾しながら大きく開き，口縁部で屈曲して短く内傾する。端部は凹んだ面をもつ。外面に退化した凹線文を2条施す。	外面調整は文様施文の後その下に縦位のヘラミガキ。内面は斜位のヘラミガキ。口縁部はナデ。	26 外面にススが付着	
30	鉢 A	口径16.2 残高 2.7	◎　～0.5 良好 灰黒色	体部の屈曲をもたない鉢。やや内湾しながら立ち上がり，口縁部は内外面に短く拡張する。上端に面をもつ。外面に3＋α条の幅広い凹線文を施す。	内外面とも丁寧な横ナデ調整。器壁がやや薄い。	27	
31	鉢 B	口径13.2 残高 5.0	◎ 0.3～1.0 やや軟 淡褐色	41と同様の脚台部をもつ高杯となる可能性がある。体部は大きく開き，ゆるやかに屈曲して内湾気味に立ち上がる。口縁端部は若干内側に折り曲げ，丸く仕上げる。	外面調整は屈曲部分まで縦位のヘラミガキを行った後，横位のヘラミガキ。内面は磨滅が激しく調整は不明。器壁が0.4cmとやや薄い。	25	
32	高杯 A	口径21.3 残高 7.8	◎ 0.5～2.0 良好 淡黄橙色	中形の鉢。体部は斜上方に直線的に開き，ゆるやかに屈曲してやや内湾気味に立ち上がる。口縁は若干肥厚し端部に凹んだ面をもつ。外面屈曲部に2条と口縁部に1条の凹線文を施す。	体部内面は横位のハケ。口縁部内面は横ナデ調整。磨滅が激しく不明箇所が多い。	28	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
33	高杯 A	口径23.6 残高 5.4	◎　～0.5 良好 淡灰褐色	中形の鉢。体部は球形を呈し口縁は直口する端部は内側に拡張し上端に面をもつ。口縁外面に2条の退化した凹線文をもつ。	体部外面は横位のハケ，内面は縦位のハケの後丁寧は横ナデ。口縁部は内外面とも横ナデ。	29	
34	高杯 A	口径23.4 残高 4.4	◎　～0.5 良好 灰白色	中形の鉢。斜上方に直線的に開く体部をもつものと推定。屈曲部以上が残存し若干内湾気味に立ち上がる。口縁は内側に大きく肥厚し上端に面をもつ。屈曲部に1条と口縁下に2条の退化した凹線文を施す。	口縁部の肥厚は内側の粘土の貼り付けによる。内外面とも細緻なヘラミガキ(横位)を行う。口縁は内外面とも横ナデ調整。	32	
35	高杯 A	口径30.2 残高 4.4	◎ 0.5～1.0 良好 灰白色	屈曲部以上が残存。若干内湾気味に立ち上がる。口縁部は肥厚し，上端に面をもつ。外面に2条の退化した凹線文を施す。	外面調整は細緻なヘラミガキ(斜～横位)。内面は横位のヘラミガキ及びナデ調整。	31 外面に黒斑	52 - 16
36	高杯 A	口径28.7 残高 5.0	◎　～0.5 良好 淡灰褐色	屈曲部からやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は内側に肥厚し，上端に面をもつ。外面に2条の退化した凹線文を施す。	内外面とも丁寧なヘラミガキ。内面はその後横ナデ。体部外面は縦位のヘラミガキ。	33 外面にススの付着	52 - 15
37	高杯 A	口径28.2 残高 6.6	○　～0.5 良好 淡灰黄色	皿状の杯部から口縁部はゆるやかに立ち上がり，明確な屈曲部をもたない。端部は若干肥厚し，外向きの面をもつ。口縁部外面に退化した凹線文を3条施す。	杯部外面は斜位，口縁部外面は横位のヘラミガキ。内面は下方に縦位のヘラミガキを施した後，斜位のヘラミガキ。	34	52 - 18
38	高杯 A	口径31.6 残高 4.5	○ 0.5～2.0 良好 灰白色	皿状の杯部から，口縁部は若干屈曲して立ち上がる。端部は大きく肥厚し上端に面をもつ。屈曲部に2条の退化凹線と口縁下に1条の凹線を施す	口縁部の肥厚は，粘土紐貼付の際若干のブレスを介したためであろう。調整は内外面とも横位のヘラミガキ。口縁部は横ナデ調整。	35	52 - 17
39	高杯 B	口径27.1 残高 3.1	○ 0.5～1.0 良好 赤橙色	水平に開く口縁部をもつ高杯。突帯は内側に突出。垂下部外面に強いナデによる凹みが巡る。	杯部内面にヘラミガキ。口縁部は内外面とも横ナデ調整。	36	
40	高杯 B	口径27.2	◎　～0.5 良好 灰白色	水平に開く口縁部をもつ高杯。垂下部外面に2条の凹線文を施す。	外面は細緻なヘラミガキ。内面は横ナデ調整。	37	
41	高杯 脚台	残高 4.9	◎　～0.5 良好 淡灰褐色	中空細めの脚柱部からゆるやかに外反する杯部をもつ。杯部の器壁は極端にうすい。	円板充填法。脚柱部内面にはシボリメが残る。外面調整は縦位ヘラミガキ。内面はヘラミガキの後ナデ。	46	
42	高杯 脚台 A	底径12.0 残高10.0	◎ 0.5～3.0 良好 灰白色	裾部は直線的に開き，端部は丸く仕上げる。筒状の脚柱部を介して，杯部は大きく開く。脚部の器壁はやや厚め。	円板充填法。裾部は内外面とも丁寧なナデ。脚柱部外面は縦方向ヘラケズリ，内面にシボリメ。杯部内面は不定方向の粗いハケ。	45 外面に黒斑	

43	高杯 脚台 B	底径 9.0 残高 3.5	◎　～0.5 良好 灰白色	小形の高杯と推定。裾端部は肥厚し上方にやや拡張，回んだ面をもつ。穿孔は1.3cm毎に外→内へ施す。	外面調整はナデ。内面は横位(右→左)のヘラケズリ，上方にハケが残る。	41 外面に黒斑	
44	高杯 脚台 B	底径14.0 残高 4.7	◎　～0.5 良好 灰白色	裾端部は上下に若干拡張し回んだ面をもつ。外面にヘラで小円を強く描き間ませ圧痕様に仕上げる文様が1個残る。2本のヘラキズ有り。	外面は丁寧なナデ調整。内面は(右→左)のヘラケズリ。	42	
45	高杯 脚台 B	底径13.5 残高 6.4	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	裾端部は大きく肥厚し上方に拡張。端部に面をもち，凹線文を施す。裾部は直線的にすぼまり屈曲して上方に立ち上がる。	外面調整はナデ。内面は(右→左)のヘラケズリ。	44 外面に黒斑	
46	高杯 脚台 B	底径15.4 残高 5.2	◎ 0.5～5.0 良好 灰褐色	裾端部は上方に大きく拡張し凹面をもつ。外反気味にすぼまりゆるやかに屈曲して立ち上がると推定。穿孔は4cm毎に内→外へ施す。	外面は縦位ヘラミガキを丁寧に施す。内面は横位(右→左)のヘラケズリ。端部は横ナデ調整。	39	
47	高杯 脚台 B	底径14.7 残高 5.1	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰褐色	裾部は屈曲してラッパ状に大きく開く。端部は上方に鋭く拡張し，端面は強いナデによる凹みが巡る。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面は右→左のヘラケズリ。端部は横ナデ。	43	
48	高杯 脚台 B	底径15.6 残高13.1	◎　～0.5 良好 淡褐色	脚柱部は一旦すぼまり，屈曲して，裾部はラッパ状に大きく開く。外面下端に2条の凹線－端部は上下に拡張。	外面は縦位ヘラミガキ。脚柱部内面には顕著なシボリメ。裾部内面は丁寧なナデ。端部は横ナデ調整。	38 内面にスス付着	52- 6
49	水差 (把手)		◎　～0.5 良好 淡灰白色	断面は扁平な方形。外面は強いナデにより回む。	体部外面はハケメ。把手は挿入手法。	50 傾きは推定	
50	器台 A	口径16.6 頸径 8.0 底径14.4 器高14.8	◎ 0.5～3.0 良好 淡黄灰色	裾端部は内側に若干拡張。直線的にすぼみ，「く」の字状に屈曲して外反気味に開く体部。下半の透孔は台形と円形を交互に配し，上半は円形のみを巡らす。端部は斜下方へ折りまげ，外面に1条の退化した凹線文を施す。	外面体部下半は上→下のヘラケズリ，上半は下→上のヘラケズリの後不定方向のヘラミガキ。内面上半は横位板ナデ。屈曲部にはシボリメが残る。下半は板状原体の圧痕がみられ，部分的に横ハケ。	40 外面に黒斑	52- 8
51	器台 B	底径19.2 残高 4.1	◎　～0.5 良好 淡黄白色	裾部は大きく開き，端部を上下に拡張。外面に縦位ハケ，内面は斜方向のハケ。一部指頭圧痕，粘土紐接合痕が残る。	外面に粗い縦ハケ。内面は斜方向のハケメ。一部指頭圧痕，粘土接合痕が残る。	47	
52	(底部)	底径 5.6 残高 2.4	○ 0.5～1.0 良好 灰褐色	やや薄手の平底。体部へはやや外反気味に開く。	外面縦ヘラミガキ。内面はナデ調整。	56	
53	(底部)	底径 4.5 残高 2.1	◎ 0.5～1.0 良好 灰黒色	小形だが安定した平底。	外面指頭圧痕。	55	
54	(底部)	底径 5.8 残高 2.8	◎ 0.5～1.0 良好 黒色	薄手の平底。	外面は縦位ヘラミガキ。内面は下→上のヘラケズリ。底面は板ナデ。	54	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
55	(底部)	底径 6.0 残高 4.5	◎ 0.5～1.0 良好 灰黄褐色	薄手の平底。体部へはやや内湾気味に斜上方へ立ち上がる。	外面斜～縦位のハケメ。内面は下→上のヘラケズリ。	57 外面にススが付着	
56	(底部)	底径10.3 残高 4.5	◎ 0.5～3.0 良好 淡黄灰色	若干上げ底状。大形の底部。	外面は下→上への板ナデ。内面は下→上へのヘラケズリ。	53	
57	(底部)	底径 6.6 残高 4.5	◎ 0.5～2.0 良好 灰茶色	安定した平底。体部へはやや内湾気味に立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。内面は磨滅のため不明。指頭圧痕が残る。	52 外面にススが付着	
58	(底部)	底径 6.3 残高 4.6	◎　～0.5 良好 灰黒色	安定した平底。体部へは直線的に斜上方へ立ち上がる。	外面は下→上のヘラケズリ。内面には指頭圧痕が残る。	58	
59	(底部)	底径10.4 残高 8.6	◎ 0.5～1.0 良好 灰褐色	大形の安定した平底。体部へはやや内湾気味に立ち上がる。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面は不定方向ハケメ。底面はヘラケズリ。	59	

第4節　後期の遺構と遺物

1）概要および出土土器の分類

弥生後期の遺構は，住居址1・2，溝8，土壙3，壺棺墓がある。住居址2棟は1m余りの間隔をおき，南北方向に隣合わせで検出された。検出面は同一であるが，出土遺物の時期差等からみても同時併存したとは考えられない。溝は中期に存在したものとほぼ同一箇所で，その方向も同じである。微高地縁辺を巡るものであろう。溝と住居との間には新たに墓が造られる。土壙3は後に触れるが木棺墓であった可能性が高い。

出土遺物はほぼ土器に限られる。中期の段階では多くの石器が見られたが，後期の遺構に確実に伴う石器は皆無である。

出土土器の分類は下記のとおり定める。

広口壺形土器A……外反する口縁部の下方を拡張し，端面を文様帯とするもの。

広口壺形土器B……外反して開く口縁部をもつもの。

長頸壺形土器……筒状の頸部から，外反する口縁部をもつもの。

短頸壺形土器A ……頸部でくびれた後に，直立気味に立ち上がり，口縁部に凹線文を有するもの。

短頸壺形土器B……頸部でくびれた後に，ゆるやかに外反して開くもの。

甕形土器A……外反して開く口縁部をもつもの。

甕形土器B……外反して開く口縁部をもつもので，口縁叩き出し手法により口縁部を成形しているもの。

甕形土器C……外反して開く口縁部で，受け口状の口縁部をもつもの。

高杯形土器A……口縁部で屈曲した後に，外反して開くもの。

高杯形土器B……浅い椀形の杯部をもつもの。

鉢形土器A……口縁部で外反して開くもの。

鉢形土器B……直口のもの。

甑形土器……直口の鉢の底部を穿孔したもの。　（中村・森下）

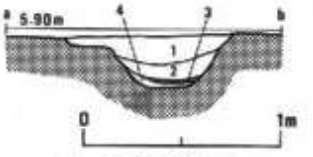
2）住居址1

a．遺　構（第75・76図，図版第11～13）

住居址1はA10・11区，C10・11区にわたって検出された竪穴式住居で，直径約7mの不整円形プランをもつ。床面積は38.5㎡である。上面は削平を受けたものと考えられ，壁高は25cmほど残存する。

住居址内からは7個の柱穴が検出されたが，住居址に伴う主柱穴はP1～P5の5個と思われる。P1は直径45cm，深さ30cm。P2は直径40cm，深さ45.3cmで共に円形を呈す。P3は最大径48cm，深さ30cm。P4は最大径50cm，深さ35cmで，いずれも楕円形を呈す。P5は東西55cm，南北50cm，深さ45cmでピット内東側および西側にテラス状の段を残す。これらの5個のピットの間隔はいずれも3m前後で，各々ピットは五角形の各頂点にのる。

住居址中央部では，直径1m，深さ30cmの炉址と考えられる円形の土壙が検出された。埋土は4層に分れ，第1層は黒灰色粘質土，第2層は暗灰色粘質土で，第3層に薄い炭化物層が堆積する。最下層の第4層は黒灰色粘質土で少量の炭化物を含んでいる。部分的にテラス状部を作り出しており，形態的には中期の住居址3，後期の住居址2と共通する。テラス状部にはピット等はみられなかった。出土遺物は第1層・第2層よりこぶし大の自然礫と高杯の脚部片がある。



1：黒灰色粘質土
2：暗灰黒色粘質土
3：炭　層
4：黒灰色粘質土
（少量の炭を含む。）

第76図　住居址1
炉址断面実測図

さらに住居址内東側では，南北2m50cm，東西1m，深さ約7cmの南北に細長い溝状の遺構を確認した。時期決定を行える出土遺物はなく，この住居址に伴うものか，あるいは住居の建築以前にあったものかは不明である。

なお，住居址2．3でみられる壁溝は，この住居址では確認していない。

住居址1では炉址周辺及びその南側から多量の後期の土器が出土した。その出土状況は隣接する住居址2でみられる様な一括投棄の様子は窺えず，住居の南半分を中心とする比較的広い範囲から均等に出土している。また出土土器が小破片のみでなく，良好状態で残存していたことも留意すべき点である。　（緒方）

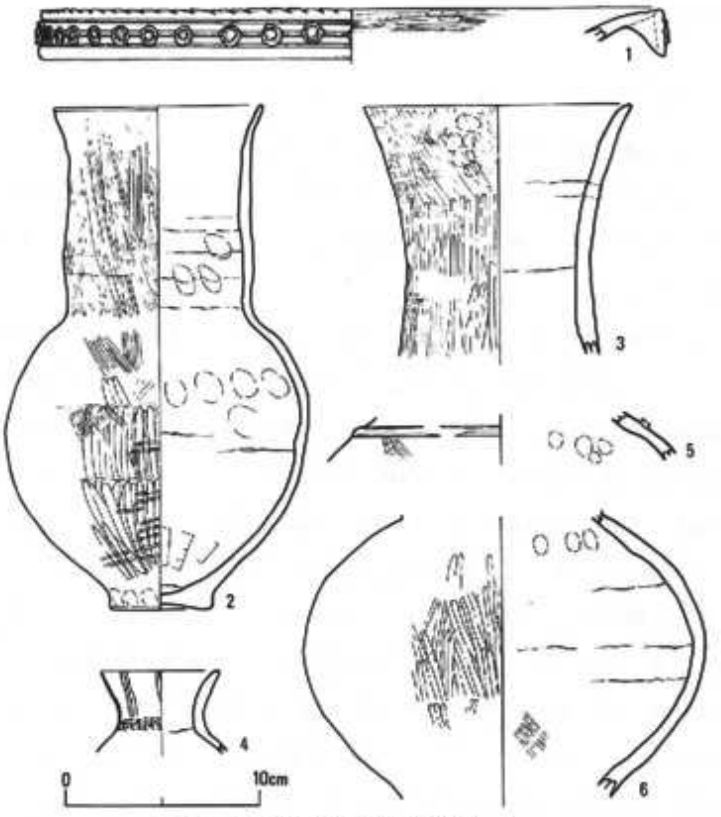
b．遺　物

◎土　器（第77～79図）

住居址1からは，広口壺形土器A，長頸壺形土器，短頸壺形土器B，甕形土器A・B，高杯形土器A，鉢形土器Bなどの土器が出土した。また埋土中から弥生中期に属する土器も出土した。

・広口壺形土器　（1）

下方に拡張させた口縁端面に3条の凹線文を巡らした後に，竹管押圧円形浮文を貼付する。上端には刻目を入れ，端面および内面に赤色顔料を塗布する。いわゆる生駒西麓産の胎土をもつ。類例が西ノ辻遺跡Ⅰ地点(小林1958)，鬼塚遺跡(芋本・下村編1975)にある。但し，本例は端部下端に刻目を入れない点で，上記例のものとは異なる。田能遺跡1B調査区土器溜り(福井編1982)でも同類の例が出土している。本遺跡出土のものと比べて，端面の幅が狭くやや内傾する点や，上端をややつまみ上げる点など細部にわたって違いがみられる。また，胎土は生駒西麓産のものではなく，在地のものを使用する。



第77図　住居址1出土土器実測図・1

・長頸壺形土器　（2・3）

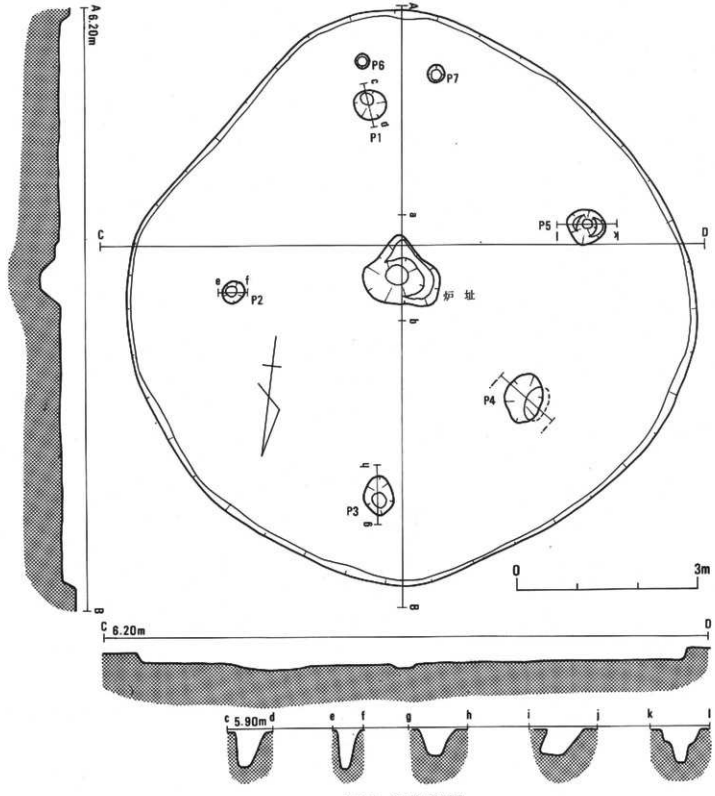
2は球形に近い体部から直立気味に立ち上がる頸部がつき，口縁部で僅かに外方に開くもので，器高に対して口頸部の占める割合は2分の1以下と小さい。第五様式古相を示す西ノ辻遺跡Ⅰ地点(小林1958)の長頸壺形土器に比べて，口縁部が僅かに外反し端部を丸く収める点や，底部がやや突出気味な点などが新しい特徴である。3は口頸部の外反度が大きく，2よりも後出と考えられる。

・短頸壺形土器B　（4）

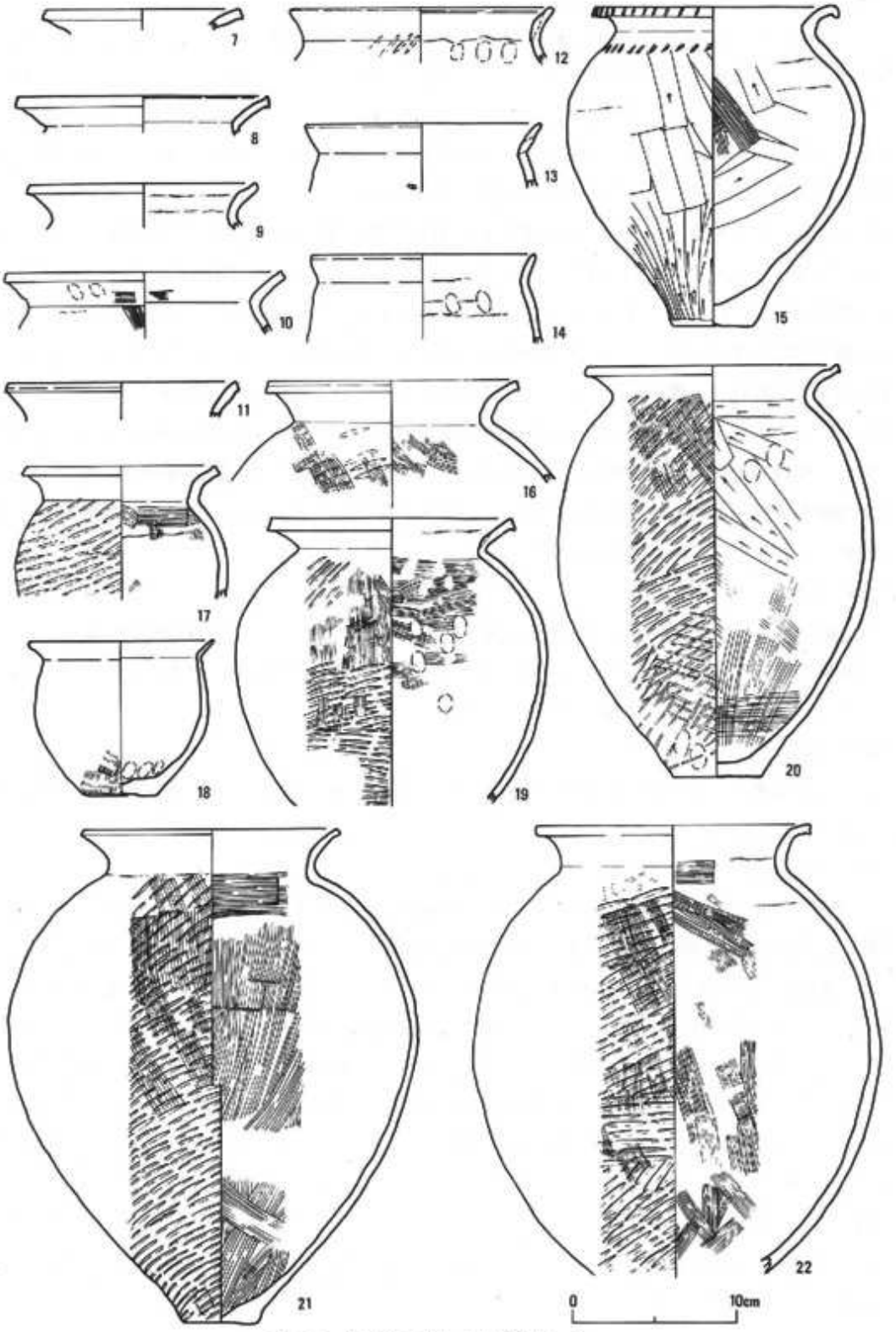
口径6.0cmと小形のもので，口縁部に3条1組の縦位の櫛描文を7組めぐらし，頸部に刺突文をもつ。管見の限りでは第五様式に類例がない。

・甕形土器A　（7～11・15～17・19～22）

外反して開く口縁部をもつもの。口縁部と頸部の境が明瞭で，直線気味に開くもの(7～11・16・19～20)，頸部が直立気味に立ち上がり口縁部で短く開くもの(17・21・22)，短く外反する口縁部をもち，下端を下方にやや突出させ，端面に文様をもつもの(15)などがある。16，19は



第76図　住居址1実測図



第78図　住居址1出土土器実測図・2

口縁端部に明瞭な面をもち，やや端面が凹み気味である。また体部外面はタタキで成形した後，ハケで丁寧に消す。20は器高24.8cmと，第五様式に一般的な大きさの甕である。肩はあまり張らず，最大径をやや上位にもつ。分割成形が目立ち，細粗2種類のタタキを認める。また，内面上半をヘラケズリし下半をハケメ調整している。このような内面ヘラケズリは，庄内式以降に普遍的な器壁を薄くするためのものとは異なり，器壁は相変らず厚く，明らかに区別される。第五様式前半期に大阪湾沿岸や淀川水系を中心に各遺跡で散見できる[12]。また，本遺跡出土の甕のようにヘラケズリとハケメを併用する例が田能遺跡第6調査区第2溝(福井編1982)にも存在する。

21は器高30.0cmとやや大形の甕で，最大径を上位にもつ。20に比べて最大径に対する口径の占める割合は小さい。また，体部上位が張る割に底部は小さく，しりすぼみの感を与える。17は小形の甕で体部上半は丸味をもつ。22は体部が丸味をもった長胴形で，やや大形の甕である。15は最大径を上位に有し，端面に篦状工具による刻目文をもち，肩部に同様の刺突文をもつ。体部外面下半をヘラケズリするなど中期的な様相が見受けられることから第五様式の前半期に位置づけられる。類例は近接の田能遺跡・中ノ田遺跡になく，北河内の出屋敷遺跡(桑原ほか1981)にある。出屋敷遺跡出土のものは本遺跡のものと比べて，端面が下方に突出しない点や頸部であまりくびれず，肩が張らない点で違いがある。

・甕形土器B　(12～14，18)

『口縁叩き出し手法』により口縁端部が波をうっているもの(13・14)，口縁部外面までタタキメが及んでいるもの(12)，器高が9cmと丈の低い小形の甕で口径に最大径をもつもの(18)がある。また，14の体部外面には籾痕がついている。

・鉢形土器A　(23)

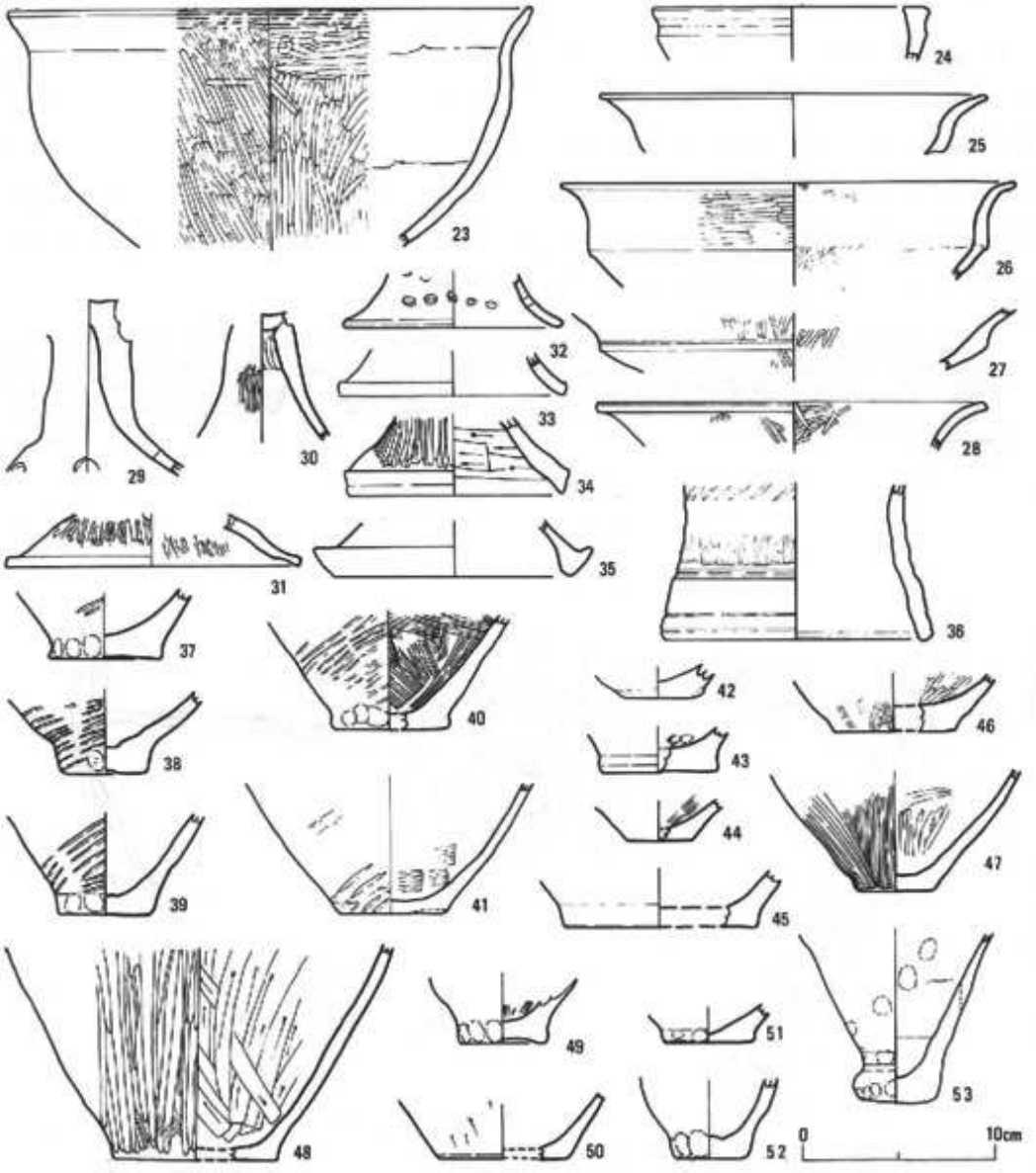
半球形の体部から短く開く口縁部をもつもので，体部はやや深めである。内外面共に丁寧なヘラミガキをしている。

・高杯形土器A　(25～28)

口縁部で屈曲して外方に開くもので，屈曲した後に，そのまま外方に開くもの(25・27・28)，屈曲した後に，直立気味に立ち上がって，端部付近で急に外反するもの(26)などがある。26は西ノ辻I地点式(小林1958)の高杯のように屈曲した後に，直立気味に立ち上がり，端部に明瞭な面をもつものとは異なり，端部付近で急に開くことや端部を丸く収める点などから，西ノ辻I地点式より新しいと考えられる。本住居址出土の高杯Aには屈曲部の接合の仕方に2種類の方法がある。一つは擬口縁を作った後，その内側に粘土を足して屈曲部を作るもの(25・27)である。もう一つの方法は擬口縁を作った後，上段の粘土紐にあらかじめ凹みをつけて接合し，屈曲部を作るもの(28)である。

・脚　台　(29，30)

柱状の脚柱から急に開く裾部をもつもの(29)，『円盤充塡』により成形しているもの(30)などがある。



第79図　住居址1出土土器実測図・3

・脚　台（31～33）

丁寧にヘラミガキを行うもの(31)，不規則な小孔を穿つもの(32)がある。

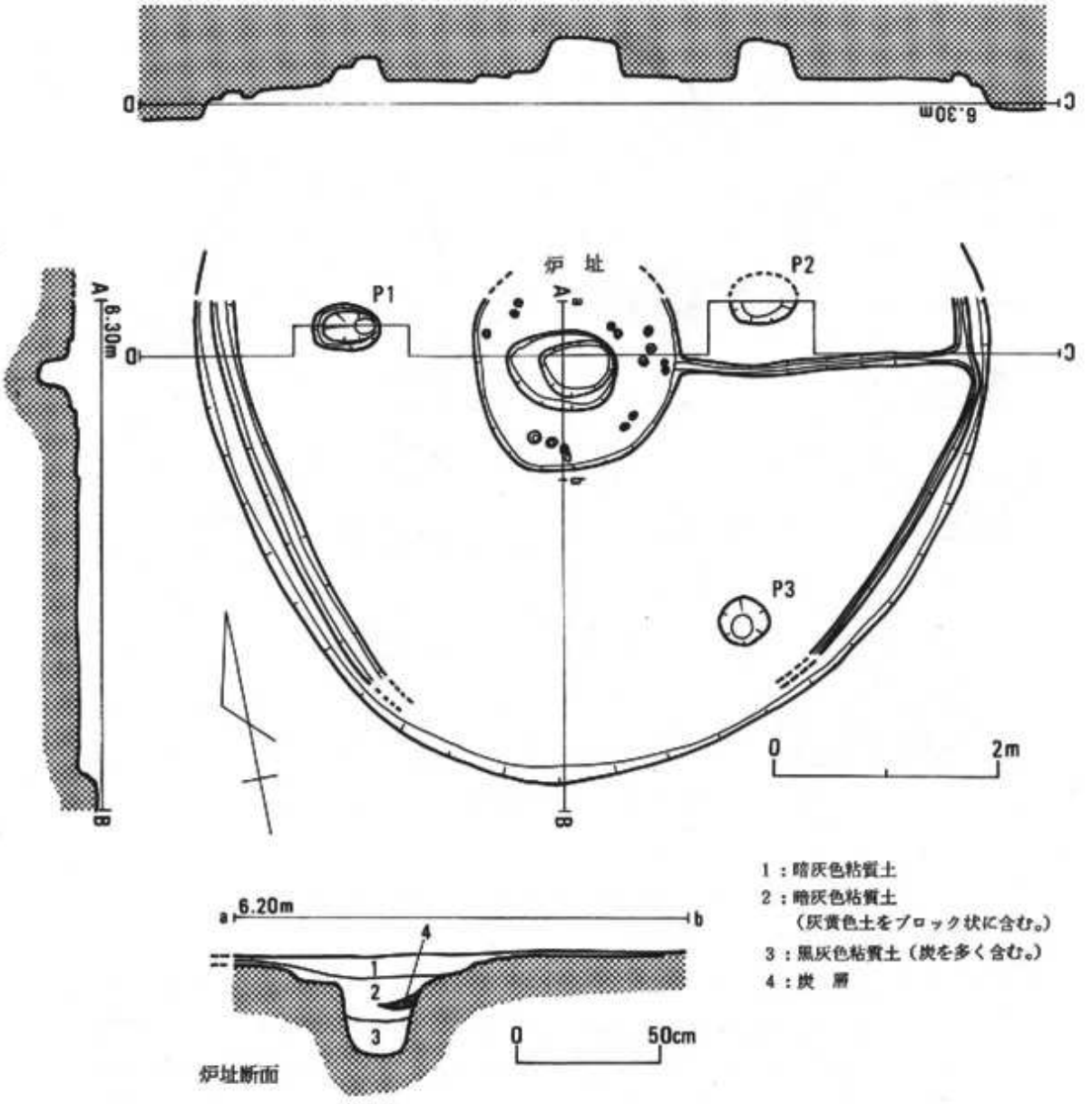
・底　部（37～44・46～47・49・51～53）

38～41は甕形土器の底部で，やや突出する平底(37・40・43)，ドーナツ底(38)，底面を軽く削るもの(39)，平底で突出しないもの(41)がある。44・49・52は鉢形土器の底部で，やや上げ底気味なもの(49)，平底でやや内傾しながら立ち上がるもの(52)がある。46・47は壷の底部で外面をハケメ調整している。（緒方・中村）

3）住居址2

a．遺　構（第80・81図，図版第9・10）

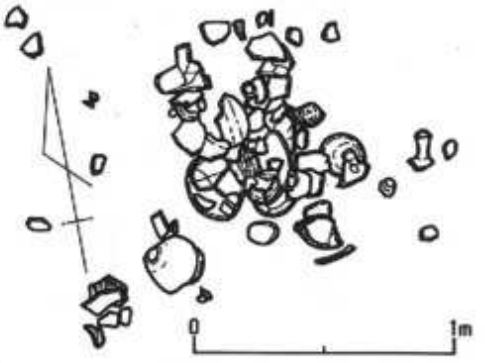
住居址2はA10・D10区にわたって検出された，直径7mの円形竪穴式住居である。北半分は調査区外にあるが，総床面積を推定すると約38.5㎡になる。壁体は23cmほど残存し，ほぼ直に掘り込まれる。主柱穴と思われるものは3個検出された。P1は長径60cm，短径32cm，深さ30cmを測り，東西に長く，西側に二段の掘り方を残す。P2は調査区外にかかるため形状不明であるが，深さは47cmである。P3は直径50cm，深さ35cmの隅丸方形になる。



第80図　住居址2実測図

中央部では直径180cm，最深部42cmの炉を確認した。全体的に二段の掘り方をもち，浅いテラス状部を作り出す。中央が深く掘り込まれ，その部分の上面径は約100cm，深さは最も深いところで42cmを測る。埋土中，部分的に炭化物層が認められた。また，テラス状部には直径数cmの小ピットが多く検出され，この炉の上部に何らかの施設のあったことが窺われる。

壁溝はA10区を除き，東側及び西側で確認した。幅10cm，深さ7～10cmを測り，1条巡る。東側で炉より東へ伸びる溝と連結する。この溝も壁溝とほぼ同様の幅・深さを測り，機能的には同一のものと見なし得る。



第81図　住居址2炉址上面土器出土状況実測図

出土遺物は土器に限られる。後期後半期のものが一括して出土した。特に検出状況から注目されるのは，中央の炉周辺に集中して出土することである。これらは住居の廃絶に伴って土器の一括投棄がなされたものとみることができる。さらに，土器群の最上面に完形の壺形土器が1点置かれており，これらの一連の行為が祭祀的意味あいを含んでいたことが推定できる。

（緒方・森下）

b．遺　物

◎土　器　（第82～86）

住居址2からは炉址周辺に一括投棄した形で土器が出土した。広口壺形土器A・B，短頸壺形土器A，甕形土器A・B，鉢形土器A・B，高杯形土器A・B，甑形土器がある。また，埋土中には縄文晩期から弥生中期の遺物も若干含む。

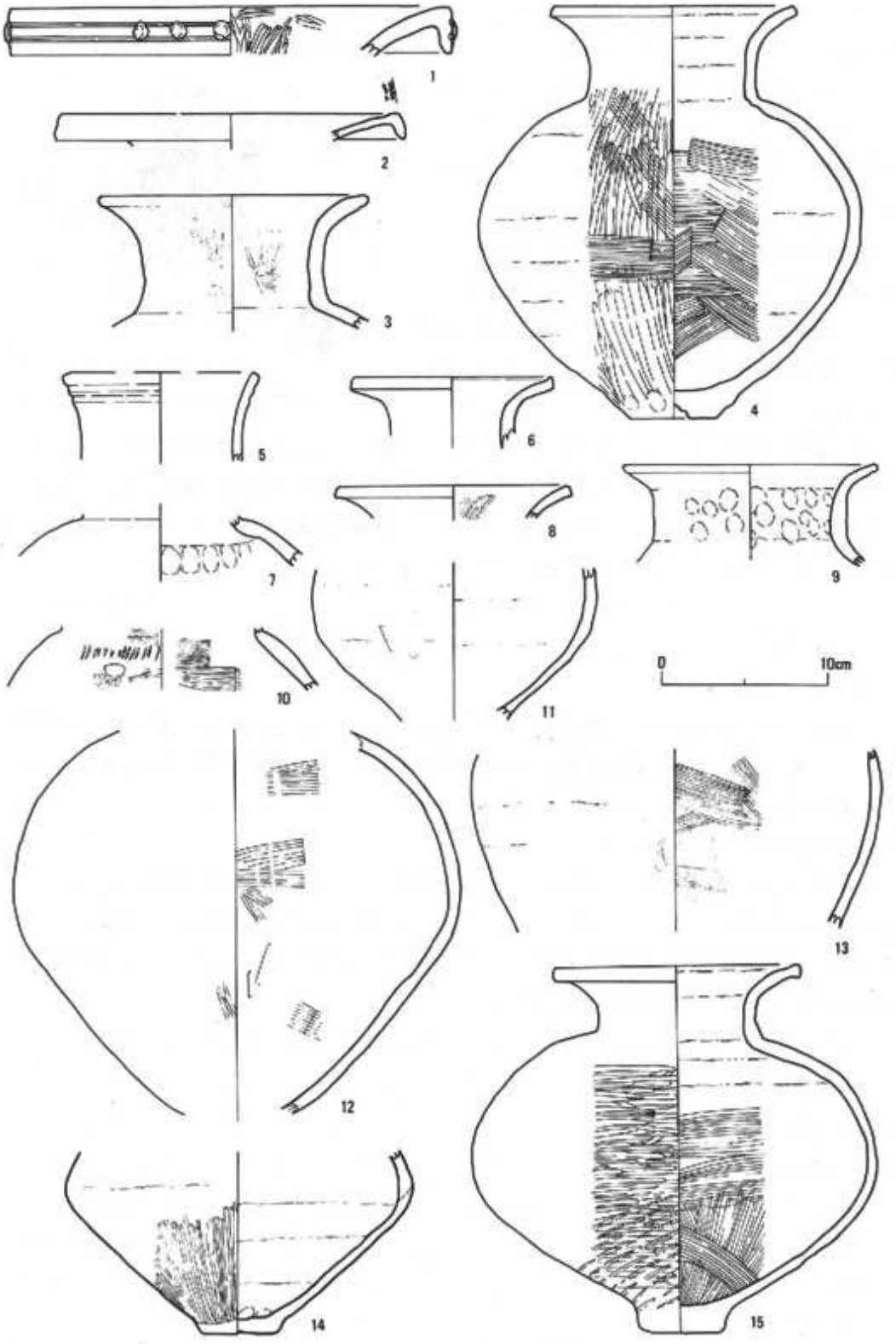
・広口壺形土器A　（1・2）

口縁部下端を下方に拡張させ，端面に2条の凹線文を施した後，円形浮文を貼付するもの(1)，内面に櫛描波状文をもつもの(2)がある。1は西ノ辻遺跡I地点(小林1958)の土器に比べて，上下端には刻目を施さない点や円形浮文上に竹管押圧が行われないことなどから，退化形態であると思われる。胎土には生駒西麓産のものを用いる。

2は口縁部端面がかなり磨滅しており，文様の有無は不明。内面に残る波状文は中期のそれとは違いかなり角ばったものである。

・広口壺形土器B　（3・4・6・8・9・15）

第五様式の広口壺形土器の中で最も一般的で，広口壺形土器Aに遅れて出現する。　短く直立した後，外反して開く口縁部をもつもので，端部を丸く収めるもの(3・9)，端部に面をもつものなどがある。4は器高が体部最大径を上回るもので，体部は球形を呈する。この土器は炉址周辺に一括投棄された土器の中に完形で横たわっていたものである。15は体部最大径が器高を上回るもので，体部はやや扁平な算盤玉形を呈す。4に比べて体部が張る点など新しい要素をもつ土器と言えよう。



第82図　住居址2出土土器実測図・1

・長頸壺形土器　(14)

体部が大きく張り出し最大径を下半にもつものと思われる。このように胴部下半が強く張り出す長頸壺は第五様式後半の特徴である。

・短頸壺形土器A　(5)

ゆるやかに外反する口縁部をもち，そこに2条の凹線文を施す。第五様式古相を示し，細片でかなりのローリングを受けている点から，本住居址に伴うものでない。

・甕形土器A　(16～24)

『く』の字に頸部でくびれた後に，外反し開く口縁部をもつもので，端部を丸く収める。タタキメは3条／cm～4条／cmの細かいものと2条／cmの粗いものの2種類ある。また，住居址1のように外面をタタキメで成形した後に丁寧にハケメを施すようなものはあまり見られない。

・甕形土器B　(80)

小形の甕で，口縁部成形を『口縁叩き出し手法』によって行うもの。口縁端部は欠損している。底径は3.0cmと小さいがドーナツ底を保つ。

・甕形土器　(27～30)

いわゆる受け口状の口縁をもつもので，外面に稜が入るもの(27)，外反する口縁部から稜をもたずにゆるやかに端部まで移行するもの(28～30)がある。28～30のように口縁部をつまみ上げ気味にナデ調整することにより受け口状を呈するものは，近接の田能遺跡第6Y調査区第2溝(福井編1982)や中ノ田遺跡(橋爪・勇・藤岡1971)にも存在する。また，近江系の受け口状口縁の甕形土器とは違い，第五様式の後半期の中でも新しい要素といえる。

・鉢形土器A　(32・34～36)

口縁部で外反して開くもので，口径30cmを超える大形のもの(32)，口縁部で明瞭な稜をもたずに，ゆるやかに外方に開くもの(34～36)などがある。36は口縁部調整が不十分である。

・鉢形土器B　(33・37・38)

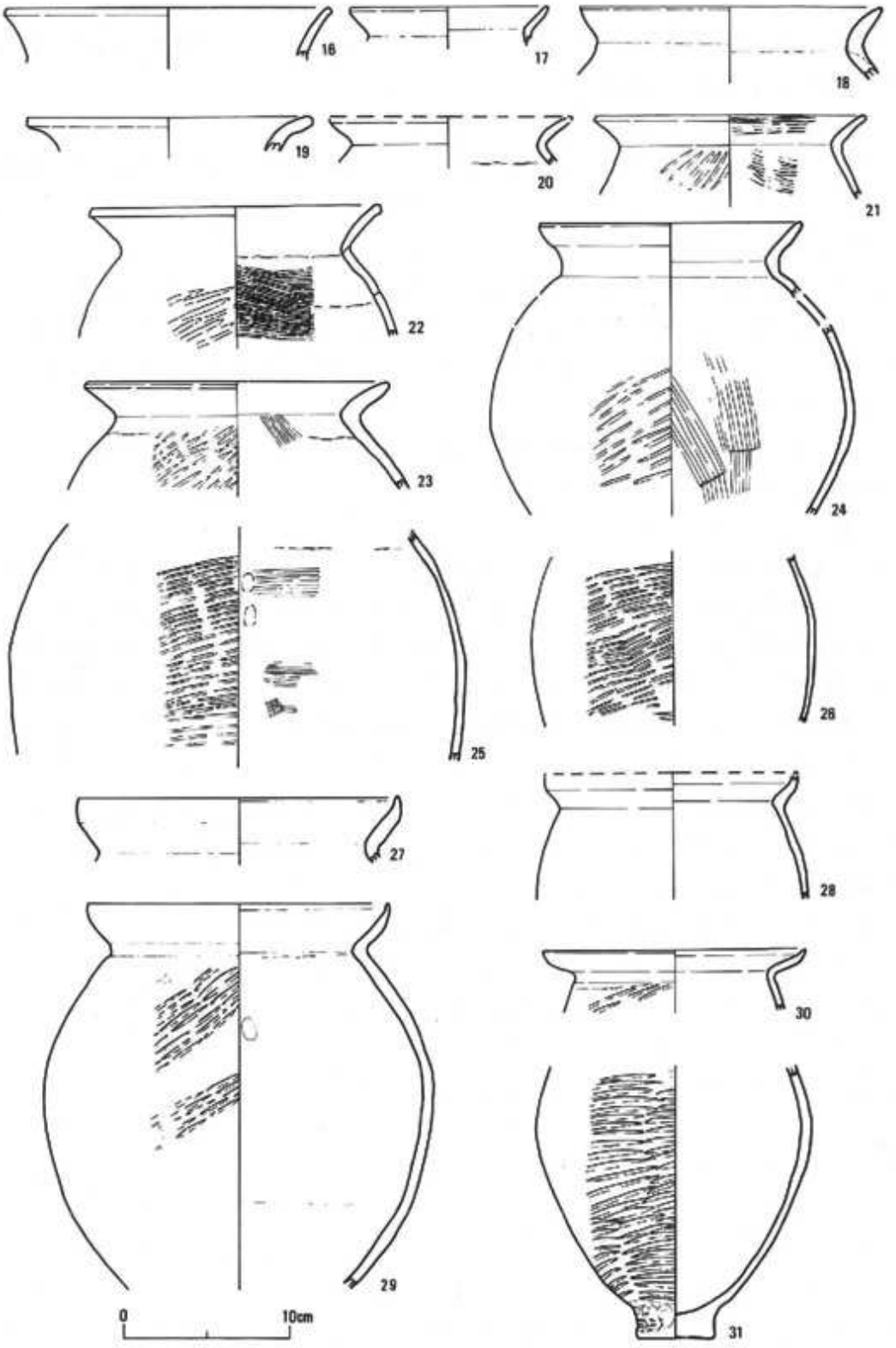
直口の鉢で，体部は半球形を呈す。口縁部が波を打っているもの(37・38)，口縁部を丁寧にナデ調整しているもの(33)がある。鉢形土器Aに比べて口径が10～12cmと小さい。37・38のような端部の調節が不十分な小形の鉢は第五様式中頃以降出現する。

・高杯形土器A　(39～41)

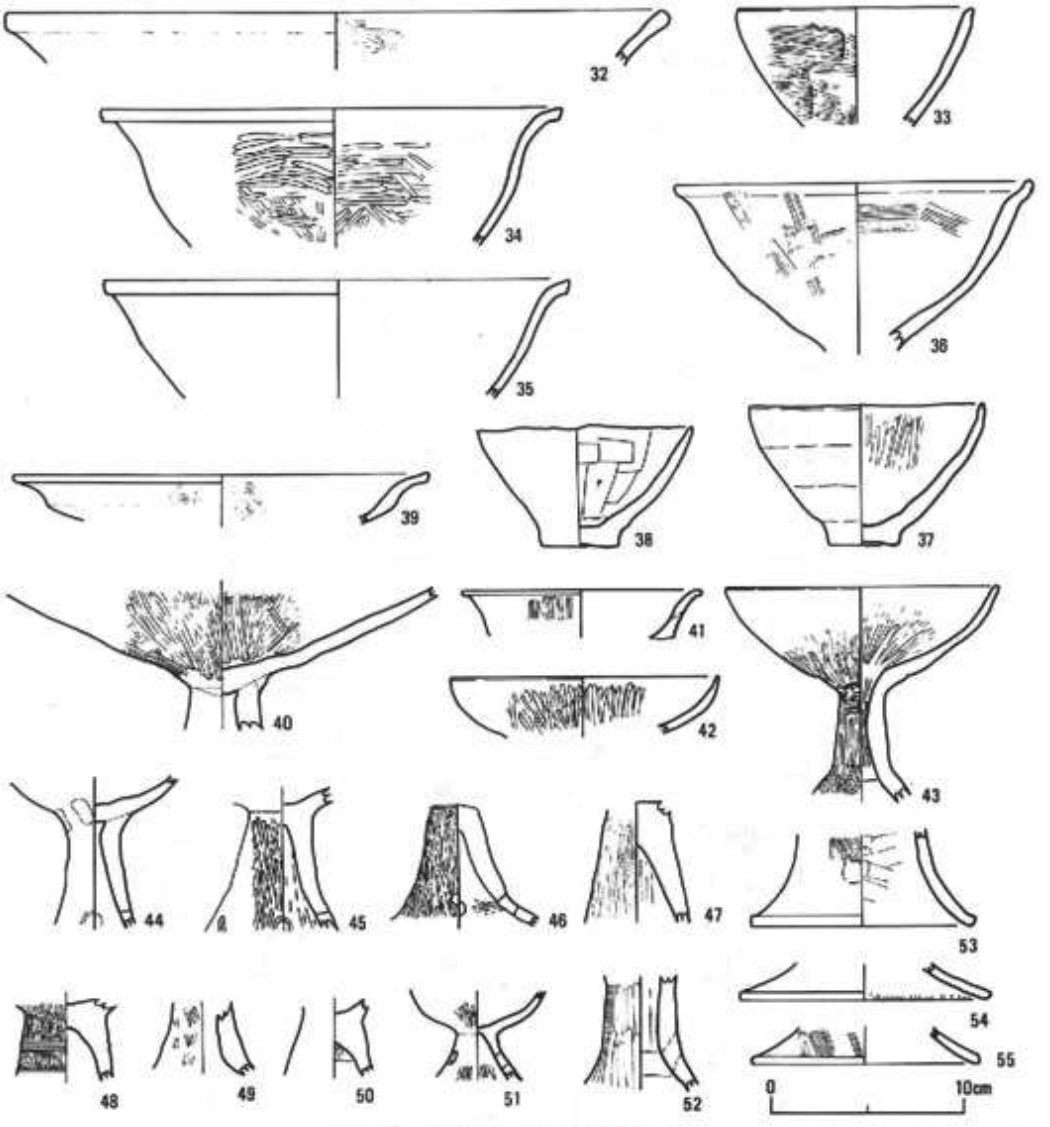
口縁部で屈曲して開くもので，口径20cmを超えるもの(39・40)と口径13.8cmと小形のもの(41)がある。39のように口径が大きい割に杯高がなく，口縁部の外反度の強いものは第五様式でも終末に近い特徴と言える。

・高杯形土器B　(42～44・51)

椀状を呈する杯部をもつもの。『円盤充塡』によるもの(43)や小形のもの(51)などがある。43は杯部と脚柱部の境に刺突をもち，その下方に横位の沈線をもつ。このようにくびれ部付近に刺突を行うものが住居址1の短頸壺形土器にもみられる。但し，本例の刺突は上記例のように規則的な列構成をもたない。51は小形の高杯であるが，後期終末や庄内式に見られるような中実の脚



第83図　住居址2出土土器実測図・2



第84図　住居址2出土土器実測図・3

柱から裾部で急に開き裾径が口径を凌駕するものや，杯底部より直線的に開き裾径が大きいものとは違うと思われる。

・脚　柱　(45～50・52)

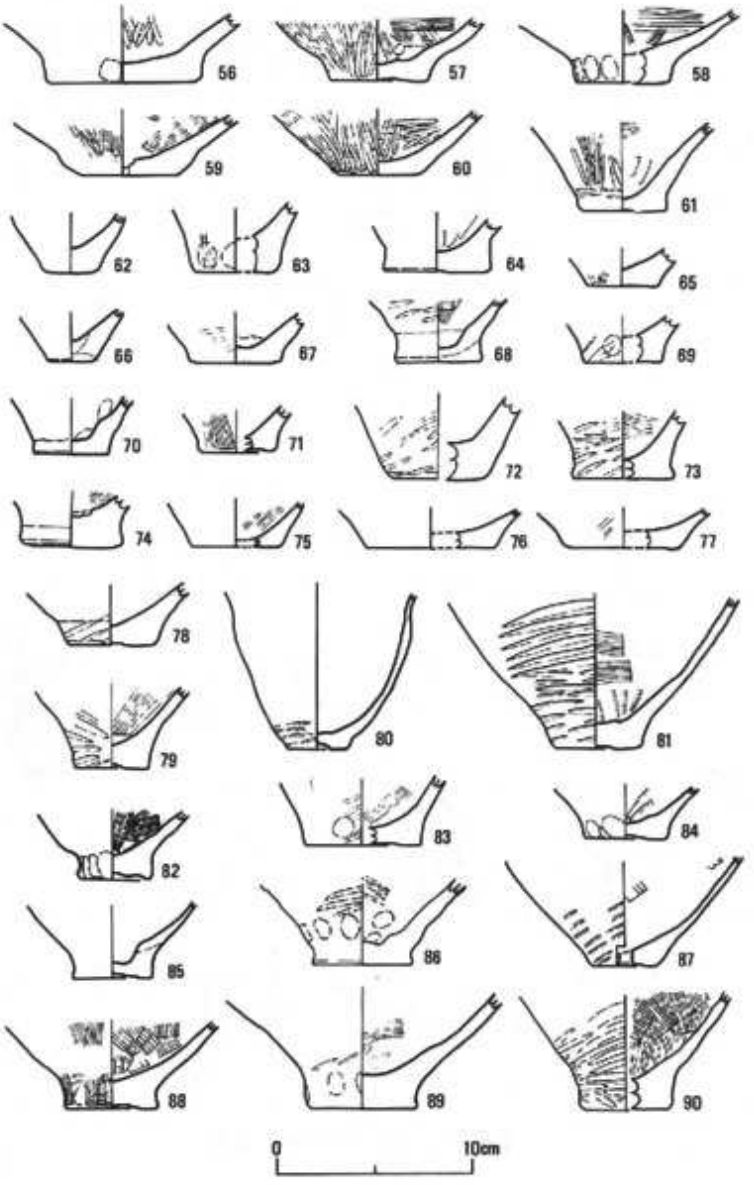
中空で柱状部をもつもの(47・52)，ゆるやかに開くもの(45・46)，脚柱に沈線をもつもの(48)がある。

・脚　台　(53～55)

ゆるやかに外反しながら開くもので台付土器の脚台と思われる53などがある。

・甑形土器　(87)

直線的に開く直口の鉢の底部を焼成前に棒状工具により穿孔する。

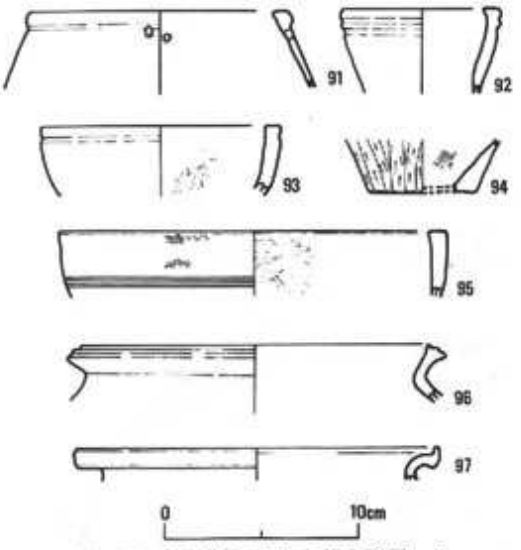


第85図　住居址2出土土器実測図・4

・底　部（56～79・81～90）

56～61・76・77・89は壷形土器の底部で，直線的に開くもの(59・60・76・77)，外反しながら体部に接続するもの(61・56～58・89)などがある。62・63・65・66・71・82・84・85・88は，鉢形土器の底部で小形のもの(62・66・71)，外面にタタキメを残すもの(88)，上げ底状のもの(82・84・85)，器壁の厚いもの(63・72)などがある。64・67・68～70・73～75・78・79・81・83・86・90は甕形土器の底部で，やや突出気味な平底(68・73・74・83・86)，ドーナツ底のもの(78・79・81)がある。

（緒方・中村）



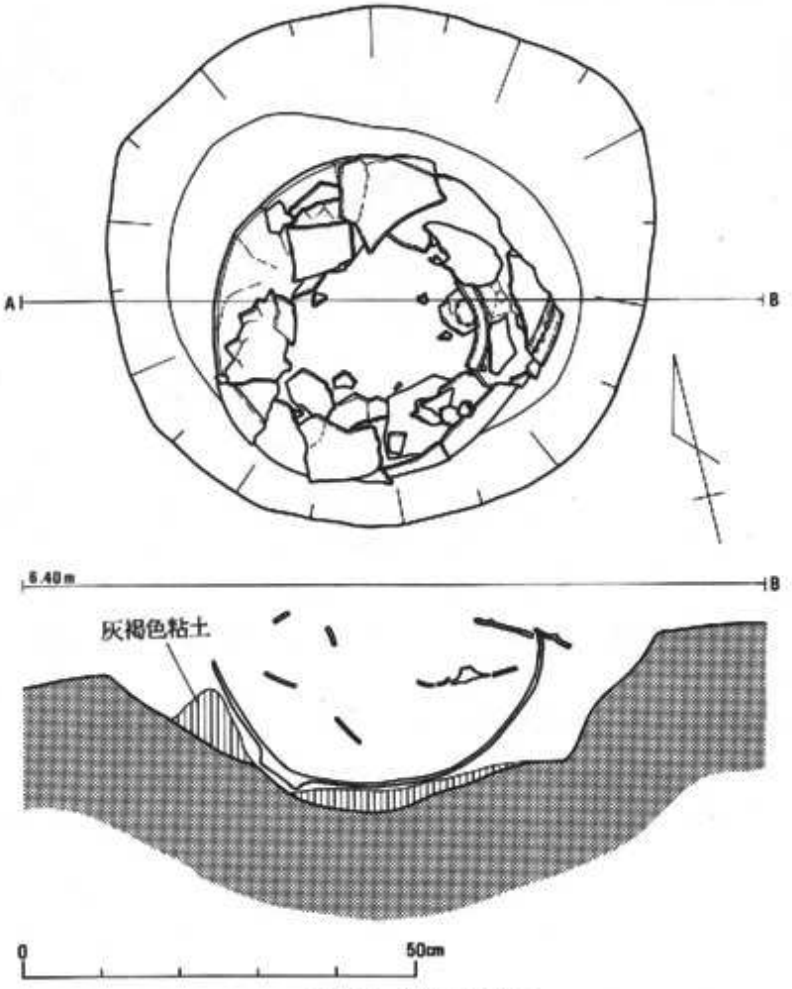
第86図　住居址2出土土器実測図・5

4）壺棺墓

a．遺構・遺物（第87・88図，図版第6）

A9区で検出した。墓壙は径70cm，深さ23.5cmの楕円形プランである。棺は小児用の接口式合口壺棺で，約35度の傾斜をもって埋置され，長軸を東方に向ける。底部には灰褐色粘土を巻き，固定していた。身の壺は口縁部付近で破損していたため，合口の状態の詳細は不明だが，底径5cmの壺形土器の上半部を打ち欠き，蓋として使用していたようである。身の壺は直立した頸部上端で強く外反して開き，更に外側に稜を作って屈曲し，外反する二重口縁部をもつ。口縁下方に波状文を巡らし，その下に2個1組の円形浮文を貼付する。また頸下部に刻目文をもつ断面台形の突帯がある。他の出土土器の色調・胎土とは共に異なる。

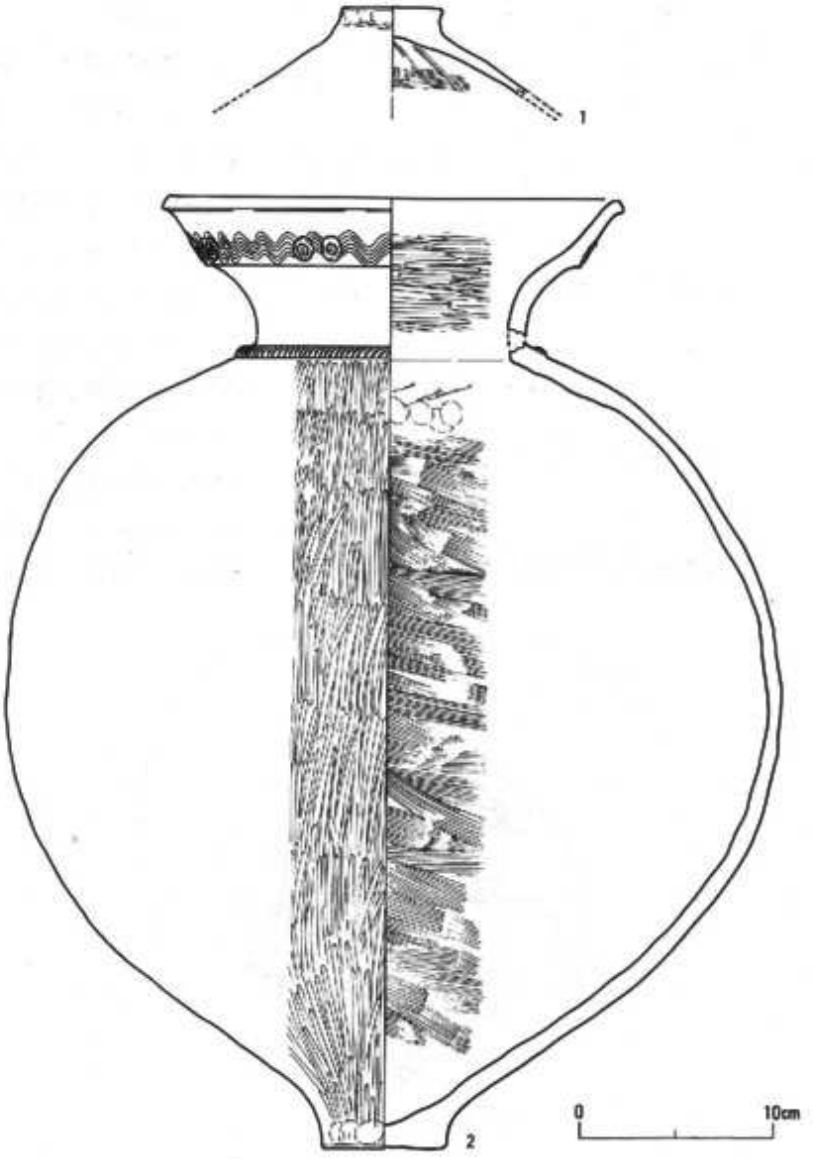
この二重口縁壺は，畿内弥生後期後半に新たに加わる器種である。本資料は，口縁部の外反度[13]（外傾指数87）で唐古遺跡45号竪穴下層（外傾指数89），田能遺跡第6Y調査区2溝（外傾指数81）出土品（福井編1982）など，後期後半古相資料の数値に近似する。また底部が突出気味になることも古い特徴を示す。ところが，体部は最大径部を中央にもち，強



第87図　壺棺墓実測図

い張り出しをする。これはやや新しい特徴である。さらに二重口縁壺で装飾を有するものは次の段階に属する紅葺山3号住居址出土品（原口1973）からである。また，口縁部装飾を同じくするもの（波状文＋円形浮文）に船橋遺跡第7トレンチ出土品（中西ほか1976）があり，より新相を示す。このように本資料は，古い要素を残しつつも新しい様相をもつ第五様式後半新相に属すると思われる。

（緒方・森下）



第88図　壺棺墓出土土器実測図

5）溝　8

a．遺　構

溝8は，A7区，C7・8区にわたって検出された南北に伸びる溝である。その方向は他の溝と同一で平行しており，微高地縁辺を巡る溝である。掘り込みは，褐色粘質土より灰黄色粘質土まで認められる。

規模は，全般的に幅70cm，深さ30cmで，断面形は逆台形を呈す。埋土は上位より灰色砂質土層，明灰色砂質土層の2層である。出土遺物は壺形土器が1点検出された。土器片は他に全く含まれず，中期後半の溝が数多くの土器を出土したことと比べて様相が異なる。　（森下）

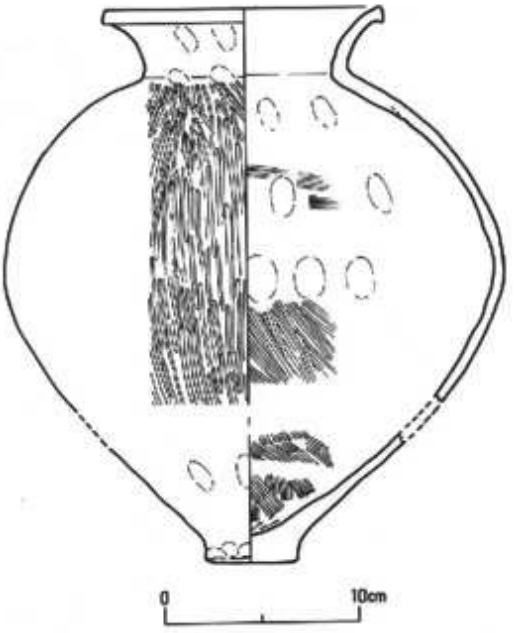
b．遺　物

◎土　器　（第89図）

・広口壺形土器B

ほぼ完形である。胴部が強く張り出すプロポーションで，最大径は胴部の中ほどにある。厚手

の底部はやや突出気味であるが，口縁部は全体的に小さく，体部から「く」の字状に屈曲する。これらの特徴は後期後半を示し，田能遺跡第6Y調査区第2溝(福井編1982)にみられるものより，口縁部が短い点でやや後出のものと考える。　（森下）



第89図　溝8出土土器実測図

6）土壙3（土壙墓）

a．遺　構（第90図，図版第7・8）

A9区に位置する長楕円形の土壙である。褐色粘質土中から，灰黄色粘質土まで掘り込む。掘り方検出当初，内側に長方形状のラインが確認されたことから，本来木棺墓であった可能性がある。

規模は長さ224cm，幅115cm，深さ51cmを測り，南西隅がやや張り出す。断面形は浅いU字状を呈し，埋土は4層に大別できる。上から茶褐色粘質土，炭化物を含む暗灰黒色粘質土，黄色粘質土，灰黄色粘質土である。

遺物は第五様式の土器と石錐が検出された。後者は混入したものと思われる。土器は壷形土器の出土を見ず，甕形土器3点，鉢形土器1点，高杯形土器2点である。特に検出状況から注目されるのは，南側中央に高杯，北東隅に甕，北西隅に鉢が二等辺三角形の各頂点にのるように配置され，その内側に破砕された高杯が出土していることである。この土壙を墓であるとすれば，埋葬儀礼の一端と捉えることができよう。　（緒方）

b．遺　物

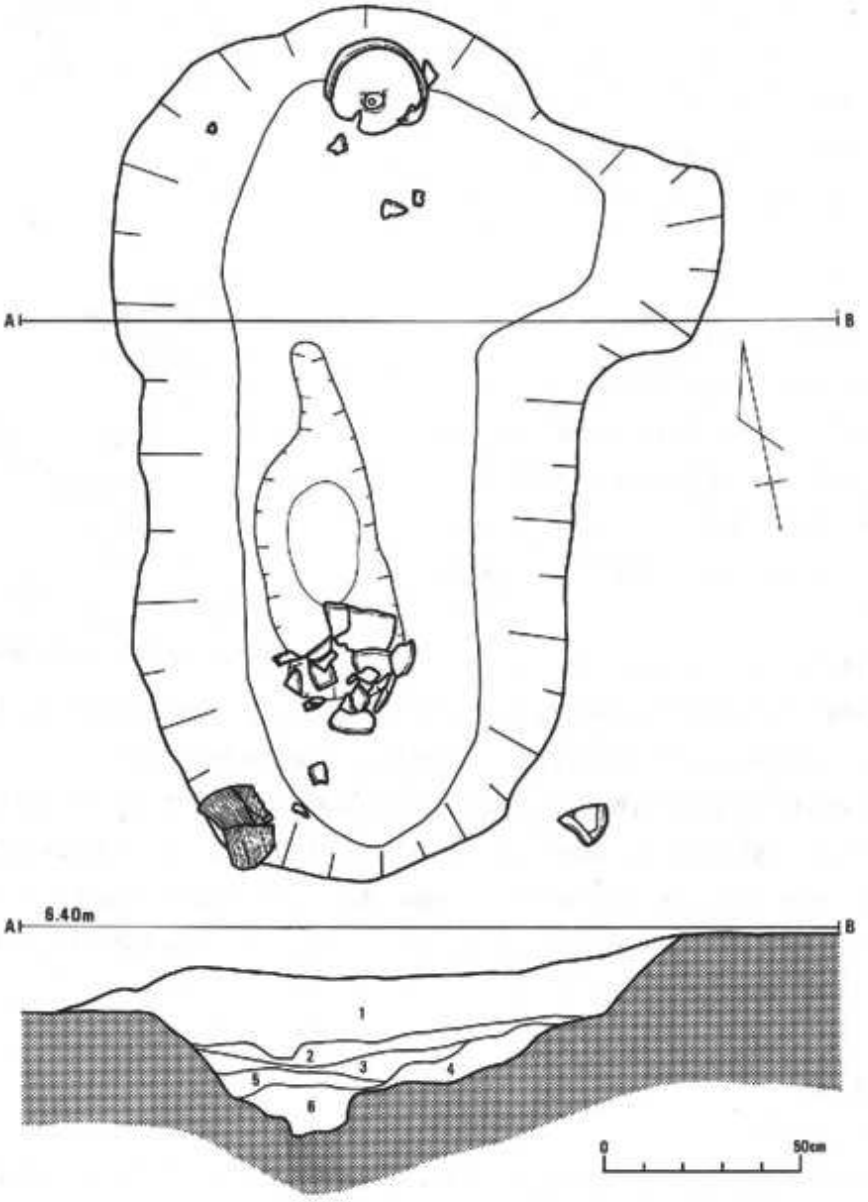
◎土　器（第91図）

土壙3からは甕形土器A，鉢形土器B，高杯形土器Aがそれぞれ3点，1点，2点出土した。全体でわずか6点であるがその構成比は50%，16.7%，33.3%となり，住居址1や同2に近似した数値を示す。個体の残存状態も比較的良好で，明確な一括資料と捉えてよい。以下器種毎に説明を加える。

・甕形土器A　（1～3）

甕三者はそのプロポーションと法量において，それぞれ異なった特徴をもつ。すなわち，1は体部径と口縁部径がほぼ等しい中形品であり，2は球胴化して，体部径が恐らく口縁部径を凌駕するであろう大形品，そして3は体部径が口縁部径よりも小さい小形品と，明確に区別ができる。

成形技法や調整手法に着目して，さらに観察すると，三者ともタタキを用いて成形するが，1と3は1.5条／cmという粗いものを使用するのに対し，2は3条／cmと，やや細かいタタキを使

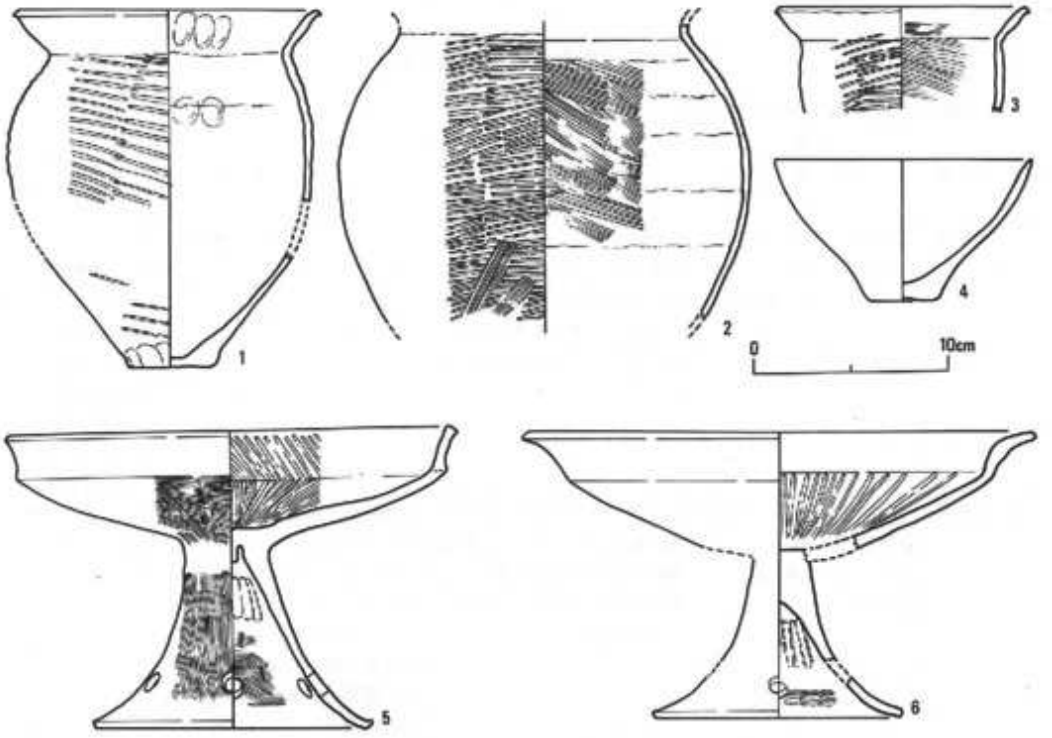


1：暗茶褐色砂質土　　4：灰黄色砂質土
2：暗灰色砂質土　　5：灰黄色粘質土
3：灰白色砂質土　　6：暗灰黄色砂質土

第90図　土壙3実測図

用する。口縁部の作出は，1と3が『口縁叩き出し手法』によって行われている。2は口縁部を欠損しており，不明であるが，内面に強い稜線がみえることから，一旦胴部を成形した後，改めて口縁部に粘土を付加して作出しているものと思われる。

2の胴部にみられる平行タタキは，方向が部分的に変化するところはあるものの，基本的には連続して施される。これはいわゆる『連続ラセン叩き手法』(都出1975)への過渡的形態とみることができる。胴部の球形化も同時進行しているものと考える。



第91図　土壙3出土土器実測図

以上，これらの甕三者は後期後半に特徴的な手法を用いる。また機能差を有すとみられる各サイズがセットで揃うことは留意すべき点である。

・鉢形土器B　（4）

後期後半に一般的な小形品である。特異な点は，成形から調整まで一環して丁寧な作りを呈していることである。小形の鉢形土器は従来北鳥池下層資料(大阪府立花園高校地歴部1970)などにみられることから後半の特徴と見られていた(佐原1968)が，四分遺跡ＳＤ666中層の資料(木下ほか1980)にも見ることができ，後期前半期まで遡り得るものと思われる。

・高杯形土器A　（5・6）

5は中空の脚部をもち，口縁部の外反度が小さいものである。本資料中では最も古い様相を示す。河内地方では，後期前半に盛行する形態である。外傾指数は97。

6は中実の脚部をもつもので，口縁部の外反度は5に比べて大きい。この形態のものは，後期前半に位置づけられる田能遺跡第6Ｙ調査区第2溝の資料(福井編1982)などに多くの類例がみられる。外傾指数は84。

以上，土壙3出土の土器は第五様式前半期と後半期の過渡的様相が強いものである。

（緒方・森下）

弥生後期の土器観察表

住居址1出土土器（第77～79図）

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
1	広口壺	口径31.9 残高 2.4	◎ 0.2～2.0 良好 暗茶褐色	口縁部は大きく外反して水平に開く。口縁端部は下方へ拡張。上端に刻目を施す。端面に3条の凹線文を施した後，竹管押圧円形浮文を貼付する。	外面調整ナデ。内面調整横位のヘラミガキ。	70 生駒西麓産の胎土。端面および内面赤色顔料付着有り。住居址2埋土中に同一個体有り。	
2	長頸壺	口径10.5 胴径15.3 底径 5.1 残高26.1	△ 0.5～3.0 良好 淡茶褐色	底部は外方に突出する凹み底。体部は球形に近く，短い筒状の頸部が接続する。口縁部は僅かに外反する。端部は丸く収める。	底部付近外面指頭押圧。体部外面調整縦位のヘラミガキ。下半にはタタキ（3条／cm）が残る。上半一部にハケメ有り。内面下半はくもの巣状原体圧痕が残る。上半は指頭押圧。頸部外面調整縦ハケ。内面接合痕が目立つ。口縁部内外面調整共ナデ。底部成形は輪合技法による。	78 外面スス付着	53－1
3	長頸壺	口径13.6 残高12.8	△ 0.5～2.0 やや軟 黄白色	やや斜上方に立ち上り，上半で開く口縁部。端部は丸く収める。	頸部外面調整指頭押圧の後，縦位のヘラミガキ。口縁部内外面調整共ナデ。	35	
4	短頸壺 B	口径 6.0 残高 4.1	△　～1.5 やや軟 淡白褐色	頸部でくびれた後，やや外反しながら立ち上がる口縁部。頸部には櫛状工具の先端による横位の刺突文（4列）を施す。部分的に配列は乱れている。口縁部には縦位の櫛描文（3条単位）を7組もつ。	内外面調整共ナデ。	67	55－10
5	壺 （肩部）	残径15.2 残高 2.2	△ 0.1～3.0 良好 淡赤褐色	体部は球形を呈し，強く張るものになると推定。肩部に凸帯を1条貼付ける。	外面調整縦ハケ。内面指頭押圧。	5	
6	壺 （胴部）	残径20.5 残高14.3	△ 0.1～3.0 良好 淡茶褐色	体部は扁球形。最大径を体部上半にもつ。	外面縦位のヘラミガキ。内面指頭押圧。一部ハケメが残る。	76 外面黒斑	
7	甕 A	口径11.8 残高 1.3	◎ 0.2～1.0 良好 暗茶褐色	口縁部のみ残存。口縁端部は面をもつ。	内外面調整共にナデ。	83 生駒西麓産の胎土	
8	甕 A	口径10.2 残高 2.1	△ 0.3～1.5 堅緻 淡白褐色	頸部で「く」の字に屈曲し，端部に面をもつ口縁部。	内外面調整共にナデ。	12	
9	甕 A	口径13.8 残高 2.9	△ 0.5～2.0 良好 淡橙白色	頸部よりゆるやかに外反して開く口縁部。端部は面をもつ。	内外面調整共にナデ。	80	
10	甕 A	口径16.6 残高 3.6	◎ 0.1～1.0 良好	頸部で「く」の字にくびれた後に，口縁部は外反しながら	口縁部外面調整は横ハケの後に，丁寧なナデ。指頭押圧痕	37	

			淡橙白色	開く。端部は面をもつ。	が残る。頸部付近より縦ハケ調整。内面は僅かにハケメが残る。		
11	甕 A	口径13.6 残高 2.3	◎　～0.5 良好 淡黄白色	外反して開く口縁部をもつと推定。	内外面調整共にナデ。	84	
12	甕 B	口径15.8 残高 2.9	◎　～0.5 堅緻 淡褐色	頸部で「く」の字にくびれた後に，口縁部はゆるやかに外反して開く。端部は面をもつ。	外面調整右上りのタタキ（3条／cm）。口縁部調整内外面共にナデ。口縁部は口縁叩き出し手法によって成形の後，内面に粘土を付加している。	59	
13	甕 B	口径14.3 残高 3.8	△ 0.5～2.0 やや軟 淡茶褐色	口縁部はゆるやかに頸部でくびれて開く。端部は波打っている。	内外面調整共に磨滅のため不明。口縁部成形は口縁叩き出し手法による。	41 外面にススの付着及び剥痕有。14と同一個体の可能性	
14	甕 B	口径13.6 残高 5.1	△ 0.2～2.0 良好 淡白褐色	頸部でゆるやかにくびれた後，口縁部は短く外反する。端部は波打っている。	口縁部外面ナデ調整。全体的に磨滅が激しい。口縁部成形は口縁叩き出し手法による。	40 外面ススの付着。13と同一個体の可能性	
15	甕 A	口径14.5 胴径 7.8 底径 4.6 器高19.4	○ 0.5～2.0 良好 灰褐色	底部は平底。体部は腹部のあまり張らない長卵形で，最大径を上位に有する。口縁部は頸部で短く外反しながら開く。口縁端部下方へやや突出する。端面には刻目を，頸部よりやや下ったところに刻目を施す。20や21の甕に比べて器壁は厚い。	体部外面下半調整縦位のヘラケズリ。体部外面上半調整縦位の板ナデ。内面調整斜方向の板ナデ及びハケ。	77 内外面共にススの付着	53－5
16	甕 A	口径15.1 残高 5.0	◎ 0.2～2.0 堅緻 淡灰黒褐色	口縁部は頸部で「く」の字に屈曲して開く。外面は強いナデのため口縁下端がやや突出する。端面には凹線文状のくぼみをもつ。	体部外面は右上りのタタキ（2条／cm）調整の後，斜方向のハケ。口縁部内外面はナデ調整を行う。	48	
17	甕 A	口径11.4 胴径13.0 残高 7.9	○ 1.0～2.0 堅緻 淡灰褐色	体部は丸味をもつ。頸部でゆるやかにくびれた後に，やや斜上方に立ち上がり開く口縁部。端部は面をもつ。	体部外面は右上りのタタキ（2条／cm）調整を行う。口縁部内外面共にナデ調整。	28 外面にススの付着	55－1
18	甕 B	口径11.0 胴径10.4 底径 4.3 器高 9.1	△ 0.3～3.0 良好 淡茶褐色	底部は安定したドーナツ底。体部は丈の低い球形を呈する。口縁部は頸部で鋭くくびれた後，短く外方に開く。	体部外面調整磨滅が激しいが，底部付近に斜方向のハケが，僅かに残る。体部内面調整指ナデ。口縁部調整内外面共にナデ。底部成形は輪台技法による。口縁部成形は口縁叩き出し手法によるものと思われる。	27 内外面共に僅さにススの付着	55－2

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
19	甕 A	口径14.0 胴径18.7 残高17.5	○　～0.5 良好 灰白色	体部は丸味をもつ無花果形で最大径をやや上位にもつものと推定。口縁部は短く外反して水平に開く。端面は丁寧なナデにより下端が下方に突出する。	体部は分割成形している。外面調整は右上り中心のタタキ(2.5条／cm)の後，縦ハケ。内面は横ハケ及び指頭押圧。口縁部調整内外面共にナデ。内面に粘土を充塡している。	30 外面に黒斑	
20	甕 A	口径12.1 胴径19.3 底径 5.1 器高24.8	○ 0.5～3.0 良好 淡褐色	底部は平底。体部は無花果形を呈し，最大径を中位にもつ。口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後，外反して開く。端部は面をもち，下端はやや突出する。	体部は分割成形している。体部外面下半は右上りのタタキ(3条／cm)の後　左上りのタタキ(3条／cm)調整を行う。内面調整は横ハケの後，縦ハケ。体部上半は右上りのタタキ(2条／cm)の後，斜方向のハケ調整。内面斜方向中心のヘラケズリ調整。口縁部内外面共にナデ。少なくとも細太二種類のタタキ板の使用が認められる。	2 内外面共 スス付着	54- 3
21	甕 A	口径18.2 胴径25.5 底径 4.4 器高30.0	◎ 0.5～1.0 良好 淡褐色	底部は小さな平底。体部は肩の強く張り出す長胴形で最大径を上位に有する。口縁部は頸部でゆるやかにくびれた後，僅かに立ち上がり外反して開く。端部は面をもつ。	体部下半は右上りのタタキ(2条／cm)調整。内面調整は斜方向のハケ。体部上半外面調整は右上りのタタキの後，縦ハケ。内面は縦ハケ。頸部付近は横ハケ調整。分割成形を行っている。	内外面共 スス付着	54- 1
22	甕 A	口径16.8 胴径24.4 残高27.1	◎ 0.5～1.0 良好 淡褐色	体部は無花果形を呈する。口縁部は頸部でゆるやかにくびれて上方に立ち上り，端部近くで続く外反する。端部は面をもつ。	体部は分割成形している。体部外面は右上りのタタキ(2条／cm)の後，縦ハケ調整。内面は縦ハケ。口縁部内外面共にナデ調整。	81 内外面スス 付着	54- 2
23	鉢 A	口径27.3 胴径25.0 残高12.3	◎ 0.2～1.0 堅緻 暗紫褐色	体部は扁平で，最大径をやや上位にもつ。口縁部は頸部でゆるやかに外反して開く。	体部内外面調整共に縦位中心のヘラミガキ。口縁内外面調整共に強いナデを行う。	81 内外面スス 付着	
24	鉢	口径13.4 残高 2.7	◎ 0.5～1.0 良好 淡灰白色	体部はゆるやかに内傾する。頸部は1条の浅い凹線文。口縁端部は面をもつ。	内外面調整共にナデ。	69	
25	高　杯 A	口径20.0 残高 3.4	○ 0.5～2.0 やや軟 淡黄白色	口縁部で屈曲して外方に開くものと推定。	内外面調整共に磨滅のため不明。	75 外面に黒斑	
26	高　杯 A	口径23.4 残高 5.4	△ 0.5～2.0 やや軟 淡黄白色	口縁部はやや上方に立ち上った後，端部近くで外反して開く。	内外面調整共に横位のヘラミガキ。	34	
27	高　杯 A	残径20.0 残高 3.1	◎ 0.5～1.5 堅緻 淡黄白色	外反して開く口縁部をもつものと推定。	内外面調整共に縦位のヘラミガキ。	7	
28	高　杯 A	口径20.3 残高 2.5	◎ 0.2～2.0 堅緻 明褐色	口縁部は外反して開く。	内面調整縦ハケ及びヘラミガキ。外面調整は斜方向中心のヘラミガキ。	8	
29	脚　柱	頸径 4.0 残高 8.9	◎ 0.3～2.5 良好	脚柱部は中空で，その下に外反して開く裾部が接続する。	外面調整磨滅のため不明。内面調整ナデ。	68	

			淡黄白色	裾部に円孔を4個配置。			
30	脚柱	頸径 3.3 残高 6.3	○ 0.5～3.0 良好 淡黄白色	中空で明瞭な脚柱部をもたずに除々に開き，裾部で外反するものと推定。	脚柱部はシボリ技法。杯部との接合方式は円盤充塡技法。外面調整は縦位のヘラミガキ。内面調整ナデ。	60	
31	脚台	裾径16.0 残高 2.8	◎ 0.2～2.0 堅緻 黒褐色	外反して開く裾部。裾部に円孔を配置。現存2個。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面調整縦位のヘラミガキの後に，強い横位のナデ。	55	
32	脚台	裾径11.3 残高 2.7	◎ 0.2～2.0 やや軟 淡黄白色	外反して開く裾部。裾部に円孔を配置。現存5個。	内外面調整共にナデ。	71	
33	脚台	裾径11.6 残高 2.3	◎ 0.5～2.0 良好 淡黄白色	外反して開く裾部。裾端部は指によるつまみ出しを行う。	内外面共に磨滅のため不明。	49	
34	脚台	裾径11.2 残高 3.9	◎ 0.5～2.0 良好 淡茶褐色	斜に開く裾部で，柱状の脚に接続するものと推定。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面調整横位のヘラケズリ。	23	
35	脚台	裾径15.0 残高 2.9	◎ ～0.5 良好 淡白色	斜に開く裾部で，端部を斜上方に拡張。	内外面共に磨滅のため不明。	64	
36	脚台	裾径13.2 残高 7.9	○ 0.2～2.0 良好 淡橙色	ゆるやかに開く脚部。脚部下位に2条の浅い沈線文と1条の凹線文をもつ。脚部上位にヘラ状工具による刺突文。	外面脚部下位は横ナデ調整。中位は縦ハケ調整。内面調整横ナデ調整。	89	
37	底部	底径 5.8 残高 3.4	△ 0.5～1.0 良好 黄白色	底部は突出する平底で，体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ。外面底部付近指頭押圧。内面調整ナデ。	22	
38	底部	底径 4.2 残高 3.8	△ 0.5～2.0 堅緻 暗褐色	いわゆるドーナツ底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ(2.5条／cm)。内面調整指ナデ。底部成形は輪台技法による。	33	
39	底部	底径 4.8 残高 5.1	◎ ～0.5 堅緻 淡茶褐色	突出せず直線的に開く薄手の平底。	外面調整右上りのタタキ(2.5条／cm)及び指頭押圧。内面調整指ナデ。底面ケズリ。	19 ススの付着	
40	底部	底径 5.6 残高 5.6	◎ ～0.5 堅緻 暗褐色	底部は突出する平底。体部にはやや内傾気味に接続する。	外面調整右上りのタタキ(2.5条／cm)。底部付近指頭押圧内面調整斜方向中心のハケ。	6	
41	底部	底径 5.4 残高 6.7	△ 0.5～2.0 やや軟	底部は突出せず直線的に開く平底。	外面調整右上りのタタキ(2.5条／cm)。内面調整横ハケ。	32	
42	底部	底径 3.8 残高 1.7	△ 0.5～2.0 やや軟 暗褐色	底部は突出する平底。	内外面調整共に磨滅のため不明。	43	
43	底部	底径 3.4 残高 2.0	◎ 0.2～0.4 良好 明黄褐色	底部は平底で体部には外反しながら接続する。	外面調整磨滅のため不明。内面調整ハケ及び指頭押圧。	66	
44	底部	底径 3.4 残高 1.8	◎ 0.2～1.0 良好 淡黄褐色	底部は平底で体部には外反しながら接続する。	外面調整磨滅のため不明。内面調整斜方向のハケ。	65	
45	底部	底径 9.8 残高 2.2	△ 0.5～1.0 やや軟 黄白色	平底になると推定。体部には外反しながら接続する。	内外面調整共に磨滅のため不明。	87	
46	底部	底径 0.2 残高 2.7	◎ ～0.5 良好 暗黒褐色	平底になると推定。体部には外反しながら接続する。	内外面調整縦ハケ。内面調整斜方向のヘラミガキ。	88	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
47	底部	底径 6.2 残高 2.7	◎　～0.5 やや軟 淡褐色	底部は平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整縦ハケ。内面調整縦位中心のヘラミガキ。底部成形は輪台技法による。	31	
48	底部	底径 8.3 残高 9.8	△ 0.1～2.0 堅緻 淡白茶色	大型の平底になると推定。体部には直線的に開きながら接続する。	外面調整ハケの後，縦位のヘラミガキ。内面調整縦中心のヘラケズリ。一部に板ナデ有り。	4	
49	底部	底径 4.4 残高 3.4	◎ 0.2～2.0 良好 淡黒褐色	凹み底。体部には内湾しながら接続する。	外面調整ナデ。底部付近指頭押圧。内面調整縦ハケ。	45	
50	底部	底径 6.6 残高 3.2	△ 0.5～2.0 やや軟 黒灰色	平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整ヘラケズリ。内面調整磨滅のため不明。	82	
51	底部	底径 4.4 残高 1.4	◎　～0.5 良好 黒灰色	平底。体部には外反して接続する。	外面調整指頭押圧。内面磨滅のため不明。	62	
52	底部	底径 3.2 残高 4.1	◎　～0.5 良好 淡灰色	平底。体部には外反して接続する。	外面調整指頭押圧。内面調整ナデ。	8	
53	底部	底径 3.8 残高 8.7	△ 0.5～2.0 やや軟 淡黄白色	突出する不安定な平底。底面に直径7mm程の粘土を貼付る。体部には直線的に開き接続する。	内外面調整共に指ナデ及び指頭押圧。	3	
拓	壺胴部	残径 — 残高	△ 0.2～2.0 良好 淡橙色	胴部に櫛描直線文（7条単位）4段及び刻目凸帯文1条。	内面調整横位のヘラミガキ。	85	

住居址2出土土器（第82～86図）

1	広口壺 A	口径26.4 残高 3.0	◎ 0.2～2.0 良好 暗茶褐色	口縁部は大きく外反して水平に開く。口縁端部は下方へ拡張。端面に凹線文（3条）の後，円形浮文貼付する。	内外面調整共に縦位のヘラミガキ。	20 生駒西麓産の胎土	
2	広口壺 A	口径20.4 残高 1.6	△ 0.2～2.0 やや軟 淡黄白色	口縁部は大きく外反して水平に開く。口縁端部は下方に拡張。口縁部内面に櫛描波状文を施す。	外面調整は磨滅のため不明。内面調整ヘラミガキであるが磨滅が激しいため詳細不明。	9 一括投棄	
3	広口壺 B	口径16.4 残高 7.7	良 0.5～2.0 やや軟 淡橙色	口縁部は頸部で直立した後，外反して水平に開く。	内外面調整共にヘラミガキ。	60 一括投棄	
4	広口壺 B	口径14.4 腹径22.7 底径 5.2 器高24.9	○ 0.5～1.0 良好 淡茶褐色	底部はドーナツ底。体部は扁球形。頸部でくびれた後，口縁部で外反して開く。体部最大径を中位にもつ。	体部外面は斜方向中心のハケ調整の後，ヘラミガキ。内面は斜方向中心のハケ調整。口縁部内外面調整共にナデ。底部成形は輪台技法による。	59 外面に黒斑 一括投棄	53－3
5	短頸壺 A	口径 — 残高 5.3	△ 0.2～2.0 軟 淡赤褐色	口縁部は直線的に短く外方へ開く。口縁部に浅い2条の凹線文。	内外面調整共に磨滅のため不明。	101	
6	広口壺 B	口径12.0 残高 3.5	○ 0.5～1.5 堅緻 淡赤褐色	口縁部は頸部で直立した後，外反して開く。口縁端部は上方に突出。	内外面調整共に磨滅のため詳細不明。	87	

7	壺肩部	残径17.0 残高 2.3	○ 0.5～2.0 堅緻 灰褐色	肩の張る扁球形の体部をもつものと推定。	内外面調整共ナデ。内面指頭押圧。	88	
8	広口壺 B	口径13.8 残高 1.9	○ 0.5～1.5 良好 淡赤褐色	口縁部で外反して開くものと推定。	外面調整ナデ。内面調整ヘラミガキ。	127	
9	広口壺 B	口径15.0 残高 6.1	○ 0.3～2.0 良好 灰白色	口縁部と頸部の境は不明瞭で，ゆるやかに外反して開く。	内外面調整共にナデ及び指頭押圧。	10 一括投棄	
10	壺肩部	残径19.1 残高 3.4	○　～0.5 良好 灰白色	肩のあまり張らない扁球形の体部をもつと推定。肩部に軽い刺突文有り。	外面調整は横ハケ及び指頭押圧。内面調整横ハケ。	46 外面に黒斑	
11	壺胴部	残径16.9 残高 9.0	◎ 0.2～2.0 良好 淡赤褐色	体部は扁球形になると推定。	外面調整は磨滅が激しいが，僅かにハケ有り。内面調整磨滅が激しい。	92 一括投棄	
12	壺胴部	残径26.9 残高23.2	○ 0.2～2.0 やや軟 淡赤褐色	体部は肩の張らない扁球形。	外面調整磨滅のため詳細は不明であるが，僅かにヘラミガキが残る。内面調整横ハケ。	2 一括投棄	
13	壺胴部	残径24.4 残高10.6	◎　～0.5 良好 淡褐色	扁球形の体部になると推定。	外面調整ヘラミガキ。内面調整斜方向中心のハケ。	84 外面に黒斑 一括投棄	
14	壺底部	底径 4.8 腹径20.8 残高10.9	◎ 0.2～2.0 やや軟 淡橙色	底部は平底。体部は最大径でやや強くくびれる。	外面調整は縦位のヘラミガキ。内面調整はナデ。	19 外面に黒斑 一括投棄	
15	広口壺 B	口径14.6 腹径24.6 底径 5.0 器高22.2	◎ 0.5～2.0 堅緻 淡赤褐色	底部は平底。体部は中位に最大径をもつ扁平な算盤玉形。口縁部は頸部で直立した後，外反して開く。	体部外面調整は右上り（3条／cm）のタタキの後，横位のヘラミガキ。内面調整はハケ。口縁部内外面調整共にナデ。	1 一括投棄	53－4
16	甕	口径19.2 残高 3.1	○ 0.5～2.0 堅緻 淡茶褐色	口縁部は外反して開くものと推定。端部は面をもつ。	内外面共にナデ調整。	12 一括投棄	
17	甕 A	口径11.9 残高 2.0	◎　～0.5 良好 淡灰白色	口縁部は外反して開くものと推定。端部は丸く収める。	内外面調整共に磨滅のため不明。	133	
18	甕 A	口径18.2 残高 4.3	◎ 0.2～2.0 良好 赤褐色	口縁部は頸部でくびれた後，外反して開く。	内外面調整共に磨滅のため不明。	70 一括投棄	
19	甕 A	口径16.9 残高 2.1	◎　～0.5 堅緻 黄褐色	口縁部は外反して開くものと推定。	内外面調整共にナデ。	31	
20	甕 A	口径　— 残高 2.5	○ 0.5～2.0 堅緻 淡黄褐色	口縁部は頸部で強くくびれた後，外反して開く。端部は欠損。	内外面調整共にナデ。	30	
21	甕 A	口径15.8 残高 4.7	○ 0.5～2.0 良好 淡赤褐色	口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後，外反して開く。	体部外面調整は右上りのタタキ（2条／cm）。体部内面調整斜方向のハケ。口縁部外面調整ナデ。口縁部内面調整横ハケ。	3 一括投棄	
22	甕 A	口径17.4 残高 7.8	○ 0.5～2.0 良好 赤褐色	口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後，外反して開く。	体部外面調整は右上りのタタキ（2条／cm）。体部内面調整斜方向のハケ。口縁部外面調整ナデ。口縁部内外面共にナデ調整。	5 一括投棄	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
23	甕 A	口径18.1 残高 6.3	○ 0.5～1.5 良好 淡赤褐色	体部は大きく張り出すものと推定。口縁部は頸部で強く「く」の字にくびれた後，外反して開く。	体部外面調整は右上りのタタキ(3条／cm)。体部内面調整は斜方向のハケ。口縁部内外面共にナデ。	7 一括投棄	
24	甕 A	口径12.4 残高17.4	△ 0.5～2.5 軟 明茶褐色	体部は無花果形を呈すると推定。口縁部は頸部で強くくびれた後に，短く外反する。	体部外面調整右上りのタタキ(3条／cm)。体部内面調整斜方向のハケ。口縁部調整内外面共にナデ。	95 一括投棄	
25	甕胴部	残径27.2 残高13.8	○ 0.2～2.0 やや軟 淡灰白色	体部は丸みをもった無花果形になると推定。	外面調整右上りのタタキ(3条／cm)。内面調整横ハケ及び指頭押圧。	78 外面にススの付着 一括投棄	
26	甕胴部	残径17.0 残高10.1	◎ ～0.5 堅緻 暗茶褐色	体部は無花果形になると推定 。	外面調整右上りのタタキ(3条／cm。内面調整ナデ。	83 一括投棄	
27	甕 C	口径19.3 残高 3.8	◎ 0.2～1.0 堅緻 淡褐色	口縁部は外反して開いた後，口唇部の立ち上る受口状口縁である。器壁は厚い。	内面調整ナデ。	23 内面に黒斑	
28	甕 C	口径 — 残高 7.4	○ 0.5～2.0 やや軟 明褐色	体部の張りは弱い。頸部でくびれた後，短く外反し口唇部で立ち上がる受口状口縁である。	内外面調整共に磨滅のため不明。	11 一括投棄	
29	甕 C	口径18.0 腹径23.1 残径23.1	○ 0.2～1.0 やや軟 淡橙色	体部は丸みをもった無花果形。口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後，外反して立ち上がる口唇部をもつ受口状口縁である。	外面調整右上りのタタキ(3条／cm)。体部内面調整磨滅のため不明であるが，指頭押圧が残る。口縁部内外面調整共にナデ。	89 外面にスス付着 一括投棄	
30	甕 C	口径15.6 残高 3.3	○ 0.5～2.0 軟 暗褐色	口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後，外反してやや立ち上がる受口状口縁である。口縁端部は波打っている。	体部外面調整は右上りのタタキ(2条／cm)。口縁部内外面調整共ナデ。	75 一括投棄 外面にスス付着	
31	底部	底径 4.6 腹径16.9 残高16.6	○ 0.2～1.0 良好 濃茶褐色	体部外面調整右上りのタタキ(2条／cm)。内面ナデ。	底部は凹凸のある平底。体部は長卵形を呈す。	94 内外面共にスス付着 一括投棄	53- 6
32	鉢 A	口径33.6 残高 2.9	◎ 0.5～2.0 良好 赤褐色	口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後，外反して開くものと推定。	外面調整ナデ。内面調整横位のヘラミガキ。	96	
33	鉢 B	口径12.0 残高 6.0	○ 0.2～1.0 良好 淡橙色	半球形を呈し，最大径をもつもので比較的小形である。	外面調整横ハケ。内面調整ナデ。口縁部内外面共にナデ調整。	135	
34	鉢 A	口径24.2 残高 7.7	○ 0.5～2.0 良好 赤褐色	体部は半球形を呈す。口縁部は頸部でゆるやかにくびれた後に，外反して開く。	体部外面調整縦ハケの後，横位のヘラミガキ。内面調整横位中心のヘラミガキ。	57	
35	鉢 A	口径23.8 残高 6.3	○ 0.2～2.0 軟 淡黄褐色	体部は浅い半球形。口縁部は短くくびれて開く。	内外面調整共に剥離が激しいため不明。	114	
36	鉢 A	口径18.1 残高 8.9	○ 0.5～1.0 堅緻 淡灰褐色	体部は半球形を呈し，口縁部は短く外反する。口縁部調整が不十分なため器壁の厚さは	外面調整縦ハケ。内面調整横ハケ。	80 一括投棄	55- 7

				一定でない。			
37	鉢 B	口径12.1 底径 3.8 器高 7.2	○ 0.2～1.0 良好 淡灰褐色	直口の小形鉢。最大径を口縁部にもつ。底部は凹み底。体部はやや丸味をもち，口縁部で僅かに内湾する。口縁端部は調整不十分なため波打っている。	外面調整剥離のため不明。内面調整縦位のヘラミガキ（単位不明瞭）。底部成形は輪台技法による。	17	55- 6
38	鉢 B	口径11.2 底径 3.9 器高 5.9	◎ 0.2～1.0 堅緻 淡白褐色	直口の小形鉢。底部は凹み底。体部は内湾しながら開く。口縁部は波打っている。	外面調整剥離のため詳細不明。内面調整斜方向中心の板ナデ。底部成形は輪台技法による。	18 外面に黒斑	55- 5
39	高 杯 A	口径21.3 残高 2.4	◎ ～0.5 良好 淡黄白色	口縁部は短く外反して開く。	内外面調整共に縦位のヘラミガキ。	124 外面に黒斑	
40	高 杯 A	頸径 3.6 残高 6.9	◎ 0.2～1.0 堅緻 淡灰白色	杯底部は浅い。脚部は中空。	杯部外面調整指頭押圧の後，縦位のヘラミガキ。内面調整横ハケの後，縦位のヘラミガキ。	16 Pit 1より出土	
41	高 杯 A	口径12.2 残高 2.7	○ 0.2～1.0 良好 淡黄白色	小形高杯。口縁部は外反して開く。	外面調整横ハケの後，縦位のヘラミガキ。内面調整磨滅のため不明。	115	
42	高 杯 B	口径13.8 残高 3.1	◎ ～0.5 堅緻 淡茶褐色	小形高杯。口縁部は内湾しながら立ち上がる。	内外面調整共に縦位のヘラミガキ。脚部と杯部の接合は別体式。	119	
43	高 杯 B	口径14.3 頸径 2.4 残高10.9	◎ 0.1～1.0 堅緻 濃灰褐色	杯部は内湾しながら立ち上がる椀形。脚柱部は中空で外反しながら開く裾部が接続する。杯部と脚部の境にヘラ状工具の先端による刺突及び横位の刺突がみられる。	内外面調整共に縦位のヘラミガキ。口縁部内外面調整のみナデ。脚柱部と杯部の接合は円盤充填技法による。脚柱部はシボリ技法。	63 一括投棄	55- 9
44	高 杯 B	頸径 2.8 残高 7.2	◎ ～0.5 良好 淡白褐色	杯部は内湾しながら立ち上がる椀形。脚柱部は中空で外反しながら開く裾部が接続する。裾部上位に円孔(外面→内面穿孔)。単位不明。	内外面調整共に磨滅のため不明。	76 一括投棄	
45	脚 柱	頸径 3.2 残高 6.6	△ 0.1～2.0 堅緻 淡黄白色	中空の脚柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔（外面→内面穿孔）。4単位と推定。	杯部内面調整ヘラミガキ。脚柱部外面縦位のヘラミガキ。内面調整ナデ。脚柱部はシボリ技法。	29	
46	脚 柱	頸径 2.4 残高 5.4	◎ ～0.5 堅緻 淡黄白色	中空の脚部に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔(外面→内面穿孔)。4単位と推定。	外面調整縦位のヘラミガキ。杯部と脚部境にハケ。内面裾部ヘラミガキ。脚部はシボリ技法。	29	
47	脚 柱	頸径 3.5 残高 6.2	◎ ～0.5 良好 淡灰白色	中空の脚部。外反して開く裾部が接続すると推定。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面調整ナデ。脚部はシボリ技法。	132	
48	脚 柱	頸径 4.1 残高 3.6	◎ ～0.5 堅緻 淡黄白色	中空で太い脚柱部。外面に2条の明瞭な沈線文と1条の不明瞭な沈線文。下部は2条＋α沈線文。	脚部外面ハケの後，縦位のヘラミガキ調整。杯部内面調整縦位のヘラミガキ。脚部はシボリ技法。	24	
49	脚 柱	頸径 3.4 残高 3.3	○ ～0.5 良好 淡黄白色	小形高杯。中空の脚部で外反して開く裾部が接続すると推定。	外面調整ヘラミガキ。内面調整ナデ。	50	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
50	脚柱	頸径 3.8 残高 3.1	◎　～0.5 軟 淡灰褐色	小形高杯。脚部はなめらかに外反しながら開くものと推定。	外面調整磨滅のため不明。内面僅かにハケが残る。	28	
51	高杯 B	頸径 2.0 残高 4.5	○ 0.2～1.0 良好 淡黄白色	小形高杯。杯部は浅い半球形を呈す。脚部は柱部をもたずに直接外反して開く。	杯部外面縦位のヘラミガキ。内面は剥離のため不明。脚部内外面調整縦位中心のヘラミガキ。	61	
52	脚柱	残径 2.5 残高 5.5	◎ 0.2～1.0 良好 淡赤褐色	中空の脚柱部に外反して開く裾部が接続すると推定。	口径調整は縦位のヘラミガキ。脚柱部はシボリ技法。	79 一括投棄	
53	脚台	脚台11.6 残高 4.8	△ 0.1～1.0 堅緻 淡橙色	外反して開く脚部。裾端部は指によりつまみ出されている。端部は面をもつ。	外面調整ハケの後，ナデ。内面調整板ナデ。裾部内外面指ナデ。	90	
54	脚台	裾径12.6 残高 1.9	◎　～0.5 良好 淡茶褐色	外反して開く裾部。	内外面調整共にナデ。	125	
55	脚台	裾径11.4 残高 1.8	◎　～0.5 良好 黄白色	外反して開く裾部。	外面調整縦ハケ。内面調整ナデ。	126	
56	底部	底径 7.5 残高 2.9	◎　～0.5 良好 淡赤褐色	安定した平底。体部には外反しながら接続する。	内面調整は磨滅のため不明。内面調整縦位のヘラミガキ。	4 一括投棄	
57	底部	底径 5.2 残高 2.9	○ 0.2～1.0 良好 淡赤褐色	中央で少し凹む平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面調整横位中心のハケ。	77 一括投棄	
58	底部	底径 4.8 残高 3.3	△ 0.2～2.5 良好 黄白色	底部は平底。体部には大きく開いて接続する。	外面調整指頭押圧。内面調整横ハケ。	129	
59	底部	底径 4.7 残高 2.7	○ 0.2～2.0 良好 赤褐色	底部は平底。体部には直線的に開いて接続する。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面調整斜方向中心のハケ。	32	
60	底部	底径 3.9 残高 4.7	◎　～0.5 堅緻 赤褐色	安定した平底。体部には直線的に開いて接続する。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面調整横位中心ヘラミガキ。	22	
61	底部	底径 4.1 残高 4.1	◎　～0.5 良好 黄白色	やや突出した平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整タタキの後，縦位のヘラミガキ。内面調整横ハケ。底部成形は輪台技法による。	34 外面に黒斑	
62	底部	底径 2.7 残高 2.9	◎　～0.5 やや軟 灰白色	比較的小形の平底。体部には内湾しながら接続する。	内外面調整共にナデ。	40	
63	底部	底径 4.2 残高 3.2	△ 0.2～1.0 堅緻 暗褐色	平底になると推定。器壁は厚い。	外面調整指頭押圧及び縦ハケ，内面調整磨滅のため不明。	39	
64	底部	底径 5.2 残高 2.3	○　～0.5 良好 淡灰褐色	中心部で僅かに凹む平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整剥離のため不明。内面調整横ハケ。	21	
65	底部	底径 3.6 残高 1.3	△ 0.5～2.0 堅緻 淡褐色	平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整磨滅のため詳細不明であるが，縦ハケ残る。内面調整不明。	48	

66	底　部	底径 1.9 残高 2.4	◎　～0.5 堅緻 灰褐色	小形の平底。直線的に開く。	外面調整共にナデ。	47	
67	底　部	底径 3.8 残高 2.0	△ 0.3～2.5 堅緻 褐色	安定した平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整タタキ。内面調整剥離のため不明。	36 スス付着	
68	底　部	底径 4.1 残高 3.1	△ 0.5～3.0 良好 黄白色	中央で少し凹む平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整タタキ（2＋α条／cm）。内面調整縦ハケ。底部成形は輪台技法による。	44	
69	底　部	底径 3.8 残高 1.9	△ 0.5～2.5 堅緻 淡褐色	平底になると推定。体部には外反しながら接続する。器壁は厚い。	外面調整右上りのタタキ（3条／cm）及び指頭押圧。内面調整剥離のため不明。	49	
70	底　部	底径 4.0 残高 2.8	○ 0.5～2.0 良好 淡灰褐色	突出気味な平底。体部には外反しながら接続する。	内外面調整共にナデ。	65	
71	底　部	底径 2.9 残高 1.9	○ 0.2～1.0 堅緻 淡褐色	底部はやや突出する不安定な平底。	外面調整縦ハケ。内面調整ナデ。	55	
72	底　部	底径 4.4 残高 3.5	○ 0.2～1.0 やや軟 黄白色	平底。体部には直線的に開きながら接続する。器壁は厚い。	外面調整右上りのタタキ（3条／cm）。内面調整ナデ。	43 一括投棄 炉中出土 底部穿孔の可能性	
73	底　部	底径 5.1 残高 2.9	○ 0.2～2.0 良好 暗褐色	突出する平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ（3条／cm）。内面調整ハケ。	39	
74	底　部	底径 5.0 残高 2.2	◎　～0.5 堅緻 黄白色	突出する平底。体部には外反しながら接続する。器壁は厚い。	外面調整ナデ。内面調整横ハケ。	42 底面に籾痕	
75	底　部	底径 4.6 残高 2.3	○ 0.1～1.0 堅緻 暗灰色	平底。体部には直線的に開きながら接続する。	外面調整は磨滅のため不明。内面調整は縦ハケ。	37	
76	底　部	底径 6.4 残高 1.7	△ 0.2～2.0 やや軟 暗黄褐色	平底。体部には外反しながら接続する。	内外面共に磨滅のため不明。	51	
77	底　部	底径 5.4 残高 1.8	◎　～0.5 堅緻 暗褐色	平底。体部には外反しながら接続する。	外面にタタキが僅かに残る。内面調整磨滅のため不明。	54	
78	底　部	底径 4.1 残高 2.6	◎　～0.5 堅緻 灰褐色	ドーナツ底。体部には外反しながら接続する。	外面調整タタキ（2＋α条／cm）。内面調整磨滅のため不明。底部成形は輪台技法による。	41	
79	底　部	底径 3.7 残高 3.7	◎ 0.1～1.0 良好 暗褐色	小形のドーナツ底。体部には短く立ち上がった後，外反しながら接続する。	外面調整右上り中心のタタキ（3条／cm）。内面調整縦ハケ。	33	
80	壺 B	底径 3.0 残高 7.8	△ 0.5～2.0 軟 外面淡橙色 内面灰色	小形の壺。ドーナツ底。体部は砲弾形を呈し，最大径を口縁部にもつ。口縁部は僅かにくびれた後，外反する。	外面調整タタキ。内面調整剥離のため不明。底部成形は輪台技法による。口縁部成形は叩き出し手法による。	69 一括投棄	55－3
81	底　部	底径 4.0 残高 7.7	○ 0.5～2.0 堅緻 灰褐色	底部はドーナツ底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ（2条／cm）。内面調整横ハケ。	62 一括投棄 スス付着	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
82	底部	底径 3.7 残高 3.4	◎　～0.5 良好 淡橙色	底部は凸凹のある凹み底。体部に外反しながら接続する。	外面調整指頭押圧。内面調整斜方向中心のハケ。	8 外面に黒斑 一括投棄	
83	底部	底径 5.7 残高 3.3	○ 0.2～1.5 良好 黄灰色	凹み底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ(2条／cm)。内面調整斜方向のハケ。底部成形は輪台技法による。	35 外面にススの付着 一括投棄	
84	底部	底径 3.3 残高 2.4	◎　～0.5 堅緻 暗灰色	凹み底。体部には外反しながら接続する。	外面調整指頭押圧。内面調整横ハケ及びヘラミガキ。底部成形は輪台技法による。	85	
85	底部	底径 4.0 残高 3.8	○ 0.5～2.0 やや軟 灰褐色	ドーナツ底。体部には直立した後，外反しながら接続する。	外面調整剥離のため不明。内面調整ナデ。底部成形は輪台技法による。	73 一括投棄	
86	底部	底径 5.0 残高 4.1	◎　～0.5 良好 淡赤褐色	底部側面が突出する平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ及び指頭押圧。内面調整斜方向のハケ及び指頭押圧。	14 一括投棄 外面はススの付着	
87	甑	底径 3.2 残高 5.7	○ 0.5～2.0 良好 淡赤褐色	底部は凹み底で，中央に孔を焼成前穿孔。体部は直線的に開く。	外面調整右上りのタタキ(3条／cm)。内面調整縦ハケ。	58 一括投棄	
88	底部	底径 4.7 残高 3.1	△ 0.5～2.0 堅緻 淡赤褐色	底部側面が突出する凹み底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキの後，縦ハケ。内面調整斜方向中心のハケ。底面にハケが残る。	56 外面に黒斑 一括投棄	
89	底部	底径 5.2 残高 5.4	○ 0.1～2.0 良好 淡赤褐色	大形の平底。器壁は厚い。体部には大きく開きながら接続する。	外面調整右上りのタタキ及び指頭押圧。内面調整横ハケ。	86 外面に黒斑 底面に植物繊維痕 一括投棄	
90	底部	底径 4.8 残高 5.5	○ 0.2～1.0 堅緻 淡灰褐色	平底になると推定。底部はやや突出し，体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りのタタキ(2条／cm)。内面調整縦ハケ。	6 一括投棄	
91	無頸壺	口径13.2 残高 3.9	△ 0.5～1.0 軟 黒灰色	体部上半は内湾しながら立ち上がる。口縁部は端部を肥厚する段状口縁。口縁部下に2孔1対の紐穴(焼成前外→内に穿孔)をもつ。	内外面調整共に磨滅のため不明。	102	
92	短頸壺	口径 8.0 残高 4.4	○ 0.5～1.5 良好 濃灰茶色	口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部は内側に拡張。口縁部に2条の凹線文。	外面調整磨滅のため不明。内面調整ナデ。	130 内面に黒斑	
93	鉢	口径12.4 残高 3.6	○ 0.4～0.8 良好 暗灰褐色	小形鉢。口縁部は内湾する。	口縁部内外面共にナデ。体部外面調整磨滅のため不明。内面調整ヘラミガキ。	134	
94	底部	底径 5.4 残高 2.6	○ 0.3～1.0 堅緻 暗灰褐色	平底であると推定。体部には直線的に開いて接続する。	外面調整縦位のヘラケズリ。内面調整ハケ。	45	
95	鉢	口径19.9 残高 3.3	◎ 0.1～1.0 良好 淡黄白色	体部は内湾するものと推定。口縁端部は面を持つ。口縁部外面に3条＋α及び2条＋α	外面調整ナデ。内面調整横位のヘラミガキ。	123	

				の櫛描波状文を施す。体部外面に2条の凹線文をもつ。			
96	甕	口径17.7 残高 2.8	○ 0.1～2.5 良好 明茶褐色	口縁部は頸部で強くくびれた後，短く外反する。端部は上端下端共に拡張。端面に2条の凹線文。	内外面調整共に磨滅のため不明。	99	
97	甕	口径18.4 残高	○ 0.3～1.0 やや軟 淡黄白色	口縁部は外反して開く。上端を上方へ拡張。	内外面調整共に磨滅のため不明。	113	
拓	壺頸部	残径 — 残高 3.4	△ 0.5～1.0 良好 淡赤褐色	外面にヘラによる刺突文。	内外面調整共に磨滅のため不明。	120	
拓	壺胴部	残径 — 残高 5.1	△ 0.5～3.0 良好 外面淡橙色 内面黒灰色	外面に記号文。	外面調整ナデ。内面調整ハケ。	93	
拓	鉢	口径 — 残高 4.0	△ 0.1～1.0 堅緻 淡黄白色	口縁部は内湾する直口の鉢。端部は内側に拡張。端部に刻目を施す。刻目直下に櫛描波状文(7条)。体部には刻目凸帯文(2段)及び櫛描直線文(4条＋α)。	内面調整縦位のヘラミガキ。	121	
拓	壺	口径 — 残高 4.5	○ 0.1～1.0 堅緻 暗灰褐色	体部外面に原体圧痕及び櫛描波状文(8条)。	内外面調整共にナデ。内面指頭押圧。	137	
拓	壺	口径 — 残高 4.2	△ 0.1～1.0 堅緻 外面淡白褐色 内面灰白色	櫛描簾状文(8条)及び櫛描波状文(8条)。	内面調整ナデ。	136	

壺棺墓出土土器　(第88図)

1	(底部) 転用壺	底径 5.2 残高 4.4	◎ 0.5～5.0 良好 明灰橙色	厚手の平底。体部へは大きく開いて接続。	底部周縁は指押圧により，ツメ痕が残る。体部外面はナデ。内面は横ハケの後，部分的に縦ハケ。	1 内面は黒灰色	
2	広口壺	口径23.1 頸径13.9 腹径40.1 底径 6.6 器高48.9 (復元)	◎ 0.5～3.0 良好 暗赤褐色	底部はやや厚手で若干不安定。体部は肩が少し張るが，ほぼ球形に近い。上端に断面台形の突帯を貼付け，やや右に傾く刻目を施す。頸部は内面に稜をもって強く屈曲して直立した後，緩やかに外反。口縁部は外面に稜をもって屈曲し，斜上方に立ち上がる。端部を強く外反させ，外傾の面をもつ。口縁外面に単位6条の若干不規則な櫛描波状文を施した後，2個セットの竹管円形浮文をその上に貼付ける。	底部周縁は指頭圧痕が残り，体部外面は縦ヘラミガキを丁寧に行う。内面は横～斜位のハケメ。上端にハケ原体(?)の圧痕。口縁部は外面が磨滅のため不明。内面は横ヘラミガキ。上半は横ナデ調整。	2 頸部を図上復元	56- 1

溝8出土土器　（第89図）

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
1	壺 B	口径14.0 頸径10.4 腹径25.5 底径 4.7 器高28.4 （復元）	○ 0.5～2.5 やや軟 明黄橙白色	底部は厚手で突出気味。体部は胴部が強く張る。頸部は細くくびれた後，強く屈曲して外反。口縁端部は上下に拡張し外傾の面をもつ。	底部周縁は指押圧でツメ痕が残る。体部外面は縦ヘラミガキ。上端でやや左に傾く。内面は斜～横方向のハケメ。上半は磨滅のため指頭圧痕のみ残存。上端に内傾接合手法による接合痕。口縁部は内外面ともナデ調整。	1 体部外面に黒斑 図上復元	53- 2

土壙3出土土器（第91図）

1	甕 A	口径15.2 腹径15.6 底径 4.2 器高18.4 （復元）	◎ 0.5～3.0 やや軟 暗褐色	底部は平底。体部はひずみが激しく，一方は胴張りが強く他方は弱い。口縁部は「く」の字に屈曲して外反。端部は斜め下方に小さく折り曲げる。	外面は左上りの平行タタキ。内面は磨滅。指頭圧痕が残る。	3・4 図上復元。 外面スス付着	54- 4
2	甕 A	腹径21.2 残高15.2	◎ 0.5～2.0 良好 灰褐色	大形の球形に張る胴部。	外面横～右上りの平行タタキの後，下半は斜方向ハケメ。内面は斜～横方向ハケメ。	7 外面に黒斑	
3	甕 A	口径12.5 腹径10.5 残高 5.4	○ 0.5～3.0 やや軟 暗灰褐色	小形。胴の張りは小さい。口縁部は「く」の字に屈曲して外反。端部は斜め下方に小さく拡張。	外面右上りの平行タタキ。内面は横ハケ。口縁部は横ナデ。	2	
4	鉢 B	口径13.0 底径 3.2 残高 7.3	○ 0.5～2.0 やや軟 淡赤褐色	底部は所謂「ドーナツ底」。体部はゆるやかに内湾気味に立ち上がり。口縁は直口。端部はやや尖る。	磨滅のため調整は不明。	5	55- 4
5	高杯 A	口径22.6 底径13.7 器高15.2	◎ 0.5～2.0 良好 灰黄白色	脚部は「ラッパ」状に開く。裾端部は斜上方にややハネ上げる。裾部に計5個の透孔を外→内へ穿つ。杯部へは強く屈曲して大きく開く。口縁部は屈曲してやや外反して斜上方へ立ち上がる。端面はやや拡張して外へ向く。	脚部と杯部は「接合法」による。口縁外面ナデ。杯部外面は横ハケ。裾外面は縦ハケ。裾内面横ハケ。杯部内面は縦方向ヘラミガキ。	1	55- 8
6	高杯 A	口径25.8 底径12.5 器高12.6 （復元）	◎ 0.5～2.0 やや軟 灰白色	脚部は「ラッパ」状に開く。裾端部は軽く面取り。脚柱部は中実部分が大。杯部はやや内湾気味に大きく開き，口縁部は屈曲して強く外反。端部は面取りし，外に向く。裾部に円孔を1個確認。	脚部と杯部の接合は差し込み法。脚部内面は横ハケ。シボリメが残る。杯部内面は縦位ヘラミガキ。	6 図上復元	

第5節　包含層およびB区の遺物

1）土器溜り（第92～94図）

遺物包含層である褐色粘質土を掘り下げる過程で，遺構を伴うことなく土器片の集中する箇所があった。調査時，それらについては『土器溜り』として捉え，地点を記録するとともに，土器片取り上げ後，遺構の有無について精査した。その結果遺構を検出し得た場合は，それらの土器群を遺構に伴うものと見なしたが，検出されなかった場合は，包含層中の土器集中箇所として理解し，今回改めて『土器溜り』として番号の統一を行った。以下，各土器溜りの遺物を説明する。

a．土器溜り11　（第92図13）

大形の甕形土器が1点出土した、口縁端部に凹線文を持ち，胴部にタタキメが入る。第四様式に比定できる。

b．土器溜り12　（第92図1～12）

壺形土器（1），鉢形土器（2・4），高杯形土器（5～7・10～12），甕形土器（3）がある。2は第四様式に比定でき，他は第五様式前半である。1は口縁部がラッパ状に開き，下端に粘土紐を貼付けるもので，芦屋市会下山遺跡F住居址に類例をみる。また，紡錘車が1点出土した。

c．土器溜り13　（第92図20・25）

第四様式の高杯形土器脚台及び底部片が出土した。20の内面はナデ調整である。

d．土器溜り14　（第92図27・30・32）

中期の甕形土器，及び底部片がみられる。

e．土器溜り15　（第92図26・31・33）

第四様式の壺形土器，高杯形土器脚台，ミニチュア土器がある。これらはわずかな溝状の凹みにたまった状況で出土した。当初，溝として捉えていたが，整理段階で土器溜りとしと解釈した。

f．土器溜り16　（第92図16）

細片が多く，実測できる破片はほとんどない。高杯形土器脚柱を1点掲載する。第五様式に所属する。

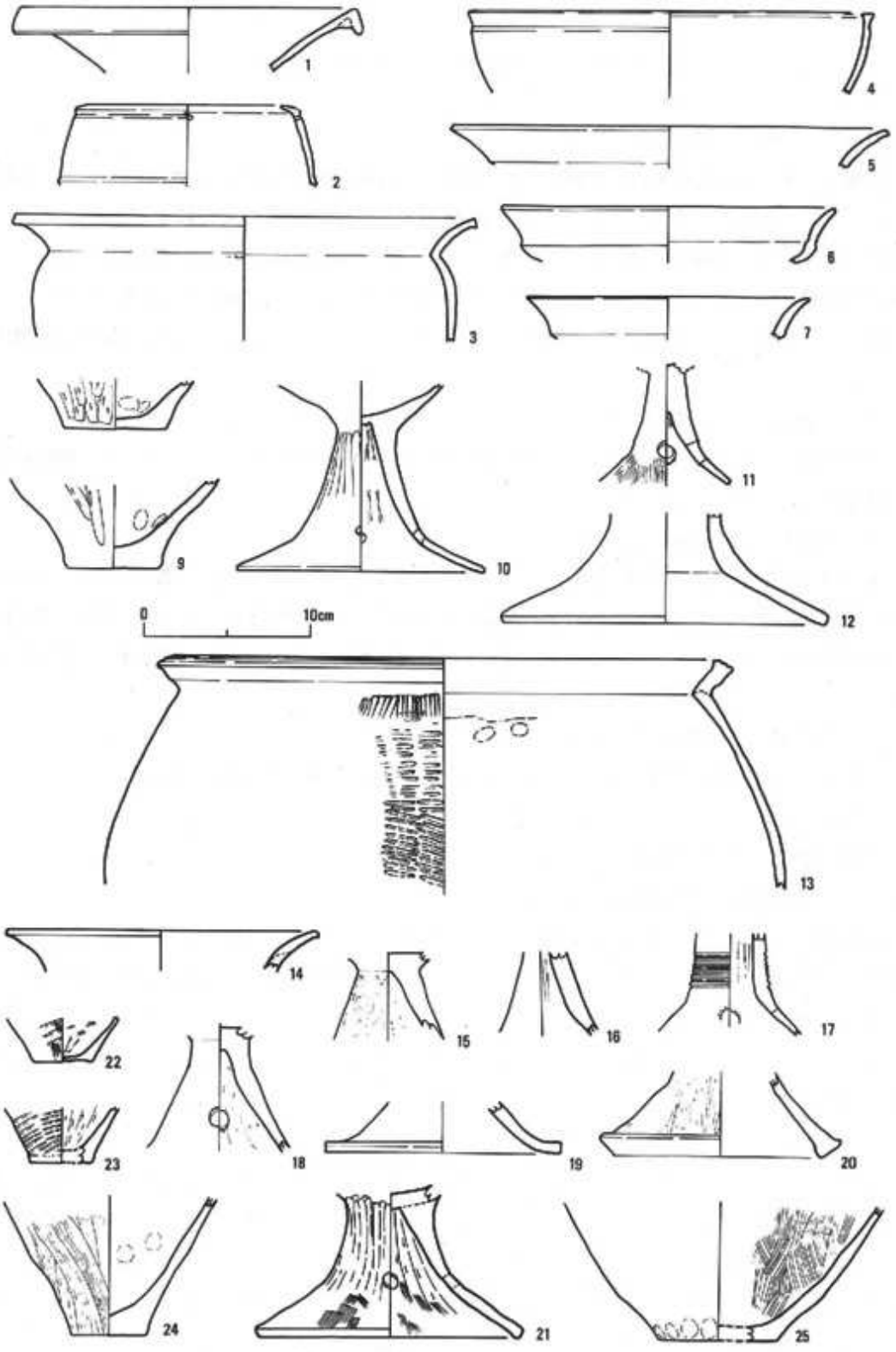
g．土器溜り17　（第92図14・15・18・22～24）

住居址3の上面であるが，時期が異なるため土器溜りとする。土器片の量は多いが，細片がほとんどを占める。甕形土器(14)，高杯形土器(15・16)がある。後期に所属する。

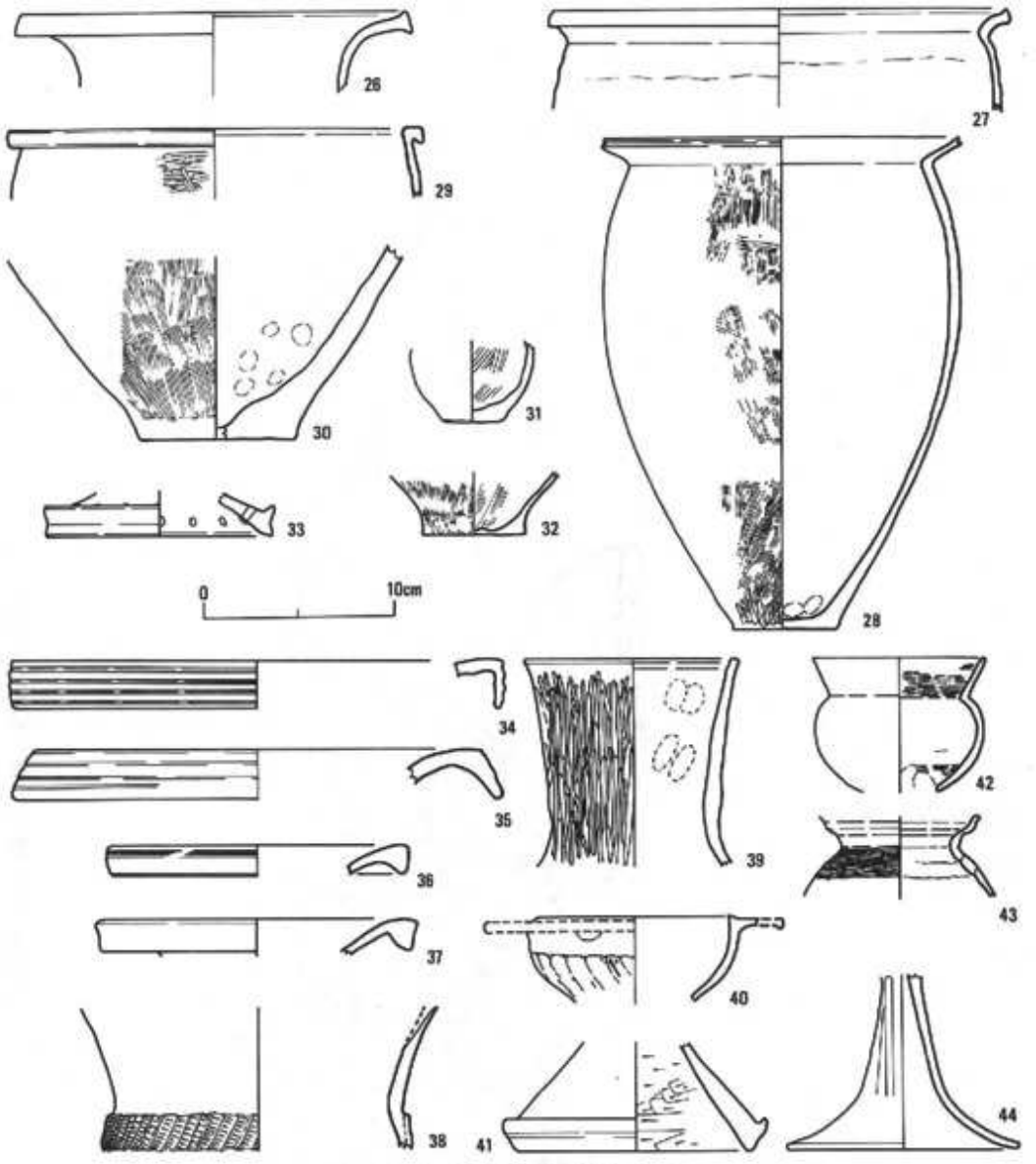
h．土器溜り18　（第92図17・19・21）

住居址1の東側で検出した。細片が多く，掲載した実測図は，高杯形土器脚部3点である。第五様式に所属する。

i．土器溜り19　（第92図28・29）



第92図　包含層出土土器実測図・1

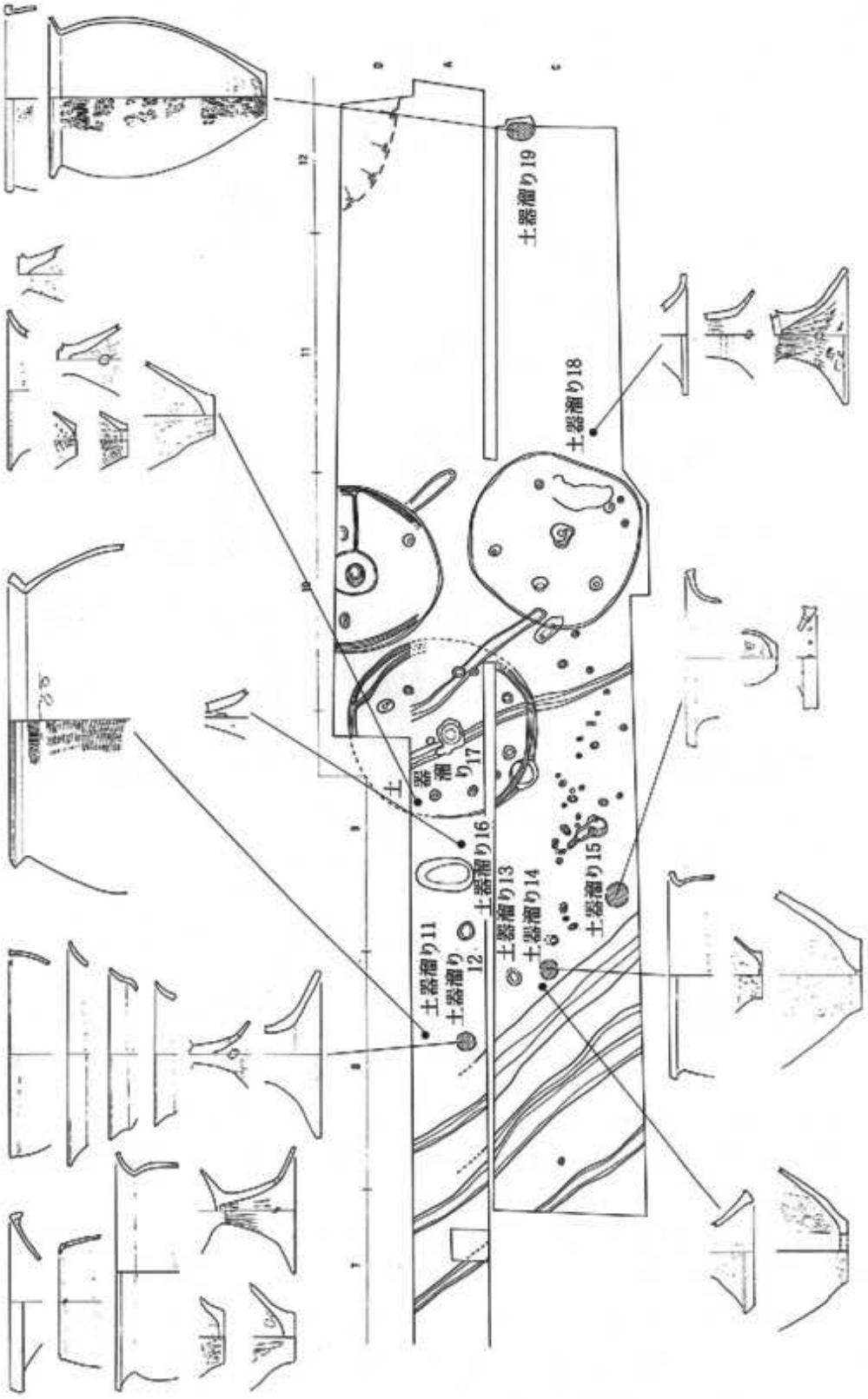


第93図　包含層出土土器実測図・2

C区東端で検出した。残存良好な土器がまとまって出土している。28は口縁部から底部まで残存する甕形土器である。29は外反する鉢形土器で第四様式を示す。これらの土器とともに，焼土，焼礫，炭化物を確認した。

以上，合計9箇所の土器溜りを検出し，遺物の説明を記した。これら土器溜りの形成要因とその評価について若干触れておく。

土器片が集中する状況には二種類ある。まず，土器溜り12・19にみるように，一定範囲内に残存良好な土器が集中する場合がその一つで，特に19では焼土，焼礫，炭化物を同時に確認しており，それ自体で遺構としての性格をもつものである。



第94図　弥生遺物包含層土器溜り分布図

その他の土器溜りは，土器片がある程度のまとまりをもって分布する状況は前者に共通するが，概して細片が多く，また，周辺においても散慢にではあるが同様な土器片が分布しており，調査者が土器溜りとして，どの範囲を認定するか判断に迷うことが多々あった。特に土器溜り11・13～15では，溝4の東側に細長く土器片が分布し，溝4に関連するものと考えられる。

この様に土器溜りの出土状況にみる二種は前者がその場で土器が使用された後の遺棄として，後者は遺構の掘削や底ざらいなどによって，本来遺構に廃棄されたものが，二次的に移動したものとして解釈できる。

土器溜り19については屋外炉との評価ができる。　（森下）

2）包含層の遺物（第93図34～44）

a．土　器（第93図）

褐色粘質土の遺物包含層より単独に出土した土器は，コンテナ数にして10箱になる。その多くは第四様式及び第五様式のものである。ここでは前記の遺構に伴う土器群と若干時期を異にするものを抽出し説明を加える。

尚，42～44は布留式土器であるが，便宜上ここで触れる。

・壺形土器　（34～39）

34・35は口縁部に凹線文を施すものである。第四様式あるいは第五様式初頭と思われる。34は生駒西麓産の胎土をもつ。

36・37は口縁端部が三角形に肥厚するもので，第五様式初頭に位置づけられる。

38は頸部に原体圧痕文突帯をもつもので，第四様式古相に位置づけられ，溝5の資料より一段階古いものと判断できる。

39は長頸壺の口頸部で，外面の沈線など概して丁寧な作りである。

・高杯形土器　（40・41・44）

40は小形で，第四様式に一般的な器形であるが，胴部下半をヘラケズリするなど新しい要素がみられる。41は内面をヘラケズリする脚台である。44は，布留式土器に一般的な脚部である。細く絞まる脚柱部に比して，裾部はゆるやかに大きく開く。比較的薄手の精製品である。

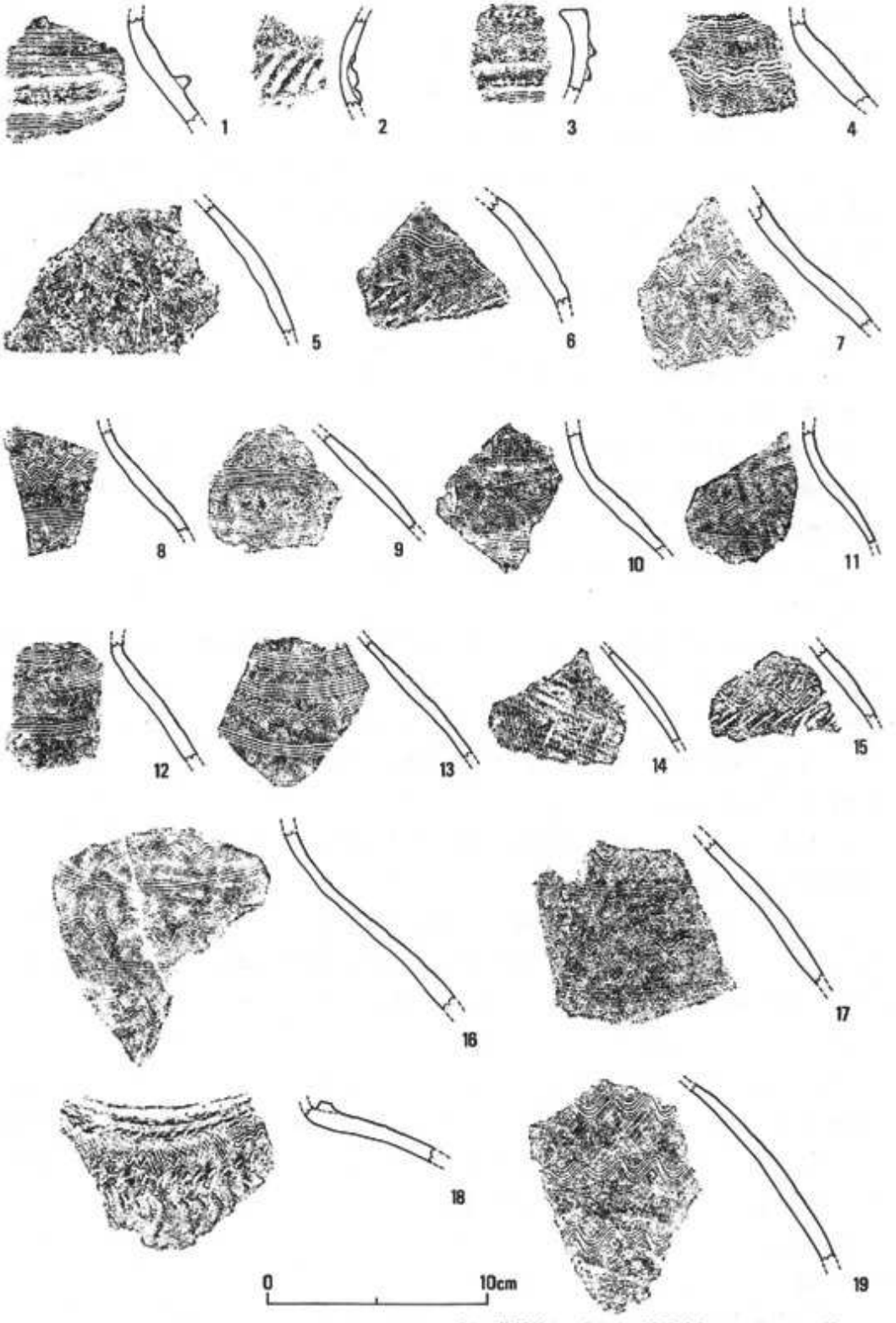
・小形丸底壺　（42・43）

42は，口縁部に対して体部が発達する段階のもので，器壁もやや厚手である。しかし，胎土は比較的精良である。43は，一旦短く立ち上がり外反する擬口縁上に，さらに外反する口縁部を付加する二重口縁を持つもので，体部は球形を呈すると思われる。内面には粘土接合痕を明瞭に残すが，外面は丁寧なヘラミガキを施す精製品である。

b．土製品（第96図）

・土　錘　（1・2）

1はC12区赤褐色粘質土（弥生遺物包含層）より出土した完形の管状土錘である。長さ4.2cm，幅2.0cmを測り，内径0.65cmの貫通孔をもつ。上下両端にあまい面をもち，平面形は長楕円形，

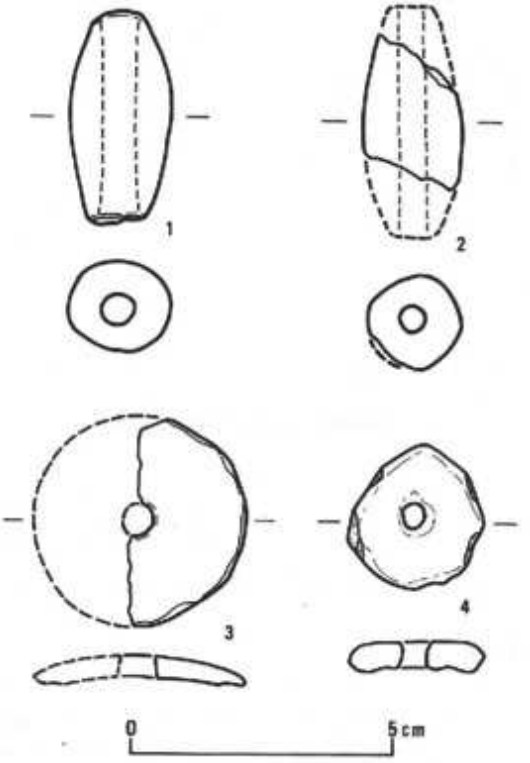


第95図　弥生式土器拓影図（1：住居址1，2～6：住居址2，8～11・18：溝5，12：溝3，13～17：溝4，19：溝7）

断面形は若干扁平な円形を呈す。重量は13.8g，胎土中に石英・長石を多く含み，焼成は良好，色調は黒褐色を呈す。

2は1とほぼ同サイズの管状土錘で，上下端をそれぞれ欠落する。断面形は正円に近い。石英・長石・くさり礫を胎土中に含み，灰橙色を呈す。焼成は良好。現存重量は8.5gを計る。A12区灰色土層より出土した。

和田分類(和田1985)に従えば，長さに対して幅が1／2未満であること，重量が20g以下であることから『管状Ⅰ錘b類小型』に属す。この類は前期末から出現し中・後期にも認められる。従って今回検出した居住域に伴うものと見てよいであろう。東地区最東端に2点がまとまって出土したことも留意すべき事である。



第96図　包含層出土土製品実測図

・紡錘車　（3・4）

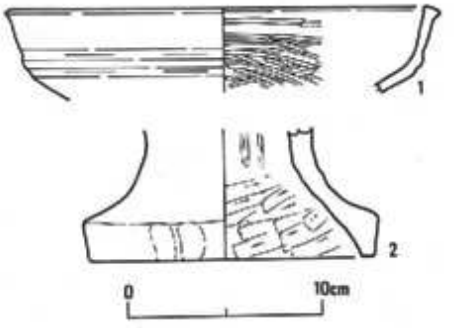
土器片再利用の土製紡錘車2点が出土している。3は半欠するが，直径4.0cmであったと推定でき，現存重量6.1gであることから，完形重量は約12gほどである，先述の住居址3出土例と形状が同じである。黒灰色を呈し，表面に被熱による荒れがみられるため，甕形土器片の転用であろうと思われる。住居址1に切られた溝状土壙内埋土で検出した。　4は土器溜り12(第94図参照)より出土した。直径約2.6cmの不整円形を呈し，厚さは0.6cmを測る。前記例に比して小形である。但し，磨滅が顕著で周縁が本来の面を保っているかどうかは判然としない。焼成良好で灰白色を呈す。

（高橋・森下）

3）B区の遺物

a．土　器（第97図）

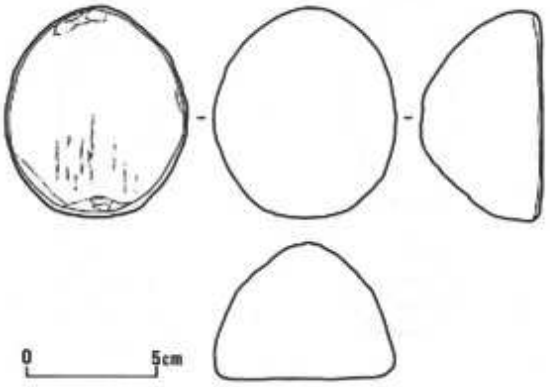
B11区より土器が2点出土した。1は高杯形土器の杯部片でゆるやかに立ち上がる口縁をもつ。凹線文は退化気味である。2は小形の器台形土器の脚台部である。内面を粗くヘラケズリする。両者とも第四様式に比定でき，D地区の落込1と同じ時期の所産であると思われる。



第97図　B区出土土器実測図

b．石　器（第98図）

B11区青灰色砂層を基盤とし，落込2の埋土と思わ



第98図　B区出土磨石実測図

れる土層より出土した磨石である。平面形は楕円形で長さ8.2cm，幅7.1cm。断面形は三角形を呈しており高さ4.7cmを測る。下底面が作業面でかなり平担になっており，全体に磨られているほか，長軸方向の擦痕が線状に残る。重さ340g。

（南・森下）

弥生期の包含層・B区の土器観察表

包含層・B区出土土器（第92・93・97図）

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
1	壺	口径20.1 残高 5.3	○ 0.1～0.2 良 茶灰色	外反して開く口縁部。端部は斜め下方に拡張。窪み部に1.9×1.1の断面三角形の粘土の貼付けが見られる。	内外面共に剥離のため不明。		
2	無頸壺	口径 6.8 残高 4.8	△ 0.1～0.2 良好 明赤灰色	体部は内傾し，口縁部は内側へ水平気味に張り出す。口縁部下部外面に凹線文を施し，小孔が1個現存する。体部中位に段を持ち，外面に稜を成す。	内外面共に剥離のため不明。	内面淡茶白色	
3	甕	口径26.0 残高 7.6	○ 0.1～0.2 良 茶灰色	体部は張りが少くなく，頸部で強く「く」の字にくびれる。口縁部は外反して開く。端部は面取りを行う。	内外面共に剥離のため不明。		
4	鉢	口径27.0 残高 4.9	○ 0.1～0.2 良 淡茶灰色	体部は内湾気味に開く。外面口縁直下に1条の凹線文を施す。口縁端部は面取りを行う。	内外面共に剥離のため不明。	外面黒斑	
5	高杯	口径25.0 残高 2.4	○ 0.1～0.2 やや軟 淡茶灰色	口縁部は外反して開く。端部は面取りを行う。	内外面共に剥離のため不明。	内面黒斑	
6	高杯	口径20.0 残高 3.5	○ 0.1～0.2 やや軟 淡茶灰色	口縁部は外反して開く。	内外面共に剥離のため不明。		
7	高杯	口径16.8 残高 2.6	○ 0.1～0.2 やや軟 淡茶灰色	口縁部は外反して開く。	内外面共に剥離のため不明。		
8	底部	底径 6.3 残高 3.1	△ 0.2～0.3 良好 暗灰色	安定した平底。体部は外反して開くと推定。	底面外面ナデ。体部外面下から上へのケズリ。内面指頭圧痕。		

9	底　部	底径 5.3 残高 5.4	○ 0.2～0.5 やや軟 茶灰褐色	底は厚手で平底。体部には内湾気味に接続する。	外面ケズリ。内面指頭圧痕。	内面暗灰色	
10	高　杯	底径14.6 残高11.3	○ 0.1～0.3 良好 淡茶灰色	杯底部は内湾気味に開くと推定。中空で裾広がりの脚柱部に，外反して開く裾部がなめらかに接続する。裾部上位に円孔が2個現存する。	内外面共に剥離のため調整不明。脚柱部はシボリ技法。脚部内面に脚部の製作完了後，新たに杯底部をつぎたすという成形手法により，粘土の脚部内面へのズレ落ちがみられる。		
11	高　杯	残高 7.3	○ 0.1～0.2 良好 淡茶灰色	裾広がりで上半中実の脚柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔(外面から穿穴)が3個現存する。	裾部外面横ナデ。下位縦ハケ。脚柱部はシボリ成形。		
12	高　杯	底径19.2 残高 6.6	◎ 0.1～0.2 良好 淡茶灰色	裾部は外反して開く。裾部端部は面取りを行う。厚手で裾部が大きい。	内外面共に剥離のため不明。		
13	甕	口径32.2 残高13.8	△ 0.2～0.3 良 淡赤茶褐色	体部の張りが強い。頸部で鋭くくびれた後，口縁部は短く外反する。口縁端部は上方に拡張し，端面には3条の凹線文を施す。	外面調整タタキ(左上り)の後，頸部付近縦方向のハケを施す。口縁部外面は横ナデ。内面は剥離がはげしく不明。		
14	壺	口径18.4 残高 2.9	△ 0.1～0.3 良 淡白茶褐色	口縁部は外反して開く。端部は面取りを行う。	内外面共に剥離のため不明。	内面黒斑	
15	高　杯	残高 5.1	○ 0.2～0.3 良好 淡茶褐色	中空で裾広がりの脚柱部。	脚柱部シボリ成形。調整は内外面共に剥離のため不明。		
16	高　杯	残高 5.0	◎ 0.1～0.2 やや軟 淡白褐色	裾広がり気味の脚柱部と推定。	脚柱部シボリ成形。調整は内外面共に剥離のため不明。		
17	高　杯	残高 6.1	△ 0.1～0.2 やや軟 暗褐色	脚柱部下位に7条の沈線。裾部は外反して開く。裾部上位に円孔1個現存。	脚柱部シボリ成形。調整は内外面共に剥離のため不明。		
18	高　杯	残高 7.1	△ 0.2～0.3 良好 淡黄褐色	脚柱部は裾広がり。裾部は外反して開き，上位に円孔が1個現存。	脚柱部シボリ成形。調整は剥離のため不明。脚柱部内面上位に粘土のはりつけが見られる。		
19	高　杯	底径14.1 残高 3.1	○ 0.1～0.2 良好 淡赤褐色	外反しながら開く裾部。端面はしっかりした面取りを行う。	内外面共に剥離のため不明。		
20	高　杯	底径12.2 残高 5.0	○ 0.1～0.2 良 淡白茶褐色	外反して開く裾部。端面は広く，上方をつまみ出し，上位でナデにより凹線状にくぼむ。	外面縦方向のミガキ。内面強い横ナデ。	外面黒斑	
21	高　杯	底径15.8 残高 9.0	○ 0.2～0.3 良好 淡茶褐色	太く短い脚柱部の下に大きく外反して開く裾部が接続。裾部上位に円孔1個が現存。端部は面取りを行う。	外面調整磨滅がきついが，上部にヘラミガキが見られる。内面調整剥離のため不明。脚柱部シボリ成形。		
22	底　部	底径 5.0 残高 3.8	△ 0.1～0.2 良好 淡茶褐色	底は平底で薄手。体部はやや内湾気味に立ち上がる。	外面調整タタキ。内面調整ハケ。くも巣状の原体圧痕が残る。	内面黒褐色	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
23	底部	底径 5.2 残高 4.7	○ 0.1～0.2 良好 淡赤褐色	体部は直線的に開く。	外面調整3条／cmの右上がりのタタキ。内面調整は磨滅のため不明。		
24	底部	底径 4.4 残高 8.1	○ 0.1～0.2 良 淡茶褐色	平底。体部は外反しながら立ち上がる。	外面縦ハケ。内面指頭圧痕。		
25	底部	底径 7.0 残高 8.0	○ 0.1～0.3 良好 白褐色	体部は内湾気味に立ち上がる。	外面剥離のため不明。内面調整ハケ。		
26	広口壺	口径20.1 残高 4.4	△ 0.1～0.2 やや軟 淡灰白色	短い筒状の頸部から口縁部にかけて大きく外反して開く。端部は斜め下方に若干拡張する。	口縁部上面は横ナデ。		
27	甕	口径24.1 残高 5.0	○ 0.1～0.2 良好 淡白褐色	体部の張りは弱い。頸部で「く」の字に屈曲した後，口縁部は短く外反して開き，内面に稜を持つ。端部はわずかに斜め上方に拡張。	口縁部内外面共に横ナデ。	断面淡灰色	
28	甕	口径13.5 底径 5.4 残高25.8	△ 0.1～0.2 軟 淡茶灰色	底部から直線的に立ち上がる胴部は，丈高で最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し，短く外反。端部は面取りを行う。口縁部端面に1条の凹線文を施す。	外面調整，口縁部横ナデ。体部ハケ。底部ミガキ。内面調整横ナデ。指頭圧痕あり。		
29	甕	口径21.6 残高 3.6	◎ 0.1～0.2 良 淡白茶褐色	体部は張りが弱い。口縁部は水平に拡張。端部は面取りを行う。	外面体部ヘラミガキ。口縁部，内面横ナデ。	外面黒斑	
30	底部	底径 8.0 残高10.0	○ 0.2～0.4 良好 灰褐色	平底と推定。全体的に厚手だが，底中央部付近は他の部分に比して薄手になっていると思われる。体部は直線的に開く。	外面調整，斜め方向のハケ。内面指頭圧痕あり。		
31	ミニチュア土器	底径 3.1 残高 4.2	○ 0.1～0.2 良好 淡灰褐色	平底。体部は内湾して立ち上がる。器種は不明。	外面調整ナデ。内面調整ハケ。	外面黒斑	
32	底部	底径 5.6 残高 3.3	○ 0.1～0.2 良好 黒色	平底。体部は外反して開く。器壁が非常に薄手である。	外面ハケ調整。指頭圧痕あり。内面調整ハケ。	内面淡茶褐色，外面スス付着	
33	高杯	底径11.9 残高 2.4	△ 0.1～0.3 やや軟 淡赤褐色	裾端部は肥厚し，上方に大きく拡張。端面は強い指ナデにより，「く」の字に窪む。裾部は内湾気味に開き，下部に全周をめぐるものと推定される円孔が3個現存する。	外面調整ナデ。内面は剥離のため不明。	断面灰黒色	
34	広口壺	口径25.6 残高 2.5	○ 0.1～0.2 良好 茶褐色	口縁部は水平に開き，端部は下方に折り曲げる。端面には4条の凹線文を施す。	口縁部調整は内外面共に丁寧なナデ。ただし，端部外面は剥離のため不明。	生駒西麓産	
35	広口壺	口径23.0 残高 2.7	△ 0.1～0.4 やや軟 灰黄橙色	口縁部はゆるやかに外反して開く。端部は斜め下方に折り曲げ，端面に退化した凹線文	内外面共に磨滅のため不明。		

				を4条施す。			
36	広口壺	口径17.0 残高 1.8	△ 0.1～0.3 良好 淡灰色	口縁部はやや水平気味に外反して開く。端部は下方に拡張。端面には細い2条の凹線文を施す。	口縁端部はナデ調整。	頸部褐色 生駒西麓産	
37	広口壺	口径16.7 残高 1.9	△ 0.1～0.3 良好 黒灰色	口縁部は直線的に開き，端部で極端に肥厚する。端部はやや内傾気味に下方に拡張。端面上方ナデによりやや「く」の字に窪む。	口縁部端面はナデ調整。	内面黄褐色	
38	広口壺	残高 8.2	◎ 0.1～0.2 良好 淡黄褐色	頸部と体部の境界に原体圧痕突帯をはりつける。頸部は外反して開くと推定。	内外面共にナデ調整。		
39	長頸壺	口径11.9 残高11.9	◎ 0.1～0.2 良好 淡灰褐色	頸部は斜め上方に立ち上がる。口縁端部は面取りを行う。口縁部内面つよいナデにより，窪みが巡る。	口縁部外面ヘラミガキ。頸部上部外面ヘラミガキの後，ナデを施す。内面ナデ，指頭圧痕。		
40	高　杯	残高 4.5	○ 0.1～0.2 やや軟 灰褐色	杯部は半球形。口縁部は水平に張り出すと推定。杯内面に断面三角形の突帯を作り出す。	口縁部外面ナデ調整。杯部外面下から上へのケズリ。指頭圧痕。内面調整ナデ。		
41	高　杯	底径12.4 残高 5.6	△ 0.1～0.2 やや軟 白桃色	裾端部は分厚く，外傾して拡張した後，内側へ屈曲する。裾部は内傾して立ち上がる。裾端部は指ナデによって中央がやや窪む。	外面調整ナデ。内面調整板状工具によるケズリ。	内面灰橙色	
42	小型丸底壺	口径 9.0 残高 7.2	△ 0.1～0.2 やや軟 白橙色	体部は丈の短い球形を呈す。頸部で「く」の字に屈曲した後，口縁部が直線的に開く。端部は丸く収める。	外面は剥離のため不明。内面ナデ，指頭圧痕。		
43	小型丸底壺	口径 9.0 残高 7.2	△ 0.1～0.2 やや軟 褐色	体部は張りが強い。頸部は直立気味に短く外傾する。口縁部は一旦外方向に屈曲した後開く。	体部外面ミガキ。内面は剥離のため不明。粘土紐の接合痕が頸部下にみられる。		
44	高　杯	底径11.9 残高 9.3	○ 0.1～0.2 良好 赤褐色	裾広がりの脚柱部。これに外反して大きく開く裾部がなめらかに接続。端部は面取りを行う。脚柱部に比して裾部の径が大きい。	脚柱部外面調整，縦方向のミガキ。内面剥離のため不明。		
B 1	高　杯	口径22.2 残高 4.6	◎ 0.2～0.3 良好 黄灰色	大きく開く体部から口縁部が屈曲して斜方上に立ち上がる。屈曲部に凹線文2条。口縁端部は肥厚し，平坦面をもつ。	内外面横方向ヘラミガキ。口縁部上方は内外面ともナデ調整。	外面炭化物付着	
B 2	器　台	底径13.8 残高 6.8	○ 0.3～0.5 やや軟 黒灰色	裾は斜下方に直線的に開く。端部方形に肥厚。外方・下方に面をもつ。器壁は概して肉厚。	外面ナデ。内面横方向ヘラケズリ。柱部内面シボリメ。裾端部外面に指頭圧痕が残る。		52- 9

第6節　石器・石製品

1）概　要

今回の調査で出土した弥生の石器の内訳は，石皿1点，敲石1点，有溝石錘1点，石鏃2点，尖頭器1点，石錐1点，磨製石剣1点，削器3点，楔形石器8点，同砕片1点，加工痕有剥片1点，石核3点の合計24点である。法量などは第10表に示した。

第10表　石器・石製品一覧表（弥生）［凡例：第8表と同じ］

器　種	出土地区	出土層位	遺存状態	石　材	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
石　皿	落込1	埋　土	⅚欠	砂　岩	(13.3)	(4.8)	(4.0)	250	99
石　錘	A9	5	完　形	砂　岩	5.8	4.05	2.9	84	100
石　鏃	住居址3	埋　土	完　形	サヌカイト	3.15	1.95	0.6	3	101－1
石　鏃	D11～12	不　明	一部欠	サヌカイト	(2.9)	(2.0)	0.6	3	101－2
尖頭器	住居址3	埋　土	½基部	サヌカイト	(4.1)	2.6	0.9	11	101－3
石　錐	土壙3	埋　土	完　形	サヌカイト	3.2	1.05	0.9	2	101－4
磨製石剣	住居址3	埋　土	断　片	緑色粘板岩	(3.2)	(2.8)	1.0	11	101－5
削　器	A11	4	完　形	サヌカイト	3.65	2.5	0.55	6	102－1
削　器	C8	5a	完　形	サヌカイト	3.75	5.55	0.7	19	102－2
削　器	溝4	埋　土	完　形	サヌカイト	4.0	4.5	1.5	22	102－3
楔形石器	A6	5	½欠	サヌカイト	3.55	2.35	1.0	7	102－4
楔形石器	C10	5	完　形	サヌカイト	4.65	4.0	1.5	22	102－5
楔形石器	C10	5	完　形	サヌカイト	2.3	3.4	1.95	14	102－6
楔形石器	溝4	埋　土	完　形	サヌカイト	2.1	4.15	1.65	10	103－1
楔形石器	C10.11	5	完　形	サヌカイト	3.6	3.8	2.5	30	103－2
楔形石器	A6	5	完　形	サヌカイト	4.95	4.7	1.9	53	103－3
楔形石器	溝5	埋　土	完　形	サヌカイト	2.85	3.75	0.5	6	103－4
楔形石器	C8	5a	完　形	サヌカイト	2.85	5.2	0.6	12	103－5
加工痕有剥片	C12	5	完　形	サヌカイト	7.25	4.1	2.8	52	104－1
石　核	溝4	埋　土	—	サヌカイト	6.85	2.85	3.15	60	104－2
石　核	住居址3	埋　土	—	サヌカイト	6.8	3.5	2.55	41	104－3
石　核	住居址3	埋　土	—	サヌカイト	3.9	4.5	1.7	21	104－4

出土状態では，器種などによって特に偏りがみられるものはないが，楔形石器は東地区のC8・10区出土のものがやや多くみられる。遺構別では，住居址3で石器製作地と考えられる大量の石器や剥片，砕片，石核の出土をみた。うち，石鏃，尖頭器各1点と石核2点については後に詳しく述べるが，他に約2千点ほどの砕片・剥片が，住居址と炉址・柱穴の埋土の水洗選別によって検出されている。これについては，機会を改めて分析を行いたい。また，土壙3の埋土中からは，石錐が1点出土しているが，混入かと考えられる。他では，溝4出土のものが比較的多い。層位的には，赤褐色砂質土，赤褐色粘質土のものが主体を占める。

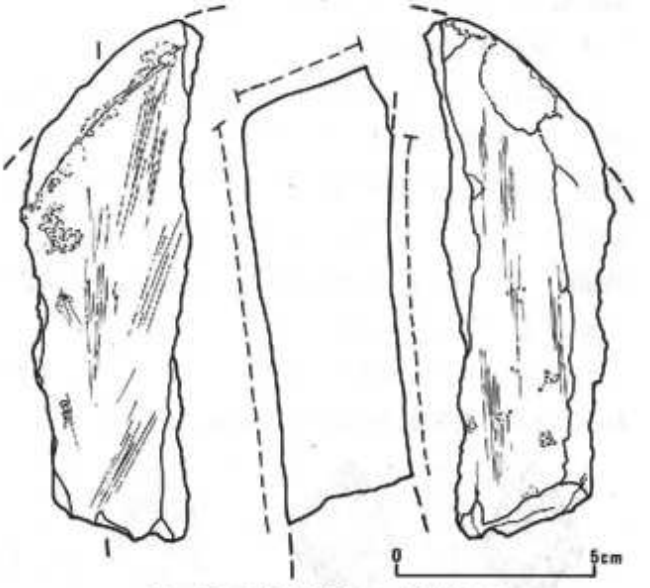
石器群全体の器種構成は，比較的豊富であるが，組成は，点数が少なく，やや貧弱であるといえよう。注意される器種としては，組成の主体を占める楔形石器と磨製石剣，有溝石錘をあげることができる。

次に器種ごとに説明を加えていこう。

2）石　器

a．石　皿（第99図）

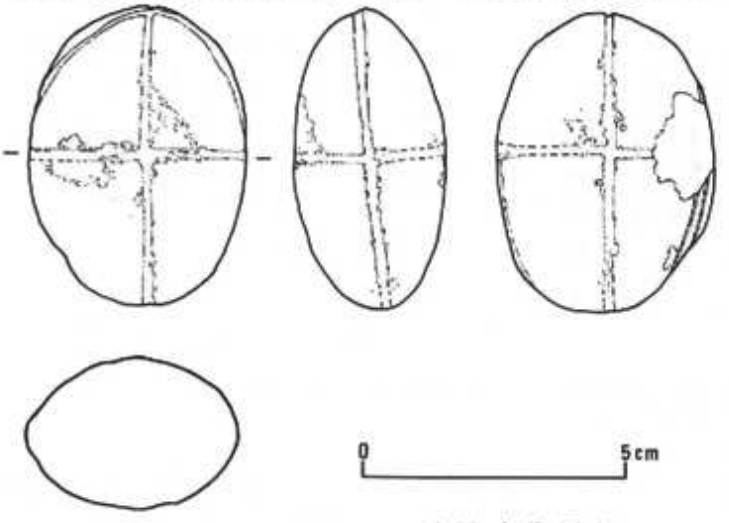
1点出土している。砂岩製で全体の約6分の1程度の破片である。復元形は長径30cm位になろう。両面とも使用によってなめらかな磨面を為しており，一部に擦痕が認められる。側面にも磨面がみられる。植物質食料の調理加工具としては，図示しなかったが，他に敲石片が1点ある。径7cm程の半欠品で，残った面には径3cm，深さ0.5cm弱の敲打の集中による凹みをみる。



第99図　石器実測図・5（弥生）石　皿

b．有溝石錘（第100図）

1点のみ出土した。長・短軸のそれぞれ全周に幅2～3mmの溝をもつもので，渡辺誠氏による縄文時代石錘の分類ではE類とされるものである（渡辺1975）。整った卵形の砂岩製自然礫を使用している。和田晴吾氏による弥生時代石錘の分類（和田1985）では，長軸もしくは短軸のみに溝を施す『瀬戸内型石錘』が概期の本地方で主に認められるものであるとされ，これと比べると本資料は，『瀬戸内型石錘』が100g～400g台の例が中心であるとされるのに対して，84gとやや軽量であり，また溝の施し方の相異から，より縄文時代の石錘に近いといえよう。



第100図　石器実測図・6（弥生）有溝石錘

c．石　鏃（第101図1・2）

2点認められる。1・2共にサヌカイトを素材とする凸基有茎式石鏃である。1は，住居址3から出土しており，同住居址内出土の他の剥片等と全く同質のサヌカイトを用いており，この石鏃は同住居址内で製作されたと考えられる。両面とも入念に調整加工が施されるが，先端部があまり尖らないことから未製品である可能性も残される。

2は，側縁下半に突出部をもつ菱形の平面形を呈する。先端部と側縁突出部の一方を折損する。

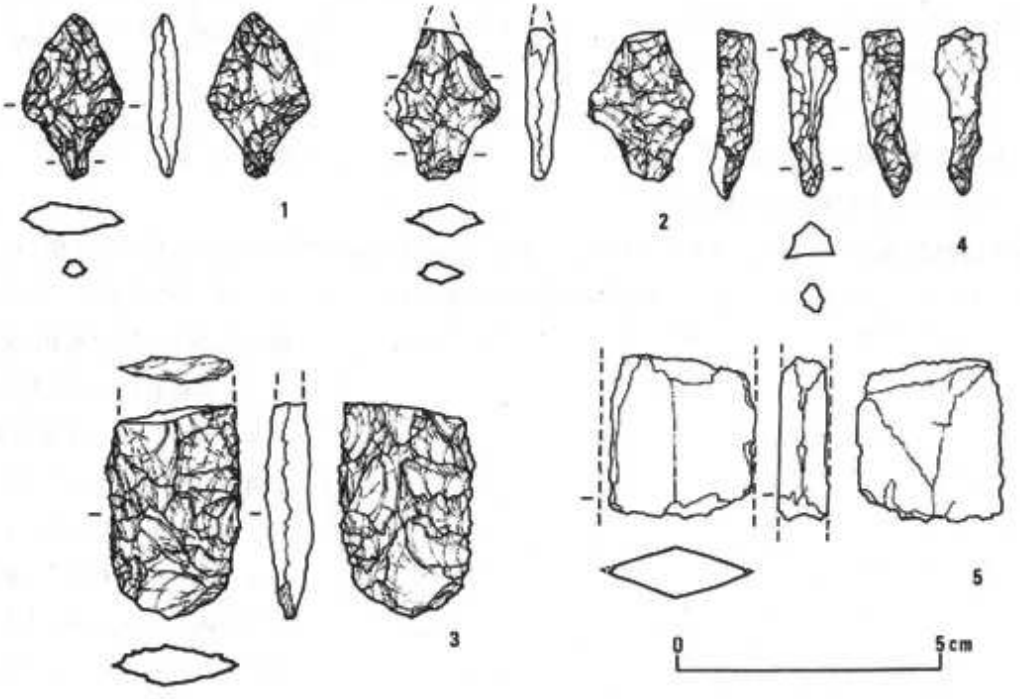
調整加工は1に比べてやや粗い。

d．尖頭器（第101図3）

1点出土している。住居址3から出土しており，やはり同住居址出土の他の資料と同じ石質であり，本住居址内で製作されたと考えられる。調整加工は両面ともやや粗い。下端には自然面を残す。上半約2分の1を折損するが，その折面を観察すると，正面上端の右上方に認められる結晶粒に収束するようにフイッシャーがみられる。このことから，調整加工中に何らかの形でこの結晶粒に力が加わり，折損したために未成品のまま放置されたと考えられる。

e．石　錐（第101図4）

1点認められた。土壙3より出土している。つまみ部をもち，調整加工は腹面側から主に施される。先端の機能部は使用による磨滅が著しい。



第101図　石器実測図・7（弥生）石鏃・尖頭器・石錐・磨製石剣

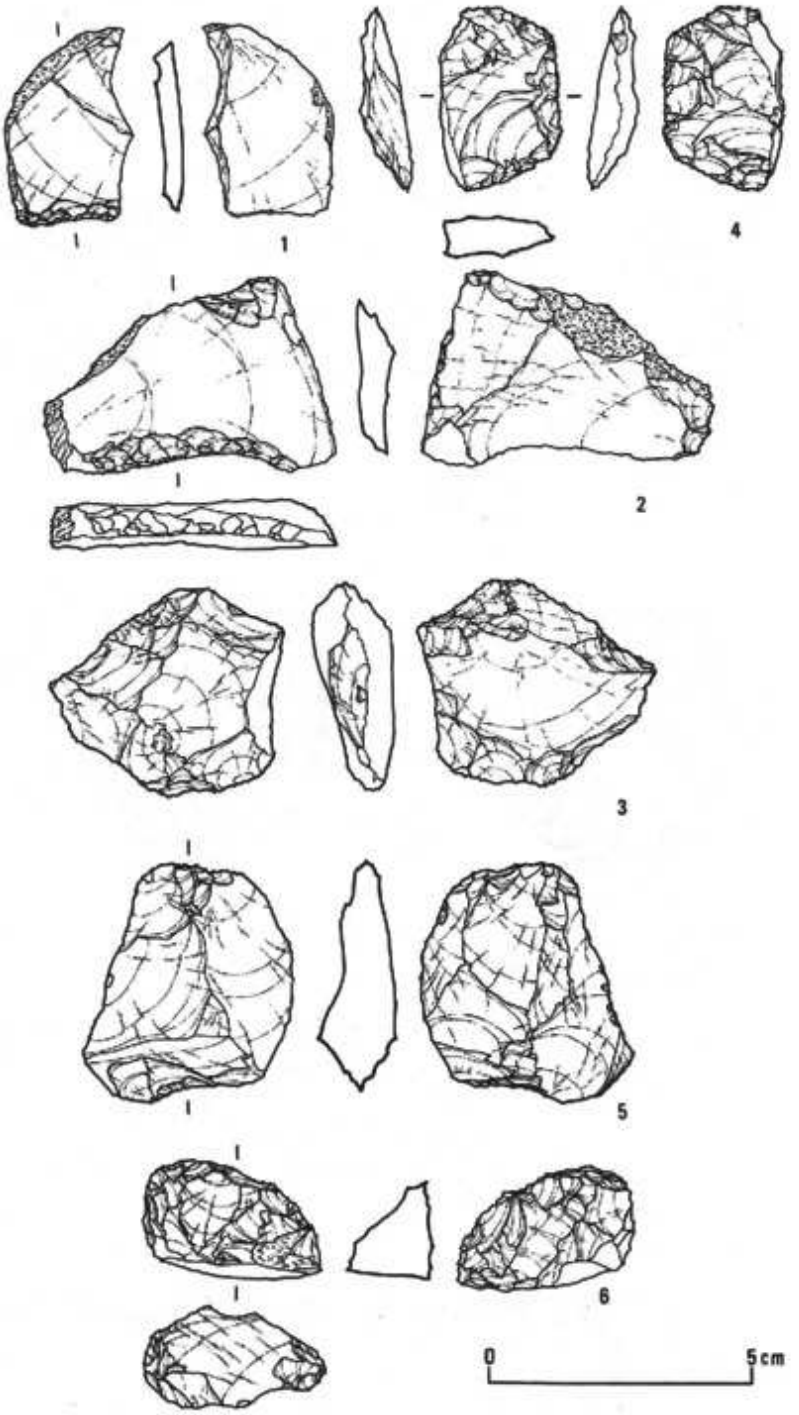
f．削　器（第102図1～3）

3点出土した。いずれもサヌカイトを用いるが，1が二上山産出，2・3はそれ以外の産出地のものと思われ，特に2は，石理が発達しており，きめが粗い。

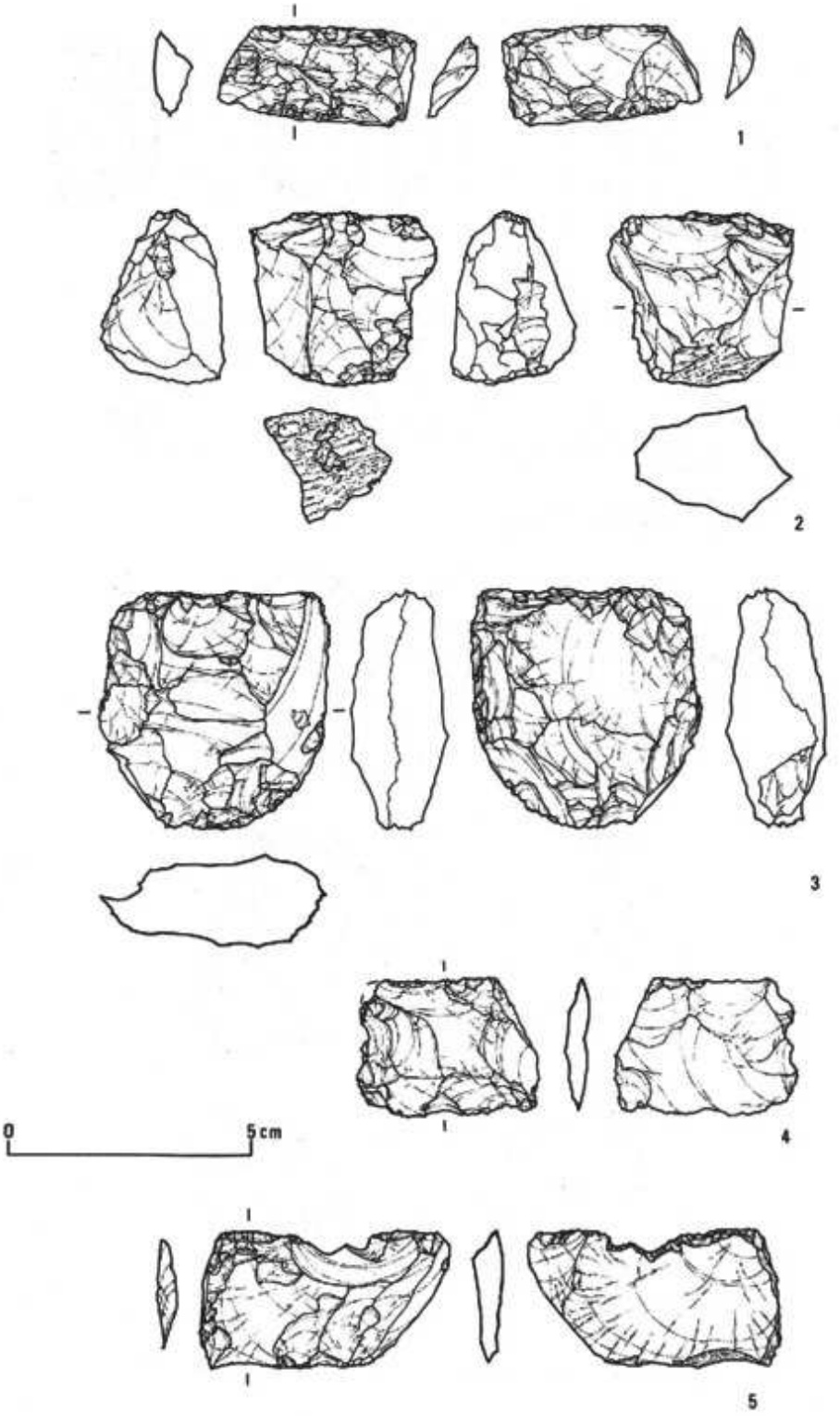
1は，小形の縦長剥片を素材としており，刃部はその下端に腹面側からの小剥離の連続により形成される。

2は，縦長剥片の一側縁に，背面側からの連続した急角度の調整加工を施して刃部としている。

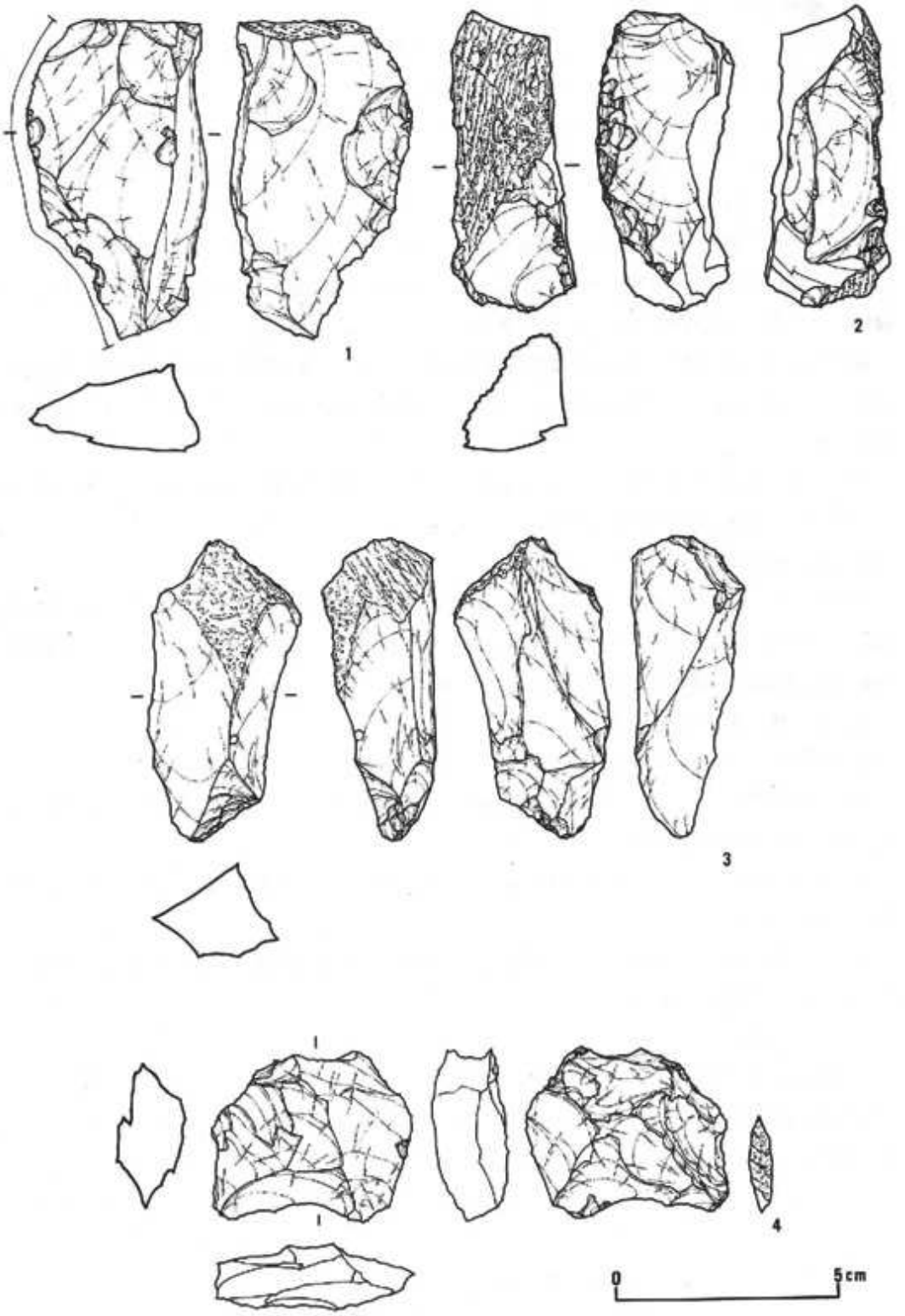
3は，一見円盤状の石核を想起させるが，二次剥離面がいずれも小さく，そこから剥取された剥片は，石器素材とはなり得ないと判断されたため削器に含めた。刃部と考えられる調整加工は，両面にやや粗いものが施されている。



第102図　石器実測図・8（弥生）削器・楔形石器



第103図　石器実測図・9（弥生）　楔形石器



第104図　石器実測図・10（弥生）　石核ほか

g．楔形石器（第102図4～6，第103図1～5）

8点出土している。いずれもサヌカイトを素材としている。形状は，著しく多様であり，一般的な楔形石器としての形態を呈するものの他に第102図6のようなものもここに含めた。

第102図4・5は，共にきめの細かい良質のサヌカイトを用いており，形状も典型的な楔形石器である。4は，上・下縁及び一方の側縁に楔形石器特有の階段状小剥離痕が連続して認められる。もう一方の側縁は折断面となっている。

6は，周縁に著しいつぶれ状の小剥離痕が認められる。下面が，平坦な節理状の剥離面となっており，楔形石器通有の形態とは著しく異なる。しかし，他の削器等の器種とも認定し難く，周縁につぶれ状の小剥離痕を有すという特徴から，ここに含めることとした。

第103図の1・3は整った形態の楔形石器である。2は，上縁に連続する階段状の小剥離痕が認められるのに対して，下面の自然面には，それに相対すると考えられる加撃による小剥離痕が認められる。

4・5は，裏面が大きくポジティブな面となっており，楔形石器の使用の際に，丁度2枚に剥がれるように剥離したものと思われる。

h．加工痕有剥片（第104図1）

1点のみみられた。良質のサヌカイトを素材とする，大形厚手の剥片を用いる。一方の側縁に両面から散発的に二次加工を施すが，削器等の刃部として捉えるにはまとまりを欠く。調整加工が施される側縁には連続した使用痕が認められる。

i．石　核（第104図2～4）

3点出土した。うち3・4は，住居址3より出土している。

2は，角柱状を呈し，約3分の1は自然面を残す。良質のサヌカイトを素材とする。剥片生産は，良好には行われていない。

3もやはり角柱状を呈し，自然面を残す。2に比べるとかなり形状の整った剥片が剥取されたものと考えられる。

4は，円盤状を呈する石核である。両面とも剥片生産が行われており，いずれも良好な剥片が得られたものと考えられる。

3）　石製品

a．磨製石剣（第101図5）

1点検出された。樋をもたないいわゆる鉄剣形石剣の断片である。断面形は整った菱形を呈する。石材は緑色粘板岩であると思われる。

（大下）

第7節　小　　結

猪名川下流域に位置する本遺跡は，田能・勝部などの西摂平野を代表する弥生集落を間近にひ

かえ，弥生文化が適応し易い立地条件にあったことが窺われる。

今回調査地の東南部(8～12区)においては，弥生中期後半・後期を主体とする遺構・遺物を検出した。口酒井の弥生集落は，伊丹市教育委員会による第4・7・9次調査や，今回のB区調査の結果により，北西から南東に延びる自然堤防上に立地することが事前に判明しており，今回の調査はその微高地を横断するトレンチを入れたことになる。

確認した遺構は竪穴式住居3棟，墓3基，土壙3基，溝6本，落込み1箇所と小土壙群である。

竪穴式住居は切り合い関係がなく，その先後関係は出土土器によった。各住居址は中期後半から後期後半にわたり，各々が同時併存することはなく，住居址3が凹線文盛用の土器が示す中期後半に，住居址1が後期前半に，住居址2が後期後半にそれぞれ相当する。各住居の平面形が円形を呈すること，また，中央に深い炉を有するなどの共通要素をもつ。また住居址2・3では壁溝がみられ，住居址3では建替えが確認された。

墓は木棺墓1基，壺棺墓1基，土壙墓と思われる土壙を1基確認した。

木棺墓は伴出遺物がなく，時期決定に不確定要素を残すが，層位的に中期前半とみた。そして大きさからみて幼児棺であったと推定できる。伊丹市教育委員会の調査でも数基の木棺墓が検出されており，それらの所属時期を推定する手がかりを提示した。

土壙墓，壺棺墓は後期に所属し，それぞれ住居址1・2に併行して埋置されたようである。また同じ時期，約100m北西で円形周溝墓が築かれている。

土壙は，土壙5が中期前半，土壙4が中期後半に属す。前者は炭層を含む長楕円形の土壙で，甕が出土した。後者は円筒形の土壙で，形状が貯蔵穴に類似する。

溝は，中期に属すものが4本，後期に属すものが1本ある。これらの溝の方向は北西から南東を示し，微高地の延びる方向と一致する。微高地縁辺をめぐるものと推定された。

調査区東端には落込みを検出した。この地形は縄文晩期からみられるが，中期後半のある時期に一括してこの場所に土器が投棄されている。

以上，今回の調査によって確認した遺構の変遷を第11表にまとめる。

遺物は畿内第四様式・第五様式を中心とした土器の一括遺物があり，資料的価値は高い。

第四様式土器は壺形土器において櫛描文を未だ多く残す溝5の資料，凹線文が盛行する溝4・住居址3の資料，櫛描文をほぼ完全に払拭し，一部凹線文が退化する落込1の資料が認められ，編年細分のための材料を提出した。甕形土器においても，外面ヘラケズリ調整のものから，内

第11表　遺構変遷一覧表（弥生）

時期	住居	土壙	溝	落込み	墓
中期前半		土壙5	溝6		木棺墓
中期後半	住居址3	土壙4	溝5 溝4・溝7	落込1	
後期前半	住居址1		溝8		土壙3
後期後半	住居址2				壺棺墓

面へラケズリでタタキを行うものへの変化がたどれる。

第五様式土器は住居址1・2，土壙3で良好な資料が得られた。

住居址1出土土器は，口縁部拡張の壺形土器や，体部の張りが小さい長頸壺形土器，タタキをもたず肩部に刺突が巡る甕形土器などを特徴とし，第五様式前半を示す。

住居址2は廃絶に際し炉址上に土器の一括投棄が認められた。この土器群は第五様式後半を示す。

土壙3出土の土器は壺形土器を欠落し，甕形土器，鉢形土器，高杯形土器からなるセットであり，これらは被葬者一個人に帰属する土壙墓供献土器として捉えられた。

以下に中期後半，後期の土器器種組成表を示す(第12・13表)。

第12表　中期後半土器器種構成表　〔( )内：%〕

器種 / 出土遺構	広口壺 A1	広口壺 A2	広口壺 A3	広口壺 B	広口壺 C	広口壺 D	短頸壺	無頸壺 A	無頸壺 B	甕 A	甕 B	鉢 A	鉢 B	鉢 C	鉢 D	高杯 A	高杯 B	脚台 A	脚台 B	器台 A	器台 B	壺蓋	複合土器	水差	総数
溝5	4	2		1	4			1	1	2	6	4	3			14	3	2	8	2			1	1	59
	13 (26.5)									8 (16.3)		7 (14.3)				17 (34.7)				2 (4.1)			1 (2.0)	1 (2.0)	49 (99.9)
溝4	7	2		1	5				1	5		3	1			5		1	1	2					34
	16 (50.0)									5 (15.6)		4 (12.5)				5 (15.6)				2 (6.3)					32 (100.0)
溝7	2	1				1				1	1	1						1							8
	4									2		1				1									8
住居址3	1			1		1				2		1		1		2									9
	3									2		2				2									9
落込1		1	2	1	2		2			11	5	2	1		2	7	2	1	6	1		2		1	50
	8 (18.6)									16 (37.2)		5 (11.6)				9 (20.9)				2 (4.7)		2 (4.7)		1 (2.3)	43 (100.0)

弥生の石器は前記した縄文の石器と同様，数量的に十分とは言い難いが，その中からいくつかの問題点を指摘しておく。

生業の面から考えるならば，中・後期の土器が比較的多く出土し，時期は異なるが3棟の住居址がみられるのに対して，このような石器の稀少性は，やや奇異な印象を受ける。その原因については，現状では全く不明

第13表　後期土器器種構成表　〔( )内：%〕

器種 / 出土遺構	広口壺 A	広口壺 B	長頸壺	短頸壺	甕 A	甕 B	甕 C	甕 D	鉢 A	鉢 B	高杯 A	高杯 B	脚柱	甑	総数
住居址1	1		2	1	2	6	6		1		4		2		43
	4 (9.8)				32 (78.0)				1 (2.4)		4 (9.8)				41 (100.0)
土壙3					3					1	2				6
					3				1		2				6
住居址2	2	6	1	1	26	2	2	2	4	4	2	2	10	1	65
	10 (16.4)				32 (52.5)				8 (13.1)		10 (16.4)			1 (1.6)	61 (100.0)

である。但し，住居址3では中期後半の段階ですでに鉄製品を保持していたことを確認しており，当遺跡の営まれた時期が利器の材質転換期であったことが想定できる。今回の石器構成の特異性を鉄器普及と直接的に結びつけることは出来ないが，時期の下がる住居址1・2での様相を合わせて考えるならば，それを証明する材料の一つにはなり得る。

その他に縄文的な形態をもった有溝石錘1点出土している。自然提防上に立地する本遺跡の生業を考える上で興味深い資料である。

生業関係の石器以外では磨製石剣が1点と，尖頭器が1点出土した。両者は住居址3で共伴する。これらの資料は田能・原田西・勝部など周辺遺跡との関係を考える上で重要である。

以上，弥生の遺構と遺物の報告を終えるにあたっての要点及び問題点を簡単に記した。今回調査を行った範囲は，口酒井弥生集落のごく一部分でしかない。従ってここに提示した資料も，弥生人の生活を十分に反映したものではないかもしれない。その様な資料の限界性はあるが，この成果が今後の弥生文化研究の進展に一石を投ずることになれば報告者として幸いに思う。

（緒方・大下・森下）

第6章　その他の遺構と遺物

第1節　土壙1・土壙2

1）概　要

布留式土器を出土する遺構は赤褐色粘質土上面において検出された。遺構面は大きく削平されており，平安時代の遺構も同一面で確認している。遺物を伴わない小土壙群に関しては時期決定ができず，明確に布留式期の遺構として捉え得るのは，土壙1と土壙2のみである。これらは今回調査区の東端10～12区に位置しており，弥生時代の遺構が主として8～10区を中心としているのに対し，やや東へ移動していることになる。これは自然地形の微妙な変化に対応したものであろうと思われる。調査区北東端A12区に位置していた落込1・2がこの時期に至って埋没し，新たにその上に重複して土壙2が作られている。土壙2は大半が調査区外に位置するため，遺構全体の形状は不明であるが，住居址あるいは，それに類するものであった可能性は高い。いずれにしても，今回の調査区周辺が布留式期の居住区域であったことは間違いなかろう。

（森下）

2）土　壙1

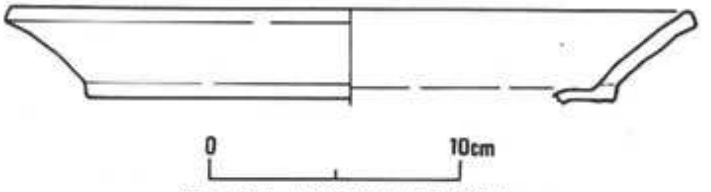
a．遺　構（図版第5）

D11区で検出された長楕円形の土壙である。長さ190cm，幅90cmを測る。南側に平坦なテラスをもち，階段状の掘り方を呈す。テラス部分の深さは13cm，最深部で30cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土の単層で，炭化物を若干含むが特に顕著な堆積はみられない。埋土中より布留式土器が1点と，径5cm内外の焼成された粘土塊が12個体出土した。土壙2とは約7mの間隔をもつ。

（森下）

b．遺　物（第105図）

布留式期の壺口縁部片が1点のみ出土している。これは，二重口縁のもの[14]で，擬口縁の段がしっかりしており，形態的には古い様相を示すが，調整手法は主として横ナデを施しており，やや粗略化の傾向が看取される。　（高橋）



第105図　土壙1出土土器実測図

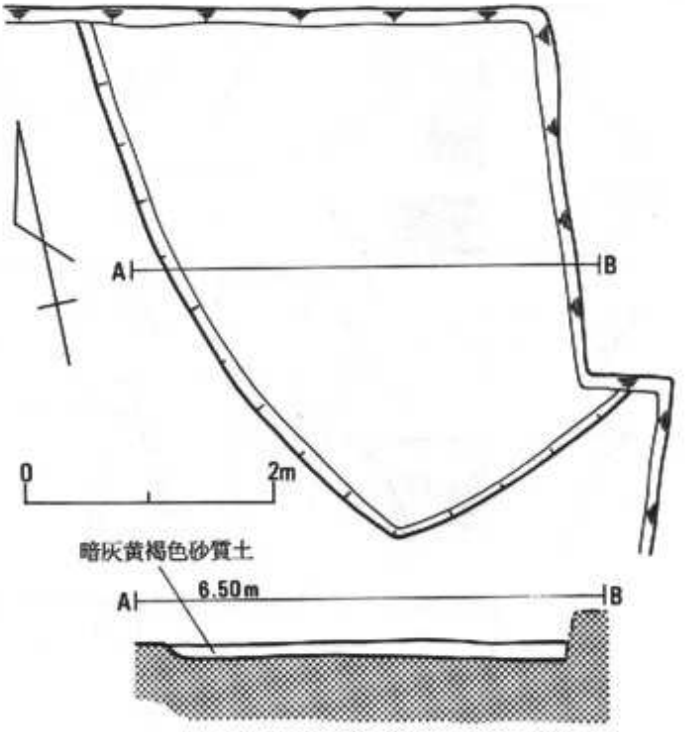
3）土　壙2

a．遺　構（第106図，図版第4）

A12・D12区にわたって検出された土壙である。遺構の大半は調査区外に位置しており，全体

の形状は不明であるが，方形プランの土壙の一角であろうと推定できる。住居址の可能性が考えられるが，柱穴は確認しておらず，明確な判断はできない。

上面は削平されており，深さは15cmを測る。埋土は炭化物を多く含む暗灰黄褐色砂質土の単層である。遺構内より多量の布留式土器が出土した。小片が多く全面にわたって包含されており，特に顕著な分布の粗密はみられない。おそらく，遺構の廃絶時には，ゴミ溜めと化していたであろうことが察せられる。　（森下）



第106図　土壙2実測図

b．遺　物（第107・108図）

土壙2では，いわゆる布留式土器がまとまって出土した。出土状況からは一括投棄されたと考え難いが，型式的に大きな差が認められず，比較的短期間のうちに埋没したと思われる。しかし，細片が多いため，図化し得たものは一部に過ぎず，従って個体数の集計や個体の認定などについては，不充分とならざるを得なかった。

器種としては，壺・甕・鉢・小型丸底壺・器台・高杯があり，器種構成は第14表の如くである。以下，各器種ごとに型式分類[15]と若干の記載を行っていく。

・壺形土器Ａ１　（９）

口縁部が２段に屈曲して開く二重口縁壺である。口径が25cm前後を測る大形品。９は，口縁部外面の稜が弱く，端部を丸く収めやや外上方へつまみ出す。

・壺形土器Ａ２　（５・７）

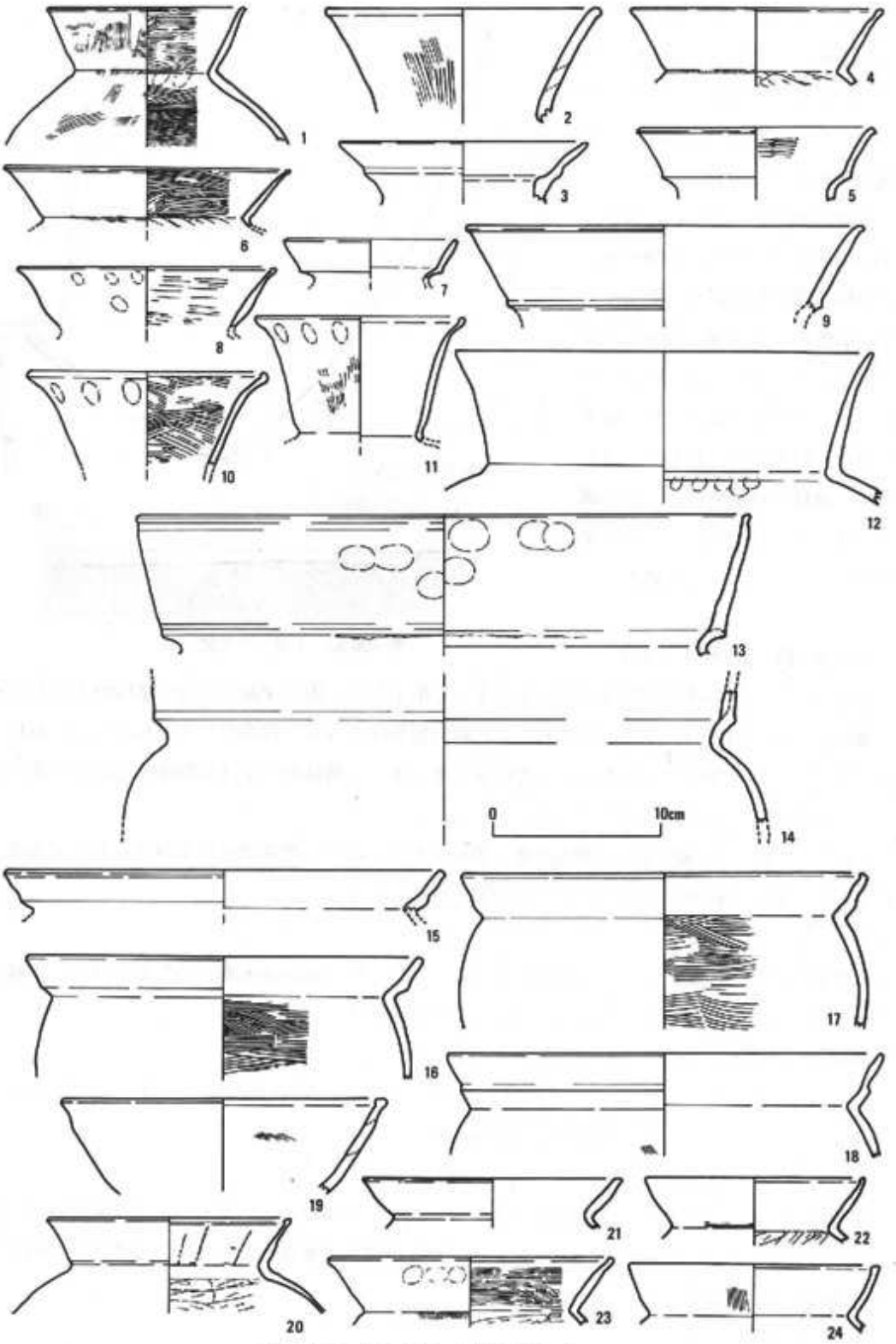
形態はＡ１類に準じるが，口径が10～15cm程度の小形品。５は口縁部が外反し，７は直線的に外上方に伸びる。いずれも口縁端部に外傾面をもつ。

・壺形土器Ｂ　（３）

直線的に外上方へ開く口縁部の外面に稜を巡らせ，二重口縁壺としたもの。壺Ａ類の退化形態と考えられる。３は，口縁端部を丸く収める。発志院遺跡土壙ＳＫ15中層出土土器群に類例を見る（藤井・岡本1980）。

・壺形土器Ｃ１　（１・４）

外上方に開く口縁部をもつ広口壺である。体部は球形を呈すると思われる。１は，やや内湾気



第107図　土壙2出土土器実測図・1

味に立ち上がる口縁部で，端部は外方へつまみ出す。4は，直線的に立ち上がる口縁部で，端部は丸く内厚させる。

・壺形土器C２　（２）

C１類に準じるが，比較的長く伸びる口縁部をもつもの。当遺構では，僅か１例が認められたに過ぎない。２は，口縁端部を外方へ丸くつまみ出す。

・壺形土器D　（10・11）

口縁部が長く立ち上がり，端部付近で弱く外反し，端部は丸く内厚させるもので，体部は，小形の球形を呈すると考える。管見では，他に類例を見ない。

・壺形土器E　（12）

緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部で，体部は球形もしくは，中位の張る偏球形を呈する大形の直口壺。当遺構では，１例のみの出土である。12は，口縁端部を尖り気味に丸く収める。厚手であるが，精緻な仕上がりである。

・甕形土器A１　（13・14）

短く外反する擬口縁上に直線的に立ち上がる口縁部を付加するもの。体部は倒卵形を呈する大形品である。形態的には，山陰系と考えられるが，布留式期には畿内各地でもかなり一般的な存在になると考えられる。13・14ともに堅緻な作りである。

・甕形土器A２　（15～18）

広義の二重口縁をもつものである。外上方へ短く開く口縁部が，弱い屈曲をもつ。口縁端部形態は，15・16は丸く収め，17はつまみ上げるため外傾面をもち，18は尖り気味に丸く収める。体部は概して張りの弱い長胴気味のものと思われる。

・甕形土器B１　（８・19・22）

甕B類は，いわゆる布留式甕であり，口縁部は内湾気味に外上方へ立ち上がり，体部は球形を呈す。また，調整は体部外面にハケメ，内面にヘラケズリを施す。

B１類は，口縁端部を丸く内厚させるもの。８が小さく内厚するのに対し，19はやや大きく，また22は内傾する面を持つ。

・甕形土器B２　（25～28）

口縁端部を内外へ肥厚させ上端面をもつもの。概して，上端面が内傾するもの(25・26)と外傾するもの(27・28)に分れる。

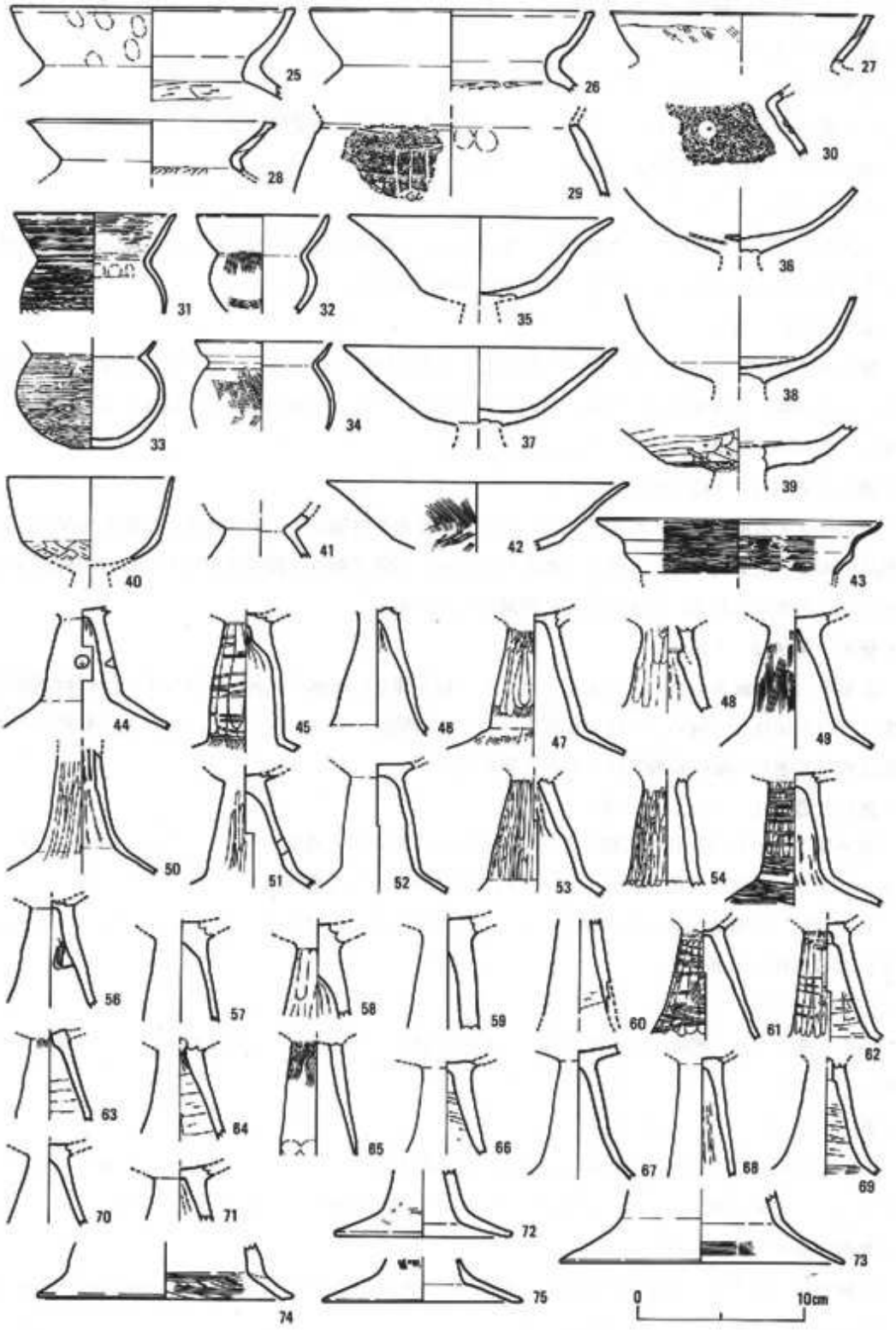
・甕形土器B３　（20・21・24）

口縁端部を肥厚させず，丸く収めるもの。内面頸部以下をヘラケズリするが，体部は，やや厚手となる。口縁端部は，20がやや外方へつまみ出し，21・24がそのまま丸く収める。

・甕形土器C　（６・23）

口縁部が，外上方へ外反気味に開く。頸部の屈曲は，B類に比して鋭い。口縁端部は，６が丸く内厚し，23は上方に弱くつまみ上げる。

・甕形土器D



第108図　土壙2出土土器実測図・2

短くS字状に屈曲する口縁部のもの。東海系と考えられる。1例のみ出土したが，口縁部細片であるため図示していない。これは，口縁端部を外上方へつまみ出し，尖らせて収める。

・施文土器　(29・30)

29・30とも甕形土器であると思われるが，胴部片であるので分類していない。

29は，肩部外面に横1本，縦3本を組み合わせた線刻文を施したものである。おそらく焼成後に施されたと考えられる。30は，同様に肩部外面に径約1cmの竹管文を2個施したものである。これは焼成前に施されている。両者とも小破片であるため，文様の全体の構成は不明である。

・鉢形土器　(43)

鉢は，1点のみ出土した。口縁部は二段に屈曲し，端部は丸く収め，小さく内厚する。体部は，浅い半球形のものと考えられる。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。

・小形丸底壺A1　(31)

口縁部径が体部最大径を凌ぐもの。口縁部は直線的に外上方へ伸び，体部は球形を呈す。外面全面と口縁部内面に丁寧なヘラミガキを施す。31は赤褐色を呈し，薄手の精製品である。

・小形丸底壺A2　(32)

形態はA1類に準ずるが，口縁部・体部の調整にナデやハケを多用するもの。32は口縁部に比して，体部が小振りであり，器壁はやや厚いものである。

・小形丸底壺B1　(33)

口縁部が体部に比して短く外上方に開き，口縁部径が体部最大径と等しいか，それ以下のもの。調整はヘラミガキを多用する。33は偏球形を呈する体部で，器壁は厚手である。

・小形丸底壺B2　(34)

形態はB1類に準ずるが，調整にハケを多用するもの。34は，体部が球形を呈し，器壁は薄手である。

・器台形土器　(41)

器台は，わずか1例のみ認められた。これは受部と脚部が貫通し，受部は内湾気味に立ち上がり，脚部は直線的に開く，やや厚手のものである。類例を小若江北遺跡出土土器群に求められる(坪井1956)。

・高杯形土器A　(39)

外面の杯底部と口縁部の境に稜[16]を残すもの。口縁部は外反して外上方へ伸びる。39を含め4点確認したが，いずれも口縁端部まで復元できなかった。39は，精良な胎土であるが，かなり厚手のものである。調整は，板ナデを施す。

・高杯形土器B1　(37)

杯底部よりなだらかに口縁部へ移行するもの。口縁部は直線的に外上方へ開く。37は，杯部をナデて仕上げる。

・高杯形土器B2　(35・42)

形態はB1類に準ずるが，口縁部が外反する。35は強い外反を示し，42は弱い外反を示す。

・高杯形土器B３　(36)

形態はB１類に準ずるが,口縁部が内湾気味に外上方へ開くもの。36は，杯底部に篦状工具によると思われる不定方向の沈線が見られる。

・高杯形土器C　(38・40)

杯底部からゆるやかに内湾して立ち上がる口縁部をもつ椀状の杯部。40は，杯底部にヘラケズリを施しており，器壁は全体に薄く仕上げる小形品である。

・高杯形土器脚部　(44～75)

脚部の出土量は非常に多いが，杯部の接合し得るものは認められなかった。脚部はいずれも中空のものであるが，大きく２類型に分類できる。一方は，脚柱部から裾部へ屈曲をもって移行するもの(ａ類)であり，もう一方は，明瞭な屈曲をもたず，なだらかに移行するもの(ｂ類)である。さらに，ａ類は脚柱部の形態差によってａ１・ａ２に分類できる。ａ１類は脚柱部の中央に弱いふくらみを持つもの，ａ２類はふくらみを持たず直線的なものである。全体的に見て，ａ類に精製のものが多く，ｂ類に粗製品が多いようである[17]。

また，透孔を穿つものは少なく，図示したものの中では，脚柱部下３分の１辺りに円形の二方透しを穿つもの(51)が１点のみである。また44は，脚柱部ほぼ中央に未貫通の円錐状の穿孔を１箇所施す。

調整で目を引くのは，65である。65はｂ類であるが，精緻な作りであり，脚柱部上半にハケ状工具により一種の文様状に調整を施している。　(高橋)

４）小　結

以上，土壙１・土壙２の遺構と遺物について述べてきた。両者とも布留式土器を出土している。土壙１では壺口縁１点のみであるので明確な時期を与えることはできないが，土壙２からは，一応各器種に及ぶ多量の土器群が検出された。本項では，土壙２出土土器群の時期的位置づけについて考察を加え，小結としたい。

土壙２出土土器群については，出土状況から，一括資料とは考え難いが，先述のように型式的に大きな差は認められないことから，これらは比較的短期間のうちに埋没したと考えられる。

まず，壺では，装飾を施すものは全くなく，丁寧な調整手法を施すものはわずかに認められるが，全般に手法の粗略化が看取される。特に，Ａ１類は，土壙１出土土器[18]に比しても，擬口縁の屈曲及び段が弱いことから新しい要素と考えられる。

甕では，いわゆる布留式甕(Ｂ類)が主体を占めるが，比較的新しいと考える口縁端部形態であるＢ２・Ｂ３類が主流となっており，さらに口縁部，体部ともにやや厚手のものが目立つ。調整手法では，体部内面に施すヘラケズリが頸部より下がった位置以下に施されるものがある。また，Ａ1類は山陰系と考えられる大形甕であるが，体部内面に明確なヘラケズリは施されていないようである。

精製三種土器のうち，小型丸底壺では，たとえば，31は内外面とも丁寧にヘラミガキが施され

た赤褐色を呈する精製品であるが，33は丁寧なヘラミガキが施されるものの，厚手で体部が発達しており，精製品とは言い難い。他にも同様に，手法が粗略化する粗製品であり，精製品はわずかである。鉢は，有段口縁のもので，内外面とも丁寧にヘラミガキを施す精製品である。器台は，磨滅のため調整手法は明確ではないが，精良な胎土をもつ。これら精製三種土器は，第14表に示した如く，小型丸底壺の個体数に対して，器台，鉢の個体数が極端に少ないことから，セット関係としては不充分な内容を示している。

第14表　土壙2出土土器器種構成表

［*高杯については脚部個体数により算出した．（ ）内：%］

器種	壺	甕	鉢	小型丸底壺	器台	高杯*		総数
							脚部	
	A1 A2 B C1 C2 D E	A1 A2 B1 B2 B3 C D		A1 A2 B1 B2		A B1 B2 B3 B C	a b	
個体数	1 3 1 7 1 2 1	2 4 6 16 18 11 1	1	1 1 1 1 12	1	4 1 2 1 12 5	26 6 9	133
	16 (12.0)	58 (43.6)	1 (0.8)	16 (12.0)	1 (0.8)	25 (30.8)	41	133 (100)

高杯においても，杯部では粗製品が大半を占めており，擬口縁手法により成形されるものも少ない。また，脚部においても大部分が粗製品である。しかし，脚柱部外面にヘラミガキを施すものや胎土の精良な製品もわずかながら存在している。

以上の点から，全体として，精製品も存在するが，調整手法等に粗略化の傾向が顕在化するものが大半を占める。精製三種土器においても，わずかにセット関係を保っていると考えられるが，セット関係の崩壊を示唆する内容である。したがって，土壙2出土土器群には，布留式土器の標式とされてきた小若江北遺跡出土土器群[19]に後出する時期，つまり大和の上ノ井手遺跡井戸ＳＥ030下層（安達・木下1974），摂津の北条遺跡河川状遺構（柳本1983）出土土器群に併行する時期があたえられよう。

また，当遺跡では，縄文晩期から弥生後期まで，いわゆる生駒山西麓産の胎土をもつ土器が多く出土しているが，布留式土器群には，胴部細片も含めて，全く生駒山西麓産の胎土を持つ土器が存在しないことも留意されよう。　（高橋）

弥生以降の土器（布留式）観察表

土壙1出土土器　（第105図）

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
1	壺 A1	口径26.8 口縁高3.6 残高　3.8	○ 0.5～1 良好 暗灰茶色	二重口縁。一旦水平近く開いた擬口縁上に若干外反して大きく開く口縁部を付加する。端部は外傾面を持つ。	屈曲部は擬口縁化。調整は磨滅のため不明。外面横ナデか。	1	

土壙2出土土器　（第107・108図）

1	壺 C1	口径 12.0 (頸径 8.6) 口縁高3.6 残高　8.3	◎ ～3 良好 淡灰褐色	口縁部は内湾気味に外上方へ立ち上がり，丸く収め軽く外側へ肥厚する端部。頸部は緩やかに屈曲し，肩部の張りは弱い。	外面の口縁部は縦，胴部は横のハケメを施したのちナデる。内面の口縁部は横ハケの後ナデを施し，胴部は強い横ハケを施す。	82 内面赤褐色	
2	壺 C2	口径 16.2 残高　6.8	○ ～1 良好 淡褐色	大きく外反して開く口縁部。端部は丸く収め外側に肥厚する。	外面は縦ハケの後，横ナデを施す。	9	
3	壺 B	口径 14.7 口縁高3.4 残高　3.7	○ 0.5～2 良好 淡褐色	緩やかに二段に屈曲して開く口縁部。端部は丸く収める。	内面は横ナデ。	13 内面暗褐色	
4	壺 C1	口径 15.0 口縁高3.7 残高　4.6	○ 0.5～1 やや軟 淡赤褐色	頸部で強く屈曲して外上方に直線的に立ち上がる口縁部。端部は内厚する。	外面はハケの後横ナデ。内面の口縁部は横ナデ，頸部以下はヘラケズリを施す。	11	56-3
5	壺 A2	口径 13.8 残高　4.4	◎ 0.5～1 良好 淡灰褐色	外反して開く擬口縁上にさらに外反する口縁を付加。端部は外傾面を持つ。	外面はナデ。内面は横ハケの後ナデを施す。	15	
6	壺 C	口径 17.4 口縁高3.0 残高　3.5	○ ～1 良好 灰黄色	強く屈曲した頸部から外上方へ短く立ち上がる口縁部。端部は内厚させる。	外面は横ナデ。頸部にはハケメが若干残る。内面の口縁部は横ハケ，頸部以下はヘラケズリを施す。	105	
7	壺 A2	口径 10.7 残高　2.5	○ ～2 やや軟 灰白色	短く外反した擬口縁上にさらに外上方へ開く口縁を持つ。端部は面を持つ。	外面は丁寧なナデを施す。	103	
8	壺 B1	口径 15.8 残高　3.6	◎ ～0.5 良好 赤褐色	内湾気味に外上方へ開く口縁部。端部は丸く内肥する。	外面は横ナデ。口縁端部には指頭圧を加える。内面は横ハケの後，ナデを加える。	104	
9	壺 A1	口径 23.4 残高　5.2	◎ ～2 良好 淡灰褐色	直線的に外上方に開き，稜を持つ口縁部。端部は丸く収め外側へ肥厚させる。	内外共にナデ調整を施す。	67	
10	壺 D	口径 14.5 残高　6.6	◎ ～1 やや軟 灰褐色	外上方へ大きく外反する口縁部。端部は内側に丸く肥厚させる。	外面は横ナデ。端部付近には指頭圧を加える。内面は不定方向のハケメを施す。	102	
11	壺 D	口径 12.6 口縁高7.0 残高　7.5	○ ～2 やや軟 暗褐色	頸部で屈曲し，外上方へ立ち上がり外反して終わる口縁部。端部は丸く肥厚させる。	内外共磨滅しているが，外面には縦ハケが残る。端部付近に指頭圧を加え，外反させる。	101	
12	壺 E	口径 25.0 口縁高7.2 残高　9.0	○ ～4 やや軟 赤褐色	外上方へ外反しながら立ち上がる口縁部に端部は尖り気味に丸く収める。	外面はナデ。内面はナデ，頸部付近には，指頭圧痕が顕著である。	41	

13	甕 A 1	口径 34.9 残高 6.5	◎ ～3 良好 白褐色	短く外反する擬口縁上にほぼ垂直に立ち上がる口縁を付加する。端部は内傾面を持つ。	内外面共指頭圧を加えた後，ナデを施す。	81 内面明褐色	
14	甕 A 1	残高 8.0 (頸径33.4)	◎ 2～3 良好 灰褐色	短く外反する擬口縁上にほぼ垂直に立ち上がる口縁を付加する。体部は肩が張る。	内外面共ナデを施す。	66 内面明褐色	
15	甕 A 2	口径 26.2 残高 2.5	○ ～2 やや軟 淡灰褐色	短く二段に屈曲して外上方へ開く口縁部。端部は丸く収める。	外面はナデを施す。	60	
16	甕 A 2	口径 23.8 口縁高2.4 残高 7.2	○0.5～2 やや軟 淡褐色	短く二段に屈曲して外上方へ開く口縁部。端部は丸く収める。胴部は張りの弱い球形と思われる。	内面の胴部は横ハケ，口縁部はナデを施す。	8	
17	甕 A 2	口径 24.0 口縁高2.7 胴径 24.3 残高 9.2	○ 1～2 やや軟 灰白色	短く二段に屈曲して外上方に開く口縁部。端部はつまみ上げるように内厚させる。胴部は張りの弱い球形と思われる。	外面は磨滅がひどいが，若干ハケメが残る。内面の口縁部はナデ，胴部は横ハケの後ナデを施す。	68	
18	甕 A 2	口径 25.8 口縁高3.4 残高 5.3	○ 1～2 やや軟 淡灰褐色	短く二段に屈曲して外上方に立ち上がる口縁部。端部は丸く収める。胴部は張りの弱い球形と思われる。	内外面共磨滅がひどいが，胴部外面に若干ハケメが残る。	59 黒斑	
19	甕 B 1	口径 19.4 残高 5.6	○ ～1 良好 灰白褐色	内湾気味に外上方へ立ち上がる口縁部に端部は丸く内厚する。	外面は丁寧な横ナデ。内面は磨滅ひどく不明。	10 内面気泡状孔が顕著	
20	甕 B 3	口径 15.2 口縁高2.2 残高 3.0	○ ～2 良好 淡白褐色	内湾気味に外上方へ短く立ち上がる口縁部に端部は水平に近い狭い面を持つ。	内外面共ナデを施す。	71	56－ 2
21	甕 B 3	口径 13.2 口縁高3.0 残高 3.9	◎ ～1 良好 淡白褐色	内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部に端部は薄く丸く収める。	外面は頸部に横ハケが3条残るが全体にナデを施す。内面胴部へラケズリ，口縁部ナデを施す。	12 黒斑	
22	甕 B 1	口径 14.6 口縁高2.8 残高 5.8	◎ ～1 良好 淡白褐色	若干外反気味に外上方へ立ち上がる口縁部に端部は丸く内厚させる。胴部は肩の張る球形と思われる。	外面は横ナデ。内面口縁部は横板ナデ，頸部以下にはヘラケズリを施し，口縁端部は口縁部調整後内側に折り込む。	72	
23	甕 C	口径 17.1 口縁高3.3 残高 4.1	◎ 1～2 やや軟 褐色	「く」の字に屈折する頸部から外反気味に外上方へ立ち上がる口縁部。端部はつまみ上げ状に尖がる。	外面は口縁部ナデ，胴部は縦ハケの後ナデを施す。内面の口縁部は横ハケ，頸部以下はヘラケズリを施す。	62 内面灰茶色	
24	甕 B 3	口径 14.8 口縁高3.2 残高 4.0	○ ～2 やや軟 灰褐色	内湾して外上方に立ち上がる口縁部に端部は丸く収める。	外面はナデ施すが，縦ハケ残る。内面は横ナデを施す。	63	
25	甕 B 2	口径 17.0 口縁高3.5 残高 5.5	○0.5～2.5 良好 淡灰褐色	内湾して立ち上がる口縁部に端部は内傾する面を持つ。	外面は指押えによる成形後，ナデを施す。内面の口縁部は丁寧なナデ，頸部以下は横ヘラケズリを施す。	64	
26	甕 B 2	口径 16.8 口縁高3.4 残高 4.8	○ ～3 良好 淡灰褐色	内湾して外上方へ立ち上がる口縁部に端部は内傾する面を持つ。	外面はナデを施す。 内面の口縁部はナデ，頸部以下は横ヘラケズリを施す。	57 外面黒斑	
27	甕 B 2	口径 15.7 残高 2.9	○ ～1 良好 灰茶白色	内湾して外上方へ立ち上がる口縁部に端部は面を持ち，若干外傾する。	外面はハケを施した後，ナデて消去する。 内面はナデを施す。	106	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
28	甕 B2	口径 15.1 口縁高2.4 残高 3.1	○ ～1 良好 灰茶白色	内湾して外上方へ立ち上がる口縁部に端部は外傾する面を持つ。	外面は強いナデを施す。内面の口縁部はナデ，頸部以下はヘラケズリを施す。	107	
29	甕	頸径 15.0 残高 4.4	◎ ～3 良好 赤褐色	張りの弱い肩部。外面に横1条，縦3条の線刻文様が焼成後に施されているが，文様の実体は不明。	外面はハケを施した後，ナデを施す。頸部には強い横ナデのため凹線状に粘土が盛る。内面は頸部に指頭圧痕を加えナデを施す。	73 内面灰褐色 ＊外面線刻文様	
30	甕	残高 3.8	○ ～2 やや軟 暗灰褐色	「く」の字に屈折する頸部から直線的に広く肩部。肩部には竹管文が約1cmの間隔で2つ施される。	内外面共磨耗ひどく不明。	20 ＊外面竹管文	
31	小型丸底壺 A1	口径 9.8 口縁高2.9 胴径 8.7 残高 6.0	◎ ～0.5 良好 淡赤褐色	口縁部は内湾気味に外上方へ開き，端部はつまみ上げ状に尖らせる。胴部は腰の張る偏球形を呈する。	外面は口縁部ナデ，胴部上半ハケメ，胴部下半ヘラケズリの後，丁寧なヘラミガキを施す。内面は口縁部ナデの後ヘラミガキを施す。頸部付近に指頭圧痕が見られる。	79	56－4
32	小型丸底壺 A2	口径 7.9 口縁高2.4 胴径 6.4 残高 5.8	◎ ～3 良好 淡褐色	口縁部は内湾して外上方へ大きく開き，端部は丸く収める。胴部は腰の張る小さな偏球形を呈する。	外面は口縁部ナデ，胴部上半縦ハケ，下半は横ハケを施す。内面はナデを施す。	77	56－5
33	小型丸底壺 B1	胴径 8.6 残高 6.5	◎ ～2 良好 淡赤褐色	腰の張る偏球形を呈す厚手の胴部。底部には径約2cmの安定面を持つ。	外面はハケの後，横ヘラミガキを丁寧に施す。内面は板ナデを施す。	78	56－6
34	小型丸底壺 B2	口径 8.2 口縁高1.3 胴径 8.6 残高 5.3	◎ ～0.2 良好 淡黄白色	口縁部は内湾して外上方へ短く開き，端部は尖らせる。胴部は正球形を呈す。	外面の口縁部はナデ，胴部上半はハケの後ナデ，下半はハケを施す。内面は丁寧なナデを施す。	80	
35	高杯 B2	口径 15.8 残高 5.3	○ ～3 良好 褐色	杯底部から緩やかに移行し大きく外反する口縁部に端部は丸く収める杯部。	内外面とも磨滅のため不明。	40	
36	高杯 B3	残高 4.0	◎ ～1 良好 淡赤褐色	杯底部から緩やかに移行し内湾しながら開く口縁部を持つ杯部。	外面は磨滅しているが，底部には不定方向のヘラ状工具による圧痕が見られる。内面はハケの後ナデを施す。	6 外面黒斑	
37	高杯 B1	口径 16.4 残高 4.7	◎ 0.5～2 良好 淡灰褐色	杯底部から緩やかに移行し直線的に外上方へ開く口縁部を持つ杯部。端部は丸く収める。	外面の口縁部はナデ。杯底部へラケズリの後ナデを施す。内面は磨滅のため不明。	5＋70	56－7
38	高杯 C	残高 5.2	◎ ～3 やや軟 赤褐色	杯底部から緩やかに移行し口縁部が立ち上がる椀状の杯部。	外面は口縁部ナデ。杯底部へラケズリの後ナデを施す。内面は磨滅のため不明。	76	
39	高杯 A	残高 2.7	○ ～5 良好 灰褐色	杯底部から稜を持って外上方へ外反気味に開く口縁部を持つ杯部。	外面は杯底部へラケズリの後ヘラミガキを施す。口縁部板ナデを施す。内面は磨滅のため不明。	39	
40	高杯 C	口径 9.8 残高 5.0	◎ ～1 良好 淡灰褐色	杯底部から緩やかに移行し口縁部が立ち上がる椀状の杯部。	外面は口縁部ナデ，杯底部は不定方向のヘラケズリを施す。内面はナデを施す。	58	

41	小型器台	くびれ部径 4.2 残高 2.6	◎ ～3 良好 灰褐色	受部と脚部が貫通する。内湾しながら外上方へ立ち上がる口縁部に直線的に開く脚部を持つ。	外面はナデを施す。内面は受部ナデ，脚部ヘラケズリの後ナデ，頸部には指頭圧を施す。	16	
42	高　杯 B 2	口径 18.0 残高 4.1	○ 0.5～2 やや軟 淡灰褐色	杯底部から緩やかに移行し外反して大きく開く口縁部を持つ杯部。端部は尖る。	外面は杯底部ヘラミガキ，口縁部ハケの後ナデを施す。内面はナデを施す。	18	
43	鉢	口径 17.2 残高 3.2	◎ ～1 良好 白褐色	なだらかに二段に屈曲して立ち上がる口縁部。端部は丸く内厚する。	内外面とも丁寧な横ヘラミガキを施す。この後内面はナデを施す。	追8	
44	脚 a 1	残高 7.4	○ ～2 やや軟 淡灰褐色	中央に弱いふくらみを持つ中空の脚柱部から屈曲して大きく開く脚裾部へ移行する。脚柱部ほぼ中央に未貫通の穿孔を焼成前に1個施す。	内外面とも磨滅のため詳細は不明だが，外面にはハケメが残り，内面にはシボリがある。	37	
45	脚 a 1	残高 8.2	◎ ～1 良好 淡褐色	中央から下部にかけて弱いふくらみを持つ中空の脚柱部から強く屈曲して大きく開く脚裾部へ移行する。	外面は脚柱部縦ヘラミガキの後，横ヘラミガキ，裾部にはハケを施す。内面の上端はシボリを施す。	33	56－8
46	脚 b	残高 7.7	○ ～2 やや軟 淡赤褐色	中央に弱いふくらみを持つ中空の脚柱部から緩やかに開く裾部。	内外面とも磨滅しているため詳細不明だが，内面にはシボリが施される。	74	
47	脚 a 2	残高 8.6	◎ ～2 良好 淡褐色	直線的に開く中空の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部に移行する。	外面は脚柱部ハケの後縦ヘラミガキ，裾部ハケを施す。内面はナデを施す。	38	
48	脚 a 1	残高 5.2	○ ～2 やや軟 淡灰褐色	中央にふくらみを持つ短い中空の脚柱部。粘土接合時の処理が不充分で内面には突起状の粘土帯が巡る。	外面は縦ヘラミガキを施す。内面はシボリが残る。	55	
49	脚 a 1	残高 8.0	◎ ～1 良好 灰褐色	杯底からなだらかに移行し中央に弱いふくらみを持つ中空の脚柱部。裾部は屈曲して開く。	外面はハケの後ナデを施す。内面はナデを施す。上端にはシボリが残る。	28	
50	脚 b	残高 7.4	○ ～1 良好 淡灰褐色	直線的に開く中空の脚柱部からなだらかに大きく開く裾部へ移行する。	外面は脚柱部ヘラミガキ，裾部ナデを施す。内面は裾部ナデを施す。脚柱部はシボリ残る。	26	
51	脚 a 2	残高 6.7	◎ ～1 軟 淡灰褐色	直線的に開く中空の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部へ移行する。脚柱部には1対の穿孔が施される。	外面は縦ヘラミガキ。内面は磨滅のため不明。穿孔は外からなされる。	21	
52	脚 a 1	残高 7.8	○0.5～3 やや軟 淡褐色	中央にふくらみを持つ中空の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部に移行する。	内外面とも磨滅のため詳細不明 。	35	
53	脚 a 1	残高 7.1	◎ ～1 良好 淡灰褐色	中央にふくらみを持って開く中空の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部へ移行する。	外面の脚柱部はヘラミガキ，裾部はナデを施す。内面の裾部はナデを施す。脚柱部上端にシボリあり。	27	
54	脚 a 1	残高 6.5	○ 1～3 良好 淡黄褐色	中央にふくらみを持つ中空の脚柱部。屈曲して裾部へ移行する。	外面　縦ヘラミガキを施す。	23	

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考	図版番号
55	脚 a 2	残高 7.9	◎ ～1 良好 褐色	ほぼ直線的に伸びる中空の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部へ移行する。	外面は脚柱部ハケの後，縦へラミガキを施し細かい横へラミガキを加える。裾部は横へラミガキ。内面はシボリあり。	31	
56	脚 b	残高 7.6	○ ～2 やや軟 淡赤褐色	緩やかに外反しながら開く脚柱部。内面中位に粘土突起が1.5cm幅で付着している。	内外面とも磨滅のため不明。内面は粘土突起とその上位にシボリあり。	32 内面淡赤褐色	
57	脚	残高 6.0	○ 1～2 やや軟 褐色	ほぼ直線的に開く中空の脚柱部。	内外面とも磨滅のため不明。	22 内面赤褐色	
58	脚	残高 5.6	◎ ～1 良好 淡赤褐色	ほぼ直線的に開く中空の脚柱部。厚手の製品。とくに杯底内面から脚柱内面上端の厚さは3.2cm。	外面は脚柱部縦へラミガキの後，ナデを加える。内面はシボリ。	53	
59	脚	残高 6.7	○ ～2 やや軟 淡赤褐色	ほぼ直線的に開く中空の脚柱部。厚手の製品。	内外面とも磨滅のため不明。	56	
60	脚	残高 5.6	◎ ～1 軟 淡赤褐色	若干外反しながら開く中空の脚柱部。	内面は横へラケズリを施す。	54 内面暗灰色	
61	脚 b	残高 6.9	◎ ～1 良好 褐色	外反気味に開く中空の脚柱部からなだらかに裾部に移行する。	外面は縦ハケの後，縦へラミガキを施し細かい横へラミガキを加える。	36	
62	脚 a 2	残高 7.1	◎ 0.5～1 良好 褐色	直線的に開く中空の脚柱部から屈曲してさらに開く裾部へ移行する。	外面は縦ハケの後，縦へラミガキを施しさらに細かい横へラミガキを加える。内面は横へラケズリ。	34 内面淡赤褐色	
63	脚	残高 5.5	◎ ～1 良好 灰茶色	直線的に開く中空の脚柱部。	外面は縦ハケの後，横へラミガキを加える。内面はとくに調整を施さず，粘土接合痕を明瞭に残す。	3 内面黄褐色	
64	脚 b	残高 5.6	◎ ～2 良好 淡灰褐色	やや外反気味に開く中空の脚柱部。	内面は横へラケズリを施す。上端にはシボリを残す。	30	
65	脚	残高 6.6	○ ～2 良好 白橙色	ほぼ直線的に開く中空の脚柱部。外面下部は指頭圧痕のため薄くなる。	外面は丁寧な縦へラミガキの後，上半部にはハケメを文様状に施す。下半部には指頭圧痕。内面は横へラケズリを施す。	1	
66	脚	残高 5.6	○ ～1 やや軟 赤褐色	やや外反気味に開く中空の脚柱部。杯底部へはなだらかに移行する。	内面は横へラケズリを施す。	25	
67	脚 a 2	残高 8.1	◎ ～1 良好 赤褐色	やや外反気味に開く中空の脚柱部から屈曲してさらに開く裾部へ移行する。杯底部へは屈曲して移行する。	内面は横へラケズリを施す。内面は裾部横ナデ。	2	
68	脚	残高 7.2	○ ～2 良好 赤褐色	直線的に開く中空の脚柱部。	内面は中位にシボリ残る。	4	
69	脚	残高 7.7	○ ～3	外反しながら開く中空の脚柱	内面は脚柱部は横へラケズリ	29	

	b		やや軟 赤褐色	部から，なだらかに裾部へ移行する。	を，裾部は横ナデを施す。	内面褐色	
70	脚	残高　4.8	◎　～1 やや軟 暗褐色	直線的に比較的大きく開く脚柱部。杯底部へは弱く屈曲して移行する。	内面は横へラケズリの後，ナデを施す。	52	
71	脚	残高　3.3	◎　～1 やや軟 淡灰褐色	直線的に開く中空の脚柱部。杯底部へは弱い屈曲を持って移行する。	内面はシボリ残る。	51	
72	脚 a 2	底径　10.3 残高　4.1	◎　～0.5 良好 赤褐色	直線的に開く中空の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部へ移行する。	外面はハケの後，ナデを施す。	75	
73	脚 a 2	底径　16.8 残高　4.3	◎　～1.5 やや軟 淡灰褐色	直線的に開く中空の脚柱部から屈曲して，さらに大きく開く裾部へ移行する。裾部は薄く仕上げる。	外面の脚柱部は縦ナデ，裾部は横ナデを施す。内面は裾部横ハケの後，ナデを施す。	65	
74	脚 a 1	底径　15.0 残高　3.3	○　～1 良好 白褐色	ふくらみを持つ脚柱部から，やや外反気味に短く開く裾部へ屈曲して移行する。裾端部は外傾する面を持ち，ナデのため凹みを有する。	外面はナデを施す。内面の脚柱部はナデ，裾部はハケの後ナデを施す。	7	
75	脚 b	底径　11.8 残高　2.6	○　～2 良好 白橙色	脚柱部からなだらかに移行し，内湾気味に開く裾部。裾端部は狭い平坦面を有する。	外面は脚柱部縦ハケ，裾部ナデを施す。内面は脚柱部ナデ，裾部ハケの後，ナデを施す。	24	

第2節　掘立柱建物および溝

1）概　要

11A調査の際，A10区の弥生遺物包含層最上面で，ほぼ東西に並ぶ柱穴列が検出され，また南壁際にもこれに平行する柱穴と思われるものが検出された。これが建物になる可能性が高かったため，南方へ拡張したところ，同様の柱穴が検出されたので，掘立柱建物と判断した。その後，11B調査においては，北方への続きは検出されなかったものの，南方および西方にこれと平行かつ同間隔にある柱穴が数個検出された。

溝は，11A調査の際，A8・A10区で検出された。11B調査では，以上の溝の他に，A11区で前回見落していたものが検出されたので，合わせて3条の溝が検出されたことになる。

この他に，出土遺物がないため，平安時代のものとは断定できないが，D10・11区にかけて，ほぼ楕円状に巡るピット群が検出された。その位置からみて，掘立柱建物に関連するものなのか

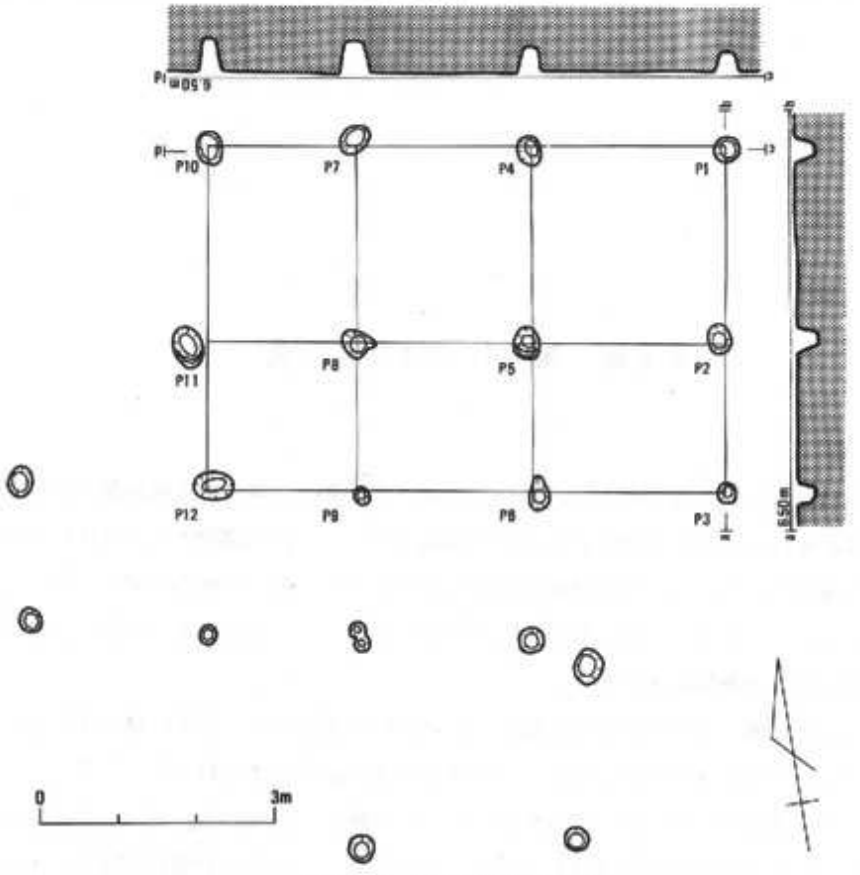
もしれない。また，D10区西方で南北に並ぶ小ピット2個，C10区南方でピット3個が検出された。このうちC10区のP3・P4は掘立柱建物にほぼ平行するので，この南方にあるいはもう1棟建物が存在する可能性もあろう。

2）掘立柱建物

a．遺　構（第109図，図版第2）

11A調査時点では，東西3間，南北2間の総柱建物と判断した。各柱穴間の間隔は，東西が東から2.5・2.25・1.9m，南北が北から2.5・1.9mの間隔であり，等間隔になっていない。柱穴11は，この間隔から西へ多少ずれている。これらの柱穴は，径25～40cmの円形ないし楕円形を呈し，深さは30～40cmであった。この建物の南北線は，磁北より9°30′東へ振れている。

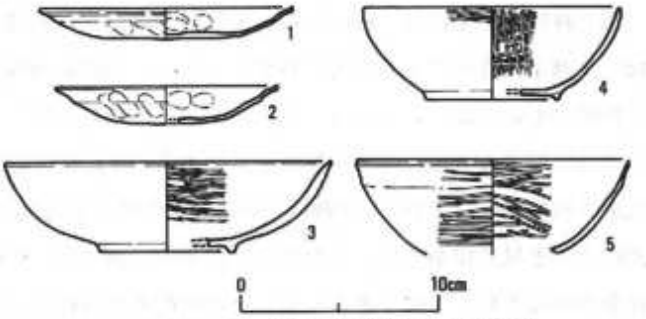
11B調査では，この掘立柱建物の南方に東西間隔が同じで，1.75m離れて柱穴3個，柱穴12の西方に2.25m離れて柱穴1個，そしてこれが交叉する南西位に柱穴1個が検出された。各柱穴の規模は，前述のものと同じである。これらは，11A調査での3間×2間の建物と平行する位置を有しているので，関連することは明白であるが，未検出の柱穴があって，4間×3間の建物になるのか，あるいは部分的な庇状のものになるのか，判断し難い。ともかく，建物自体としては11A調査時での判断の3間×2間の総柱建物と認識しておきたい。



第109図　掘立柱建物実測図

b．遺　物（第110図）

土師器　1・2は「て」字状口縁の皿で，復元口径13.0・11.4cm，器高1.6・1.9cm。両者とも灰白色を呈し，薄手の作りで，胎土は精良である。内面から口縁部外面にかけて横ナデ，体部・底部外面は未調整。1は柱穴1，2は柱穴3出土。



第110図　掘立柱柱穴出土土器実測図

黒色土器　すべて黒色土器A類。3は復元口径16.7cm，器高4.6cmで，体部の器壁が厚い。口縁部内面に1条の浅い沈線が巡る。内面底部付近にススが付着している。4は，復元口径13.0cm，器高4.3cm。5は，底部を欠失していて，復元口径14.0cmで，薄手の作りである。口縁端部がつまみ上げられた形状を呈す。3・5は柱穴5，4は柱穴3出土。

3）溝

a．遺　構（図版第3）

溝1・2は，ほぼ南北方向に平行して伸びている。検出時の幅は，溝1が0.4～1.4m，溝2が1.1～1.4mほどで，両者とも深さは10cm以内の浅いものであった。両溝の間隔は，2.5～3.5mである。掘立柱建物の南北軸とほぼ平行して走っていることから，当然この掘立柱建物と密接な関連を有する溝と考えて良かろう。

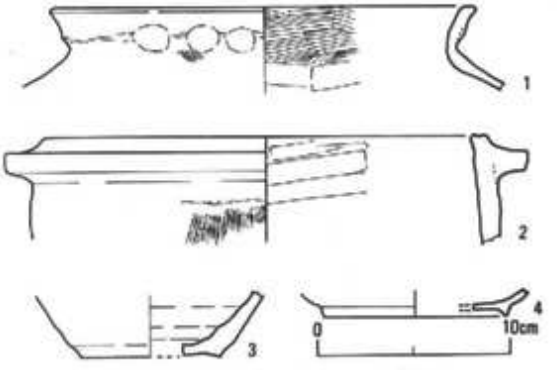
溝3は，掘立柱建物から西へ約20mほど離れてあり，溝1・2とは方向が異なり，やや斜めに伸びている。検出時の幅は1.1～1.6mほどで，深さは5cmであった。

これら3者の溝は北から南の方へ流れていたものと思われ，地形的にみても妥当であろう。

b．溝2出土遺物（第111図）

土師器　1は，復元口径21.4cmの甕で，茶褐色を呈す。口縁端部は平坦に処理されている。口縁部外面下方に指頭圧痕が認められる。外面は横ナデ，内面は口縁部横ハケで，それ以下は板ナデ。2は，復元口径22.6cmの羽釜で，砂粒を多く含み，暗灰褐色を呈す。口縁端部が若干凹み，口縁近くに顎を付す。体部外面は縦ハケ，顎下方から内面にかけて横ナデ。黒色土器　3は，黒色土器A類の底部片。復元高台径9.4cmで，高台は三角形状である。

須恵器　4は，復元底径7.2cmで，壺類の底部片と思われる。



第111図　溝2出土土器実測図

4）小　結

掘立柱建物の年代は，柱穴から出土した土師皿から推察できる。この土師皿は，『て』字状口縁で，薄手の作りであることが特徴的である。口酒井遺跡の近辺でみると，尼崎市金楽寺貝塚から類似のものが出土しており，9世紀後半～10世紀とされている（岡田・兼康1976）。また，平安京跡の例でみると，左京内膳町ＳＫ19出土の土師皿に近いものと思われ，これは10世紀後葉に比定されている（平良ほか1980）。黒色土器Ａ類も土師器と一括で出土しているので，ほぼ同時期のものと見て良かろう。したがって，平安京跡での年代観に従えば，この掘立柱建物は10世紀後葉を中心とした年代でとらえることが可能と思われる。次に溝に関しては，掘立柱建物柱穴出土のような土師皿は出土していないが，溝2出土の羽釜は，金楽寺貝塚でも出土していて，10～11世紀とされている(岡田1982)。この溝1・2に関しては，前述したように掘立柱建物と密接に関連するものとみられるので，掘立柱建物とほぼ同じ時期と考えておいて良かろう。溝3に関しては，その方向が以上の掘立柱建物や溝1・2と異なり，出土遺物も少ないため，不明である。

このように，掘立柱建物，溝1・2は，平安中期，ほぼ10世紀後葉の年代が考えられ，この時代の遺構・遺物が検出されたことは，今回の調査成果の一つに挙げても良いであろう。なお，本次調査のＡ・Ｃ・Ｄ区は，『伊丹市史』の条里復原によると，二条三里十五坪ないしは二十二坪に含まれるようであるが，『尼崎市史』によると二条四里に相当する(岡野ほか1966）とされていて，若干のくい違いはみられるものの，溝1・2は，ほぼ南北方向に向いており，そのような条里の痕跡を示すものであろう。　（定森）

第７章　出土土器の胎土の構成鉱物と その胎土の産地特定

要　旨

伊丹市口酒井遺跡出土の土器片には，胎土中に角閃石を含むものと含まないものとがある。含むものにも２種類がある。１つは普通角閃石のみを含み，他は普通角閃石とカンミングト角閃石とを含む。普通角閃石とカンミングト角閃石とを含む胎土は生駒山西麓の淡暗緑色を呈する粘土であると特定してよい。

１．はじめに

菅原正明氏は『生駒山西麓の土器』と呼称せられているものの胎土を，科学的に追求するため，チームを組織して調査研究に当り，その成果は昭和54年３月刊行の『東山遺跡』に収録せられている。

兵庫県伊丹市の口酒井遺跡は縄文晩期から平安時代に亘る複合遺跡である。ここでは各時代の土器片が豊富に出土した(弥生前期の土器も少量出土)。土器片の胎土は角閃石を含むものと含まないものとがあるが，角閃石は弥生中・後期の土器片の胎土のみならず，縄文晩期の土器片の胎土にも認められた。角閃石を含むと否とに拘わらず，今回筆者は本遺跡出土の土器片胎土につき，それらの構成鉱物を同定し，胎土として用いられた岩石の崩壊土(または粘土)の産地を特定できるかどうか，研究を試みた。

鉱物の同定は『鉱物種』のレベルに於いて行うことに勉めた。そのため偏光顕微鏡による薄片観察法とＸ線粉末回折法とを併用した。薄片観察に於いては種々の光学性を測定し，回折図形の解析に当ってはＡ．Ｓ．Ｔ．Ｍ．カードを十二分に活用した。カンミングト角閃石と曹灰長石との同定は本研究に於いては最も重要な意義をもつと考えられたので，これらの同定に当っては，サウス・ダコダ(アメリカ)産のカンミングト角閃石，ラブラドル(カナダ)産の曹灰長石についてもＸ線粉末回折図形を描出して，これらの図形と試料に含まれているカンミングト角閃石，曹灰長石の粉末回折図形とをそれぞれ比較して同定に誤りなきを期した。

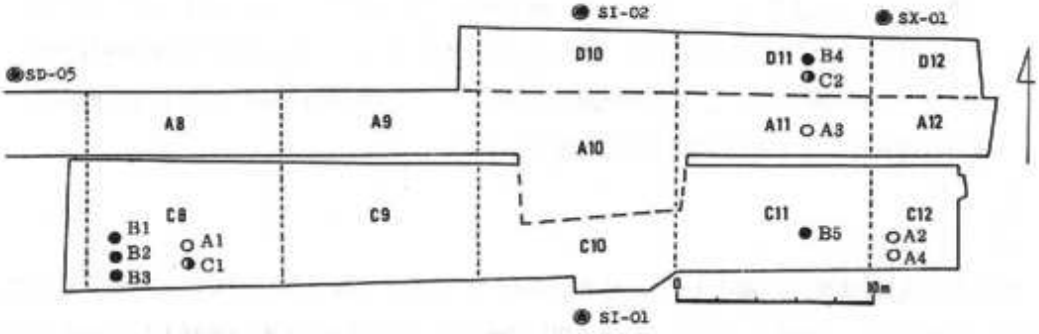
因みに，長石，角閃石などというものは鉱物種ではなく，鉱物学上の基本構造を同じくする鉱物種のグループ名である。長石には11種の，角閃石には27種の鉱物種がある。

２．試料の採取（第112図）

Ａ．縄文晩期の土器片

試料の採取地点は第112図に示してある。図のように，対称とした発掘区域は，Ａ８・Ａ９・A10・A11・A12，Ｃ８・Ｃ９・C10・C11・C12，D10・D11・D12区であり，試料はA11から１点，Ｃ８から５点，C11から１点，C12から２点，D11から２点を選びとった。これら11個

の土器片は肉眼観察によって，角閃石を含んでいるものをB，含んでいないものをA，判別困難なものをCとした。これにより，11個の土器片のうち，5個はBに，2個はCに，残りの4個はAに級別されることになった。Bに属するものには，1，2，3，4，5と番号を付し，同様にC及びAに属するものにも，それぞれ1，2および1，2，3，4と番号を付した。このようにして，各試料を例えばC8－B1，D11－C2のように表示した。



第112図　試料の採取地点

● 肉眼観察で角閃石を含むもの
○ 肉眼観察で角閃石を含まないもの
◑ 肉眼観察では何れとも判別困難なもの
} 縄文土器片
◉ 弥生式土器片

B．弥生中・後期の土器片

試料の採取地点は同じく第112図に示してある。試料は溝5から1点，落込1から2点，住居址1から1点，住居址2から2点を選びとった。これらの各試料は採取地点名を記号化して採用し，SD－05，SX－01，SX－01′，SI－01，SI－02，SI－02′と表示した。これらの土器片はそれぞれ甕胴部，同じく甕胴部，高杯口縁部，広口壺口縁部，高杯脚部，壺胴部である。

3．土器片の厚さと色調

縄文土器片の厚さと色調は第15表に，また弥生式土器片の厚さと色調は第16表に示してある。色調は多くの場合，表面と内部とで異なっているため，表面の色調と内部の色調とを併記しておいた。

4．粘土と胎土

造岩鉱物は水または温泉水などの働きを受けると変質する。造岩鉱物のうち，長石グループは主にカオリナイト，ハロイサイトなどに，雲母グループは主にカオリナイト，モンモリロナイト，バーミキュライト，緑泥石などに，角閃石グループや輝石グループは主に緑泥石に，橄欖石グループは主に蛇紋石に変質する。もとの鉱物を初生鉱物といい，初生鉱物が変質して新たに生成したものを二次鉱物という。石英は水や温泉水によって変質することはない。このような変質は徐々に進行する。二次鉱物の混合団塊を粘土という。しかし粘土中にはまだ変質していない初生鉱物の断片を混じている場合が普通である。粘土が流水によって流されて行く場合は，その間に可なり選別され，例えば『カオリナイト層』と呼ばれるような地層ができ上がることもある。

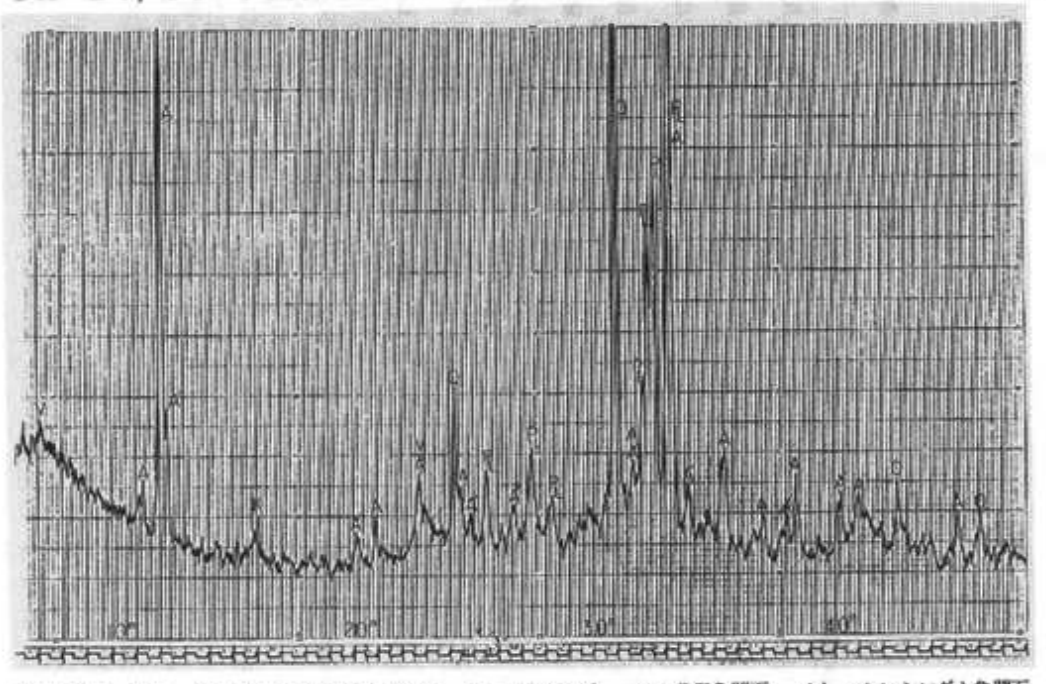
岩石が水または温泉水などによって変質して粘土を生成する場合，原岩石の相違によって生成する粘土の構成鉱物も相違する。粘土は土器，陶磁器の胎土として利用せられて来た。胎土の構成鉱物を同定することによって，もともとの粘土の構成鉱物を推定することができ(たとい焼成せられていても)，推定せられた構成鉱物の組合わせから粘土の原岩石を推定することが可能である場合がある。　二次鉱物の一粒一粒は一般に極めて小さく，肉眼で同定することは不可能である。二次鉱物の同定にはX線粉末回折法によるのが最もよい。

5．縄文晩期の土器片の胎土（第113図，第15表）

縄文晩期の土器片11個の胎土の構成鉱物を第15表の第7欄に掲げておく。構成鉱物の組合せから胎土として使用せられた素材(岩石の崩壊土，粘土)の原岩石を推定した。これらの結果を同じく第15表の第8欄に掲げておく。

C12－A4，C12－A2，C8－A1及びA11－A3の胎土は花コウ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)，D11－C2の胎土は閃緑岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)，C11－B5，C8－B2及びC8－B1の胎土は花コウ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)と閃緑岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)との混合物，D11－B4とC8－C1の胎土はメタ斑レイ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)と花コウ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)との混合物，最後にC8－B3の胎土は主としてメタ斑レイ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)であると判断せられる。

D11－B4，C8－C1及びC8－B3の胎土には普通角閃岩とカンミングト角閃岩とが含ま



第113図　C8－C1のX線粉末回折図形　P_L：曹灰長石，　A：普通角閃石，　A′：カンミングト角閃石
V：バーミキュライト，　Q：石　英，　K：正長石

第15表　伊丹市口酒井遺跡出土の縄文土器胎土の構成鉱物

No	試料表示	器種	年代	厚さ(mm)	色調	構成鉱物	推定せられる素材	備考
1	C12－A4	深鉢	晩期	7～8	表面：赤褐色 内部：黒色	石英　正長石　微斜長石(少量) 灰曹長石　白ウンモ　黒ウンモ(少量)	花コウ岩の崩壊土(または粘土).	黒ウンモは変質し易い。変質して大部分は流出したものと思われる。
2	C12－A2	深鉢	晩期	4～5	表面：灰褐色 内部：灰褐色	石英　正長石　微斜長石(少量) 灰曹長石　白ウンモ　黒ウンモ(少量)		
3	C8－A1	深鉢	晩期	5～6	表面：黒灰色 内部：茶灰色	石英　正長石　微斜長石(少量) 灰曹長石　白ウンモ　黒ウンモ(少量)		
4	A11－A3	深鉢	晩期	5～6	表面：褐色 内部：黒色	石英　正長石　微斜長石(少量) 灰曹長石　白ウンモ(少量)　黒ウンモ(少量)		
5	D11－C2	深鉢	晩期	5～6	表面：茶褐色 内部：黒茶色	石英(少量)　正長石(少量) 中性長石　普通角閃石	閃緑岩の崩壊土(または粘土)	
6	C11－B5	深鉢	晩期	4～5	表面：茶褐色 内部：黒褐色	石英　正長石　微斜長石(稀) 灰曹長石　中性長石　普通角閃石	花コウ岩の崩壊土(または粘土)と閃緑岩の崩壊土(または粘土)との混合物	
7	C8－B2	深鉢	晩期	4～5	表面：赤褐色 内部：黒褐色	石英　正長石　微斜長石(稀) 灰曹長石　中性長石　普通角閃石		
8	C8－B1	深鉢	晩期	5～7	表面：茶褐色 内部：黒色	石英　正長石　微斜長石(稀) 灰曹長石(少量)　中性長石　普通角閃石		
9	D11－B4	深鉢	晩期	4～5	表面：黒茶色 内部：茶褐色	石英　正長石(少量)　曹灰長石 普通角閃石　カンミングト角閃石(少量) バーミキュライト(少量)	メタ斑レイ岩の崩壊土(または粘土)と花コウ岩の崩壊土(または粘土)との混合物.	酸性岩と塩基性岩との接触部にはバーミキュライトが生成する。
10	C8－C1	深鉢	晩期	5～6	表面：茶灰色 内部：茶褐色	石英　正長石(少量)　曹灰長石 普通角閃石　カンミングト角閃石(少量) バーミキュライト(少量)		
11	C8－B3	深鉢	晩期	6～7	表面：茶褐色 内部：茶褐色	石英(少量)　白ウンモ(少量)　曹灰長石 普通角閃石　カンミングト角閃石(少量) バーミキュライト	主としてメタ斑レイ岩の崩壊土(または粘土).	

れている。この事実は極めて重要である。胎土として用いられた岩石の崩壊土(または粘土)の産地を特定し得る手懸りとなる筈である。C8－C1のX線粉末回折図形の一部を第113図として掲げておく。X線粉末回折図形の描出はすべて次の条件下で行われた。

Radiation	Co－Kα
Voltage & Current	35kV & 10mA
Time constant	4 sec.
Scanning speed	1°／min.
Chart speed	2 cm／min.
Room temperature	21 ℃

6．弥生中・後期の土器片の胎土（第16表）

弥生中・後期の土器片6個のうち，SX－01′，SI－02′，SD－05及びSI－01は褐・茶ないし赤色系の色調を帯び，SX－01とSI－02は白色系の色調を呈していた。よって前者をBグループとし，後者をAグループとした。

（1）　Bグループ

Bグループに属する土器片4個の胎土の構成鉱物を第16表の第7欄に掲げておく。構成鉱物の組合わせから胎土として使用せられた素材(岩石の崩壊土，粘土)の原岩石を推定した。これらの結果を同じく第16表の第8欄に掲げておく。

SX－01′，SI－02′の胎土は花コウ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)，SD－05の胎土は花コウ閃緑岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)，SI－01の胎土は主としてメタ斑レイ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)であると判断せられる。SI－01の胎土にも普通角閃石とカンミングト角閃石との2種の角閃石が含まれている。よって，Bグループに属するものの胎土は先きに述べた縄文晩期の土器片の胎土と同種のものである。

SX－01′とSI－02′の表面の部分は淡ベンガラ色を呈し，またSI－02′では内部の胎土も多少赤味を帯びていたが，このような色調は赤鉄鉱(ベンガラ)によるものであることが理解される。SD－05とSI－01の胎土中にも赤鉄鉱の存在が認められた。

このような事実から弥生中・後期に於いては，土器の製作時にベンガラを土器の彩色に用いたと思われる。

（2）　Aグループ

Aグループに属する土器片2個の胎土の構成鉱物並びに構成鉱物の組合わせから胎土として使用せられた素材(岩石の崩壊土，粘土)の推定原岩石を第16表の第8欄に掲げておく。これらの胎土は半花コウ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)であると判断せられる。半花コウ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)は今日陶磁器の原料として広く用いられている。

第16表　伊丹市口酒井遺跡出土の弥生式土器胎土の構成鉱物

No.	試料表示	器種	年代	厚さ(mm)	色調	構成鉱物	推定せられる素材	備考
1	SX－01′	高杯（口縁部）	中期末葉	6～5	表面：ベンガラ色 内部：灰褐色	石英　正長石　微斜長石(少量) 灰曹長石　白ウンモ　黒ウンモ(少量) 赤鉄鉱（表面にのみ）	花コウ岩の崩壊土（または粘土）にベンガラ混入	黒ウンモは変質し易い。変質して大部分は流失したものと思われる。
2	SI－02′	壺（胴部）	後期	6～7	表面：ベンガラ色 内部：赤灰色	石英　正長石　微斜長石（少量） 灰曹長石　白ウンモ　黒ウンモ(少量) 赤鉄鉱		
3	SD－05	甕（胴部）	中期後半	2～3	表面：茶褐色 内部：黒茶色	石英　正長石　微斜長石(少量) 灰曹長石　中性長石　白ウンモ 普通角閃石　赤鉄鉱	花コウ閃緑岩の崩壊土（または粘土）にベンガラ混入	
4	SI－01	広口壺（口縁部）	後期	4～17	表面：茶灰色 内部：灰褐色	石英(少量)　曹灰長石　普通角閃石 カンミングト角閃石(少量) バーミキュライト　赤鉄鉱	主としてメタ斑レイ岩の崩壊土（または粘土）にベンガラ混入	酸性岩と塩基性岩との接触部にはバーミキュライトが生成する
5	SX－01	甕（胴部）	中期末葉	5～7	表面：淡黄白色 内部：淡黄白色（所々に黒条）	石英　正長石　微斜長石　曹長石(少量) 1200℃，12時間加熱すれば， 石英，ムライト，クリストバライト， 正長石(少量)，曹長石(少量)	半花コウ岩の崩壊土（または粘土）	
6	SI－02	高杯（脚部）	後期	8～5	表面：灰白色 内部：灰白色	石英　正長石　微斜長石　曹長石 1200℃，12時間加熱すれば， 石英，ムライト，クリストバライト		

7．胎土の産地考察

大阪市周辺地域で出土する弥生式土器のうち，その色調が褐色系のものの胎土については，生駒山西麓の粘土が用いられたと考えられている。その根拠はこれらの土器の胎土には屢々角閃石の結晶が存在しているためである。

しかし，角閃石は種々の中性岩の主要構成鉱物であり，酸性岩の構成鉱物である場合もある(角閃石花コウ岩など)。のみならず，種々の変成岩やある種の堆積岩の構成鉱物でもある。したがって，胎土の中に角閃石が存在するからとて直ちにそれが生駒山西麓の粘土であるとはいえない。

生駒山は主として「メタ斑レイ岩」(角閃石斑レイ岩ともいう)から成る。メタ斑レイ岩の岩体は東西約3km，南北約4kmに達し，岩体の北・東・南側は領家コンプレックスに接し，西側は鮮新一更新世の堆積土(大阪層群)でおおわれている。領家コンプレックスは多少変理が発達した花コウ岩であるが，所どころ小規模に花コウ閃緑岩，石英閃緑岩，閃緑岩などに移行している。したがって，生駒山の西麓にはメタ斑レイ岩を始め，これら諸種の岩石に由来する粘土が存在していてもよい筈である。

花コウ岩，花コウ閃緑岩，石英閃緑岩，閃緑岩などの酸性岩や中性岩は近畿地方でも諸所に分布し

ている。しかしメタ斑レイ岩(塩基性岩)は生駒山のほか近畿地方では奈良県・三重県で合せて数個所小規模なものが見られるに過ぎない。

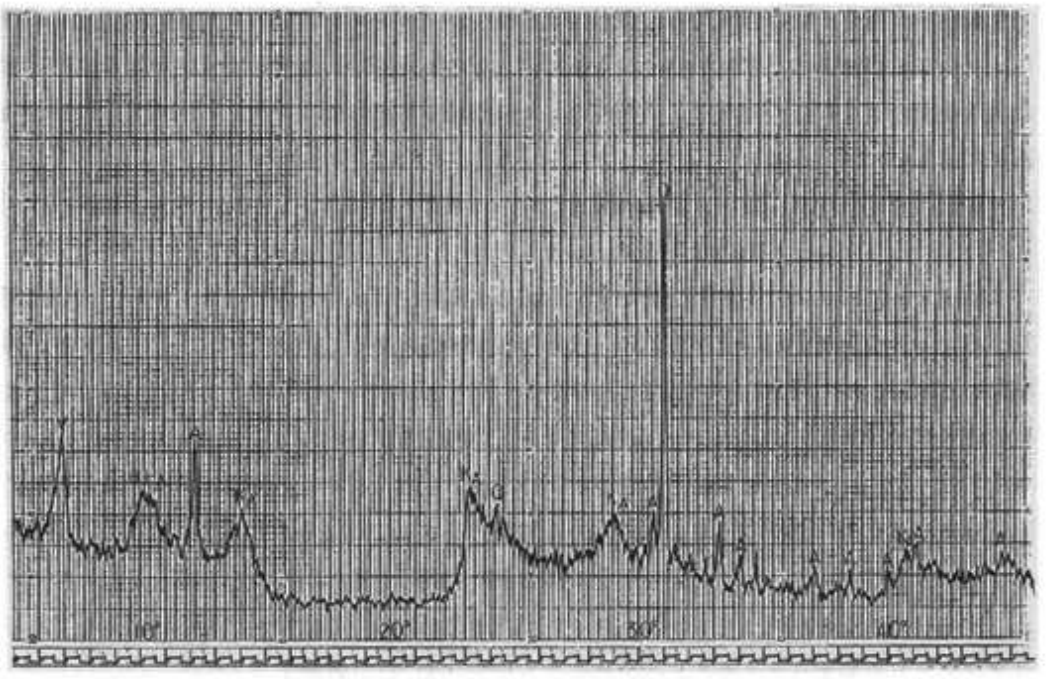
口酒井遺跡出土の縄文晩期の土器片D11－B4，C8－C1，C8－B3並びに弥生後期の土器片SI－01の胎土はメタ斑レイ岩の崩壊土(またはそれに由来する粘土)であると判断せられたが，これが生駒山西麓に産する粘土であると特定できるか否か，これが目下の課題である。

8．生駒山西麓粘土（第114図，第17表）

昭和62年5月9日，筆者は南　博史，森下英治，高橋　潔，福田　敬の諸氏と共に，下村晴文，才原金弘両氏の案内で東大阪市上四条町の生駒山メタ斑レイ岩体の西南端に赴き，粘土塊とメタ斑レイ岩と思われる岩石(一見閃緑岩のようにも見える)の一塊を採取して来た。粘土塊は淡暗緑色を呈し，白色の鉱物と黒色の鉱物とが点在している。メタ斑レイ岩と思われる岩石は粗粒質で同様に白色鉱物と黒色鉱物とから成る。この粘土及びメタ斑レイ岩と思われる岩石について，それらの構成鉱物を厳密に同定した。その結果は第17表の通りである。

第17表　生駒山西麓粘土と生駒山岩石の構成鉱物

	生駒山西麓粘土	生駒山岩石
構成鉱物	曹灰長石 普通角閃石 カンミングト角閃石(少量) カオリナイト 加水ハロイサイト(少量) バーミキュライト(少量)	曹灰長石 普通角閃石 カンミングト角閃石(少量) 磁鉄鉱(極少量) チタン鉄鉱(極少量)



第114図　生駒山西麓粘土のX線粉末回折図形　　K_A：カオリナイト，HHA：加水ハロイサイト，V：バーミキュライト，　Q：石　英，A：普通角閃石，　A′：カンミングト角閃石

よって，メタ斑レイ岩と思われた岩石は正にメタ斑レイ岩であるが，このメタ斑レイ岩は普通角閃石のほかカンミングト角閃石をも含有している『cummingtonite bearing hornblendegabbro』と呼ばれている特異な岩石である。日本列島では福島県阿武隈台地の２ケ所に分布することが1958年紫藤文子博士によって報告せられているのみである。

粘土の構成鉱物は曹灰長石，普通角閃石，カンミングト角閃石，カオリナイト，加水ハロイサイト及びバーミキュライトであるから，この粘土は cummingtonite bearing hornblende gabbro に由来するものであることがはっきりした。目分量では粘土の約40％はカオリナイトと加水ハロサイトとであるようである。

尚，粘土を水簸して得た微小粒のＸ線粉末回折図形を第114図として掲げておく。図形はカオリナイト，加水ハロサイト及びバーミキュライトの混合物であることを示している。（水簸不十分のためか少量の普通角閃石，カンミングト角閃石及び石英がまだ残留している）。バーミキュライトは酸性岩と塩基性岩との接触部に屢々二次鉱物としても生成する。

９．口酒井遺跡出土の土器片，生駒山西麓粘土，生駒山メタ斑レイ岩，これら三者の関係

口酒井遺跡出土の土器片のうち，縄文晩期の土器片Ｄ11－Ｂ４，Ｃ８－Ｃ１，Ｃ８－Ｂ３及び弥生後期の土器片ＳＩ－01には曹灰長石，普通角閃石，カンミングト角閃石及びバーミキュライトが含まれている。

生駒山メタ斑レイ岩は曹灰長石，普通角閃石及びカンミングト角閃石を主構成鉱物とする特異なメタ斑レイ岩である。岩石学的には平衡に達しないまま固結した岩石で，いわば未成熟で生まれ出た嬰児のようなものである。平衡に達した後固結しておればカンミングト角閃石は普通角閃石になっていた筈である。

生駒山西麓粘土は曹灰長石，普通角閃石，カンミングト角閃石，カオリナイト，加水ハロイサイト及びバーミキュライトの混合団塊である。

生駒山メタ斑レイ岩，生駒山西麓粘土，上記の土器片，これら３者には曹灰長石，普通角閃石及びカンミングト角閃石の共存により，直系の血縁関係にあることが分かる。正に親・子・孫の関係にある。生駒山西麓粘土を構成するカオリナイトと加水ハロイサイトは曹灰長石の変質により生成した二次鉱物と考えてよい。長石グループが風化作用などによって，カオリナイト，ハロイサイト，加水ハロイサイトなどに変質することはよく知られている現象である。また先きに述べておいたように，酸性岩と塩基性岩との接触部にはバーミキュライトが生成することが知られている。西麓粘土中のバーミキュライトは接触部に生成したものがたまたま混入したものであろう。土器片中にカオリナイトや加水ハロイサイトが存在しないのは粘土が焼かれたためである。カオリナイトや加水ハロイサイトは加熱すると400～600 ℃で崩壊する。

今や口酒井遺跡出土の土器片Ｄ11－Ｂ４，Ｃ８－Ｃ１，Ｃ８－Ｂ３及びＳＩ－01の胎土が生駒山西麓粘土であることは疑う余地がない。

先きに述べたように，生駒山西麓粘土の約40%はカオリナイトと加水ハロイサイトであるようである。カオリナイトや加水ハロイサイトは可塑性に富んでいる。このような粘土を胎土として用いると成形し易く，曹灰長石，普通角閃石，カンミングト角閃石などの存在は成形時器物の形状の維持に役立つに違いない。

10. 要　約

1．胎土に含まれている鉱物を『鉱物種』のレベルに於いて同定すれば，胎土として利用せられた粘土の産地は可なりの確度で特定可能な場合があるようである。伊丹市口酒井遺跡出土の土器片17個のうち，数個のものの胎土は生駒山西麓粘土を使用したものである。

2．口酒井遺跡出土の土器片の中には弥生期の土器片のみならず，縄文晩期の土器片にもそれらの胎土が生駒山西麓粘土であるものがある。

3．口酒井遺跡出土の弥生期の土器片にはそれらの胎土にベンガラを混入したものがある。

謝　辞

この研究を行うに当って，フィリップスX線回折装置の使用を御快諾下さいました京都大学工学部教授日下部吉彦博士，同技官木村　訓氏に対し深く謝意を表します。また生駒山西麓粘土の採取に当り，現地を御案内下さいました東大阪市教育委員会文化財課の下村晴文氏並びに東大阪市立郷土博物館の才原金弘氏に厚く感謝の意を表します。　（上田）

文　献

ERNST, W. G., Amphiboles. Springer-Verlag. (New York, 1968)

奥田　尚・米田敏幸『土器の胎土分析方法について』(『古代学研究』第99号，12－21頁，大阪，昭和58年)。

佐原　真『河内の土器』(『東山遺跡』所収，65—74頁，大阪，昭和54年)

沢田正昭『遺跡・遺物の保存科学(２)』(『考古学研究』第19巻，第３号，92－106頁，岡山，昭和48年)。

沢田正昭・秋山隆保『摂津・河内・和泉出土弥生式土器のX線分析』(『東山遺跡』所収，54—61頁，大阪，昭和54年)。

SHIDŌ, F., Plutonic and metamorphic rocks of the Nakoso and Iritono Districts in the Central Abukuma Plateau. (Jour, Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. II, vol. 11, pt. 2, pp. 131—217, 1958)

清水芳裕『縄文時代の集団領域について』(『考古学研究』第19巻，第４号，90－102頁，岡山，昭和48年)。

菅原正明『生駒西麓の土器』(『東山遺跡』所収，26—31頁，大阪，昭和54年)。

菅原正明『生駒西麓の土器の胎土観察』(『東山遺跡』所収，62—64頁，大阪，昭和54年)。

DEER, W. A., et al. Rock-forming minerals. vol. 2, (Longmans, London, 1963)

西宮克彦『生駒西麓の土器の胎土についての研究』(『東山遺跡』所収，32—45頁，大阪，昭和54年)。

MIYASHIRO, A., Regional metamorphism of the Gosaisyo-Takanuki District in the Central Abukuma Plateau. (Jour. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec II, vol.11, pt.2, pp219—272, 1958)

安田博幸『化学分析による土器生産地同定の試みについて』(『古代学研究』第54号，36－37頁，大阪，昭和44年)。

安田博幸『生駒西麓の土器の胎土化学分析』(『東山遺跡』所収，46—53頁，大阪，昭和54年)。

YOSHIZAWA, H., et al. The Ryoke Metamorphic zone of the Kinki District, Southwest Japan. (Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, B. vol. 32, No. 4, Geol. & Min. pp437—454, 1966)

第8章　考　察

第1節　縄文晩期刻目凸帯文土器について

本節では第4章において報告した縄文晩期後半の土器群の特徴に再度注目し，当該期の口酒井遺跡の特徴についてまとめ考察としたい。

今回出土した西群・東群の土器群については，既に第4章において西群から東群へという前後関係で捉えることができると述べたが，これらを畿内周辺の該期の諸遺跡の中での土器群との比較検討を行う必要がある。従ってまず第一に，周辺の遺跡のうち一括性の高い資料について抽出し，比較検討の材料としたい。以下列挙する。

1）平安京高倉宮下層遺跡南群

遺跡の概要

平安京高倉宮・曇華院第5次調査(京都市中京区東洞院三条東入：昭和62年調査)において，縄文晩期後半の貯蔵穴など土壙数基のほか遺物包含層を検出，土器・石器・土偶・石棒などが出土した(南1988)。そして，これらの土器の出土地点を詳細に検討した結果，北群と南群の2つのグループを確認し，それぞれの中での土器類の検討と両グループでの比較検討を行っている。

土器の内容

深鉢：口縁端部刻目(滋賀里Ⅳ式的)，一条凸帯など，凸帯文土器古相を示す土器群。従来の船橋タイプが主。

浅鉢：肩部で屈曲を持つもの，波状口縁のものが主体。若干の皿形が含まれる。

2）口酒井遺跡第6次調査資料

土器の内容

泉氏が『口酒井期』として示したものである(泉1986)。

深鉢：一条凸帯で口縁端部に刻目を持つ。凸帯文土器は古相，口縁端部は面取り，凸帯は丁寧に調整されている。

浅鉢：大半が肩部に屈曲を持つ。波状口縁(籾痕)。

3）平安京高倉宮下層遺跡北群

土器の内容

深鉢：長原的な形態を持つものが主体(凸帯文新相)。

浅鉢：肩部屈曲タイプがなく，椀皿形が主流をしめる。大形で口縁部が外反し肩部が屈曲する

『脱浅鉢タイプ[20)]』というべき，従来の浅鉢と違った新しい要素を含んでいる。

4）宇治市寺界道遺跡ＳＫ―０１・０２

遺跡の概要

昭和60年宇治市教委によって発掘調査が行われ，縄文晩期後半の貯蔵穴２基が見つかった（杉本ほか1988）。

土器の内容

深鉢：船橋的凸帯文を主体とする。口唇に刻目をもつ資料（滋賀里Ⅳ）がわずかにある。

浅鉢：肩部屈曲タイプがなく，椀皿形のみである。また，脱浅鉢タイプを含んでいる。

胎土Ｂ：約60点の土器中に１点のみ。

5）大阪市長原遺跡

遺跡の概要

縄文晩期最終末『長原式』の標式遺跡。河内平野の南端，河内台地の縁辺部に位置する。

土器の内容

深鉢：凸帯文新相の典型である。家根氏が『長原式』との個別型式名称を与えたものである。

浅鉢：椀形が主流。脱浅鉢タイプをふくむ。

胎土Ｂ：報告された土器の約８割。

6）堺市鈴の宮遺跡

遺跡の概要

大阪湾に注ぐ石津川右岸の沖積段丘に位置する。

土器の内容

深鉢：長原的な形態を持つ。

浅鉢：内面沈線を持つ皿形が１点あるがそのほかはすべて椀形である。脱浅鉢タイプから壷形土器との中間形態的な土器もある。

胎土Ｂ：報告された土器101片中に36点。

7）天理市前栽遺跡

遺跡の概要

自然河川を埋める堆積土中より出土。

土器の内容

深鉢：長原的な形態をもつ凸帯文新相であるが，多分に地域性を含む。

浅鉢：椀形のみ。脱浅鉢タイプを含む。

胎土Ｂ：報告された土器49片中に18片。

8）堺市船尾西遺跡

遺跡の概要

自然河川の河床部より出土。

土器の内容

深鉢：長原的形態の凸帯文新相。

浅鉢：出土なし。

胎土B：60パーセントを越える比率。

凸帯文土器については，昭和52年和歌山県瀬戸遺跡の資料を用いた中村友博氏の分析がある（中村1977）。これは刻目凸帯文土器の凸帯の貼付け方と凸帯上の刻目との相関性を分析する中で，編年の可能性を指摘したものである。その後家根氏はこの方法を継承発展させ，晩期後半を滋賀里Ⅳ→船橋→長原に編年した（家根1984）。また，泉氏は滋賀里Ⅳと船橋の間に口酒井第6次調査の資料をもとに『口酒井期』を設定し，九州の山の寺式に併行すると解釈した（泉1986）。

これらの編年の指標は，主に深鉢にある。家根氏の言を借用すれば，『口縁部凸帯の変化が，一連の手抜きの工程として理解できる。』と言うように，深鉢の口縁端部形態をその主たる分析の基準にしている。一方，中村健二及び筆者は同じ分類基準を基に寺界道遺跡の土壙出土の一括性の高い資料を分析した。その結果深鉢についてはいくつかのバリエーションで構成されていたことを指摘し，深鉢口縁端部の形態が，必ずしも編年の指標とはなり得ないことを示唆した。

今回口酒井第11次調査の凸帯文土器を分析する中においても，西群・東群それぞれの口縁形態が同じバリエーションで構成され，両群の間に明確な相違がないことがわかった。それに対して浅鉢においては，明らかな相違が見られそこに時間差が想定される。そこで，本稿では浅鉢に着目し，前記の諸例及び今回の西群・東群が保持する各種浅鉢の時間的変遷についての検討を行った。

（1）　高倉宮南群，口酒井第6次資料

肩部屈曲及び口縁波状のもの。これらは口径18cmから24cmのもので屈曲の角度は，90～100°のものが主流である。肩部直上と口縁直下に沈線をもつものが多い。他に口縁部を肥厚させ段を形成するものもある。立ち上がりが約2cmのものと，約4cmのものがある。

（2）　高倉宮北群，寺界道ＳＫ－０１，口酒井西群資料

内面沈線を持つ皿形の浅鉢を主体とする。わずかに肩部屈曲のものがある。また，脱浅鉢タイプもみられる。

（3）　寺界道ＳＫ－０２，口酒井東群，長原，前栽，鈴の宮，船尾西資料

椀形を主体とする。脱浅鉢タイプもある。

以上三段階の変遷を指摘した。この変遷に伴って，泉氏が指摘したように，浅鉢の構成比の減少が認められる。泉氏はこれを，『西日本の後晩期の器種構成は安定しており，煮沸用の深鉢が

約73%，食事を盛る浅鉢が23%，その他が4%ぐらいである。凸帯文期の当初はこの比率が守られているが，米を貯蔵する為の壺の増加に伴って浅鉢の比率が相体的に減少し，板付Ⅰ式期には残存的になって，板付Ⅱ式期には全西日本的に浅鉢はなくなる。縄文的食事習俗の終了である。』と解釈する(泉1986)。

今回の調査では，浅鉢が減少する状況と共に，浅鉢を構成する各器種の変化も同じく認められることを指摘した。これは単なる縄文的容器の消滅と解釈できるものか疑問が残る。その意義については別稿にゆずることとし，今回は問題点の提示にとどめておきたい。

浅鉢に加えて今一つの問題点が提起された。それは報文中において，分類の第一の基準となった胎土A・Bに関する問題である。胎土Bについては第7章において胎土分析を行った結果，生駒山西麓の粘土を用いている可能性が高いことが証明されている。以下今回の調査で明らかになった現象について簡単にまとめる。

現象1　胎土A・Bの比率は西群において4：6，東群は3：7に近い。

現象2　胎土Aにおける口縁部凸帯各類の構成は，凸A(口縁より下がって凸帯を貼付けるタイプ)を主体とし，凸D(垂れ下がり凸帯)を特有とする。

現象3　胎土Bにおける口縁部凸帯各類の構成は，凸B(口縁に接して凸帯を貼付けるタイプ)を主体とし，凸C(口縁端に凸帯粘土を被せるタイプ)を特有とする。

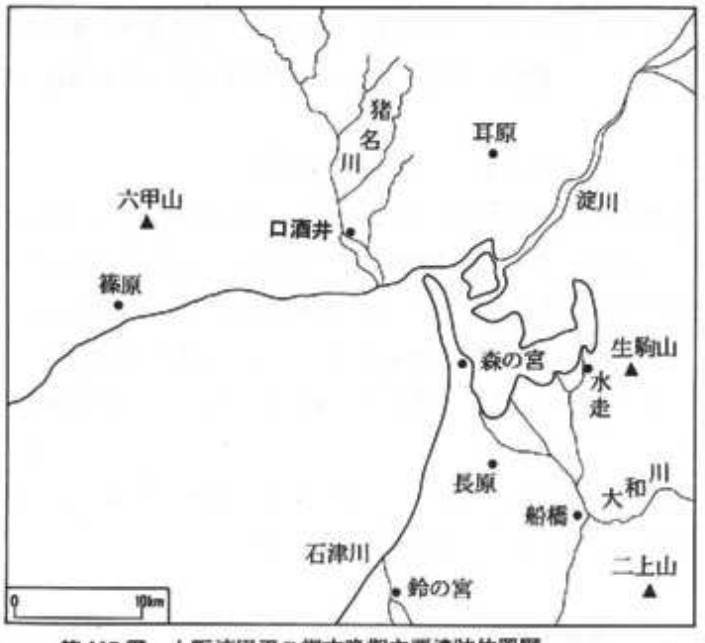
現象4　胎土Aにおける底部各類の構成はⅣ類が主体であり，Ⅲ類を特有とする。

現象5　胎土Bにおける底部各類は，Ⅱ類を主体とし，Ⅰ類を特有とする。

現象6　浅鉢形土器の大半が，胎土Aであるのに対して，壺形土器は胎土Bであった。

ところで胎土Bは角閃石が肉眼観察で確認できるもので，従来所謂『生駒西麓産』と称されてきたものである。今回の胎土分析の結果，かなりの確率で生駒西麓産であったことが証明された。つまり，口酒井遺跡においては，凸帯文土器のうち6～7割と言う高率で胎土Bが搬入されていたことになる。

ここで言う『胎土Bの搬入』とは粘土の移動と，土器の移動の二通りの意味をもつ。現象2～5では凸帯細部形態，及び底部形態との相違が，胎土A・B



第115図　大阪湾周辺の縄文晩期主要遺跡位置図
(木原1978を基に改変した。)

の区別と相関関係にあることを指摘した。これは胎土Ｂが『土器』の形で生駒西麓から搬入されていることを裏づけるものであろう。なお，生駒山との地理的関係については，周辺の著名な遺跡を含めて第115図に示しておく（木原1985より作成）。

さらに，西群から東群へと推移するうえで胎土Ｂの比率が増加している。一方，先に触れた諸遺跡においても，時期が下るに連れて，胎土Ｂの増加が窺える。

搬入土器が高率を占めるこのような現象について，その要因を考えるとき，それが縄文文化の中で一つの普遍的な要素であるのか，あるいは縄文から弥生への一大画期における特異な現象であったのか，これを峻別することは現段階では材料を持ち合わせておらず，不可能である。今後の問題としたい。（南）

第２節　弥生中期後半・後期の土器について

１）はじめに

口酒井遺跡の弥生式土器は今回の調査においてまとまった資料を得ることができた。特に中期後半・後期では住居址などの居住域を調査したために良好な一括資料が多い。本稿ではそれらの土器群の内容を検討し，周辺の遺跡出土資料との比較を通じて，その編年的位置づけについて考察していきたい。

検討に供する資料は，中期後半のものに住居址３・溝５・溝４・溝７・落込１があり，後期のものに住居址１・住居址２・土壙３がある。以上の各遺構出土土器資料の器種組成の変化をまず把握し，その後中期後半のものは，文様や調整手法などの属性の時間的変化を追究し，後期のものは中葉の基準資料とされる田能遺跡第６Ｙ調査区第２溝との比較を通じて論述していくことにする。

尚，本稿の執筆はおもに器種組成について緒方が，中期後半土器について森下が，後期土器について中村がそれぞれ担当した。

２）器種組成とその変化について

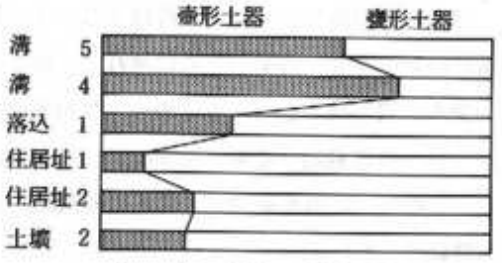
前記の各遺構からは，壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器などの日常容器が出土している。中期後半土器・後期土器それぞれ口縁部をもとにして算出した器種組成は第12・13表に示した。

中・後期の土器を大別して見た場合，後期に至って，土器の小形化，壺形土器の減少，器面調整の不十分さ，回転台の揚棄，無文化など，中期と後期の様式区分を明確に画する変化が起きる。これは器種構成の変化を伴うものである。

壺形土器の構成比率に着目すると，溝５が26.5％，溝４が50.0％，落込１が18.6％，住居址１が9.8％，住居址２が16.4％となる。これらの数値に変動が大きいのは，遺構の性格や資料数の少ないことに起因しているようだが，他の構成種の変異に左右されているとも思われる。日常的

性格の強い甕形土器と比較することによって数値はより具現化される。第116図によれば，壺形土器は，溝５が61.9%，溝４が76.2%と甕形土器を大きく凌駕するのに対して，落込１，住居址１．住居址２ではそれが逆転し，壺形土器の構成比率が大きく減少していることが判る。

この変化を近接する田能遺跡でみてみよう。田能遺跡第二様式は壺形土器28%，甕形土器46%，鉢形土器５%で，第三～四様式は壺形土器29.8%，甕形土器43.6%，鉢形土器12.3%，高杯形土器12.8%で，第五様式は壺形土器15.6%，甕形土器55.6%，鉢形土器11.4%，高杯形土器16.3%になり，口酒井遺跡における壺形土器の減少，甕形土器の増加という器種組成の変化と軌を一にしている。こうした器種構成の変化は他地域の遺跡でも見られる現象である。



第 116 図　壺甕数量比模式図

ところで，落込１の土器は第四様式に比定でき，明らかに中期に所属するものと思われるが，器種組成からみれば後期的要素が強いといえる。次項では器種組成変化の内容を各器種毎の形態，文様等の変化を追求することによってより具体化していく。

３）　弥生中期後半の土器

a．はじめに

今回口酒井遺跡において出土した中期後半の土器群は数は少ないものの，遺構出土の一括資料がある。これらの編年的位置づけを検討する過程で当地域(猪名川流域)の中期弥生式土器編年の問題点が想起された。一例をあげれば，溝５では『土器集成』(佐原1968)において第二様式の指標とされる複帯構成の櫛描直線文の土器，第三様式(古)とされる櫛描文を盛用する土器，同(新)とされる口縁端部凹線文Ａ種をもち，体部櫛描文様の土器，第四様式とされる頸部凹線文Ｂ種の土器がすべて共伴している。これらは出土状況から見て混在とは考えられないものであった。

口酒井遺跡の南東約200m，同じ猪名川の自然堤防上に位置する田能遺跡においては，『第４調査区第５～７溝から出土した大量の弥生式土器中には，明らかに第三様式に含まれるものと，第四様式に分けられるものとが混在していた』ことが指摘され，その状況について報告者の福井氏は『土器を各個体別に時期別に分離することは，実情に即してないと同時に，困難であって各時期を単純化してしまうことにもなる。各器種を含むセットとして一時期の総体を把えなければ本来の時期の設定は不可能である。』と述べている(福井1982)。

本稿においては，今回出土した広口壺形土器資料を中心に，猪名川水系に所属するそのほかの遺跡より出土した資料も加え，従来第三～四様式として捉えられてきた中期弥生式土器の様式内容の再検討を行い，今回出土した土器の編年的位置づけについて若干の考察を試みたい。検討するに当たっては，田能遺跡(福井編1982)，栄根遺跡(深井ほか1982)，加茂遺跡(岡野1982)

に提示された一括資料をおもにその対象とした。

b．壺形土器

報文中では広口壺をA～Dに分類した。これらはおもに器形に基づいている。ほかに短頸壺・無頸壺がある。完形資料が少ないために，基準が口縁部と頸部に片寄ったが，広口壺の口縁部は全体の器形を反映したものとして，頸部の太さは土器の使用方法を示唆するものとして捉えている。最初に器形について述べた後，文様構成について若干触れておきたい。

広口壺Aは絞まりの良い頸部から，口縁部が斜上方へ漏斗状に開くものである。口径が15cm～25cmのものを主流とする。重量は1500g程度で，片手で持つことができる。頸部径はほぼ13cm以下に留まり，手で摑むのに適当である。また，頸部の内径が小さく，手で内容物を取り出すことは不可能である。内容物は液体に限られよう。この類は，第一様式土器b形態(佐原1968)に端を発し第二～三様式では壺形土器の中で主流をなす。『土器集成』では，壺形土器の形態分化が第三様式から始まるとされているが，猪名川流域ではほとんどその傾向が見られない。後に触れることになるが，頸部に凹線文が施される段階にいたって形態の分化が見られるようである。それと同時に広口壺Aは減少傾向を見せ，今回の落込1において消失している。これは前節で触れた『壺形土器の減少傾向』と同一歩調を示すものである。

広口壺Bは太めの頸部から，口縁部が短く外反するもので，腹径が口径をしのぐものが多い。頸部径は14cm～15cmが主流で，片手だけでは持ち上げられない。頸部の内径は，12cmを越えており，内容物を手で摑んで取り出すことができる。この類は猪名川流域では目立った存在となっており，摂津における中期壺形土器の優勢種と称された(森岡1985)。

しかし，猪名川流域の第三様式の一括資料(田能・鋳型Pit，栄根・方形周溝墓2など)では決して一般的ではないように見受ける。広口壺Bが出現するのは，広口壺Aの頸部に凹線文B種が施されるようになった段階からであり，広口壺Aと共に壺形土器の主要な構成種となる。落込1では，広口壺Aが消失しても依然として広口壺Bが存在していることに注目しなければならない。

広口壺Cは，太い筒状の頸部から，口縁部が水平に開くもので，大形品は見られず，口径12cm～18cmの範囲に収まる。全体的な器形は広口壺Bの相似縮小形であるが，頸部は手が入る程太くなく，片手で頸部を持ち上げて使用するものであったと考えられる。従って広口壺Cは，広口壺Aの機能的系譜を受けるものであるが，形態的系譜はむしろ広口壺Bにあるといえる。広口壺Cは広口壺Aの減少消失と共に出現する。今回の落込1の段階で主流を占めるものとみられる。

広口壺Dは体部に対して口縁部が小さく，短い頸部から口縁部がわずかに外反するもので，基本的に装飾文様を持たない。一部，スス・炭化物などの付着が認められ，本来煮沸用の土器であったとの指摘がある。第二～三様式にも若干認められるが，第四様式に至って特徴的となる。前者から後者へは法量の縮小と共に，数量の増加があり，今回の落込1にも認められる。

猪名川水系の中期広口壺には，以上のA～Dのほかに二，三の形態がある。まず，口縁部が受け口状を呈するもので，第三様式では大形壺形土器を代表する。しかし，第四様式では中形壺形

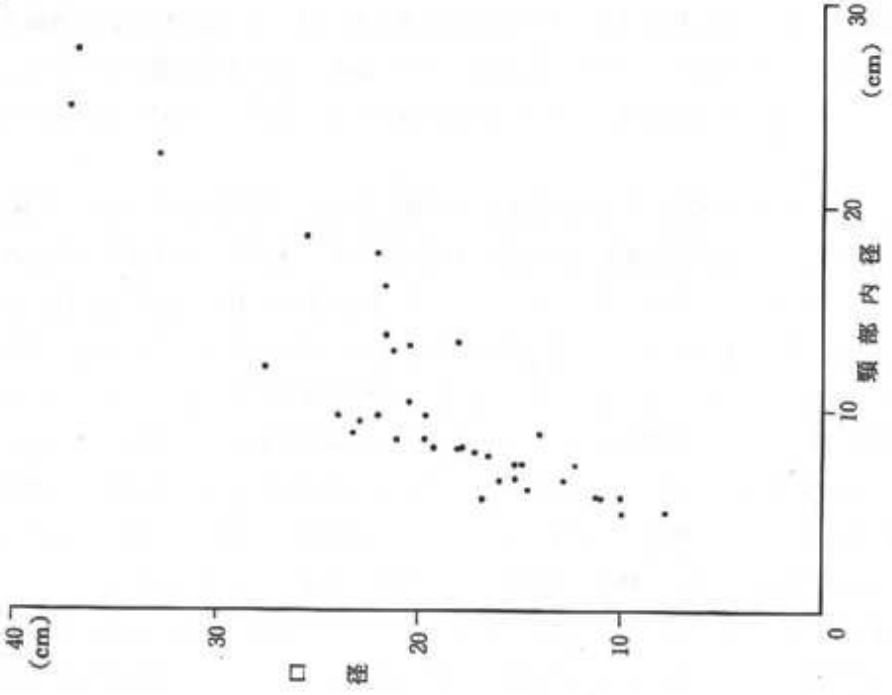
土器にも認められるが，その多くが搬入品であり，当地域に一般的なものとは思われない。今回の調査では全く見られず，第四様式の終わりまで存続するものではないようである。

中～大形壺形土器に頸部指頭圧痕文凸帯をもつ土器がある。第三様式において，口縁部が無文で，頸部の径が14cmを越えるものが多い。これは手で持つ土器ではなく，広口壺Aとは明瞭に分別される。第四様式にあっては，広口壺Aとの融合が見られ，次第に広口壺Aに吸収されるものであろうか。今回の調査では，包含層中と溝4に一点ずつ見られるだけであり，広口壺Aの減少・消失と軌を一にする。

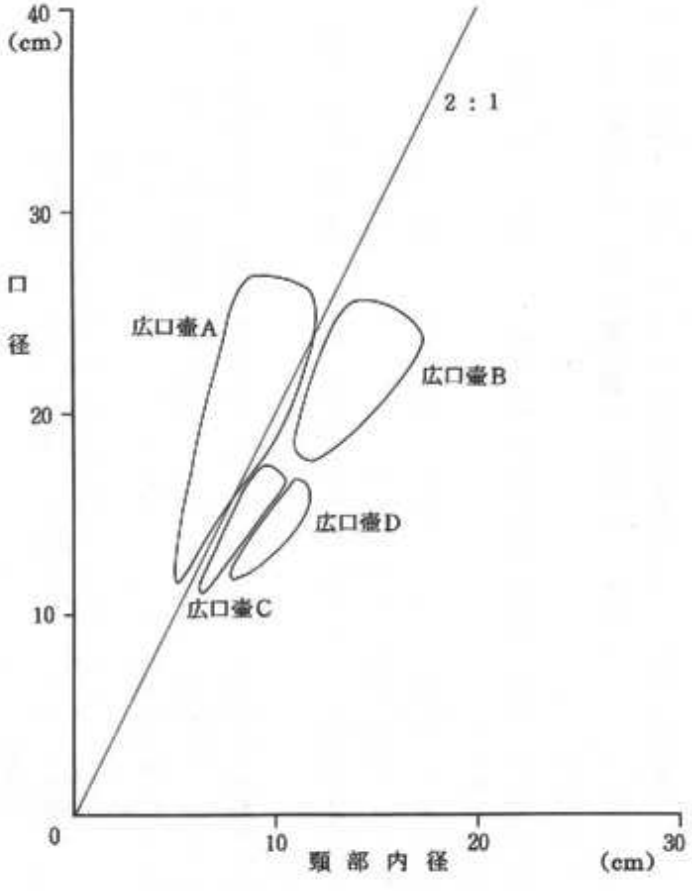
以上述べてきた器形についての検討を，口径と頸部内径の数値を抽出したグラフにまとめてみた(第117～119図)[21]。第三様式では2：1のラインにその分布が集中し，第一様式の系譜を引く形態であることを示している。それに対して，第四様式では広口壺B・C・Dへの分化が顕著になる様子が窺われる。

次に広口壺の細部形態と文様構成について触れる。

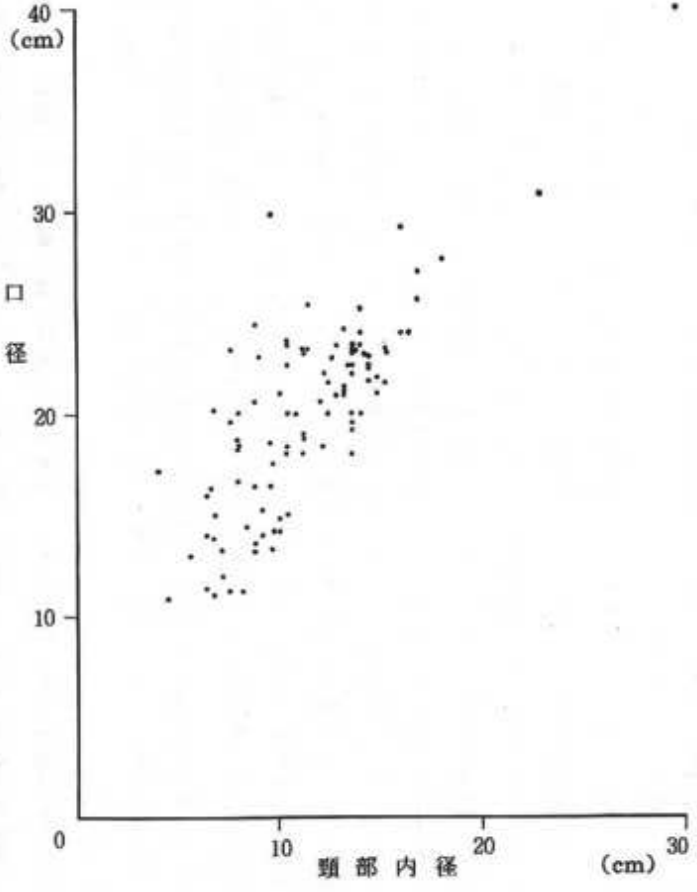
口縁端部の形態は報文中，広口壺Aの中で1～3に分類した。三類とも一応第三様式から認められる。ただし，田能報告において福井氏が述べたように，3類(端部が大きく垂下するもの)は太い凹線文が施される場合が多く，後出と見たほうがよい。端面に施される文様は，主に櫛描文と凹線文があるが，猪名川水系で第三様式に前者が多く第四様式に後者が多いと言う図式は成り立たない。溝口孝司氏は頸部に凹線文B種をもつ栄根土壙5の資料(深井ほか1982)を取り上げ，口縁端部に施される櫛描波状文を古相の残存としている。しかし，それ以前，即ち第三様式の広口壺は口縁端部が無文か斜行沈線文が主流である。猪名川水系での口縁端部櫛描文様の盛行



第117図　第三様式期広口壺法量分布図



第119図　広口壷分類説明図



第118図　第四様式期広口壷法量分布図

は第三様式においてではなく，第四様式になって初めて認められる現象である。ところで，今回の落込1資料は口縁端部の無文化が著しい。特に第71図―1は，退化凹線文がさらに退化して，やや凹凸を持った横ナデのみとなる。

口縁部内面の文様については今回複帯構成のものは出土していない。単帯構成のものは溝4・5に見られるが，落込1では内面加飾のものは見られない。内面加飾の昂揚も中期末に至る過程で途切れるようであり，内面加飾は櫛描文の一つであることをここに確認することができる。

頸部に単帯の文様帯を持つものは，広口壷Aに見られる。中期前半に断面三角形凸帯文を持つものが後半に至り凹線文へと変化する。その一群の土器は，先のグラフ(第117～119図)の2：1のラインに沿ったものの中で変化する。今回の溝5資料(第61図―3)は頸部に施された凹線文が断面台形状を呈し，文様の作出に際して器面の凹凸よりむしろ凹部を意識したものであり，凸帯文から凹線文へ変化した直後の形態であろう。住居址3資料(第54図―1)は断面の凹凸の幅が広く，凹線文のより発達した形態と思われる。そのほかに二，三の凹線文の形態があり，当地域においては，溝口氏の意見と異なるが『体系的凹線文施文への胎動が図式的に追跡可能』(溝口1987)であるとも考えられる。頸部凹線文は広口壷Aの減少に伴って消失し，今回の落込1では見いだされない。

胴部文様は今回の落込1で見られるように，中期末まで櫛描文様が継続する。猪名川流域の壷形土器にみる櫛描文の組み合わせは，概ね二大別できる。一つは直線文と波状文を交互に組み合わせるもの。もう一つは直線文を複数条施した後，最下段を波状文で飾るもの。この二者は，各変異を持ちつつも，前者から後者への時間的推移を各所で見ることができる。今回の溝5出土の複帯構成の傾向を持つ広口壷A(第61図―1・2)も，文様の組み合わせから判断すると，必ずしも古いものとは考えられない。

以上広口壷を中心として猪名川流域弥生中期壷形土器の特徴とその変遷について概観した。ここでその要点をまとめておく。

1・第四様式において広口壷Aが減少傾向をみせ，その末に至って消失する。

2・第四様式では広口壷の形態分化が見られる。

3・櫛描文と凹線文の盛行(土器の各所に施文が行われる)期は，第四様式において重複する。

c．甕形土器

今回の口酒井遺跡第11次調査によって出土した弥生中期の甕形土器は，数量的に豊富とは言えないが，溝5・落込1で残存良好な資料が見られる。観察結果の詳細は報文中に記述したが，溝5資料と落込1資料の間には明瞭な調整手法の違いがあった。以下それを列挙する。

溝5……1．外面の縦ハケと，外面下半のヘラケズリはすべてに認められる。

2．外面下半は，ケズリの後に縦位のヘラミガキを行うものもある。

3．内面調整はハケ及びナデによる。

4．口縁部周辺の横ナデ範囲は器体の寸法に規制されることなく，3cm前後の一定の幅を持つ。

落込1…1．成形時のタタキが顕著に残る。

2．外面下半のヘラミガキはあまり見られない。

3．内面下半をヘラケズリするものが多い。

4．口縁部周辺の横ナデにタタキの原体を用いるものがある。

上記2遺構の時間的前後関係は溝5が先行しており，甕形土器における製作技法上の画期として，タタキ成形が顕著になること，ヘラケズリの部位が外面下半から，内面下半へと変化すること，の2点があげられる。また，落込1資料の中には口縁端部に施されていた凹線文が，やや凹凸を持った横ナデへと退化していく過程を見ることができる(第72図—24)。

田能遺跡の資料において，タタキを持つ甕形土器は第4調査区6溝に少量出現するが，今回の落込1資料におけるタタキの普及はそれを上回り，より後出と言える。中には後期と共通する右上がりのタタキもあり，中期から後期への移行の具体相を考察するうえで，貴重な資料である。ただし，タタキ技法自体は畿内において，中期初頭より存在する(都出1987)とされる。その普及には地域によって時間的差異が認められるようである。

d．鉢・高杯形土器

鉢形土器はほとんどが直口のもので，『土器集成』(佐原1968)分類による『鉢B』は包含層中に一点見るだけである。高杯形土器は，直口のものと，水平口縁のものの両者が存在する。鉢・高杯形土器とも，施される文様は凹線文が圧倒的に多く，櫛描文を持つものは溝5に一点(第64図—43)見るだけである。

『土器集成』(佐原1968)分類による『鉢B』は木下正史氏によって六細分された。その中で最末期にあたるのは，V類(口縁端部の外面に粘土を貼付して段状口縁部とし，段状口縁部に凹線文などの文様を施すもの)である(木下ほか1980)。猪名川流域においてV類を含む一括資料は田能第4調査区7・5・6溝や，田能第6Y調査区第8層，栄根土坑5がある。以上の資料は，今回の口酒井第11次調査の溝5資料に土器の様相が類似する。溝5において『鉢B』が見られないのは，資料数の少なさかも知れないが，溝5に後続する他の遺構においても同様に『鉢B』は見られない。第四様式の中葉以降，当地域においては『鉢B』が消失する傾向にあるのではないかと思われる。広口壺Aの減少・消失傾向と軌を一にしていることが予想され，今後注意して資料の観察を行っていきたい。

今回出土した直口の鉢・高杯形土器を観察すると，口径が小さいものは落込1においても凹線文を多用し，装飾的要素を残しているが，口径が大きいものは落込1で外面に施される凹線文が退化する傾向を見ることができる。従来西ノ辻N式併行とされてきた中期末から後期初頭の土器群の中には，杯部から屈曲して立ち上がる口縁部の外面上下に退化した凹線文を施すものがみられる。落込1資料はほぼそれと共通しており，口縁端部の肥厚は中期的としても，退化凹線文は後期へ接続する要素の一つとして評価できる。

e．器台形土器

器台形土器は『土器集成』によると，第四様式より出現するとされる。出現期の器台は外面を太い凹線文で全面的に装飾するものが多い。

今回の調査では中期後半に所属する遺構から，少量ながら器台が出土している。凹線文を施すものがほとんどであるが，同じ時期に他の遺跡で見られる器台が先の全面的に装飾するものであるのに対して，今回出土した器台は，溝5の二者が裾端部に，溝4のものが体部中ほどに，落込1のものは口縁端面に，それぞれ部分的に凹線文を施したものであった。その凹線文も退化し，沈線的なものであり，特に落込1資料の第74図—50は，報文中でも触れたように，三角形透孔に装飾的要素を残しつつ，無文化が相当に進んだもので，小形化していることも合わせて，後期的様相を帯びるものとして捉えることができる。器台形土器においても，他の器種と同じように，中期土器の特徴が次第に希薄になっていく様子が窺われる。

f．まとめ

口酒井第11次調査によって出土した中期後半の土器は，従来の編年による第三様式～第四様式に相当するものをふくむ。ただし，様式を時間的概念をもって把握するならば，すべて第四様式と考えてよいと思われる。先述した広口壺における櫛描文・凹線文の盛行などは，様式区分のメルクマールとなるであろう。

このようにみると猪名川流域における第四様式期は概ね三期に細分できると思われる。

Ⅰ期は口酒井溝5′，田能第4調査区5・7溝，栄根土坑5などが該当する。壺形土器では広口壺の形態分化がみられ，凹線文の出現，櫛描文の施文範囲拡大がある。甕形土器は外面下半をヘラケズリし，その上からヘラミガキする。器台形土器が出現し，外面に凹線文の全面装飾が見られる。

Ⅱ期は口酒井溝4・住居址3，田能第4調査区6溝などが該当する。壺形土器では口縁端部の装飾がほぼ凹線文で統一され，凹線文が盛行すると共に，口縁部内面に二段構成の櫛描文が増加するなど，櫛描文の盛行期でもある。『土器集成』分類の『鉢B』は段状の口縁端部に凹線文が施されると同時に，大型化する傾向が見られる。器台形土器は，凹線文が部分的に施されるようになる。

Ⅲ期は口酒井落込1が該当する。壺形土器では，広口壺Aが消失し，凹線文が退化すると共に，壺形土器の構成比そのものも減少する。甕形土器では，内面下半のヘラケズリが顕著となり，タタキ技法が普及する。前記『鉢B』が消失し，高杯形土器の凹線文は退化したものになる。器台形土器は小形無文化する。

かなり概略的な細分であるが，今後資料の増加と共により精緻な編年が可能となるであろう。それに伴って，例えば『高地性集落』の年代についても再考が必要となるし，後期への移行の具体相も次第に明らかになるものと思われる。

4）弥生後期の土器

西摂地方の後期弥生式土器編年は，森岡秀人氏によって細分の試みがなされ(森岡1984)，その中で田能第６Ｙ調査区第２溝の資料は中葉の指標となっている。今回，口酒井遺跡第11次調査によって出土した後期土器は，住居址出土の一括資料であり，編年細分のための良好な材料となろうと思われる。その序章として，住居址１・２で出土した資料と，田能第６Ｙ調査区第２溝の資料(福井編1982)を比較し，その相対時期を明らかにしておきたい。

住居址１出土の壺形土器は広口壺Ａ，長頸壺，短頸壺Ｂで構成されている。広口壺Ａは従来畿内第五様式の中でも古相の特徴と考えられていたが，近年の発掘による資料の増加で，第五様式古相のメルクマールにし難いことが指摘されている(森岡1977)(井藤1983)。各地域で出土例が増えてきた広口壺Ａについて，口縁部形態や退化凹線文，円形浮文．刻目などの文様の細部にわたる形式学的検証を行い，その土器がどのような土器群に伴うものか，各バリエーションごとの地域差を抽出することができるのか，明らかにすべきであろう。本遺跡出土のものも将来このような作業を通じて第五様式のどの時期に位置付けられるか明らかになるであろうが，現段階では西ノ辻Ｉ地点のもの(小林1958)や，鬼塚第ＨＯ１～ＨＯ４区のもの(芋本1975)と若干の差異はあるが，第五様式でも古い段階に位置付けられると考えておきたい。第五様式に一般的な広口壺Ｂの口縁部は出土していないが，第77図―６は広口壺Ｂの可能性がある。長頸壺は(第77図―２・３)が出土している。田能第６Ｙ調査区第２溝出土の長頸壺(同報告書第103図・１)と比べて，第77図―２は体部が張らない点や口頸部がほぼ直立気味な点で古い様相を示す。また第77図―３は口頸部しか残存していないが，第77図―２より新しい要素をもつ。

甕Ａは全体的に口縁端部を面取りして，そこを丁寧にナデ調整することや外面タタキ成形の後に，ハケメを丁寧に施している点など第五様式前半の特徴を示している。また，口縁叩き出し手法により口縁部成形を行う新しい要素をもつ甕も若干含んでいる。田能第６Ｙ調査区第２溝ではやや新しい要素と指摘できる口縁部がナデ調整により受け口状になるものなども含むが，概して口縁端部を丁寧に面取りしているものや，外面をタタキ成形の後にハケメを施すもの，内面ヘラケズリをする甕など住居址１出土のものと同様なものを多く含む。第78図―15のような甕は第五様式に一般的ではなく，端面にヘラによる刻目文，肩部にヘラによる刺突文をもつものはあまり類例がない。だが，肩部や腹部のみに刺突文をもつものは忌部山遺跡(網干ほか1977)・出屋敷遺跡(桑原ほか1981)など第五様式の遺跡で散見できる。

鉢形土器はやや深めの体部から外反する口縁部が付くもので前半期のものと見てよいだろう。

高杯形土器は田能第６Ｙ調査区第２溝出土のものと比べて，やや直立気味に立ち上がり端部で急に外反するものがあることや，中実の脚柱が見られないことなどから，これより先行すると思われる。

以上の通り住居址１出土の土器は田能第６Ｙ調査区第２溝の出土土器群より先行し，後期前半に位置付けられる。但し，土器型式的には全く共通の要素がないわけではなく，甕形土器に関しては型式学的に先行するとは見難い。

次に住居址2出土土器について述べたい。住居址2出土の壺形土器には広口壺A・B，長頸壺，短頸壺Aが出土している。量的には第五様式に一般的な広口壺Bが多い。広口壺Aのうち第82図―1は前述したように退化形態にあり，第五様式でも新しい要素として捉えておきたい。第82図―2はいわゆる生駒西麓産の胎土を有する本遺跡出土のものと比べて器壁が薄く，直線気味に外方に開く点など器台の可能性もある。広口壺Bの中で第82図―4は田能第6Y調査区第2溝出土のもの(同報告書第102図―5)に比べてあまり体部が張り出さない点や体部最大径に対する底部の割合が大きいことなどから先行する。第82図―15は体部の張り出しが強く，体部最大径が器高を上回るもので田能第6Y調査区第2溝出土のものとほぼ同時期のものと思われる。

甕は外面をタタキ成形した後にハケメを施すようなことはなくなり，住居址1出土の甕形土器のように面取りを行った後，そこを丁寧にナデ調整するものはほとんど見られない。第83図―27～30のようなナデによって受口状を呈する甕は第五様式後半から終末の特徴である。田能第6Y調査区第2溝の甕の中にもこのような受口状の甕は存在する。しかし，大半は住居址2出土の甕よりも先行する。

鉢Aには後半期の特徴である小形の鉢が出現している。鉢Bは体部は浅く器高が低くなり気味である。また，後半期の特徴である底部の明瞭な上げ底は見られない。田能第6Y調査区第2溝出土の鉢との前後関係は認められない。

高杯Aのうち第84図―39のように外反度の大きいものや高杯Bのうちの第84図―51のような小形のものは田能第6Y調査区第2溝出土高杯より後出である。しかし，本住居址出土の脚柱には中実は見られず，田能第6Y調査区第2溝では存在する点などやや問題は残すが後出の様相を示していると捉えたい。

このように，住居址2出土の土器群は田能第6Y調査区第2溝と土器型式的には共通するところもあるが，やや後出と見ておきたい。

（緒方・森下・中村）

第3節　口酒井遺跡の弥生集落

口酒井遺跡のような低湿地の中の微高地(標高6m)に立地する低地性集落は，西摂平野猪名川水系では，田能遺跡(6m)，上津島遺跡(4m)，勝部遺跡(6.2m)，宮ノ前遺跡(25m)，猪名寺廃寺下層遺跡(10m) などがある。弥生時代中期単純の上津島遺跡を除いて，中・後期に続く遺跡であり，特に田能・勝部両遺跡は，口酒井遺跡との関連で非常に興味深い。

1）居住域

口酒井遺跡のような低地性集落の場合，溝の機能は，水を得ることよりも，いかに早く水を引かせるかが問題になったと思われる。今回検出された溝は，全般的に規模が小さく，埋土は粘質土や粘性のある砂質土である。これは，溝が一時的に流水していたにせよ，大半を滞水状態にお

いていたことを推定させる。そして，これら溝は西側の遺物包含層の広がりとも対応し，東側の落込みとの間の約45mを東西界とした居住域が想定できる。

住居址は東西居住域の中でも，その頂点付近に位置している。これは，この先北西方向にのびる自然堤防の微高地に点々と並ぶ住居址群を想像させる。

住居址の平面プランの変化をみてみたい。3棟の住居址は，円形プラン，炉址，排水溝の共通要素をもっている。また住居址2・3には壁溝を有している。基本的に平面形，規模，内部構造など中期から後期への変化は認められない。

ところで，畿内地方の弥生中・後期の竪穴式住居址の変遷を追った石野博信氏の見解(石野1978)によっても，中・後期の竪穴式住居址は，円形プランを主流とし，床面積30～40㎡など，規模・構造において畿内地方の普遍的な住居址と言えよう。

三棟検出された住居址間の関係について触れておきたい。出土遺物から，住居址3は中期後半，住居址1は後期前半，住居址2は後期後半に，それぞれ比定された。各住居址は接近するが，その間隔は2～2.5mを保っており，切り合いは見られない。また，住居址間の距離が近いため，併存していたとは考えられない(藤田1983)。問題となるのは，住居址3→1→2と，出土土器の年代順に継続的に住居が移行したか否かである。

住居址3の出土土器は量的に少なく，住居址1との比較が困難である。また，中期と後期の大画期を間に狭んでおり，継続の有無については詳述できない。但し，落込1からは後期へ接続すると思われる土器が出土しており，周辺の土地利用は継続していたものと見ておきたい。

住居址1及び住居址2は共に平面形は円形を呈し，住居の平面形態には変化は見られない。土器より見た場合，両住居址間の住居址廃絶時の土器の様相には若干の時期差があり存続とは見難い。それに加えて，住居址間の壁体間距離や住居の耐久年数など考えれば存続とはみにくい。しかし，畿内では後期の住居址の平面形は円形が主流を占めているが，後期でも時期が新しくなるにつれて，円形から円形・方形併存そして方形に変わるといわれている(芋本1979)(菅原ほか1975)。住居址2廃絶時の土器の様相をみれば隅丸方形もしくは方形住居址が使われている時期と思われる。最近調査された豊中市の新免遺跡では住居址の平面形は円形から隅丸方形へと変わっているのが認められる(服部ほか1986)。従って，住居址1廃絶の後，住居址2が建てられ後期後半まで使用されたと考えられないであろうか。先述したように問題点は多いが，ここでは継続と考えて置きたい。将来，西摂地域での弥生後期の住居址の検出例が増えた時，円形プランの住居址がどのような段階の土器群まで残るか明らかになろう。

2）居住域と墳墓の関係について

口酒井遺跡第11次調査，A7～12区，C，D区の南北12m，東西45mの地域内において，三棟の住居址と三基の墳墓が検出された。特に弥生後期前半の住居址1には土壙墓が，後期後半の住居址2には壺棺墓が伴う可能性が高い。住居と墳墓の間には，明確な区画がなく，同じ生活空間の中に墳墓を設けるという田能遺跡の竪穴式住居址(1～4号住居址)と，方形周溝墓(3号)，

土器棺墓(9～10号)のあり方(福井編1982)に近似してくる。

口酒井弥生集落は，後期後半をもって終結している。集落内には，その後布留式土器を出土する遺構が検出されるのみで，平安時代の掘立柱建物，溝1・2の存在まで，日常的生活の断面を見ることはできない。この空白は自然条件の変化によるものと考えられるが，田能では継続して集団の活動が看取できることから，口酒井集団は意識的に集落を放棄したことが考えられる。特に後期後半の住居址2では，炉址上面に日常容器を集積させ，一括廃棄した状況がみられた。これは集落全体が他地域へ移動したための所産であったのではなかろうか。これに伴って，墳墓の造営も後期後半で終結している。

以上，口酒井の弥生社会は，前期から何回かの盛衰をもって集落を営続させてきた。南東200 mに位置する田能遺跡とは常に緊密な関係をもっていた。それは，田能遺跡の中期中葉～後半にかけての住居址と墳墓の存在から，前期古墳の存在までの生活址の空白を補完する口酒井遺跡の中期後半～後期後半の住居址，墳墓の存在に象徴されよう。

(緒方・森下・中村)

註

1） 第5章第1節の土器溜りに関する記述部分を参照。

2） 大阪市立大学理学部粉川昭平教授の御教示を得た。それによれば，2粒については間違いなかろうということであった。

3） 当該期の土器の製作技法については山崎純男氏の分析がある(山崎1980)。

4） 縄文晩期後半の凸帯文土器において，時代が下るにつれ器種組成における浅鉢が減少していくことが指摘されている(泉1986)。

5） 岡山県用木山遺跡出土土器資料(神原1977)に類例をみる。

6） 以下，『土器集成』と略記する。

7） 茨木市東奈良遺跡G－4－B地区第Ⅰ大形土壙，F－4－N地区第Ⅱ大形土壙(寺田ほか1979)など。

8） 畿内地方において，外面をヘラケズリする鉢形土器は，凹線文盛行期にみられる。

9） 佐原真氏は，凹線文の施文形態を三つに分類している(小林・佐原1964)。以下報文中でその分類を使用する。

10） 第4調査区第5溝(同報告書第76図－8)に類例(福井編1982)をみる。

11） 第6Y調査区第2溝(同報告書第107図－11)に類例(福井編1982)をみる。

12） 森岡秀人氏は，『内面荒掻き手法』と別称している(森岡1981)。

13） 口縁部外反度は，口縁部下段径／上段径×100の式で求めた指数を用いる。(木下ほか1980)に従う。

14） 土壙2の遺物の項〔第6章第1節3)b〕で行った型式分類に従えば，A1類に属する。

15） 型式分類については，先学の成果を踏まえ本文記載上，便宜的に設定した。

16） 成形段階での擬口縁手法によるものである。当遺構出土の高杯A類は，いずれも弱いながら稜を残している。

17） 高杯脚部各個体が，a1・a2・b類のいずれに属するかについては，観察表を参照されたい。

18） 第105図参照。

19） 中・南河内地域の土器群を検討した都出比呂志氏は，布留式土器を古・中・新の三相に分け，小若江北遺跡出土土器群をその中相の標式資料としている(都出1979)。また，西摂地域の土器群を検討した柳本照男氏は，布留式土器を4期に区分し，その2期の資料が小若江北遺跡出土土器群に併行するとしている(柳本1983)。

20） 肩部屈曲タイプから椀皿形へ移っていく浅鉢において，この段階に大形で口縁部が外反し肩部が屈曲するタイプの浅鉢が出現する。このタイプのものは従来よりの浅鉢の流れでは捉えられない。したがってここでは脱浅鉢形として一応分離しておくことにし，今後の検討としたい。

21) グラフ中，第三様式期として扱った資料は，

田能　第4調査区鋳型ピット，同区 pit 1366，同区土壙2，第5調査区土壙5，同区第3溝

栄根　方形周溝墓2

第四様式期として扱った資料は，

田能　第4調査区 pit 334，同区土壙6896，同区第7溝，同区第5溝，同第6溝，第5調査区土壙9，第6 Y調査区N25地区第8・9層

栄根　土壙5

口酒井　溝5，溝4，溝7，落込1

参考文献

あ

浅岡俊夫1983 a『口酒井遺跡(第6次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和55年度』所収，神戸)

———1983 b『口酒井遺跡(第7次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和55年度』所収，神戸)

———1984 a『口酒井遺跡(第8次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和56年度』所収，神戸)

———1984 b『口酒井遺跡(第9次調査)—穴森弥生墓地—』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和56年度』所収，神戸)

———1985 a『口酒井遺跡(第10次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』所収，神戸)

———1985 b『森本3丁目地区遺跡』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』所収，神戸)

———1985 c『森本字鶴田地区遺跡』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』所収，神戸)

———1986『有岡城跡(第11次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和58年度』所収，神戸)

———1987 a『口酒井遺跡(第12次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和59年度』所収，神戸)

———1987 b『口酒井遺跡(第13次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和59年度』所収，神戸)

———1988 a『口酒井遺跡(第14次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和60年度』所収，神戸)

———1988 b『口酒井遺跡(第15次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和60年度』所収，神戸)

———1988 c『伊丹口酒井遺跡の凸帯文土器』(『高井悌三郎先生喜寿記念論集考古学と歴史学』掲載，京都)

安達厚三・木下正史1974『飛鳥地域出土の古代土師器』(『考古学雑誌』第60巻第2号掲載，東京)

網干善教・平良泰久・島田隆昌1977『忌部山遺跡発掘調査報告書』(奈良)。

い

飯島正明1986『箕面市の縄文遺跡』(『箕面史学会』Vol. 1—2掲載，箕面)

亥野　彊1976『考古資料』(『川西市史』第4巻資料編1所収，川西)

亥野　彊・木下　亘・山元　建1987『野畑春日町遺跡』(豊中)

石野博信1975『考古学から見た古代日本の住居』(『家』所収，東京)

泉　武1984『前栽遺跡—縄文時代晩期遺跡の調査—』(天理)

泉　拓良1986『縄文と弥生の間に—稲作の起源と時代の画期—』(『歴史手帖』14巻4号掲載，東京)

———1988 『口酒井遺跡(第16次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和60年度』所収，神戸)

井藤暁子1982～1983『入門講座　弥生土器—近畿1～5—』(『考古学ジャーナル』№195，202，205，207，219掲載，東京)

今里幾次1969『播磨弥生式土器の動態』(『考古学研究』第15巻第4号掲載，岡山)

芋本隆裕・福永信雄ほか1975『鬼塚遺跡』(『東大阪市文化財調査報告書』第2冊，東大阪)

芋本隆裕1979『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡発掘調査報告』(東大阪)

———1980『北島池遺跡出土土器の再整理』(『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』所収，東大阪)

う・お

梅原末治1941『銅鐸に関する新知見』(『考古学雑誌』第31巻第5号掲載，東京)

大阪文化財センター1984『府道松原石津川線関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』(大阪)

大阪府立花園高校地歴部1970『河内古代遺跡の研究』(東大阪)

大下　明1987『池田市伊居太神社参道遺跡採集の石器について』(『関西大学考古学研究紀要』5所収，吹田)

岡崎正雄・深井明比古ほか1985『丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書』(神戸)

岡田　務1980『尼崎市東園田遺跡(第1次・第2次調査報告)』(『尼崎市文化財調査報告』第12集，尼崎)

———1981『尼崎市下坂部遺跡(第4次調査報告)付載第1・2・3次調査資料』(『尼崎市文化財調査報告』第13集，尼崎)

———1982『尼崎市金楽寺貝塚Ⅱ』(『尼崎市文化財調査報告』第14集所収，尼崎)

岡田　務・兼康保明1976『尼崎市金楽寺貝塚Ⅰ』(『尼崎市文化財調査報告』第11集所収，尼崎)

岡田　務・前田保男1982『遺跡の位置と環境』(『田能遺跡発掘調査報告書』所収，尼崎)

岡野慶隆・古川久雄・田中達夫1982『川西市加茂遺跡市道11号線建設にともなう発掘調査報告』(川西)

岡野慶隆・田中達夫1985『川西市満願寺』(川西)

岡本一士1986『砂部遺跡』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』所収，神戸)

岡本静心ほか1966『尼崎市史』第1巻(尼崎)

か～こ

加古千恵子1984『原田西遺跡』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和56年度』所収，神戸)

片岡　肇1983『近畿地方の土偶について』(『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』所収，京都)

堅田　直1964『池田茶臼山古墳の研究』(『大阪古文化研究会学報』第1輯掲載，大阪)

加藤　進・丹羽祐一ほか1973『湖西線関係遺跡調査報告書』(京都)

亀島重則・橋高和明・田中晋作1985『原始古代の池田』(池田)

神原英明1977『用木山遺跡』(岡山県山陽町)

北野俊明1985『大阪湾沿岸の縄文晩期刻目凸帯文土器に関する一考察』(『考古学と移住・移動』所収，京都)

北野俊明ほか1983『鈴の宮Ⅲ』(堺)

木下　亘・須藤聖子1986『服部遺跡発掘調査報告書』(豊中)

木下正史・西村　康・小笠原好彦1980『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』(『奈良国立考古学研究学報第37冊』，奈良)

桑原武志・三宅俊隆・西田敏秀1981『出屋敷遺跡調査報告概要』(枚方)

小林行雄1958『大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器』(小林行雄・杉原荘介編『弥生土器集成資料編』東京)

小林行雄・佐原　真1964『紫雲出』(香川県詫間町)

さ～せ

栄　一郎1986『石器類の分析』(『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ(農学部構内ＢＨ13区ほか)』所収，岡山)

佐久間貴士1979『縄文時代の大阪』(『摂河泉文化資料』第4巻第4号掲載，大阪)

佐原　真1967『山城における弥生式文化の成立』(『史林』第50巻5号掲載，京都)

———1972『弥生時代　追加』(『考古学ジャーナル』№76掲載，東京)

佐原　真ほか1971『考古学からみた伊丹地方』(『伊丹市史』第1巻所収，伊丹)

佐原　真・田中　琢・原口正三1958『船橋Ⅱ』(京都)

佐原　真・春成秀爾1982『銅鐸出土地名表』(『考古学ジャーナル』№210掲載，東京)

す

末永雅雄1958『橿原』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第17冊，奈良)

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告』第16冊，京都)

末永雅雄・富田好久・亥野　彊ほか1967『関西大学文学部考古学研究第3冊，摂津加茂』(吹田)

菅原正明・掘江門也・佐原　真ほか1979『東山遺跡』(大阪)

杉本　宏ほか1988『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集(宇治)

須藤　隆1986『弥生土器の様式』(『弥生文化の研究』3所収，東京)

瀬川芳則1978『弥生文化と農耕』(『大阪府史』第1巻古代編1所収，大阪)

た～と

平良泰久ほか1980『平安京跡(左京内善町)昭和54年度発掘調査概要』(『埋蔵文化財発掘調査概報1980－3』所収，京都)
高井悌二郎1966『伊丹廃寺跡』(伊丹)
高橋　護1966『入門講座弥生土器山陽3』(『考古学ジャーナル』第179号掲載，東京)
都出比呂志1974『古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－』(『考古学研究』第20巻第4号掲載，岡山)
———1979『前方後円墳出現期の社会』(『考古学研究』第26巻第3号掲載，岡山)
———1982『畿内第五様式における土器の変革』(『小林行雄博士古稀記念考古学論考』所収，東京)
———1983『弥生土器における地域色の性格』(『信濃』第35巻第4号，松本)
都出比呂志・福永伸哉・青谷尚美1984『待兼山遺跡』(吹田)
都出比呂志1986『タタキ技法』(『弥生文化の研究』第3巻弥生土器Ⅰ所収，東京)
坪井清足1956『B．土器－考察－』(梅原末治・坪井清足・小林行雄ほか『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』所収，笠岡)
寺沢　薫1980『大和における第五様式の細別と二・三の問題』(寺沢薫・久野邦雄・森下恵介ほか『奈良市六条山遺跡』所収，奈良)
寺田千津子ほか1979『東奈良遺跡発掘概報』Ⅰ(茨木)
鳥越憲三郎・藤井直正・荻田昭次ほか1972『勝部遺跡』(豊中)

な

永島暉臣・家根祥多・田中清美ほか1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(大阪)
中西靖人・国乗和雄1976『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書』(大阪)
中村友博1977『和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査』(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和51年度所収，京都)
鍋島敏也・藤原　学1974『千里古窯跡群』(大阪)

は～ほ

橋爪康至1971『尼崎市中ノ田遺跡』(『尼崎市文化財調査報告』第6集所収，尼崎)
橋爪康至1973『尼崎市上ノ島遺跡』(『尼崎文化財調査報告』第8集資料集第1集所収，尼崎)
橋爪康至・勇　正広・藤岡　弘1974『尼崎市栗山庄下川遺跡，桂木遺跡』(『尼崎文化財調査報告』第9集資料集第2集所収，尼崎)
橋本正幸1977『大阪府池田市宮ノ前遺跡採集のナイフ形石器について』(『プレリュード』第20号掲載，京都)
———1978『川西市加茂遺跡発見のナイフ形石器と尖頭器』(『古代学研究』第86号掲載，大阪)
———1983『山ノ上遺跡』(『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1982年度』所収，豊中)
———1986『野畑遺跡』(『第2次発掘調査概報』所収，豊中)
服部聡志・祭本敦士編1986『新免遺跡第11次発掘調査概報—阪急宝塚線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』(豊中)
服部聡志ほか1985『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1984年度』(豊中)
原口正三1973『Ⅲ弥生時代』(『高槻市史』第6巻所収，高槻)
兵庫県教育委員会編1970『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第6集(神戸)
東大阪教育委員会1970～1975『馬場川遺跡Ⅰ～Ⅲ』(東大阪)
深井明比古・岡野慶隆・池田正男ほか1982『栄根遺跡』(『兵庫県文化財調査報告書第14冊』所収，神戸)
福井英治編1982『田能遺跡発掘調査報告書』(『尼崎市文化財調査報告』第15集所収，尼崎)
福永伸哉1985『弥生時代の木棺墓と社会』(『考古学研究』第32巻第1号掲載，岡山)
藤井利章・岡本敏行1980『第4章　遺物　第1節　土器　1．布留式土器』(藤井利章・岡本敏行・村社仁史ほか『大和郡山市発志院遺跡』所収，橿原)
藤沢一夫1960『古墳文化とその遺跡』(『豊中市史』本編1所収，豊中)
藤田憲司1984『単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として－』(『考古学研究』第31巻第2号掲載，岡山)
藤本史子・前川　要・松田　訓ほか1987『有岡城跡・

伊丹郷町Ⅰ』(大阪)
堀江門也1979『竪穴住居跡』(『東山遺跡』大阪)

み～も

溝口孝司1987『土器における属性伝播の研究－凹線文の発生と伝播－』(『東アジアの考古と歴史』所収，岡崎敬先生退官記念編集，京都)
南　博史1986『口酒井遺跡(第11次調査)』(『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和58年度』所収，神戸)
――1988 a　『平安京高倉宮出土の縄文晩期深鉢と土偶』(『古代文化』第40巻第4号掲載，京都)
――1988 b『縄文時代晩期の遺物』(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集所収，宇治)
宮之前遺跡調査会1970『宮之前遺跡発掘調査概報』(池田)
武藤　誠1974『考古学からみた川西地方』(『川西市史』第1巻所収，川西)
村川行弘1966『考古学からみた尼崎』(『尼崎市史』第1巻所収，尼崎)
――1982『銅鐸3例』(『考古学雑誌』第68巻第1号掲載，東京)
森岡秀人1977『畿内第五様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置』『大師山』所収，吹田)
――1976『西摂地域における畿内第五様式編年試案』(『新修芦屋市史』資料編1所収，芦屋)
――1981『東六甲の高地性集落(中)』(『古代学研究』97号掲載，大阪)
――1985『突帯文土器地域色に関する若干の検討－とくに摂津・播磨・紀伊の第三様式優勢壺にみられる器形・文様交流について－』(『末永先生米寿記念献呈論文集』乾，吹田)
――1985『土器の交流－西日本』(『考古学ジャーナル』第252号掲載，東京)
森田克行・橋本久和ほか1977『安満遺跡発掘調査報告書－9地区の調査－』(『高槻市文化財調査報告書第10冊』所収，高槻)
森　毅・松尾信裕・山中一郎ほか1983『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』(大阪)

や～わ

八尾南遺跡調査会1978『八尾南遺跡』(大阪)
柳本照男1983『布留式土器に関する一試考－西摂平野東部の資料を中心にして－』(『ヒストリア』第101号掲載，大阪)
柳本照男ほか1987『摂津　豊中　大塚古墳』(豊中)
柳本照男・島田義明・橋本正幸1981『原田西遺跡(大阪府城)－千都川流域原田下水処理場に伴う調査報告－』(豊中)
柳本照男・橋本正幸編1981『野畑遺跡－第一次発掘調査報告－』(豊中)
家根祥多1981『近畿地方の土器』(『縄文文化の研究』第4巻縄文土器Ⅱ所収，東京)
――1982『縄文土器』(『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』所収，大阪)
――1984『縄文土器から弥生土器へ』(『縄文から弥生へ』所収，奈良)
山崎純男1980『弥生文化成立期における土器の編年的研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野－』(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』所収，福岡)
山元　建1986『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』(豊中)
米田文孝1982『弥生後期型甕から布留型甕へ－製作技法の変遷を中心として－』(『ヒストリア』第97号掲載，大阪)
和田晴吾・渡辺　誠1985『土錘・石錘』(『弥生文化の研究』5所収，東京)
渡辺　誠1975『縄文時代の漁業』(東京)

おわりに

口酒井遺跡の発掘調査を開始した昭和59年の冬は寒さが大変厳しく，3月の後半になってもまだ雪が降る日が多かったような記憶がある。いろいろな意味で大変な発掘であったが，今思い出す事は楽しいことばかりである。水道が引けなかったので，毎日近くの家まで水をもらいに行かなければならなかったこと，市長さんが日曜日に自転車に乗って現われ，我々をおどろかせたのも懐かしい思い出である。

爾来4年，ようやくここに発掘調査報告書を出版できるようになったが，ここに至るまではいろいろなトラブルがあって整理作業を何度か中断せざるを得ない状況になったこともあった。しかし，その中をここまで進んで来れたのは，ひとえに多くの調査補助員・整理員の方々のお陰である。整理費が底をつく中，無償でがんばってくれた方々が大勢いたことも大変ありがたかった。下記に氏名を明記し心より御礼を申し上げる次第である。

緒方　泉，川西弘一，柴田　悟，岩元雅毅，森下英治，高橋　潔，中村健二，澤山孝之，大下　明，松村由美，大本純子，林　真理子，船戸裕子，飯田美佐子，中島(藤友)陽子，山花京子，清水　肇，小山　愛，中西美智子，西村歓子，千喜良淳，平松良雄，坂田孝彦，福田　敬，土江伸明，井口澄江，脇上礼子，西村典子，柴田潮音，中森　祥，手塚　貴子　　（敬称略）

また，調査から報告書の出版に至るまで，大変にお世話になった方々も多い。とくに大沢欣也・浅岡俊夫両氏をはじめとする伊丹市教育委員会社会教育課の方々，広報広聴課柴田幹男氏，また，福井英治田能資料館館長，橋爪康至氏をはじめとする尼崎市教育委員会社会教育課の方々。そして，同僚として我々を支えて頂いた調査部および研究部の諸先輩方とともに，事務局の方々に感謝する次第である。

最後になったが，この報告書をまとめるにあたり，下に記した多くの先生方から御指導を得た。心より御礼申し上げる次第である。

渡辺　誠，下條信行，粉川昭平，南木睦彦，大井邦明，峠　敏之，山口譲治，小池史哲，田崎博之，藤尾慎一郎，森岡秀人，泉　拓良，泉　武，家根祥多，村川行弘，内田俊秀，下村晴文，才原金弘，栄一郎，吉田玄一，松尾信裕，大野　薫，内藤善史，宮本一夫，松田真一，中井　均，宮崎幹也，山元　健，西川卓志，合田茂伸，池峯龍彦，網干善教，深井明比古，和田晴吾，中島直常，後藤　直，山崎純男，橋口達也，伊崎俊秋，児玉真一，岡崎正雄，丹治康明，山田隆一，山本三郎，前田保夫，岡野慶隆，伊達宗泰，森　浩一，小川良太，奥井哲秀，水島稔夫，橋本　久，中村善則　（順不同　敬称略）

（南　記）

ENGLISH SUMMARY OF THE REPORT OF EXCAVATIONS AT KUCHISAKAI SITE

This time we are publishing a report of the excavation carried out at the Kuchisakai site in Itami City, Hyogo Prefecture in 1984. The site is situated on the east bank of the Ina River which flows into Osaka bay, and it extends almost 120m east to west and over an area of 770㎡.

The site itself is quite complex, since it contains various strata from the Jomon Period to the Heian Era. And moreover we were surprised at the coincidence of a Jomon site and a Yayoi site in the Kuchisakai site, as it is the first case that has ever been found in Japan. The Kuchisakai site was fully sedentary settlement in the Yayoi Period and shows direct evidence for the cultivation of rice. From this valuable site, we can deduce that one of the most important characteristics of the Yayoi Period is a new technic of controling a flow of water.

The stratigraphy can be divided into three parts, an upper part, a middle part and a lower part. Of all three parts, the upper part contains materials from the Yamato Period to the Heian Era, though it was badly disturbed. On the other hand, the middle part remains quite well and has a dwelling site dating sometime from the latter half of Middle Yayoi to the late Yayoi Period. As concerns the lower part, layers which belong to the last stage of the Jomon Period were eroded away by floods. And between the middle and the lower layers, there lies the first half of Middle Yayoi layer.

The followings are the explanations of each period.

1. Eights to nineth layers (B. C. 400−300 ca. : Jomon Culture)

Remains of river, which is 10−20m wide, lies in the west of the side. In addition there are 12 pits found in the east of the site. We found such relics as Jomon pottery (see, fig. 25−40), figurines (see, fig. 41), sanukaite flakes (see, fig. 44), stone mortars (see, fig. 42), pestles (see, fig. 43), and sekibo (bar−shaped stone club; see, fig. 46).

Together with these items, two important things were discovered ; carbonized two grains of rice (*oryza*), and a few Yayoi pottery.

2. 1) Sixth layer (B. C. 200 ca. : Yayoi Culture)

A pit, a ditch, and a wooden paneled tomb were found in the east of the excavated

area. From the pit the pottery dating the first half of the Middle Yayoi Culture (see, fig. 49−51), were found.

2) Fifth layer (A. D. 200−300 ca. : Yayoi Culture)

Three house pits, ditches, pits, a pit burial, and a jar burial were discovered. From these settlements, including around areas, the Yayoi pottery of the latter half of Middle Yayoi to the Late Yayoi Culture (see, fig. 52−89), a few iron implements, stone arrowheads, stone swords scrapers, fishig net sinkers, and stone mortars were found. There wasn't any remains of ishibocho (stone knife ; which is characteristic of the Yayoi Culture) from this layer.

3. After the Yayoi Culture, there were the pits remaining on the top of fifth layer were identified to belong to the Yamato Period.